ブリティッシュ・ロック集成

SPECIAL EDITION
1994

ENCYCLOPEDIA OF BRITISH ROCK

PART 1:PROGRESSIVE ROCK & ITS PERIPHERY



■'60年代から現在に至るブリティッシュ・ロック・シーンに，プログレッシヴ・ロックの視野からメスを入れた世界でも例のない大辞典
■カラー名盤カタログ約530枚収録
■各アーティスト別ディスコグラフィ付
■超大物グループからマイナー・アーティストまでを網羅

MARQUEE
SPECIAL EDITION



マーキー別冊

ブリティッシュ・ロック集成

発行：マーキームーン社
1990年9月20日第一刷
1991年12月20日第二刷
1994年3月25日第三刷
印刷：株式会社 カシヨ
161 東京都新宿区下落合3-15-18 SYビル404
TEL. 03(3954)2055
FAX. 03(3954)9563

ブリティッシュ・ロック集成

SPECIAL EDITION
1994

ブリティッシュ・ロック集成

contents

グラビア

マーキー別冊
ブリティッシュ・ロック集成

発行所●マーキームーン社
161 東京都新宿区下落合
3-15-18 **SY**ビル404
Tel：03-3954-2055
Fax：03-3954-9563

編集人●山崎尚洋
発行人●賀川雅彦
監　修●松本昌幸
編　集●古田　賢
松本昌幸
沢田　守

レイアウト●古田　賢
写真植字●**AZTEK**
印刷●㈱カシヨ

◉協力(50音順・敬称略)

石山敬一
伊藤政則
内田哲雄
宇藤毅平
江田和宏
大関善行
太田研司
太田雅彦 (Social Tension)
小木曽代史子
金井　浩
神山英之 (新宿エジソン)
川上史郎
北村昌士
木ノ下勝一
Kees Nijtels
Cor Van Ingen
後藤秀樹
斎藤隆之
斎藤千尋 (Golden Avantgarde, Lacrymosa)
坂地昭一
坂本　理
佐藤雅彦
佐野健二
Jimco Record
城元隆志
関口武也
高科次郎
高橋　理
鷹部屋荘平
高見博史
高森秀幸
高山直之
竪山和人
田中昌延 (Auld Lane)
田辺弘幸
中野泰博(Golden Avantgarde)
中藤正邦
奈良裕明
Numero Ueno
(スプリング・ソング・コーポレーション)
法水凜太郎
長谷川聖一
橋川典恵
林　克彦
(スプリング・ソング・コーポレーション)
林多香子 (新宿エジソン)
BMGビクター洋楽部
平野　剛
深民　淳 (Metal Gear)
松尾裕正
的場ひさし (Vermilion Sands)
宮沢幸一
三浦奈緒美 (Rosalia)
三橋　暁
三橋　徹 (札幌エジソン)
宮武和宏 (Mr.シリウス)
向井政克 (EUFA 2)
村上常博
森　　崇 (E.R.C.)
森下　忠 (大阪エジソン)
山本雅幸
吉瀬孝行
吉野正哉
Rinus Van Doveren
蠟山陽子 (Vermilion Sands)



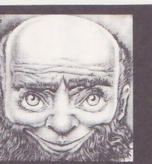
SUPER PRICE 1800 SERIES

PROGRESSIVE ROCK COLLECTION Vol. 1 & 2

VERTIGO·ISLAND·DJM·ROCKETなど
数々の名作を生んだPHONOGRAMグループの
レーベルより、よりすぐった名作集!!
世界初CD化も含む注目のコレクション
ついにスタート!!

Vol. 1 2/25 Release

GENTLE GIANT



GENTLE GIANT FIRST
ジェントル・ジャイアント・ファースト(1970年発表)
●PHCR-4201



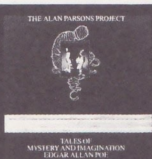
日本初CD化

ACQUIRING THE TASTE
アクワイアリング・ザ・テイスト(1971年発表)
●PHCR-4202



OCTOPUS
オクトパス(1973年発表)●PHCR-4203

ALAN PARSONS PROJECT



TALES OF MYSTERY & IMAGINATION
怪奇と幻想の物語～エドガー・アラン・ポーの世界
(1976年発表)●PHCR-4204

DEEP FEELING



世界初CD化

DEEP FEELING
ディープ・フィーリング(1971年発表)●PHCR-4205
DJMレーベルに残された幻のレア・アイテム!!

ANN ODEL

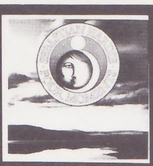


世界初CD化

A LITTLE TASTE
ア・リトル・テイスト(1973年発表)●PHCR-4206
CHOPYNを率いた才女オデールの幻のソロ・アルバム!

Vol. 2 3/25 Release

SEBASTIAN HARDIE



FOUR MOMENTS
哀愁の南十字星(1975年発表)●PHCR-4207



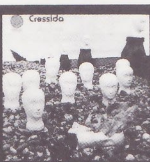
WINDCHASE
風の唄(1976年発表)●PHCR-4208

APHRODITE'S CHILD



666 ●PHCR-16105/6
666～黙示録の世界(1971年発表)
現代の音楽シーンを代表するビッグ・アーティスト、ヴァンゲリスの出発点!

CRESSIDA



ASYLUM
アサイラム(1971年発表)●PHCR-4209
名曲「ミュンヘン」をフィーチュアした、ヴァーティゴ・レーベルのレア・アイテム!

KYAK



世界初CD化

MERLIN
マーリン～"アーサー王"外伝(1981年発表)
●PHCR-4210
オランダの名門バンドが'81年に発表したシンフォニック・ロック大作!

STACKRIDGE



世界初CD化

EXTRAVAGANZA
エクストラヴァガンザ～狂詩曲(1974年発表)
●PHCR-4211
卓越したポップ・センスとプログレッシヴ・マインドの融合!



世界初CD化

MR. MICK
ミスター・ミック(1976年発表)●PHCR-4212
元サムライ、グリーンスレイドのデイヴ・ローソンを迎え発表された傑作トータル・コンセプト・アルバム

各¥1,800(税込)
2CDは¥3,200(税込)

VERTIGO mercury

nippon phonogram co., ltd.
a PolyGram company

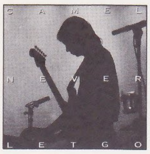
WE'LL KEEP ON LOVIN' BRITISH ROCK!!

DISTRIBUTED by
PONY CANYON INC

CAMEL ── イギリスの叙情派プログレッシヴ・ロックを代表するバンド



ダスト・アンド・ドリームス〜怒りの葡萄／キャメル
8年振りの復活作はスタインベックの名作「怒りの葡萄」にインスパイアされたトータル・アルバム。
ダスト・ボウル／ゴー・ウェスト／旅立ち／マザー・ロード／ニードルズ／ローズ・オブ・シャロン／乳と蜜が流れる土地／エンド・オブ・ザ・ライン／嵐の暗雲／綿花農場／決壊／激しい雨／ささやき／リトル・ローズの水葬　他全16曲
PCCY-00339 ¥2,500(税込)



ネヴァー・レット・ゴー／キャメル
'92年に行なわれた結成20周年記念ワールド・ツアーの模様を完全収録した2枚組ベスト・ライヴ・アルバム。
ネヴァー・レット・ゴー／アースライズ／醜い画家ラヤダー／ラヤダー街へ行く／水の精／心のさざ波／エコーズ(残響)／アイス／街での生活／徴兵の時／ダスト・ボウル／ゴー・ウェスト／旅立ち／マザー・ロード　他全28曲
PCCY-00443 ¥3,800(税込) 2枚組



キャメル・オン・ザ・ロード 1972／キャメル
オリジナル・ラインナップによる'72年のライヴを収めた貴重なライヴ・アルバム。キャメルの原点がここに。
レディー・ファンタジー／シックス・エイト／ホワイト・ライダー／ゴッド・オブ・ライト・リヴィジテッド　全4曲
PCCY-00444 ¥2,500(税込)

Richard Sinclair's CARAVAN OF DREAMS ──
カンタベリーのベテラン達によるユニット



リチャード・シンクレアズ キャラヴァン・オブ・ドリームス
リチャード・シンクレア、アンディ・ワード、デイヴ・シンクレア等が参加した'92年の作品。これぞ、カンタベリー・ミュージック！
ゴーイング・フォー・ア・ソング／クルージング／オンリー・ザ・ブレイヴ／プラン・イット・アース／ヘザー／星を想って／エミリー／フェラフェル・シャッフル／ハーフウェイ・ビトウィン・ヘヴン・アンド・アース　他全12曲
PCCY-00343 ¥2,500(税込)

GALAHAD ── イギリス南部ドーセットより登場したブリティッシュ・シンフォニック・ロックの新星



未だ綴られぬ伝説／ギャラハド
ジェネシスからラッシュまで、偉大なる先人達から吸収した要素を詰め込んだファンタジックなデビュー・アルバム。
フェイス・トゥ・ザ・サン i.アザーワールドリー・プレジャーズ ii.アナザー・ミスガイデッド・ソウル／チェインバー・オブ・ホラーズ(2211への哀悼の詩)／儚い歌姫／マザーランド／ルーム801／聖地アカバ　他全12曲
PCCY-00357 ¥2,500(税込)

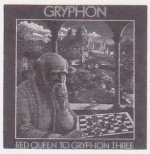
GRYPHON ── ブリティッシュ・トラッドからシンフォニック・ロック的なアプローチを見せた独創的なバンド



鷲頭、獅子胴の怪獣／グリフォン
古楽器を使用し、トラッド色の未だ濃いデビュー・アルバム。('7 年作品)
ケンプス・ジッグ／ゲイヴィン・グリンボルド卿／タッチ・アンド・ゴー／愉快な殺者たち／パスタイム・ウィズ・グッド・カンパニー／無気味な墓場／エスタピー／クロシング・ザ・スタイルズ／星占い師／ティー・レックス　他全12曲
PCCY-00344 ¥2,200(税込)



真夜中の狂宴／グリフォン
シェークスピア「テンペスト」を基に作られた2ndアルバム。19分に及ぶタイトル曲は圧巻！('74年作品)
シェークスピアに捧ぐ:真夜中の狂宴／若き鋤人の夢／綾織人の最後／ガンド・ロック／割り勘定／ギリシャ神に捧ぐ:エテリオン　全6曲
PCCY-00345 ¥2,200(税込)



女王失格／グリフォン
最高作との評価が高い3rd。古楽器を使ってのロック・アンサンブルが完成の域に達した。('74年作品)
華麗なる序章／激怒／哀悼の歌／チェックメイト(王手詰め)　全4曲
PCCY-00346 ¥2,200(税込)



レインダンス／グリフォン
エレクトリック・サウンドを導入し、新境地を開拓した4th。('75年作品)
ダウン・ザ・ドッグ／レインダンス／マザー・ネイチャーズ・サン／ハンカチーフ(盗賊／オーモルー／フォンティネンタル・ヴァージョン／ウォールバンガー／ント・セイ・ゴー／ある小さな英雄の生涯　全9曲
PCCY-00347 ¥2,200(税込)

DAVID CROSS ── 元キング・クリムゾンのヴァイオリン奏者デヴィッド・クロス率いるグループ



ビッグ・ピクチャー／デヴィッド・クロス
'70年代中期のキング・クリムゾンを彷彿させる緊張感を再現してみせた'92年の意欲作。
ナース・インセイン／クリスティーン／インク／ダストビンズ／ミナレット／ブラック・アイス／ブレーキ／サンデイズ／グリンフィクサー／ホーリー・アンド・バーブド・ワイアー　全10曲
PCCY-00400 ¥2,500(税込)

DISCIPLINE RECORDS

ロバート・フリップが主催するレーベル。キング・クリムゾンの過去から未来を検証しつつ、ひいてはプログレッシヴ・ロックを生み出したイギリスの精神性を解き明かす鍵となるレーベルだ。



KING CRIMSON
ザ・グレート・ディシーヴァー ─ ライヴ1973〜1974
キング・クリムゾン
その名の通り、フリップ／ウェットン／ブラッフォード／クロスによる'73〜4年のライヴを集めた4枚組ボックス・セット。
パレス・シアター プロヴィデンス・ロード・アイランド:1974年6月30日／ウォーク・オン…ノー・プッシーフッティング／太陽と戦慄パートII／ラメント／エグザイルズ／インプロヴィゼイション-ア・ヴォイージュ・トゥ・ザ・センター・オブ・ザ・コスモス／イージー・マネー／インプロヴィゼイション-プロヴィデンス／フラクチャー／スターレス／プロヴィデンス…続編(アンコール)／21世紀の精神異常者　他全47曲
PCCY-00393 ¥10,000(税込)

THE CALIFORNIA GUITAR TRIO



C.G.T.／ザ・カリフォルニア・ギター・トリオ
ロバート・フリップ主催のギター・クラフト・コースの1期生3人によるアコースティック・ギター・トリオが織りなす万華鏡の世界。
ヤマナシ・ブルース／メルローズ・アヴェニュー／コレンテ／ウォーク・ドント・ラン／リチェカーレ／パイプライン／ビーライン／クロマティック・フーガ・イン・D マイナー／テナー・マッドネス／スリープウォーク　他全15曲
PCCY-00411 ¥2,500(税込)

TREY GUNN



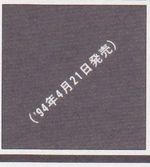
千年の夢／トレイ・ガン
'94年キング・クリムゾンの再始動にメンバーとして加わったスティック奏者の初ソロ・アルバム。フリップ御大が全幅の信頼を寄せるセンスが凝縮されている。
ザ・ナイト・エアー／ザ・スクリーン・ドア・アンド・ザ・フラワー・ガール／キリング・フォー・ロンドン／リアル・ライフ／イントゥ・ザ・ウッド　他全8曲
PCCY-00493 ¥2,500(税込)

THE ROBERT FRIPP STRING QUINTET



ザ・ブリッジ・ビトウィン／ザ・ロバート・フリップ・ストリング・クインテット
フリップが自らの精神を継承するガン、C.G.T.の4人と共に作った実験的ユニット。ギター・アンサンブルの無限の可能性を感じさせる。
カンノン・パワー／ヤマナシ・ブルース／ホープ／クロマティック・ファンタジー／コントラプンクトゥス／バイシクリング・トゥ・アフガニスタン　全10曲
PCCY-00492 ¥2,500(税込)

ADRIAN BELEW



ヒア／エイドリアン・ブリュー
キング・クリムゾンのヴォーカル兼ギタリスト、エイドリアン・ブリューの新作。アメリカ人ながらXTC等にも通ずるブリティッシュ・ポップ・センスが光る。
1990年5月1日／アイ・シー・ユー／サヴァイヴァル・イン・ザ・ワイルド／フライ／ネヴァー・イナフ／ピース・オン・アース　全12曲
PCCY-00545 ¥2,500(税込)

We'll keep on releasing British Rock materials like : **PENDRAGON, GALAHAD***'s new album,* **KING CRIMSON***'s new box sets, the new* **KING CRIMSON, CARAVAN***'s unreleased album…etc*

disk union 新宿店

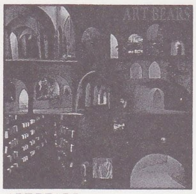
ブリティッシュ・プログレッシヴ・ロック不滅の名盤群

〜ブリティッシュ・ロック集成　再刊を記念して今一度名盤を〜

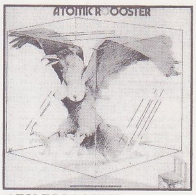

AFFINITY
/ Affinity


ANN ODELL
/ A Little Taste


ART BEARS
/ Winter Songs


ART BEARS
/ Hopes And Fears


ASHKAN
/ In From The Cold


ATOMIC ROOSTER
/ Atomic Rooster


BAKERLOO
/ Bakerloo


DEEP FEELING
/ Deep Feeling


DRUID
/ Toward The Sun


GENTLE GIANT
/ In A Glass House


HAWKWIND
/ Warrior At The Edge Of Time


HAWKWIND
/ Spece Ritual

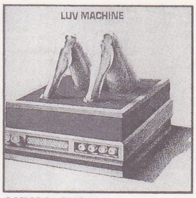

HENRY COW
/ Western Culture


HIGH TIDE
/ Sea Shanties


HORSE
/ Horse

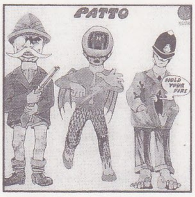

INDIAN SUMMER
/ Indian Summer


KING CRIMSON / In The Court Of The Crimson King


LUV MACHINE
/ Luv Machine


MANDALABAND
/ Mandalaband

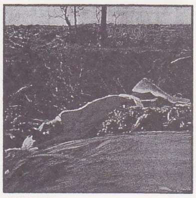

PATTO
/ Patto


PATTO
/ Hold Your Fire


PETE SINFIELD
/ STILLUSION


SLAPP HAPPY
/ Casablanca Moon


SPIROGYRA
/ Old Boot Wine

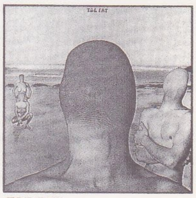

SPRING
/ Spring


STILL LIFE
/ Still Life


STRING DRIVEN THING
/ String Driven Thing


THE SOFY MACHINE
/ The Soft machine


THIS HEAT
/ Deceit


TOE FAT
/ Toe Fat

プログレッシヴ・ロック LP・CD・雑誌・パンフ

高価買取中

プログレッシヴ・ロックのLP・CD・雑誌・パンフをご処分の際は、ディスクユニオン新宿店をご利用ください。廃盤、貴重盤は特に高額にて買取りいたします。遠距離の方もご利用いただける出張買取のシステムもございます。詳しくはお問い合わせください。

disk union

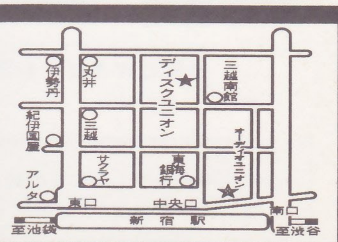
ディスクユニオン 新宿店

6F：プログレッシヴ・ロック専門フロア

Phone : 03-3352-2691

営業時間：午前11時〜午後8時(日・祝は午後7時まで)

ロジャー・ディーン
画集　各種
再入荷
しました。



PROGRESSIVE AND BRITISH ROCK SHOP

Garden Shed

USED & IMPORT
RARE RECORDS / CDs

11:00～8:30

ADDRESS: 〒160 東京都新宿区西新宿7－16－15 第一倶栄ビル 3A
3A DAIICHI－SHIDA－BLD. 7－16－15
NISHI－SHINJUKU, SHINJUKU－KU, TOKYO
160 JAPAN
TEL: 03－5389－6721 FAX: 03－5389－6722

プログレッシヴ・ロック専門店：ガーデン・シェッド

輸入盤・国内盤CD，廃盤レコード，委託・買取，雑誌

Garden Shed 新入荷及び入荷予定アイテム，

REPERTOIRE, BGO, TRC, SI-MUSIC といったレーベルのブリテッシュ・ロックのＣＤはもちろん、プライベート・プレスのものやマイナー・レーベルのＣＤ、限定ＢＯＸもの等も強力に入荷します。

又、BLACK CAT BONES, THE HUMAN BEAST, MELLOW CANDLE, SPRIGUNS/Time Will Pass, ENGLAND/Garden Shed etc. といった限定国内プレスのＣＤの在庫もあります。

今後、AARDVARK/Same, CIRKUS/One, FANTASY/Paint a Picture, GNIDROLOG/Lady Lake etc. のＣＤの国内盤の再プレス予定もあります。

UK UNDERGROUND FOLK-ROCK SERIES 1968-1978 [LIMITED EDITION 500 cop´s]



[SHIDE AND ACORN]
INCREDIBLE STRING BAND を思わせるようなシタールやフルートを導入した未発カセットのＣＤ化。美しい女性ヴォーカル。



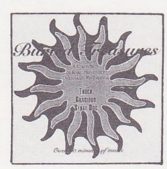
[MIDWINTER]
STONE ANGEL の前身バンドの未発マテリアルのＣＣ化。TREES に似た雰囲気を持つしっとりとした女性ヴォーカル。好作！



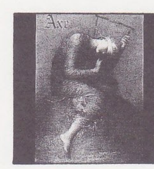
[CAEDMON]
英国屈指のRARE FOLK ROCK。ILLUSION, SPIROGYRA にも似た憂いに満ちた名作。原盤は30万円以上だが、それに見合った内容。



[STONE ANGEL]
英国FOLKプライベート・プレス・ブームの先駆け。アシッド感覚と牧歌的な雰囲気を持つ、いかにも自主制作というサウンド。



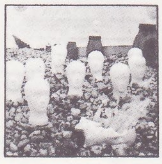
[V.A.]
TOUCH, GRACIOUS, STRAY DOGの３バンドの未発表曲やLIVEなど貴重なテイクを集めたCD。TOUCH はメロトロンをフィーチャー。



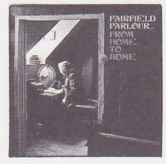
[THE AXE]
DARK等のレア・アイテムの再発レーベルから。サイケな曲想に女性VO. のブリティッシュ初期プログレ。未発ものののＬＰ化。

又、英国のディーラーと強力なネットワークを持っていますので次のようなVERTIGOレーベルのマスターピースの原盤やフォーク&トラッド系の原盤が常に入荷しています。

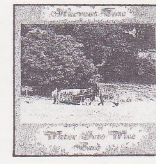












廃盤のＷＡＮＴも受け付けています。ALL ABOUT EVE もプロモを含め各種あります。

会員随時募集中！こんな特典が，①新品輸入盤ＣＤ＆ＬＰが５％ＯＦＦ
②毎月通販リストを郵送。新入荷レビュー、情報、廃盤リスト、特集etc. 充実！
③スタンプ・カード・サービス！スタンプを５０コ集めると２５００の金券になる

資料は９０円切手同封の上、上記住所まで！

WORLD DISQUE

営業時間13：00〜19：30
火曜定休

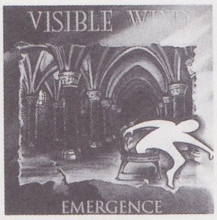
404 SY Bldg. 3-15-18 Shimo-Ochiai,
Shinjuku-ku, Tokyo 161 JAPAN
Tel ：03-3954-5348
Fax：03-3954-9563

BJÖRN J:SON LINDH
RALPH LUNDSTEN on CD

北欧プログレッシヴ・ミュージックの神髄



ワールド・ディスク3〜4月特選レギュラー・ディスク（入荷の極々一部です）



VISIBLE WIND (Canada)
大好評だった前作に続く最新作、3rd。なんとヴァイヴォドのメンバーも絡み、前作同様のシンフォニック・ロック・ワールドを展開。鮮やかなメロディ・ラインが静動の曲展開の中に映える堂々の新作です。



CONNIE DOVER (U.S.A.)
2作目。女性ヴォーカルものとしては群を抜いた内容の最新作。フォーク色を生かした繊細なメロディを歌う美声が魅力。陰影のついた曲想も文句なし。プログレ・ファンへ絶対のおすすめ。



BJORN J:SON LINDH (Sweden)
'89年の大傑作。北欧音楽界を仕切るフルート奏者/作曲家の彼が、ひときわ雄大なスケールでアプローチした一作。澄み渡る北欧の空気、オーローラをイメージさせるファンタジックでクラシカルな曲想です。



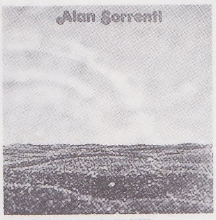
JOSE CID (Portugal)
'70年代末ポルトガルの至宝。壮大なロック・シンフォニーによるトータル作。メロディックでイマジネイティヴなシンフォニック・ロックです。初回のみLPサイズのスペシャル・ジャケット仕様。



ITOIZ (Spain)
ケルト人の移住地スペインのバスク地方より。トラッド/フォークをベースにしたアコースティックな感性がひかる傑作として知られる初期3枚の内、1st、2ndがCDに。折り紙つきの2枚です。



KEITH TIPPETT GROUP (U.K.)
70's初期ジャズ・ロックの頂点の一つ。K・ティペットがバンド編成で繰り広げる怒濤のような演奏が圧巻。また後のフリー指向も既にのぞいており、当時のニュークリアスと並び最も興味深いところ。遂に正式に再発売。



ALAN SORRENTI (Italy)
傑作「Aria」と同イディオムで製作された2作目。初のCD化。唯一無比のヴォーカルのみならず大気の流れと空間を演出するようなサウンドは極度にプログレッシヴ。未だ色あせない強烈なオリジナリティを放つ一作です。



STACKRIDGE (U.K.)
祝国内CD化。ビートルズ来の英ポップス最良の成果が、このスタックリッジ。ウィットに富むセンスが光る彼等の後期2作がリリース。D・ロウソンのkbdワークも色をそえ、温かく包むようなメロディが秀逸。



フロマージュ (Japan)
かつての2作が追加曲「岸辺のない海」「トーマの心臓」「セルロイドの空」を加え再CD化。内面に響く想いはせるような曲想、色つやを醸し出すヴォーカル等、初期のJAP'sプログレッシヴ・ロックを代表するもの。



CATHERINE RIBEIRO+ALPES (France)
「Paix」に続いて全盛期の2作「Le Rat〜」「Liberte」がCDに。彼女等を代表するナンバー"Poeme Non Epique"を収録する意味でも本領の発揮されたもの。独白そして引き裂かれるような絶叫まで音楽に託されたうねりが圧巻。

その他の入荷

輸入CD、LP

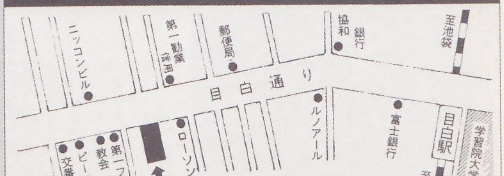
ISILDURS BANE/Lost Eggs (unreleased tracks)
PAR-LINDH PROJECT/Gothic Impressions (mini-CD, feat. member of Anglagard)
LIGHTSHINE/Feeling
CARAVAN/Cool Water ('77recording, unreleased album)
DAVID BEDFORD/Great Equatorial
IN CAHOOTS/Recent Discoeries
V.A./Minitures
PRESENT/Cod Performance
LUCIFER'S FRIEND/Banquet
DAVE GREENSLADE/From The Discworld
RUFUS ZUPHAL/Weiss Der Teufel
EMPIRE/Back To Knowledge
AGINCOURT/Flyaway
AKTUALA/same
FRANCO BATTIATO/Juke Box
DISCIPLINE/Push & Profit
SAGRADO CORACAO DA TERRA/Grande Espirito
CATHERINE RIBEIRO/Fenetre Ardente
ANGE/Live Epopee Du General Machine
ENCHANT/A Blueprint Of The World
EXPLOIT/Crisi
L'UOVO DI COLOMBO/same
SAINT JUST/same, La Casa Del Lago
JEAN PASCAL BOFFO/Nomades
JEAN PHILLIPE GOUDE/Drones
VERSAILLES/Le Treson De Valliesres
MANTICORE/Time To Fly
CARAVAN/Canterbury Tales
QUANTAM/II
PEKKA POHJOLA/Urban Tango, Everyman
VON ZAMLA/Zamlaranamma
DAVID CROSS/Silent Memories
ZAUBER/Aliens
LETHE/Nymphee
EELA CRAIG/same
LORIEN/Children's Games
JADIS/Once Upon A Time
CARLO LA MANNA/Luding
GENTLE GIANT/Last Time Live 1980
VISITORS/same
SHYLOCK/Gialorgues
WIND/Morning
OSAGE TRIBE/Arrow Head
AREA/Anto-Logicamente
ELTON DEAN/Keith Tippett/Twos And Threes
HOELDERLIN/same, Crown & Clouds, Rare Bird, Live-Traumstadt, New Faces
CAEDOMON/same
STONE ANGEL/same



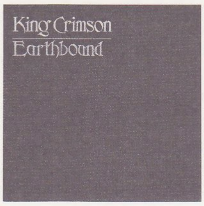
WORLD DISQUE SET SALE LIST Vol.109
4月25日発行!!

遠方の方、忙しくて店に来られない方の為に毎月お送りしている通信販売のリストです。この中には、自信を持って推薦する推薦盤コーナー、主として在庫残りの貴少盤を安価に供給するサービス・コーナー、世界中から集めたLP/CDをストックするスペシャル・ストック・コーナー、そして入手困難な貴少盤/中古盤を扱う貴少盤コーナーがあり、充実したストックからご希望のアイテムを購入できる便利なシステムです。ユーロ/プログレッシヴはもちろん、ブリティッシュ、トラッド等のストックも扱っています。マーキーとこのリストさえあれば鬼に金棒!! お申込は簡単。200円分の切手を同封の上、最新リスト希望と明記してマーキー内ワールド・ディスク通販係までお送り下さい。最新リストをお送りします。
（通信販売のお問合せは従来通り03-3954-2055までお願いします。3954-5348はお店専用電話です。）

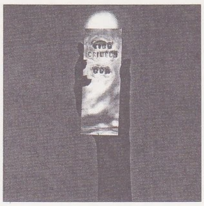
WORLD DISQUE：〒161 東京都新宿区下落合3-15-18 SYビル403（駐車場に挟まれた白いビル）

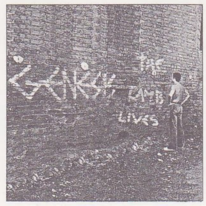


日本で初めてスタートした60・70年代のプログレッシヴ・ロックの専門店

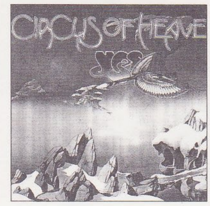


KING CRIMSON


KING CRIMSON

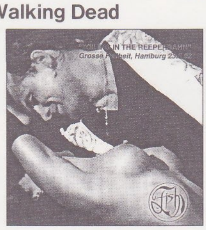

GENESIS

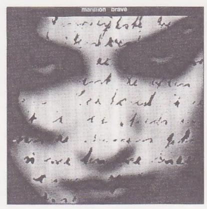

PINK FLOYD

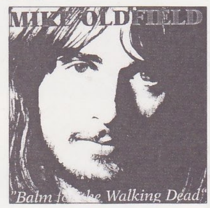

YES

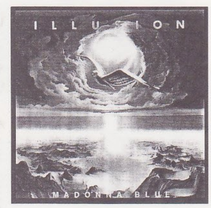
- ●KING CRIMSON
  /USA
  /Earthbound
- ●YES/Circus Of Heaven(2CD)
- ●GENESIS/The Lamb Lives(2CD)
- ●PINK FLOYD/Aphrodite
- ●NATIONAL HEALTH/
  Dreams Wide Awake(2CD)
- ●MIKE OLDFIELD/
  Balm For The Walking Dead
- ●RENAISSANCE/
  Tales Of 1001 Nights
- ●ILLUSION/Madonna Blue
- ●MARILLION/Brave(New Album)
- ●FISH
  /Toiling In The Reeperbahn(2CD)
  /Pigpens Birthday(2CD)
  /Derek Dick & His Amazing(2CD)
  /Uncle Fish & The Crypt Creepers
  (2CD)
  /For Whom The Bells Toll/(2CD)
- ●VAN DER GRAAF/Vital
- ●CARAVAN/
  Cool Water(New Album)
- ●CARAVAN OF DREAMS/
  An Evening Of Magic(2CD)
- ●ROBERT BERRY/
  Pilgrimage To A Point


ROBERT BERRY


FISH


MARILLION


MIKE OLDFIELD


ILLUSION

〒160 東京都新宿区西新宿7・5・6 新宿ダイカンプラザ 756・2階 TEL03(3363)3669
営業時間(平日)11〜19時 (休日)11〜18時 定休日・毎週月曜日

新宿レコード

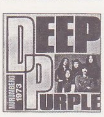
ゼファー：ベストセレクション・新作も続々入荷中!!



DEEP PURPLE
MARK Ⅲ (2CD) ¥5,300
１９７５年４月７日、パリでのライブ。この日を最後にリッチーが脱退してしまうという第３期パープルの歴史的ラスト・ライブ。



DEEP PURPLE
BERLIN 1971(1CD) ¥2,900
１９７１年５月２２日、黄金の５ピースによるベルリンでのライブを収録。"イン・ロック"リリース直後の破壊力に満ちた生々しいまでのライブパフォーマンスが展開されます。



DEEP PURPLE
NURMBERG 1973(1CD) ¥2,900
１９７３年１月１９日、ドイツにおけるライブ。実力・人気共に絶頂期の脂の乗ったプレイを聴く事ができます。選曲的にも名曲のオン・パレード。



RAINBOW
ON STAGE IN DOWN UNDER 1976(2CD) ¥6,300
１９７６年１１月１１日、オーストラリアでのライブ初登場。サウンドボード録音で、ボーナストラックとして、超レアな'ＬＯＮＧ ＬＩＶＥ ＲＯＣＫ 〜'を３テイク追加収録。



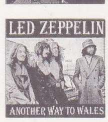
RAINBOW
ON STAGE OUTTAKES(1CD) ¥3,600
その名の通り、アルバム"ＯＮ ＳＴＡＧＥ"の必聴アウトテイク集。'ＫＩＬＬ ＴＨＥ ＫＩＮＧ'等、全５曲収録。大ベストセラー中。



LED ZEPPELIN
SMOKESTACK LIGHTNING(2CD) ¥6,400
１９６９年４月２６日、カリフォルニアでのライブ。'ＷＨＯＬＥ ＬＯＴＴＡ ＬＯＶＥ'はこの日が初演奏。完全収録の超人気タイトル。



LED ZEPPELIN
PLAYS PURE BLUES(1CD) ¥2,800
１９６９年のテキサス・ポップ・フェスティバルをステレオ・サウンドボード収録。６９年でこの音質は非常に貴重といえるでしょう。演奏もタイトル通りＨＥＡＶＹ ＆ ＷＩＬＤ!



LED ZEPPELIN
ANOTHER WAY TO WALES(1CD) ¥3,400
サード・アルバム製作時のデモ・トラック集。アコースティック主体のリラックスした演奏を聴く事ができます。



LED ZEPPELIN
FEARSOME FOUR LIVE ON STAGE(2CD) ¥5,900
１９７０年ノース・キャロライナでのオーディエンス録音をマスターよりダイレクト収録。超ド級の迫力で迫る'ＷＥ'ＲＥ ＧＯＮＮＡ〜'をはじめ、貴重な音源満載。



LED ZEPPELIN
VAHALLA I AM COMING(2CD) ¥5,900
１９７０年のフィンランドはヘルシンキにおけるライブ。バランスがペイジのギターに片寄り気味ですが、演奏内容は最高です。クレジットにはないが、'ＷＨＯＬＥ ＬＯＴＴＡ〜'収録。



LED ZEPPELIN
SOMETHING ELSE(1CD) ¥2,800
１９６９年のＢＢＣ放送用に録音された未発表録音に、１９７１年のイギリスのライブよりアコースティック・ナンバーをを３曲追加収録。



LED ZEPPELIN
JENNINGS FARM BLUES(1CD) ¥2,800
ＺＥＰライブ史の中でも最も人気の高い１９７１年のレアなマテリアルをサウンドボードより収録。



LED ZEPPELIN
STUDIO DAZE(1CD) ¥2,800
ＺＥＰのアウトテイク集の中でもＡ級の出来で、音質的にも内容的にも文句のつけようがない超名盤。特に'ＮＯ ＱＵＡＲＴＥＲ'の別バージョンは必聴。



LED ZEPPELIN
FILLMORE WEST '69(1CD) ¥2,800
マスターテープ使用で音質は最高。今までのフィルモア物とは格段の違い。



LED ZEPPELIN
NEW PORT '69(1CD) ¥3,400
マスターテープからダイレクト収録した本作は、'６９ならではの強烈な破壊力を伴ったハイボルテージ・パフォーマンスです。'ＴＲＡＩＮ ＫＥＰＴ〜'は必聴。

＊その他、プログレ/'60〜'70年代ロックは他店にない品揃え/ ご来店、お問い合わせお待ちしてます/

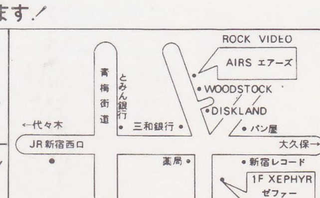
XEPHYR ゼファー

INFORMATION

- 広告の商品を含む通信販売ご希望の方は必ず電話にて在庫確認の上、ご注文をお願いします。
- ご注文後はすぐに商品代引で発送します。送料は一律¥600。但し商品3タイトル以上お買い上げの場合は無料です。(現金書留、郵便為替の場合も同様。)
- 商品のお問合せ、ご質問等お気軽にお電話下さい。

〒160 東京都新宿区西新宿 7−5−4 西新ビル1F
Tel/Fax. 03−5330−3959

OPEN EVERYDAY
12:00〜8:00

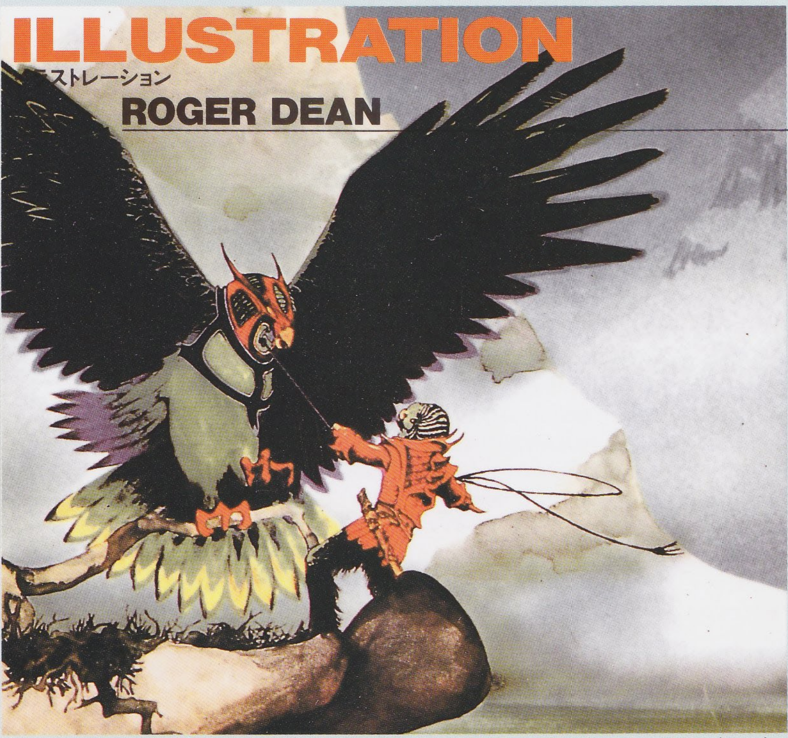


SLEEVE

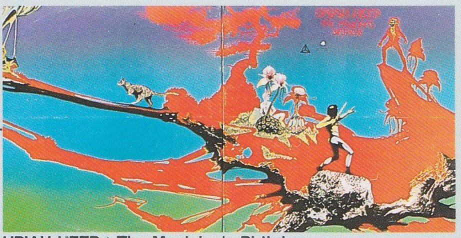
レコード・ジャケットがその内容物（音楽）と同等か、それ以上の意味を持たされ、また語られた時代は、BEATLESの「Sgt. Pepper's〜」あたりからパンク・ロックの出現まで、約10年間のことだ。ミュージシャンが不特定多数のリスナーへ向けて何がしかのアピールをする最も有効な手段は、ＬＰレコードを、パッケージも含めて充実させることであった。トータル・アート云々などと野暮なことは言わない。しかしＬＰ時代にはＬＰ時代なりの、必然性とインパクトを持った秀れたデザインが確かに存在した。人々は美しく飾られたレコード・ジャケットを手にとり、中に収まっている音楽と、手の届かぬ所にいるアーティストの夢を見続けたのだ。今日、レコード（CD）ジャケットは再び“パッケージ・デザイン”本来の姿にたち返ろうとしている。だがメディアの意味性が多重構造化し、それが受け手の意識との格闘の末溶解させられている現在となっては、パッケージ・デザインも'50年代のように無垢ではありえない。だからこそ今でも、ジャケット・デザインは面白いのだと言える。 （古田）

ILLUSTRATION
イラストレーション

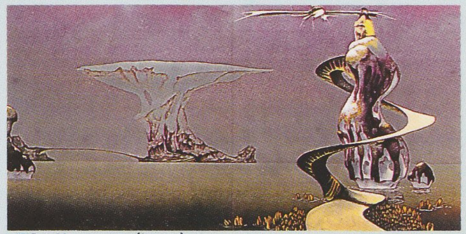
ROGER DEAN



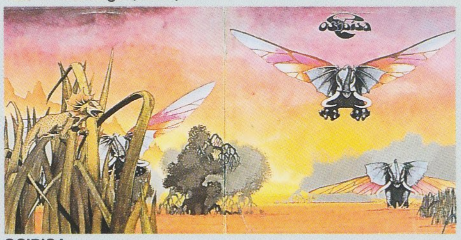
BUDGIE◆Never Turn Your Back On A Friend (detail)



URIAH HEEP◆The Magician's Birthday



YES◆Yessongs (inner)



OSIBISA◆same

PATRICK



STEALERS WHEEL◆same



DONOVAN◆HMS

PAUL WHITEHEAD



HIGH TIDE◆Sea Shanties (inner)

HIPGNOSIS
ヒプノシス

古田 賢

ＬＰ全盛時代にあってヒプノシスは、ジャケット・アート神話の頂点に君臨する、時代の寵児的なデザイン・チームだ。ヒプノシスの実体はオーベリー・パウエル、ストーム・ソージャースン、そして'74年に助手として加わるピーター・クリストファースン（後にTHROBBING GRISTLE を結成）の３名であるが、特に専門的な技術を必要とする作業に関しては外部の人材に任せる事が多い。ヒプノシスの名と並んでよく併記されているColin Elgie、George Hardie といった人達はみな外部の、フリーランスのデザイナーである。

ひと言で表わすのは難しいが、ヒプノシスらしさというのがある。技術上の問題はさて置き、見る者の心にどんな性質のものであれ傷跡を残すのは確かのようだ。それが単に視覚上のインパクトなのか、作為的な、しかも意味不明の構図が引き起こす割り切れなさによるものなのかは各ケース別に判断はできる。らしさの集大成は恐らく、例の「原子心母：見返りウシ」だろう。それまでのレコード・ジャケットでは考えられないまったくの無作為が、見る者にとっては数十トンの威圧感をもった作為となってのしかかる。

はっきり言ってしまえば、ヒプノシスは自身のコンセプトを、ピンク・フロイドの「炎」までで展開したような曖昧なイメージの提示に止めておくべきであった。プログレッシヴ・ロックが技術の為の技術を労し始め失速したのと同様の罠に、ヒプノシスも陥ってゆくのだから。

'70年代なかば以降、巷にヒプノシスのジャケットが溢れ返るようになった。ブラック・サバスが、UFO が、イエスが、アル・ステュワートが、判で押したように規格化されたイメージの下にパッケージされ、店頭に並ぶ。別個に見れば確かに面白いし、技術的にもケチの付けようがない秀れた作品だ。しかし、音も指向性も異なるこれらのレコードを並べてみた時脳裏をかすめるのは、中味の音楽は一体どこへ行ってしまったのかという素朴な疑問である。音楽以上に、カヴァーがウルサい。

ヒプノシスの本領は、ドラマティックな構図センスに、イギリス人らしい諧謔のスパイスが加わった所にある。ところが音楽の性格に関係なくスパイスを利かせ始めると同時に、肝心のアイ・キャッチャーとしての役割までも置き忘れたのが、'70年代末期以降の彼等だ。そこには自身のパロディをそれと知らず繰り返す技術屋以上の姿は見い出せない。

先頃話題になった『史上最低の遊園地／としまえん』のポスターが、どこかヒプノシスの本質を体現しているようで、少し悲しかった。

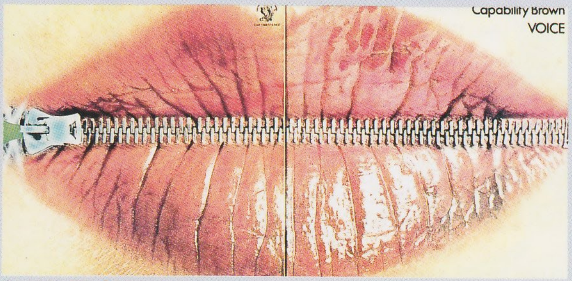


SOUNDS NICE◆Love At First Sight

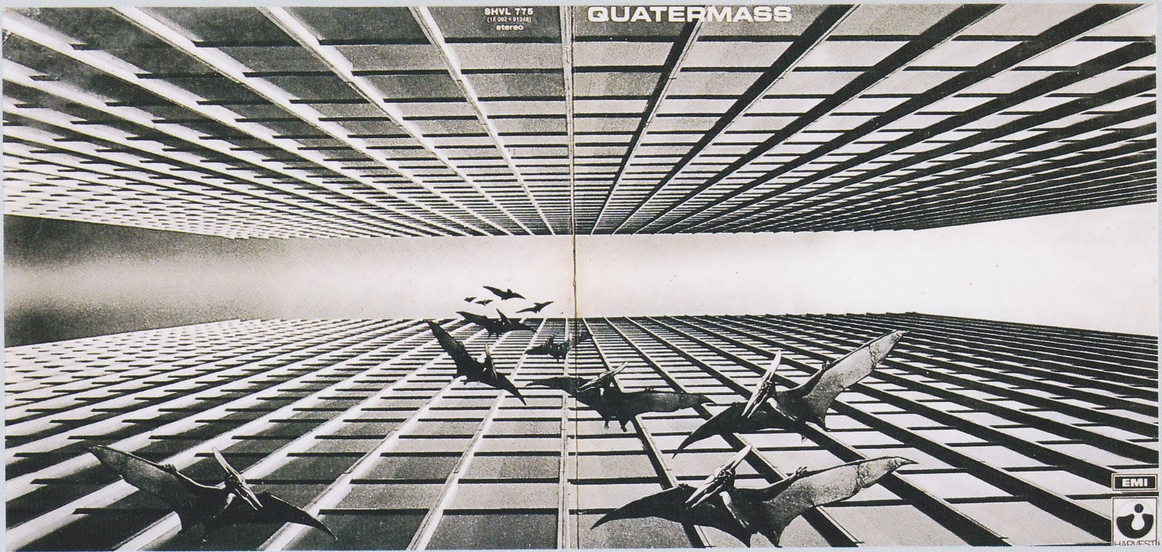
STRING DRIVEN THING◆Machine That Cried




BRAND X◆Moroccan Roll



CAPABILITY BROWN◆Voice



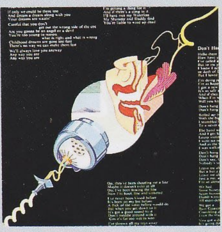
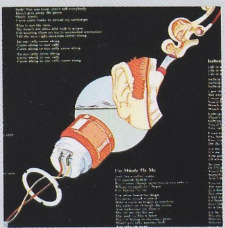
QUATERMASS ◆ same



STRING DRIVEN THING ◆ same







10CC ◆ How Dare You!

KEEF
キーフ

松本昌幸

ヒプノシスの画策力は、ロジャー・ディーンの一方通行的な自己表現を軽くかわす。そこでは日常感覚を一瞬にして転換する変幻自在さ（応用力）が、見る者を選ぶことなく，しかも盲点を突くように働くことで、心理的洞察が果たされている。Marcus Keef、彼が'70年代初頭に印象づけられるのは、その作品を初期 Vertigo、Neon 等のレーベルに負った以上に、本来、ロジャー・ディーン型の、いわば内的心象を表現（主張）する姿勢が、意味内容こそ重要であり、それを個性として主張することを許した時代感覚に、物の見事に一致しているところにある。

特殊カメラ技術に多くを負う彼の色彩は、一見、彼の表現そのものである。しかし、色彩が特別であろうとも、その統一性、補色の挿入活用は、職業的で慣行めいた、画面を保守しようとする色彩配慮でしかない。心象表現が画面を解体し再構成することで変形させることもない。それは画面に規律を与える心情であり、ヒプノシスのように見る物の内心をむやみにかき乱すことがないのも、そのためだ。

むしろ、彼の志向が表明されているのは、画面中の対象物である。それは NIRVANA「Local Anaesthetic」の美女であり、CRESSIDA「Asylum」の首人形であり、STILL LIFE の鉛のような葉であり、BEGGAR'S OPERA「Act One」の扮装した人々である。それは彼のカヴァー・アートの深層に息づくネクロフィリズムである。全て、血が脈打つ肉体、呼吸をする生命体とは掛け離れ、人形、物体でしかない。感情が切り落とされているのだ。これは感情の対極にある理性、その潔癖さ、抑制さの極限を示していて、色彩の清潔さに通じ、感情が先行律動するラテン血統とは対極のアングロ・サクソン系ヨーロッパ精神の極北を貫く。しかし彼の死物執着が、殺すことや死ぬことの介在なくして有る死の標本への執着であり、極めて第3者的に死をとらえているからこそ、これら死物からは感情めいた死の痕跡が取り払われており、見かけ上、清潔さ、潔癖さに転嫁し得ている。色彩もまた、全ての意味が消失した所、何も存在しないことが放つ"純性"に由来している。彼のネクロフィリズムの背後には、色彩、対象物をも抑制する理性が見て取れる。

唯一の彼の意識的な告白は、サンディ・デニーの「The North Star—」や FAIRFIELD PARLOUR に代表される木目の滑らかさのような感覚である。それは茶色の世界として表されている。茶色は、質素、ベーシック、落ち着き、古風といった意味合いの色彩であり、樹木の肌を想起させて自然という概念に及び結びつけるものだ。彼がこの世界でモチーフにしたのは、上記とは対照的に人間の生きる空間である。彼が生活臭をそれら一コマに置き替える際ですら、理性的な清潔

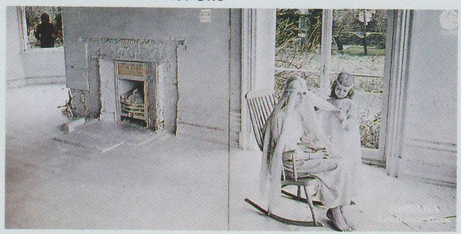
〔ネクロフィリズム〕


TONTON MACOUTE ◆ same (inner)


BEGGAR'S OPERA ◆ Act One



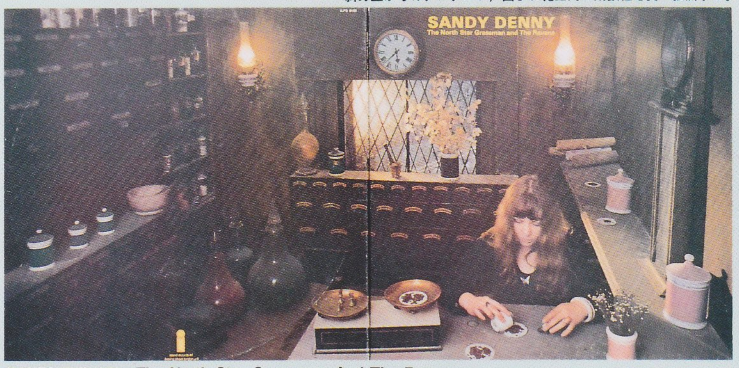
MANFRED MANN CHAPTER THREE ◆ Volume Two


NIRVANA ◆ Local Anaesthetic

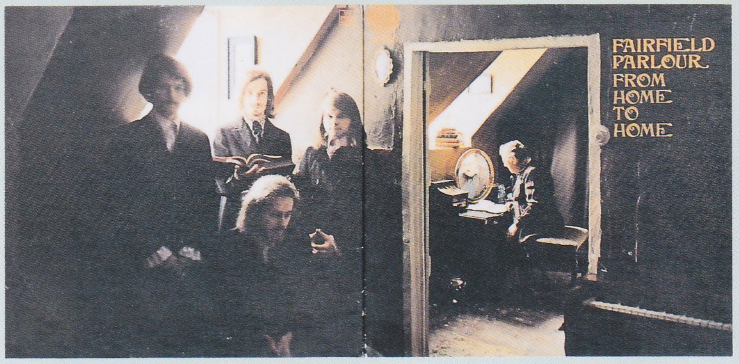
さを読み取れるとしても、茶色の特性に理性が働くことで、見事、それを滑らかさ、まろ味に変質させている。そして、イギリスのベーシックな部分にある品位、つつましやかさに視覚言及し、空間表現をも駆使してその閉鎖性、保守性をも視覚的に示唆し得ている。（前者の室内、後者の扉の向こうにある部屋―それらは囲みの中の世界、閉ざされた空間である）。この茶色の世界こそ、彼の個人レベルでのベーシックな部分に符合し、イギリス性を自らの出生として認めている、数少ないが故に告白とも言える。

〔茶色の世界〕

斜め上からのアングルが、囲まれた空間の閉鎖性を更に強調する。



SANDY DENNY ◆ The North Star Grassman And The Ravens



FAIRFIELD PARLOUR ◆ same

〔基調色彩による統一性〕



AFFINITY ◆ same

青の基調

〔補色の挿入活用〕



SPRING ◆ same

基調の緑に対する赤

■SLEEVE

TRANSFORMED

変型ジャケット



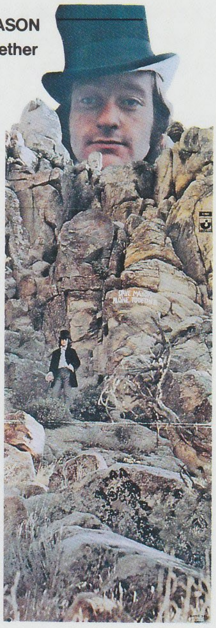
DR. STRANGELY STRANGE
◆Heavy Petting



DR. Z◆3 Parts To My Soul



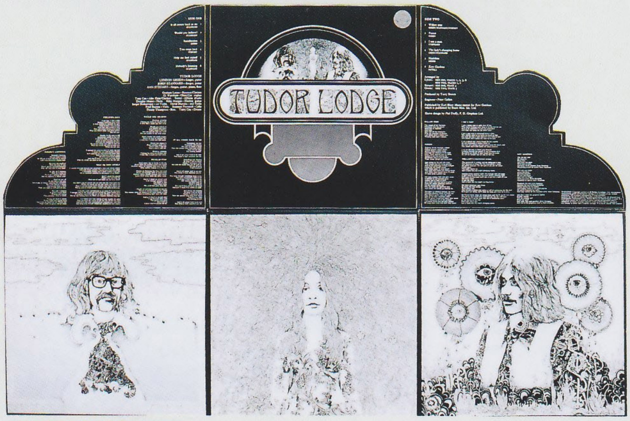
DAVE MASON
◆Alone Together





SMALL FACES
◆Ogdens' Nut Gone





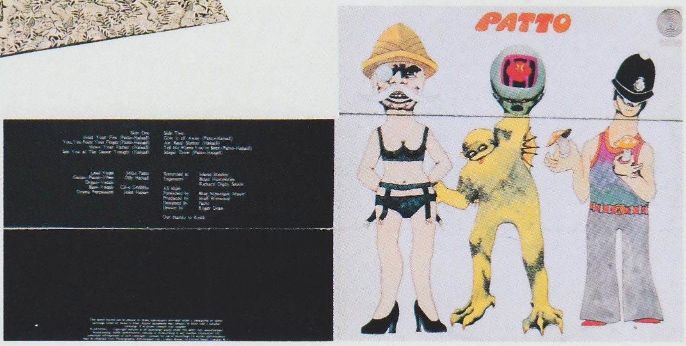
TUDOR LODGE◆same



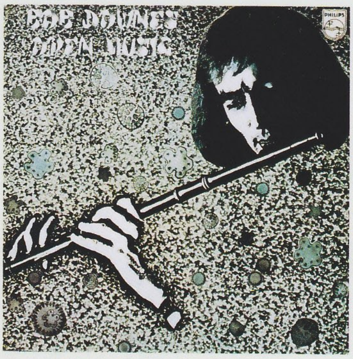
JETHRO TULL◆Stand Up



PATTO◆Hold Your Fire



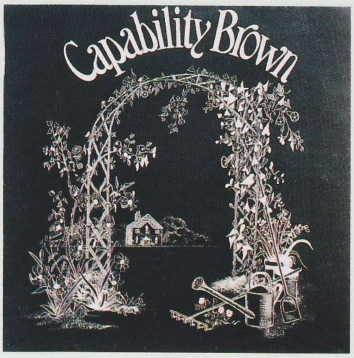
OTHERS
その他



BOB DOWNES OPEN MUSIC◆same
design:Phil Duffy



SPIROGYRA◆Old Boot Wine
design, painting & photo:Pete Rhodes



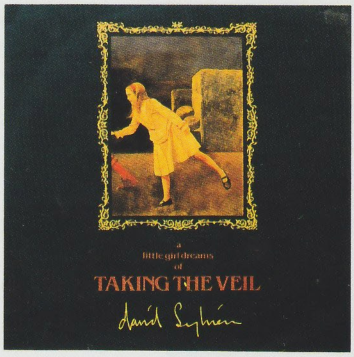
CAPABILITY BROWN◆From Scratch
art:Kenny Rowe



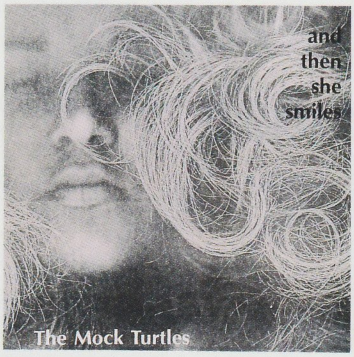
FAIRPORT CONVENTION◆Unhalfbricking
photo:Eric Hayes
design:Diogenic Attempts LTD.



ROXY MUSIC◆Flesh And Blood
design:Bryan Ferry, Anthony Price, Neil Kirk, Simon Puxley, Peter Saville



DAVID SYLVIAN◆A Little Girl Dreams Of Taking The Veil
art:Peter Blake design:Yuka Fujii



THE MOCK TURTLES◆And Then She Smiles
photoAudrey Hamilton
design:Sweeton Hopkins Consultants



THE SUNDAYS◆Reading, Writing And Arithmetic
design:THE SUNDAYS



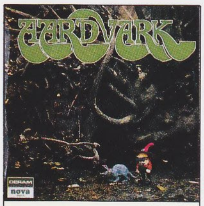
TOYAH◆Desire

⦿国内盤CDメーカー略号⦿ Alfa=アルファ Col=日本コロムビア CS=CBSソニー Edi=エジソン K=キング MSI=MSIライコ・ジャパン PC=ポニーキャニオン Ph=日本フォノグラム Po=ポリドール PS=ポリスター Te=テイチク To=東芝EMI Vap=バップ Vic=ビクター音産 VJ=ヴァージン・ジャパン WP=ワーナー・パイオニア

CATALOG

PROGRESSIVE, PSYCHE

AARDVARK



Aardvark

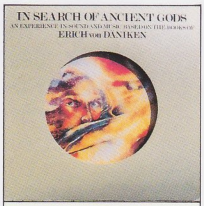
Deram-Nova (S)DN 17
'69 年
Edi:ERC-29224

Frank Clark:per
David Skillin:vo
Steve Williner:org,p,celeste,vib,mba,r-ec
Stan Aldous:b

Produce:David Hitchcock

EL&P、EGG、REFUGEE、FIELDS 等、'70年代に活躍したグループの中でもこのAARDVARK は特異な存在だ。そのレスリーを通さずにハイパワー・アンプで歪ませたハモンドの音はジョン・ロードのそれに近く音楽性もハード＆ヘヴィ、ギター抜きの DEEP PURPLE の様で非常にパワフルだ。しかしプログレ・ファン好みのピアノやチェレスタを使った美しい曲もあるのでワンパターンに陥ることもなくアルバム一枚をいっきに聴かせてくれる。当時この新しいスタイルに挑戦したメンバー４人のパワーとエナジーが十分に感じとれるアルバムである。（太田）

ABSOLUTE ELSEWHERE



In Search Of Ancient Gods

W.B. K56192
'76 年

Paul Fishman:syn,fl,el-p,as-p,mtn
with
William Bruford:per
Philip Saatchi:g
Jon Astrop:b
Kim Mackrell:cel

Produce:Jack & Paul Fishman

ビル・ブルッフォードが参加していることで、YES、CRIMSON、ファンの間で知られるABSOLUTE ELSEWHERE。エーリッヒ・フォン・デニケンの著書をもとに、古代文明へのオマージュをコンセプトに制作された、トータル・イメージ的な内容で、全編ポール・フィッシュマンの奏するキーボードを主体としたインストゥルメンタル・ナンバーで構成されている。宇宙空間を彷徨っているかのような不安と翳りを伴って淡々と進行し、フルートやメロトロン、チェロ、効果音などをうまく用いて、美しく深遠な音世界を形作っている。セカンドも計画されたらしいが実現されなかった。（藤井）

ACADEMY



Pop-Lore According To The Academy

Morgan Blue Town BT5001
'69 年

Richard Cobby
Dick Walter
Polly Perkins
Damon J.Hardy

Produce:?

極端に発表枚数が少ない超マイナー・レーベル、MORGAN BLUE TOMN からデビュウした、女性を１人を含む４人組。ヴォーカリストが２人、サックス＆フルート奏者１人、ギタリスト１人という編成。内容的に一番近いジャンルがジャズ・ヴォーカル。昨今のそれ風なバンド、例えば WORKING WEEK、SADE などからベース、ドラムス、パーカッションを排除して極力シンプルにした音。16年前のアルバムなのにちっとも古くさくなく、却って今の時代にマッチしている。特にB⑤なんてTVのトーク番組のバックにでも使えそうな雰囲気。（佐野）

ACCOLADE



Accolade

Columbia SCX 6405
'70 年

Gordon Giltrap:g
Don Partridge:g
Brian Cresswell:?
Malcolm Pool:b
Ian Holt:?

Produce:Don Paul

後にソロ・ギタリストとして活動するゴードン・ギルトラップが在籍していたグループ。ベーシストは ARTWOODS、BLUES BREAKERS を経て加入している。たった２枚のアルバムを残すのみで、知名度は皆無に等しい。彼等のサウンドは、品の良いフォーク系アコースティック・サウンドに、室内楽やジャズのエッセンスを軽く取り込んだもので、この時代にあっては、独自のカラーを持っていたと言えると思う。ほぼ全編に渡ってヴォーカル志向、フルートにしてもソフト・タッチな上、曲に起伏が少ないこともあって、インパクトは弱いが、聴き込むと味が増す。（松本）

AFFINITY



Affinity

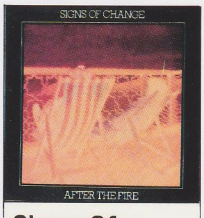
Vertigo 6360 004
'70 年

Linda Hoyle:vo
Lynton Naiff:p,el-p,vib,hcd
Mike Jopp:g
Mo Foster:b
Grant Serpell:ds,per

Produce:John Anthony

火を噴く様なハモンドの咆哮、土の香りがたっぷりと染み込んだギター音、鈍色のブラス・アレンジ。英国ロックの伝統的手法を余す所無く詰め込んだ力作である。ジャズとブルーズを適度に融合したサウンドにリンダ・ホイルの力強い歌唱がピタリとマッチ、特にA①、B①など渋目の展開で本領を発揮する。10分を超すB③はスリリングなオルガンで徹頭徹尾攻めまくる本作のハイライト・ナンバー、またヴァイブとアコースティック・ギターを配したA④でも彼女のヴォーカルが仲々良い味を出している。キーフのカヴァー・デザインもまた秀逸。（江田）

AFTER THE FIRE



Signs Of Change

Rapid RR001
'78 年

Peter Banks:org,syn,p,vo
Nick Battle:b,vo
Andy Piercy:vo,ac & el-g,
Ivor Twodell:ds

のちに全英No.１大ヒットをとばしメジャー・グループの仲間入りをはたした AFTER THE FIRE の自主製作ファースト・アルバム。軽快なテンポで始まるこの作品は当時のポンプ・ロックの他のバンド（MARILLION、IQ 等）同様 GENESIS からの影響がかなりのウェイトをしめている。ただし、他のグループよりかなりポップな要素が強くその後ポップ・グループとして成功したのもうなずける作品である。やや薄ぺらな印象を受けるが、古き良き時代のイギリス・プログレの伝統を受けついだ好作品には違いない。偏見をもたずに一聴をおすすめしたい。（三橋）

BURT ALCANTARA



Zygoat

Polydor 2383 270

'74 年

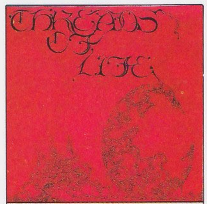
Burt Alacantara:Composition

Produce:Electrophon

イギリスの数少ないシンセサイザー作品の一つ。裏ジャケットに表記された ELECTROPHON とは、電子楽器工房、もしくはそうした組織のようだ。同じ頃２枚の同傾向のアルバムを残した WAVEMAKER に同じ表記がある。本作のコンポーザー、バート・アルカンタラの他２作を含めたこの一連の作品に共通して言える、イマジネイションの欠如したサウンドは、そのままイギリスにおけるこのジャンルの立ち遅れを証明するかのようだ。本作は、何よりジャケットのイメージと多重録音のおかげで、聴くに値はする。が、"語法としての電子楽器"の域には、ほど遠い。

（松本）

ALCO



Threads Of Life

Alco ALC 530

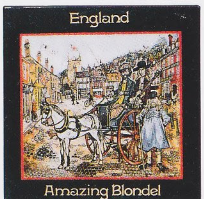
'72 年

Tim Caesar:key,lead-vo
Paul Fidli:b,g,vo
Ben Broone:g,b,vo
Julian Caesar:ds,syn,vo
with
The Itchen Orchestra
Itchen College Barber Shoppers:vo

A面は、人生をテーマにしたトータルなつくりになっており、オルガンとギターを中心にした、控えめな演奏を聴かせる。プログレッシヴ・ロック・バンド ALCO とオーケストラが異和感なく調和し、クラシカル・ロックのお手本のような内容である。B面は、バンドのみの演奏であり、B①は、シンセサイザー中心の神秘的な曲、B③は、ハモンドの響きがとても印象的な曲、B④は綺麗なピアノの調べが心に残るバラード、B⑤以降は、すべてアカペラである。発表年は不明であるが、1970年頃と思われる。自主製作のレベルでは好作だと言える。

（長谷川　聖一）

AMAZING BLONDEL



England

Island ILPS 9205

'72 年

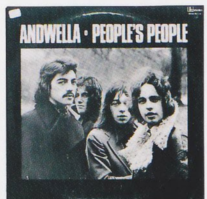
Edward Baird:g,vo,per
Terence Alan Wincott:vo,fl,rec,harmonium,pipe org,mtn,per
John David Gladwin:g,vo,b,tabor,tubular bells
with
Adrian Hopkins:hpd,arr

Produce:BLONDEL & Phil Brown

AMAZING BLONDEL は過ぎし日の英国貴族の物腰を宿した３人による特異なフォーク・グループである。それは彼等のバックにあるものが民衆歌としてのトラッドでなく、エリザベス王朝時代の宮廷音楽であることによるのだろう。４枚目にあたる本作では、ストリングスも配し、全編純英国的なのどかさを映し出している。特にオーボエの響きが印象的。リュートを使用した前作「Fantasia Lindum」('71年) も典雅な好作品であったが、中心メンバーのグラッドウィン脱退後、彼等は BAD COMPANY のメンバーやエディ・ジョブスンの協力を得てポップな方向へと進んで行った。

（高山）

ANDWELLA



People's People

Reflection L-10

'71 年

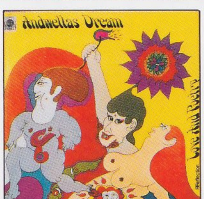
David Lewis:vo,g,p,org
Dave McDougall:p,org
Dave Struthers:b,vo
Jack McCulloch:per

Produce:Phil Gillin

アメリカ志向の強いグループに思われている ANDWELLA だが、その曲創りには陰影に富んだイギリスならではのものがある。ヴォーカルのデイヴ・ルイスは、確かにソウルフルな唱法だが、バラードで聴かせる声は限りなく優しい。アルバムは２枚（前身である ANDWELLA'S DREAM として'69年にも１枚出されているが）、'70年の「世紀末」と題されたアルバムも、素晴らしいタイトル曲を含んでいるが、'71年の本作のトータルな味わいもまた格別である。A③やA⑥のスロー・ナンバーの美しさには溜息が出る程だ。クレジットにはヴァーティゴ・レコードへの謝辞もある。

（後藤）

ANDWELLAS DREAM



Love And Poetry

CBS 63673

'69 年

Dave Lewis:g,p,org,vo
Nigel Smith:b,vo
Gordon Barton:ds
with
Bob Downes:fl,chinese bell,tam,fingercymbal,bamboo-fl,dry leaves

Produce:Rocky Shahan

マルチ・プレイヤー、デイヴ・ルイス率いる ANDWELLA'S DREAM 唯一のアルバム「Love And Poetry」。のちにグループ名を ANDWELLA と変え、３人組から６人編成となり、サウンドもアメリカナイズされた作品を２枚発表、時に 2nd の「People's People」は名作として評価を受けている。さて、この作品は当時のビート・サウンドにサイケ色を加味したブリティッシュ・サウンド。とても３人編成とは思えない音作りはリーダーのデイヴ・ルイスのセンスの良さによるものだろう。古さは感じるものの色あせる事のない傑作アルバム。

（三橋）

AQUILA



Aquila

RCA SF 8126

'70 年

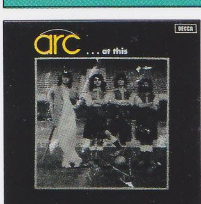
Ralph Denyer:vo,g
Phil Childs:b,p
George Lee:fl,sax
Martin Woodward:org.
James Smith:ds,tympany,per

Produce:Patrick Campbell-Lyons

このバンド、IF、A·BOWN、HEAVEN、BRAINCHILD、WARLUS 等と並ぶブリティッシュ・ブラス・ロック・バンドである。上記のバンドは個々に個性を持っており、このバンドもヴォーカル／ギターのラルフが全て作曲し、アシッド・フォークからの影響が窺える曲を、管楽器をフィーチャーしてロック化している。全編ハモンドが効果的に使われており、英国特有の雰囲気を出している。プロデューサーのパトリックは NIRVANA の中心人物であり、ソロ・アルバムもリリースしており、ブリティッシュ・ロック界の影の立役者と言われている。

（吉野）

ARC



...At This

Decca SKL-R 5077

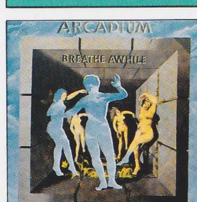
'71 年

Mick Gallagher:p,org,g,vo
John Turnbull:g,per,vo
David Montgomery:ds,per
Tom Duffy:b,vo

Produce:ARC

RCA よりアルバムを１枚出してすぐに解散してしまった POP ROCK グループ SKIP BIFFERTY の中心人物３人の内の２人（もう１人はグラハム・ベル）が中心となって結成されたバンド。玄人受けするタイプで全体に小粒でものすごく渋い。ギター、オルガンなど余りソロ・パートは取らず、１曲１曲じっくり聴かせる。ハード・ロック・ファンやプログレ・ファンにはもの足りないかもしれないが、無名バンド愛好家にとってはこの上もない１枚。オーソドックスなロックが好きな人にお勧めします。再発が待たれる１枚。尚この後彼等は BELL & ARC 結成へ。（佐野）

ARCADIUM



Breathe Awhile

Middle Earth MDLS 302

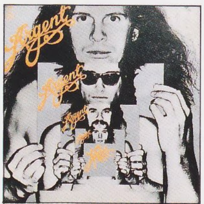
'69 年

Graham Best:b,vo
Alan Ellwood:org,vo
John Albert Parker:ds
Robert Ellwood:lead-g,vo
Miguel Sergides:12-str-g,lead-vo

Produce:Austin John Marshall

ブリティッシュ・プログレッシヴ・ロックの最初期に５枚の作品を残し消えた幻のミドル・アース・レーベルから世に出た ARCADIUM 唯一のアルバム。全体的にはアルペジオ主体の硬質なギターとハモンド・オルガンが主導権を握る古めかしいタイプのサウンド。多少ドロっとした作風は CRESSIDA などに共通する点も見られる。サイケデリックを通過しプログレッシヴ・ロックへと向かう発展途上においての記録といった感が強く、演奏力などは決してほめられたものではないが、重くのしかかってくるような独特の暗さが印象に残る。（深民）

ARGENT



Nexus

Epic EPC 65924

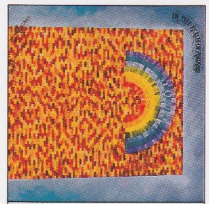
'74年

Rod Argent:org,el-p,p,mtn,vo
Russell Ballard:g,l-ead-vo
Jim Rodford:b,vo
Robert Henrit:ds,vo

Produce:Rod Argent, Chris White

ZOMBIESのロッド・アージェントと幻のグループUNIT 4＋2のラス・バラードを中心に結成されたグループ。本作は5作目に当る。ロッドは4作目からプログレッシヴな方向性を打ち出し、シンフォニック作A①を含むインストゥルメンタルの3曲がその典型。一方ラスの曲はポップでメロディー志向。やがて後者がソロ活動に入った為、替りにジョン・ヴェリティー、ジョン・グリマルティーが参加し完成度の高い作品を次々と発表する。'75年「Counterpoints」発表後解散し、ロッドはジャズ志向を強めるようになる。米盤はジャケット違い内袋付。　（吉野）

ASGARD



In The Realm Of Asgard

Threshold THS 6

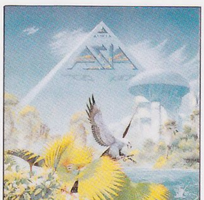
'72年

Rodney Harrison:g,vo
Dave Cook:b
Ian Snow:ds
James Smith,Ted Bart-lett:vo
Peter Orgill:vin

Produce:Tony Clarke

MOODY BLUESにより設立されたデッカ傘下のスレッショルドは彼等の作品やメンバーのソロ・プロジェクトを中心とした19作品をリリースしたレーベルであった。そして同時に本作を始めTRAPEZE(ファースト）やPROVIDENCE等、中には部分的影響に止まるグループもあったが、そのほとんどがムーディーズのスタイルを踏襲し分家ともいえる作品もリリースしていた。本作はムーディーズのプロデュースを務めていたトニー・クラークを迎え、曲調も彼等の流れを汲んでいるがヴァイオリン奏者をフィーチュアしてグループの特徴を出していた。　（吉野）

ASIA



Alpha

Geffen GEF 25508

'83年

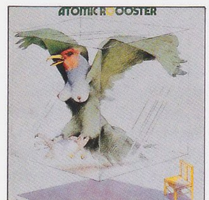
WP:20P2-2077

Geoff Downes:key
Steve Howe:g
Carl Palmer:ds
John Wetton:vo,b

Produce:Mike Stone

世界的なヒット、そして注目を浴びた衝撃のデビュー・アルバムに続き、このセカンド・アルバムで再びその目は向けられる。プログレ・ファンからは賛否両論であった彼らではあるが、あくまでもプログレをベースとしたシンフォニックかつドラマチックな曲が、ほとんどを占めている。3人のベテランのプレイもさることながら、G・ダウンズの各種キーボードを多用した重厚な音作りは特筆すべき点がある。J・ウェットンが歌い上げるバラードA②、シンフォニック色の強いA⑤、B⑤は名曲と言えよう。プログレ・ファンにこそ再認識して欲しい名盤である。　（神山）

ATOMIC ROOSTER



Atomic Roooster

B&C CAS 1010

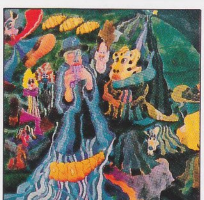
'70年

Vincent Crane:org,p
Nick Graham:b,vo,g,fl
Carl Palmer:ds,glock-en,conga

Produce:ATOMIC ROOS-TER,Tony Colton

ATOMIC ROOSTERの1作目であると同時にキーボード・トリオ、又ハード・プログレッシヴ・ロックとしての金字塔を打ち立てた名作。トリオ・スタイルながらほぼ全曲にベースのN・グラハムのギターがフィーチュアされ、ヴィンセントのキーボードとのみごとな掛け合いが聴ける。B③を除く全ての曲がヴィンセントのペンによる物で、彼が練り上げたスコアを元に他の2人が白熱のプレイを行なっている。QUATERMASSは勿論EL&Pの結成にすら影響を与えた彼ら、よりハードな方向へと進んでいく訳だが詳しい事は本誌33号を見て頂きたい。　（宇藤）

AUDIENCE



Friend's,Friend's, Friend

Charisma CAS 1012

'70年

Howard Werth:ac-g,b-anjo,lead-vo
Keith Gemmell:sax,w-oodwind
Tony Connor:ds,per,p
Trevor Williams:b,g,vo

Produce:AUDIENCE

ポリドールから1stアルバム（583 065,'69年）発表後、カリズマに移籍し発表した2ndアルバム。ジャズ、フォークからの影響にクラシカルな味わいを牧歌的なのどかさをプラスしたような音楽性を持ち、感じとしては初期V. D. G. G.から暗さと重さを取りさり、よりのどかにしたようなサウンドだ。フォーク系から発展してきたのだろうが、'70年初期にキーボードを使用しなくてもプログレッシヴ感覚あふれる作品を作れることを示したことは高く評価できる。SAMMY、STACK-RIDGEといったバンドとも重要なつながりを持つ名バンドであった。　（深民）

JULIE DRISCOLL, BRIAN AUGER & TRINITY



Street Noise

Marmalade 608005〜6

'68年

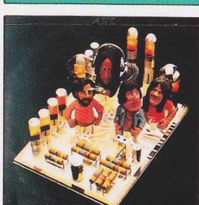
Po:P30P-25072

Julie Driscoll:vo,a-c-g
Brian Auger:org,p,e-l-p,vo
Clive Thacker:ds,per
David Ambrose:b,ac-g,vo

Produce:Giorgio Gom-elsky

BRIAN AUGER & TRINI-TYの力作2枚組アルバム。ブライアン・オーガーの音楽性とジュディ・ドリスコールの個性がぶつかりあいそして見事なまでに調和した記念すべき作品である。ブライアン・オーガーはジャズとブルーズを基調としたサウンドを得意としているが、そのメロディにジュディの歌がからまる様は実に躍動的であり、その音はまさに「街のざわめき」を感じさせる。AFFINI-TYほどはでな作風ではないが女性ヴォーカルをフィーチュアしたロック・アイテムとしては絶対はずせない1枚。ブライアン・オーガーとジュディ・ドリスコールは後「Encore」で共演している。　（三橋）

AUTOMATIC FINE TUNING



A. F. T.

Charisma CAS1122

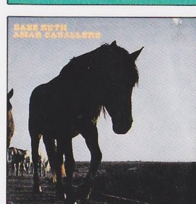
'76年

Paul A.MacDonnell:g
Robert Cross:g
Dave Ball:ds,vo
Trevor Darks:b

Produce:Loyd Grossm-an & Neal Grossman

ツイン・リード・ギターが延々と続くA. F. T唯一のアルバム。ツイン・リードと言えばWISHBONE ASHの名がすぐに思い浮かぶが、ヴォーカルが入らない分（B②のみヴォーカル入り）違った印象を受ける。むしろ、オランダのFINCHからオルガンを抜いたかのようだ。特徴的なのは、曲の長さでA①B①は合計30分を超える組曲になっている。また、全編メロディアスで展開が早いがその中心となっているのはベースのトレヴァーだと思われる。（彼はMOTHER GONGの「Fairy Tales」にも参加している。）本作は'76年の作品だが、当時既に懐かしい音だったと記憶している。　（後藤）

BABE RUTH



Amar Caballero

Harvest SHVL 812

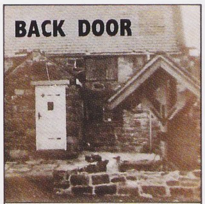
'74年

Janita Haan:vo
Ed Spevoke:ds,per
Dave Hewitt:b
Chris Holmes:key
Alan Shacklock:g,key,per

Produce:Alan Shackl-ock

切れ味の鋭いロックを演奏するBABE RUTHの2作目。単なるハード・ロックではなく、ファンキーな味付けやバラード、クラシカルなアレンジも取り入れ、幅広い音楽性を持っている。ジャケットはヒプノシスの手になるが、FLOYDの「原子心母」の牛に対して、逆光に映える馬である。内ジャケの夕暮れも美しくこの作品のテーマとも言える郷愁を感じさせる。ESPERANTOのレイ・ヴィンセントがヴァイオリンで参加したB②や、組曲になっているタイトル曲は哀感を伴ってロマン派の絵画でも眺めるような雰囲気がある。バンドは計5枚のアルバムを残している。　（後藤）

BACK DOOR



Back Door

Blakey BLP.5989

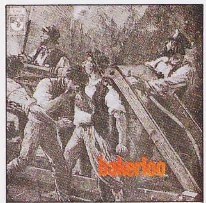
'72 年

Colin Hodgkinson:b
Ron Aspery:a&s-sax, fl
Tony Hicks:ds

Produce:?

キーボード、ギターのかわりに金管楽器をメインにしたヨークシャー出身のジャズ・ロック・トリオ。本1st アルバムでブルーズ・ロックにフリー・ジャズなどの要素を加えたサウンドはほぼ完成されている。メイン楽器であるR・アスペリィのサックス他が音の広がりに欠ける分C・ホッジキンスンのギター顔負けのベース、T・ヒックスのドラムスがうまくフォローしている。本作後の3枚ではキーボードの導入、vo 入りナンバーなど広がりを求めている。ホッジキンスンは解散後、J・ハマー、C・パウエルのアルバムにセッション参加している。 (深民)

BAKERLOO



Bakerloo

Harvest SHVL 762

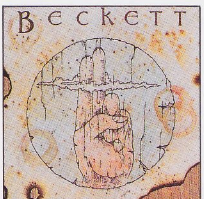
'69 年

Dave'Clem' Clempson: g,p,hcd,hca
Terry Poole:b
Keith Baker:ds
with
Jerry Salisbury:tp

Produce:Gus Dudgeon

'60年代後半のブリティッシュ・ホワイト・ブルーズ・ムーヴメントの中から登場した彼らの唯一のアルバム。とはいうものの、バンドのテーマはブルーズをどのように発展させていくかにあったようで、バッハの曲やジャズ的な展開を持ったオリジナルを取りあげるなど、単にブルーズ・バンドではくくることのできない活動を目指したバンドであった。バンドは結局、C・クレムソンのCOLOSSEUM 加入であっけなく解散するが、単なるブルーズ・ギタリストではなかったクレムソンの感性が、「バレンタイン組曲」に花をそえたのは確かだろう。 (深民)

BECKETT



Beckett

Raft RA 48502

'74 年

Robert Barton
Keith Fisher
Terry Wilson-Slesser
Kenny Mountain
Ian Murray
with
Tim Hinkley:key
Wilf Gibson:str-arr.

Produce:Roger Chapman

オーケストラを導入し成功した数あるブリティッシュ・ロックの作品の中で、本作も美しいストリングスを取り入れた隠れた名盤として知られる。このバンドの本質はA②に代表されるようなハード・ロックだと思われるが、A③、A④等の美しく見事に溶け込んだストリングス・アレンジは、作品に幽幻な奥行きと格調高い味わいを与えている。ロジャー・チャップマンのプロデュースでリリースされた本作のみで消えてしまったグループだが、優しいヴォーカルがクラシカルなストリングスに包み込まれる時、正に"心はブリティッシュ"なのである。 (Luna)

BEGGARS OPERA



Pathfinder

Vertigo 6360 073

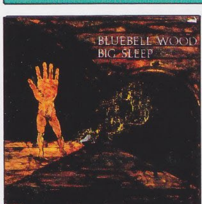
'72 年

Martin Griffiths:lead-vo
Alan Park:key
Ricky Gardiner:lead-g,vo
Gordon Sellar:ac-g,b,vo
Ray Wilson:ds

Produce:BEGGARS OPERA

いかにもヴァーティゴらしい音作りと内容のファースト「Act One」を'70年に、メロトロンを導入した渋い内容のセカンドを'71年にリリース。特にセカンドには、『Time Machine』、『Silver Peacock』等の名曲が含まれ味わい深いものとなっている。'72年にリリースされた本作は、なんと言っても、ジム・ウェッブの曲をアレンジしたA②のクラシカルな響きであろう。ハモンドやハープシコードによるテーマのなんと印象的なことか。この響きこそブリティッシュなのである。彼らはその後3枚のアルバムをリリースするがどんどん魅力がなくなってしまう。 (Luna)

BIG SLEEP



Bluebell Wood

Pegasus PEG 4

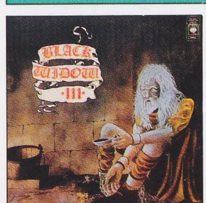
'71 年

Phil Ryan:org,p
Ritchie Francis:b,p,vo
John Weathers:ds,vo
Raymond Williams:g
Gary Hopkins:vo,g

Produce:Lou Reizner

A④以降の曲はベース担当のリッチーの曲で占められ、彼が中心人物的存在であるのが分る。又彼は同レーベルに好作品を残し達者なキーボード・プレイも聞かせている。本作での印象派の影響を想わす静的ピアノ・プレイは彼に依るものとおもわれる。フィルは最も出来の良いA①⑤のストリング・アレンジを担当。そしてB①で顕著に聞かれるメロディアスな歌からギターと共に的確な動的オルガン・プレイをする。このグループ、実体はこの2人を中心としたツイン・キーボード・バンドといえる。両者の牧歌的志向とテクニカルで整然としたポップ志向を感じる作品である。(吉野)

BLACK WIDOW



Ⅲ

CBS S 64562

'71 年

Kip Trevor:lead-vo,g,per
Geoff Griffith:b,vo
John Culley:g,vo
Zoot Taylor:org,p
Romeo Challenger:ds,per
Clive Jones:sax,fl

Produce:Malcolm Koss

『Born To Be Wild』を仲々のアレンジで聞かせたPESKY GEE (PYE NPL 18293)を前身とするBLACK WIDOW は、当時BLACK SABBATH、BLACK AUGUST と並んで三大黒魔術バンドと呼ばれていた。デビュー作『Sacrifice』そしてジャズ・ロック寄りのサウンドに変化した「Same」(セカンド)に続くのが、本作である。彼等は作品を発表する度に音楽的に向上しており、本作ではジャケットは相変わらずだが初期の黒魔術的要素は全くない。内容はサックス、フルート、オルガンを効果的に使った典型的ブリティッシュ・サウンド。 (吉野)

BLODWIN PIG



Ahead Rings Out

Island ILPS 9101

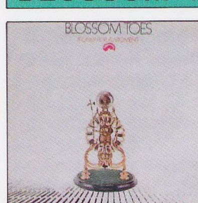
'69 年

Mick Abrahams:g,vo,7-str-slide-g
Jack Lancaster:fl,vln,t-b&s-sax
Andy Pyle:el-b,6-str-b
Ron Berg:ds

Produce:Andy Johns

元JETHRO TULL のミック・エイブラハム(g)がPIBLOKTO!などに参加していたジャック・ランカスター (sax 他)、アンディ・パイル(b)らと結成したバンドで、ブルーズ・ベースのロックにジャズのエッセンスを加えたアグレッシヴなサウンドを持つ。本1st アルバムではスタジオ・ライヴ的な押しの強いリフを持ったナンバーが中心で、雰囲気的にはKEEF HARTLEY BAND などに近いが、A④のように構成、展開にひねりを持たせたプログレ調の曲もある。全体的にノリが強烈すぎてデリケートなニュアンスという点に欠けているが……。 (深民)

BLOSSOM TOES



If Only For A Moment

Marmalade608010

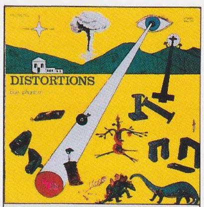
'69 年

Brian Godding:g,p,org,vo
Jim Cregan:g
"Big"Brian Belshaw:b
Barry Reeves:ds

Produce:Giorgio Gomelsky

ポリドール傘下のマーマレイドは13枚のジャズ・ロック系作品をリリース。'68年に結成されたこのグループの本作は2作目。ほとんどの曲をリーダー格のブライアンが作曲。インストゥルメンタル部分にサイケ・ジャズ・ロック感覚として彼の個性が表れている。彼は後にMAGMA、CENTIPEDE 等に参加。又ジュリー・ドリスコール、ボブ・ダウンズ、ケヴィン・コイン、ゲイリー・グリッターとも活動。泥くさい曲を提供しているジムはSTUD を結成。ゲストのショーン・フィリップスはソロ・デビューする。スウェーデンよりライヴ盤がリリースされている。(吉野)

BLUE PHANTOM



Distortions

Kaleidoscope KAL 101

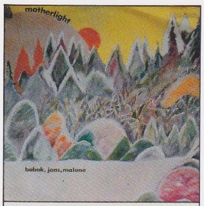
'72年

personnel unknown

Produce:?

BLUE PHANTOM唯一のアルバム。全編がタイトルの示すとおり、ディストーションのかかったギター・ワークを中心としたインストゥルメンタルによって構成されている。アルバムの意図としては、ジャケット（ダさいが…）に示された様な事柄について音で表現しているのだが、曲自体はIRON BUTTERFLY風のリフありSTOOGES風のリフありといった一度耳にした様なフレーズで印象が薄い。またA⑤、B⑤の様なTANGERINE DREAM風の電子音楽も含むものの全体的にギタリストの趣味的作品と思われる。（宇藤）

BOBAK JONS MALONE



Motherlight

MorganBlue Town BT-5003

'69年

Mike Bobak:g
Wilson Malone:ds,key

Engineer:Andrew Jons

ORANGE BICYCLEのキーボード奏者、ウィルスン・マローンが、モーガン・スタジオのエンジニア2人と作り上げたアルバム。サイケ／プログレ色のあるポップ・サウンドだが、B面ラストで全収録曲がメドレーで飛び出すなど、トータル・アルバム的に作られている。プログレ・ファンにはB①がベストか。その後、W.マローンリッチー・フランシス（BIGSLEEPのベーシスト）のソロ・アルバムや、INTER GALACTIC TOURING BANDで顔を見せるほか、ソロ・アルバムも2枚ある。また、IRON MAIDENのデビュー・アルバムではプロデューサーとなっていた。（中藤）

BODY



The Body Album

Recession RR 01

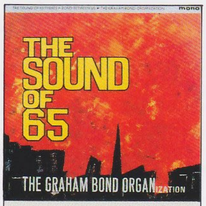
'81年

Gary Alliston:per,vo
Tony Alliston:lead-g,fl,vo
Ronny Nelson:b,vo
John Bleasdale:key

Produce:BODY

'81年、リヴァプールでの幻の一作。ポンプ・ロックともヘヴィ・メタルともニュー・ウェイヴとも異質な、メイン・ストリームからはずれた真の意味で自主製作だ。'70年代イディオムが濃厚なのは、SF仕立てのトータル・コンセプトとサイケデリック感覚（HAWKS流スペイシー志向）ともシンフォニック色ともつかないサウンド傾向に負う。比較的安定したテクニックを持ち、ブルース調の泣きのギター・フレーズ、S E、スペイシー感覚のキーボードが、曲変化をつける。A面はハード・ロック中にこれらを混ぜ合わせ、B①ではそのものずばりとなる。アシッド感覚有り。（松本）

THE GRAHAM BOND ORGANIZATION



The Sound Of 65

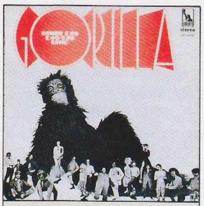
Columbia33SX1711

'65年

Graham Bond
Dick Heckstall Smith
Ginger Baker
Jack Bruce

モダン・ジャズのようなジャケット・デザイン。そこに包まれた音は、紛れもなく、英国R&Bシーンが多様化していくその前夜のドキュメントである。後に黒魔術に傾倒し、遂には命まで落とすグラハム・ボンドだが、この頃の彼の音楽への情熱は素晴らしいものがある。彼のオルガンを中心としたカルテットの演奏は、時代を超え現在聴いても熱い。彼は、初めてメロトロンを使用したり、オルガンの音をレズリー・スピーカーに通したりと革新的な音楽家でもあった。このユニットなくしてCREAMもCOLOSSEUMも生まれなかったと断言出来る程、重要なバンドだ。（後藤）

BONZO DOG DOO DAH BAND



Gorilla

Liberty LBS83056

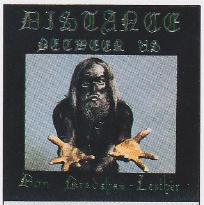
'67年

Sam Spoons:rhythm pole,str-b,spoons,per
Vivian Stanshall:vo,tp,euphonium,tuba,ukelele
Vernon Dudley Bohay-Nowell:b,banjo,sax
Neil Innes:p,hcd,g
"legs" Larry Smith:ds,tuba,tap dancing
Roger Ruskin Spear:electrical props
Rodney Slater:sax,cla,tb

Produce:Gerry Bron

'68年「恋のスペースマン」（プロデュースはP・マッカートニー）のヒットで知られるBONZO DOG BANDの、本作はドゥー・ダー・バンド名義のデビュー作。ニール・イネス、ヴィヴィアン・スタンシャルを中心にした7人編成のビートルズ風ポップ・サイケデリック感覚を持ったバンド。2人の管楽器奏者と共にゴッタ煮の演劇的演奏を繰り広げる名盤。当時のサイケデリック全盛時代を反映した12ページのブックレットが付されいる。その後リバティーより3枚リリースし、'72年にUAレーベルよりアンディー・ロバーツ等を迎え再編アルバムがリリースされた。（吉野）

DON BRADSHAM-LEATHER



Distance Between Us

Distance DIST100,76,77

'72年

Don Bradsham:p,org,mellotron,g,vo,per

アーサー・ブラウンを想わせる風貌をした彼の作品は、2枚組全3曲のインストゥルメンタル・ナンバーで占められている。ジャズの要素は全くなく、クラシック・コンプレックス丸出しの大仰なピアノ・ソロと狂的なパーカッションの渦を中心に、全編メロトロンが効果的に使われている。C面ではメロトロンの特性を活かした実験的な試みを聴くことができる。本作は自主製作であるため録音やバランスがラフであるが、KING CRIMSONの「Earthbound」のようにアナログでしか味わえない臨場感がある。本作リリース後のブラッドショウの活動は全く不明である。（吉野）

BRAINCHILD



Healing Of The Lunatic Owl

A&M AMLS 979

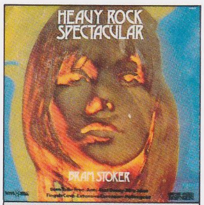
'70年

Harvey Coles:b,vo
Bill Edwards:vo,g
Dave Muller:ds
Chris Jennings:org,p
Brian Wilshaw:sax,fl
Lloyd Williams:tp
Ian Goss:tb
Pat Strachan:tb

Produce:Lennie Wright

合成写真による奇妙なジャケットに包まれたBRAINCHILD唯一のアルバム。CHICAGOと同じ編成のブラス・ロックである。出発点は、明らかにBS&T、CHICAGOでありながらも、彼らの目指すところはオリジナリティの確立にあった。バンド自体のダイナミズムは前述のグループにはかなわないが、「狂ったフクロウの治療」という原題からイメージされる神秘性、演奏の深味には確かに独自なものがあった。低域をあくまでベースに求め、ブラスを含め全体に高域を強調したアレンジには若さもあるが、メロディアスなブリティッシュ・ロックとしての価値は高い。（後藤）

BRAM STOKER



Heavy Rock Spectacular

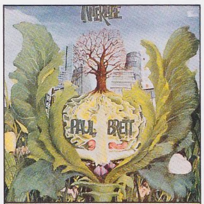
Windmill WMD 117

'72年

personnel unknown

イギリスは国土の狭さに加えてロンドンへの集中傾向が強く、'70年前後には、これが功じて一大シーンをつくり上げるに至った。正確には乱脈を極めたというべきかもしれない。未確認セッション、覆面参加、お倉入りアルバム、謎のアーティストなど、この時期の面白い話は山積みだ。唯一のアルバムを残す以外、まったく謎に包まれているこのグループも例にもれない。ずばりNICEとCRESSIDAの1作目を足したような、クラシカル・センスある強力なハモンド・オルガン・ロックの世界をめくるめく展開。全編に渡ってヴォルテージが保たれている。隠れた名作。（松本）

PAUL BRETT



Interlife

RCA PL 25149
'78 年

Paul Brett:g
with
Derek Austin:key
Mel Collins:sax
Steve Gregory:sax
Delisle Harper:b
David Griffiths:str-b
Rod Coombes:ds

Produce:Tom Newman

元々フォーク・シンガー／ギタリストとして知られていたポール・ブレットが、インストゥルメンタルの世界へ足を踏み入れるのは12弦ギターのみで地球の誕生と再生を綴ったトータル作品「Earth Birth」('77年)あたりからだろうか。その第２部と言うべき本作では、プロデュースにトム・ニューマンを迎え、多分にマイク・オールドフィールドを想起させるような生命への讃美に満ちた演奏を繰り広げている。M・コリンズらゲスト陣の好演もあるが、中心はエレクトリックも含むそのギター・プレイだろう。初期のマイクと比べ、よりカラフルで解放感のある好作品。（高山）

THE CRAZY WORLD OF ARTHUR BROWN



The Crazy World Of Arthur Brown

Track 613 005
'68 年

Arthur Brown:vo
Vincent Crane:key
Carl Palmer:ds
Nicholas Greenwood:b

Produce:Kit Lambert

'66～'67年当時、サイケデリック・ムーヴメントの影響を受けたバンドは、ステージにおいて音だけでなく、視覚的効果を考え、ライトやスライドを使い始める。アーサーは更に奇抜なメイクに、パフォーマンス的ステージングを繰り広げ、一気にアンダーグラウンド界の大物になる。本作は、アーサーの様々な表情を持つヴォーカル・スタイル（どれも堂に入っている）を聞くことができる。又弦やブラスのアレンジを行い、ヘヴィなオルガンを弾くV・クレーン（A. ROOSTER 結成）の好サポート等、発表年度を考えると歴史的名盤といえる。（吉野）

PETE BROWN AND BATTERED ORNAMENTS



A Meal You Can Shake Hands With In The Dark

Harvest SHVL 752
'69 年

Pete Brown:vo,tp
Nisar Ahned Khan:s-ax
Chris Spedding:g
Charlie Hart:org
Pete Bailey:per
Butch Potter:b
Rob Tait:ds
Dick Heckstall-Smith:sax

Produce:Andrew King, Dick Heckstall-Smith

本作の主人公ピート・ブラウンは、'60年代ロック・シーンに詩人として関わってきた。詩人でありながらも'64年頃からバンド活動を開始し、'69年１枚のシングルを発表したあと本作を発表する。メンバーはクリス・スペディングをはじめとするジャズ・ロック系のミュージシャンが参加し全く素晴らしい音楽を展開している。CREAMで有名なA③は、詩人ピートの面目躍如といったところだ。ピートはその後 PIBLOKTO！にグループを移行させハーヴェストから２枚のオリジナル・アルバムを制作、'80年代も活動を続ける。BATTERED ORNAMENTS はクリスを中心に２作目がある。（後藤）

PETE BROWN&PIBLOKTO!



Thousands On A Raft

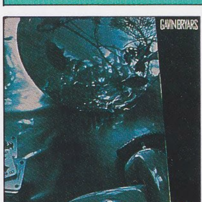
Harvest SHVL 782
'70 年

Pete Brown:vo,talking-ds,conga
Dave Thompson:key,sax,mtn,per
Steve Glover:b,per
Jim Mullen:g,b,per
Rob Tait:ds,per

Produce:Pete Brown & PIBLOKTO!

64年に結成され長い歴史を誇った BATTERED ORNAMENTS から離れピート・ブラウンが新たに結成したのがこの PIBLOKTO だった。ジャズ的になり出した BATTERED ORNAMENTS に比べ、PIBLOKTO は雑多な音楽の影響が混じり合ったロック、フォーク、ジャズのあらゆる要素をフォローするユニークな音楽性を見せた。Harvest に残した２枚の中でもよりレアな本作はJ・マレン(g)、D・トンプソン（key、sax）の好演がさえる名作に仕上がったが、発表時にはすでにメンバーが元 BIG SLEEP のP・ライアンを中心にしたものに変わっていた。（深民）

GAVIN BRYARS



Hommages

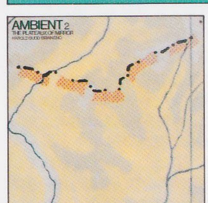
Bel;Crepuscule TWI 027
'81 年

Gavin Bryars:p
with
Dave Smith:p,mba,orchestral-bells
Andrew Bilham:vib
Ronald Reah:vib,p
Andrew Renshaw:cymb-al,gong,tam
John White:tuba
Nigel Shipway:vib,m-ba
Marie Wilson:mba

Produce:Wim Mertens

'75年、イーノの設立したオブスキュア・レーベルに残した「タイタニック号の沈没」と共に、彼の素性を明かす作品。両作品を通じて、彼がジャズ、現代音楽を吸収した上でのインテリジェントな叙情性と美的感覚を備えた作曲家であることが分かる。ビル・エヴァンスに捧げられた本作は、うつろうような響きをしたピアノとヴィブラフォーンを中心に、見事な繊細表現がされている。まさに感性の裡という言葉がぴったりだ。単なる感覚志向にとどまらず、ジャズにも現代音楽にもとどまらず、リスナーの内面に忍び込む。彼の作品には、いつもどこか感傷的な響きがある。（松本）

HAROLD BUDD／BRIAN ENO



The Plateaux Of The Mirror

Polydor EGAMB 002
'80 年

Harold Budd:ac&el-p
Brian Eno:other instruments,treatments

Produce:Brian Eno

ハロルド・バッドはアメリカで活動している非常にユニークなピアニストだ。現代音楽のフィールドから現れた音楽家だが、ブライアン・イーノに見出され広く知られるようになった。これはおそらく相当のセールスを上げた記念碑的作品だ。淡々とした、静的で一音一音が聴き手の胸に染み入るようなバッドのピアノと、その背景に靄のように薄く広がるイーノの音響処理が得難いマッチングを見せ、ひたすら聴き手の耳を浄化する。その後もふたりのコラボレーションは続いているほか、バッドは何枚ものソロ作品や COCTEAU TWINS との共作も手がけている。（坂本）

BYZANTIUM



Seasons Changing

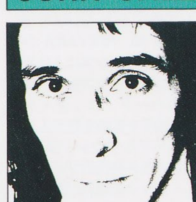
A&M AMLH68163
'73 年

Robin Lamble:b,g,vo
Chas Jankel:g,p,org
Mick Barakan:g,vo
Jamie Rubinstein:g,vo,b
Stevie Corduner:ds,shaker,maracas
with
Frank Riccotti:congas,cabassa
B.J.Cole:steel-g
David Hentschel,Robin Sylvester:syn

Produce:Stuart Taylor & Robin Sylvester

その昔、ブリティッシュ廃盤レコードのベスト10に入る１枚だった彼らのセカンド・アルバム。ファーストは自主制作でリリースされた荒削りなスタジオ・ライヴ。サードは国内盤もリリースされたが魅力に欠ける内容だった。さて、問題の４面開きの本作だが、A面ではブリティッシュ特有のポップ感覚（あくまでも'70年代初期の）の曲が収録され、B面では四季をテーマにした組曲が収録されている。組曲と言ってもシンフォニックなものとは違って、フォーク・タッチの導入部から流れるように展開し盛り上がっていくと言う正に"移ろふ季節"そのものである。(Luna)

JOHN CALE



Fear

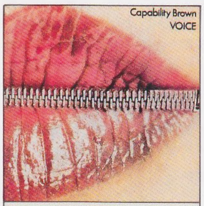
Island ILPS 9301
'74 年

John Cale:vo,key
Archie Leggatt:b
Phil Manzanera:g
Fred Smith:ds
Brian Eno:?
Liza Strike,Judy Nylon:vo

Produce:?

彼はジョン・ケージに師事の為に渡米。その後、ルー・リードと出会う。アンディー・ウォーホールの援助の元、'66年 VELVET UNDERGROUND を結成。２作目迄参加。後の作品はルー色が強くなるが、逆にジョンの重要性が分る。ソロ活動に入り、テリー・ライリー共作等発表。本作は帰英しアイランド移籍後の初作品。彼の現代音楽の素養が覗える屈折したポップ作品。同時期の「JUNE、1、1974」に収録された曲にもその傾向が表れている。プロデューサー（NICO、STOOGES）として、又ニュー・ウェイヴ・シーンでも活躍する。（吉野）

CAPABILITY BROWN



Voice

Charisma CAS1068

'73 年

VJ:VJCP-2546

Tony Ferguson:vo,ac-g,el-g,b,fl
Roger Willis:vo,ds,p
Dave Nevin:vo,ac & el-g,lute,balalaika,key
Joe Williams:vo,per

Produce:Dave Hitchcock

彼らは'72年にカリズマ・レーベルからファースト・アルバム「From Scratch」をリリース。いわゆる普通のブリティッシュ・ロックだったが、本作ではアレンジが多様化し、プログレッシヴな内容となった。特にB面の組曲ではフルート、アコースティック・ギターによる叙情的なパートや、リュート、リコーダーによる宮廷音楽的アレンジ、メロトロンを導入した劇的な展開等、申し分ない。又、アルバム・タイトル通り QUEEN 張りのコーラス・ワークも見事だ。惜しくも2作で解散してしまったが、本作のジャケットのチャックが本物であってほしかった。(Luna)

CARMEN



Dancing On A Cold Wind

Regal Zonophone SLRZ 1040

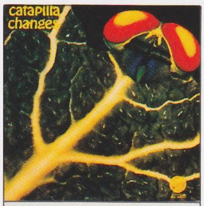
'75 年

David Allen:g,vo
Angela Allen:key,vo
Robert Amaral:vo,per
John Glascock:b.vo
Paul Fenton:ds

Produce:Tony Visconti

イタリア人、スペイン人、イギリス人など様々な人種によって結成された CARMEN は、そのバンド名通りフラメンコのリズムとスパニッシュ・ギターが独特の雰囲気をかもし出しているフラメンコ・ロック・バンド。A①ではスペイン語で歌われていたりと、紅一点アンジェラのヴォーカルも味を出している。また、'73年発表のファースト「Fandango In Space」、2作目にあたる本作品、'76年発表の3作目「The Gypsies」と3作ともメロトロンを大幅にフィーチャーしており音の緩和にもなっている。サードではマンドリン等も導入しているが同時にブリティッシュ色も強まった好作品。(林た)

CATAPILLA



Changes

Vertigo 6360 074

'72 年

Graham Wilson:g
Ralf Robinson:org,e-i-p
Carl Wassard:b
Brian Hanson:ds
Robert Calvert:sax
Anna Meek:vo

Produce:Colin Caldwell

CATAPILLA の2作目。キーボードの導入など、大幅なメンバー・チェンジの影響か前作とはやや印象の異なる仕上がりである。キーボード自体はさ程目立つ働きをしている訳ではないが、粗削りで攻撃的な演奏が影を潜め、よりきめ細かな音処理が施されている。女性ヴォーカリスト、アンナの歌声にもたっぷりとエコーが掛かり陶酔的。カルヴァートの吹くスペイシーなサックスと共に醸し出す幾分虚ろな雰囲気が最大の魅力か。全体的な傾向としては、サックスの多用にも拘らずジャズよりもロック的要素の比重が高いと言える。なお、アンナは直後に JULIAN JAY SAVARINに加入。(江田)

CIRCUS



Circus

Transatlantic TRA207

'69 年

Mel Collins:fl,t-sax
Ian Jelfs:g,vo
Kirk Riddle:b,g
Chris Burrows:ds

Produce:Ray Singer

KING CRIMSON のメンバーとして、また、セッション・ミュージシャンとしても名高いメル・コリンズを擁した CIRCUS の唯一のアルバム。ジャズ及びブルーズの要素を取り入れながらもポップで分かり易い演奏が展開されている。聴き手の興味がコリンズのみに集中しがちであるが、ギターを始めとして他のメンバーも好プレイを披露しており、バンドとしてのまとまりがある。今となっては古典的なサウンドであるが、最初期の JETHRO TULL や IGGINBOTTOM の方法論に共通したものを持っており、当時のシーンにおいては極めて斬新な作品であった。(賀川)

CIRKUS



One

RCB 1

'71 年

Edi:ERC 28028

Dog:g
Stu McDade:ds,back-vo
Derek G. Miller:org,p,mtn
John Taylor:b
Paul Robson:vo

Produce:Ron Richards

発表年度を始め本作品の前後の活動、オリジナル・ポスター付云々など昔から謎だらけの"K"のサーカスである。BEATLES より脈々と受け継がれた極上のポップ・センスを、壮大なキーボード&オーケストラにより包み込んだ本作は、正しく第1級のブリティッシュ・ロックとして今認識されている。本作の誕生に際しオーケストラの指揮とアレンジを担当したトニー・ハイマスなる人物の存在と力量は重要であったと思われる。彼らは本作以外に3曲入りの EP を Guardian なるレーベルより発表している。内容は LP 同様秀曲ぞろいだが、オーケストラが無い分小粒な印象を受ける。(城元)

CLASSICAL HEAD



Classical Head

Charisma CAS1008

'70 年

Joseph Eger:arr,cond.
THE SINFONIA OF LONDON
THE AMBROSIAN SINGERS
John Neville:word spoken

Produce:Joseph Eger

NICE のフォース・アルバム「Five Bridges」でキース・エマーソンらと共演した指揮者ジョセフ・イーガーのソロ・アルバム的作品。演奏しているオーケストラも、上記の作品同様、ザ・シンフォニア・オブ・ロンドンである。ベルリオーズ、プロコフィエフ、ストラヴィンスキーらの組曲の一部を取り出して手を加え、アレンジし直した後、それらを繋げてトータル作品に仕上げている。朗読を加え、曲を単純にして分り易いものにしているが、演奏自体はオーソドックスなものであり、音楽的な面白味に欠ける。イーガーは一体何を意図して本作品を作ったのであろうか。(賀川)

CLEAR BLUE SKY



Play It Loud (Journey To The Inside Of The Sun)

Vertigo 6360 013

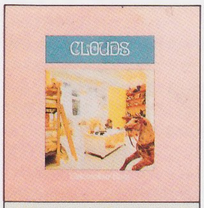
'70 年

John Simms:g,vo,org,fl
Mark Sheather:b
Ken White:ds

Produce:Patrick Campbell-Lyons

ロジャー・ディーンの素晴らしいジャケットに包まれたアルバムで世に出た CLEAR BLUE SKY は、NIRVANA のパトリック・リオンズにより見い出されたエセックス出身、弱冠18歳のハード・ロック・トリオ。変拍子や即興を取り入れたそのハードなサウンドは'70年代初期の良き時代のブリティッシュ・ロックの魅力が感じられる。一時期、ブートレッグが出廻ったこのアルバム、最初はジャケもタイトルも違っていた。ヴァーティゴより、2nd も予定されていたが結局リリースされなかったのは誠に残念。(向井)

CLOUDS



Watercolour Days

Chrysalis ILPS9151

'71 年

Billy Ritchie:p,org,hcd,vo
Ian Ellis:b,vo
Harry Hughes:ds

Produce:Terry Ellis, John Burns

'69年にデビューした、ポップ・ロック・キーボード・トリオ。2作目である本作は、当時多くのポップ・バンドが様々なスタイルを網羅させた作品を残したように、フォーク・タッチの曲や、ヘヴィなリフの曲、後半盛り上がるバラード、ハープシコードによるクラシカルな曲等が収録されている。同レーベル、同編成で1年前に ELP がデビューしているが、インストゥルメンタル部分や攻撃的な面は少ない。前作同様デヴィッド・パーマーのオーケストレーションを加えた歌物バンドの印象が強い。全編ハモンドを多用しており、部分的に NICE を想わせる。(吉野)

CMU



Space Cabaret

Transatlantic TRA259
'72 年

Larraine Odell:vo
Richard Joseph:vo,ac-g
Ian Hamlett:el-g
Leary Hasson:key
Steve Cook:b
Roger Odell:ds

Produce:Fritz Fryer

デビュウ作では作曲面でもオデル夫妻を中心としたグループであった。本作では落着いた声を聴かせる新加入のリチャードがA①〜④の組曲等も作曲し中心人物となっている。又後にGILGAMESH 〜 MIRAGE 〜 SOFT MACHINE で活動をするスティーヴも参加。多彩なキーボード・プレイを中心に、安定したリズム・セクションによるジャズ・ロック的サウンド。曲はアシッド・フォークの傾向が強い。そしてエフェクトやエコーのスタジオ処理が施され、作品全体に浮遊感がある。年季の入りを感じるロレーヌのヴォイスが更にその傾向を強めている。（吉野）

COLOSSEUM II



Wardance

MCA MCF 2817
'77 年
WP:18P2-2757

Gary Moore:g,vo
Don Airey:key
John Mole:b
Jon Hiseman:ds,per

Produce:Martin Levan,
Jon Hiseman

ゲイリー・ムーア、ドン・エイリー、ニール・マレイといった有名人が在籍したことでHMファンにも広く知られるCOLOSSEUM II。しかしその音楽はむしろチック・コリアのRETURN TO FOREVER やジョン・マクラフリンのMAHAVISHNU ORCHESTRA に対するブリティッシュ・ロックからの解答と言った方が正確かも知れない。本作は彼等の３作目にして最後のアルバムであり、最も重量感とドライヴ感に溢れる白熱したプレイを聴くことができる。特にB②でのディメオラに迫るギターとドラムスは圧巻。ジョン・ハイズマンがTEMPEST 時代より培った理想の到達点がここにある。（高山）

COMUS



First Utterance

Dawn DNLS 3019
'71 年
Te:22DN-69

Roger Wotton:g,vo
Glen Goring:g,vo
Andy Hellaby:b
Colin Person:vin,vla
Rob Young:oboe,fl,per
Bobbie Watson:vo,per

Produce:Barry Murray

'60年代後半から'70年代前半のブリティッシュ・シーンは最も個性豊かな時期であり数多くの良質な作品が生まれた。COMUS もこのような時期に活動していたグループで、その音楽性は特筆すべきものがある。トラッド、フォークの域を遙かに超え、クラシック、前衛、民族音楽などを巧みに取り入れ絡み合う楽曲は、まるで仮面劇を演じるかのようだ。不安を誘うハーモニー、美と狂気の両面を表すヴァイオリン、フルート、ギター等のアコースティック楽器、時としてパラノイアと化すヴォーカルは恐ろしいほど個性的である。メンバーチェンジ後、'74年にセカンドを発表する。（村上）

CONTINUUM



Autumn Grass

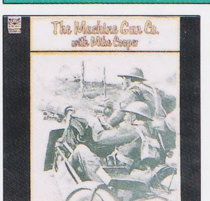
RCA SF 8196
'71 年

Tim Rice:org,p
Peter Billam:b,g
Harvey Troupe:ds

Produce:Time Satchell

これは少々風変わりなアルバム。アコースティックなおもむきを全面に出したクラシカル・ロック調の作品ながら、ジャズ色の濃いアレンジがなされたサウンド。本作は彼らの２作目で、メンバーはヨエル・シュワルツなる人物以外全員交代しており、前作に比べロック色が強くなっている。クラシックのモチーフや技法を用いながらも、独自の世界を目指していたバンドの様に思われるが、全体から受ける印象は非常に地味なものだ。おだやかな展開やラフな演奏は、その出発点がロックではない事を推測させるが、B面に見られる様な実験性は、プログレッシヴ・ロックのサンプルとして受け取る事が出来る。（沢田）

MIKE COOPER



The Machine Gun Co. With Mike Cooper

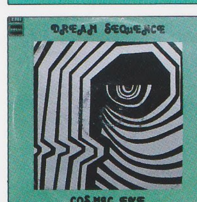
Dawn DNLS 3031
'72 年

Mike Cooper:vo,g
Geoff Hawkins:sax,melodia.reed pipe
Alan Cook:el-p
Les Calvert:b
Tim Richardson:per

Produce:Peter Eden

彼は'60年代のブリティッシュ・ブルーズ・ムーヴメントに影響されたシンガー・ソングライターである。ドーンからの１〜２作目はカントリー・ブルーズのスタイルを追求している。３作目では当時多くのブルーズ・バンドが他の要素も取り入れたように、ハリー・ミラー、ロイ・バビントン等を迎えジャズ色の濃い内容となる。４作目である本作では、ジャズ系ミュージシャンとパーマネントなグループを結成する。彼の物語性のある詩的世界と、ジャズ・ロック風演奏によるイマジネイティヴな世界を共存させるスタイルを取っている為、各曲の収録時間は長くなっている。（吉野）

COSMIC EYE



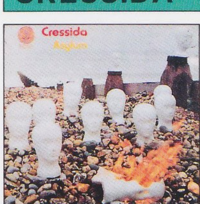
Dream Sequence

Regal Zonophone SLRZ1030
'72 年

Ana Da Silva:g
Viram Jasani:sitar
John Mayer:vln
Ray Swinfield:fl
Derek Grossmith:a-fl
C. Taylor:b-fl
Alan Branscombe:per,sax
Tony Campo:el-b
Kesh Sathie:tabla
D. Wright:ds

'70年代初期の東洋志向という点では、無名ながら典型的な単発作。タブラ奏者が後にJ・RENBOURN GROUP に参加したり、シタール奏者がL・ZEPPELIN のデビュウ作にゲスト参加していたりと、各人、本作を前後して主にフォーク系ミュージシャンのアルバムに顔を出しているところを見ると、企画物の性格が強い。タブラとシタールを多用して、インド音楽とジャズが混り合ったようなメディテイショナルなサウンドだ。アングラ色というよりは、THIRD EAR BAND やドイツのFLUTE & VOICE に通じるような軽やかさがある。当時の音楽事情の一端をのぞかせるには十分。（松本）

CRESSIDA



Asylum

Vertigo 6360 035
'71 年
Ph:PHCR-2004

Angus Cullen:vo,ac-g
John Culley:g
Peter Jennings:org,p
Kevin McCarthy:b
Iain Clark:ds
with
Harold McNair:fl

Produce:Ossie Byrne

CRESSIDA の２作目。オルガン・シンフォニックの手本とも言うべき音作りが多くのファンの支持を得ている。オーケストラの効果的な導入がよりドラマチックな展開を可能にし、オルガンだけでは現出不能な叙情性をも十分に醸し出している。但し、柱となるオルガンやギター等、他の音はかなり渋いもので英国ロック伝統の重みも十分に兼ね備えていると言える。時に顔を出すジャズ風のピアノもまた印象的。ヴォーカルのカレンがほぼ全曲を書上げた前作はポップな小品集だったが本作ではキーボードのピーターが曲作りに参画、名曲と評判のA②等２曲でペンを執っている。（江田）

CZAR



Czar

Fontana 6309 009
'70 年

Bob Hodges:mtn,p,org,celeste,hcd,vo
Del Gough:ds
Paul Kendrick:b,ac-g,vo
Mike Ware:g,ac-g,vo
Dave and Roger:noises

Produce:?

'90年代を迎えた現在、20年前のブリティッシュ・シーンは諸氏の努力もあり相対的解釈ができるようになった。当時は'60年代の混沌期からブリティッシュ独自のスタイルが生み出された時期である。MOVE、ARGENT の後期 BEATLES 経由のモダン・ポップ・メロディーの確立。DEVIANTS、HAWKWIND のサイケデリック・アンダーグラウンド感覚の定着。BLACK SABBATH、URIAH HEEP の魔術的ヘヴィ・サウンドの表出。本作はそれらの流れを融合させた成功作。更にプログレッシヴの要素を加えた、当時のシーンを代表する作品。（吉野）

DEAR MR. TIME



Grandfather

A Square SQA101
'70年

Dave Sewell:b,back-vo
Chris baker:lead-g, ac-g,vo
John Clements:per,ds
Jim Sturgeon:sax,fl, ac-g
Barry Everitt:org,p, hcd

Produce:Mike Weston

EMI系のマイナー・レーベルSquareから発表されたDEAR MR. TIME唯一のアルバム、「Grand Father」。ある男の生涯をコンセプトとしたトータル・アルバムである。管楽器を含む5人編成のグループ。時にヘヴィに、時に哀愁を帯びたサウンドはマイナーな作品にしておくにはあまりに惜しい作品である。演奏力で聴かせるよりもトータルなサウンドで聴かせるタイプのグループで、そういう意味ではFANTASYあたりと同等の評価を与えても良い作品である。アコースティック・ギター、フルート、メロトロンによるナンバーはイギリスの哀愁を見事に表現している。(三橋)

DEEP FEELING



Deep Feeling

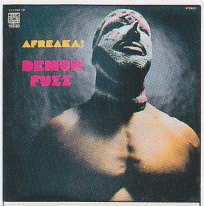
DJM DJLPS 419
'71年

John Swail:vo
David Green:el-b, 4 & 8 str-b,fl,vo
Derek Elson:org,hcd, p,vo
Martin Jenner:el & ac-g,vo
Graham Jarvis:ds,per, vo

Produce:Des Champ & Roger Easterby

'71年にパイ傘下のDJMレコードからリリースされたDEEP FEELINGの唯一のアルバム。BEGGARS OPERAも演っている『Classical Gas』を含む本作は、クラシカルなハモンド・オルガンを主体に展開されるが、複雑なコーラス・ワークを取り入れたA①、ハード・ロック風リフのB③等、一辺倒な内容ではない。特に、変形ジャケットに不気味に描かれているギロチンをタイトルに持つB①は、畳み掛ける展開と、運命の悲しみに満ちた中間部のハモンドの響きが素晴らしく、クラシカル・ロックの名曲としてここに挙げておきたい。(Luna)

DEMON FUZZ



Afreaka!

Dawn DNLS 3013
'71年

Ray Rhoden:org,p
Sleepy Jack Joseph:b
Smokey Adams:vo
Steve John:ds
W.Raphael Joseph:g
Clarance Brooms-Crosdale:tb
Paddy Corea:fl,sax, conga
Ayinde Folarin:per

Produce:Barry Murray

'70年は、イギリスからデビューした黒人グループが多かった。ASSAGAI、OSIBISA等、これらはアフロ・ロックとも呼ばれ、その発端となったのは、GINGER BAKER'S AIRFORCE辺りに違いない。どのグループにも共通しているのは、ジャズ感覚を取り入れたロックであることと、パーカッションを主体としたリズムを活かした演奏主体の音楽であった。このDEMON FUZZも同一線上にある。Dawnレーベルには、もうひとつNOIRという同傾向のバンドもあるが、どちらも精神性を重んじた聞くべき部分の多い作品となっている。偏見を捨てて多くのリスナーに聞いて欲しい。(後藤)

THE DEVIANTS



Ptooff!

Underground Impresarios IMPS-1
'67年

Sid Bishop:g,sitar
Mick Farren:vo,p
Russ Hunter:ds,vo
Cord Ress:b,g,vo

Produce:?

億万長者からせしめた700ポンドを元手にでっち上げられた希代の怪作。リーダー格のファレンのファンジン気質からくる熱気と、彼の分裂症的嗜好がモロにでている。A面の出だしで先ず腰を折られ、ハード・ロックから、トリップそのものといったアシッド・フォークまで、続々とでてくるアイデアの豊富さというか、脈絡のなさは聴く者を一気にDEVIANTSの世界に引き込んでしまう。格別に演奏が上手いわけではないが、タイミングや切り替しの妙と、聴き手の期待をあっさり破る所等は見事で、逆の意味で、聴き手の胸に迫る白熱的な凄さを誇っている。(法水)

DR. Z



Three Parts To My Soul

Vertigo 6360 048
'71年

Keith Keyes:p,hcd,org,vo
Bob Watkins:ds,per
Rob Watson:b

Produce:Keith Keyes

音楽と魔術は重要な公式を成立させる。特に'70年代初期にプログレッシヴなミュージシャンは、音楽に魔術的な要素を持ち込み幻想的なヴィジョンを引き出す事に成功しているが、このDr. Zもその一つ。ハープシコードをメインにし、曲想も暗黒の中世ヨーロッパの重苦しいロマネスク美を思わせるものだ。クラシカルかつアヴァンギャルドに展開する様は、邪悪なるものへの讃美とも言うべき"謎の名盤"にふさわしい。ウェールズ北部で教授を営むK・キーズがグループの鍵を握り、'70年、シングル「Lady Ladybird」(Fontana 6007 023)でデビュー。ライヴを行わなかった謎のグループ。(Luna)

DRUID



Toward The Sun

EMI EMC 3081
'75年

Neil Brewer:b
Andrew McCrorie-Shand:key
Cedric Sharpley:ds
Dane:g,vo

Produce:Bob Harris

メンバー個々のサウンド・カラーの類似性からYESタイプのバンドとして語られる事の多いこのDRUIDだが、バンド全体のテクニックは平均的で、明るいソフィスティケイト・タイプのシンフォニック・ロックが彼らの持ち味と言える。いずれにせよオリジナリティの希薄さ故A級の作品として評価され得なかった彼らであるが、裏腹に「絵に描いた様なブリティッシュ・シンフォニック」として捨て難い魅力を感ずる向きも多いのではないか。以後翌'76年にセカンド「Fluid Druid」を発表。演奏力には成長の跡がうかがえるものの全体のヴォルテイジは半歩後退した出来となっている。(城元)

SIMON DUPREE & THE BIG SOUND



Without Reservations

Parlophone PCS 7029
'67年

Derek Shulman:vo
Phil Shulman:sax
Ray Shulman:b,g,vo
Peter O'Flaherty:b
Geary Kenworthy:?
Tony Ransley:ds
Eric Hine:?
Martin Smith:ds

Produce:Dave Paramor

複雑な曲作りとアンサンブルで知られるマルチ・プレイヤー集団、GENTLE GIANT。その中心となるシャルマン3兄弟が、GG以前に参加していたのがこのバンド。(サイモン・デュプリーはデレク・シャルマンの芸名)しかし、彼等の唯一のアルバムである本作では、これが後のGGになるとは信じられない。ではつまらないのかというと、決してそんなことはなく、ポップでありながら、何かこうヘンなブリティッシュ・ロックなのである。なお、英SEE FOR MILESから出ている編集盤「Kites」には、メロトロンを使ったシングル曲が入っており、更にヘンでいい。(斎藤)

EAST OF EDEN



Snafu

Deram SML 1050
'70年
Pol:P25L 25060

Geoff Nicholson:g
Andy Sneddon:b
Geoff Britton:ds
Dave Arbus:vln,fl
Ron Caines:sax

Produce:?

サイケデリックな雰囲気漂うファースト・アルバムに比べて、セカンド・アルバムである本作品はジャズ・ロック、フリー・インプロヴィゼイションの色が濃く出ている実験的な内容となっている。曲の前半や後半にフリーな小曲を挟み、メドレー型式の曲構成をとったり、リヴァース・テープによるサウンド・コラージュなど、奇抜なアイディアをふんだんに盛りこんだアルバム作りには、時として多いに錯乱させられてしまう。同じジャズ・ロックでもSOFT MACHINE辺りと比べると、EAST OF EDENの方がよりロック色が強い。(村上)

THE ELASTIC BAND



Sean Jenkins:ds,clov-es
Andy Scott:g
Mike Scott:b,t-sax
Ted Yeadon:org,p,fl,hcd,conga,vo

Produce:Tony Hiller

Expansions On Life

Decca Nova SDN(DN)R-6
'70 年

ウェールズ北部出身であること、結成後1年目にして唯一のアルバムであること以外、アーティスト関連も見当らない。こうした、これといって特徴のないサウンドなのだが、部分的に見るべきプログレッシヴ感覚を備えたグループというのは、大物の影に隠れて多数極まりない。それが、イギリスの'70年前後であり、'80年前後だ。アーティスト自身の意識の中にある、混乱にも近い演りたい放題の、いわば土壌こそが、後に最盛期と呼ばれるものを作り出すのだと思う。JETHRO TULL 調のフルート、COLOSSEUM タイプのサックスなど、未消化なまま混然としている。（松本）

THE END



Dave Brown:b,vo
Terry Taylor:g
Nick Graham:key,vo
Hugh Attwool:ds
Colin Griffin:g,vo

Produce:Bill Wyman

Introspection

Decca SKL-R5015
'69 年

ビル・ワイマン、プロデュースの本作は、決してプログレではない。むしろ、BEATLES の「Sgt. Peppers…」あたりに影響をうけたマージー・ビート系の変形のような印象をうける。この変形という所がくせ者で、この点が END の独自性に他ならない。メロディ・ラインの良さは勿論だが、全体にわたるハーモニーと、曲間の絶妙な切り返し。これらが一体となって、スピリチュアル・コンセプトにもとづいたトータル・アルバムになっている。しかしながら、全体的にインパクトに欠ける点は否めず、彼らがスターダムに乗れなかったのも頷ずける。（法水）

ENGLAND



Martin Henderson:b,vo
Franc Holland:g,vo
Robert Webb:key,vo
Jode Leigh:perb,vo

Produce:St. George

Garden Shed

ARISTA ARTY153
'77 年
Edi:ERC-32004

ブリティッシュ・プログレの中でも人気の高いイングランド。よく言われているように YES、GENESIS からの影響も感じられるが、曲作りやよく練られたアレンジなど随所に個性的な魅力がある。まずオープニングや曲中にみられるポリフォニックなキーボード・アンサンブル、効果的なメロトロン、またメロディアスなベースとドラムとのコンビネーションは大変すばらしく、ハケット風？ギターもB③にちらりと表れるアコースティック・ギターによるアルペジオ、A③のサスティーンをきかせたソロ等々には心揺さぶられる。尚、別売にてブックレットがあった。（藤井）

THE ENID



Robert John Godfrey:key,per
Francis Lickerish:g
Stephen Stewart:g
Glenn Tollett:key,b,tuba
Robbie Dobson:per

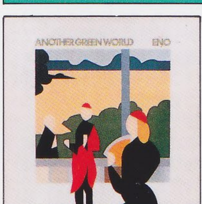
Produce:John Sinclair

In The Region Of The Summer Stars

BUK BULP 2014
'76 年

RENAISSANCE と並ぶクラシカル・ロックの代表格 ENID の1作目。彼らの音楽は、マーラー、ブルックナー等の後期ロマン派の血統をひくものだが、ロック的なフィールドから見ると、無類な変拍子の使い方も印象に残る。この特異なリズム感覚は、それまでのロックにはない、独特な発想の上に成り立っていた様に思う。彼らのロマン主義指向は次作でほぼ完結するが、リズムに対するアプローチは更に続き、3～4作目あたりでピークを迎える。以後はエニド・ソサエティーを組織し、LP、CD、テープ、リミックス、果てはヴィデオまで多数の作品をリリースする。（沢田）

ENO



Brian Eno:g,org,p,s-yn,per
Phil Collins:ds
Percy Jones:b
Paul Rudolph:b,ds
Rod Melvin:p
John Cale:vla
Robert Fripp:g
Brian Turrington:b,p

Produce:Brian Eno & Rhett Davies

Another Green World

Island ILPS 9351
'75 年
VJ:VJD 28061

代表作「Music For Films」('78)、「Music For Airports」('79) でアンビエント・ミュージックを一般のものとすると同時に、それは彼の志向がトータル・アートの域に入り込んだことを意味していたに違いない。この原点はロバート・フリップとの共作だと思うが、彼がはっきりと意識したのは、ROXY MUSIC 時代の屈折ポップ・サウンドから移行し始めた'75～'77年の特に本作ではなかったかと思う。実験色豊かなチューン、前2作の延長曲、サウンドの断片などを抽象的にスケッチするかのようなアプローチは、既に後の彼を予感させる。イメージ豊かな曲想も興味深い。（松本）

ESPERANTO



Tony Malisan:ds
Gino Malison:b
Bruno Libert:key
Roger Meakin:vo
Kim Moore:vo
Raymond Vincento:vln
Godfrey Salman:vln
Timothy Kraemer:cel

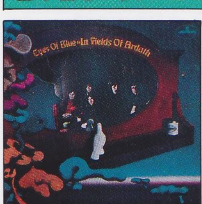
Produce:Robin Geoffrey Cable

Last Tango

A&M AMLS68294
'75 年

その名の通りイギリス、ベルギー、イタリア等の国籍のメンバーで結成され、'73年に「Rock Orchestra」でデビュー。複数のクラシカル弦楽器奏者を正式メンバーとし、ロックとストリングス・アンサンブルの融合を試みたバンドである。セカンド・アルバムはピート・シンフィールドのプロデュースでリリースされ、時には優雅にクラシカルに、時には攻撃的にヒステリックに飛び回るヴァイオリンが素晴らしく、このセカンドを最高作とする人も多い。本作サードでは、よりロック的になったアレンジで聞かせ、世紀末的なタイトル曲が耽美でエキゾチックだ。（Luna）

EYES OF BLUE



Gary Pickford Hopkins:vo
John Weathers:fl
Richie Francis:g
R. Bennett:b
Phil Ryan:key

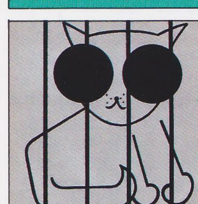
Produce:Lou Reizner

In Fields Of Ardath

Mercury20164SMCL
'69 年

プログレ関係には、GENTLE GIANT のジョン・ウェザースが在籍していた事で知られている EYES OF BLUE。彼らは「Crossroads of Time」とこの「In Fields Of Ardath」という2枚の作品を残しているが、この2枚はブリティッシュ・ビート系のグループでは最高峰に属するグループであると断言できる。ビート系のサウンドにサイケの風味を加味したこのアルバムは、日本人好みのメロディに美しいコーラス、そしてオルガン、ハープシコード、メロトロンなどを実に効果的に使うキーボードの音色は私達を'60年代終わりの良きイギリスにトリップさせてくれる。まずは一聴を！（三橋）

G.F.FITZ-GERALD



G.F.Fitz-Gerald:vo,lead-g,ac-g,el-banjo,p,b,gifflid,per,syn
with
Alan Place:vo,lead-g
Rod Herman:lead-g
Brian Cole:steel-g
Geoff Leigh:a&t-sax,fl
Rick Kenton:b
Ian Andrews:double-b,b,mtn,syn
Sam Gopal:tabla
Ted Tetlon:ds
Tony Turnbull:ds
Les Taylor,Roger Watson,Martin Rushent,Steve Moyce:back-vo

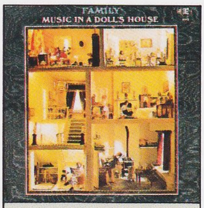
Produce:Roger Watson & G.F.Fitz-Gerald

Mouseproof

UNI UNLS 115
'70 年

彼について知る資料は、わずか'70年代中半過ぎのロル・コックスヒルとフレッド・フリスのソロへの参加のみだ。どことなくユーモラスなジャケットといい、ギミックを多用した作りといい、多分にプライヴェートな感覚と遊び心が感じられる。知名度こそ低いが、英サイケデリック文化を代表する隠れた1枚と言えそうだ。GONG のイディオムに近いものがある。アシッド・フォーク感覚とほのかなポップス性を中心に、多少のジャズ志向、「神秘」時代の FLOYD に見受けられるトリッキーな音色、演奏に近いものが、これに見合うように挿入されていて、つかみ所がない。（松本）

FAMILY



Music In A Doll's House

Reprise RSLP 6312

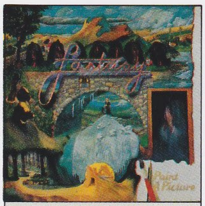
'68 年

Roger Chapman:vo,hca,sax
Charlie Whitney:g
Rick Grech:b,vln,cel,vo
Jim King:sax,hca,vo
Rob Townsend:ds,per

Produce:David Mason

あのJ・ウエットンが在籍していたグループとしてのみ語られることの多い FAMILY だが、実際にはウエットンが加入する以前の1作目から4作目辺りの方がおもしろい。日本で適切な評価がされなかったのはグループ名から軟弱なイメージしか伝わってこなかったことも要因となっていよう。しかし、J・TULL、COMUS、INCREDIBLE STRING BAND のギャップを埋めると言うか、埋められなかったと言うか、埋めたからと言ってどうしたと言うか（笑）というサウンドは非常にB級マニア好みで楽しめる。又、インパクト一発のライヴ（4作目の一部）も良い。 (Chihiro S.)

FANTASY



Paint A Picture

Polydor 2383 246

'73 年

Edi:ERC 29229

David Read:b,vo
Paul Lawrence:12 str-g,vo
David Metcalfe:key,vo
Peter James:lead-g,vo
Jon Webster:per,vo

Produce:peter Sames

彼らの作り出す音を的確に表現しているこのジャケットがなければ、'70年代ブリティッシュ・ロック界の超レア盤のひとつに数えられるという本作の魅力は半減しているかもしれない。ジャケットを手にしたなら、今しばらく現実から離れて無名の5人の若者たちが作り出したこわれ易くも美しい世界に耳を傾けよう。そこには大袈裟なところはなく、透明で優しさにあふれた世界が展開されて行く。同じコンセプトを持つ FRUUPP と決定的にちがうのは、どこかほのぼのとした郷愁を感じさせる FRUUPP に対し、張り詰めた糸が作品を覆っているからである。 （吉瀬）

FIELDS



Fields

CBS 69009

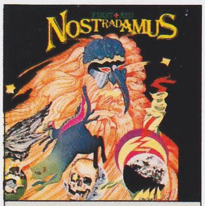
'71 年

Graham Field:org,el-p,p
Alan Barry:vo,lead-g,b,ac-g,mtn
Andrew McCulloch:ds,timpani,talking-ds

Produce:FIELDS

FIELDS、デビューにして最後のアルバム「Fields」は元 RARE BIRD のグラハム・フィールド、元 KING CRIMSON のアンディ・マックローチ、そしてアラン・バリーの3人から成る。その音の方は RARE BIRD 時代からおなじみのオルガン・サウンドとマックローチのスリリングなドラミングがあますとこなく披露され、バリーのポップな歌も相まって緊張感のある中にも非常になじみやすい曲想になっている。グループは本作品後解散、マックローチは GREENSLADE に参加するのだが、本作のみで解散したのが惜しまれるグループのひとつだ。 （太田）

FIRST＋AID



Nostradams

Decca TXS 117

'77 年

Alan Wormald:g,vo
Keith Parkinson:key
Dave Freeman:per
Norris Tannant:b

Produce:Jimmy Parsons

FIRST＋AID なるグループの実体はよくわからない。グループが先にあったのか、アルバム・コンセプトが先でメンバーが寄せ集められたのか？この辺りの事情は MANDALA BAND に似ている。そう言えば、音楽的にもこの作品は「魔石ウェンダーの伝説」に近いものがありそうだ。ノストラダムスは大ブームとなったこともあり、テーマとしては少々陳腐な印象もあるが、ナレーション、合唱団、オーケストラを伴ってドラマチックな美しさは堂々としたプログレッシヴ・ロックになっている。ただ発表された'77年という年がプログレとしては遅過ぎたのかもしれない。（後藤）

MORGAN



Brown Out

米 Import IMP1006

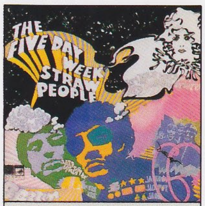
'76 年

Morgan Fisher:key,syn
Mo Bacon:ds
Tim Staffell:vo
Bob Sapsed:b

Produce:?

LOVE AFFAIR 解散後、'72年モーガンはプログレッシヴ最盛期のイタリアへ渡る。本作は「Nova Solis」に続く、'73年に録音された作品だが、発表は'76年。A①と②は、典型的シンフォニック・ロック。③は CRIMSON 的ヴォーカル部分に、実験的サウンド・コラージュが加えられた曲。B面はA面の要素を一曲にまとめている。彼は同時期に映画や演劇音楽の仕事をしている。又 Morgan とは別に、未発表ソロ「Hand Job」も録音している。帰国後 MOTT THE HOOPLE～MOTT～BRITSH LIONS を経て、ソロ活動に入る。 （吉野）

THE FIVE DAY WEEK STRAW PEOPLE



The Five Day Week Straw People

Saga FID 2123

'68 年

personnel unknown

Produce:?

ポップ・サイケ・アルバムのひとつであるが、RAINBOW FFOLLY、SKIP BOFFERTY、APPLE などと比較して、この作品が、プログレッシヴ・ロック・ファンに受け入れられるのは、曲構成がトータルなこと、ギターがブルージィなこと、効果音が多く取り入れられ音の遊びがあることであろう。短いポップな曲が並んでいるのではなく、ある時はブルージィに、ある時はポップに、ある時は、せつせつとラヴ・バラードをと種々雑多な要素をとり入れ、恋人が遠くにいて暇な週末を過ごす男の物語が語られる。アンダーグラウンド感覚を持ち合わせるポップで実験色ある'60年代末の産物だ。 （長谷川）

FLAMING YOUTH



Ark 2

Fontana STL 5533

'69 年

Ph:PHCR-2005

Gordon Smith:g,vo
Ronnie Caryl:b,vo
Brian Chatton:org,p,vo
Phil Collins:ds,per,vo

Produce:?

このバンド、メンバー全員がヴォーカルも担当するコーラス・ポップ・グループ。A①②はその典型。③はフォー・ビートのインストゥルメンタル。フィルのすでに達者なドラム・ワークが聴ける。続く④は7つの惑星をテーマとした組曲。しかし一部アート・ロック的展開や、ストリングスの導入があるが、曲名と曲想が掛け離れている。B面は、後に JACKSON HEIGHTS のセカンドから加入する、ブライアンのオルガンを中心に、プログレッシヴに展開する箇所もある。B③はフィル作のフォーク・タッチの曲。B⑤は、賛美歌をバックにして歌う異色作。 （吉野）

FRUUPP



The Prince Of Heaven's Eyes

Dawn DNLH 2

'74 年

Pter Farrelly:b,fl,lead-vo
Martin Foye:ds,per
Stephen Houston:key,oboe,vo
Vincent McCusker:g,vo

produce:FRUUPP

リハーサルをしていた家に出没する幽霊をフループと名付け、それをバンド名にしてしまったグループで本当はアイルランド出身。FRUUPP の音楽性を語る時、必ず言われるのが"ファンタジー"だ。'73年にファースト「Future Legends」を、'74年にステファンの哀愁のオーボエが心にしみるセカンド「Seven Secrets」リリース。それから6ケ月後にリリースされた本作は、FRUUPP の影の仕掛人とも呼ぶべきポール・チャールズが書いたブックレット付きで発表され、クラシカルなピアノが美しいトータルな作品。4枚目もI・マクドナルドのプロデュースの名作。 (Luna)

FUSION ORCHESTRA



Skeleton In Armour

EMI EMA 758

'73年

Jill Saward:vo,fl,key
Colin Dawson:lead-g
Stan Land:g,syn,hca
Dave Cowell:b
Dave Bell:ds

Produce:Jeff Jarrett

女性ヴォーカルをフィーチュアしたパワフルなハード・ロック・バンド、FUSION ORCHESTRAの唯一のアルバム。ヴォーカルのジル・サワードは歌唱力もあり、フルートや各種のキーボードも自在にこなす才女である。見開きのジャケットの内側にはライヴの写真が使われているが、かなりワイルドなステージだった事が想像される。アルバムの内容は、スピーディでスケールの大きなハード・ロック・ナンバーがぎっしりつまっている。だが、静と動の対比、ジャズ的なアプローチ、フルート等の導入により、単なるハード・ロックとはひと味違ったカラフルな作品に仕上がっている。（佐藤）

GALLIARD



Strange Pleasure By Galliard

Deram Nova SDN 4

'69年

Dave Caswell:tp
Geoff Brown:g
Andy Abbott:b,vo
Richard Pannel:lead-g,electronics
Beppo:ds
John Smith:sax

Produce:?

EGGやAARDVARKを輩出している事で知られるプログレッシヴ・レーベルDERAM NOVAからデビューしたGALLIARD。おなじみD・アンスティーの素晴らしいジャケットから、悪魔的なサウンドだと思われがちだが、実は明るめのジャズ・ロックと牧歌的なサウンドが中心で、全曲聴き終える前に拍子ぬけしてしまう。ジャズ・ロックはテクニックと曲、アレンジが命であるが、本作はそれらすべてが平凡で、後に何も残らない。本作後ほとんど同傾向のアルバム「New Dawn（DERAM SML 1075）」を発表後、シーンより消えた。（宇藤）

RON GEESIN



A Raise Of Eyebrows

Transatlantic TRA 161

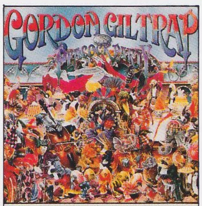
'67年

Ron geesin:all sounds made & instruments played

Produce:Nathan

彼は英国においてポール・バックマスター、デヴィッド・ベッドフォードと並ぶ硬派のアレンジャーで、「原子心母」やブリジット・セイント・ジョンのセカンドが名盤であるのも、彼に依るものであると言っても過言ではない。デビュー作である本作は特筆すべき事は無い実験的な小作品集であるが、発表年度を考えると資料的価値があるといえる。彼のソロ作品は自主制作レベルでしか発表されておらず、'73年に牧歌的雰囲気のある「As He Stands」そして現代音楽志向の三部作「Right Through」、「Patruns」、「Electro Sound」が確認されている。（吉野）

GORDON GILTRAP



The Peacock Party

PVK GIL 1

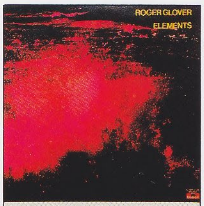
'80年

Gordon Giltrap:ac&e-l-g
Bimbo Acock:sax,fl,cla
Rod Edwards:key
Richard Harvey:rec,s-crumhorn
Ian Mosley:ds
John G.Perry:b
John Gustafson:b
Morris Pert:per
Ric Sanders:vln
Eddy Spence:key

Produce:Jon Miller,Triumvirate

'70年代初頭に2枚のアルバムを残したACCOLADEのオリジナル・メンバーというよりも、本格派プログレッシヴ・ギタリストとしてのソロ活動の方が、まだ一般的かもしれない。'71年以来、本作まで5枚のソロ・アルバムを地道に製作。話題に登ることは少ないものの、実力派ミュージシャンの協力を得た本作は、特に完成度がある。例えるならば、SECOND VISION、ジョン・G・ペリーの作品を更にメロディアスにした印象か。各奏者のソロにも支えられ、派手さはなくとも、非常にセンシティヴなサウンドになっている。他の作品も一聴の価値があると思う。（松本）

ROGER GLOVER



Elements

Polydor 2391 306

'78年

Roger Glover:b,vo
Simon Phillips:ds
Graham Preskett:vln
Ronnie Aspery:wind
Micky Lee Soule:key,vo
Lisa Strike:vo
Helen Chappelle:vo

DEEP PURPLEのベーシストとしてあまりにも有名なR・グローヴァー。彼はベーシストとしてだけでなく、コンポーザー、アレンジャー、マルチ・プレイヤーとしても素晴らしい腕を持つ男である。本作はそんな彼の才能が発揮されたソロ2作目である。土・火・水・風と4つのパートから成るコンセプト・アルバムで、ミュンヘン交響楽団のストリングスも導入した、壮大かつドラマチックに展開するある意味でプログレッシヴな内容を持つものである。また、全編に渡って活躍し、時に凄まじいプレイを聴かせてくれるS・フィリップスのドラムも聴き所である。（神山）

GNIDROLOG



Lady Lake

RCA SF 8322

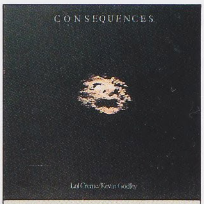
'72年

Stewart Goldring:g
Colin Goldring:g,vo,sax
Nigel Pegrum:ds,fl,oboe
John Earle:vo,wind
Peter Cowling:b,cel
Charlotte Fendrich:p

Produce:Dick Parkinson & GNIDROLOG

一度見たら忘れられない衝撃的なジャケットの彼らのセカンド・アルバム。ジャケットから相当ヘヴィなサウンドを連想してしまうが、暗く重いもののそれ程ヘヴィではない。JETHRO TULL風のハード・フルートをフィーチャーしたデカダンでメロディ・ラインが印象的で美しいA①、初期クリムズンの叙情を思わせる小曲のA③。又、タイトル曲では、ジャケットに描かれている幻想的な湖の神秘と恐怖と悲劇を見事に表現しており、K. CRIMSONの3作目を思わせる妖しい雰囲気から壮絶なブラス・セクションと共にクライマックスを迎える秀作。（Luna）

KEVIN GODLEY／LOL CREME



Consequences

Mercury CONS 017／6641 658

'77年

Lol Creme,Kevin Godley:written arranged and performed
Peter Cook:dialogue written and performed with
Mel Collins:sax

Produce:Godley & Creme

HOTLEGS、10ccと活動を供にしてきたクレーム／ゴドレーの2人が、自分達の取り組んできたギズモシステム（ギターのブリッジ部分に取り付けるアタッチメント）の開発の解答として制作した実験的な作品。ギズモサウンドに加えて、F・ザッパの「Uncle Meat」の様なサウンドが一環したストーリーの元で3枚のLPにまとめられている。本作後、2人はこの路線で実験的な活動をロック・フィールドに求めていく。尚、16ページにわたるブックレットにはアルバム・コンセプトの他に、2人が10ccと決別し、本作を制作する過程が書かれている。（宇藤）

THE GODS



To Samuel A Son

Columbia SCX 6372

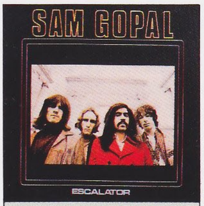
'69年

Ken Hensley:key,g,vo per
Lee Kerslake:ds
Joe Konas:g,vo
John Glascock:b,vo

Produce:David A.Paramor

最初期にはグレック・レイクも在籍し、'70年以後URIAH HEEPに籍を置く二者と後の名ベース奏者から成る謎多きグループ。'60年代末2枚のアルバムを製作。前年のデビュー作からサイケデリック・ビート・ポップスを発展させて、プログレッシヴ・ロックの夜明けを予感させるこの2作目に至る。大胆なメロトロンのバッキングやハモンド・オルガンの印象的なフレーズを混じえて、トータル作風に仕上げてはいるが、全体は時代がかったポップ色が優勢。ケン・ヘンズレーはヒープの活動と並行して、本グループの後身TOE FAT、HEAD MACHINEでも活動する。（松本）

SAM GOPAL



Escalator

Stable SLE 8001

'69 年

Sam Gopal:tabla,per
Ian(lemmy) Willis:vo,lead&rhythm-g
Roger D'Elia:lead,ac&rhythm-g
Phil Duke:b

Produce:Trevor Walters

後に HAWKWIND へ参加、そして MOTORHEAD を結成するベーシスト、レミーが、それ以前に在籍していたサイケデリック・ユニット。'68年、ロンドンで録音された唯一のアルバム。即興調のハードなリード・ソロやけだる気なヴォーカルにタブラが絡み、陶酔気味のオリジナリティーあるサウンドをつくり出している。TWINK のソロとともに英サイケ・シーンの特にアンダーグラウンドな部分に位置づけされるアルバムである。中心人物サム・ゴパールは、G. F. フィッツジェラルドの「Mouseproof」の他、デヴィッド・アレンやジリ・スミスのソロなどに参加している。（松本）

GRACIOUS



Gracious

Vertigo 6360 002

'70 年

Paul Davis:vo,g,tym
Martin Kitcat:mtn,p,el-p,hcd
Alan Cowderoy:g,vo
Tim Wheatley:b
Robert Lipson:ds

Produce:Hugh Murphy

わずか2枚のアルバムを残した GRACIOUS はヴァーティゴの代表的グループのひとつであることのみならず、'70年代初期のブリティッシュ・アングラ界を語る上で重要なグループでもある。その頃のポップなメロディやクラシックの引用が無造作に重厚なサウンドの中にちりばめられており、今聴いても色あせないハープシコード、メロトロンは斬新でプログレ然としているが、内ジャケと照し合わせるとサイケデリックな要素を多分に持っているといえよう。

2枚目の「This Is」ではその辺が希薄な分、強烈さに欠けるとはいえ同じく完成度の高い作品。（吉瀬）

GRAVY TRAIN



(A Ballad Of) A Peaceful Man

Vertigo 6360 051

'71 年

Norman Barett:lead-g,lead-vo
Barry Davenport:ds,per
J.D.Hughes:fl,key,sax,vo
Les Williams:b,vo

Produce:Jonathan Peel

マンチェスター出身の GT の2nd。1st(Vertigo 6360 023)では JETHRO TULL ばりのヘヴィなハード・ロックを披露したが、本作では、そこからブルーズ色を多少ぬきとり、オーケストラなどクラシカルな要素を加え、シンフォニック・ロック寄りの作風を持つトータル・コンセプト・アルバムを作りあげた。とはいえ、もともとハードな方向性を持ったバンドゆえ、RENAISSANCE のようにスムーズな流れは作れず、妙にゴツゴツした部分を感じさせる作品となった。本作発表後、ds が脱退し、Dawn レーベルへ移籍。「Second Birth」、「暗黒の世界へ」を発表。（深民）

THE GREATEST SHOW ON EARTH



Horizons

Harvest SHVL 769

'70 年

Colin Horton-Jannings:lead-vo,fl,ac-g
Garth Watt-Roy:vo,ac-g,el-g
Norman Deacon:org,hcd
Ron Prudence:ds
Dick Hanson:tp,flh,per
Tex Phillportts:a&t-sax,per
Ian Aitchison:t-sax,per

Produce:Jonathan Peel

不思議な質感を持ったバンドだ。ヒプノシスの手による特異なジャケット、ホーン、キーボードをメインにすえた編成はプログレッシヴ・ロック・バンド色の強さをアピールしているが、実際のところはポップ・バンド色が強いといった気もするのだ。演奏は技術、構成共に水準を越えており、ハモンド・オルガンのクラシカルなイントロに導かれ始まるタイトル曲他、ブラスが活躍する場面は多いが非常にこなれたメロディ・ラインがのった曲がほとんどで、聴きやすいつくりになっている。

2nd ではそうした面がより明確に出ていると思う。（深民）

PETER GREEN



The End Of The Game

Reprise RSLP 9006

'70 年

Peter Green:el-g
with
Zoot Money:p
Godfrey McClean:per
Nick Buck:el-p,org
Alex Dmochowski:b

Produce:Peter Green

英三大ブルーズ・ロック・グループの一つ、FLEETWOOD MAC の中心ギタリストだった彼が、ドラッグの常用からグループを脱退したのは、4作目「Then Play On」('69) 発表後のことだった。GASS のドラマーや翌'71年、グラハム・ボンドの「Holy Magick」に参加するベーシスト、ピアニストらを迎え制作されたソロ1作目が本作。セッション風の作りの中にも、ヒステリックなギター・ソロが唐突に入ったり、視点の定まらないようなギミック調プレイなど、ブルース・ロックと言うには、妙にばらけた感覚に貫かれている。F・MAC の4作目にも窺えはしたが…。（松本）

GREENSLADE



Greenslade

WB K46207

'73 年

Dave Greenslade:key
Dave Lawson:key,vo
Tony Reeves:b
Andrew McCulloch:ds,per

Produce:Tony Reeves,Dave Greenslade & Stuart Taylor

元 COLOSSEUM のデイヴ・グリーンスレイドが、元 WEB、SAMURAI のデイヴ・ローソンと元 CRIMSON、FIELDS のアンドリュー・マックローチらと結成したブリティッシュ然としたダブル・キーボード・バンド。RARE BIRD がそうであったように彼らも2人のキーボードを対比させた音作りで、特にこのファースト・アルバムは2人の個性が良く出てうまく溶け合っている。A①のメロトロン・ソロがいかにもブリティッシュの音だ。少しポップなセカンド、多彩なゲストのサード、タイトル曲がカッコ良いフォース等、彼らの残した4枚のアルバムは今でも色褪せない。（Luna）

DAVE GREENSLADE



Cactus Choir

WB K 5630

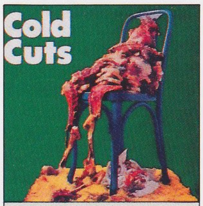
'76 年

Dave Greenslade:key
Simon Phillips:ds
Tony Reeves:b
Steve Gould:vo
Mick Grabham:g

Produce:Gregg Jackman,Dave Greenslade,Rupert Hine

御存知 GREENSLADE の解散後にリリースされた彼のファースト・ソロ・アルバム。COLOSSEUM や GREENSLADE での彼のプレイはジャズを基本にし、ブルースやクラシックの要素を取り入れ発展させた独自なもので、曲想もインスト指向のインプロヴィゼイション的なものが多かったが、本作では整合感のあるアレンジとラスト曲に見られるようなオーケストラの導入によりシンフォニックな仕上がりになっている。彼はこの後'79年に、超豪華ブックレット付きの2枚組のトータル・アルバムをリリースしている。フィル・コリンズも参加しているが内容では本作だろう。（Luna）

NICHOLAS GREENWOOD



Cold Cuts

Kingdom KVL9002

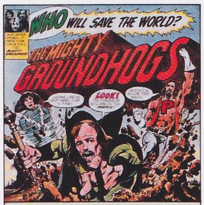
'72 年

Dick Heninghem:key
Eric Peachey:ds
Bunk Gardler:woodwinds
Bryn Howarth:g
Chris Pritchard:g
Nicholas Greenwood:b,vo,effects

Produce:Marc Chase,Nicolas Greenwood

元 CRAZY WORLD OF ARTHUR BROWN のメンバーだったニコラス・グリーンウッドは自らのソロ・アルバム制作のためメンバーを集め本作を発表した。内容は多少ブルージィな彼のヴォーカルを中心とした渋味のある作品だが、インストゥルメンタル・パートは非常に強力で当時のブリティッシュ・ロックの底力を見せつけられるプログレッシヴなものである。このアルバム制作後、ニコラス・グリーンウッドは他の3人のメンバーとスティーヴ・ヒレッジをプラスした形で KHAN を結成し、その後キーボードのディック・ヘニンガムが脱退したことがデイヴ・ステュワート参加の契機となる。（坂地）

GROUNDHOGS



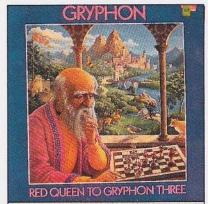
Who Will Save The World
United Artists UAG 29237
'72年

Pete Cruickshank:b
Tony McPhee:g,mtn,h-armonium,vo
Ken Putelnik:ds

Produce:Tony McPhee

'60年代後期ブルーズ・ロック・シーンに登場したトニーは、様々なセッションを経てGROUNDHOGSを結成する。リバティー時代の4作は、ブルーズ・ロックからハード・ロックへ移る彼等の姿を聴くことができる。UAへ移籍しての本作は、変形ジャケットでトータル・アルバムとして作られている。キーボードを導入したため音が厚くなり、ジミ・ヘンドリックスからの影響が顕著な曲が多い。次作の三面開き「Hogwash」はプログレッシヴ色が強くなるが、相変らず曲展開はハード・ロックの域である。WWA移籍後のラスト作は更に実験色が加わり、同傾向のソロもリリースする。（吉野）

GRYPHON



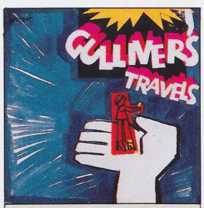
Red Queen To Gryphon Three
Transatlantic TRA 287
'74年

Richard Harvey:key,rec,krumhorn
Brian Gulland:bsn,kr-umhorn
Graeme Taylor:g
David Oberle:ds,per
Philp Nestor:b

Produce:Gryphon

中世ヨーロッパの伝説上の妖獣の名をグループ名に持つ彼らは、英国王立音楽学院の出であるリチャード・ハーヴェイとブライアン・ガランドを中心に結成され、YESのサポート・バンドとしてデビューした。'73年にリリースされたファーストはトラッドをアレンジしたもの等、アコースティックな内容。セカンド「真夜中の饗宴」は、シェイクスピアのテンペストを題材にしたトラッド・シンフォニックと呼べる秀作で、ある意味でENIDを思わせる。サードである本作では曲がより複雑となり、クラシカル楽器をフィーチャーした見事なアンサンブルは他を寄せ付けない。（Luna）

GULLIVER'S TRAVELS

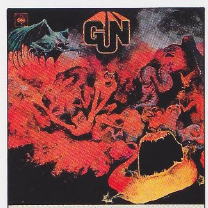


Gulliver's Travels
Instant INLP 003
'68年

personnel unknown

サイケデリック・ムーヴメント最盛期に発表されたトリップ・サウンド・アルバム。タイトルとドラッグによるトリップを掛け合わせた安直な発想の作品。初期FLOYD的演奏が所々に挿入されているが、ほとんどが様々なサウンド・トラックから抜粋したと感ずる様な音により埋められている。トータル・アルバムとして構成されており、その音がテーマ（曲名）に副った具体音である場合もあるが意味不明のコズミック的音も収録。本作はコラージュ本来の目的である、音を素材とし、イマジネーションを喚起させ、新たな効果を得る域には達していない。（吉野）

GUN



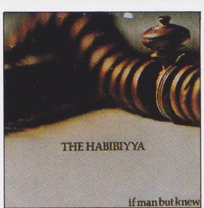
Gun
CBS 63552
'68年

Adrian Gurvitz:g,vo
Paul Gurvitz:b,vo
Louis Farre:ds

Produce:John Goodison

デビュー作である本作は、当時としては革新的といえる、ブルーズ・ロックの影響が少ない、ハード・サイケデリックのスタイルを明確に打ち出している。ヒット曲A①は、その典型のハード・ブキ。商業的にも成功し、発表年度を考えるとブリティッシュ・ハード・ロックのルーツといえる歴史的名盤。又ロジャー・ディーンに依る、初期作風ジャケットも効果的。ポールは、随所で癖のあるブラス、ストリングス・アレンジも行い、A②の半音階を用いた部分は印象的。ポップ感覚の曲も収録されているが、全編エイドリアンのハードな、のりの良いベスト・プレイが聞ける。（吉野）

THE HABIBIYYA



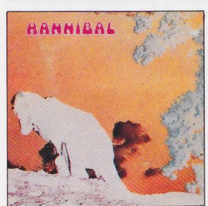
If Man But Knew
Island Help 7
'72年

Michael Evans:mandola,g
Ian Whiteman:shakuhachi,p,vo,bina-org,oboe
Roger Powell:safi-ds,ds
Conrad Archuletta:shakuhachi,Nay-fl,vo,zither,ban
Susan Archuletta:shakuhachi,koto,vla,vo,g

Produce:Roger Powell & Ian Whiteman

'70年代初期の多様化は、ロック史上最大幅のものだ。神秘学や黒魔術、宗教などにモチーフを得たものから、その実践の副産物としての音楽に至るまで、精神世界との関わりは更に音楽に留まらなかった。ドラッグ文化を担ったサイケデリック・ムーヴメントの派生がここにある。COSMIC EYE、SAGRAMといったインド音楽作、THIRD EAR BAND、その音楽性の果たした役割を想像すれば、同列に語られるものだ。元MIGHTY BABYとの合体による瞑想音楽である。イスラムの宗教色が濃厚。平静さをもたらすものだ。謎の両アルシュレッタが持ち込んだコンセプトだろう。（松本）

HANNIBAL



Hannibal
B&C CAS 1022
'70年

Alex Boyce:vo
Adrian Ingram:g
Jack Griffiths:b
John Parkes:ds
Cliff Williams:t-sax,cla
Bill Hunt:org,frh

Produce:Rodger Bain

プロデューサーのロジャー・ベインが、丁度INDIAN SUMMERとほぼ同時期に担当していたグループ。キーフの手によるジャケットから、ハモンドの音、曲想までINDIAN SUMMERに似ているのは驚かされる。しかし、残念ながら、このHANNIBALは、もうひとつ閃きが足りない。ヴォーカルの声質も大きく評価が分かれそうだ。ハードでもなければ、プログレッシヴでもない。ホーンを含んだブリティッシュ・ロックと言う他に形容の仕方が見つからない。そんな中でもA②B③は英国の深味を感じさせてくれる。メンバーのビルはこの後ロイ・ウッドと行動を共にする。（後藤）

HAPSHASH AND THE COLOURED COAT



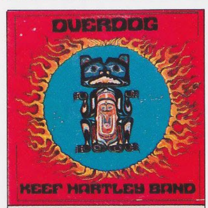
Featuring The Human Host And The Heavy Metal Kids
Minit MLL 40001 E
'67年

Michael English
Nigel Waymouth
Guy Stevens

Produce:HAPSHASH AND THE COLOURED COAT

二人の画学生によって結成されたHAPSHASHの伝説的なデビュー作。UKサイケとしては最初期に登場したわけだが、今聴いても、その迫力はいささかも減ずる所はない。当時流行していたビート系の音等歯牙にかけない粘っこさは見事。ハード・サイケとして聴いても、第一級といっていい。A面は若干ブラックな音作りだが、B面では、強烈なハード・ロック調のリズムやベースの唸り声、喘ぎ声とたいして変わらない女性ヴォーカル等サイケ色丸出しで、ドラッグと気合一発の見本。人脈的にもARTやT. REXにつながり今迄話題にならなかったのは意外。（法水）

KEEF HARTLEY BAND



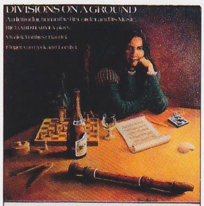
Overdog
Deram SDL 2
'71年

Keef Hartley:ds,per
Miller Anderson:vo,g
Gary Thain:b
Mick Weaver:key

Produce:Neil Slaven

BLUES BREAKERSでミック・フリートウッドに継いで参加したドラマー、キーフ・ハートレーが脱退後結成したグループ。初期3作目迄はブルーズ色が強かったが、本作では多彩なゲストを迎え彼が意図していたブルーズ・ジャズ・ロックを融合させたスタイルを完成させた。次作は16人編成のビッグ・バンド・スタイル。ミラー・アンダーソン脱退後の6～7作目はソウル色が強くなる。解散後ハートレーは再びS・ウインウッドと並ぶ英国の逸材でブルージーなギターの名手でもあるアンダーソンと共に、HEMLOCKそしてUAへ移籍しDOG SOLDIERを結成した。（吉野）

RICHARD HARVEY



Divisions On A Ground

Tansatlantic TRA292

'75 年

Richard Harvey:descant & treble rec
Andrew Parrott:hcd
Monica Huggrtt:vln
Eleanor Sloan:vln
Trevor Jones:vla
Chatherine Finnis:cell
Adam Skeaping:violone

'73年から'77年までに5枚のアルバムを発表したGRYPHONのリコーダー奏者のファースト・ソロである。当時21歳のハーヴェイは4歳の時からリコーダーを習い、ロイヤル・カレッジ・オヴ・ミュージックで学んだ経歴を持つ。'82年リリースの「Italian Recorder Concertos」(ASVALH 914)等3枚のソロ・アルバムがある。本作はヴィヴァルディ、ヘンデル、ファン・エイク等バロックのリコーダー曲を演奏しており、クラシック・サイドの作品である。GRYPHONでのコンテンポラリー／ロック的な味は、もう一人の中心人物ブライアン・ガランドに依るものであると思われる。(山崎)

HAWKWIND



Warrior On The Edge Of Time

United Artists UAG29766

'75 年

Dave Brock:g,syn,org,vo
Lemmy:b,vo
Simon House:key,mtn,vln
Nik Turner:sax,oboe,fl,vo
Del Mettmar:key,syn
Simon King:ds

Produce:?

パンクからNWOBHM以降のメタル・フリークスまで幅広い層から神格化されるに近い評価を与えられている彼らであるが、プログレッシヴ・サイドのリスナーに最も好意的に受け入れられるのは本第6作と前'74年の第5作「Hall of the Mountain Grill」であろう。この両作においてはSF作家マイケル・ムアコックが参加し、バンドのSF・スペース指向を表層的な次元からより確固たるレヴェルに引き上げ、成功へと導いた。またサイモン・ハウスの加入によるメロトロンの大幅な導入もサウンドのスケール・アップに多大な貢献を果たしている。本作の変型オリジナル・ジャケは一見の価値有。(城元)

HEAVEN



Brass Rock 1

CBS 66293

'71 年

Terry Scott Jr:vo,g,p
Eddi Harnett:vo,g
John Jame's Gordon:b,vo,vln
Vic Glover:ds,per
Dave Gautrey:tp,flh
Butch Hudson:tp,flh
Ray King:sax,fl,tp
Derek Somerville:sax,fl,tp
David Horler:tb,p

Produce:Rikki Farr

キーフが担当した妙に凝ったジャケットに包まれた、2枚組でデヴューしたHEAVEN。ブリティッシュの中でも個性的なバンドを輩出したブラス・ロック系のバンドのひとつだが、A面でいきなり飛び出してくるのはアメリカのBS&Tなどに代表される前近代的であつ苦しい音圧を持った音。B、C面あたりではブリティッシュ然としたリズム・セクションをバックにした質の高いジャズ・ロックを聴かせる部分も見られるが、作品全体の印象はバランスが悪く未整理の部分が多いようだ。意気込みは感じるものの、主体性がそれに追いつかなかったバンド。唯一の作品。(深民)

DICK HECKSTALL-SMITH



A Story Ended

Bronze ILPS 9196

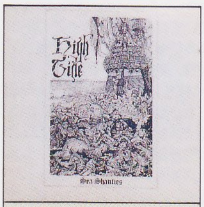
'72 年

Paul Williams,Chris Farlowe:vo
Caleb Quaye:Chris Spedding:g
Mark Clarke:b,vo
Rog Tait;ds
Jon Hiseman:ds,per
Dave Greenslade:Gordon Beck:p
Graham Bond:p,org,syn,vo
Dick Heckstall-Smith:t,s & el-sax

Produce:Jon Hiseman

ディック唯一のソロ。彼のサックスの音色は独特で一聴してそれと分かり、COLOSSEUMの音楽性を決定づけてもいた。参加メンバーはCOLOSSEUMのメンバーを中心に、'72年当時を代表する英国ジャズ・ロック界の連中が務めている。A面はピート・ブラウンの詩にディックが曲をつけたもの、B面はもともと、COLOSSEUMのために用意されたもののようでディックとハイズマン、クレム・クレムソンの共作である。COLOSSEUMは'71年11月に解散しているが、この作品は'72年3〜4月に録音されており、ディックの総決算と同時にバンドへの愛情を感じさせる好作品だ。(後藤)

HIGH TIDE



Sea Shanties

Liberty LBS83264

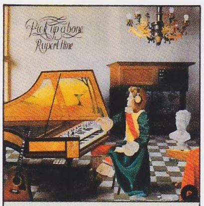
'69 年

Tony Hill:g
Simon House:vln
Peter Pavil:b
Roger Hadden:ds

Produce:Denver Gerrard

サウンド・カラーのサイケデリック色が強く時代を感じさせるが、そうした面をのぞけば'60年代末屈指のギター・アルバムといえる傑作。元MISUNDERSTOODのトニー・ヒルのギターが全編暴れまわる様は、その高密度、極度に歪んだトーンも手伝いハード・ロック的でもある。サイモン・ハウスのヴァイオリンとクロスする様もスリルとは別次元のとてつもない緊張感を生んでいる。2nd「High Tide」(Liberty LBS 83294)、最近になり突如レコード化された「Precious Cargo」も共にテンションが高い名作。独特のうねりを持つこのヘヴィさは唯一無二のものだ。(深民)

RUPERT HINE



Pick Up A Bone

Purple TPSA7502

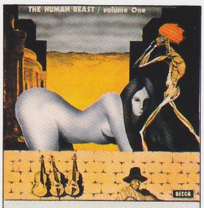
'71 年

Rupert Hine:vo,g,hca
Simon Jeffs:a-g,e-g,slide-g
David Maciver:g
Peter Robinson:p,org
Pete Morgan:b
Terry Cox:ds

Produce:Roger Glover

ルパート・ハインは、根っからのプロデューサー気質の人だったのだろう。QUANTAM JUMPは、知る人ぞ知る……R・ハインは名前は聞くがその者までは……と言う人がほとんどだと思う。この1作目を聴いて僕は意外だった。と言うのも僕は「Immunity」以降のエレクトリックで斬新な音しか聴いていなかったからだ。アルバムに針を落とすとアコースティックで自然に歌うルパートがそこにいた。それはアンソニー・フィリップスやアル・スチュワートらと共通する英国特有の気品ある世界だった。'71年という録音にしては、今聴いても全然古くないのが不思議である。(金井)

THE HUMAN BEAST



Volume One

Decca SKL 5053

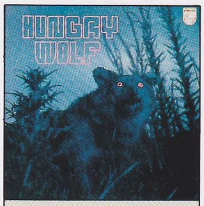
'70 年

Gillies Buchan:g,vo
Edward Jones:b,vo
John Ramsey:ds

Produce:Ray Horricks

本作はまさにバンド名が、目指すサウンドとして表面化している。ワウワウを多様したヘヴィなギターを核としながらも、時には変拍子、時にはアコースティック・ギターを用いた静と動の起伏という、確かなテクニックに裏打ちされた目まぐるしい展開で、トリオの目指す陰鬱な世界を構築していく。FREEの前座等でライヴ活動も行っていた彼らは当時のブリティッシュ・シーンにおいてHIGH TIDE、HAWKWINDらと並ぶヘヴィー・サイケ・バンドと言えるが、Vol.2を制作する必要が無い程当時の時代性にマッチしてしまったサウンドが評価を二分しそうだ。(宇藤)

HUNGRY WOLF



Hungry Wolf

Philips 6308 009

'70 年

Alan Hawkshaw:p,org
Alan Parker:g
Clem Cattini:ds
Herbie Flowers:b
Peter Lee Sterling:vo

Produce:Alan Hawkshaw,Alan Parker

キーフに依るジャケットの本作は、全員セッション・ミュージシャンから成るグループである。大胆にブラスを導入した曲から始まり、安定した演奏を聴くことができる。特にハービーのプレイは光っている。B②③で、ブラスを伴い、オルガンを中心に一丸となった演奏が収められているが、ギターの水準が低い。全体的にジャージーなオルガンをフィーチャーし、インストゥルメンタル・パートの多い、R&B色もあるジャズ・ロック作品である。その後ギターとドラム、後にソロ作品を発表するハービーは、ハード・インストゥルメンタル・グループUGLY CUSTARDを結成する。(吉野)

ICE



Saga Of The Ice King

Storm SR 3307

'79年

Mick Rutherford:vo
Paul Watts:ac & el-g
Andy Radek:ac & el-g
Colin Richardson:b
Steve Sheldon:ds,per
with
Jane Taylor:vln
Clair Stimson:cel
John Flathers:cel
Steve Day:horn
Staffordshire Youth Orchestra

Produce:ICE

'90年代に入って'70年前後の有名な廃盤が一勢再発されてきた今だからこそ、騒がれ始めた幻のアルバムの一つ。MIRKWOOD、DARK、COMPLEX、ITHACA などと一色たにされている、この暗黙のカテゴライズの規定とは、第一義に、重箱の隅をほじくった末、本国のコレクターから報告された単発の自主製作である。時は'70年代末、しかし弦楽器を加えたり、フォーク色、サバス張りのハード・ナンバーがあったりと、とりとめがなく、総じて'70年代初期の色合いが濃厚。録音は極悪だが、間違いなく往年のブリティッシュ・ロックを受けつぐもの。ハードでメロウな曲が多い。（松本）

THE IDLE RACE



The Birthday Party

Liberty LBL 83132E

'68年

Jeff Lyne:vo,g,key
Roger Spencer:ds
Greg Masters:b
Dave Prechard:vo,g

Produce:Gerald Chevin

ジェフ・リンはビート・バンドNIGHTRIDERSへ、ロイ・ウッド（MOVE参加）の後釜として加入した。その後IDLE RACEと改名し、本作はデビュー作である。全ての曲をジェフが書いており、メロディアスなポップ・バンドに変身している。BEATLESのクラシカル的要素も導入した曲を想わせる作品で占めたトータル・アルバム。サウンドから内ジャケット迄「Sgt. Peppers ～」の影響が顕著な作品である。後にMOVE～ELO迄に及ぶ一貫した独自のスタイルは、本作で確立されている。ジェフはMOVE参加の為、2作目で脱退した。（吉野）

IGGINBOTTOM



Igginbottom's Wrench

Deram SML(DML)1051

'69年

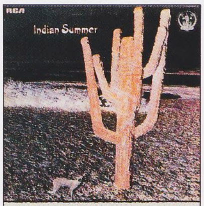
K:K32Y-2190

Alan Holdsworth:g,vo
Dave Freeman:ds
Mick Skelly:b
Steve Robinson:g,vo

Produce:M.J.M.Production

IGGINBOTTOM唯一の作品。そしてアラン・ホールズワースの初レコーディング・アルバムとしても有名である。彼らはLOVE AFFAIRの後見のもとで、DERAMより本作でデビュー、サウンドはジョン・コルトレーンに影響された完全にジャズ・フィールドのもので、ホールズワースはほとんどの曲を書き、正統派ジャズ・スタイルのギターを披露しているが、あの独特のフレーズや後にNUCLEUSやTEMPESTで見せた、よりロック・フィールドよりの演奏はまだ見られない。ロック・ファン、ジャズ・ファン共に不満の残る作品となってしまっているのが残念である。（宇藤）

INDIAN SUMMER



Indian Summer

Neon NE 3

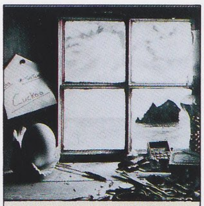
'70年

Bob Jackson:key,lead-vo
Colin Williams:g,vo
Paul Hooper:ds,per,vo
Malcolm Harker:b,vib,vo

Produce:Rodger Bain

バーミンガム出身の彼らには内ジャケットに記されているように、当時バーミンガムで人気を分けていたデビュー前のBLACK SABBATHと共にオーディションを受け、プロデューサーの目にはBLACK SABBATHがとまり、デビューが遅れたと言うエピソードが残っている。そんな彼らも、ヴァーティゴ、カリズマ等の新興レーベルに負けじとRCAが設立したネオン・レーベルから'70年にデビューする。サウンドのほうはハード・ロックと思われがちだが、さほどヘヴィではなくドロ臭さはあるもののハモンドとギターを主体としたオリジナリティーあふれものである。(Luna)

IONA



Cuckoo

Silverscales K0013913

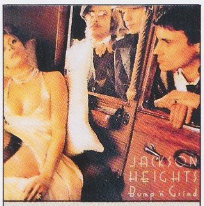
'78年

James Lascelles:key
Michael Storey:lead-vo,key
with
Dave Sheen:ds
John Mckenzie:b
Kuma Hara:b
Colin Gibson:b
John Portor:b,g
Peter Kirtley:g
Darryl Lee Que:per,conga

Produce:John Portor

シュールなジャケットが目が引くIONAの唯一のアルバム。本国では、初期ジェネシス風とマニアの間では言われていたが、プログレッシヴというよりもセンスのよいロックという方が当たっている。ROXY MUSICやCOCKNEY REBEL, SAILORらと同じ分類にした方がよいだろう。曲づくりは、見事であり、静と動のバランスが良く、ついつい夢見心地になり、ウットリして、曲の中に引きづり込まれてしまう。特筆すべきは、キーボードで、テクニック、センスともに抜群であり、引きの演奏・効果が、まさに職人芸である。おしゃれなアルバムである。（長谷川）

JACKSON HEIGHTS



Bump'n' Grind

Vertigo 6360 092

'73年

Lee Jackson:vo,b,el-cel,per
John McBurnie:vo,ac-g,mtn,per
Brian Chatton:vo,p,cla,org,mtn,hcd,celeste,tubular bells,syn
with
Mike Giles:ds
Ian Wallace:ds
Keith Emerson:syn

Produce:Lee Jackson

NICE解散後、リー・ジャクスンが結成したブリティッシュ通好みの名バンド。彼らはジャクスンを中心に2人のキーボードと言う変則的な編成で、マイク・ジャイルズ、イアン・ウォーレス等の一流ミュージシャンをゲストに迎えている。クラシカルなピアノとウォーム・ハートなメロトロンが美しい3作目も捨て難いが、やはりエレガントなオーケストラを導入した4作目の本作が最高作だろう。踊るようなA①のストリングスや、優美な高鳴りに包まれるA面ラストのタイトル曲のなんと感動的なことか。彼らは本作で解散、ジャクスンはREFUGEEを結成する。(Luna)

JOE JACKSON



Will Power

A&M AMA 3908

'87年

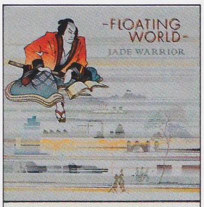
PC:D22Y-3377

Joe Jackson:p
Ed Roynesdal:key
Gary Burke:ds
Vinnie Zummo:g
Anthony Jackson:b

Produce:Joe Jackson

ニュー・ウェイヴ全盛期、'79年にデビュー。黒人音楽に対し様々なアプローチを試みた作品を発表。A・O・R風やサウンドトラックも手掛ける。作品を発表する毎にスタイルを変えるといわれた。前作は世界一周をテーマとしたライヴ2枚組。本作は、ロイヤル・アカデミーの経歴を活かした異色作。全曲、オーケストラを中心としたインストゥルメンタル。イージー・リスニング寄りでも、現代音楽的でもない、バランスを保った、硬派のクラシカル・サウンド。しかも時代性を感じさせ、ポピュラリティーさえも持っている。彼の才能、キャリアを感じさせる作品。（吉野）

JADE WARRIOR



Floating World

Island ILPS 9290

'74年

Jon Field:gaelic harp,gong,glocken,etc...
Tony Duhig:ac&el-g etc...

Produce:Jon Field & Tony Duhig

JULYというグループが発展し結成されたグループ。'71年から'80年代初頭までは活動しており、その間、アルバムも9枚（ベスト含）を数える。VERTIGO時代はややヘヴィな内容であったが、本作以降のISLANDレーベル時代になると、ジャズィーな要素も混入され、アコースティック楽器を使用して、まるで光の粒子になって大空を舞うがごとくの独特のイメージを確立し、その黄金時代は'78年頃まで続き、4枚のアルバムをその期間に残している。尚、'77年発表のトム・ニューマンの「Faerie Symphony」もJ・フィールドの参加により似たサウンド・イメージである。（山崎）

JAN DUKES DE GREY



Mice And Rats In The Loft

Transatlantic TRA234

'71 年

Derek Noy:g,tp,tb,z-elda chord
Denis Conlan:ds
Michael Brairstow:f-l,cla,sax

Produce:Stuart Taylor

ジャケットの美しさが魅力のセカンド・アルバム。中近東、東洋の神秘にメンバーが憧れていることが、音に見え隠れしている。ヴォーカルが感情を抑え、無表情なのも、そのあらわれであろう。デレク・ノイのギターの音色は、B面1曲目では、シタールのような響きもある。A面すべてを費やした「Sun Symphonica」は、メンバー3人が持てる力をすべて発揮した力作である。よく練られた曲構成は、リスナーを飽きさせない。東洋指向が、ただ実験的なもので終わることが多い中、良作に仕上がっている。フォークの変形。　（長谷川）

JULIAN JAY SAVARIN



Waiters On The Dance

Birth RAB 2

'71 年

Julian Savarin:key
John Dover:b
Nigel Jenkins:g
Roger Odell:ds
Jo Meek:vo

Produce:Miki Dallon

「Time Before This」に続く、彼の書いたSF小説に基づく、セカンド・アルバムである。前作のキャッシー・ブリーデンからレディ・ジョ・ミークにヴォーカルが代わって制作された。前作が彼のオルガン・ワークを中心とした、ジャージーな要素も含む'70年代初期のブリティッシュ的サウンドであったのに対し、本作では、メロトロンを多用し、魅力的な女性ヴォーカル・パートの比重も増し、変化に富んだ展開を持つ、よりプログレ色の強いサウンドへと成長している。時にEARTH & FIRE、時にMUSEO ROSENBACH等を思わせるドラマティックな名作アルバムと言える。　（神山）

THE BIG JIM SULLIVAN BAND



Test Of Time

Street Tunes STLP0011

'77 年

Jim Sullivan:g
Nicky Moore:vo
Les Walker:vo
Percy Jones:b
Simon Phillips:ds
Dave Lawson:key

Produce:Mike Vernon

ジムは'60年代からベテラン・セッション・ミュージシャンとしてのキャリアを誇る人である。彼は泥臭い音を志向していたバンドTIGARを結成し、2枚の作品を残す。同バンドから二人のヴォーカリストと共に結成した新たなるプロジェクトが本作である。ジェフ・ベック「Blow By Blow」のような当時のフュージョン・ブームを反映させた音である。ヴォーカルの部分は相変わらず泥臭いが演奏は洗練されている。全体的にブリティッシュ最強のリズム・セクションと共に、B②のようなBRAND Xを想わせるサウンドに、彼のテクニカルで個性的なプレイをフィーチャアした作品。　（吉野）

EDDIE JOBSON



Theme OF Secrets

US;Private Music2005-2-P

？年

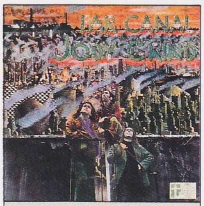
Alfa:32XB74

Eddie Jobson:synclavier

Produce:Peter Beumann

CURVED AIR以来、数々のグループに参加してきたエディ・ジョブスンだが、サポートとしては超一級のプレイをしてきたものの、彼のソロという形でこれだけ自己主張したレコードは以前にはない。'70年代のイディオムを焼き直すだけではなく、最新の楽器を用い、最新のディジタル機材によって録音された本作は、技術的には、明らかに進歩的なもので、プログレッシヴという言葉にこだわるのであれば、こういう音が、正しく進化した'80年代のプログレッシヴ・ロックである。シンクラヴィアを使用して創り出されたサウンドはとても純度の高い宝石のように輝いている。　（山崎）

JODY GRIND



Far Canal

Transatlantic TRA 221

'70 年

Tim Hinkley:org,key
Bernie Holland:vo,g,b
Pete Gavin:ds

Produce:Hugh Murphy

BECKETTやSNAFUで見事なキーボードをプレイしていた、ティム・ヒンクレーをリーダーとする3人組。'69年に1 stアルバム「One Step On」を発表、メンバー・チェンジの後、'70年に本作を残し、グループは分裂した。サイケデリックな要素を持つオルガン・ロックであった1 stに比べ、本作では、よりハードに、またジャズの要素をも取り入れたものとなり、その見事な曲展開と、安定したテクニックは、ファンの心を捉えて離さない。最近CDにて再発されているので、ぜひ一聴して下さい。　（向井）

ROBERT JOHN GODFREY



Fall Of Hyperion

Charisma CAS1084

'74 年

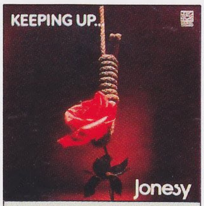
VJ:VJCP 2545

Robert John Godfrey:key
Christopher Lewis:vo
Neil Tetlow:b
Jim Scott:g

Produce:Neil Slaven

ENID結成以前のロバート・ジョン・ゴドフリーのソロ作品。彼のキーボードを中心に少数のゲスト参加により制作されている。彼はこの作品以前にBJHの初期作品においてオーケストラ・コンダクターをつとめており、彼のバック・ボーンがうかがい知れる。BJHのキーボーダー、ウォーリー・ウォルステンホルムからは多くの影響を受けた様だ。ENIDの様にバンド形態の整った"ロック的"サウンドではないが、その本流はこの作品に凝縮されており、彼の中では既に密度の高いクラシカル・ロックが完成されていたと見てよいと思う。　（沢田）

JONESY



Keeping Up

Dawn DNLS 3048

'73 年

Te:22DN-67

John Evan-Jones:g,vo
Gypsy Jones:b,rec,vo
Jamie Kaleth:key,mtn,vo
Plug Thomas:ds,per,vo
Alan Bown:el-tp,per,el-flh

Produce:John Evan-Jones & Jonesy

明らかに初期CRIMSONの影響を受けたメロトロンの必要以上の使用が目立つ2作目。それ故、最高作と言われるが、彼らの残した3作はメンバー・チェンジ故にサウンド志向が異なるもので、一定の水準を保っている。リーダーのジョン・ジョーンズは、'69年ANNO DOMINIに参加後、ソロを2枚残して当グループを結成。メリハリのきいた通好みのブリティッシュ・サウンド、「No Alternative」でデビュー。'75年に解散した。ジェイミー・カレスのキーボードに関しては、この2作目で開花しており、メロトロンを多用して劇的な効果、デリケートな感覚を見事引き出している。　（松本）

JUDAS JUMP



Scorch

ParlophonePAS10001

'70 年

Alan Jones:sax,fl
Trevor Williams:g
Henry Spinetti:ds
Adrian Williams:vo
Charlie Harrison:b
Andrew Bown:key

Produce:?

パーロフォンは、EMIよりジョージ・マーティンが任せられたレーベル。そのため時代性もあるが、後期BEATLESのサイケデリック感覚を、スタイルの違いはあるが、受け継いだ作品が多い。本家解散直後その直系として新たなポップ・スタイルを模索した作品が、本作であり、同年発表されたORANGE BICYCLE。キャリアのあるメンバーの為、演奏は安定しているが、曲よりもスタイルに拘った感がある。様々なタイプの曲を詰め込んでいるが、散漫ではない。全曲ポップでありながら、イギリスのグループの1つの特徴であろう、内に籠った印象が残る。　（吉野）

JULIAN'S TREATMENT



A Time Before This

Young Blood SYB2

'70 年

personnel unknown

後に「Waiters On The Dance」という素晴らしいアルバムを発表したジュリアン・ジェイ・サヴァリンが、'70年に残した傑作。彼自身の筆による、滅び去った文明の事をテーマにしたSF小説を、自らの作曲、アレンジで見事に表現している。女性ヴォーカル、ハモンド・オルガンの大活躍とブリティッシュ・ロックの魅力に溢れるサウンドである為、2枚組ながら（収録時間は短いけれど）一気に最後まで聴いてしまう。尚、アメリカ盤はジャケットも違い、収録時間もカットされ、1枚物となっている。　（向井）

JULY



July

Major Minor MMLP 29

'68 年

Tom Newman:vo
Chris Jackson:key
Tony Duhig:g
Jon Field:fl
Alan James:b

Produce:?

ジャケットを一目したなら、有無を言わせず期待を裏切ることもない。これぞ典型的な英サイケの音世界。中期 BEATLES がサイケ漬けに合った如く、度にイギリスらしいメロディ、ポップ色、ユーモア、更にはシタールやタブラも出てきて、ヴォーカルはイコライズされ、効果音、様々な音色がごった煮と、これは60年代後期の産物以外の何者でもない。JADE WARRIOR の前身であることは、周知のことか。間違っても「Faerie Symphony」でのトム・ニューマンを期待しないように。実は計算のされた面白味、完成度のある良質作。初期 FLOYD にも相通じる。　（松本）

JUNIOR'S EYES



Battersea Power Station

Regal Zonophone SLRZ1008

'69 年

Mick Wayne:g,vo
Grom:vo
Honk:b
Steve Chapman:ds

Produce:Tony Visconti

1969年にトニー・ヴィスコンティのプロデュースにより録音された。サイケデリック、ジャズ、ロックの各要素をバランス良く取り入れたそのサウンドは全ての曲を作ったバンドの中心人物、ミック・ウェインの感性が色濃く反映されているものである。A面1曲、B面4曲で構成され、A面の『Battersea Power Station』組曲の終末的な暗いサウンドと比べると、B面は曲が短い事もあり、やや明るめのパワーに溢れた曲を聞かせてくれる。尚、このレーベルには、TOE FAT の2nd も有る。　（向井）

KALEIDOSCOPE



Faintly Blowing

Fontana STL 5491

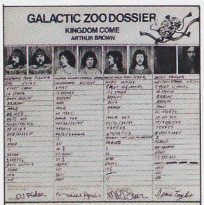
'69 年

Peter Daltry:key
Eddie Pumer:g
Danny Bridgman:fl
Steve Clark:b

Produce:Dick Leahy

後に FAIRFIELD PARLOUR に衣替えする KALEIDOSCOPE のプレグレ・マインド一杯の逸品。メロディ・ライン等を考えるとマージー・ビートの流れを意識せざるをえないが、各曲とも入念に手が加えられており、安易な所等一つも見当たらない。フェイズシフトやエコージングといったサウンド・エフェクトが全編にわたって使用され、夢幻的な音像を形成しており、こういったサイケデリックな味わいも、ハード・サイケ系とは違った形での当時の雰囲気をよく醸しだしている。一曲毎に物語性を持っており、見ための軽さ以上に重厚さのある作品である。　（法水）

KINGDOM COME



Galactic Zoo Dossier

Polydor 2310-130

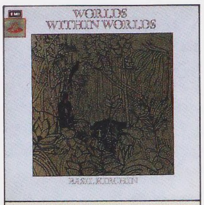
'72年

Arthur Brown:vo
Julian Paul Brown:synth
Andrew Kenneth Dalby:g,vo
Desmond John Fisher:b
Michael William Grenill Harris:org
Martin Phillip John steer:ds
Denis Taylor:light

Produce:KINGDOM COME

個性派ヴォーカリストとして'60年代末より君臨、'80年代にはクラウス・シュルツェと組むなど、意表突きのインパクト放ちとしても有名なアーサー・ブラウンが、'70年代初期に率いた本格派グループ。一見、際物的存在の彼だが、本来の意味でのブルーズに根ざす感情露吐とも言えるそのスタイルは、大袈裟という形容を遥かに超える切迫さを持っている。グループの結束力もあり、ザッパにも匹敵する存在感が本グループ。メロトロンを背に独特の泣きのヴォーカルが聴ける「Journey」以上に力動感を持つという点で、このデビュー作こそ代表作だろう。アクの強い凝ったサウンドだ。　（松本）

BASIL KIRCHIN



Worlds Within Worlds

Columbia SCX6463

'71 年

Basil Kirchin:sax,bsn,marimba,cel,org,g,b

Produce:Basil Kirchin

演奏、アレンジ、オーケストレーションを1人でこなしたこの作品、エヴァン・パーカーやデレク・ベイリーに影響を受けた変調されたサックスやギターによるフリー・ジャズ寄りの演奏にマリンバや動物、鳥の声をコラージュしたサウンドで自然回帰志向が感じられる。このような実験作品が大手レーベル EMI よりリリースされていたということは特筆に値することである。この作品のパートIII「Eeergence」、IV「Evolution」は'74年にアイランド傘下ヘルプよりリリース、フリー・ジャズ色は薄くなり、ミュージック・コンクレートの手法が多く取られている。　（吉野）

JACK LANCASTER&ROBIN LUMLEY



Marscape

RSO 2794 170

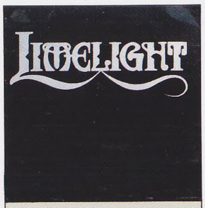
'75 年

Jack Lancaster:sax,fl,vln
Robin Lumley:key
Percy Jones:b
John Goodsall:g
Phil Collins:ds,per

Produce:Jack Luncaster & Robin Lumley

BRAND X 仕掛人、ロビン・ラムレイとジャック・ランカスターは'70年代中盤に数々のセッションをこなしていたが、その中でも本作は後にプロジェクト・チーム、BRAND X として発展する契機となった作品として重要である。グッドソールのギターの比重が少ない分ランカスターのサックスのウェイトが高く、後のグループの作品に比べるとやや弛緩した印象を受けるが、やはりパーシーとフィルのリズムは凄まじく、リスナーを昇天させるには十分であろう。他のセッション・アルバムとしては、プロコフィエフの作品をモチーフにした「ピーターと狼」が有名。　（内田）

LIMELIGHT



Limelight

Future Earth FER008

'80 年

Te:TECP-25401

Mike Scrimshaw:vo,b,key,mtn
Glenn Scrimshaw:vo,g,key,mtn
Pat Coleman:ds,vo

シーンの狭さから、NWOBHM はバンドにしろファンにしろ強い横の連帯を持っていた。当時のミュージシャン仲間からもそれなりの評価を得ていたのがこの LIMELIGHT である。残された作品はこの自主盤1枚のみで、その後の消息は不明。とにかく録音／プロデュース共に貧弱で印象は悪いが、作曲センス、演奏レヴェルは DIAMOND HEAD にもひけをとらない。この事実はまったく悲運だ。先頃の PRAYING MANTIS 来日や有名バンドのオムニバス再発などを見る限り、今後彼等のライヴ録音が発掘される可能性も、少しは残されているが…。④は名曲。　（古田）

LITTLE FREE ROCK



Little Free Rock

Transatlantic TRA 208

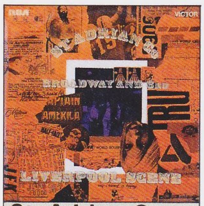
'69 年

PETE Illingworth:vo
Paul Varley:ds,tym,g
Frank Newbold:vo,b,glocken

Produce:Eddie Sandham

トリオ編成による典型的ヘヴィ・サイケデリック・バンド。三連ブギのノリが多いが、ブリティッシュ特有の重さを持っている。攻撃的で単純なリフをバックにヘヴィなアシッド感覚の強いギターをフィーチュアした曲を収録。本作がこの系統の作品群と一線を画しているのは、サビの部分でメロトロンの使用を伴った、印象的なメロディによるプログレッシヴな展開を聴かせる為である。それはA①③そして風変りなリフによる④等に表われており、これがこのバンドのオリジナリティといえる。そして'69年の混沌の様相を呈したシーンの状態を伝える一作品である。　(吉野)

LIVERPOOL SCENE



St. Adrian Co Broadway And 3rd

RCA SF 8100

'70 年

Adrian Heri:vo
Andy Roberts:vo,fl,g,vln,glocken
Mick Evans:vo,sax
Percy Jones:b
Pete Clarke:ds

Produce:Sandy Roberson

詩人であるエイドリアンを中心とした、'67年にデビューしたバンド。本作は4作目。A面はアメリカを題材に、風刺の効いた、批評性に富んだトータル作品。演奏もイアン・カー、カール・ジェンキンスを迎え、自己主張が激しい。B面はライヴ。聴衆とのコミュニケーションを保ちながら、多様な曲を、安定した演奏で聞かせる。パーシーのプレイは突出している。ザッパの影響を強く感じるバンド。エイドリアンは解散後、朗読のソロを制作。アンディは再編BONZO DOG BANDやG-RIMSに参加し、多数のソロ作品を発表している。パーシーはBRAND Xに参加した。(吉野)

ANDREW LLOYD WEBBER



Variations

MCA MCF 2824

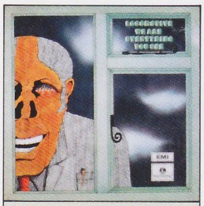
'78 年

Don Airey:key
Rod Argent:key
Jon Hiseman:ds,per
John Mole:b
Gary Moore:g
Barbara Thompson:wind instruments
Julian Lloyd Webber:cel
Andrew Lloyd Webber:composition

Produce:Andrew Lloyd Webber

かつてはあの「ジーザス・クライスト・スーパースター」の、近年ではミュージカル「キャッツ」や「オペラの怪人」の音楽監督として偉大な功績を残した彼のソロ・アルバム。パロディー・センスあふれるジャケットを見てもわかる様に、クラシックをベースとした、そのロック・アレンジによる変奏曲で構成されている。(パガニーニの曲がテーマとなっている。) シンフォニックと言うには、(当時の他の作品と比べて) 地味かもしれないが、COLOSSEUM IIのメンバー全員、ロッド・アージェント等のミュージシャンを迎えて、ここでも彼の才能は発揮されている。　(神山)

LOCOMOTIVE



We Are Everything You See

Parlophone PCS7093

'70 年

Norman Haines:lead-vo,p,org,mtn,hcd
Mike Hincks:b,vo
Bob Lamb:ds,per

Don Bradshaw-Leather

Don Bradshaw:p.org,mtn,g,vo,per

才能あるノーマン・ハインズの魅力を充分に堪能できるアルバム。絞りあげるような彼のヴォーカルと適確なリズム陣に、ストリングス、ブラスが加わり、一気に聴かせる。プログレッシヴ感覚を持つ反面、所謂ロック色を持ち、更にクラッシック、ジャズ・ポップス風味も加えられている。曲傾向にはばらつきがあるとしても、各々に消化されている。この後、バンドは、NORMAN HAINES BAND と DOG THAT BIT PEOPLEに分裂し、各々「Den of Iniquity」(Parlophone)、「same」(Parlophone) の1作ずつを残した。ともに聴き応えがあるアルバムだ。(長谷川)

JON LORD



Gemini Suite

Purple TPSA 7501

'71 年

Jon Lord:p,org
Roger Glover:b
Albert Lee:g
Tony Ashton:vo
Yvonne Elliman:vo
Ian Paice:ds
with
LONDON SYMPHONY ORCHESTRA
Malcolm Arnold:cond.

BBCの依頼を受けロック・バンドとオーケストラのためにジョン・ロードが書きおろした「Concerto For Group ＆Orchestra」(Harvest SHVL 767)に大幅に手を入れ、6つのパートに分け、各ソロ楽器 (含vo)とオーケストラの対比にポイントを置いて作られたものだ。D・PURPLEから参加のR・グローヴァー(b)、I・ペイス(ds) の他にT・アシュトン(key)、A・リー(g) などゲストも多彩。ジョン・ロードの頭の中には明確なシンフォニック・ロックがあったのだろうが、参加ミュージシャン、オーケストラが全体像を把握していない点も多々見られるのが難。　(深民)

LOVE AFFAIR



New Day

CBS S 64109

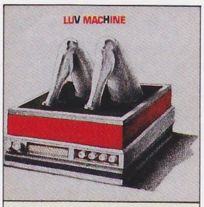
'70 年

Maurice(Mo) Bacon:ds
Mick Jackson;b
Rex Brayley:g
Morgan Fisher:org,p,cla,el-p,mtn
Auguste Eadon:vo,fl

Produce:Mike Smith,Hugh Grundy

'69年デビュー作に続く本作で、モーガン・フィッシャーは正式メンバーとなる。平年均齢が20歳のルックスも良く、アイドル性を備えたバンドであった。セッション・ミュージシャンの経歴もある実力者が揃った、ライヴ・バンドとして活躍した。演奏や曲がツボを押さえた仕上がりになっており、ライヴで練り上げられたという感じがある。当時としてはサイケデリック色が薄い、典型的ブリティッシュ・ポップ・ロック・サウンド。各曲フルートや多様なキーボードの使い分けによる彩りが添えられている。このあとモーガンはまだ試作品のシンセサイザーを持って、イタリアへ渡る。　(吉野)

LUV MACHINE



Luv Machine

Polydor 2460 102

'71 年

Michael Bishop:g,vo
Bob Bowman:g,vo
John Jeavons:b,vo
Errol Bradsham:ds,vo

Produce:?

ギター、ドラムスが黒人の4人編成のバンド。当時、黒人を含むバンドは少なからずアフロ色を出していた。しかしこのバンド、ジミ・ヘンドリックの流れを受け継いでいるが、サイケデリック色の少ないハード・ロック・バンド。ジミ独特のコード感覚を更に推し進めた感のある曲調、そしてストラトキャスターの特性を活かしたブリティッシュナイズされたサウンドが特徴である。例えば'73年頃以来、HUMBLE PIE が打ち出したゴスペル、ソウル色が、やはりメンバーに黒人を迎えたことによるように、彼らの場合も同じように自然な形で音楽に反映されていることをも指摘できる内容。　(吉野)

DUNCAN MACKAY



Score

EMI EMC 3168

'77 年

Steve Harley:vo
John Wetton:vo
Duncan Mackay:p,org,cla,el-p,syn
Clive Chaman:b
Andrew McCulloch:ds
Mel Collins:fl

Produce:John Wetton

後期COCKNEY REBELのキーボード奏者であったダンカン・マッケイのファースト・ソロ・アルバム「Score」は、壮大華麗なオーケストレーションをフィーチャーしたナンバーから、キーボード・トリオの真髄を見せつけるスリリングなナンバー、女性スキャットとピアノが淫靡に絡むデカタンスなバラッドまで、C・REBELの音からは想像もつかないプログレッシヴ・サウンドだ。ジョン・ウェットンやA・マクロウチ、メル・コリンズらの強者揃いとD・マッケイのキーボード奏者としての限りないアイデアが生み出した名作である。

(UENO)

MAGIC CARPET



Clem Alford:sitar,e-sraj,tamboura
Jim Moyes:el-g
Keshav Sathe:tabla,per
Alisha:vo,ac-g

Produce:Vic Keary

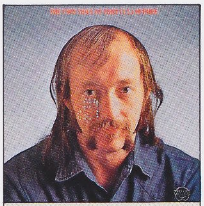
Magic Carpet

Mushroom 200mr20

'72 年

'80年代後期より各国で自国の'70年前後の復興ムードが強まっている。美化されることで毒気を抜かれてイディオムとなった'70年型自己主張サウンドは、現在、ネオ・サイケデリック傾向として顕著だ。自由表現の掟破りが、まだロック・ミュージック内で成すべき余地のあった'70年前後、この幻の一作のような東のインド音楽と西の英フォークの適質融合にまで手がのびた活力が今求められているのかもしれない。C・アルフォードは同時期、SAGLAM名義で純インド音楽作を発表した。本作も程良く真剣味あるたおやかな文化遺産だ。イディオム化とは時代を進める誤読なのかもしれない。（松本）

TONY (T.S.) McPHEE



Tony McPhee:ac-g,el-g,syn,el-p

Produce:Tony (T.S.) McPhee & Heat Records

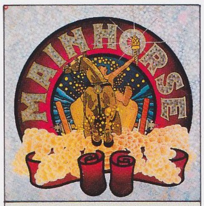
The Two Sides Of Tony

WWA 001

'73 年

GROUNDHOGSでの活動で知られるT・S・マクフィーの初ソロ・アルバム。UA移籍後からそれまでのブルーズィーなハード・ロック・サウンドにプログレッシヴな面ものぞかせる様になっていた彼。本作のA面はGROUNDHOGS以前J・ケリーと組んでいた頃を思わせる純ブルーズ・サウンド、B面は一変してシンセサイザー・ミュージックという構成。特にB面はシンセのパターンこそ単純なものの、効果音的使用の域を出ている所は評価に値する。それまでのトニーの音楽活動を振り返り、又新たなる挑戦へのきっかけを模索している一枚である。（宇藤）

MAINHORSE



Patrick Moraz:key,vo
Peter Lockett:g,vln,vo
Jean Ristori:b,cel,vo
Bryson Graham:ds,per

Produce:MAINHORSE

Mainhorse

Polydor 2383 049

'71 年

唯一の作品。荒々しい音色でとにかく弾きまくるパトリック・モラーツは、近年まで活躍を続けているが、これはその彼のルーツを知る事ができる作品。ギターとの双頭バンド的色彩が強く、両者を中心に熱の入った演奏が聴ける。オルガンを多用するモラーツは、サウンドにクラシカル（あるいはプログレッシヴ）な要素を与えているが、そのプレイ自体は躍動感に満ちたハード・ロック感覚のものだ。メインホースというよりは〝あばれ馬〟の様な迫力をもったなかなかの一枚。ハード・プログレ系作品の中ではかなりの出来と見た。（沢田）

MANDALABAND



Davy Rohl:vo,arr,key
Ritchie Close:p,arr
Wolly Wolstenholme:key
Kim Turner:ds,per,g,vo
Mel Pritchard:ds,per
Graham Gouldman:b,vo
Les Holroyd:b
Steve Broomhead:g,vo
Jimmy McDonnell:g
John Lees:g
Phil Chapman:fl,arr,sax
Richard Scott:rec
Tony Spath:oboe
E.Stewart,M.Prior,J.Hayward,L.Creme,K.Godley,P.Young,I.Wilson,G.Rohl,M.Lawrence:vo
Produce:Davy Rohl

The Eye of Wender

Chrysalis CHR1181

'78 年

ファンタジー文学の伝統が根強く息づく英国。その歴史を背景に、西欧や北欧の神話伝承を総合して、「指輪物語」という独自の創作サーガを織り上げたのがJ・R・R・トールキンならば、本作はそのロック版と言うに相応しい力作であろう。ストーリーに留まらず、あの懐かしい土の香りがそこにあるのだから。本プロジェクトの総指揮者デイヴ・ロールは1作目「曼陀羅組曲」の作曲者だった人物。MANDALABANDより分裂したSAD CAFEのメンバーのほか10c．c、BJH、ジャスティン・ヘイワード、STEELEYEのマディ・プライアー等豪華キャストによる一大ファンタジィ絵巻。（高山）

MANFRED MANN CHAPTER THREE



Mike Hagg:vo,p,el-p
Manfred Mann:org
Steve York:b
Bernie Living:a-sax
Craig Collinge:ds
Dave Brooks:t-sax
Clive Stevens:s&t-sax
Sonny Corbett:tp
David'Dozy' Coxhill:bar-sax
Brian Hugg:ac-g,back-vo

Produce:Mike Hagg,Manfred Mann,Dave Hadfield

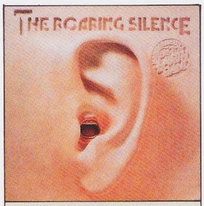
Volume Two

Vertigo 6360012

'70 年

もともとは'60年代前半にビート系バンドとしてスタートしたマンフレッド・マンも'60年代末にはブラス・セクション入りのジャズ・ロックを指向するようになり、MANFRED MANN CHAPTER Ⅲとしてヴァーティゴと契約。BATTERED ORNAMENTSとCOLOSSEUMの中間を行くような音楽性を持ったサウンドを披露した。本2ndアルバムに至ってはよりグレードが高く、単に流されることのないひっかかりの多い独自のジャズ・ロックを完成させた。部分的にA・マックローチのdsが聴けるのもうれしい。この後、よりプログレ色の強いEARTH BANDへと発展していく。（深民）

MANFRED MANN'S EARTH BAND



Chris Hamlet Thompson:vo,g
Dave Flett:lead-g
Colin Pattenden:b
Chris Slade:ds,per,vo
Manfred Mann:key,vo
with
Suzanne Lynch,Doreen & Irene Chanter,Mick Rogers:back-vo

Produce:MANFRED MANN'S EARTH BAND

The Roaring Silence

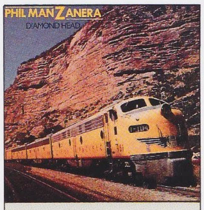
Bronze ILPS 9357

'76年

Century:CECC 00123

'60年代のR&B、ポップスのヒット・メイカーだったマンフレッド・マンが、ジャズ・ロック志向のCHAPTER Ⅲを結成後、ミック・ロジャースらと'71年頃結成したのが当グループ。'70年代のイディオムにそったハードでメロウな志向を持ち、現在も活動中。'73年の4作目「Solar Fire」に顕著なように力強いシンフォニック色も持ち合わせている。洗練されたメロディー志向のブリティッシュ感覚は、この7作目で文句なく開花。スプリングスティーンのA①のプログレッシヴな泣きのアレンジの他、女性コーラス、各種キーボードの効果など肌目の細やかさも特筆に値する。（松本）

PHIL MANZANERA



Phil Manzanera:b,b,Syn,org,p,vo
with
John Wetton:b,vo,mtn
Paul Thompson:ds
Eno:vo,g,treatments
Robert Wyatt:vo,timbales,cabasa
Andy Mackay:sax,oboe
Eddie Jobson:syn,vln,clavinet
Doreen Chanter:vo
Bill MacCormick:b,vo
Brian Turrington:b
Danny Heibs:per
Sonny Akpan:conga,per,bongo
Chyke madu:per
Charles Hayward:per
Dave Jarrett:key
Iain MacDonald:bagpipe

Produce:Phil Manzanera

Diamond Head

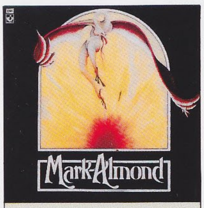
Island ILPS 9315

'75 年

VJ:VJD-28055

ソロ1作目。QUIET SUNと同時期の録音なので重複する曲もある。出来としてはQUIET SUNのほうがいいという結果になったが、彼のソロ・ワークの中では最もプログレッシヴな内容であり、この作風は後のプロジェクトである801にへと移行していくことになる。彼は本質的にはプログレッシヴ・フィールドのギタリストではなく、ROXY MUSICやENO等との出合いによりその資質を自らのワークに融合させていったわけだ。彼の渋いギター・ワークは多くの潜在的なファンを持っており、アルバムを重ねながら熟成を続けていったのである。（山崎）

MARK-ALMOND



John Mark:vo,g
Johnny Almond:sax,fl,per
Danny Richmond:ds,per,vo
Geoff Condon:flh,sax,oboe,vo,per
Ken Craddock:key,g,vo,per
Colin Gibson:b,per,vo

Produce:Bruce Botnick

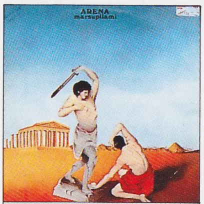
Rising

Harvest SHVL 809

'72 年

ジョン・マークとジョニー・アーモンドの双頭バンド。'70年代前半に、ジャンルを超越したグッド・ミュージックを演奏するグループとして活躍。ブルーサム・レーベルからの2枚と、3作目にあたるCBSからの本作「復活」は、どれも甲乙つけ難い傑作。（英本国ではHarvestよりリリース）枯れた味わいのジョンの詩的なヴォーカルと、ジョニーのジャズ・フィーリング溢れるサックスを中心に、他のメンバーの演奏水準も高く、非常に音楽的純度の高い世界を描き出している。B面の3曲の流れは特に素晴らしい。静的世界の中にスリリングな魅力がある。（後藤）

MARSUPILAMI



Arena

Transatlantic TRA 230

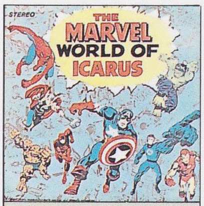
'71 年

Fred Hasson:vo,per,hca
Dave Loverock:ac&el-g,per,vo
Leary Hasson:org,el-p,mtn
Mike Fouracre:ds,per
Ricky Hicks:b
Jessica-Stanley Clarke:fl,vo
Mandy Riedelbanch:sax,fl,per

Produce:peter Bardens

MARSUPILAMIの２作目。古代ローマをテーマにした一大トータル・アルバムで、タイトルの「アリーナ」とは円形闘技場を意味する。どのパートが傑出する訳でもなく総合力で勝負するタイプだが、メロトロン等を駆使した叙情的な展開はさ程多くなくオルガン等キーボード系やパワフルなギター音を軸とした攻めの展開でより持ち味が発揮される。切れ込み鋭いフルートが存外、重要な役割を果たしているのも特徴で、全編に亘り満遍なく散りばめられている。ジャズ色の濃いB①のピアノ、サックス・ソロも印象的。起伏に富んだ好作品ながら僅かに雑然としたイメージも残る。（江田）

THE MARVEL WORLD OF IKARUS



The Marvel World Of Ikarus

PYE NSPL 28161

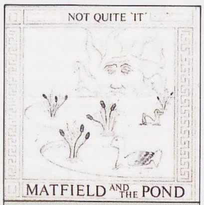
'71 年

John Etheridge:g
Jimmy Wiley:b
Steve Hart:vo
Iain Hines:key
Norrie Davine:sax,fl,cla
Peter Curtain:ds

Produce:Jack Dorsey

ジャケットが示すとおり、マーベル・コミックスのキャラクターを題材とした曲により構成された本作は、アメリカ人セッション・ギタリスト、J・エサリッジが WOLF 加入以前に中心となって制作した作品。全体的にみるとジャズ色が最も強く、ヴァイオリンレスのWOLF といった感も多少見受けられるが、多分に企画物的要素が強い。しかし、他のメンバーが安定した演奏を披露している為、エサリッジのプレイも効果的で、後への片鱗を伺うという意味においての資料性は高い。勿論唯一の作品である。（宇藤）

MATFIELD AND THE POND



Not Quite 'It'

Distortion DIST 3

'89 年

MATFIELD & THE POND

David Andrews:vo,b,g,toy-key,imitation cymbal,coal-hole,t-alking,window & sh-ffing,etc...
David Luery:ac&el-g,FX pedals,D.A's-b,tea-chest-b,more t-oy key,tape record-ers,etc...
Ted:ds

Produce:?

一瞬、ジャケットもグループ名も冗談だと思ってしまうが、音の方は多少なりとも聴き所はある。自主制作丸出しの作風が、トイ・ミュージックらしさに運良くつながった、という風だ。全体には初期 GONG のようなオブラートがかったような、メディテイショナルなムードが濃厚。A面の流れが、その筋には受け合いだ。空ろな曲想に、効果音やコラージュが取り入れられて、更にこのムードを強める。安物感覚は否めなくとも、このムードは充分聴くに値する。ユーモア感覚も豊か。'70年代初期をひきずったアコースティック系ドラッグ・ミュージック。（松本）

MIGHTY BABY



Mighty Baby

Head HDLS 6002

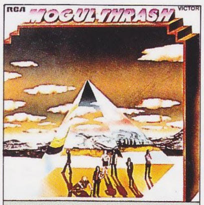
'69 年

Alan Kirg:g,vo
Roger Powell:ds
Michael Evans:b
Martin Stone:lead-g,slide-g
Ian Whiteman:vo,fl,sax,org,p,per

Produce:Guy Stevens,Mighty Baby

イギリスのヒッピー達から愛や理想を引き出そうとしても徒労に終わる。彼等の嘲笑と反骨の奥には、目に見えるかたちで線引きされた現実へのあきらめと開き直りがないまぜになっているから。DEVIANTS や HAWKWIND 等、詞や音にそれが露わにされた例はともかく、この MIGHTY BABY の特徴であるヨコ揺れのリズム、けだるいリフの返復、CSN & Y を想わせるハーモニーが喚起する心地良さのむこうにあるのは、わずかな選択技の中から最も実利の少ない道を選んでしまった男達が放つ圧倒的なヘヴィネスだ。そうした事を鼻で笑う人には、この系統の音は無理。（古田）

MOGUL THRASH



Mogul Thrash

RCA SF8156

'71 年

James Hitherland:g,vo
John Wetton:b,g,vo
Bill Harrison:ds
Malcolm Duncan:sax
Michael Rosen:tp,mellophone,g
Roger Bell:sax

Produce:Brian Auger

ブライアン・オーガーのプロデュースで１枚アルバムを発表して話題となったのがこの MOGUL THRASH。元 COLOSSEUM のギタリスト、ジェイムズ・リザーランドが中心となって結成されたグループで６人編成という COLOSSEUM に近い編成であった。ジェイムズがリーダーをとっている為、やや COLOSSEUM に近いサウンドではあるが、もう少しブラス・ロックの要素が強い。メンバーの中にジョン・ウェットンの名もあるが、このグループでの彼のプレイにプログレを求めてはいけない。純粋なブラス・ロックに近いため、賛否の分れる作品だが、やはりアメリカには絶対ない音である。（三橋）

MONUMENT



The First Monument

Beacon BEAS 15

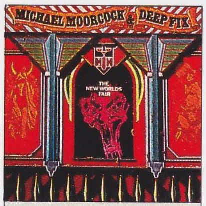
'71年

Steve Lowe:key,vo
Wes Truvor:g
Jake Brewster:ds
Marve Fletchley:b

Produce:Keith Bonsor&Bill Farley

ヴォーカル／キーボード担当でありこのグループのリーダー格でもあるスティーヴ・ロウという人物、ジャケット裏の解説によるとエセックスにおいて悪魔教の布教活動を実際に行っていてその教団の教祖までやっているらしい。他の３人のメンバーも熱心なオカルト信望者でここで演じられる音楽はそんな彼らの実生活に基づいた本物の悪魔崇拝をモチーフとしていると書いてある。全ての曲はこのスティーヴ・ロウ自らのペンによる物で彼のワンマン・バンドとしての色彩が強い。確かにその鬼々迫るヴォーカルにはジム・モリソン等に共通する精神的な説得力を感じる事ができる。（松尾）

MICHAEL MOORCOCK&THE DEEP FIX



The New Worlds Fair

United Artists UAG 29732

'75 年

Michael Moorcock:g,mandolin,banjo,vo,lyrics
Steve Gilmore:g,vo,lyrics
Graham Charnock:g,vo,lyrics
Simon House:arr,vln,p,mtn
Simon Kings:ds,per
Snowy White:g

Produce:Steve Gilmore

彼は英国を代表する SF、ファンタジー作家である。彼と HAWKWIND との関係は良く知られている。彼等の作品がトータル性を持ち得ているのは彼のオーガナイズに依るものとおもわれ、ステージ構成も担当していた。特に故ロバート・カルバートと密接な関係を持ちソロ作品にも参加している。本作はソロ・デビュー作。彼の語りとアメリカン・ポップス的な曲が交互に配されている。彼のヴォーカルの特性は、素人としては（？）屈託のないしかし尋常でない雰囲気がある。そしてHAWKS 一派による演奏との相関により、表象的なサウンドとは裏腹なものを感じさせる内容。（吉野）

SPIRIT OF JOHN MORGAN



Spirit of John Morgan

Carnaby CNLS6002

'69 年

John Morgan:org,p,hcd,vo
Mick Walker:per,vo
Don Whitaker:lead-g,vo
Phil Shott:b

２枚の作品を残して消えていった SPIRIT OF JOHN MORGAN の１ st アルバム。リーダーのジョン・モーガンを中心にオーソドックスな四人編成のバンドである。サウンドもジョンのキーボードを中心としたブリティッシュ・ロックでプログレの要素は全くみあたらないと言ってよい。当時のR & B、ビート、サイケのムーヴメントを反映した音作りと言える。決して派手な演奏ではないが各プレイヤーとも安定したテクニックを持っており、そのツボをおさえた演奏は安心して聴けるし、メロディも仲々良い。この後「Age Machine」を発表し解散したのは惜しまれる。（三橋）

THE MOVE



Looking On

FLY 1
'71年
Te:TECP-25272

Roy Wood:oboe,sax,sitar,cel,g
Jeff Lynne:p,g
Bev Bevan:ds
Rick Price:b

Produce:Roy Wood & Jeff Lynne

ロイ・ウッドを中心としたサイケデリック・ポップ・バンド。「Same」「Shazam」に続く本作では、ロックとクラシックの融合を図ったロイのアイデアをより具体化させるため、IDLE RACE より旧友ジェフ・リンが参加する。ジェフの作品が2曲収められたこともあり、前作から短期間（8カ月）で仕上げられている。製作がスムーズに進んだことを窺わせる。その後「Message From The Country」をリリースし'71年に解散するが、ロイとジェフは同時期に ELO の活動を始めていた。同年、解散後の2カ月後には、ELO のデビュー作がリリースされている。（吉野）

NEUTRONS



Black Hole Star

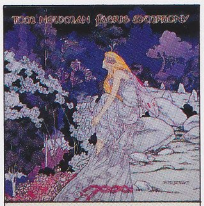
UnitedArtistsUAS29652
'74年

Will Youatt:b
John Weathers:ds
Phil Ryan:p,org,syn
Martin Wallace:vo
Stuart Gordon:vln
Taff Williams:g

Produce:Anton Matthews

フィルは、EYES OF BLUE ～ ANCIENT GREASE ～ BIG SLEEP を経て MAN に参加。そこでウィルと共に脱退し、2人を中心に結成されたグループ。フィルと旧知の仲であるジョンが、GENTLE GIANT よりセッション参加し、制作されたデビュー作。全編インストゥルメンタル指向のポップな曲調の中に、フィルのシンセサイザーを中心としたキーボード・プレイをフィーチャーしていて、E・O・Bの70年代版とも言える。ジョンを始め演奏にソツがなく、印象はアメリカン・プログレッシヴの音に近い。ラスト作セカンド発表後、フィルは MAN の再結成に加わった。（吉野）

TOM NEWMAN



FaerieSymphony

Decca TXS 123
'77年
K:K32Y-2189

Tom Newman:glocken,balalaika,ac&el-g,syn,vo,ds,per,bell,harp
Jon Field:fl,vo,oboe,bagpipe
Peter Gibson:tb,gong,brass,per,ds
Debbie I:vln
Tima Jones:vo
Jon Collins:vln
Geoff Westley:p
Joe O'Donnell:vln
Willie:b
Ward Kelly Conover:ds
Tom Norden:g,el-g

Produce:Tom Newman

作品のみを取り上げた場合、この1枚ほどイギリスの目に見えないベーシックな部分、つまり土臭さという意味合いの伝承と、創造された神秘という意味合いのメルヘンを結びつけて聴覚化したものはない、と言えるかもしれない。土着の音色、節回しを初期マイク・オールドフィールド調にまとめ上げた彼の音づくりの好みが窺い知れるようだ。'60年代 JULY 時代からの旧友、JADE WARRIOR のジョン・フィールドとの実質的な共作である。ジャケットの世界に見入る時、耳にするこのサウンドはイマジネイティヴこのうえない。前作のポップ志向とは別世界。（松本）

NICO



The End...

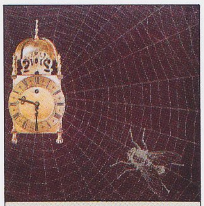
Island ILPS 9311
'74年

Nico:vo,harmonium
Phil Manzanera:el-g
Eno:syn
John Cale:b,xyl,ac-g,syn,org,mba,triangle,cabasa,glocken,per,p,el-p
Vicki Wood,Annagh Wood:back-vo

Produce:John Cale

一昨年他界してしまったニコの最高作である。「The End」というタイトルが、単に DOORS の名曲を借りたというよりも、彼女自身の内面における〝総括〟（終結）を意味しているように思える。ドラッグによるユートピア志向に象徴される'60年代への、より深淵を見てしまった彼女の、自己確認と解放を含めた訣別であり、鎮魂歌である。単々と一語一語たどるように歌うニコの何処か超然とした声と、不安感を醸すハーモニウムをはじめとする錯綜とした演奏の対比が、凄絶さと同時に魂の純粋さを表出している。カリスマ性とは別のきわめて人間的な素朴な感性が見い出せる。（高森）

9. 30 FLY



9. 30 Fly

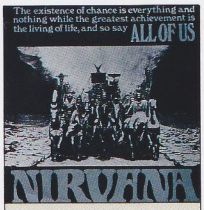
Ember NR 5062
'72年

Michael Wainwright:lead-vo
Barbara Wainwright:vo,el-p
Lyn Oakey:g
Gary Charman:b
Mike Clark:ds

Produce:Mike Smith

このアルバムは、内外のマニアの間でも知名度がなく、当然、グループの素性やメンバーの活動も不明、まったくの謎のグループである。基本的には、'60年代風のメロディーやコーラス、サイケ・トーンのギター・ソロを乗せたオーソドックスなサウンドだ。B③のメロトロンをバックにしたフォーク感覚あるメロディアスな曲想、B④間奏部でのコンクレート風に交差するソロが聴き所か。味つけ程度のプログレッシヴ色もある。素人肌のテクニック故に、曲展開、誇張を出し切れない堅さは否めないとしても、堅実さを守ったあたり好感は持てる。埋れた数多くの一つだろう。（松本）

NIRVANA



All Of Us

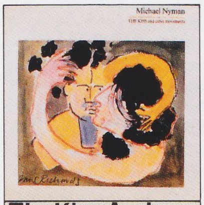
Island ILPS 9087
'68年

Patrick Campell-Lyons
Alex Spryopoulos

Produce:Brian Humphries

パトリック・キャンベル・リオンズのプロジェクト、NIRVANA の2nd。本誌読者には'71年にリリースされた「Local Anaesthetic」(Vertigo 6360 031) が広く知られているが、サイケデリック系のコレクターの間では、本作のほうが有名。ストリングス、女性コーラスなど様々な要素が次々と顔を出すサウンドは適度なポップさをうまくブレンドし、多分に実験色の強い内容ながら、万華鏡をのぞいたようなカラフルなものに仕上げている。また、リオンズは CLEAR BLUE SKY を始めとするアーティスト群を育てあげたことも忘れられない。（深民）

MICHAEL NYMAN



The Kiss And Other Movements

EG
'85年

Michael Nyman:p,syn
Alexander Balanescu:vln
Elisabeth Perry:vln,vla
Andrew Findon:t&b-sax
John Harle:s&a-sax
David Roach:s&a-sax
David Fuest:cla,b-cla
Stephen Saunders:b-tb,euphonium
John Greaves:b with
Dagmar Krause:vo
Omar Ebrahim:vo
Sarah Leonard:vo
Martin Drover:tp
Crispian Steele-Perkins:tp
Nigel Warren Green:cel
Produce:Michael Nyman & David Cunningham

ブライアン・イーノやデヴィッド・カニンガムとの交流によってロック・ファンにもよく知られるマイケル・ナイマンだが、彼は現代音楽の作曲家であり、また評論家だ。余計な情報に惑わされなければ、彼の音楽がフィリップ・グラスに類似するミニマル・ミュージックであることは誰にでもすぐ判るだろう。ということを予め断った上でこのアルバムについて敢えて蛇足を加えれば、ジョン・グリーヴスとダグマー・クラウゼの参加が驚きだ。ナイマンはほかにもシングルを含め多くのソロ作品を発表しているが、どれも皆同様の方法論に基づく作曲がなされている。（坂本）

ORANGE BICYCLE



Orange Bicycle

ParlophonePCS7108
'70年

R. J. Scules:lead-vo
Wilson Malone:p,org,hcd,mtn,vo
John Bachini: b,vo
Kevin Curry:ds,per
Bernie Lee:el & ac-g,st-g,vo

Produce:Jonathan Peel

BOBAK JONES MALONE で'69年にデビューしたウィルスン・マローンが、次に在籍したグループ。唯一のアルバム。3曲を除いてエルトン・ジョンやボブ・ディランらのカヴァー・ヴァージョンで占められている。原曲自体の持ち味あってのことなので、取り立ててアレンジ、演奏に冴えがあるわけでもなく凡庸ではある。それでもマローンのリリカルさあるピアノ、オルガンの音色のフィーチュア度は高く、B③での'60年代型メロトロン・プレイなど、それなりの聴き所はある。一方、オリジナル曲には、ビート感覚のサイケ色を感じる。ジャケットはヒプノシス。（松本）

PALADIN



Charge!

Bronze ILPS 9190

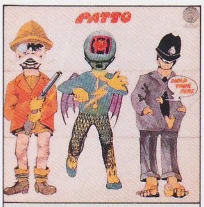
'71年

Keith Webb:ds,per
Pete Solley:org,p,v-ln,vo
Lou Stonebridge:p,vo
Derek Foley:g,vo
Pete Beckett:b,vo

Produce:Philamore Lincoln

'70年暮にテリー・リードのバンドにいたピート・ソリー（key、vln)、キース・ウエッブ（ds）を中心に結成された5人組。デレク・フォリーのダイナミックなギターをメインにしたハード・ロック的アプローチに加え、ラテン・パーカッション、リズムを導入し独特の音楽性を確立した。本セカンド・アルバムではラテン色がうすれ、ヘヴィなリズム上にジミ・ヘンばりのフォリーのギターと、ソリーのキーボードが活躍する、プログレッシヴ・ロック色の強い作品となっている。ソリーはこの後、P・HARUM他に参加し、現在はプロデューサーとして活躍中。（深民）

PATTO



HoldYourFire

Vertigo 6360 032

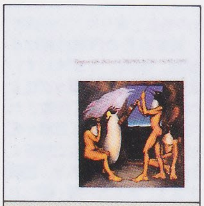
'71年

Mike Patto:vo
Olly Halsall:g,p,vib,org,vo
Clive Griffins:b,vo
John Halsey:ds,per

Produce:Muff Winwood

元TIMEBOXのメンバーによって結成されたPATTOの2nd。1stでは重く暗いブリティッシュ然としたサウンドを披露したが、本作では、よりファンキーなサウンドとなった。あい変らず重く沈み込むようなリズム・セクションをバックに、汗を飛びちらし熱唱する様が見えてくるようなM・パトゥと決して熱くならないものの、先鋭的なソロ・ワークを見せるO・ハルソールのギターが奇妙な落差を描き出す、不思議な色あいを持つサウンドは'70年初期のブリティッシュの独自性を具体的な形でアピールしたもの。R・ディーンの手によるカヴァーも見ものだ。（深民）

PENGUIN CAFE ORCHESTRA



Broadcasting From Home

EG EGED 38

'84年

VJ: VJD-28043

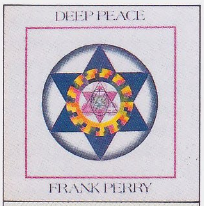
PENGUIN CAFE ORCH.

Simon Jeffes:harmonium,cuatro,g,b,ds,key,ukelele,per,v-ln,etc...
Geoffrey Richardson:vla,b,g
Steve Nye:p
Helen Liebman:cel
Gavyn Wright:vln
Neil Rennie:ukelele,cuatro
Kuma Harada:b
Marcus Beale:vln
Trevor Morais:per
Fami:ds
Mike Giles:ds
Dave Defries:tp,flh,
Annie Whitehead:tb

Produce:Simon Jeffes

何かと日本とのかかわりが深い彼らは当時驚く程マスコミに採り上げられ、異常なブームを巻き起こした。いわゆるニュー・エイジ・ミュージックがポピュラー音楽におけるニュー・シンプリシティーのムーヴメントだとするなら、彼らのアコースティックな音楽は結果としてその水先案内をしたと言える。初めは割と不器用にその方法論を模索していたが、'80年代に入ると完全にそれを確立してしまった。主要メンバーは5〜6人だが、交流の環が思いがけない広がりを見せており、ここでも何人か予想外の名前を見つけることが出来る。彼らは今も順調に活動を続けている。（坂本）

FRANK PERRY



Deep Peace

Quartz Publications!
QUARTZ 007

'81年

Frank Perry:metal percussion

Produce:Frank Perry

フランク・ペリーはOVARY LODGEでの鮮烈なプレイで知られるパーカッショニストだ。これは彼の初のソロ・アルバムであり、全編金属打楽器の即興演奏となっている。楽器の殆どが本来宗教的に用いられる極めて余韻の長い打楽器なので、えも言われぬ美しい響きのモアレ模様が時間を彩って行く。瞑想音楽の一種であり、OVARY LODGEの〈激しさ〉とは対極にある〈静謐〉、〈たゆたい〉、〈寡黙〉といったものが表現されている。なぜかロバート・フリップが宣伝文を寄せているが、売り上げには寄与できたのだろうか。以後も数枚のソロ・アルバムが発表されている。（坂本）

MORRIS PERT



The Music Of Morris Pert

Chantry ABM 21

'75年

Morris Pert:p,per,ds
Georgina Dobree:basset horn
Veronica Hayward:soprano
Peter Robinson:key,cla,per
Paul Buckmaster:cel,p,per
Martyn Ford:french horn,per

Produce:?

最近ではあまりその名を見かけなくなったが、モーリス・パートと言えば超売れっ子パーカッショニストであり、BRAND Xやマイク・オールドフィールドとの活動でも広く知られている。その一方で彼はまた現代音楽の作曲家でもある。このソロ1作目は彼の現代音楽作品を収録している。特に興味深いのはB面に収められた彼の率いるSUNTREADERのライヴだろう。この豪華な顔ぶれでこういうシリアス・ミュージックを演奏しているのだから凄い。殆ど即興演奏だが一聴の価値はある。以後も地道にパートは現代音楽作品を創作しており、他にもソロ・アルバムが出ている。（坂本）

GLENN PHILLIPS



Lost At Sea

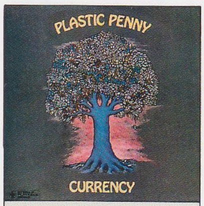
Caroline C1519

'75年

Glenn Phillips:g,vo
John Carr Harriman:cel
Mike Holbrook:b
Jim Presmanes:ds
Bill Rea:g
Sant Ram Singh Khalsa:key
Jerry Fields:ds

今や押しも押されぬヴァージンも、'70年代中半には英プログレッシヴ・ロックの宝庫だった。そして、その傘下だったキャロライン・レーベルは、多分に実験色のある趣味性の強いカラーを打ち出していた。彼が残した2作も、こうしたレーベル・カラーに似合ったものだ。これは1作目に当たり、彼の甘味のギターを中心に、エレクトリック・ピアノやチェロがサポートをする夢見心地なムードを持ったインストゥルメンタル作である。自宅録音が災いして、サウンド、演奏のぎこちなさが、とにかく目立ち、全体のレベルは低いが、ハケットにも通じるリリカルさを追っている。（松本）

PLASTIC PENNY



Currency

Page One POLS014

'69年

Paul Raymond:org,vo
Tony Murray:b,vo
Mick Graham:g
Nigel Olsson:ds

Produce:Colin Frechter

'60年代末ポップス色の強いマイナー・レーベル、ペイジ・ワンに3作（内3作目はベスト）を残した短命グループながら、以後のメンバー活動を追うと、キーボーダーがCHICKEN SHACKからSAVOY BROWNそしてU.F.O、ドラマーはU・HEEPの一作目の他、初期エルトン・ジョンの要など、地味ながら重要なポストにあった。1作目はレイモンドのオルガンを下地にしたポップなナンバーで占められていたが、この2作目になるとB④を筆頭に2〜3曲でハモンド・オルガンをフルにいかしたクラシカル・ロックを聴かせる。A⑤はBEGGARS OPERAもとりあげた。（松本）

PRETTY THINGS



Parachute

Harvest SHVL 774

'70年

Phil May:g,vo,b
John Povey:vo,per
Wally Allen:vo,b
Skip Allen:ds,vo
Dick Taylor:g,b,vo

Produce:Norman Smith

元々ビート・グループとしてデビューした、PRETTY THINGSだが、彼らの軌跡は未だに正しく捉えられていないように思える。'68年の「S. F. Sorrow」とこの'70年の「Parachute」はサイケデリックとして聞かれているようだが、彼らの歴史の中ではフォンタナに残した2作「Get The Picture」や「Emotions」でその試みは終えており、ここではむしろニュー・ロック／プログレッシヴ・ロックのEMI的展開として受け止めた方がいいだろう。アルバムのトータル性は勿論だが、BEATLES、PINK FLOYDとの共通項は明確である。メロトロンの使用法はB. J. Hと類似している。（後藤）

PRINCIPAL EDWARD'S MAGIC THEATRE



Soundtrack

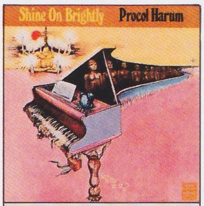
Dandelion S 63752

'69 年

Monica Nettles:dance,vo
Daived Jones:writer,per
John Hill:dancer
Gillian Hadley:choreographer,writer
Root Cartwright:g,compose,arr.
Bindy Bourquin:vln,p,rec,org
Eva Darlow:dancer
Lyn Edwards:per
Jeremy Ensor:b
Vivienne McAuliff:lead-vo
Leslie Adey:light
Harry Housman:stage,manager,designer
Martin Stellman:writer,lead-vo
Christopher Runciman:light
Produce:PRINCIPAL EDWARD'S MAGIC THEATRE & John Peel

メンバー構成が物語る特異なグループ。'68年、当時大学生だったジョーンズ、ボークィン、カートライトが中心になって結成されたと言われる。ニック・メイソンをプロデューサーに迎えた２作目、再編後'74年の３作目ともにこの３人は動いていない。前期はロンドンのクラブでシアトリカルなステージを行っていたもよう。アルバムもこれを反映して、フォーク系サウンドに、効果音、語り、教会音楽調のコーラス、弦楽器、東洋志向など雑多な要素を取り入れ、演劇調に進行する曲想に特長、面白味がある。またソーニャ・クリスティーナに似た女性ヴォーカルも印象的だ。（松本）

PROCOL HARUM



Shine On Brightly

Regal Zonophone SLRZ 1004

'68 年

Garry Brooker:p,vo
Matthew Fisher:org
Robin Trower:g
David Knights:b
B.J.Wilson:ds

Produce:Denny Cordell
asst.Produce:Tony Visconti

PROCOL HARUM は、その歴史の中で10枚のオリジナル・アルバムを発表している。しかしながらデビュー曲の「青い影」の印象が強すぎて、未だ正しい姿をとらえられていないようだ。２枚目にあたる本作は'68年５月に英本国で発表されている。丁度「青い影」のリリースから１年後になるが、もうこの時点で彼らのクラシカル・ロックの世界は完成していると言っていい。Ｂ面の序曲にあたる小品から18分に及ぶ「神秘なる東洋の世界（邦題）」の素晴らしさはどうだ。英国の伝統音楽と深遠なる思索とが一体化した、彼らならではの幻想を見ることが出来るのだ。（後藤）

PUBLIC FOOT THE ROMAN



Public Foot The Roman

Sovereign SVNA 7259

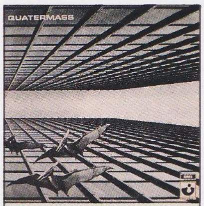
'73 年

Dag Small:key,vo
Jamie Lane:ds,vo
Sean Byrne:g,vo
Greg Knowles:g
Word:b

Produce:Derek Lawrence

本作もリリースした EMI 傘下のソヴェレインは、FLASH や RENAISSANCE 等11枚リリースし、同傘下のハーヴェストとは兄弟レーベルと言える。ヒプノシスに依る「未知への遭遇」を想わせるジャケットのこの作品は、捻りのあるロックン・ロールで始まる。７拍子で凝った展開をするＡ②。ツービートのツイン・ギターによる ALLMAN BROTHERS 風の③。Ｂ①はオルガンが有機的に絡み、②ではフォーク・タッチの中にコーラス・グループとしての側面をみせる。③はプログレッシヴな作品。メジャー志向の曲が多いが、摑み所がないのがこのバンドの個性であろう。（吉野）

QUATERMASS



Quatermass

Harvest SHVL 775

'70 年

John Gustafson:b,vo
Pete Robinson:key
Mick Underwood:ds

Produce:?

何処からともなく現れた翼竜プテラノドンがビルの谷間に乱れ飛ぶ――このエキセントリックなジャケットに包まれたQUATERMASS 唯一の作品は,'70年初頭のブリティッシュ・ロックが残した最高の遺産に数えられるものだ。クラシック、ブルース、ジャズといった伝統的要素が混然一体となりながらも、メンバーそれぞれのレパートリーが遺憾なく発揮されていて、実に説得力のある構成を保っている。ハード・ロックと呼ぶには、余りにもクリエイティヴであり、その奥行きと広がりのある音空間は、今聴いても色あせておらず特異なエネルギーを感じさせてくれる。(山本)

QUEEN



II

EMI EMC 767

'74 年

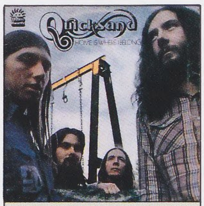
To-EMI:CP325377

Freddie Mercury:vo,p,hcd
Brian May:g,p,vo,b
John Deacon:b,ac-g
Roger Meddows-Taylor:per,vo

Produce:Roy Thamas Baker & QUEEN

'70年代初頭に斬新なハード・ロックを引っさげて出現した４人組 QUEEN。一言 Rock と言うだけでは片付けることのできない程、色々な要素を含み、４つの強力な個性がぶつかりあってこの凄じいサウンドを形成している。完成度の高い彼らのアルバムも他に何枚かあるが、この 2nd アルバムが一番 QUEEN らしさを感じることが出来ると思う。メロディアス且つ重厚なサウンドがこれでもかと言わんばかりに息をもつかせぬ迫力で迫ってくる。フレディーの美しい Vo. に加え、とても３人でやっているとは思えないあのコーラス!!あの時代によくこんなもの作ったなあ。（ブライアン・メイ子）

QUICKSAND



Home Is Where I Belong

Dawn DNLS 3056

'74 年

Anthony Stone
Jimmy Davies
Phil Davies
Robert Collins

Produce:Glyn Jones,Geoff Gill,Tito Burns,Quicksand

プログレ・ファンには馴染みの深い Dawn レーベルに所属する南ウェールズ出身のバンド。本作は彼らの唯一のアルバムであり、カラフルな作品である。牧歌的な小曲と複雑かつ高度なテクニックに裏付けられたプログレッシヴな作品が半々を占め、全体的には DRUID ほどではないがやはり YES サイドのサウンドである。今後ブリティッシュ・ロックの再検討が進められてゆく中でこうしたバンドがよりクローズアップされてゆくだろう。本作後、Ｊ・デイヴィスは NEUTRONS のメンバーと ALKATRAZ を結成している。尚、本作はブルー盤が存在する。（宇藤）

QUIET WORLD



The Road

DAWN DNLS-3007

'70 年

Te:22DN-71

Lee Heather:compose
John Heather:ac-g,vo,compose
Neil Heather:compose
Sean O'Malley:ds
Eddy Hines:fl,sax
Steve Hackett:ac&el-g,hca
Dick Driver:str-b,el-b
Phil Henderson:arr;p,tp,org,rec,vo

Produce:John Schroeder

スティーヴ・ハケットの出世作として知られる本作は、MOODY BLUES 調と言ってしまえばそれまでだが、大胆なオーケストラや奔放な歌詞を組み入れた当時としては完成度のかなり高いトータル作である。但しハケットのギターは時折顔を出す程度、実際本人も不満だった様で、熱意のあるミュージシャンを求め音楽誌に広告を載せ、それがゲイブリエルの目にとまり、GENESIS に加入することになる。尚、大昔に「永遠なる回帰」という題で邦盤も出た。昨年 CD で再発されたが、LP では分断されていたＡ面ラストとＢ面１曲目が通して聴けるようになった。（高橋）

RAMASES



Glass Top Coffin

Vertigo 6360 115

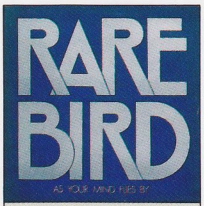
'75 年

Ramases,Sel:lyrics,songwritings
with
Jo Romero:ac & el-g,tablas
Pete Kingsman:el & str-b
Roger Harrison:ds,tuned-per
Barry Kirsch:p,syn
Bon Bertles:sax
Colin Thurston:el-g

Produce:Ramases,Barry Kirsch

'71年に元 HOTLEGS（後の 10 cc）のメンバーをバックに発表した「Space Hymns」から４年後、突如としてこの２作目が発表された。バックも一枚目とはまったく別メンバーで編成されており、内容の方も一作目の思い入れ過剰な宗教的ムードはなくなっている反面、オーケストラの導入や緻密なアレンジで聴き易い内容に仕上がっている。RAMASES はアルバム制作だけのグループだったと考えられるが、ラマセスとその妻セルの正体は一枚目のジャケットに見られるそのユニークな風貌から想像する限りでは相当際物的な存在だったに違いない。（坂地）

RARE BIRD



As Your Mind Flies By
Charisma CAS 1011
'70 年
VJ:VJCP-2548

Graham Field:org,as-sorted-key
Steve Gould:lead-vo,b
David Kalffinetti:a-ssorted-key,el-p
Mark Ashton:ds,vo

Produce:RARE BIRD

ブリティッシュ・オルガン・ロックの代表的バンドである彼らのセカンド・アルバム。A面の4曲はファースト・アルバムの延長上のサウンドであるが、やはりここではB面全てを使った組曲『Flight』が聴き所と言える。混声合唱を大胆に導入し、クラシカルかつドラマチックに展開する、高い完成度を持った、その後の数々の名曲と言われるシンフォニック・ロックの作品にも劣ることのない演奏を聴かせてくれる。この後3枚のアルバムを発表するが、徐々にヴォルテージは下がっていってしまい、この作品を超える名演は果たせなかった。彼らの最高傑作である。（神山）

RAW MATERIAL



Time Is..
Neon NE 8
'71 年

Dave Greene:g
Phil Gunn:b,g
Colin Catt:vo,key
Paul Young:per
Michael Fletcher:sax,fl,vo

Produce:Mickey Clarke

Neon レーベルに残された11枚の作品の中で8枚目にあたる名盤である。彼らにとって2作目。曲構成の巧みさ、シンセサイザーの導入法、トータル・アートとしてのジャケット・デザイン（キーフが担当）…それらをあわせて考えるとプログレッシヴな要素が確かに強い。1作目に較べオルガンやサックスの使用はV. D. G. Gに似ているが、実際には彼らの音楽の発展型であり、直接的な影響とは思えない。どの曲も良く出来ているが、組曲の形を取ったA③B③は最高だ。どちらも導入部の展開は見事である。彼らの1作目も、未完の美を窺えて興味深い。（後藤）

REFUGEE



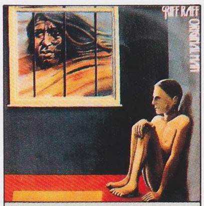
Refugee
Cahrisma CAS1087
'74 年
VJ:VJCP-2543

Patrick Moraz:key
Brian Davison:ds,per
Lee Jackson:b,vo

Produce:John Burns & REFUGEE

元 NICE のリー・ジャクソンとブライアン・デヴィソンがキース・エマーソンの後釜とも言えるパトリック・モラーツとこの REFUGEE を結成したのは NICE 解散後4年のことだった。元 NICE の2人の実力もさる事ながら、モラーツのプレイは素晴らしいの一言。正確無比な早弾き、クラシックの基礎がある者だけが出来る難易度の高い運指にも安定感がある。このアルバム発表後モラーツは YES に参加、実にエマーソンとウェイクマンの後をついだことになる。グループは本作のみで解散、しかしこの作品には現在とは違う若いモラーツの確かなるロックが聴ける。(太田)

RIFF RAFF



Original Man
RCA LPL 1 5023
'74 年

Pete Kirtley:g,vo
Tommy Eyre:key,syn,vo
Roger Satton:b,cel,vo
Aureo De Souza:ds,per
Buddy Beadle:b,a-sax,s & t-sax
Steve Gregory:t-sax,fl,cla

Produce:Ken Burgess & RIFF RAFF

ブルージィなブリティッシュ・ジャズ・ロックの香りが魅力的な1作目に引き続いて、さらに強力なメンバーをバックにこのアルバムが発表された。前作ではヴォーカルが前面に出たアコースティックな曲もみられたが、この2作目では演奏にも余裕が感じられインスト・パートがより際立っている。RIFF RAFF の中心メンバーのトミー・アイアーとロジャー・サットンは元 MARK ALMOND で活動していたコンビで、RIFF RAFF がメンバーのミュージシャン・ユニオンのトラブルで解散したあとも ZZEBRA の作品に参加したりして一緒に活動している。（坂地）

ROCK WORKSHOP



Rock Workshop
CBS 64075
'70 年

Bud Parkes:tp
Harry Beckett:tp,flh
Tony Roberts:fl
Bob Downes:fl
Derek Wadsworth:tb
Brian Miller:key
Drayl Runswick:b
Alan Rushton:ds
Robin Jones:per
Ray Russel:g
Alan Greed,Alex Harvey:vo
Laurie Baker:el-music

レイ・ラッセルが、'70年に結成したセッション・グループ。モダン・ジャズ的なブラス・セクション、ジャズ風の早弾きにロック調のトーンを持った独特のコード・ストロークの彼のギター、アレックス・ハーヴェイのソウルフルなヴォーカル（これが本作のレベル・アップに貢献している）という一味違ったジャズ・ロックが展開されている。メンバー・チェンジ後、2作目「The Very Last Time」を発表し、バンドは解散し、レイは RUNNING MAN、CHOPYN と活動する。ソロのジャズ時代を含めて、当グループと続く R・MAN の頃が彼の音楽的なピーク時。(宇藤)

ROOM



Pre-Flight
Deram SML 1073
'70 年

Steve Edge:g
Chris Williams:g
Bob Jenkins:ds
Jane Kevern:vo
Roy Putt:b
with
orchestra

Produce:Mickey Clarke

数々の個性的作品をリリースしたデラム・レーベルよりデビューした ROOM 唯一の作品で、個性的な香りを漂わせている。全体的にA①、B①、③の様なオーケストラとヘヴィなギターが交錯するプログレッシヴな作品とA②、④の様なブルーズ・ナンバーに大別され、紅一点のヴォーカル、ジェーンが両者を見事に歌い分けている。特に前者はヘヴィ・シンフォニックとは違ったジャズィな感覚を合わせ持つ不思議な魅力があり、ジェーンのスキャット風ヴォーカルが印象的である。各人ともテクニック的にも充実しており、本作のみで解散したのが惜しまれてならない。（宇藤）

THE RUNNING MAN



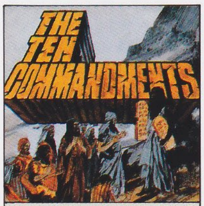
The Running Man
Neon NE 11
'72 年

Ray russell:g,b,vo
Alan greed:vo,key,b
Alan Rushton:ds
Harry Beckett:tp,fl
Gary Windo:sax

Produce:Ray Russell & Allan Greed

R・RUSSEL TRIO、ROCK WORKSHOP と活動してきた R・ラッセルが結成したセッション色の濃いトリオ。元々ジャズ畑での仕事が多かった彼だが、実際は彼のプレイ自体それほどジャズ色は無く、その点ではC・スペディングとも共通点が見い出せる。本作は彼ら唯一の作品であると共にレイの参加作品中その頂点とも言える名作。独特のフレーズと早弾きが冴えるヘヴィな側面と美しいメロディからなる静の側面の対比が緻密な計算の元で鮮やかなコントラストを描き出している。尚、本作以前に MOUSE というバンドでプレイしていたらしいが、一聴した限り彼らしいプレイは皆無である。（宇藤）

SALAMANDER



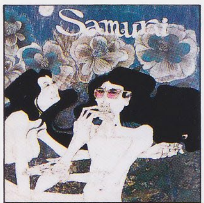
The Ten Comandments
YoungBlood SSYB 14
'71 年

Dave Titley:lead-g,lead-vo
A. B. Benson:org,vo
John Cook:ds
Dave Chriss:b
with
Bob Leaper:Orchestra-arr
Alister Benson,David Ditley:writer

Produce:Miki Dallon

'70年代初頭の超マイナー・レーベルに残された謎のシンフォニック系トータル作。6面開きのジャケットをひもとくと、ハモンド・オルガンが至る所から流れ出し、オーケストラやブラスをともなって曲を盛り上げながら、メロディアスなパートが、切れ間なく続いていく。オーケストラ・アレンジャーのボブ・リーバーなる人物が、'65年、ニール・アードレイの作品に参加していること以外は、何の資料もないが、同レーベルの JULIAN'S TREATMENT の延長グループ JULIAN JAY SAVALIN に音色、曲想が酷似していて驚かされる。レベルを保った1枚。再発盤有り。（松本）

SAMURAI



Samurai

GreenwichGSLP 1003

'71年

Dave Lawson:vo,key
Tony Edwards:g
John Eaton:b
Kenny Bevendge:ds
Tony Roberts:sax,fl,cla
Don Fay:sax,fl

Produce:Lennie Wright

WEBサードのメンバーに新たに二人の管楽器奏者を加え結成されたグループ。作曲面も含みデイヴがイニシアティヴを取っている。ブリティッシュ特有のトーンを持ちながらも以前のような暗さや攻撃的な面が少なくなり、曲調も多岐に渡りメロディも良く練られ彼のコンポーザーとしての成長が覗える。又ヴォーカルの表現力も増している。アレンジ面ではオリジナリティ溢れるキーボード・プレイに加え、ブラスはジャズ・ロック的印象がなく初期CRIMSONのように曲によって使い分けがなされ効果的。本作のみで解散しデイヴはGREENSLADEへ参加。　(吉野)

SECOND HAND



Death May Be Your Santa Claus

Mushroom200MR6

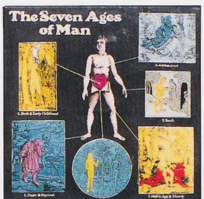
'71年

Goerge Hart:b,vln,vo
Kieran O'Connor:ds,vib,per,noises,vo
Ken Elliott:org,mtn,p,vo
Rob Elliott:lead-vo with
Tony McGill:g
Paul Greedus:vo
Moggy Mead:g

Produce:Vic Keary & SECOND HAND

SEVENTH WAVEの前身。ケン・エリオットとロブ・エリオットを中心に結成され2作を残している。NICEの影響をしのばせるようなクラシカル・センスの他、実験的で音色感覚豊かな各種キーボード群の大胆な使用、アーサー・ブラウンを意識したかのようなヴォーカル・スタイル、プログレッシヴ志向が先行し過ぎて整理がついていないようなコラージュ作風は、強い個性として映る。またポップ色を下地に持ちながら、本格的なシンフォニック志向をのぞかせている点、後の活動を予感させている。その反面、サイケデリック感覚を極めた末のものともとれて興味深い。　(松本)

THE SEVEN AGES OF MAN



The Seven Ages Of Man

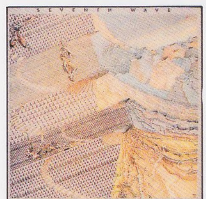
RediffusionZS115

'72年

Perry Ford:lead-vo
Kay Garner:lead-vo
Doris Troy:vo
Pat Arnold:vo
Madelaine Bell:vo
Rosetta High Tower:vo
Tony Roberts:sax,fl
Harold McNair:sax,fl
Gordon Beck:key
Steve Grey:key
Ian Green:key
Collin Green:g
Brian Odges:b
John Spooner:per
Produce:Ian Green

'70年代初頭のアマルガム派生物。多分にセッション色を感じさせる。英ジャズ系のG・ベックとI・グリーンが中心になって、'60年代ポップスやゴスペルをジャズに混入したような歪つさがある。初期S・MACHINEに近いサウンドながら冒険というには時代が進み過ぎているか。ソロ・パートには、プログレッシヴ流の聴き易さがある。コンセプトは一生を七つのパートに分けた意味深長なものだが、サウンドとの有機的な絡みには欠け、これでは今一つ中途半端な印象を残し易い。H・マクネアにせよ、G・ベックにせよ、穏健派故の甘さが、本作を性格づけている。面白味があるのだが。　(松本)

SEVENTH WAVE



Things To Come

Gull GULP 1001

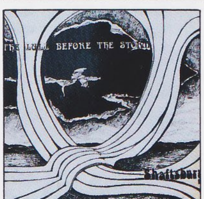
'74年

Ken Elliott:p,el-p,clavinet,syn,mtn,glocken,chimes,vo
Kieran O'Connor:ds,conga,banjo,sleigh bells,finger cymbals,crash cymbals,castanets,hand claps,claves,xyl,vib

Produce:Kieran O'Connor

総天然色でめまぐるしく移り変わる悪夢といった感じのサウンドを持っていたSECOND HANDのK・エリオットとK・オコーナーが結成したデュオの記念すべき1stアルバム。エリオットのマルチ・キーボードとオコーナーのパーカッションのみで作り出されたとは思えない繊細ながらも深さを持った質の高いポップ・シンフォニックで、普遍的なノリを感じる部分もあるのだが、頭はシェイクできても体は対応できないというやっかいな方向性を持つ。2ndでは本作に内包された〝毒〟の部分が薄れ、〝甘さ〟が前に立ってきている。Voアレンジも良い。　(深民)

SHAFTSBURY



The Lull Before The Storm

O.K. OKA 001

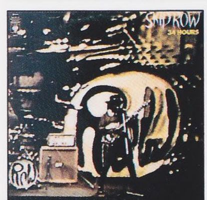
'79年

Roger Grigg:ds,per,tanbourine,clave,tubular bell,syn,el-p,fl,vo
Dave Martin:b,vo
Peter Roffey:el-g,ac-g

Produce:Shaftsbury

'79年と'80年に2枚のアルバムを発表。共に自主製作なのも、この頃の時勢を考えれば、仕方のないことに違いない。とは言っても、彼らは基本的に正統派ハード・ロック・トリオである。'70年代末らしくソリッドなリフ、ためのきいたソロともに、この1作目の方が冴えている。ところが、これに正反対とも言うべきストリングス・シンセサイザーをバックに、メロディアスにシンフォニックに盛り上がるという技を持っており、両者が異和感なく曲に収まっている。1曲のみの例外ではなく、彼らのカラーに成り得ている。この曲中の切り返しは本当に鮮やかだ。　(松本)

SKID ROW



34 Hours

CBS 64411

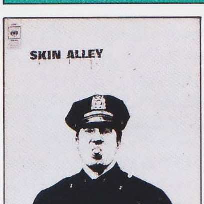
'71年

Gary Moore:g,vo
Noel Bridgemen:ds,vo
Bredan Shields:b

Produce:Clifford Davis

ゲイリーは、あのピーター・グリーンに認められ、'70年若干17歳でプロ・デビューする。2作目の本作は、A①のワウワウによるサイケデリック・ジャズ・ロック色ある曲、②の攻撃的なギターと続く。B①のCREAMのリフを想わす曲、B②とA③はヴォリューム奏法によるアイルランド民謡風、③は印象的なギターとヴォーカルのユニゾンから、プログレッシヴな展開をする。彼はハードなソロでも、ジャズ・フレーズを違和感なく弾きこなすのが特徴であった。又彼のプレイは、当時のシーンを見回すとかなりレベルが高く、年齢的に見ても驚異的であった。　(吉野)

SKIN ALLEY



Skin Alley

CBS S-63847

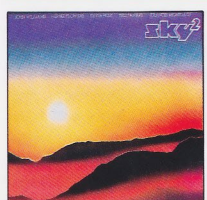
'69年

Krzysztof-Henryk-Juskiewicz:org,p,hcd,mtn,vo
Bob James:g,sax,fl,vo
Thomas Crimble:b,mtn,vo
Alvin Pope:ds,conga,timpani

Produce:Dick Taylor

ジャズ系ミュージシャンが集まったサイケデリック・ポップ・バンド。フルートが印象的な軽快な曲から始まり、メロトロンを伴ったフォーク風の曲、A④は7分以上に及ぶ5拍子のジャズ・ロック・インストゥルメンタル。B面はアシッド風になり、B④の次はハード・ブギと様々な曲が収録されているが、どれもブリティッシュ然とした魅力に溢れている。2作目からニック・グラハムが参加し、彼のソウルフルな声に合わせ、バンドの音もロック化する。トランスアトランティック移籍後は、ニックを中心としたベテランらしいサウンドに変化する。'74年に解散した。(吉野)

SKY



Sky 2

Ariora AD SKY 2

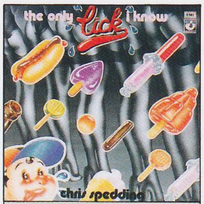
'80年

John Williams:g
Kevin Peek:g
Herbie Flowers:b,tuba
Tristan Fry:ds,per
Francis Monkman:key

Produce:SKY,Tony Clark,Haydn Benball

時のフュージョン・ブームのさ中に登場し、好評を博したSKYは、クラシック・ギターの世界的名手ジョン・ウィリアムスが在籍したことで有名だが、メンバーはフランシス・モンクマンをはじめ高い音楽性を有する一流のミュージシャン揃いである。2作目にあたる本作はクラシック、ジャズ、民族音楽等多彩な要素を無理なくロックと一体化させた極めて密度の高い作品で、CURVED AIRの名曲をアレンジしたD①等大作も多く、単にフュージョンとして消化できないポテンシャルを有している。現在もメンバー・チェンジはあったものの、グループは元気に活動中。(内田)

CHRIS SPEDDING



The Only Lick I Know

Harvest SHSP 4017

'72 年

Chris Spedding:vo,g,key,b
with
Linda Lewis:vo
Laurie Allan:ds,per
Harold Fisher:ds
Alan Hawkshaw:p
Paul Francis:ds
Phil Dennys:key
Toni Campo:b

Produce:Andrew King & Chris Spedding

BATTERED ORNAMENTS、NUCLEUS などの活動を通じて知られる彼の3rd ソロ。銀行家の家に生まれ、何ひとつ不自由することなく育った彼は、その生いたちゆえに、どこか淡白な味を持つミュージシャンになってしまった。ハーヴェストに残したシンガー／ギタリストとしてのソロ最終作も地味な感じのする作品となった。非トラッド系フォーク・アーティストの作風にも似た淡々とした味わいを持つ本作からは、少年が午睡の中で見る夢の一コマをていねいに集めたかのような不思議な安心感を感じることができる。P・フランシス他のサポートも良。　(深民)

SPOOKY TOOTH with PIERRE HENRY



Ceremony:
An Electronic Mass Written by Pierre Henry And Gary Wright

Island ILPS 9107

'70年

Gary Wright:lead-vo,org
Mike Harrison:lead-vo
Andy Leigh:b
Luther Grosvenor:lead-g
Mike Kellie:ds
with
Pierre Henry:electronics

Produce:SPOOKY TOOTH,Pierre Henry

現代音楽、とりわけミュージック・コンクレートの方面では早くからその名を知られたフランスの作曲家、ピエール・アンリ。そのアンリとゲイリー・ライトが組み SPOOKY TOOTH というユニットを媒体にして世に送り出した実験作がこのアルバムだ。けだるく官能的なヘヴィ・ロックに様々なサウンド・コラージュを重ね合わせたもので、他のS・TOOTH の作品とは異なった質感を持つ。多様化を見せた当時のシーンに対する彼らの答えは高く評価できるものだったと思う。またアンリは中期P・FLOYD にも影響を与えておりファンは注目すべき存在だ。　(深民)

SPRING



Spring

Neon NE 6

'71 年

pat Moran:vo,mtn
Ray Martinez:g,mtn
Adrian Bone Maloney:b
Pique Withers:ds
Kips Brown:p,org,mtn

Produce:Gus Dudgeon

G.B.ORGANIZATION

Graham Bond:org
Dick Heckstall-Smith:sax
Jack Bruce:b
Ginger Baker:ds

フレーズ作り自体、さ程垢抜けている訳ではなく部分的には寧ろ泥臭い箇所も見受けられるが、とにかくメロトロンが美しい。使用頻度の高さもさる事ながら「泣き」の手法ばかりに片寄ることなく、明るくのびやかなイメージとも不思議にマッチした極く自然な導入法が特徴的でもある。一方でオルガンや少々渋めのギターもそれなりの働きを見せ、B③ではピアノと歌で静かに聴かせるなどメロトロンばかりが彼らの持ち味という訳でもない。トリプル・メロトロンの情報のみが独り歩きしている嫌いもあるが、再発を機に是非多くの人に聴いてもらいたいアルバムである。　(江田)

STEAMHAMMER



Speech

Ger;Brain 1009

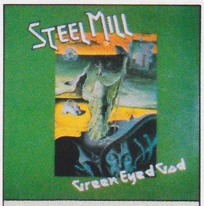
'72 年

Louis Cennamo:b
Mick Bradly:ds
Martin Pugh:g,vo

ProduceSTEAMHAMMER

英本国よりもドイツでの人気が高かったヘヴィ・ブルーズ・ロック・グループ。今となっては、ARMAGEDDON の前身と言った方がピンと来るかもしれない。計4枚のアルバムを発表しているが、3作目の「Mountains」と4作目にあたるこの「Speech」はプログレッシヴな要素も感じられる。A面の組曲はまさにその展型で、『光影』というタイトルからして精神的なものを感じさせる。暗く重い演奏だが、瞑想的な雰囲気の中に曙光を見せているようだ。パートbのメロディは、そのまま、ARMAGEDDON のアルバム冒頭につながっていく。　(後藤)

STEEL MILL



Green Eyed God

Penny Farthing PELS 549

'75 年

Terry Williams:g
Jeff Watts:b
Chris Martin:ds
Dave Morris:key,vo
John Challenger:wind

Produce:?

当時、独ベラフォンからもリリースされていた幻の1枚。'70年代も中半の作だが、イディオムとしては、TOE FAT やHARSH REALITY に共通する'70年代初頭型ゴッタ煮風の消化不良気味サウンド。基本になるブルーズ・ロックにブラス・ロック調ホーン、瞑想風バンブー・フルート等が絡み、頻繁に曲調が折れ曲がる。どっち着かずの音楽性、ミス・マッチ感覚豊かなフルートの多用が、サイケデリックでアンダーグラウンドなムードを強め、曲想に物語性を加える域にまで達している。時折、突出する粘っこいギター・ソロもますます。オルガンレス。気分はマイナー。　(松本)

STILL LIFE



Still Life

Vertigo 6360 026

'71 年

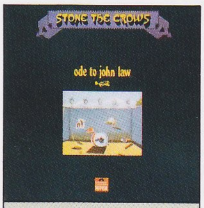
personnel unknown

Produce:Stephen Shane

173

謎の作品が多いヴァーティゴの中で、メンバー名のクレジット等が無い幻の1枚だが、なんと'70年後期に国内盤が人知れず出ていた。内ジャケットを見るとメンバーは4人でフルートやギターも時折聞かれるが、あくまでもハモンドを主体としたサウンドである。AARDVARK や ARCADIUM がパワーで押していたのに対し、この STILL LIFE は流石ヴァーティゴならではの音作りだ。クラシカルなフレーズも導入したアレンジと退廃的なボーカルは、それ自体なにか謎めいたものを感じる。名曲『People In Black』のヴォーカルをピーター・ハミルだと思うのは僕だけでしょうか？。　(Luna)

STONE THE CROWS



Ode To John Law

Polydor Super 2425042

'70 年

Maggie Bell:vo
Les Harvey:g
Jim Dewar:b
John McGinnis:org,p
Colin Allen:per

Produce:Mark London

イギリスを代表するハード・シンガーであるマギーは、アレックス・ハーヴェイと活動をしていた。彼の勧めで実弟レズリーとマギーが中心となり、結成されたグループ。本作は2作目。マギーの泥臭い声に、R＆B色の濃い、全編オルガンを中心としたインストゥルメンタル・パートが多く取られている。そこにレズリーのワウワウを多用した、ヘタウマ的なプレイがフィーチャーされる。B⑤はプログレッシヴな異色作。次作もハードな方向性を持った良作だが、本作はバンドが最高のまとまりを見せる代表作。マギーは解散後「トミー」の初演に参加し、ソロ活動に入る。　(吉野)

STRANGE DAYS



9 Parts To The Wind

Retreat RTL 6005

'75 年

Graham Ward:g
Eddie Spence:key
Phil Walman:b
Eddie McNeil:ds

Produce:Derek Lawrence & Big Jim Sullivan

この作品は、A②前半の初期 FINCH を思わせるインストゥルメンタル部分やB②の GENESIS からの影響が顕著な曲を収録している。全体的にはポップな明るい印象を残すが、各曲、構成のしっかりした佳作揃いである。'75年はパンク〜ニュー・ウェイヴ誕生前夜にあたり、プログレッシヴ、ハード・ロック・グループの多くがメジャー・シーンから消えていった時期であった。EMI 傘下からリリースされた本作も一作限りではあったが、同年発表された DRUID や KESTREL と共通した感覚を持ったグループと言え、ブリティッシュ・シンフォニックの伝統を継いでいた。　(吉野)

STRAY DOG



Stray Dog

Manticore K43506

'73年

Al Roberts:vo,b,key
Snuffy Walden:vo,g
Les Sampson:ds,per,feet

Produce:Greg Lake & Stray Dog

アメリカから渡英したとは言え、本作で聴くことのできるヘヴィ・ロック・サウンドは、'70年代初頭のハード＆ブルーズ・ロックの血気を継ぐものだ。本格派といった腰の座った粘りの強いギターと、単なる'70年代初期ロックの踏襲に止まることのない曲展開が作り出す躍動は正に圧巻。間違っても、所謂プログレッシヴ・ロックではないが、"綺麗"なことに飽き足らないのであれば、この凝ったうねりを聴いてみてもいいだろう。LUCIFFER'S FRIEND までは行かないにせよ、リスナーをはじきとばすくらいの活力はあるゾ。特にA①と②が良い。G・レイクにしては上出来の発見。（松本）

SUNFOREST



Sound Of Sun-forest

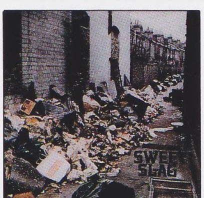
Deram Nova SDN(DN)7

'69年

Terry Tucker:p,harmonium,hcd,org,vo
Freya Hogue:g,ban,vo
Erika Eigen:per,ankle bell,vo
with
Reg Weller,Jim Lawles,John Blanchard:tunea-per
Herbie Flowers,Joe Mudele:b
Dougie Wright,Ronnie Verrel:ds
Jim Sullivan:el-g
R.Mosley,D.Wolfstal:vln
F.Riddle:vla
Malca Cossak:cel
Ralph Eizen,Les London,cliff Haines:tp
John Burden,Andy McGavin:french horn
Harry Smith:fl,piccolo,b-cla
Cecil James:bassoon
Produce:?

音を聴いて SADISTA SISTERS のフォーク版か、ジャケットを見て FOOL のイギリス版か、という印象は、当たらずとも遠からず。いずれにしても、あらたまったような音色の妙な上品さ、つつましやかさは、この時代の紛れもないブリティッシュ感覚には違いない。雑多に構成された作りの中に、ハーモニウム、オーボエ、弦楽器などを導入して、中世音楽色を加えてはみても、それはフォークとポップスの合体というシリアスなものではなく、フラワー・チルドレンによるヒッピー感覚とユーモラスさが強く漂うようものだ。結局は60年代型ポップ色が魅力。唯一の作。（松本）

SWEET SLAG



Tracking With Close-Ups

President PTLS1042

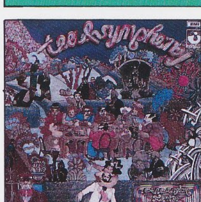
'71年

Mick Kerensky:g
Paul Jolly:sax,cla,fl,oboe
Jack O'Neill:b,tb
Al Chambers:per

Produce:Mike Cooper

この作品、ヴォーカル部分は典型的ブリティッシュ・ロックであるが、どの曲もインストゥルメンタル部分が多く取られているのが特徴である。発表年度から考えると高水準のギター・ソロとフリー・ジャズ的管楽器の演奏を中心にジャズ・ロック色が強い。おそらくリーダーのギタリストであるミックは、ジャズから影響を受けた独自の感覚を持ったスケールアウト奏法を身に付けている。彼はオリー・ハルソール、アラン・ホールズワース、ジョン・エサーリッジと並ぶ逸材である。本作のみで解散し、彼がその後シーンから消えてしまったのはブリティッシュ・ロック界の大きな損失といえる。（吉野）

TEA & SYMPHONY



An Asylum For The Musically Insane

Harvest SHVL 761

'69年

Jeff Daw:g,fl,vo,cel
James Langston:g,kazoo,vo,harp
Nigel Phillips:rec,mdln,vo,org,ds,p,hcd
with
Bob Lamb:ds
Ron Chesterman:b
Mick Hincks:b
Gus Dudgeon:per,ds
Clem Clempson:g

Produce:Gus Dudgeon

TEA & SYMPHONY はハーヴェストに本作と「Jo Saga」(Harvest SHVL 785)を残したナゾの多いバンドだ。本1st アルバムは、その原題が示すとおり、淡い狂気を秘めたかのようなアコースティック・ギターに時に物憂く時に感情的な Vo. と各種管楽器がからむジャズ・ロック、フォーク、チェンバー・ロックのどれとも異なる強烈な個性に彩られたサウンドを聴くことができる。メンバー中、ロン・チェスタートンはサンディ・デニー、STRAWBS のアルバムでその名を見つけることができる。COLOSSEUM 参加前後のクレム・クレムソンもゲスト参加している。（深民）

STUD



September

Ger:BASF 20 29054-9

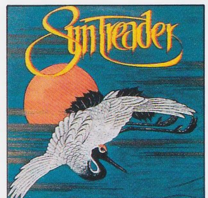
'72年

Jim Cregan:g,vo
Richard McCracken:b
John Wilson:ds
John Weider:vln,p,vo

Produce:Billy Kennedy

BLOSSOM TOES のジムとポスト CREAM と言われた TASTE のリズム・セクションが合体したトリオ編成のグループ。'71年にデビュー。2作目である本作は、FAMILY よりジョンを迎え制作されている。A④のリラックスしたスワンプやB⑤のテクニカルなカントリーが収録されているが、フォーク・タッチの枯れた味わいの曲が多い。又ブリティッシュの哀愁を漂わせるヴァイオリンが全編フィーチャーされている。B②アコースティック・ソロ等、中心人物ジムの渋い個性が良く表れた作品。ジムは FAMILY を経て、R・スチュアート・バンドに参加。（吉野）

SUN TREADER



Zin-Zin

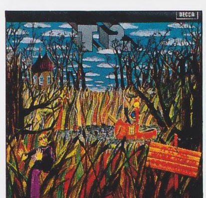
Island HELP 13

'73年

Morris Pert:ds
Peter Robinson:el-p
Alyn Ross:b

クリス・ファーロウとしばらくパリで仕事をした後、QUATERMASS を結成したピーター・ロビンソンは、グループ解散後、この SUN TREADER をモーリス・パート等と結成する。本作のサウンドは大きく分けて2分されており、ピーターがメインとなった曲は、反復するリズムの上をピーターがソロを取る軽快なナンバーで、一方、モーリスが主導権を握る曲は、パーカッション群を加えた実験的な作風である。2人共器用なミュージシャンだが、いかにもセッション的な内容なのが残念ではある。'76年のモーリスのソロの片面にもこのグループの演奏が収録されている。（山崎）

T. 2.



It'll All Work Out In Boomland

Decca SKL 5050

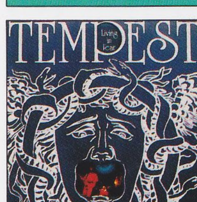
'70年

Keith Cross:g,key,vo
Peter Dunton:ds,lead-vo
Bernard Jinks:b,vo

Produce:T2 & Peter Johnson

'70年初期のデッカにもヴァーティゴのように一言で音楽性を言い表せない作品が数多く残されているが、このT2も1枚のアルバムを残して消滅してしまった謎めくグループである。屈折したアレンジのヘヴィ・ロックと言えるサウンドは、'70年代初期のブリティッシュ・シーンを象徴するものだが、メロトロンをバックに叙情的に盛り上がるA②はイギリス的と言うよりヨーロッパ大陸的なイメージを思わせ、組曲風に展開するB面もヘヴィな部分と叙情的なパートの対比が素晴らしい。英国的ユーモアあふれるジャケットも秀作である。（Luna）

TEMPEST



Living In Fear

Bronze ILPS 9267

'74年

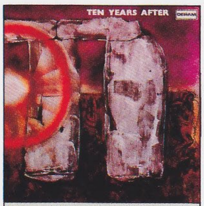
Te:TECP-25454

Jon Hiseman:ds,per
Ollie Halsall:g,syn,p,vo
Mark Clarke:b,vo

Produce:Gerry Bron

A・ホールズワース、P・ウイリアムスが脱退し、元 PATTO のオリー・ハルソールを迎え制作された2nd アルバム。名盤といわれる1st では〝小編成バンドの可能性追求〟をテーマにしたJ・ハイズマンと、ホールズワースの思わくにズレが生じた部分も感じるが、よりコンパクトでタイトなユニットとなった本作では、ポップな側面を随所に折り込み、小編成ハード・ロックの可能性をとことん追求した作品に仕上げている。独自のシンコペイション、複雑なフィル・インなどテンションの高さは絶品。COLOSSEUM、PATTO を研究する上では欠かせない名作だろう。（深民）

TEN YEARS AFTER



Stonedhenge

Deram SML 1029

'69 年

Alvin Lee:g,vo,p
Leo Lyons:b
Ric Lee:ds,tym
Chick Churchill:org, p,celeste
with
Mike Vernon:b-vo
Roy Baker:effects
Martin Smith:effects
Count Simon De La B-edoyere:bongos
etc...

Produce:Mike Vernon

アルヴィン・リー率いた英ブルーズ・ロック・グループ。この3作目から続く「Sssssssh」「Cricklewood Green」へと一時代を築いた後、中途半端なポップ志向が災いし、低迷、解散と再編を繰り返した。この3作目では、サイケデリック・ムーヴメントを受けてか、独自のジャズ感覚のあるブルース・ロックに、スペイシーなムードやサイケデリックな音色、ギミック調の音づくりを吸収して異彩をはなっている。陰うつなムードが、ゆったりと漂うようなA①、B①〜③は、その代表曲。実験色を取り入れながらも独自のものとできたこの時期の彼等は先鋭的だった。（松本）

THIRD EAR BAND



Third Ear Band(Air, Earth,Fire,Water)

Harvest SHVL 773

'70 年

Glen Sweeny:per
Paul Minns:oboe
Richard Coff:vln,vla
Ursula Smith:cel

Produce:Andrew King

チェンバー・ロックの元祖とか、呪術的秘儀教団（？）などと呼ばれ、暗いイメージの定着している彼等だが、実はその真価はこのセカンドにある。他4作の中世的で重苦しい陰鬱な世界に比べ、大地に根ざしたおおらかさと空間的な拡がりが感じられる。ハンド・ドラムの単調なリズムと交錯する即興的なヴァイオリンやオーボエが、心地良い浮遊感と催眠効果をもたらし、テーマである〝天地火水〟を誰もが思い浮かべるイメージに違わず見事に描き出している。昨今のエスニック・ブームの軽いノリとは違い、彼等にはより根源的な生命の〝うねり〟を感じとることができる。（高森）

TIME



Time

Buk BULP 2005

'75 年

Gary Margetts:g,key, vo
'Jade' Leigh:ds,per, vo
Triss Margetts:b,vo
Alec Johnson:g,vo

Produce:Cony Plank

ドイツの鬼才プロデューサー、故コニー・プランクの偉業がまた一つ。個性ある快心の英ハード・ロックを演っていたSPONTANEOUS CONBUSTION、そのマーゲッツ兄弟が、プランク氏の力量を得て放った快作。ひきしまりある彼の音づくりに、硬質なギター・サウンドが合致し、変則パターンをこなしたプログレッシヴな内容である。高度なギター・テクニックとヘヴィなリズム・セクションがつくる金属的な音空間は、想像以上の抒情性をも持ち合わせている。外見上、ハード・ロック調だが、その実、ギターによるプログレッシヴ・ロックそのもの。名作である。（長谷川）

TITUS GROAN



Titus Groan

Dawn DNLS 3012

'70 年

Stuart Cowell:g,org, p
Tony Priestland:sax, fl,oboe
John Lee:b
Jim Toomey:ds,per

Produce:Barry Murray

マーヴィン・ピークのファンタジー3部作からその名をとったTITUS GROANは、ブリティッシュ・ジャズ・ロック・シーンの中でも、ジャズ的要素をうまくバンドの中に消化させ、独自の音世界を作りあげることに成功したバンドだった。各人が数種の楽器をこなし、深みと広がりを持ったサウンドに加え、当時としては優れていたと思われる構成の妙も手伝い、明るさは感じられないものの、変化に富んだプログレッシヴ感覚あふれるサウンドを作り出している。S. F. M. からの再発盤はシングルとして発表された曲を加えたもので、この曲の出来もよい。（深民）

TOMORROW



Tomorrow

Parlophone PMC7042

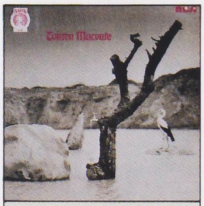
'68 年

Keith West:vo
Twink:ds
Steve Howe:g

Produce:Mark P.Wirtz

'60年代後半のサイケデリック・ムーヴメントの中から出たバンド。主にUFOクラブなどで活躍。彼らが残した唯一のアルバムは一聴した限りではサイケデリック・イディオムを導入したビート系サウンドで、カヴァー曲等に見られるようにBEATLESの影響下にあったように思われるが、エフェクター処理によるギターのシーケンサー的使用、テープの逆回転などを多様したそのサウンドの質感は、'70年以降のドイツ・エレクトロニクス派バンドとの共通点も多々見られ興味深い。YES加入前のS・ハウの参加作というだけでなく、もっと積極的に評価してもらいたい作品だ。（深民）

TONTON MACOUTE



TontonMacoute

RCA Neon NE 4

'71 年

Chris Gavin:b,ac&el-g
Dave Knowles:sax,fl, cl,vo
Paul French:org,el-p, vib,vo
Nigel Reveler:per

Produce:TONTON MACOUTE

キーフによる幻想的なジャケットに包まれた、RCAネオンのレア・アイテムのひとつ。いかにもブリティッシュ然としたくすんだ色あいを持つジャズ・ロック的なサウンドを持ったバンドで、全体的には非常に地味な印象を受ける作品だ。ピアノ、オルガン等のキーボード類とヴィブラホンを担当するポール・フレンチとサックス、フルートなどを担当するディヴ・ノウルスの淡々としたインタープレイの応酬にはハデさこそないが、ブリティッシュ・ジャズ系ミュージシャンの底力を感じることができる。このバンドの繊細さはブートでは絶対伝わらないので要注意。（深民）

COLIN TOWNS



Full Circle

Virgin V 2093

'78 年

Colin Towns:all instruments,vo,per
Mark Nauseef:per

Produce:Colin Towns

元GILLAN（IAN GILLAN BAND）のキーボード／フルート奏者であるコリン・タウンズが同名映画のサウンドトラックとして制作した初ソロ・アルバム。IAN GILLAN BANDは随所にジャズ・ロックやプログレッシヴ・ロックの香りを漂わせていたが、ここで披露された彼の音楽性は完全にプログレッシヴ・サイドのもので、シンセサイザーを中心に、時にサティを思わすピアノも交えた情景描写的な音造りには、詩的で透明な叙情が感じられる。彼は'81年にトータル・コンセプト性を持った2作目のソロ「Making Faces」を発表。新たな活躍が待ち望まれる逸材と言えるだろう。（高山）

TRAFFIC



Dear Mr. Fantasy

Island ILPS 9061

'67 年

PS:P32D-50002

Steve Winwood:org,g, b,p,hcd,per,vo
Jim Capaldi:ds,per, vo
Chris Wood:fl,sax,org,vo
Dave Mason:g,mtn,sitar,tabura,b,vo,shakkai

Produce:Jimmy Miller

SPENCER DAVIS GROUPではR＆Bタイプの音楽をプレイしていた天才少年S・ウィンウッドがディヴ・メイソンらと結成したのがこのTRAFFIC。デビュー・アルバムにあたる本作では、それぞれのミュージシャンが持ち合ったロック、フォーク、ジャズ、R＆Bをうまくミックスし、時代を反映したサイケデリック色を加え完成させた名作。万華鏡をのぞきこんだかのようなカラフルなサウンドで、本作以降はどんどん職人気質のロックに変化していく。インドからスコットランドまでエスニックをごった煮にしたような感性もまぶしかった。（深民）

TRAPEZE



Trapeze

Threshold THS 2

'70 年

TRAPEZE

Glenn Hughes:b,vo
Melvin Galley:g
Dave Holland:ds,per
Terry Rowley:org,p,mtn,fl
John Jones:tp

Produce:John Lodge

'69年、結成。設立間もないスレッショルドと契約する。本家 MOODY BLUES と同様にアンサンブル重視のメロディを優先させる音楽性を持ち、コンセプト・アルバムとなっている。余りに本家と似ていたため当時の評価は低かったようだが、やはり'74年D・PURPLEへ参加するグレンの歌唱力は特筆すべきである。本作の商業的不成功が原因となりメンバー間の対立が生じる。そして作曲面においてもバンドの中心人物であったテリーとメルヴィンは脱退。2作目以降トリオのハード・ロック・バンドに変身。'81年迄活動し7枚の作品を残した。　（吉野）

TRIFLE



First Meeting

Dawn DNLS 3017

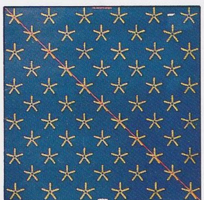
'71 年

George Bean:vo,per
Dick Cuthell:fl-horn,tp,per
Barrie Martin:sax,vo,per
Alan Fealdman:org,p,per
John Hitchen:g,vo,p-er
Patrick King:b,vo
Chico Greenwood:ds,per

Produce:John Schroeder

Dawn レーベルより'71年にデビューしたブラス・ロック・グループ TRIFLE の唯一のアルバム。メンバーは全員白人だが、ソウルフルな演奏を聴かせる。A③は、MANFRED MANN CHAPTER Ⅲの作品だが、音楽的にも影響下にある。'70年から'71年にかけて、英国でも多数のブラス・ロック・グループが生まれたが、このTRIFLEが他と一線を画しているのがA④B②④といった曲の存在である。米国のグループには聴かれない、英国の伝統を感じさせる作品となっている。ベーシストのパット・キングは、'78年から MANFRED MANN'S EARTH BAND に参加している。　（後藤）

Nik Turner's Sphynx



Xitintoday

CharismaCDS4011

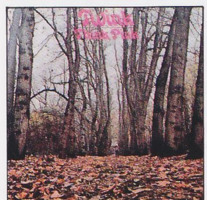
'78 年

Nik Turner:fl,sax,vo,syn
Stiv Hillage:g,syn
Tim Blake:syn
Miquette Giraudy:syn,bell
Mike Howlett:b
Malcolm Ashmore:ds
Alan Powell:conga
Morris Pert:per
Hari Williamson:ac-g
Jeremy Gilbert:harp
Jalib:tablais

Produce:Steve Hillage

N・ターナーはデイヴ・ブロック、故ロバート・カルヴァートと並んで初期 HAWKWIND の中心的人物。'77年に脱退後、GONG のメンバー等を集め、本作を制作している。HAWKWIND 時代には8割以上の比率でサックスをプレイし、フルートを持つことは時々でしかなかったが、ここではその比率が逆転し、フルート中心のプレイになっている。サウンド的にはスペーシーかつ、メディテイショナルなもので、HAWKS と GONG の接点が良く理解できる作品と言えよう。ちなみにターナーのパートはギザのピラミッドの王室の石棺の中で録音された。　(Chihiro S.)

TWINK



Think Pink

Polydor 2343 023

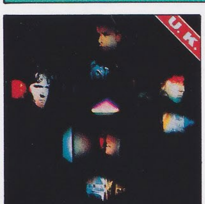
'70 年

Duncan Sanderson:g
Steve Took:p
John Alder (Twink):ds

Produce:Mick Farren

掛値なしの、ブリティッシュ・サイケの真髄を極めた一作。その意味では、時代や状況が生んだともいえるが、そのうねる様な感覚は、今の耳で聴いても、凄み充分。一方の雄、ミック・ファレンが分裂傾向にあるのに対し、このトゥインクは偏執症的嗜向がありありとみえる。千鳥足風の音作りは、似たりよったりだが、トゥインクの方が音楽的素養があるとみえ、随所にはっとさせる所がある。ハード・ロックあり、オリエンタリズムありと、バトルロイヤル的な所が嬉しくなってしまう。見ための薬漬け的いい加減さとは裏腹、存外よく練られた作品であることには違いない。　（法水）

U.K.



U.K.

Polydor 2302 080

'78 年

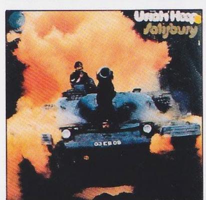
VJ:VJD-28048

Eddie Jobson:el-vln,key,electronics
John Wetton:vo,b
Allan Holdsworth:g
Bill Bruford:ds,per

Produce:U.K.

パンク・ロック全盛のイギリスに、'70年代のブリティッシュの伝統を守り続けたバンドが突如としてデビューした。バンド名もそのもの〝UK〟である。行き詰まりを見せていた当時の〝プログレ界〟において、彼らはポップに陥いることもなく、安定した演奏と、完成度の高い作品を聴かせてくれた。この後バンドからブルッフォード、ホールズワースという〝ジャズ組〟が脱退するが、名手テリー・ボジオが加入し、2作目を発表、よりシンフォニックでダイナミックなサウンドへと発展して行く。が、日本でのライヴ・アルバムを発表後、解散してしまった。　（神山）

URIAH HEEP



Salisbury

Vertigo 6360 028

'71 年

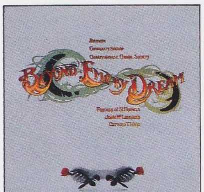
Te:TECP-18011

David Byron:vo
Ken Hensley:org,p,g
Mick Box:g
Paul Newton:b
Keith Baker:ds

Produce:Gerry Bron

現在も第一線で演奏を続ける URIAH HEEP、ヴァーティゴ時代に発表したセカンド・アルバムである。彼らのハード・ロック・バンドとしての音楽的、商業的ピークが本作後の第3作「Look at Yourself」以降の3作に集約されている事は今さら説明の必要もあるまいが、未だ自らのサウンド・スタイルを暗中模索する中で製作された本作には、未完成ながら'70年代初頭のブリティッシュ・ロックの息吹きが感じられる。とりわけB面の大半を費やしたタイトル曲においては、ブラスを中心とした管楽器隊を全面的に導入し、いかにもヴァーティゴらしい佳曲に仕上げられている。　（城元）

V. A.



Beyond An Empty Dream

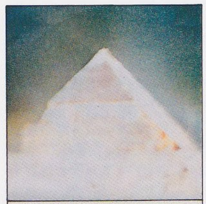
Charisma CAS1101

'75 年

ANAWIN,CAPABILITY BROWN,CHARTERHOUSE CHORAL SOCIETY,FRIENDS OF ST. FRANCIS,John McLaughlin,Clifford T. Ward

教会のチャリティー・レコードとしてリリースされた本作は、GENESISのマイク・ラザフォードとアンソニー・フィリップスが名を連ねるチャーターハウス・コーラル・ソサエティが収録されている事で知られるカリスマ・レコードのオムニバス・アルバム。各アーティストの曲想も教会音楽的な物が多く、少年少女合唱を導入した賛美歌風のアレンジの作品もある。特に、CAPABILITY BROWN によるラスト曲は RARE BIRD のヒット曲のカヴァーだが、パイプ・オルガンにオーケストラの絡むアレンジが西欧の歴史をも伝えるかのように荘厳な響きを湛えている。(Luna)

V. A.



The Electric Score

Revolution REV 1～3

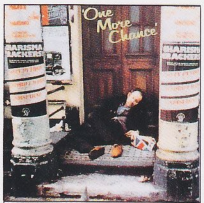
'73 年

RRATEFUL DEAD
BRINSLEY SCHWARZ
MIGHTY BABY
Marc Bolan
Pete Townshend
David Bowie
HAWKWIND
SKIN ALLEY
GONG
PINK FAIRIES
EDGAR BROUGHTON BAND

Produce:?

現在でも開催されているグラストンベリー・フリー・フェスティバル'71年の模様を伝える3枚組作品。ノッティンヒル・ゲイト一派を中心とした、当時のアンダーグラウンド界の大物達が集まっている。しかしこのフェスティバルからのライヴ収録は3組（☆）のみである。3組共ジャンキーのために演奏時間の長いインプロヴィゼイション中心のトリップ・ミュージックを演奏。本作と同時期リリースされた2種類のグリージー・トラッカーズ・ライヴとの共通性は見逃がせない。なおブックレット、2枚の4つ折りインサート、銀色のピラミッド型切り抜きが付されている。（吉野）

V. A.



AUDIENCE,MONTY PYTHON,GENESIS,Clifford T. Ward,CAPABILITY BROWN,JO'BURG HAWK,Alan Hull,Graham Bell with ARC,VAN DER GRAAF GENERATOR,JACK THE LAD,THE NICE,RARE BIRD,STRING DRIVEN THING,LINDISFARNE

One More Chance

Charisma CLASS 3

? 年

カリズマ・レーベル初期のオムニバス。B③、④は、各々「The Nice」、「As Your Mind Flies By」からのテイクといったLP収録曲の他、A③、B①、⑤のようなシングル曲が収録されていて貴重。特にB①は、絶頂作「Pawn Hearts」期のもの。教会オルガン風のとどろきから、印象的なメロディーが続く典型的なV. D. G. Gサウンドである。力強くまとまりも十分。この曲は4作目の米盤初回プレスにのみLP収録された。小粒な曲想ながらA③も、ファン心理をかき立てることは言うに及ばず。後にBAY CITY ROLLERSが大ヒットさせた原曲B⑤も印象的。（松本）

V. A.



Robin Lumley,Jack Lancaster,Gary Moore,Julie Tippetts,Manfred Mann,Pete Haywood,Percy Janes,Cozy Powell,Garry Brooker,John Goodsall,Phil Collins,Andy Pyle,Keith Tippett,Stephane Grappelli,Alvin Lee,Dave Marquee,Henry Lowther,Eno,Chris Spedding,John Hiseman,Bill Bruford,Bernie Frost,Bob Sargeant,Erika Michailenko

Produce:Jack Lancaster,Robin Lumley & Dennis McKay

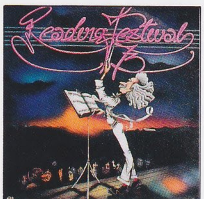
Peter And The Wolf

RCA RL 12743

'78 年

「火星探検」でおなじみラムレイとランカスターのセッション・アルバム。BRAND Xのメンバーはもちろん、他にも超豪華ゲストが多数参加している。プロコフィエフの楽曲を題材にしているが、アレンジがやや消化不良気味で、ゲスト陣も力量を持て余している感あり。しかし、めったにお目にかかれない組合せが多数あり、特にBRAND Xのリズム隊にクリス・スペディングのギターやステファン・グラッペリのヴァイオリン、イーノのシンセ等がからむ部分は原曲を忘れて思わず手に汗をにぎってしまう。気軽に好みのプレイヤーの演奏を聴く分には楽しめるアルバム。（内田）

V.A.



Rory Gallagher
STRIDER
GREENSLADE
STATUS QUO
THE FACES
Andy Brown
Lesley Duncan
Tim Hardin

Produce:Ron Neverson

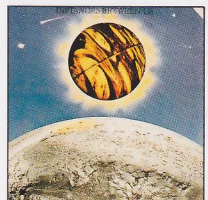
ReadingFestival '73

GM GML 1008

'73 年

'80年以降、完全にHM／HR系とポンプ系に占領されてから、レディングの客というのは退屈だと明らさまに拒否反応を示す（ビン関係の投げ入れ）ので有名だが、本誌読者の興味の対象であるGREENSLADEがもし、タイム・スリップして現在に登場したら……。恐しくてとてもこれ以上は書けない。1973年8月24日〜26日に開催された第13回レディング・フェス。'70年代はよかったというのは年寄りのたわ言ではない。HM／HRやProg.などの冠を必要とせず、このLPに収録された様々なタイプのバンド全てが“ROCK”と呼ばれていた時代だったからこそ今、重要なのだ。（川上）

ADRIAN WAGNER



Andian Wagner:syn,mtn,org,clavinette,p,vo
Robert Calvert:vo
Pauline Roberts:vo
Nick Hodgson:per

Produce:Adrian Wagner

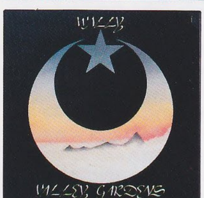
DistancesBetween Us

Atlantic K 50082

'74 年

ワグナーの血筋を引いている彼のデビュー作。A面は彼の多重録音により、混沌としたオープニングからA・ブラウン的なシアトリカルなヴォーカルへ移る。そしてシークエンサーをバックにシンセサイザー・ソロが加わり、全体に様々なサウンド・コラージュが施された曲。B面も同じ雰囲気。サイケデリック色が強いが、発表年度からみると時代錯誤である。初期TANGERINE DREAMの実験的な面と、HAWKWINDやGONGのスペース・トリップ感覚の影響が強い作品。カリズマ移籍後の2作は、バンド形態を取り、トータル・アルバムとして制作されている。（吉野）

WALLY



Pete Cosker:g,vo,b
Nick Glennie:key
Paul Middleton:g,b
Roger D. Narraway:per
Pete Sage:vln,b
Roy Webber:lead-vo,ac-g

Produce:Bob Harris & Wally

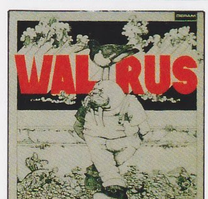
ValleyGardens

Atlantic K 50180

'75 年

リック・ウエイクマンとボブ・ハリスの共同プロデュースと言う肩書きのファースト・アルバムを'74年にリリース。美しいペダル・スティール・ギターとヴァイオリンの絡みが印象的だったファースト・アルバムは、全体的なまとまりに欠けているように思え、このセカンドを選んだ。本作でも、ペダル・スティールとヴァイオリンは健在で、B面の組曲等、音作りに数段の進歩が見られる。彼らの場合、明るいシンフォニックとも言うべきサウンドを得意とし、湿った音作りの多いブリティッシュの中では貴重である。M・ポルナレフのバックで来日経験あり。（Luna）

WALRUS



Steve Hawthorn:b
John Scates:g
Nick Gabb:ds
Roy Voce:sax
Bill Hoad:sax,cla,fl
Roger Harrison:ds,per

Produce:David Hitchcock

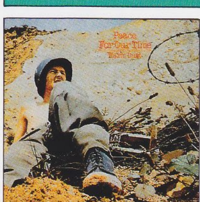
Walrus

Deram SML 1072

'70 年

数多い英国ブラス・ロックの中でも独特で不思議な魅力を持ったグループである。絞り出すようなヴォーカルも特徴だが、バンドのヘヴィさを際立たせているのはベースである。曲の構成は随分凝っているが、そんな中でもパーカッションのみのフレーズになってみたり、アコースティックな曲を用意したりと、バンドの器用さを物語っている。この作品を価値のあるものにしている要因は、メンバーの力量もあろうが、やはりプロデューサーとしてのデヴィッド・ヒッチコックの存在もあるだろう。たった一枚のアルバムで消えてしまうには惜しいバンドであった。（後藤）

WARM DUST



Paul Carrak:org,p,timpani,vo
Les Walker:vo,hca,vib,shaker
Keith Bailey:ds,conga,marraccas,vo
Terry Comer:b
Alan Solomon:sax,fl,cla
John Surguy:sax,fl,oboe

Produce:John Warsley

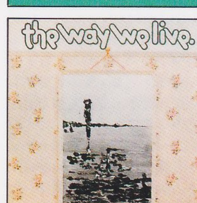
Peace For Our Time

Trend TNLS 6001

'70 年

2作目である本作はあのティモシー・リアリー著書の「POLITICS OF ECSTASY」を基に戦争と平和を表わしたコンセプト作である。このバンドは二人のリード奏者を含む本格的ブラス・ジャズ・ロック・バンドであり、ハモンドを中心としたインストゥルメンタル部分を充実させ聴き応えのある作品となっている。1と3作目はドイツ盤のみリリース。次作（ラスト作）はテクニック的に向上したが、イージー・リスニング的印象が残る。レスは後にソロ作品を発表しTIGERへ参加、又ポールとテリーはウエスト・コースト志向のグループACEを結成。（吉野）

THE WAY WE LIVE



Jim Milne:g,b,p,org,vo
Stephen Clayton:per

Produce:John Brierley

A Candle For Judith

DandelionDAN8004

'71 年

両者のプロジェクト、WAY WE LIVEの唯一の本作は、エレクトリック・ナンバーとアコースティック・ナンバーとに二分された構成になっている。前者はブルーズ・ロック色が強く、後者はブリティッシュ・フォークのかげりあるメロディアスさが印象的である。どちらの方向性が主体だったかは、この後、彼らが改名したTRACTORの音楽性が、実験色を帯びたハード＆ブルーズ・ロックだったことで示されているのかもしれない。が、当レーベル・カラーだったフォーク傾向を受けた様な本作でのアコースティック志向には、捨て難いものがある。初々しさを感じる。（長谷川）

WEB



I Spider

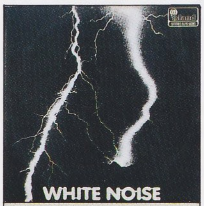
Polydor 2383 024
'70 年
Edi:ERC 29230

Dave Lawson:org,p,hc-d,mtn,vo
Lennie Wright:ds,vib,tym,conga,guiro
Kenny Beveridge:ds,bongoes,woodblock,jawbone
Tom Marris:sax,fl
Tony Edwards:el & ac-g
John Eaton:b

Produce:Lennie Wright

デラムからの前2作は共にプロデュースをブルー・ホライゾン（ブルーズ系レーベル）創設者マイク・ヴァーノンが担当。彼の黒人音楽に対するこだわりがアフロ的ジャズ・ロックという形で表われていた。移籍後の本作はキーボードとヴォーカルにデイヴ・ロウソンを迎えている。彼は全曲のコンポーズも行ない、バンドも前作迄とは性格の異なった演奏を聴かせるようになる。オルガンを中心としたブリティッシュの伝統といえる特有の陰りのあるサウンドに、ブラスが静と動の対比を見事に描きだした独自の世界を作り上げている。後にSAMURAIへと発展した。（吉野）

WHITE NOISE



An Electric Storm

Island ILPS 9099
'69 年

David Vorhaus:compose,effects
Delia Derbyshire:electronics
Brian Hodgeson:electronics
Paul Lytton:per
John Whitman:vo
Annie Bird:vo
Val Shaw:vo

Produce:David Vorhaus

デヴィッド・ボウハウスのソロ・プロジェクトWHITE NOISEの1作目。ボウハウスの作り出す音楽はいわゆるシンセサイザー・ミュージックで、A面は昨今のワールド・ミュージック、特にアラブ的な旋律にシンセサイザーで味付けした様なサウンドで新鮮である。'69年制作という事を考慮せずともある程度の評価は下せるものの、やはりB面などを聴く限り、アメリカ、ドイツのミュージシャンの方が電子音抽出にかけては一枚上手という感がある。尚、'75年制作の2作目は同傾向のサウンドながら、バルトークの影響下にある組曲で、より進歩した姿を見る事が出来る。（宇藤）

WISHBONE ASH



Argus

MCA MDKS 8006
'72 年

Andy Powell:g
Ted Turner:g
Martin Turner:b
Steve Upton:ds

Produce:Derek Lawrence

ツイン・リードの絶妙な絡みで人気を博したW・ASHの3作目。このアルバムは彼らの最高傑作であると同時に、ブリティッシュ・ロック史上に残る不朽の名作といってもよいだろう。曲の良さもさることながら、大作を中心としたA面、トータルな流れを感じさせるB面というアルバムの構成も抜群である。又、彼らのライヴ・アクトも評判が高く、5作目の「Live Dates」ではスタジオ・テイク以上にインパクトのある演奏を聴かせてくれる。トラッドの要素も取り入れた哀愁をさそうメロディ・ライン、アンディとテッドのぴったり息の合ったツイン・リード、これぞ大英帝国。（佐藤）

WIZZARD



Wizzard Brew

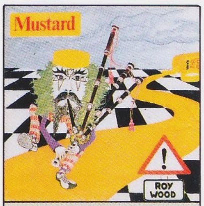
Harvest SHSP4025
'73 年

Roy Wood:vo,g,sitar,cel,bsn,sax,b,tuba
Rick Price:b,vo
Bill Hunt:p,hcd,hrn,tp,bugle,euphonium,tuba
Hugh 'H' McDowell:cel,syn
Nick Pentelow:sax,cla,fl,vo
Mike Burney:sax,cla,fl
Keith Smart:ds

Produce:Roy Wood

ロイ・ウッドが永年温めていたアイデアを実現させたのがELOだが、結局デビュー作のみで脱退し後に結成したのがWIZZARDである。彼のジャズ志向と実験的な面が色濃くでており、全6曲（A②は15分近い大作）、ポップ色は薄い。'74年に次作ロカビリー色の濃い「Eddy And The Falcans」、シングル編集アルバム「See My Baby Jive」を発表し、新たに'77年にアニー・ハスラムが参加したWIZZOを結成した。WIZZOはアニーのソロ「Annie In Wonderland」に参加しており、プロデュースもロイが手掛ている。（吉野）

ROY WOOD



Mustard

Jet Super Jet LP12
(2310 418)
'75 年

Roy Wood:vo,g,sitar,cel,bsn,sax,b,tuba,bugle,ds

Produce:Roy Wood

ロイ・ウッドのポップ全開作「Boulders」に続くソロ2作目。彼はマルチ・プレイヤーで多様な音楽志向を持ったメロディー・メーカーであり、グループ活動（WIZZARD）を並行させる等、一部ではイギリスのトッド・ラングレンと言われている。本作も全て自作自演、ジャケットも彼に依るもの。様々なスタイルの曲が収められており、彼の集大成的作品といえる。A③のバラードではアニー・ハスラムがコーラスで参加。その後'79年にアメリカ盤のみの「On The Road Again」（ジョン・ボーナム参加）そして'86年「Starting Up」を発表。（吉野）

THE WOODEN O



A Handeful Of Pleasant Delites

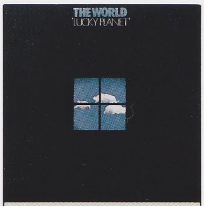
Middle Earth MDLS 301
'69 年

James Harpham:rec,sopranino
Christopher Taylor:rec,sopranino
Arthur Watts:str & el-b
with
Hugo D'alton:mdn
David Snell:harp

Produce:Austin John Marshall

'70年の超マイナー・レーベルに残された更に知名度のない一作。趣味性の高い作品だ。全曲に及んでリコーダーとソプラニーノが中心になり、一見、古楽調だが、その踏襲ではない。トラディショナル・フォーク色、ジャズ色などを持ち合わせており、特にウッドベースの刻みはジャズそのもので、これが全体に渡って物を言う。意外とジャズ感覚が先行する。古風で質素なイメージながら、遊び感覚にも似たバラけた感覚が、ややもすると稚拙な印象を与える。似てはいるが、CONTINUUMやGRYPHONの2作目などとは比較しづらい音楽性だ。（松本）

THE WORLD



Lucky Planet

Liberty LBG 83419
'70 年

Neil Innes:lead-vo,p,g
Dennis Cowan:b,g,vo
Ian Wallace:ds,vo
Roger Mckew:lead-g

Produce:Neil Innes

BONZO DOG BANDの中心メンバーであったニール・イネスが、解散後の'70年に結成したバンド。全曲イネスの手に依るものでカントリー・ポップ調の曲が多い。ハイライトはイアンのドラムをフィーチュアしたA③であろう。本作のみで解散し、その後イネスは、SCAFFOLDとLIVERPOOL SCENEのメンバーと共にGRIMMSを結成する一方、RATTLES（BEATLESのパロディー・バンド）ではJ・レノンの役で参加した。又ポップで完成度の高いソロ作品もコンスタントに発表している。なおドラムのイアン・ウォーレスは後にK・CRIMSONに参加する。（吉野）

WRITING ON THE WALL



The Power Of The Picts

Middle Earth MDLS303
'69 年

Jimmy Hush:ds
Bill Scott:key
Willy Finlayson:g,vo
Jake Scott:vo,b
Linie Peterson:vo
with
Alby Greenhalgh:wind

Produce:Dave Howson

'60年代のイギリスの音楽シーンは、アメリカの様々に確立されたジャンルの音楽やムーヴメントを取り入れた。それに独自の解釈を施し、スタイルを確立させていた。VANILLA FUDGEに代表されるサイケデリック感覚のオルガンを中心としたサウンドは、当時アート・ロックと呼ばれた。その影響が顕著な両極が、EYES OF BLUE（ポップ）であり、本作（ハード）である。その意味では、第一期DEEP PURPLEと共通点が多くある作品でもある。B②のボレロをはじめ、クラシックの要素も取り入れている。全体的にブリティッシュ特有の重さを感じる。（吉野）

ZAKARRIAS



Zakarrias

Deram SML 1091

'71 年

Zakarrias:vo,g,b,kazoo
with
Martin Harrison:ds
Peter Robinson:key
Geoff Leigh:sax,fl
Don Gould:p,str-arr

Produce:Roger Watson

この１枚は、独特の空間幅あるサウンドと内面性を強調した詩によって、彼のアーティスト気質を感じさせるには充分だ。リードする歪んだベース音、もしくはアコースティック・ギターと、他楽器との間に生じる妙な異和感、そして彼の魅力的な歌声ともに特徴がある。詩はシンプルなだけに強烈だ。自虐的でいてどこか冷めた見方に貫かれている。音こそヘヴィだが、ハード・ロック形態とは無縁のもの、個性で推すシンガー作だ。荒削りな印象は否めないとしても、音以前が大切。後のカンタベリー派ジョフ・レイ、QUATERMASS のＰ・ロビンソンの参加にも注目。（松本）

THE ZOMBIES



Odessey And Oracle

CBS S63280

'68 年

Te:22DN-24

Rod Argent:key,mtn
Chris White:b
Colin Blanstone:vo
Paul Atokins:g
Hugh Grandy:ds

Produce:Rod Argent

'64年「She's Not There」でデビューした ZOMBIES は、'65年「Begin Here」等アルバムを発表した後、'67年に解散している。シングル志向のグループだったが、スマッシュ・ヒットＢ⑥を含む本作は、解散後の未発表作品集であり、当時、主流だったビート系グループとは異なり、'60年代後期イギリスの良き時代を偲ばせる中期 BEATLES の流れを汲むコーラス主体のポップな曲で占められている。後にソロ・デビューするコリン・ブランストーン、そしてリーダーのロッド・アージェントを中心に、メロトロンを導入した英プログレッシヴ・ロックのルーツにある作品。（吉野）

CATALOG FOLK

ALUN ASHWORTH-JONES



Al Jones

Parlophone PMC 7081

'69 年

Alun Ashworth-Jones
with
Percy Jones:b
Spike Heatley:b
Harold McNair:fl
Brian Dodson:ds
Gordon Huntley:steel-g

Produce:Sandy Roberton

霧深い森の奥から流れる空気のように湿った翳りのある静けさが、アルバム全体を支配した、英国臭の強い作品である。千変万化するアル・ジョーンズのアコースティック・ギターを中心に、ヴァイオリン、スティール・ギター、フルートがからみ、メロディも起伏に富んでおり、飽きさせない。全体のイメージは、静けさということになるが、一本調子ではない点とメリハリの中に活かされる滑らかさが、受け入れられるだろう。キース・クリスマス、シェラ・マクドナルドと同じく、セプテンバー・プロダクションの作品である。（長谷川）

MIRIAM BACKHOUSE



Gypsy Without A Road

Mother Earth MUM 1203

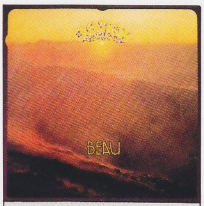
'77 年

Miriam Backhouse:vo,vla,g
Julia Etheridge:p,fl,vln
Brian Etheridge:b,cel,mtn,vo
Stephen Delff:dulcimer
Jock Cammings:per

Produce:Saffron Summerfield

一曲目から、チェロ、ヴァイオリン、ヴィオラ、ベースをバックに、ミリアムの感情をおし殺そうとしつつも、優しさがにじみ出てしまうヴォーカルに魅了されてしまう。とてもハートフルなアルバムで、夢見心地でイギリスの片田舎の雰囲気にひたれる。Ａ③では、この手のアルバムでは珍しく、メロトロンが登場し、素朴な音色ながら、曲に彩りをつけている。トラッド色もあまり感じられないので、プログレッシヴ・ロック・ファンには、充分に受け入れられるだろう。曲名にも注目してもらいたい。（長谷川）

BEAU



Creation

Dandelion DAN8006

'71 年

C.J.T.Midgley(BEAU):g,vo
with
Jim Milne
Steve Clayton

Produce:?

時々ミュージシャン以上に重要な人がいる。こと'70年代初期におけるジョン・ピールの存在を知らないとすれば、それはもぐりだ。彼の洞察が果たしたBBC ラジオ、TV での表立った活躍とマイナー・フィールドでの当レーベル'69年頃の設立など両刃使いでの新人発掘は、それ自体がプログレッシヴだ。このレーベルに２作を残した BEAU を名乗る人物もその発掘された一人だ。１作目の時代がかったシンガー・ソングライターものに比べて、より内向性が強まり、曲によってプログレッシヴな味つけがされている。同レーベル所属の WAY WE LIVE の協力も見逃せないフォーク。（松本）

BREAD, LOVE AND DREAMS



Amaryllis

Decca SKL 5081

'71 年

David McNiven:vo,g
Angie Rew:vo,g,per
with
Alan Trajan:org,p
Dave Richmond:b
Danny Thompson:b
Terry Cox:ds

Engineer:Derek Varnals

'69年もう一人の女性フォーキー、キャロライン・デイヴィスとの３人組でデビュー。全編オーソドックスな古めかしい純フォークの１作目からデュオとなり、PENTANGLEのリズム陣の協力を得て、翌'70年２作目を製作。きわ立ったメロディーや展開も見受けられないものの、ストーリー仕立ての構成は本作の下地になっている。ラスト・アルバムに当たる本作では、アンジー・ルーの素人臭い美声パートも増し、またキーボードが部分的にシンフォニック効果を発揮、繊細味が大きく加わっている。ダニー・トンプソンの堅実で巧みなウッド・ベース・プレイも目立つ。（松本）

MARC BRIERLEY



Welcome To The Citadel
CBS 63478
'68 年

Marc Brierley:g,vo
Henry Lowther:tp,vln
Tony Reeves:b
Mike Travis:ds,per
Clare Lowther:cel

Produce:?

ブリティッシュ・ロックの奥の深さは、彼のような、ほとんど活動歴のわからないアーティストが、名の知れたミュージシャンの協力を得て、魅力的なアルバムを作り上げてしまうところにこそ、その極意があるのだと思う。アレンジをヘンリー・ロウザーが担当。チェロの大々的なフォローが、よく印象に残る。が、これを越えて、彼のシンガー・ソングライターとしての個性を感じさせる内容だ。非常に内省的なフォーク・サウンドにしては、'60年代調のメロディー、異色の顔合わせがもたらすジャズ風味があるのは、この時代の産物か。地味だが、一歩間違えると名盤扱いに会う。（松本）

ANNE BRIGGS



The Time Has Come
CBS 64612
'72年

Anne Briggs:g,vo

Produce:Colin Caldwell

'70年代初頭、PENTANGLEの、特にバート・ヤンシュらと親交があったと言われる女性シンガー。人知れずして消えた幻のアーティストとされている。デビューEP「The Hazards of Love」に続く1作目は、大半が無伴奏の純トラッド作。2作目に当たる本作では、シンガー・ソングライター作に移行。ギターとトラッド色の残る歌声で自作曲を中心に聴かせる。素人臭く、決して美声でもないが、魂のこもったような精一杯のフォークともトラッドともつかないシンギングが特長の英フォーク・アルバム。演技、演出のできなかった彼女の素朴な感性が共感を呼ぶ。（松本）

DUNCAN BROWN



Duncan Brown
RAK SRKA 6754
'73 年

Duncan Brown:g,p,vo
with
Jim Rodford:b
Robert Henritt:ds
John"Rabbit"Bundrick:p,org,syn
John Cameron:p

Produce:Mickie Most

彼はイギリスを代表するナイーヴな感性を持ったシンガー・ソングライターであり、ガット・ギターの名手でもある。ヒット曲B①を含む本作は、ソロ2作目である。B②のようなピアノの弾き語りもあるが、全編トラッド、カントリー、ボサノバ等の影響が感じられる、独自のモダン感覚のギターをフィーチャーしている。そして彼の初々しい歌声に、FREEに参加したラビットの、控えめだが効果的なメロトロンやシンセサイザーが絡む。'77年にピーター・ゴドウィンと共に、ファッショナブルなポップバンド、METROを結成した。デビュー作のみで脱退し、再びソロ活動に入る。（吉野）

VASHTI BUNYAN



Just Another Diamond Day
Philips 6308 019
'70 年

Vashti Bunyan:vo,g
Christopher Sykes:p,org
John James:dulcichord
Robin Williamson:vln,mln,irish harp
Dave Swarbrick:vln,mln
Simon Nicol:banjo
Robert Kirby:string & recoder arr.

Produce:Joe Boyd

ギターの爪弾きと瑞々しいリコーダーの音に乗って、英国の片田舎の空気を一杯に吸い込んだヴァシュティの心にしみこむ歌声が聞こえてくると、心が震えて止まらなくなってしまう。これは、ロンドンを逃れ、スコットランド西方のヘブリディーズ諸島への、ヴァシュティ・ロバート、一頭の馬、一匹の犬、緑色のワゴンによる長旅の記録を綴ったもの。名人達の端正な客演と恐ろしい程に繊細な彼女のつくり出す世界は、詩情溢れる英フォーク屈指のものだ。究極の1枚に数えることができる。俗世にさらすと壊れてしまいそうなはかなさがある。（長谷川）

KEITH CHRISTMAS



Fable Of The Wings
B&C CAS 1015
'70 年

Keith Christmas:vo,g
with
Keith Tippett:p
Mike Evans:b
Gerry Conway:ds
Ian Williams:p,el-p,org,mtn
Bob Stewart:autoharp
Shelagh McDonald:vo

Produce:Sandy Roberson

彼は典型的ブリティッシュ・シンガー・ソングライターである。2作目である本作は、息の合った牧歌的な快いサウンドをバックに、彼のアコースティック・ギターを中心としたインストゥルメンタル重視の内容。彼はデビュー作から同レーベルのシェラ・マクドナルドと一共のセプテンバー・プロダクション所属の為、両者のバック・メンバーは重複している。その後、彼はESPERANTOの2作目に参加し、プロデュースを務めたピート・シンフィールドの推めによりマンティコアに移籍。CRIMSON人脈をバックに配した作品を残している。（吉野）

CLANNAD



Magical Ring
Ir:RCA PL 25462
'84 年

Pádraig O'Dúgain:mandola,g,vo
Máire Ni Bhraonáin:vo,harp
Pól O'Braonain:fl,tin whistle,vo,key
Noel O'Dúgain:g,vo
Ciarán O'Braonáin:b,syn,p,g,vo
with
Charlie Morgan:ds
Frank Ricotti:per
Alan Dunn:accordion
Ed Deane:g

Produce:Richard Dodd

'69年にアイルランドのトラッド・グループとしてスタートしたCLANNADは、これまでに12枚のアルバムを発表している。本作は彼等が英国進出を果たした7作目の作品で、ゲール語やハープによる妖精物語的なケルトの伝承性と、シンセサイザーやエコーを駆使した現代的な録音が見事なブレンドを見せ始めた佳品。彼等はU2のボーノが参加した9作目「Macalla」('86年）によってより広い人気を得るが、続く「Sirius」ではアメリカを意識した方向へ進んでしまう。尚、本作以降（RCA移籍後）のベスト「Past Present」も発売されているので入門編としてお勧めしたい。（高山）

C・O・B



Moyshe Mcstiff And The Tartan Lancers Of The Sacred Heart
Polydor 2383 161
'72 年

Mick Bennett:vo
John Bidwell:org,g,dulcimer,vln
Clive Palmer:clarinet,g,vo
with
Danny Tompson:b

Produce:Ralph Mctell

C・O・BことCLIVE OWN BANDは、'66年のデビュー作発表後INCREDIBLE STRING BANDを離れたクライヴ・パーマーが結成したフォーク・グループである。その分派らしく、様々な音楽性を雑多に混ぜ合わせたような特有の屈折感が共通する。ヒッピー感覚よりもシリアスさが勝るので聴き易くはある。この2作目に至っては、ストーリー性を持ち込み独自のサウンドを統一感ある形で確立している。それは、北アフリカらしき民族音楽色ある変調されたフォークの中に、哀愁が強いが故に重々しくもあるメロディー漂うものだ。バート・ヤンシュとも交流があった。（松本）

SHIRLEY&DOLLY COLLINS



Anthems In Eden
Harvest SHVL 754
'69 年

Shirley Collins:vo
Dolly Collins:org
with
David Munrow:s&a-crumhorn,b-rackett,t-sordan,t-rec
Christopher Hogwood:hcd
Oliver Brookes:b-viol
Adam Skeaping:b-viol,violone
Roderick Skeaping:rebec,t&b-viol
Michael Laird:cor
Richard Lee:rec
Alan Lumsden:sackbut
Gillian Ried:bells
etc...

Produce:Austin John Marshall

英トラッド界の大御所。デビュー作は、なんと1959年である。よって共演したアーティストも数え切れない。これは5作目に当たる。本格派トラディストの彼女が、姉？のドリー（SPIROGYRA 3作目の立役者）とイギリスを代表する古楽奏者で主宰者でもあるデヴィッド・マンロウ、そして彼の率いたTHE EARLY MUSIC CONSORTのメンバーらと共演した1作。A面の大曲で、彼女と古楽の一致が聴かれ、それはB面のトラッドへと通底し、本来、両ジャンルが近密なものであることを示してくれる。非常に質素で厳しく、決して夢見心地にはさせてくれない音だ。（松本）

ANDREW CRONSHAW



Andrew Cronshaw:elzithers,concertina,whistle
with
Martin Simpson:g,dobro,banjo
Ric Sanders:vln
John Gillaspie:bason,key
Holly Tannen:dulcimer
Rick Kemp:b

Produce:Andrew Cronshaw&Bill Leader

Wade In The Flood

Transatlantic L TRA 508

'78年

ブルガリアン・ヴォイスや元CLANNADのエンヤの成功もあり東欧やケルトを含むヨーロッパのトラディショナルな音楽が脚光を浴びている昨今。チター奏者アンドリュー・クロンショーによる本作も主に演奏されているのは17世紀等のトラッドだが、単にその再現に留らず、プログレッシヴ・ファンにも充分にアピールできる内容を備えている。SOFT MACHINEやALBION BANDのリック・サンダース、STEELEYE SPANのリック・ケンプ等が参加。特にブルターニュのアラン・スティーヴェルやキングのユーロ・トラッド・シリーズを愛聴されている方は機会があれば是非御一聴を。　（高山）

KEITH CROSS&PETER ROSS



Keith Cross:g,vo
Peter Ross:g,vo
with
Peter Arnesson
Tony Carr
Steve Chapman
Brian Cole
Sid Gardner
Jimmy Hastings
Nick Lowe
Jenny Mason
Dee Murray
Lea Nicholson
Billy Rankin
Tony Sharp
Andy Sneddon
Chrissie Stewart
Produce:Peter Sames

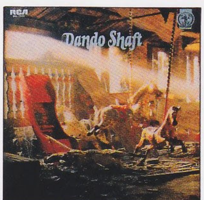
Bored Civilians

Decca SKL 5129

'72年

T2で思いっきりギターを聴かせてくれるあのキース・クロスが、T2以外でクレジットされていることでは、後にも先にもこの1枚のみ。とは言っても、T2での彼の演奏を期待すると、まったくの肩透かしに合う。フォーク・ロック作である。比較的アップ・テンポな曲調と、やや泥臭さある感覚が、いかにもフォーク・ロックといった趣きだが、そうした平均的な曲以外に、緩急をつけて、ピアノやフルートをいかしたパートや、ストリングスを加えたナンバーを収録していて、この時期ならではのイギリスの陰りあるセンスもひかる。ラスト・ナンバーの出来は抜群。（松本）

DANDO SHAFT



Martin Jenkins:vo,cel,vln,mandolin,tambourin
Polly Bolton:vo
Ted Kay:congas,tablas
Kev Dempsey:ac-g
Dave Cooper:ac-g
Roger Bullem:double-b

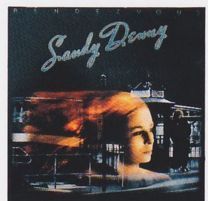
Dando Shaft

Neon NE 5

'71年

ネオン・レーベル5番目にあたるこの作品はブリティッシュ・フォークの名グループ、DANDO SHAFTの2作目にあたる。彼らは'70年代後半まで活動していて全部で4枚のアルバムを発表していたが日本では一部の熱心なファンにしか名前を知られていない。この作品を含め初期のアルバムには暗いイメージがつきまとい、他の一般的なトラッド・フォークのグループとは一線を画していた。このアルバムでは女性ヴォーカルを中心にして牧歌的な幾分けだるいサウンドを聴かせるが、彼等特有の個性は薄れていない好盤である。　（坂地）

SANDY DENNY



Sandy Denny:vo
John Hudson
Alan Holmes
Ray Grand
Gordon Bland
David White
Robert Richards
Peter Lockett
Philip Goodwin

Produce:Trevor Lucas

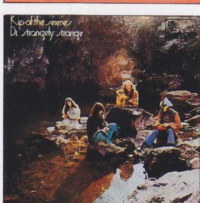
Rendezvous

Island ILPS 9433

'77年

'60年代中頃に、それぞれ別々の男性S. S. W.とジョイントで出していた2枚のアルバムは別にすると、彼女のソロは4枚、その最後の、そして彼女の人生においても最期となったのがこのアルバムです。一般的には、出るたびにオーケストラがフィーチュアされていく他の3枚の方が人気はありますが、元FREEのラビットのハモンドや、元 CURVED AIR、STRAWBSのロバート・カービィのアレンジが素晴らしい本作は、一番プログレ・ファン向きでしょう。最初は「プログレ云々」で聴いて、その人が来年の今頃、サンディ本人を好きになっていてくれたら、私は幸せです。　（斎藤）

Dr.STRANGELY STRANGE



Ivan Pawle:g,b,whistle,vln,per,vo
Linus:per,thumb-p,vo
Jay Myrdal:glocken
Tim Goulding:org,harmonium,p,rec,glocken,vln,stylaphone,vo
Tim Booth:g,mdn,sazaphone,per,vo

Produce:Joe Boyd

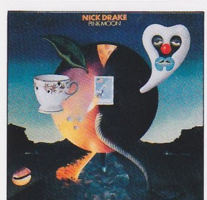
Kip Of The Serenes

Island ILPS 9106

'69年

ヴァーティゴからの2作目が、ロジャー・ディーンのデザインによる上、変形ジャケットとあって、彼らの代表作とされる向きが強いが、ゲイリー・ムーアがしゃしゃり出たその話題作以上に持ち味が出ているのは、このデビュー作だ。見てのとおり、今は絶滅してしまったヒッピーという人種であるように、サウンドも妙な浮遊感と物語性があってアンダーグラウンド。一方でこれが決め手の素朴さも強く、様々な音色、音楽要素がフォークにとり込まれた様は、アイルランドのI・S・Bと言われる由縁である。'71年、I・S・BのM・ヘロンのソロに参加。類は類を呼ぶ、か…。　（松本）

NICK DRAKE



Nick Drake:vo,g,p

Produce:Witchseason Productions Ltd

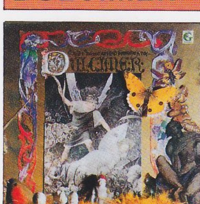
Pink Moon

Island ILPS 9184

'72年

「Five Leaves Left」('69)「Brighter Later」('70)そして本作、この3枚が彼のオリジナル作品である。前2作ではリチャード・トンプソン、デイヴ・ペグらの協力、オーケストラの使用などで幾らばかりか色がついている。彼の書いた曲は極めて良質の英フォークと言えるが、繊細という以上の内にこもっていく暗さ、閉鎖性がにじみ出るたぐいのものだ。シド・バレットやマウロ・ペローシに共通する孤独感を感じさせる。特に本作では、独白に近い、はりつめた感覚がつきまとう。聴き込まれるべきアーティストだ。'74年11月、24歳の若さで死去。死因は不明とされている。　（松本）

DULCIMER



Pete Hodge:vo,g,hca,mdn,dulcimer
Jem North:b,glocken,wind,vo
Dave Eaves:lead-vo,12str-g,t-rec
with
Richard Todd:poetry spoken

Produce:Larry Page

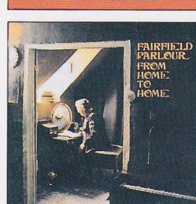
And I Turned As I Had Turned As A Boy...

Nepentha 6437 003

'71年

ブリティッシュ・アルバム数有る名ジャケット中、これほどファンタジックなものは見当らない。ソフト・タッチのフォークを基にした内容といった、ありがちな感覚を超えて、内省さと繊細さが、ジャケットに至るほどにファンタジックだ。絹の感覚に近い。一歩極めて詩的な世界に入り、イマジネイティヴですらある。詩の朗読の入り方とともに、MOODY BLUESの内省的なアコースティック・パートに共通するものがある。ヴォーカルも非常にナイーヴなものだ。MAGNA CARTAのように甘さが耳に残ることなく、どこか非日常的。3人のクレジットは他に見当らない。　（松本）

FAIRFIELD PARLOUR



Peter Daltrey:vo,p,mtn,hcd,org,tambourine
Eddy Pumer:vo,ac-g,12str-g,mtn,org,hcd
Steve Clark:b,fl
Dan Bridgman:vo,ds,tym,tubular bell,bongo

Produce:David Symonds

From Home To Home

Vertigo 6360 001

'70年

UKサイケデリアの伝説的グループKALEIDOSCOPEを母体として誕生したバンド。彼等の唯一のアルバムであり、またヴァーティゴの記念すべき第一弾としても知られる本作は、私の大切なアルバム。曲はBEATLESのような、ポップに泣いたメロディアスなもので、アレンジは初期のMOODY BLUESのように、時折メロトロンを交えたしっとりと味わい深いもの。また、葉の落ちた枝が広がる木の根元にメンバーのシルエットが浮かび上がる風景をくすんだ色あいで描いた内ジャケットは、パイプオルガンに導かれる名曲B①の雰囲気そのもので素晴らしい。　（斎藤）

FAIRPORT CONVENTION



Liege & Lief

Island ILPS 9115

'69 年

Sqndy Denny:vo
Ashley Hutchings:b
Dave Mattacks:ds
Simon Nicol:g
Dave Swarbrick:vln, vla
Richard Thompson:g

Produce:Joe Boyd

ブリティッシュ・エレクトリック・トラッドの代表的なバンド。彼等の数多いアルバムの中には、名手R・トンプソンのギターが素晴らしい5枚目「Full House」、トータル・アルバムの7枚目「Babbacombe Lee」など、聴いていただきたいものは沢山あるのですが、私はやはり、サンディ・デニーが参加していたこのアルバムが好きです。彼女の歌声は、決して美声ではありませんが「本当の悲しさ、苦しさを知る者だけが持つ優しさ」にあふれているのです。特にA③、B③の鬼気迫る歌唱は、歴史的名唱と言えます。（斎藤）

FARAWAY FOLK



Seasonal Man

RaRecords RALP 6029

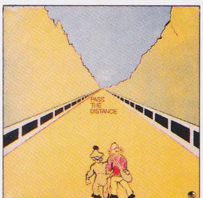
? 年

personnel unknown

Produce:Tony Waldron

イギリス南西部、ケルト文化を遺すコーンウォール地方のローカル・レーベルに残された恐らく'70年代初期のフォーク作。内ジャケットにはメンバーらしき中年男女各2名が写っていて、その風貌を見るといかにも地元のフォーキーという印象を受ける。素朴なアコースティック楽器にミス・マッチとも思えるエレクトリック楽器は控え目。基本的にドラムレス。トラッドを4曲収録していて、癖のないややメディテイショナルなアレンジが面白い。この、清澄な女性ヴォーカルとアコースティック・ギター、フルートなどの漂う様な繊細さが印象的だ。自作曲はやや平凡。（松本）

SIMON FINN



Pass The Distance

Mushroom 100MR 2

'70 年

Simon Finn:vo,ac-g

produce:?

アシッド・フォークと総称される中でも、群を抜き、一線を越えた一作。インド音楽風味、メディテイショナルなオルガン、全てのテクニックの稚拙さをも、彼のヴォーカルとギターが醸し出す憑かれた音世界に凝縮して、密度が濃い。自己陶酔から情念露吐のA⑤B⑤まで、錯乱めいた彼の精神がそのまま音になったようで、切迫感が先立つ。驚くほどの感覚志向だ。漂ようメロディアスで陰うつなムードも本腰だ。ドラッグの影響以上に、内的心象、イメージの氾濫が、彼の自我を時としてとらえているような、これは一種の症状というに等しい。ある意味で宗教的だ。（松本）

FOGGY



Simple Gifts

York FYK 411

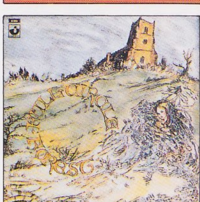
'72 年

Danny Clarke:vo,12str-g,rec,autoharp
Lenny Wesley:vo,6str-g,psaltry,mdn,banjo
Jerry Hogan:pedal steel-g
Richard Hudson:ds,per,sitar,tablas
John Ford:b
Blue Weaver:p,org,mtn

Produce:Tony Hooper

イギリスのフォーク、トラッドの奥深さは、他のいかなるジャンルの比ではない。事にArgo やこの York のようなレーベルとなるとお手上げだ。このグループは、イギリス中東部の地元で活動していた両ヴォーカリストをSTRAWBS のトニー・フーパーが堀り起こした実質的なデュオである。キーボードとリズム陣が「Grave New World」期の STRAWBS とあっては、単なるフォークに終わるはずもない。ピアノやメロトロンも繊細なソフト感覚のフォーク・サウンドと折り合って夢見心地だ。東洋色あるナンバーでさえ音色の繊細さが先立つほど。（松本）

FOREST



The Full Circle

Harvest SHVL 784

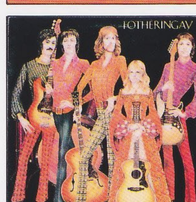
'70 年

Derek Allenby:vo,hca,mdn
Martin Welham:6&12str-g,vo,per,p,hcd
Hadrian Welham:vln,cel,g,vo

Produce:Malcolm Jonse

彼らは'68年にバーミンガムでウェルハム兄弟によって結成されたフォーク・グループで'69年にハーヴェストからファースト・アルバムをリリース。ジグ風の曲も取り入れた渋い内容だった。'70年に本作を発表し、ファーストでもそうだったが、ピアノ、ハープシコード、リコーダーをうまく生かした音作りは、アルバムをまとまりのあるものにし、名楽曲を印象付けるのに成功している。暗くメロディアスなA②、ピアノが美しいA③等、出来はこのセカンドのほうが上である。いかにもイギリス的なファンタジックなジャケットは両方とも秀作。（Luna）

FOTHERINGAY



Fotheringay

Island ILPS 9125

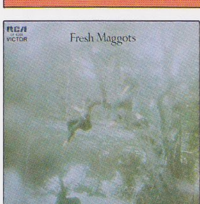
'70 年

Sandy Denny:vo,p,g
Trevor Lucas:vo,g
Jerry Donahue:lead-g,vo
Gerry Conway:ds,vo
Pat Donaldson:b,vo
with
Linda Peters:vo
Tod Lloyd:vo

Produce:Joe Boyd

FAIRPORT CONVENTION時代「Unhalfbricking」('69)、「Liege & Lief」('69) の2作で一時代を築いた故サンディー・デニーが、そのスタイルを持ち込みソフィスティケイトしたアルバム。フォーク・ロック・ブームに乗ったフェアポート系枝葉グループだったが短命に終っている。既に実力を認められていた彼女は翌年ソロ・デビューを飾ることになる。バックの演奏もF・CONVENTION・スタイルながら、より彼女の柔和なフォーク感覚に焦点を当てて繊細味を出している点では、サンディー色、バンド色としてまとまりがある反面、スケールは小さくなっている。（松本）

FRESH MAGGOTS



Fresh Maggots

RCA SF 8205

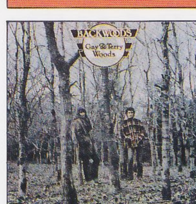
'71 年

Mike Burgoyne:el-g,glocken,tambourine,vln,tin whistles
Leigh Dolphin:ac-g

Produce:Mike Berry

この作品の大半を占めるアコースティック・ギターの響きとメロディーには、陰りと繊細さをたっぷりと含んだ瑞々しさと、当時両者共19歳とは思えないセンスの良さを強く感じる。まるで日常性とはかけ離れた憧れや夢といったものを託したようなフォーク・サウンドだ。温もりがあり内省さがある。一方でストリングスや弦、ファズ・ギターが多用され、いかにも'70年頃らしい野心さは分るが、多分にミス・マッチか。両者についての資料、その前後の活動も伝わらない。恐らく唯一のアルバムだと思う。ジャケットの朝もやに包まれたようなタッチは、やはりキーフ。（松本）

GAY&TERRY WOODS



Backwoods

Polydor 2383 322

'75 年

Terry Woods:ac-g,concertina,mandola,vo
Gay Woods:dulcimer,autoharp,vo
with
Mike Giles:ds
Dave Wintour:b
Geoff Whitehorn:el-g
Peter Arnesen:p
Ed Dean:slide-g
Joe O'Donnel:el-vln
Tony Carr:conga

Produce:Tony Atkins

SWEENEY'S MEN→STEELEYE SPAN→WOODS BAND を経てデュオ活動に入っての1作目。グループ形態ながら、以前にも増してシリアスなフォーク・サウンドになっている。このシリアスさこそが彼らの持ち味であり、俗性に染まる手前に留まらせている。抑制されたサウンドからにじみ出る、かすかな重味と暗さ、メロディアスさは、より生粋のイギリス感覚と言えるだろう。繊細な聴き分けをされるべきサウンドだと思う。唯一、ゲイの本来、フォーク、トラッド向きでない憂いある声質が、聴き易さにつながるか。アコースティック・ギターが良く強調されている。（松本）

GOTHIC HORIZON



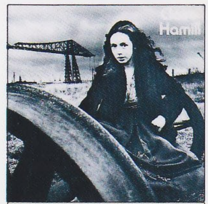
The Jason Lodge Poetry Book
Argo ZFB 26
'71年

Andy Desmond:6&12str-g,vo
Richard Garrett:vo
with
Mark Helme:lead-g
Ron Lawrence:b
Gary Richardson:per
Ian Cameron:fl
Eli Bickerstaffe:banjulele
Jean Baptiste:key
Mike Simmons:g
THE YETTIES:chorus

Produce:Kevin Daly

「Living On A Shoe String」(Konk 103、'75)、「Same」(Ariola ARL 5001、'78)の2枚のソロを残しているアンディー・デスモンドが、'70年代初頭に結成していた幻のフォーク・デュオ。未確認ながら、このデュオは翌'72年にもう1枚のアルバム「Tomorrow Is Another Day」(Argo ZDA 150)を残しているもよう。本作では様々な楽器をフィーチュアした多彩なフォーク・ロックを聴かせる。とりわけ強引にフィーチュアされたようなメロトロンのバッキング、フルートやギターのつま弾きをいかしたパートなど部分は印象に残るが、散漫な印象は否めない。(松本)

CLAIRE HAMILL



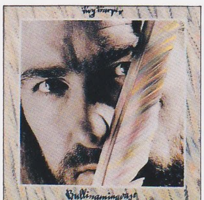
One House Left Standing
Island ILPS 9182
'71年

Claire Hamill:vo,g,pipe-org
with
John Martyn:g
Paul Buckmaster:cel
David Lindley:g,mdn,vln
John Hawken:p,hcd
Roy Warleigh:fl
John Pignegny:frh
Aubrey Johnson:oboe
Phil Bates:double-b
Simon Kirke:ds
Tetsu Yamauchi:b
Rabbit:p,org,vo

Produce:John McCoy& Christopher Blackwell

クレア・ハミルのファースト・アルバムである本作品は、トラッド・フォークを基調に、美しく繊細であるが、それだけではない彼女独特の唱法が聴き手の心を捕える。また、このアルバムでは、ジョン・ホークン(後にILLUSION, STRAWBSに加入)がピアノとハープシコード、ポール・バックマスター(後にTHIRD EAR BAND加入)がチェロで参加、バック勢も彼女の魅力を引き出している。また次作も多少ロック風味を加え、別の魅力に溢れた好作品。ちなみにセカンドのプロデュースは、ALL ABOUT EVEを手がけた、P・S・スミス。(林た)

ROY HARPER



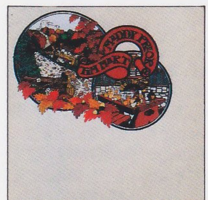
Bullinamingvase
Harvest SHSP 4060
'77年

Roy Harper:g,vo
with
Andy Roberts:g,vo
Henry McCullough:g
David Awson:effects,key
Dave C.Drill:b
Admiral John Halsey:ds

Produce:Roy Harper& John Leckie

FLOYDの『葉巻はいかが』のヴォーカリストとして、一挙に知られた遥か以前の'64年頃より現在もなお活動中。イギリスきってのシンガー・ソングライター。交友関係の豊かさでも有名。本国ではカリスマ的存在のようだ。フォーク系サウンドとは言え、甘さはなく内向的な鋭さが感じられる点では、'71年の「Stormcock」なども代表作。非常に地味だが。また、数々の大曲志向作もその反映と思われる。'70年代も後半に入って、12作目になる本作では、派手な音作りやB面でのプログレッシヴな感覚も備え、起伏に富むようになっている。曲はいつもイギリス臭い。(松本)

TIM HART&MADDY PRIOR



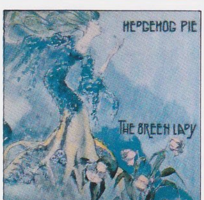
Summer Solstice
B&C CAS 1035
'71年

Maddy Prior:vo
Tim Hart:vo,dulcimer,g,harmonium,psaltery
with
Andy Irvine:mdn
John Ryan:str-b
Gerry Conway:per,bell
Pat Donaldson:el-b
Robert Kirby:str-arr.

Produce:Sandy Roberton

両者ともSTEELEYE SPANの中心人物として知られる一方で、既にグループ加入以前よりデュオを組み、2枚のイングランド産トラッド・アルバムを残している。本作はグループ在籍中の絶頂期に発表された、前記2作の延長に当たる作品である。本来、グループの要はアシュレイ・ハッチングスであり、マーティン・カーシーのトラディストとしての意向も強かったことを思えば、この時期のこの1枚はプライヴェートな性格を持っていたのかもしれない。グループよりも洗練された音色、コンテンポラリーなトラッド感覚を印象づける素朴さ、歌声はやはり魅力。(松本)

HEDGEHOG PIE



The Green Lady
Rubber RUB 014
'75年

Margi Luckley:vo
Jed Grimes:e&ac-g
Martin Jenkins:vo,cel,mdn,vln,tambourine
Michael Doonan:fl,piccolo
Stu Luckley:vo,b
Dik:ds,conga,p

Produce:Rick Kemp

僕の大愛聴盤。元DANDO SHAFTのヴァイオリニスト、マーティン・ジェンキンスが参加しているバンド。基本的にはトラッド寄りのグループだけどその臭みがほとんどない。それはたぶんフルートやピッコロが入っているせいだろう。余りそのテのバンドは使わないからね。トラッドが5曲、彼等のオリジナルが5曲で丁度半分ずつで構成されている。出来がいいのはやはり前者で、静から動へと徐々に盛り上がって行くタイトル曲が素晴らしく歌・演奏共に最高である。この1曲だけでこのアルバムは決まり。他の曲が霞んでしまう。ジャケットも美しい。(佐野)

HERON



Heron
Dawn DNLS 3010
'70年

Roy Apps:g,p,vo
Tony Pook:vo
Gerald T.Moore:g,mdn,hca,p,vo
Stephen Jones:p,org,el-p,accordion,vo

Produce:Peter Eden

いかにも'70年代初期、田園フォークといった感の良質作。アコースティック楽器を前面に押し出し、繊細な音色から漂よう牧歌的な雰囲気が全体に行き渡っていて、更にこれまた全体に及ぶ小鳥の囀りの遠鳴りが、当時、日本で"木陰派フォーク"と形容された本作のムードを今もって言い当てている。力味も嫌味もなく、ヴォーカルのナイーヴさも適度だ。目立ちにくい音楽性だとは思うが、イギリスならではの情緒をたっぷりと湛えていて、何より時代にしばられない夢想感覚が素晴らしい。イギリスの片田舎で深呼吸した気分になれる。マイク・ヘロンの同名グループとは別、注意。(松本)

HORSLIPS



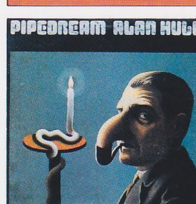
Happy To Meet ...Sorry To Part
Ir:Oats M003
'73年

Eamonn Carr:ds,mln,concertina
Charles O'Connor:vln
Jim Lockhart:fl,vo,key
Barry Devlin:b,vo
John Fean:g

Produce:Alan O'Duffy & HORSLIPS

本作は'73年のデビュー盤。コンサルティーナ(アイルランドのアコーディオン)を型取った八角形の変形ジャケットで発表された。懐かしいオモチャ箱のような作品集で、曲によって、モロのトラッド風、B級演歌ロック風、アート・ロック風と様々なスタイルを使っている。HORSLIPSを聴いた時に感じる楽しさはスペインのC.E. DHARMA等から伝わって来るものと似ているような気がする。無論、音楽的には違う訳だが、民族音楽的なものを背負ってる点と、ギターがボケるところは同じかもしれない。アルバムは10枚程発表されている。(Chihiro S.)

ALAN HULL



Pipedream
Charisma CAS1069
'73年

Alan Hull:g,p,harmonium,vo
with
Ken Craddock:p,org,harmonium,el-p,g
Ray Laidlaw:ds
Jon Turnbull:g
Colin Gibson:b
Dave Brooks:sax

Produce:Micky Sweeney and Alan Hull

ニュー・キャッスル出身のフォーク・ロック・グループLINDISFARNEの中心人物のソロ1作目。この年グループは分裂し、分派JACK THE LADを産んでいる。バンドでのサウンド以上にメロディアスな本作は、リラックスした音作りの中に田園フォークの哀愁味がよく出ているアルバムだ。荒けずりなフォーク・ロックをベースにしながらも、とりわけB面中半以後の流れでは、それを越えて'70年代初期の風味、SPRINGにさえも通底するイギリスの田舎の言い知れない空気が濃厚。以後、2作のソロを製作しているが、この空気は薄れて凡庸な印象を受ける。(松本)

HUNTER MUSKETT



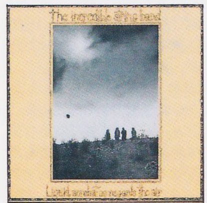
Hunter Muskett
Bradleys BRADL1003
'73 年

Roger Trevitt:el-b,
vo,marimba,per
Doug Morter:ac&el-g,
vo
Chris George:ac&el-
g,har,vo
Terry Hiscock:ac-g,
p,org,vo
with
Mike Giles:ds
Ken Freeman:syn
Jim McCarty:per

Produce:Keith Relf

元YARDBIRDSのキース・レルフがプロデュースしたことで、多少の知名度がある2作目。ILLUSIONのことを思えば、彼好みのフォーク・ロックと言えるかもしれない。ジム・マッカーティーの参加するA④での、ピアノをメインにしたバッキング、数曲でのクラシカルな多少の味つけなどは、その例だ。基本的には、アコースティック・ギターの繊細さをいかし、適度なメロディアスさ、軽快さを持ち合わせている中堅グループだ。解散後、ドゥーグ・モーターは、マディー・プライア、ジューン・テイバーらのバックに参加、ALBION BANDへも加入した。（松本）

THE INCREDIBLE STRING BAND

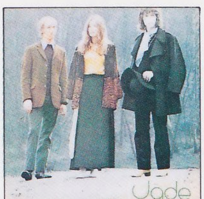


Liquid Acrobat As Regards The Air
Island ILPS 9172
'71 年

Robin Williamson:oud,
vln,g,vo,cel,oboe,
mdn,b,per,b-rec,fl,
str-arr,ban
Mike Heron:org,sitar,
vo,g,p,harmonium,b,
el-p,fl
Likky(licorice) McK-
echnie:harmonium,or-
g,vo,b,pipe org,a-
utoharp,kazoo,han-
d-ds,tambourine,
etc...
Malcolm Le Maistre:
hcd,vo,b,per,mdn,
t-rec,glocken,hca,
cla,church org,ka-
zoo,whistle,bazou-
ki
with
Gerry Conway:ds
Stan Lee:b,steel-g
Produce:INCREDIBLE
STRING BAND & Stan
Schnier

'65年グラスゴーにて結成。'74年に解散する間に残した14作には、これぞ独特と言えるフォーク系サウンドでもって、時代をも象徴するステイタスがある。イギリスのアシッド・フォークとは彼らのことだ。ごった煮の音楽性と思われがちだが、小難しさはなく雰囲気で持たせる曖昧さが特徴。このにやけた感覚が冗談ともヒッピーのユートピア志向ともとれるうえ、身内メンバー、素人臭さがこれに輪をかけている。初期ほどこの志向が強い。が、どこか真面目顔のフォーキーといった面がちらつくのは、ヘロンに負う部分が大きいのかもしれない。比較的粒よりの10作目がこれ。（松本）

JADE



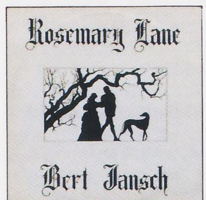
FlyOnStrange-wings
DJM DJLPS 407
'70 年

Dave Waite:g,ban,vo
Rod Edwards:hcd,org,
p,vo
Marian Segal:g,vo
with
Pete Sears:b
James Litherland:el-
g
Terry Cox:ds
Clem Cattini:ds
Mick Walkes:ds,tim
Phil Dennys:strings
John Harper:el-vln
Pete York:per,conga

Engineer:Robin Cable

一目見てPETER、PAUL&MARRYを思い出させる。ハーモニーをいかしたヴォーカル・ライン、ストリングスを入れた滑らかな曲想。サウンドもその路線に見合うフォーク・ロックだ。'69年の製作にしては古臭さが少なく、洗練されたメロディー志向であるのは、D-JMレーベルのもたらせた特質か、はたまた紅一点マリアン・シーガルのヴォーカルの力量か。落ち着きのあるナンバーですら色彩り豊かで、常にレスリー・ダンカンなどに通じる柔かさを失わない。スタイルは、あまりに正統だが、適度な湿り気があり、繊細なイギリス情緒は充分。曲も仲々魅力的。(松本)

BERT JANSCH



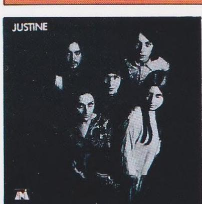
Rosemary Lane
Transatlantic TRA 235
'71 年

Bert Jansh:vo,a-g

Produce:Bill Leader

'71年にして通算10作目。彼のギターと歌のみによる生粋のソロ。こうした繊細な音楽は、ややもすると、表面をなぞるだけの俗っぽいメロディアスさが売り物になるが、彼のシンギングと指さばき、タッチには、才能と共に経験の積み重ねから養ったものだろうからこそ、内にこめたものがにじみ出るような個の強靱さ、強いてはサウンドの締まりが感じられる。抑揚をおさえたサウンドは、その必然の結果だ。最小限で最大。それらを統合したPENTANGLEが、別格だったのも当然のことだ。サウンド以上にアーティストの姿勢が問われるべきだ。安易さがない上で聴き易くもある。（松本）

JUSTIN



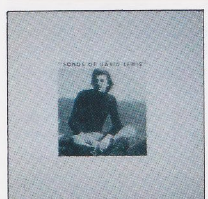
Justin
UNI UNLS 111
'70 年

Keith Trowsdale:vo,g
John McBurnie:vo,g
Valerie Cope:vo
Bethlyn Bates:vo
Laurette Stivers:vo
with
Dougie Wright:ds

Produce:Hugh Murphy

唯一のアルバム。女性ヴォーカリスト二人を含むフォーク系ヴォーカル・アルバム、というよりも思い切ってコーラス・アルバムというべきか。全曲、キース＝ジョン組によるもの。ジョン・マクバーニーは、この後、JACKSON HEIGHTSのメンバーとなる。時折、ギター、フルート、弦楽器、ドラムを絡めるものの、基本的には5者による安定したヴォーカル・ハーモニー、かけ合いによるもので、ヴォーカルを重視したJ・HEIGHTSの音楽性とのメンバー関連からの共通点が窺える。生温いイージーさには至らず、常に爽やかさが先立ち、先鋭感も含み得ている。（松本）

DAVID LEWIS

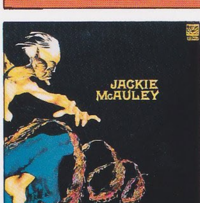


SongsOfDavid Lewis
AX 1
'70 年

David Lewis:vo,etc..
personnel unknown

ANDWELLAのリーダーのソロ・アルバム。がA①とB⑥はデビュウ・アルバムですでに発表済み。残りの9曲が未発表。発表年度が丁度2枚目「World's End」の時期なのでその時の録音かもしれない。自主製作又はREFLECTIONのプロモーションとして発売されたらしく、表ジャケットは本人の白黒写真1枚、裏はその曲目とANDWELLAの3枚のアルバムの曲目しか書いていないというシロモノ、しかし曲自体どれも佳作揃いで彼等が好きな人にはお勧め。特にピアノの弾き語りで歌うA⑤は絶品で涙を誘う。この人の声好きだなあ素直で。（佐野）

JACKIE McAULEY



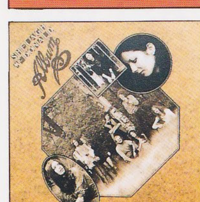
Jackie McAuley
Dawn DNLS 3023
'71 年

Jackie McAuley:vo,g,
ban,spoons,stomp,p
with
Mike McNaught:p,vib,
hcd
Mike Travis:ds,per
Roy Babbington:b
Henry Lowther:flh,v
ln
Tony Roberts:fl
Pete Hossel:jug

Produce:Barry Murra-
y

プログレッシヴ・フォーク・デュオTRADER HORNEのメンバーだったことで有名。出身地の北アイルランドでヴァン・モリスンらとTHEMを結成したのは'64年のこと。その後BELFAST GYPSIESで活動したことも知られている。彼の唯一のソロになる本作は、TRADER HORNE解散後のものだ。前グループでのサウンドを薄めたようなドリーミーでメロディアスなフォーク・ロックである。全体の繊細味とピアノ、ハープシコード、フルート、ヴァイオリンの使用が非常に印象に残る。プログレッシヴな色合いがある。彼は現在もロンドンのフォーク・シーンで活動中。（松本）

SHELAGH McDONALD



Album
B&C CAS 1019
'70 年

Shelagh McDonald:vo,
g
with
Andy Roberts:g
Roger Powell:ds
Keith Tippett:p
Pat Donaldson:b
Ian Whiteman:p,el-p,
org
Gerry Conway:ds
Mike Evans:b
Keith Christmas:g
Tristan Fry:vib

Produce:Sandy Rober-
ton

小さな天秤の図柄で有名、サンディー・ロバートン率いたセプテンバー・プロダクションこそ、'70年代前半の、所謂繊細で陰りのある英フォーク・サウンドのイメージを裏から支え確立し得た組織だ。ここに集まったフォーキー達は、B&C、ペガサス・レーベルをベースにした。トラッドや主流フォークともまた一味違って、コンテンポラリー感覚に内向性を備えたサウンドを特徴とした。SPIROGYRAにしても、このシェラ・マクドナルドにしても、秋のイメージがある。抑制のきいた渋いサウンドの中で、ほのかに漂ようメロディアスさが絶品。澄んだ歌声、ティペットのサポートも抜群。（松本）

GILLIAN McPHERSON



Poets And Painters And Performers Of Blues

RCA SF 8220

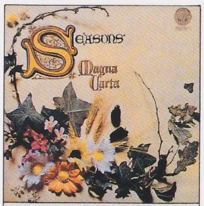
'71 年

Gillian McPherson:vo,ac-g
with
Jon Mark:ac-g
Dave Cousins:ac-g
Spike Heatley:b
Tony Carr:per
Robert Kirby:strings
Jonny Almond:vib,sax,
Tommy Eyre:org,p
Roy Babbington:b
Brian Spring:ds
Peter Halling:cel

Produce:?

音楽雑誌にも紹介されない様な無名の女性フォーク・シンガーのアルバムを偶然に見つけた時、それを買う買わないを決める基準は人によって様々だろうが、僕の場合①ジャケット ②容姿 ③バック・ミュージシャンの3点であり、然るにこのアルバムは③に当てはまり買いである。己ずと内容の方も見当が付く。そうジャージーなアコースティックの世界。プロデューサーのせいかもしれないけど、なんとなくPENTANGLEを聴いている様な錯覚に陥る。声質はこの人の方が奇麗だけど。出来がいいのはピアノが弾むA⑤、ストリングスが入ったA②、B②。（佐野）

MAGNA CARTA



Seasons

Vertigo 6360 003

'70 年

Chris Simpson:g,vo
Lyell Tranter:g
Glen Stuart:vo,spoken word
with
Barry Morgan:ds
Tony Visconti:b,rec
Rick Wakeman:key
Tim Renwick:rec
Davy Johnston:g,sitar
Peter Willison:cel
Derek Grossmith:fl
Spike Heatley:str-b
Tony Carr:ds

Produce:Gus Dudgeon

MAGNA CARTAは'70年にデビューしたフォーク・ロック・グループで、本作はその2作目。THE ENIDの「The Spell」やRENAISSANCEの「Song For All Seasons」等、四季をテーマとした作品は幾つかあるが、本作の片面を占める組曲では元役者というメンバーの詩の朗読と共に、移りゆく英国の四季を美しく綴って行く。自国の自然を愛し、多くの田園詩人を生んだ英国ならではの好盤。PINK FLOYDやマイク・オールドフィールドのサポートで来日したティム・レンウィックがリコーダーで参加。ウェイクマンのオルガンも彩りを添えている。最近彼等は新編アルバムを発表。（高山）

MELLOW CANDLE



SwaddlingSongs

Deram SDL 7

'72 年

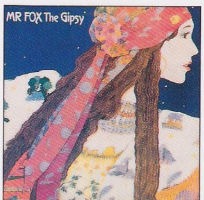
Edi:ERC 29223

Clodagh Simonds:vo
David Williams:ac&el-g,vo
Alison Williams:vo
Frank Boylan:b,vo
William A.Murray:per

Produce:David Hitchcock

冒頭からハープシコードをたっぷりと使った泣かせのメロディーで迫る。澄み切った女性ヴォーカルで綴るメロディアスなフレーズ。美しいピアノの旋律の後はヴァイオリンの調べでしっとりと聴かせる展開だ。生楽器が中心ながら、簡単なクレジットからは想像できない程、多彩な手法を用いているらしい。本来はフォーク、トラッド系列のアルバムながら豊かな美的感覚に裏打ちされた音作りがプログレ愛聴家の支持をも集める。とはいえA面前半に代表される哀愁に満ちたサウンドばかりが彼らの持ち味という訳ではなく、明る目で賑やかな曲想も適宜取り入れている。（江田）

MR. FOX



The Gipsy

Transatlantic TRA236

'71 年

Bob Pegg:vo,org,melodeon,tin whistle,ac-g,p,b,b-ds
Carole Pegg:vo,ac&el-fiddle,tom
Bary Lyons:vo,el-b,dulcimer,s-rec,tambourine
Alan Eden:vo,per

Produce:Bill Leader

中心人物、ボブ・ペッグのレコード・デビュー・グループ。2作を残すのみだが、以後、キャロルとともにデュオ作を残し、ソロ活動を行った。ソロ・アルバムでは、トータル作風を取り入れたり、グレアム・フィールドなど異色の協力を得たりと意欲的な存在。地味な声のためか取り上げられる機会も少ないが。一聴すると、曲調はトラッドながら、実はいつも自作曲である。この2作目も、コンテンポラリーなメロディアスさを本流のトラッド曲調に組み込むなど、特にA面の大曲ではプログレッシヴなアプローチさえ窺える。キャロルの愛くるしい歌声も魅力をそえている。（松本）

MOONKYTE



CountMe Out

Mother SMOT 1

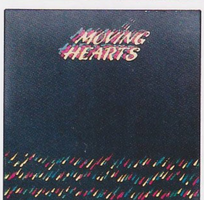
'71 年

Dave Stansfield:harmonium,per,vo
Dave Foster:ac-g,hca,vo
Mick Humphreys:ds
Trevor Graven:b,vo
with
Dave Ambler:sitar,banjo,harmonium,whistle

Produce:James Spencely

ムーヴメント期にはインディペンデント・レーベルが乱立する。これは創作意欲がその時代性を追い越してしまって枠におさまり切らない結果だ。'70年、'80年のその時期を思い返しても明らかなように。面白いのは前者のそうした底辺である自主製作あたりには、サイケデリックやアシッド・ミュージック志向が強く根づいていることだ。この謎のフォーク・グループもその一つ。ハーモニウムを多用し、アングラ色の強いメロディが、独特の味を出している。穏やかな曲想が時折シタール混りに瞑想色を漂よわすなど、時代の産物。メロディアスなハーモニウムが親しみ易い。（松本）

MOVING HEARTS



Moving Hearts

Ire;WEA K 58387

'88 年

Christy Moore:vo,g,bodhran
Donal Lunny:bouzouki,syn,vo
Declan Sinnott:g,vo,
Eoghan O'Neill:b,vo
Brian Calnan:ds,per
Davy Spillane:uileann pipes,low whistle
Keith Donald:sax

Produce:?

アイルランド系のトラッド・グループとしてはCHEAFTAINSが有名だ。しかし、日本での知名度はほとんど無いものの、MOVING HEARTSはケルンのトラッド・フェスへの出演等、幅広く活動しヨーロッパでの確実な支持を受けているようだ。政治性やメッセージ色の強いグループ（本作1曲目題名参照）であるが、サウンド的にはアイルランド色をPFM風に処理したプログレ・トラッド・バンドと言えよう。実際、かなり高度な演奏技術とセンスを持っている。本作以外に少なくとも2枚のアルバムがあり、他には「Live For Ireland」というエイド物アルバムに一曲参加している。（Chihiro S.）

MUSHROOM



Early One Morning...

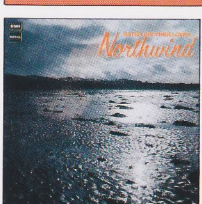
Ir: Halpix 116

'73 年

Aonghus McAnally:g,recorder,tin whistle,vo
Cam Lynch "Link":per,bodhran,wind,wood chimes,vo
Alan Brown:b,12-str-g,vo
Michael Power:org,hcd,moog,vo
Pat Collins:vln,el-mandolin,vo

イギリス本国でものすごく高価な上に滅多にお目にかかれないこのアイルランド出身の無名バンドが再発されたのは喜ばしい事だ。メンバーは5人で、ギター、ベース、ドラム、キーボード、ヴァイオリンという編成。同郷のHORSLIPSに良く似ていてトラッドをベースにしている。が彼等と違っているのは全体的にプログレ風な味付けがしてあること。B①のクラシカル調オルガン、B②のハープシコード、ヴァイオリンのソロ・パートなどこのバンドにしか出せないトーンである。ブリティッシュ・ロックが好きな人なら、必ずや気に入ると思う。ギターもイイよ。（佐野）

NORTHWIND



Sister, Brother, Lover...

Regal Zonophone SLRZ 1020

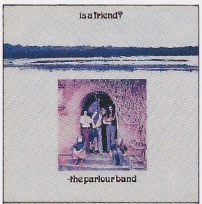
'71 年

Hugh Barr:el-g
Brian Young:vo,ac&el-g
Colin Somerville:org,p
Tam Brannan:vo,b
Dave Scott:ds.per

Produce:Tony Chapman

一聴したところでは、ありきたりなアメリカン・フォーク・ロックに聴きとられてしまうかもしれない。が、親しみ易いメロディーが耳に残る頃には、きっとSTACKRIDGEがフォーク・ロックに染ったサウンドそのものだと、つい太鼓判㊮を二度押すこと受け合いだ。それほど見事にイギリス特有のポップ感覚が息づく。しかも嫌味なく、さり気なく。実は丹念に練られた極上の外見ありきたりなフォーク・ロックだ。イギリスらしさの王道を行くと言って構わないはず。唯一の作。ドラマーは元ELASTIC BAND。人なつっこいメロディアスさ、抜群のセンス。㊮²（松本）

THE PARLOUR BAND



Is A Friend ?

Deram SDL 10

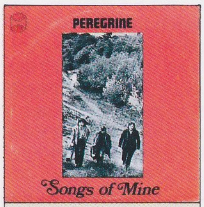
'72 年

Peter Filleul:lead-vo,key,g
Pix:vo,g
Mark Anders:vo,b
Jerry Robins:ds,per

Produce:Nick Tauber

ブリティッシュ・トラッド、フォーク系のグループの中で、女性ヴォーカルをフィーチュアしたグループに傑出したものが多いが、男性5人によるこのPARLOUR BANDも忘れてはならない存在である。'71年のクリスマスに録音されたこのグループ唯一のアルバムは、アコースティック・ギターの繊細な響きと、美しいコーラスによって醸し出されるそこはかとなく漂う物悲しさと憂いが、英国ならではの深みを感じさせてくれる。又、モノトーンで描かれた中ジャケの美しさも、彼らの音楽性を反映している。この後、グループ名をBAND CALLED "O" と変え、Popなグループに変身。 (佐藤)

PEREGRINE



SongsOfMine

WestwoodWRS016

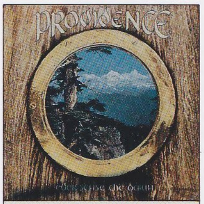
? 年

Neil Bonner:g,vo
Steve Torrington:12-str-g,vo
Chris Brighton:g,vo

Produce:?

全編三人のヴォーカル・ハーモニーとアコースティック・ギターで美しく、メロディアスな曲が綴られている。トラッド色がまったく感じられず、コンテンポラリーな音づくりである。田舎というよりも荒野を連想させる。都会的に洗練されてはいないが、感情を抑えたヴォーカルと流麗なギター・ワークは筆舌に尽くしがたい研ぎすまされた感性を持つ。サイモン&ガーファンクルを地味にした感じといえるかもしれない。これ一作しか作品が確認されていない、惜しむべきグループである。 (長谷川)

PROVIDENCE



EverSenseThe Dawn

Threshold THS 9

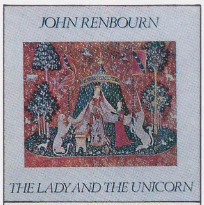
'72 年

Jim Cockey:vln,Glockken,vo
Bartholomew Bishop:lead-vo,autoharp,hcd,p,org,rmi
Tim Tompkins:cel,vo,rec,per
Bob Barriatua:b,vo
Tom Tompkins:vla,vo,vln
Andy Guzie:g,vo

Produce:Tony Clarke

いかにもスレッショルド・レーベルらしいクラシカルなアレンジが特徴のフォーク・ロック・グループ。品のあるつややかな弦楽器の多用は、室内楽を想わせるような明るいものだ。メンバー中3人の弦楽器奏者は、MOODY BLUES が活動休止中、その中心人物ジャスティン・ヘイワードとジョン・ロッジが結成した BLUE JAYS に参加、このグループでも1枚のアルバムが残されている。ASGARD やTRAPEZE の1作目などにも共通するこの独特のアレンジは、むしろレーベル・カラーと解釈すべきかもしれない。かなり質の高い1枚だが、毒気なく面白味には欠ける。 (松本)

JOHN RENBOURN



The Lady And The Unicorn

TransatlanticTRA224

'70年

John Renbourn:g,sitar
Terry Cox:hand-ds,glocken
Don Harper;vla
Lee Nicholson:concertina
Tony Roberts,Ray Warleigh:fl
Dave Swarbrick:vln

Produce:Bill Leader

英フォークの宝庫、トランスアトランティックと言えば、PENTANGLE、その中心人物だった一人。ソロ活動は'65年より現在まで続いている。ソロを追うと、彼がPENTANGLEのメンバー中、最も多彩な音楽性を持っていたこともわかる。ソロ5作目。グループ全盛期に発表された代表作の一つである。B面で展開される中世音楽の音世界には、不朽の響きすら覚える。人が違ったようなデイヴ・スワーブリックのヴァイオリンやフルートのサポートも的を得ている。'68年の前作も同傾向の作。生粋のギター・アルバムの10作目、PENTANGLE結成の伏線、'66年の2作目も好作。 (松本)

JOHN RENBOURN GROUP



A Maid In Bedlam

Transatlantic TRA 348

'77 年

MSI:TACD-900777

John Renbourn:g,vo
Tony Roberts:vo,fl,rec,oboe,piccolo
Jacqui McShee:vo
Sue Draheim:vln,vo
Keshave Sathe:tabla,finger cymbals

Produce:?

'73年のPENTANGLE の解散('83年にジョン抜きで再編)後、バート・ヤンシュと並ぶ双頭ギタリストのジョン・レンボーンは、ソロと共に自身のグループでの活動も開始する。PENTANGLE の同僚ジャッキー・マクシーの他にジャズ出身のトニー・ロバーツやタブラ奏者まで加えたこのグループは、英国のトラッドだけでなくイタリアやドイツの中世・ルネッサンスの作品も取り上げ、そこにタブラを絡ませる等、意欲的な試みと高度な音楽性を結実させた。A⑤はTRAFFIC でもお馴染みの曲。'80年の2作目「The Enchanted Garden」も秀れた作品で、現在共にCD化されている。 (高山)

ANDY ROBERTS



Nina And The Dream Tree

Pegasus PEG 5

'71 年

Andy Roberts:vo,g,tin wistle,things
Dave Richards:b,things
Roger Powell:ds,conga,tambourine,things
Zoot Money:p,org,things
Kathy Kissoon,Mac Kissoon,Ian Matthews:back-vo

Produce:Sandy Roberton

LIVERPOOL SCENE の中心人物の一人。'70年、グループの最終作と前後してRCA より「Home Grown」でソロ・デビュー、フォーク・アーティストとして歩み始めた。デビュー作は、カントリー・タッチ有り、トラッドの小曲有り、MIGHTY BABY のイアン・ホワイトマンらのバック・アップを得て程良く色合いのついたフォーク・ロックを演ってみたりと、やや統一感に欠ける節もあったが、本作では、英フォーク・ロックの陰りのある繊細な音づくりが目立つ。大曲のB②は、その典型。ズート・マネーの控えめなプレイが程良くポップ色を加えているのも見逃せない。 (松本)

BRIDGET St.JOHN



Songs For The Gentle Man

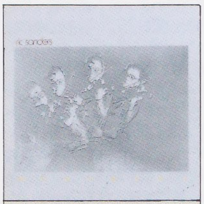
DandelionDAN8007

'71 年

Bridget St John:vo,g
Ron Geesin:g,arr org
Rick Sanders:g
with
Derek Simpson,Charles Tunnell:cel
Edward Beckett,Wiliam Bennett:fl
Chris Nicholls:a-fl
Gwydion Brooke,Robert Bourden:bsn
John Thompson:vla-
Kate Jacobs,Elizabeth Edwards:vln
Alan Sivil:hrn
Derek James,Colin Busby:tb
Produce:Ron Geesin

'70年前後にロンドンのフォーク・シーンで活動した女性シンガー。低音の物想いにふけるような歌声と繊細で落ち着きのあるフォーク・サウンドは、そのもの'70年当時の時代がかった空気をたっぷりと含んだ生粋の英フォークといえる。デビュー作は地味な作風だが、この経験を基にしてロン・ギーシンをアレンジャーに迎えたこの2作目では、思い切った室内楽、弦楽器の導入が、時として異和感をもたらし、夢見心地なムードをつくりだす。ずばり最高作。3作目、4作目へと次第にロック色を強めようが、彼女の歌声とフォーク感覚は共通している。 (松本)

RIC SANDERS



Whenever

Waterfront Music WF021

'84 年

Ric Sanders:vln,key
Robin Brown:g-syn,per
with
Simon Phillips:ds,per
Micky Barker:ds,per
Andrew Cronshaw:steel-ds
Jonathan Davie:b
Fred Thelonious Baker:b
Phil Nicholl:vo

Produce:Robin Brown& Ric Sanders

SOFT MACHINE や2ND VISION での活動で知られるヴァイオリニスト、リック・サンダースの初のソロ・アルバムだ。そもそもトラッド系のミュージシャンであり、ここでもそうした傾向を基調に斬新で瑞々しい音楽が奏でられる。参加メンバーも錚々たる連中だが、唯一無名(だと思う)のロビン・ブラウンが大活躍しており、サンダースとブラウンの共作と言った方が当たっているかも知れない。打ち込み物のトラッドというのも決して悪くない。録音もブラウンによって行われており、手作りで出来たアルバムのようだが、出来上がった作品は極上品と言えそうだ。 (坂本)

SPIROGYRA



Bells, Boots And Shambles

Polydor 2310 246

'73 年

Barbara Gaskin:vo
Martin Cockerham:vo,g
with
Steve Ashley:whistle
Steve Borrill:b
John Boyce:cel
Julian Cusack:p,vln
Henry Lowther:tp
Dave Mattacks:ds
Stan Sulzman:fl

Produce:Max Hole

合計3枚のアルバムを残したSPIROGYRAの最高作と言える、ラスト・アルバム。メンバーからもわかるように、もとはカンタベリー系のフォーク・ロック・バンド。前の2作はフォーク・ロックとしての作風という点では同一線上にあるものの、どちらかというとやや土臭くフォーク寄りのサウンド。しかしこのアルバムでは、よりクラシカルな部分を上手く織り込み、あまりにも幻想的で美しく、哀愁に満ちた雰囲気と英国的夢想が優勢。バーバラ・ガスキンの繊細なヴォーカルと、ドリー・コリンズのストリング・アレンジも素晴しい、ブリティッシュ・フォーク・ロックの最高峰。（林た）

SPRIGUNS



Time Will Pass

Decca SKL 5286

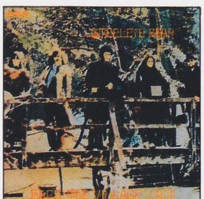
'77 年

Mandy Morton:lead-vo,ac-g
Wayne Morrison:lead-g,ac-g,mdn,vo
Dick Powell:el-g,key,vo
Mike Morton:b,vo
Dennis Dunstan:ds,p-er
with
Robert Kirby:orchestra-arr.
Lea Nicholson:concertina
Tom Ling:el-vln

Produce:Sandy Roberton

SPRIGUNS TORGUSを前身とするマンディー・モートン率いたSPRIGUNSの2作目。3作目「Magic Lady」では故サンディー・デニーに曲を捧げるなど、ヴォーカル・スタイルにしても相当彼女を意識しているが、それ以前に声質が似ているので驚かされる。クラシカルなヴァイオリンやオーケストラ、ストリングス・シンセサンザーの大幅な導入は、既に曲の一部になっていて、シンフォニック色と呼べるほどのものだ。本作では、土台の程良く洗練されたフォーク・ロックとのバランスが保たれ、特に落ち着きのあるメロディアスな曲が多い。この種では一級に肩を並べる。1作目も良質作。（松本）

STEELEYE SPAN



Hark! The Village Wait

RCA SF8113

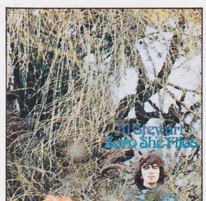
'70 年

Tim Hart:vo,el-g,vln,el-dulcimer,banjo,harmonium
Ashley Hutchings:b
Maddy Prior:vo,banjo
Gay Woods:vo,concertina,bodhran,autoharp
Terry Woods:vo,el-g,Concertina,mandola,banjo,mdn
with
Gerry Conway:ds
Dave Mattacks:ds

Produce:Sandy Roberton

FAIRPORT脱退後のアシュレイ・ハッチングス、それまでデュオで活動していたティム・ハートとマディー・プライヤー等によって結成された、STEELEYE SPANのファースト・アルバム。従来のトラッドに電気楽器を取り入れ、“エレクトリック・トラッド”の地位と歴史を築いたと言える。1st～3rdまではややトラッドに重点を置いたサウンドとなっており、4作目のクリサリスに移籍以降はさらにポップ性とロック色を強めた音づくりとなっていくが、英国のトラディショナルは健在。また、マディー・プライヤーはアニー・ハスラムの声に似ていることも要注意。（林た）

AL STEWART



Zero She Flies

CBS 63848

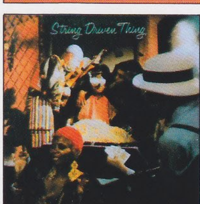
'70 年

Al Stewart:g,vo
with
Gary Stephen:g
Georg Hultgreen:?
Mike Wood:?
Gerry Conway:ds
Larry steele:?
Tim Hinkley:key
Duffy Power:?
Louis Cennamo:b
Peter Gavin:ds
Trevor Lucas:g

Produce:Roy Guest

4作目「Orange」('72)以後、アメリカで成功をおさめポップ色を強めた彼が、バート・ヤンシュ、ポール・サイモンらと並び、グラスゴー出身のギタリスト、シンガーとしてロンドンのフォーク・シーンで活躍していた時期の代表作、3作目。舌足らずの甘い歌声、メロディアスな曲調を中心にしたフォーク・ロックの狭間に、繊細で素養の豊かさを感じさせるアコースティック・ギターの妙が聴ける。ブルーズ・フィーリングをも湛えたつややかな音色は特長。なお、契約上クレジットこそないが、ジミー・ペイジが参加。タイトル曲では、それとわかるソロまでとび出す。（松本）

STRING DRIVEN THING



String Driven Thing

Charisma CAS1062

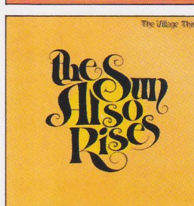
'72 年

Chris Adams:vo,g
Pauline Adams:vo,per
Graeme Smith:vln
Clin Wilson:b,g,banjo

Produce:Shel Talmy

'69年アダムス夫婦を中心に結成されたグラスゴウのグループ。マイナー・レーベルよりデビュウ。本作はカリズマより再デビュウを図った作品。後に後期V・D・G・Gに参加しハミルの良きパートナーとして、最近ではD・アレンと活動をしているグレアムが参加。全曲クリスによる根底にヒッピー・ムーヴメントに触発されたユートピア志向のあるフォーク・タッチの曲に、もの悲しいジプシー・ヴァイオリンが加わった独自の音。I・S・BやHORSLIPS辺りと近い位置にあった個性派。なお4作目以降はアダムス夫婦が脱退、音楽性も変わり別グループと見るべきである。（吉野）

SUN ALSO RISES



Sun Also Rises

The Village Thing VTS 2

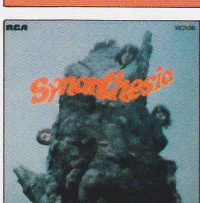
'70 年

Graham Hemingway:ac-g,vo
Anne Hemingway:vo,dulcimer,glocken,p-er
with
John Turner:str-b
Andy Leggett:whistle

Produce:SUN ALSO RISES,Ian Anderson,Gef Lucena

ギミックを使用せず、ほとんど二人のヴォーカルとギターのみで、独特の音世界を描き切っているのには驚かされる。ずばり、これほど虚ろなムード漂うフォーク・サウンドを聴いたことがない。アシッド・フォークでもフラワー・チルドレンでもない。むしろ新興宗教的な自然讃美に近い開放感と閉鎖的なムード、陶酔感が濃厚だ。というよりも、サウンド以前の域まで達している本格派かもしれない。繊細で極度に感覚的。“作られた”という印象を受けない。フォークなのだが、表面は。ウェールズ南部、カーディフの出身。フォーク専門レーベルよりリリースの異色作。（松本）

SYNANTHESIA



Synanthesia

RCA SF 8058

'69 年

Denis Homes:vib,g
Jimmy Fraser:sax,oboe,fl
Leslie Cook:g,bongo,vln,mdn

Produce:Sandy Roberton

フォークの宝庫SEPTEMBER PRODUCTIONに所属するアーティスト達は皆、その概念に捉われない自由な創作活動をしているが、このSYNANTHESIAもその1つ。サックス、フルート、ヴァイブをバックに弾き語る。時にはジャズっぽく、時にはトラッドぽくブリティッシュ特有の暗く陰湿な世界。曲自体も平淡なモノが多いのでいまいち取っ付きにくいかもしれないが、聴き進む内にジワジワと良さが滲み出て来て、ついついREPEATしてしまう。ネクラな人向きで、間違ってもネアカな人は聴かない様に。気がふさいでしまいます。（佐野）

JUNE TABOR



Abyssinians

Topic 12 TS 432

'83 年

K:280E 52055

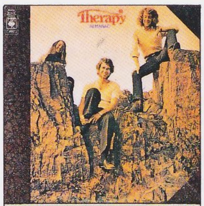
JANE TABOR

June Tabor:vo
with
Dave Bristow:p,syn
Martin Simpson:g
Ric Sanders:vln

Produce:Andrew Cronshaw

'75年、STEELEYE SPANのマディー・プライアーとの連名作「Silly Sisters」で名を広めたトラッド・シンガー。続く2、3作目で、癖のある発声と太い低音の声質をいかしてトラッドを披露、その筋から高い評価を得ているが、バックが元ALBION BAND、SECOND VISIONの布陣に替るとともにコンテンポラリー色を強めた4作目以後、特にこの5作目が親しみ易い。土臭さをそこなうことなく洗練されたトラッド・シンギングに異和感なく夢見心地なシンセサイザーが溶け合うチューンから、力強く筋の通るソロ・シンギングまでを収録。'89年、新作が出ている。（松本）

THERAPY



Almanac

CBS 69017

? 年

Dave Shannon
Sam Bracken
Fiona Simpson
with
Danny Thompson:b
Terry Cox:ds
Sarah Francis:oboe
Neil Black:oboe
John Almond:fl
John Price:bassoon
Daryl Runswick:b,conductor
Will Roper:fl

Produce:?

各曲を12の星座に象徴した、フォーク系では珍しいコンセプト作。この起伏ある曲想は、所謂フォーク・ロックとは異質だ。オーボエ、ハープシコードなどによるクラシカルな色づけ、ストリングスの導入、PENTANGLE のリズム陣によるシックなトーンが、随所でパート、バッキングを受け持ち、調和をも保つ。が、第一にポップ色とも言える独特のメロディアスさと女性ヴォーカルのフォークらしからぬ感情表現に依るものだ。後の'76年、デュオで本作をセンス良くシンプルに焼き直し、更に豊かなヴォーカル表現を披露。他に2作がある模様。'70年代初期の瑞々しさがある。(松本)

TIR NA NOG



Tir Na Nog

Chrysalis ILPS 9153

'71 年

Sonny Condell:g,mor-occan pottery-ds,tablas,jewsharp,vo
Leo O'Kelly:g,dulcimer,el-b,whistle,vo
with
Barry Dransfield:fiddle
Annie Crozier:psaltery

Produce:Bill Leader

デビュー作。次作より4人編成となり、いわゆるフォーク・ロック・サウンドへと移るが、本作はそれ以前の生粋のブリティッシュ・フォーク。トレイラー・レーベルの主宰者によるプロデュース、トランスアトランティック・レーベルのフォーキーをゲストに迎えることで、よりこのデュオ独自のオリジナリティが保たれている。肌目細かな音色、適度なメロディアスさを持ったサウンドながら、どことなく東洋色を漂わせる、この頃の時代感覚あるメロディーも聴くことができる。この幾分アンダーグラウンドな暗さあるムードは特徴。両者は他に参加関連がないもよう。(松本)

TRADER HORNE



Morning Way

Dawn DNLS-3004

'70 年

TE:22DN70

Judy Dyble:vo,key
John Godfrey:b
Jackie McAuley:vo,g,key
Andy White:per
Ray Elliot:a-fl,b-cla

Produce:Barry Murray

アイルランド出身のジャッキー・マコーレイと、第一期 FAIRPORT CONVENTION を脱退後のジュディ・ダイブルの2人が中心となって結成された TRADER HORNE の唯一のアルバム。ヴァイオリン、ピアノ、アコースティック・ギターを全編に用い、またB①等ではストリングス・アンサンブルも聴ける。何よりも、全体に漂う悲愴感と各楽器のアレンジが絶妙で、ヴォーカルをも引き立てている。各曲の曲間にはフルート、ピアノによる簡素ながらも哀愁に満ちた間奏曲が配され、ブリティッシュ・フォークの域をはるかに越えた名盤となっている。(林た)

TRANQUILITY



Tranquility

Epic EPC 64729

'72 年

Tony Lukyn:vo,p,org
Kevin McCarthy:g,vo
Berkeley Wright:vo,g
Terry Shanddick:vo,g
Bernald Hagler:b
Paul Francis:ds,per
Jim Leverton:b
John Perry:b
Eric Dillan:ds,per

Produce:Ashley Kozak

最近は、英国のトラッド・フォーク系の作品の発掘が盛んにすすめられているが、この TRANQUILITY もそんな中に数えられるグループのひとつだろう。アルバムは2枚残しており、本作は1作目になる。以前からジョン・ペリーが参加していることで話題にはなっていた。基本的には、ハーモニーを主体とした優しいフォーク・ロック。A③は名曲である。この類のグループ、MAGNA CARTA, DULCIMAR, PAUL BRETT'S SAGE といったポップな味わいを持ったフォーク・ロックは今、また見直されていいだろう。美しいジャケットに包まれた本作も再評価されたいところだ。(後藤)

TREES



On The Shore

CBS 64168

'70 年

Celia Humphris:vo
Barry Clarke:lead-g,dulcimer
David Costa:ac&el-g,mdn
Bias Boshell:b,vo,tambourine
with
Tony Cox:b
Michael Jefferies:harp

Produce:Tony Cox

ヒプノシスによる英国的幻想に包まれたジャケットの、フォーク・ロック・バンド、TREES のセカンド・アルバム。オリジナル・メンバーに、B・ボッシェルが加わり、制作された本作品は、セリア・ハンフリーズの澄んだヴォーカルとメロディ・ライン、ややブルーズがかったギター、と FAIRPORT の影響が感じられる。トラッドと自作の曲が半々で、名曲が多く特にオリジナリティに富んだ10分にも及ぶ大曲には驚かされる。1枚目の「The Garden of Jane Delawney」も同様に味があって良いが、ハープ、ピアノ等を取り入れた、こちらの方が際立っている。(林た)

TUDOR LODGE



Tudor Lodge

Vertigo 6360 043

'71 年

Lyndon Green:vo,g
John Stannard:vo,g
Ann Steuart:vo,g,p,fl

Produce:?

ホルン、オーボエ、ヴァイオリンによる牧歌的な英国美に縁どられた幕開け。流れるようなアコースティック・ギターと輝く春の木もれ陽の様なアン・ステュワートのヴォーカルと美しいフルートの調べ。TUDOR LODGE の唯一のアルバムである本作品は、メンバー以外に前述の楽器とヴィオラ、チェロ等を多数用い、フォーク的な中にも室内管弦楽を思わせる高貴な気品に満ちている。ちなみにオリジナルは6面開きの変型ジャケットになっている。また、アン・ステュワートは CURVED AIR の名作「Phantasmagoria」にフルートで参加している。(林た)

WATER INTO WINE BAND



Hill Climbing For Beginners

Myrrh MYR 1004

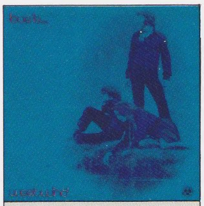
'74 年

Bill Thorp:vo,vln,p,glocken,bongos
Ray Wright:vo,ac&el-g,b
Pete McMunn:vo,ac-g
Trevor Sandford:vo,ac&el-g
with
Gari Williams:fl
George Caird:oboe,rec
John Payne:cla
Nigel Robson:horn
Jeremy Ward:bassoon
Frances Kelly:harp
Stephen Jones:vln
Wilf Treasure:vla
Darrell Davison:cel
Mike Wade:ds,per

Produce:John Pantry

York レーベルなどと共に今後より探られるべきフォーク・レーベルの謎の一作。ゆったりとした曲想にクラシカルな弦楽器やピアノ、ハープの音色が沿い、秋枯れの物想いに沈む様なメロディーを一層深めるように、緩やかに展開していく様は、ただ者ならぬ力量と確固たる音楽性を感じさせる。ヴォーカルをも含めて、全ての楽器の音色、響きに内省感情が宿るような絶妙の丹念さがあって、程良く緊張感もある。単に繊細さあるフォークという以上に、フォーク・サウンドによる一種独特の音世界が形造られていく奥深さを特筆すべきだろう。静かなる感動を呼び醒す。(松本)

WESTWIND



Love Is...

Penny Farthing PELS505

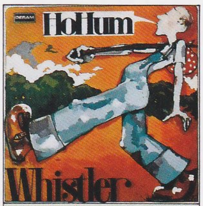
'70 年

Sarah Dyson:g,vo
Nick Storey:?
Chris Stowell:?

Produce:Johnny Watson

彼らの唯一の作品は、レーベルの印象からアシッド系のサウンドを想像されるかもしれないが、それとは対極にあるヴォーカル・ハーモニーを主体とした'60年代型フォークである。メロディアスな歌を中心に、バックは弦楽器を主に使用し、必要最小限にとどめられている。女性ヴォーカリストがほとんどの曲でリードをとり、残る二人のハーモニーがかぶさり、素朴で的を得たアコースティックな演奏が加わる。M・CANDLE あたりと比べると、音楽的に一世代昔のタイプに属し、ソフト感覚にも時代を感じさせる。コーラス・グループ色を色濃く残している。(長谷川)

WHISTLER



Ho Hum

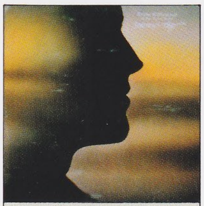
Deram SML 1083
'71 年

George Howe:key,g,vo
John Chuter:g,b,vo
Ant Grout-Smith:key,g,b,sax,vo
with
Tony Carr:per
Barry Morgan:ds
Clem Cattini:ds
Doris Troy:vo
Lisa Strike:vo
Gordon Huntley:pedal steel-g
Douggie Wright:ds
Jimmy Hastings:fl
Eric Bell:el-g

Produce:Peter Johnson

イギリス特有の陰影に富む音ではなく、一聴すると明るめのフォーク・ロックに思えるが、繊細さが見え隠れして、暖か味が伝わってくる。キーボードが多用され、これが効果を発揮して薄いベールのような繊細さにつながっているように思える。CARAVAN のパイ・ヘイスティングの兄、ジミーがフルートで1曲参加しているが、CARAVAN のフォーク色を更に押し進めたならば、この様になる、といった感がする。'70年前後のデッカ、デラム、そして傘下のアルゴの各レーベルには、こうした地味な良質のフォーク系作品が単発で残されていて興味を引かれるところだ。（長谷川）

ROBIN WILLIAMSON & HIS MERRY BAND



Journey's Edge

US:FlyingFish FF 033
'77 年

Robin Williamson:vo,g,vln,whistle,mdn
Sylvia Woods:celtic harp,hcd,glocken
Christophen Caswell:fl,whistle,acc,per
Jerry McMillan:vln

Produce:?

彼は INCREDIBLE STRING BAND の中心メンバーであった。本作はソロ2作目。前作は多重録音による内省的な作品。本作はカリフォルニアに移住し制作され、開放的になっている。しかしアメリカ色は全くなく、独自の個性が良く表われた作品。ISB 同様に、ブリティッシュ・トラッドを基に、様々な民族音楽の要素を導入した音。又中世の宗教音楽に通ずる部分もある。彼は現代に蘇ったトルヴァトールといえる。バック・バンドは、クラシックの素養を感じさせる、的確な演奏を繰り広げる。現在も活動中であるが、平均的な作品が多い。（吉野）

WOODEN HORSE



II

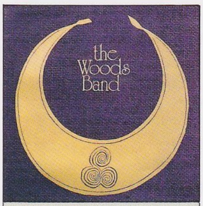
York FYK 413
'73 年

David Mateer:vo,ac-g
Malcom Harrison:vo,ac-g
Susan Traynor:vo
Steven Marwood:lead-g
Niel Brockbank:b
Bob Irwin:ds,per
Dave Young:fl,sax

Produce:Tony Hooper

デッカ系列のフォーク・レーベル、York のアーティスト。女性ヴォーカリストを含むコーラス系フォーク・グループ。これは2作目になるもの。軽やかさと品の良さが終始保たれていて、程良く落ち着きのあるサウンドだ。イギリスのかげり云々というよりも、WESTWIND や'60年代末のモダン・フォークに通じる乗りが強い。清潔感がややもすると生温く、慣習に従う楽天主義の正義感といった気配を感じさせ、セプテンバー・プロダクション系列のサウンドを好むリスナーにとっては、イージーなサウンドであることは否めないと思う。先鋭感覚を求めにくい。（松本）

THE WOODS BAND



The Woods Band

Greenwich GSLP1004
'71 年

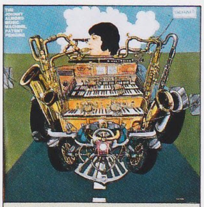
Terry Woods:mandola,concertina,ac&el-g,b,vo
Gay Woods:concertina,autoharp,dulcimar,bodhran,vo
Ed Deane:ac,el&slide-g,hcd,b
Pat Nash:ds,vo
with
Austin Corcoran:b,ac-g
John Ryan:org,p
Tony Reeves:b

Produce:Tony Reeves

'60年代末、英フォークのポイントになるとされる SWEENEY'S MEN に在籍していたテリー・ウッズが、夫人であるゲイと共に STEELEYE SPAN を経て結成した初のリーダー・グループ。唯一のアルバム。S・MEN 時代の自作曲B①の改作や、ジグのロック的な解釈が窺える自作曲A②、トラッド・メドレーのA④など、どれもメロディーを重視した、そしてトラッドや彼の色をそこなわない曲想が特徴。またゲイの魅惑的な歌声についても、前グループ、後のデュオ、GAY & TERRY WOODS を通じて、本作A③が際立っている。聴き易さと地味さを兼ねた1作。（松本）

CATALOG JAZZ

THE JOHNNY ALMOND MUSIC MACHINE



Patent Pending

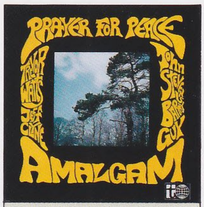
Deram S(D)ML1043
'69 年

Johnny Almond:t,a&b-sax,fl,a-fl,org,v-ib,mtn,b-cla
Geoff Condon:el-g
Roger Sutton:b,claves
Johnny Wiggins:p,org
Steve Hammond:a&el-g
Alan White:ds,conga,cowbell,native ds

Produce:?

'65年ジョン・メイオールの2作目でデビューしたジョニー・アーモンド、22歳の時の初リーダー作。後々 RIFF RAFF、NUCLEUS などでも知られるロジャー・サットン、23歳、アラン・ホワイトに至っては19歳の時の録音である。同グループは、翌年2作目を残し解散。この時期の前二者は、ブルース・ロック系大物アーティストの下を渡り歩きつつ、腕を研いた結果が、やがて'71年、MARK ALMOND でその音楽性が結実する。その前身に当たる当グループでは、まだ軽味のブルース系ジャズを演奏していた。実験色は薄く、オーソドックスではある。想い出の1枚か。（松本）

AMALGAM



Prayer For Peace

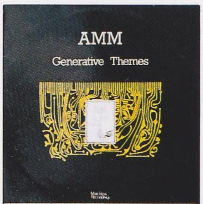
Transatlantic TRA196
'69 年

Trevor Watts:a-sax
John Stevens:ds
Jeff Clyne:b
with
Barry Guy:b

Produce:Terry Yason

流動的なメンバー構成で、極度に強い即興性が実験音楽ともとれそうなコンセプチュアルなフリー・ジャズを永きに渡って展開する S. M. E。その中心人物の一人、トレヴァー・ワッツが、それと並行して'60年代末より率いる AMALGAM は、大編成の S. M. E を構成する中心核の小編成ユニットといえる。幾分オーソドックスな志向を持ち、即興を中心にしながらも整合感は十分感じさせる。トリオ編成でのこの1作目では、彼等にしては、落ち着きのあるメロディー志向の一面が強調されている。後に TURNING POINT を率いるジェフ・クラインのフィーチュア度も高い。（松本）

AMM



Generative Themes

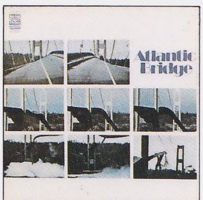
Matchless MR6
'83 年

John Tilbury:p
Keith Rowe:g,cel,el-ectronics
Eddie Prevost:per

Produce:?

'80年頃ポピュラー・シーンに頭角を現したノイズ・ミュージックは、その性格上アンダーグラウンドなものではあったが、イギリスの音楽シーンを揺さぶった極みには違いなかった。一口にノイズとは言っても、その時代においては今でこそ市民権を得たサイケ・トーンですら、その概念を持ち得たに違いない。AMM は'65年より活動するフリー・ミュージック集団だ。一聴してノイズに相当するが、彼等にはフリー・ジャズ、実験音楽の下積みを、そしてインプロヴィゼイションたる裏づけを音に感じ得れる。アヴァンギャルドとは、時代の一般概念に対する位置を示す物差し用語だ。 (松本)

ATLANTIC BRIDGE



Atlantic Bridge

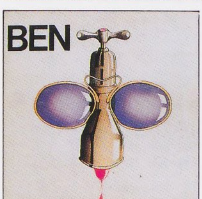
Dawn DNLS 3014
'71 年

Mike McNaught:p,el-p
Jim Philip:fl,s&t-sax
Daryl Runswick:b
Mike Travis:ds,per

Produce:Barry Murray

名うてのジャズ・ミュージシャン4人が、LONDON JAZZ FOUR を'69年初頭に結成した。そのバンドが名を変え、'70年に発表したアルバムが本作である。収められた曲はB①②の BEATLES ナンバーや、プログレ・ファンにもなじみの深いA①等、ポピュラーな選曲となっている。どれも心地良いメロディを持った軽めのジャズであるが、魅力的な作品に仕上がっている。B③のオリジナルがなかなか良いのでもっと彼等の作品を聴きたいというのが唯一の不満。しかし'71年に入って3曲入りのマキシ・シングル（Dawn）が発表されており、そちらは全曲オリジナルである。 (後藤)

BEN



Ben

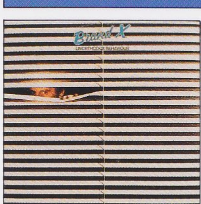
Vertigo 6360 052
'71 年

Peter Davey:sax,fl,cla
Alex Macleery:el&ac-g
Gerry Reid:el&ac-g
David Sheen:ds,per,conga,vo

Produce:Malcom Koss

ブリティッシュを代表するコレクターズ・レーベルであるヴァーティゴ。本作はカタログ中唯一といえるブリティッシュ・ジャズ感覚を打ち出したインストゥルメンタル・バンドの作品であり、イギリスではおそらくプレス枚数も関係しているだろうが1～2位を争うレアー盤である。全4曲中A①はキース・ジャレットの曲をモチーフとしてメンバー全員の共作による組曲の形式を取っているが、残りの3曲はリーダー格のピーターのペンによるものである。内容も彼のサックスとフルートを中心としており、全体的にクールな印象を残している。なおメンバーの経歴は不明。(吉野)

BRAND X



Unorthodox Behaviour

Charisma CAS1117
'76 年
VJ:VJD-28201

Phil Collins:ds,per
Robin Lumley:key
John Goodsall:g
Percy Jones:b
Jack Lancaster:sax

Produce:BRAND X & Dennis Mackay

史上最強のジャズ・ロック・ユニット BRAND X はジェネシスの活動とは別にプレイヤーとしての可能性を追い求めたフィル・コリンズが提唱したバンドと言われているが、実際のリーダー格は仕掛人ロビン・ラムレイである。このバンドの持ち味はドライヴ感満点のスリリングなアンサンブルで、デビュー作である本作は最もパワーに満ちあふれており、全編テンションの塊というべき演奏が繰り広げられている。なお、本作以前に2作目以降正式メンバーとなるモーリス・パートを加えて英アイランドにてレコーディングされたオクラ入り作品が存在するとの噂がある。(内田)

NEIL ARDLEY



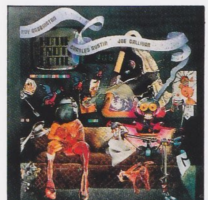
Kaleidoscope Of Rainbows

Gull GULP 1018
'76 年

Neil Ardley:director,syn
Bob Bertles:a&s-sax,fl
Paul Buckmaster:cel-lo
Ian Carr:tp,flh
Geoff Castle:key
Tony Coe:ts,cla
Dave Marcrae:key
Roger Seller:ds
Ken Shaw:g
Brian Smith:t&s-sax,fl
Roger Sutton:b
Barbara Thompson:a&s-sax,fl
Trevor Tomkins:per,vib
Stan Sulzman:a&s-sax
John Taylor:key
Produce:Paul Buckmaster

ニール・アードレイは、NEW JAZZ ORCHESTRA を指揮したり、'70年夏の COLOSSEUM と N. J. O. のジョイント・ツアー等でよく知られており、コンポーザー、アレンジャーとしても活躍している、イギリス・ジャズ界の重要人物の一人である。この10のパートから成るジャズ組曲は、めぐりめぐるメロディを主体に、アドリブ・ソロの応酬がリズムやハーモニーとの組み合せで構築されている。その音空間は、タイトル通り万華鏡のように色彩感覚あふれるものに仕上がっている。ジャケット写真のように、淡い光りの中を浮遊するような柔かさと快ちよさをもった好作品である。 (佐藤)

AUSTIN/BABBINGTON/GALLIVAN



HomeFromHome

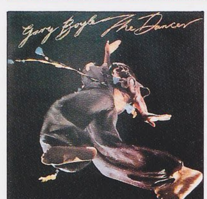
Ogun OG 522
'79 年

Charles Austin:fl,ob-oe,sax
Roy Babbington:b
Joe Gallivan:ds,syn,per

Produce:Ron Barron

Ogun と言えば、Incus やドイツの FMP に並んで、ヨーロピアン・ジャズの宝庫である。ことに'70年代後半のブリティッシュ・ジャズを一手に引き受けた Ogun では、エルトン・ディーンやティペットら我々にも馴染みあるミュージシャンが、ユニットを自由に行き来しては録音を残した。この当時、スタン・トレイシーのバンドに加っていたロイ・バビントンがいるユニット作が本作である。小曲集という以上にユーモアをも含んで幾らか現代音楽風の響きもあり、小曲が構成する大曲といったコンセプチュアル指向が窺える好作。緊張感もある。 (松本)

GARY BOYLE



The Dancer

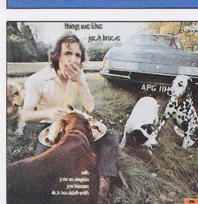
Gull GULP 1020
'77 年

Gary Boyle:g
with
Zoe Kronberger:key
Robin Lumley:key
Rod Argent:key
Dave MacRae:key
Doni Harvey:b
Steve Shone:b
Simon Phillips:ds
Jeff Seopardie:ds
Morris Pert:per
Maggie Pert:vo

Produce:Robin Lumley

ISOTOPE のリーダーだったインド生まれのジャズ・ロック・ギタリスト、ゲイリー・ボイルの初のソロ・アルバムであり、表ジャケットからは想像もできない彼の最高傑作だ。BRAND X のロビン・ラムリーをプロデューサーに迎えたのが大成功したと言えよう。豪華な参加ミュージシャン達の演奏も素晴らしく、意表をついたH・ハンコックの名曲も見事にこなしている。その後発表した数枚のソロ・アルバムから顧みると、まるでフロックだったかのような奇蹟的名盤だが、是非ともまたこの域に達する新しい作品をものにしてもらいたいものだ。 (坂本)

JACK BRUCE



Things We Like

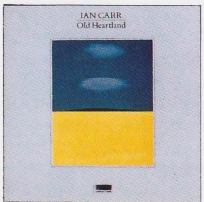
Polydor 2343-033
'70 年

Jack Bruce:b
John McLaughlin:g
Dick Heckstall-Smith:s&t-sax
Jon Hiseman:ds

Produce:Jack Bruce

CREAM 解散前に録音された（既に解散は告知されていた）ジャック・ブルースの第2作。典型的なブリティッシュ・ジャズ・サウンドである。ジョン・マクラフリンは内向的なプレイで地味。ディック・ヘクストール・スミスはいつもの調子。だが、ジャック・ブルースとジョン・ハイズマンは完全にイッてしまっていて、すさまじい演奏を展開する。B面1曲目などは、まさにヘヴィ・スラッシュ・ジャズである。リリースが遅れたのは、ロバート・スティグウッドが資金をオスカー（新人歌手ー結局、売れなかった）につぎ込んだため、と思われる。 (中藤)

IAN CARR



Ian Carr:tp,flh
with
Phil Todd:s-sax,b-c-la
The Kreisler String Orchestra
Steve Berry:double-b
Mo Foster:b
Geoff Castle:key
Dill Katz:b
John Marshall:ds

Produce:Ian Carr

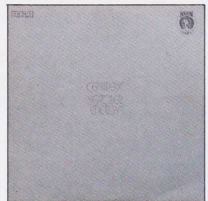
Old Heartland

EMI:MMC 1016

'88 年

今も尚 NUCLEUS を率いて活動しているイアン・カーだが、既にジャズ評論家としても大家をなしており、ブリティッシュ・ジャズ界の大御所的な存在となっている。これはその彼が作曲の才能を存分に発揮した近年稀に見る快作だ。なんと言っても4部構成の組曲が聴き物。クライスラー弦楽オーケストラの活きのいい演奏を見事に操り、ジャズの地平を遙かに超えた美しい作品を作り上げている。残りの曲は現在の NUCLEUS による演奏だ。フィル・トッドもいつの間にか味のある優れた演奏家に成長しており、今後がおおいに期待されそうだ。　（坂本）

CENTIPEDE



Ian Carr,Mark Charig:tp
Elton Dean,Ian MacDonard:a-sax
Gary Windo,Brian Smith,Alan Skidmore:t-sax
Karl Jenkins:b-sax
Nick Evans,Paul Rutherford:tb
John Marshall,Robert Wyatt:ds
Brian Godding:g
Maggie Nicholls,Julie Tippett,Mike Patto,Zoot Money,Boz:vo
Roy Babbington,Harry Miller,Jeff Clyne:b
Keith Tippett:p
Wendy Treacher,etc.:vln
Michael Hurwitz,etc.:cel
Produce:Robert Fripp

Septober Energy

Neon NE 9

'71 年

Neon レーベルから'71年に発表された2枚組の大作。ロバート・フリップのプロデュース、キースとジュリーのティペット夫妻の作曲、総勢55名の英国ジャズ、ロック界の精鋭の参加をみた圧倒的な作品である。更には、これだけの作品が、たった3日間の録音がもとになっていることは驚異である。ソロ、デュオ、トリオ、カルテット、クィンテットと演奏形態を変えながらアルバムは進行する。D面の壮大なコーラスは感動的である。しかしながら、四面全部を聴き通すには、聴く側の構えも同時に要求される。そうでなければ濃密な音世界に押しつぶされてしまう。　（後藤）

THE CHITINOUS ENSEMBLE



Paul Buckmaster:comp,arr,el-p,cel
Ian Carr:tp,flh
Brian Smith:s-sax
Peter Robinson:el-p
Bob Efford:bsn,b-cla
Chris Lawrence:double-b
Ron Mathewson:double-b
Barry Morgan:ds
John Marshall:ds
Diana Lewis:p
Chris Karen:per
Denis Lopez:per
Raoul Mayora:per

Produce:Gus Dudgeon

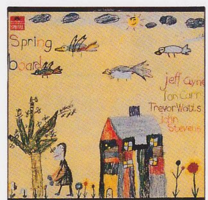
Chitinous

Deram SML 1093

'71 年

名アレンジャーとして、又、THIRD EAR BAND のメンバーとして知られるポール・バックマスターのソロ・アルバム。彼の作曲能力を最大限に生かした作品で、多くのゲスト参加により、一時的に編成された CHITINOUS ENSEMBLE が演奏している。ジャズや現代音楽等の融合を試みたアヴァンギャルドな作品だが、緻密に構成された曲展開は一種独特の聴き易さを持っており、弦楽器や管楽器を加えた大編成のオーケストラは、様々な色彩でヴァラエティに富んだ演奏をしている。かつて国内盤もリリースされていたという、コワイ様な事実もある。　（沢田）

THE JEFF CLYNE-IAN CARR QUARTET



Jeff Clyne:b
Ian Carr:tp
Trevor Watts:a-sax
John Stevens:ds

Produce:Eddie Kramer

Springboard

Polydor Special 545 007

'69 年

'66年録音。当時、I・カーは Rendel=Carr 5 に、他の3人はJ・スティーヴンスを中心とするS. M. E.に在籍していた。3年経ってこのアルバムが発表された頃、3人はT・ワッツのグループ AMALGAM のデビュウ・アルバムを制作したばかり。直後、I・カーはJ・クラインを誘って NUCLEUS を結成する。本アルバムに収録された楽曲は、それぞれにニュー・ジャズ風で、クールな部分は情緒的。セッションの域を出ない。カヴァー・ドロウイング及びライナー・ノーツは、J・スティーヴンスの愛息が担当。　（中藤）

TONY COE



Tony Coe:compose,cla b-cla,s&t-sax
with
Mary Thomas:vo
Norma Winston:vo
James Gregory:fl,piccolo
Alan Hacker:cla,b-cla
Francis Christou:cla,b-cla,s-sax
Edward Planas:cla,b-cla
Derek Watkins:tp,flh
Henry Lowther:tp,flh
Kenny Wheeler:tp,flh
Chris Pyne:tb
Geoffrey Perkins:b-tb
Trevor Tomkin:per
Frank Ricotti:per
Philip Lee:g
Vivian Joseph:cello
Pat Smythe:p,el-p,or-g
etc...

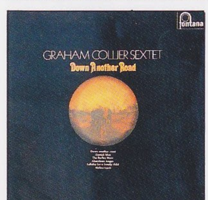
Zeitgeist

EMI EMC 3207

'77 年

'62年のデビュー作から数えて5作目。多数の参加ミュージシャンの中には、ART ZOYD や GILGAMESH のメンバーも見える。この作品は、タイトルを19世紀のドイツ理想主義に求め、現代音楽家アルバン・ベルグに捧げられたもの。これらについてはライナー・ノーツに言及されている。形式はジャズ・オーケストラの形をとっているが、'70年代初期に多く試られたそれに比べると、各パート前後のつながりが明瞭なうえ、どれもアレンジされた点、洗練された作風とでも言うべきか。硬派ながらも整合感があり、時として現代音楽の響きを持つ。ヴォーカル・パートも多い。　（松本）

GRAHAM COLLIER SEXTET



Graham Collier:b
Harold Beckett:flh
Stan Sultzman:a&t-sax
Nick Evans:tb
Karl Jenkins:oboe,p
John Marshall:ds

Produce:Terry Brown

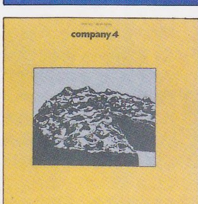
Down Another Road

Fontana SFJL 922

'69 年

'37年生まれ。ベーシストである以前にマイク・ウエストブルックと並び称される英ジャズ界のコンポーザー。'64年の初作とほぼ同メンバーによるこの2作目では、SOFT MACHINE 以前のカール・ジェンキンス、ジョン・マーシャルの演奏が堪能できる。各曲穏やかなテーマとオーソドックスな曲調を持ち、この時期のメイン奏者ハリー・ベケットと対等の前者のオーボエ・プレイ、力強いロールを多用した後者のドラム・プレイは印象的。次作よりメンバー構成を新たにし、テーマとソロを明確に、更にはそれを発展させてオーケストラルなアルバムを製作している。　（松本）

COMPANY



Steve Lacy:s-sax
Derek Bailey:el-g

Produce:?

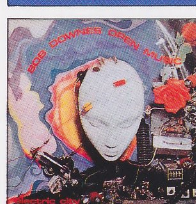
Company 4

Incus 26

'77 年

COMPANY の数多い作品群の中で、表面的には控え目なサウンドながらも彼らの意図が最も鋭角化された一枚。ここでは、一般のフリー・ジャズに多く見られる激しい感情の動きや緊張よりも、もっと奥深い繊細で微妙な音の揺らぎがサウンドを支配している。そのサウンドを、彼らは即興の中で絶えず空間（時間の流れ）に対する音の配置を計算し、コントロールしながら冷静に構築していくのである。それはまるで色彩のない点と線で構成された抽象画の軌跡を思わせる美しいものだ。正にフリーを究めた名作と言えよう。麻薬的快感を求める方には必聴の一枚である。　（平野）

BOB DOWNES OPEN MUSIC



Bob Downes:vo,t&a-sax,fl
Dave Brooks:t-sax
Don Faye:b-sax
Nigel Carter,Kenny Wheeler:tp
Bud Parks,Harold Beckett,Ian Carr:tp,flh
Ray Russell,Chris Spedding:g
Herbie Flowers,Daryl Runswick,Harry Miller:b
Dennis Smith,Alan Rushton,Clem Catini:ds
Robin Jones:conga,timbales

Produce:Bob Downes

Electric City

Vertigo 6360 005

'70 年

'69年、ボブ・ダウンズを中心にトリオとして出発した OPEN MUSIC は'70年の暮に、セカンドとしてこの作品を録音する時には17名の大世帯となっていた。と言うのも「開かれた音楽」というグループ名通り、ジャズ・ロックを演奏すると同時に、メンバーが自由に出入り出来る共同体であったからだ。当時のジャズ・ロック・シーンは渾然一体となっていて、本作のメンバーも MIKE WESTBROOK CONSORT や ROCK WORKSHOP 等と重複している。音の方はオーソドックスな当時の音なのだが、A④はなかなか格好いい曲だ。ブラスのアレンジが光っている。　（後藤）

GARRICK'S FAIRGROUND



Mr. Smith's Apocalypse

Argo ZAGF-1

'71年

Norma Winston:vo
John Smith:vo
George Murcell:vo
Betty Mulcahy:vo
Henry Lowther:tp,flh
Don Rendell:t-sax,c-la,fl
Art Themen:t&s-sax,cla,fl
Coleridge Goode:double-b
Trevor Tomkins:per
Michael Garrick:org

Produce:Kevin Daly

マイクル・ギャリックの作品の中では異色のアルバムである。ジョン・スミスの詩に曲をつけた企画もので、シュプレヒゲサング的な部分も多く、ジャズがジャズの域を越えていく意欲が感じられる。何の関係もないだろうが、前年CENTIPEDEが結成されている。M・ギャリックは本作で作曲家としての能力をいかんなく発揮しているが、ピアニストとしての評価も高く、レンデル＝カー5のメンバーだった。また、リーダー作も数多くあり、同じARGOからリリースされた「Heart Is A Lotus」もイギリス的ジャズ・アルバムとして代表作にあげられる。（中藤）

MICHAEL GIBBS



Tanglewood 63

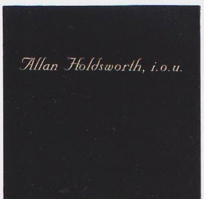
Deram SML 1087

'71年

Michael Gibbs:musical director
with
Ken Wheeler,Henry Lowther,Harry Becket:tp,flh
Chris Pyne,David Horler,Malcolm Griffiths:tb
Dick Hart,Alfie Reece:tuba
Tony Roberts,John Surman,Alan Skidmore,Stan Sulzman,Brian Smith:sax
John Marshall,Clive Thacker:ds,per
Frank Ricotti:vib,per
Chris Spedding:g
Roy Babbington,Jeff Clyne:b
Mick Pyne,John Taylor,Gordon Beck:key
Produce:Peter Eden

彼はニール・アードレイと並びブリティッシュを代表するジャズ系コンポーザー、アレンジャーである。彼名義の2作目に当たる本作は所謂ビック・バンド・ジャズの形態を取っているが、正統的手法にこだわらず各演奏者にフリー・パートを与え、ソロのダイナミズムを重視した点は特徴といえる。又当時流行であったロック感覚の導入も図られている。こうした彼の手法が、後に名作MAHAVISHNU ORCHSTRA「Apocalyps」のオーケストレーションにおいて見事に結実している。そしてスタンリー・クラークやマイケル・マントラーとの活躍も見逃がせない。（吉野）

ALLAN HOLDSWORTH



I・O・U

US;AH-100

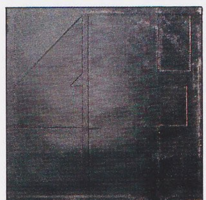
'82年

Allan Holdsworth:g vln
Paul Williams:vo
Paul Carmichael:b
Gary Husband:ds,p

Produce:?

本作品は'82年に自主製作されたセカンド・ソロ・アルバムで、彼の長いキャリアが凝縮された完成度の高い作品である。複雑に緊張感溢れるコード・プログレッション、ヴォイシング、空を駆け抜けるようなソロ・プレイはいつ聴いても新鮮で魅了されてしまう。テクニックに於ても最高のギタリストであるが、それ以上に音楽に対する姿勢や、センスの良さに脱帽させられる。この後、'83年「Road Games」をリリース、'84年には初来日をしている。又、タイトルである「I・O・U」とは借用証書の意味で、アランにとって当時の苦しい状況を物語っている。（村上）

IF



Four

United Artists UAG 29315

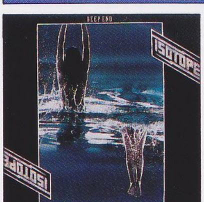
'72年

John Mealing:key
Terry Smith:g
Jim Richardson:b
J.W.Hodkinson:vo
Dave Quincy:sax
Dick Morrisey:sax
Dennis Elliot:ds

Produce:Lew Futterman

英国ブラス・ロック界にあって最大の知名度と、7枚のアルバムという歴史を残すIF。ジャズ畑出身のD・クィンシー、D・モリシーといった2人のサックス奏者を中心に独特のジャズ・ロックを聞かせる。ヴォーカルのJ. W. ホッジキンスン（彼は後にダリル・ウェイのWOLFに参加する。）の声質は意外にポップな味付けとなっているが、2本のサックスがインプロヴィゼイションを繰り広げるインスト部分では、本格的にジャズを感じさせる。この4作目は'72年2月のライヴとなっているが、A①に魅力のすべてが表現されている。バンドは本作後普通のロックを演奏する。（後藤）

ISOTOPE



Deep End

Gull GULP 1017

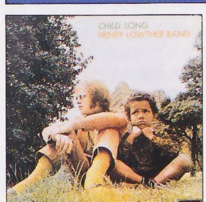
'76年

Gary Boyle:g
Nigel Morris:ds
Zoe Kronberger:key
Frank Roberts:key
Dan K.Brown:b
with
Morris Pert:per
Neville Whitehead:b
Hugh Hopper:b
Laurence Scott:syn

Produce:Robin Lumley

ブライアン・オーガーやツトム・ヤマシタらとの活動で有名なインド生まれのギタリスト、ゲイリー・ボイルをリーダーとするこのグループは、強者ベーシストが参加した事でも有名である（1ではジェフ・クライン、2ではヒュー・ホッパー）。3作目に当るこのアルバムはプロデューサーにロビン・ラムリィを迎え、ダブル・キーボードというバンド編成で'76年夏に発表された。キーボードを駆使したスペイシィなサウンドの中で、タイトでファンキーなリズムに乗り、ギターがアグレッシヴに駆け巡る。極めて洗練されたジャズ・ロック・アルバムの傑作である。（佐藤）

HENRY LOWTHER BAND



Child Song

Deram SML 1070

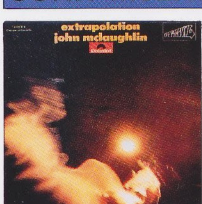
'70年

Henry Lowther:tp,flh,vln,per
Tony Roberts:t-sax,b-cla,per
Mike McNaught:el-p,per
Daryl Runswick:b,per
Mike Travis:ds
Jimmy Jewell:t-sax
Neil Slaven:per

Produce:Neil Slaven

アレンジャー、セッション・マンとして数多くの作品にクレジットされているヘンリー・ロウサーの唯一のアルバム。当時のブリティッシュ・ジャズは、ロック・パワーを取り入れたスピーディな演奏がメインになりつつあったが、彼はかねてより土着的クラシックを基本としたメロディ・ラインに注目しており、他のイギリスのジャズ・メンとは趣向が異なっていた。だからこそこの作品には力あふれる美しさとは対称的な、古典的な美しさがある。ベースはジャズだが、モダーン・クラシカルな要素がある。JASPERのアルバムでは、もう少しロマンティックになっている。（中藤）

JOHN McLAUGHLIN



Extrapolation

Polydor 2310 018

'69年

John McLaughlin:g
John Surman:b&s-sax
Brian Odges:b
Tony Oxley:ds

Produce:Giorgio Gomelsky

マクラフリンと言えば'73年の「火の鳥」がすぐに代表作として思い浮かぶが、その他にもジャズとロックの橋渡しを果たす名作を数多く残している。そんな中でも'69年の本作と'70年の「Where Fortune Smiles（Dawn DNLS 3018）」は、ブリティッシュ・ジャズの精髄を感じさせる記録となっている。本作は、彼の初リーダー作であり、THE TRIO結成前のジョン・サーマンとの最初の共演である。リズムを支えるブライアン・オッジス、トニー・オクスレイも見事で、アルバム全体の10曲のひとつひとつを有機的に結びつけ、トータルな中にイマジネイションが広がる。（後藤）

J. MCLAUGHLIN, J. SURMAN, K. BERGER, S. MARTIN, D. HOLLAND



WhereFortune Smiles

Dawn DNLS-3018

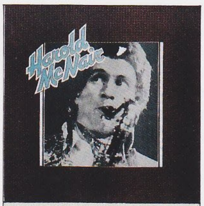
'71年

John McLaughlin:g
John Surman:b&s-sax,b-cla
Karl Berger:vib
Stu Martin:ds
Dave Holland:b

Produce:McLaughlin,Surman,Berger,Martin,Holland

当時ニュー・パワーの代表格だった5人のミュージシャン達による佳作。J・サーマンとS・マーティンは、B・フィリップスを加えて、既にTHE TRIOを結成しており、ジャズ界の熱い視線を浴びていた。本作はTHE TRIOの1作目と2作目の間にリリースされた。このアルバムでは、ラフなスコアとインプロヴィゼイションが聞きものだが、嵐の男S・マーティンは割と冷静。J・マクラフリンは前年にスリ・チンモイに師事しており、かつてよりも知的でワイルドになっている。彼らは、一緒に演奏するのが楽しくてしようがないといった感じのセッション・アルバム。（中藤）

HAROLD McNAIR



Harold McNair:fl,t-sax
Spike Heatly:b
Tony Carr:ds
Bill Le Saga:p

Produce:Sandy Roberton

Harold McNair

B&C CAS 1045
'72 年

5枚のリーダー作を残している英ジャズ界の数少ないフルート、サックス奏者。CRESSIDAにゲスト参加していることで、多少は知名度がある。オーソドックスなジャズやイージー・リスニング寄りのプレイが多く、ややセンシティヴな感覚に欠ける嫌いが初期ほど強い。4作目になる本作では、唯一ライヴ録音の長編B①に、サックス、オルガン、ベースなどの即興があるほか、フルート・プレイにもヴァリエイションがついている。彼のプレイはソフト・タッチな傾向が強い上、メロディーをしっかりと踏まえるので親しみ易くはある。参加メンバーでは前作が面白い。(松本)

MAHAVISHNU ORCHESTRA



John McLaughlin:g
Rick Laird:b
Billy Cobham:ds,per
Jan Hammer:key
Jerry Goodman:vln

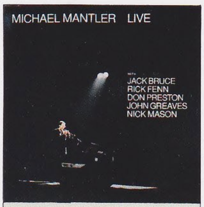
Produce:MAHAVISHNU ORCHESTRA

Birds Of Fire

US:CBS 31996
'73 年
CS:30DP-310

数作のソロ作品の後、宗教と思想を通過したジョン・マクラフリンが結成したMAHAVISHNU ORCHESTRAの2作目。その後大流行したクロスオーヴァーやフュージョンの元祖的作品。後のフュージョンの様に洗練されていない演奏に不満を覚える人もいようが、現在では忘れ去られた"うねり"や"たたみかけ"がここにはあり、独特の緊張感を味わわせてくれる。以後ライヴ盤を発表後一旦解散、すぐに再編された第2期MAHAVISHNU ORCHESTRAは、本物のオーケストラと共演した強烈な作品「Apocalypse」でデビュー。通算6枚目の「Inner World」を発表後、再度解散する。(沢田)

MICHAEL MANTLER



Jack Bruce:vo
Michael Mantler:tp
Rick Fenn:g
Don Preston:syn
John Greaves:b,p
Nick Mason:ds

Produce:Michael Mantler

Live

WATT 18
'87 年

WATTは彼とカーラ・ブレイのレーベルで、ヴァージン傘下の為かR・ワイアットやK・コインが参加した作品（4・5番）もある。本作はジャックがヴォーカルに専念し、凄味のある声を聴かせる歌曲部分と、元ザッパのドンによるキーボード・オーケストレーションをバックに、彼の空間的なトランペットを加えた演奏部が交互に配されている。カンタベリー派の新人リックのアームを多用した癖のあるギターがアクセントを加え、ニックも変拍子の多いなか健闘している。インプロヴィゼイションは少なく、ほとんどアレンジされた内容で、最後まで緊張感が保たれている。(吉野)

HARRY MILLER QUINTET



Harry Miller:b
Willem Breuker:s&t-sax,b-cla
Trevor Watts:a&s-sax
Julie Tippetts:vo
Keith Tippett:p
Louis Moholo:ds

Produce:?

In Conference

Ogun OG 523
'78 年

南アフリカ出身。C・マグレガー、L・モホロ、D・プクワナらと渡英し、旧友M・マンを通じてジャズ界にもぐり込む。'72年頃からK・ティペットと親交を深め，'74年にOGUNを設立。4年間で30枚以上のアルバムを制作した。又、レーベル・ワーク絡みでICP／FMP系の人脈とつるみ始める。そして段々とプログレッシヴなジャズをメインにプレイするようになる。'80年、オランダに移住。'83年12月、交通事故で死去。本作はリーダー・クインテットでの1作目。出来は2作目に負けるが、内容はブリティッシュ・ジャズの範囲にある。(中藤)

THE NEW JAZZ ORCHESTRA



Derek Watkins:tp
Henry Lowther:tp
Harold Beckett:tp
Ian Carr:tp,flh
John Mumford:tb
Michael Gibbs:tb
Derek Wadsworth:tb
Tony Russell:tb
George Smith:tuba
Barbara Thompson:fl,a&s-sax
Dave Gelly:t-sax,cla,b-cla
Jim Philip:t-sax,fl,cla
Dick Heckstall-Smith:t&s-sax
Frank Ricotti:vib,marimba
Jack Bruce:b
Jon Hiseman:ds
Neil Ardley:direction
Produce:Tony Reeves

Le Dejeuner Sur L'herbe

Verve SVLP 9236
'69 年

J・ハイズマンとN・アードレイの創設したN. J. O.の第2作。'65年の「Western Reunion」に次ぐ作品で最終作。際立って秀れた作品ではないが、その後の各アーチストの働きをみれば、このオーケストラが勉強会としていかに重要だったかがわかる。A③はハワード・ライリーの、B①はレンデル＝カーのアルバムでそれぞれ聴くことができるが、オーケストラでは即興のパートも軽い。ジャケット写真（！）の左の男性がN・アードレイ、右がJ・ハイズマン。撮影者はT・リーヴス。(中藤)

NUCLEUS



Ian Carr:tp,flh
Karl Jenkins:b,oboe,p,ei-p
Brian Smith:t&s-sax
Jeff Clyne:b
John Marshall:ds,per
Chris Spedding:g,bouzouki

Produce:Pete King

We'll Talk About It Later

Vertigo 6360027
'71 年

NUCLEUSはブリティッシュ・ジャズ・シーンにおいて最もロック・サイドに接近したグループの1つである。特に、本セカンド・アルバムを含め、ヴァーティゴ時代の各作品は独自のサウンドを作り出したものとしてジャズ、ロックの両サイドで高い評価を得ている。ロック的な中にもジャズの要素を巧みに取り入れたリズム・セクションをバックにイアン・カーは、ドン・レンデルとの双頭コンボ時代ほど顕著ではないが、マイルス・デイヴィスの影響下にある端正な演奏を展開している。ジェンキンスのオーボエ、スペディングのギターも仲々好演と言える。(賀川)

JOE O'DONNEL



Steve Bolton:g
Paul McDonald:g
Rory Gallager:g
Bill Smith:b
Theodore Thunder:ds
David Lennox:key
Jon Field:fl
Joe O'Donnel:vln

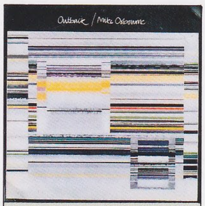
Produce:Jon Field

Gaodhal's Vision

Ger;Polydor 2460 274
'77 年

後期EAST OF EDENのメンバーであったジョー・オドンネルのソロ・アルバム。EAST OF EDENというと、どうしても初期のサウンド・イメージが強く、エキゾティックで混沌とした音を想像しがちであるが、中期以降の作品はそうしたものとは異なる。本アルバムでも異国情緒を感じさせるフレーズが一部登場するが、それは作品の本質的な部分ではない。本作品の聴き所は巧みで整然としたアレンジと力強く安定した演奏にある。クラシカルかつジャズィな要素を持ってはいるが，熱く盛り上がる展開は如何にもロック的と言える。知名度は低いが力作である。(賀川)

MIKE OSBOURNE



Mike Osbourne:a-sax
Harry Beckett:tp
Louis Moholo:ds
Harry Miller:b
Chris McGregor:p

Produce:Peter Eden

Outback

Turtle TUR-300
'70 年

マイケル・エヴァンス・オズボーン、'41年ヒアフォード生まれ。'80年、病に倒れ、その後不明。'60年代中期よりウェストブルック・バンド他で活躍。これはおそらく2作目。各サイド1トラックずつという意欲的な作品。タイトル曲冒頭と終末部でのテーマがブリティッシュ・ジャズらしさを伺わせるものの、ソロ・パートやバッキングではノーマルな演奏形態。彼自身はバレエのための作曲もしているアカデミックなミュージシャンで、'70年代になってからは、J・サーマン、A・スキドモアらとS. O. S.を結成して気を吐いていた。(中藤)

TONY OXLEY



Ichnos

RCA SF 8215
'71 年

Tony Oxley:per,amp-per
Kenny Wheeler:tp,flh
Evan Parker:s&t-sax
Derek Bailey:g
Paul Rutherford:tb
Barry Guy:b

Produce:?

S. M. Eとともに英ジャズ・シーンの最もフリー寄りのフィールドで活動するパーカッショニスト。'69年以来、7枚のリーダー・アルバムを製作。デレク・ベイリー、エヴァン・パーカーといった大御所は、フリー・ジャズ集団COMPANYの中心人物でもある。3作目の本作では、前2作に聴かれた比較的明確なテーマ、展開よりも、ギミックに近い各楽器の緻密な絡みに中心が置かれている。特にフリー・パーカッションによる即興の可能性を追求したA②をはじめ、ひときわ彼の中心的役割りの出ている作品。乾いた印象を受けるが、緊張感、集中力は一層強い。(松本)

DON RENDELL&IAN CARR QUINTET



Dusk Fire

EMI Columbia SX-6064
'66 年

Don Rendell:t&s-sax, fl,cla
Ian Carr:tp,flh
Michael Garrick:p
Dave Green:b
Trevor Tomkins:ds

Produce:?

'63年11月結成。正統派ジャズ・コンボである。約6年間に渡って5枚のアルバムを発表する(いずれもEMI Columbia)。本作はセカンドで、このアルバムからピアノがM・ギャリックに交替している。イアン・カーは結局、このような普通のジャズ・サウンドに行き詰りを感じて、'69年7月脱退宣言をする。カーの新しいサウンドへの欲求がNUCLEUSで爆発するのは周知の通り。ドン・レンデルはその後もメイン・ストリームなジャズを続けている。尚タイトル曲はM・ギャリックがN. J. O.のために書いたもので、'68年、録音されてVerveより発表される。 (中藤)

FRANK RICOTTI QUARTET



Our Point Of View

CBS 52668
'69 年

Frank Ricotti:vib,a-sax
Chris Spedding:g
Chris Laurence:b
Bryan Spring:ds

Produce:David Howells

クレジットを見ると、まずクリス・スペディングの参加に目が行くことだと思う。彼の演奏を録音したものとしては、最も古いものの一つだ。この頃、彼はBATTERED ORNAMENTSに参加、主人公のフランク・リコッティは、グラハム・コリアーのユニットに参加している。両者の顔合わせは、'63年より続くもので、本作はその終着点にあるものだ。ヴァイブとギターの組み合せは、アメリカのゲイリー・バートンとラリー・コリエルのユニットに比較されるスタイル。全編に及んで典型的なジャズ・ギターが聴ける。多分にロック色もあるが、オーソドックスな内容。(松本)

HOWARD RILEY TRIO



Angle

CBS Realm Jazz 52669
'69 年

Howard Riley:p
Barry Guy:b
Alan Jackson:ds
Barbara Thompson:fl

Produce:David Howells

ハワード・ライリーの2作目。ベースに盟友バリー・ガイ。両人共に現代音楽の作曲家として知られており、さらにB・ガイはフリー・ジャズ・ベーシストでもある。このコンビは比較的永く続いており、息の合った気持ち悪いアンサンブルが、現代音楽とモダン・ジャズの中間に位置する特異なジャズを創出している。基本的にテーマもソロもアンシンメトリックな不安定なメロディーで形成されており、暗いイメージを与える。B①のタイトル曲はN. J. O.でも聴けるが、こちらはトリオ編成のため自由度が大きいようで、B・ガイがやりまくる。ノリもかなりアヘッドである。 (中藤)

RAY RUSSELL



Secret Asylum

Black Lion Select 2460 207
'73 年

Harry Beckett:tp,flh
Gary Windo:t-sax,fl
Daryl Runswick:b
Alan Rushton:ds
Ray Russell:el&ac-g, p

Produce:Ray Russell& Bob Auger

ROCK WORKSHOP、その延長グループRUNNING MAN、そして'75年にはアン・オデルとともにCHOPYNに在籍したギタリスト。彼はこれらと並行してジャズ・フィールドで5作とポップ色の強い6作目のソロを残している。本作もグループ形態をとっている点では前4作と共通しているが、彼の作曲、アレンジのセンシティヴな面が出ている1枚と言えそうだ。彼は大半でワウを多用した即興ソロや'60年代末のFLOYDにも似たギミック・プレイを聴かせている。いかつく耳にささってくるその音色は、むしろロック寄りのもので、バック陣のプレイと妙な異和感がある。 (松本)

THE ALAN SKIDMORE QUINTET



TCB

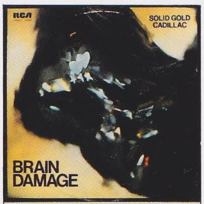
Philips 6308 041
'70 年

Alan Skidmore:t-sax
Malcolm Griffiths:tb
John Taylor:p
Chris Lawrence:b
Tony Levin:ds
with
Mike Osbourne
John Surman

Produce:Terry Brown

ブリティッシュ・ジャズの一番望ましいサウンドがこのアルバムで聴ける。A①(J. サーマン作)のパワーに満ちたスピード感あふれる演奏に期待はつのる。他にも壮絶なインプロヴィゼイション、情緒的なバラード等が整然と並べられており、ブリティッシュ・ジャズ・アルバムの良質なサンプルといえる。スキドモアの作品としては、1枚目の「Once Upon A Time」(Deram Nova S/DN―11)の方が高名だが、内容はこちらの方が上。スタジオ・セッションも多いが、'70年代中頃からはジャズ・ワークがメインになっている。 (中藤)

SOLID GOLD CADILLAC



Brain Damage

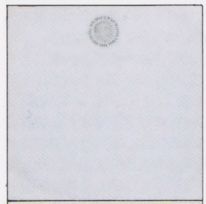
RCA SF 8365
'73 年

Brian Godding:g
Malcolm Griffiths:tb
Alan Jackson:ds
George Nisar Ahmad Khan:sax,fl
Phil Minton:vo,tp
Butch Potter:b,banjo
Mike Westbrook:p

Produce:SOLID GOLD CADILLAC

ブライアンはB・TOES〜B. B BLUNDERを経てMAGMAに参加するなど様々な活動を行ない、'88年にはソロ作品も発表。本グループは彼とウェストブルック一派による癖のある強者揃いのバンド。A面はヴォーカル中心。R&R、カントリー、大陸ポップと様々なジャンルの曲を収録。ザッパからBONZO DOGの流れの影響を感じさせる一筋縄ではいかない音。B面はインストゥルメンタル志向。フリー・ジャズ寄りの演奏に、ブライアンのギターがロック色を与える。ジャズ・ミュージシャンによるサイケデリック・ロック作品。2作目に当たるもの。 (吉野)

SPONTANEOUS MUSIC ENSEMBLE



For You To Share

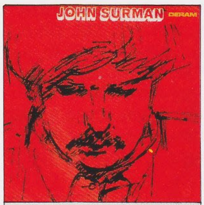
A Record A 001
'70 年

Trevor Watts:s-sax
John Stevens:per
etc...

Produce:?

究極のフリー・ジャズ集団。'66年1月、ジョン・スティーヴンスとエヴァン・パーカーによって結成。同年の「Challenge」以来、無数のミュージシャンとともに多数の作品を残している。デレク・ベイリーやマギー・ニコルスらもその最初期のメンバー。一応、ジョン・スティーヴンスがリードすればS. M. E、トレヴァー・ワッツならばAMALGAMとなる他、これらを変形したユニットでも録音を行っている。この5作目は両者を中心に10〜30名によって製作。フリー・ジャズを一歩進めた疑似ミニマル形式の作品。東洋色のあるサウンド・ループには瞑想的な響きがある。 (松本)

JOHN SURMAN



John Surman

Deram SML 1030

'69年

John Surman:b-sax
with
Mike Osbourne:a-sax
Russell Henderson:p
Harry Miller:b
Stirling Betancourt:ds
Errol Phillip:conga
Dave Holland:b
Alan Jackson:ds
Kenny Wheeler:tp,flh
Harry Becket:tp,flh
Malcolm Griffiths:tb
Paul Rutherford:tb
Tom Bennellick:flh

Produce:Peter Eden

今や全欧きってのマルチ・リード奏者として知られるジョン・サーマンのファースト・アルバム。この頃は未だバリトン・サックスしか吹いていない。A面はスタンダード・ナンバーで、これがほとんど一気ノリの素晴らしい演奏。基礎の修得の深さが違う感じ。B面はコンポージングに重点を置いた冒険的なナンバーだが、演奏そのものは保守的。彼のプレイアビリティはリーダー作よりも、チーム作での方により強く感じられる。THE TRIO、S. O. S.他。リーダー作は Deram、HELP、ECM 等にあるが、後期になるとシンセサイザーもプレイするようになる。（中藤）

JOHN SURMAN, JOHN WARREN



Tales Of The Algonquin

Deram SML 1094

'71年

Martin Drover,Kenny Wheeler,Harry Becke-tt:tp,flh
Malcolm Griffiths,Ed Harvey,Danny Almark:tb
Mike Osbourne:a-sax,cla
Stan Sulzman:a&s-sax,fl
Alan Skidmore:t-sax,fl,a-fl
John Surman:b&s-sax
John Warren:b-sax,fl
John Taylor:p
Harry Miller,Barre Phillips:b
Alan Jackson,Stu Martin:ds,per

Produce:peter Eden

共同名義だが、実質はジョン・ウォーレンのリーダー・アルバムである。作・編曲とも全て彼のペンによる。アレンジは柔剛太細のバランスが良く、しかもパワフルかつダイナミズムあふれる演奏によって楽曲の素晴らしさが一層表出している。事実、J・サーマンやA・スキドモアのソロ・アルバムでは彼の曲が奏されており、以前からコンポーザーとしての能力は高く評価されていたようだ。サイドメンとしての活動も多いが、'76年には自己のビッグ・バンドでアルバムを1枚制作している。（中藤）

BARBARA THOMPSON'S PARAPHERNALIA



Mother Earth

独 Vera Bra 5

'82年

Barbara Thompson:s,a&t-sax,fl,a-fl
Anthony Oldridge:vln,el-vln
Colin Dudman:key
Dill Katz:b
Jon Hiseman:ds

Produce:Jon Hiseman

バーバラ・トンプスン。1944年7月27日オックスフォード生まれ。王立音楽院に学び、'65年 NEW JAZZ ORCHESTRA に参加。ここでジョン・ハイズマンと知り合い結婚する。そして'75年に PARAPHERNALIA を結成。このアルバムから、アンソニー・オールドリッヂ（vln）が加入して音に幅と厚みがでてきたようだ。ソフィスティケイトされたジャズ・フュージョン。B面ラストのヴァイオリン・ソロが圧巻。他に、「same」「Wild Tales」「Live In Concert」があり、近年は、ヴォーカリスト＝ロッド・アージェント（勿論、キーボードも弾く）との共演アルバムもある。（中藤）

JULIE TIPPETTS



Sunset Glow

Utopia UTS 601

'75年

Julie Tippetts:vo,p,ac-g,tambourine
with
Keith Tippett:harmonium,p
Brian Godding:g
Mark Charig:cor
Elton Dean:a-sax
Nick Evans:tb
Louis Moholo:ds
Brian Belshaw:b
Harry Miller:b
Produce:George Chkiantz,Julie Tippetts,Giorge Gomelsky

'60年代、ブライアン・オーガーとともに TRINITY で活躍し既に名声を得ていた彼女は、'70年頃を境にジャズに傾倒。1作目「1969」のリリース、キース・ティペットとの結婚、フリー・ジャズでのコラボレイションを経て製作された本作は、前作を一歩押し深めた見事な英ジャズ・ヴォーカル・アルバムに仕上げられている。彼女のフリー・ヴォイスや英ジャズ・メンのフォローもさることながら、うつろうような彼女の歌声には、ハイ・レベルの渋味とメロディアスさの溶け合った柔和感があり、聴く者を染め込んでしまう。A①、③のテンションの高さは特筆されるべきものだ。（松本）

THE TRIO



The Trio

Dawn DNLS 3006

'70年

John Surman:b-cla,s-sax,b-sax
Barre Phillips:b
Stu Martin:ds

Produce:Peter Eden

現在でも ECM からジャズのアルバムを多く発表している、バリトン・サックス奏者ジョン・サーマンが'70年に組んだトリオ。Dawn レーベルに残されたサーマン絡みのアルバムは4種あるが、そのうち2種がトリオとしての作品である。この作品は2枚組だが全く聴く者を飽きさせることなく、見事に統一感の取れた、緊張感に溢れる素晴らしい作品となっている。完全なジャズなのだが、3人のメンバーがエゴに走らず、対話を意識した即興となっているところは真に音楽的であり、門外漢にとっても充分鑑賞できるものと信ずる。彼らはライブもまた凄かった。（後藤）

VISITOR 2035



Visitor 2035

Ariola Hansa AHAL8003

'78年

Craig Pruess:syn,tp,tp,p,orchestral chime,vib,tape effects
Ray Deefholts:el-g,ac-g
Peter Stroud:b
Nigel Robinson:ds,per

Produce:VISITOR 2035

ほとんど馴染みのない4人のミュージシャンから成る VISITOR 2035の唯一のアルバム。各メンバーの知名度こそないものの、その実力は侮り難い。時として強引さをも感じさせる力強いドラムス、それに呼応する鳴りの良いベース、伸び伸びとメロディアスなソロを展開するギター、リリカルなものからややファンキーなものまで巧みな演奏を見せるキーボード、いずれもがかなりのハイ・レヴェルにある。最もロックに接近した時代の RETURN TO FOREVER をよりロック的にしたかのような作品であり、変化に富んだ聴き易い音作りがされている。（賀川）

MIKE WESTBROOK



Metropolis

Neon NE 10

'71年

Mike Westbrook:p
Nigel Carter:tp
Kenny Wheeler:tp,flh,
Harold Beckett,Henry Lowther,Dave Holdworth:tp,flh
Paul Rutherford:tb,
Paul Nieman,Derek Wadsworth,Malcolm Griffiths:tb
Mike Osborne:a-sax,cla
Ray Warleigh:a-sax,fl
Alan Skidmore:t & s-sax
George Khan:t-sax
John Warren:b-sax
John Taylor:el-p
Gary Boyle:g
Harry Miller:b,cel
Chris Laurence:b
Alan Jackson:ds
John Marshall:ds
Norma Winstone:vo
Produce:Fiachra Trench & Mike Westbrook

5トランペット、5トロンボーン、5サックス、7リズムという、ウエストブルックのビッグ・バンドの中でも最も大編成のバンドによる作品。ロック的リズムを取り入れるとともに、フリー・フォームなインプロヴィゼイションを大胆にフィーチュアするなど、彼ならではの幅広い音楽性が遺憾なく発揮された力作である。ゆったりと情感を込めた各種ホーン・ソロとノーマ・ウィンストンのスキャットに代表されるリリカルな部分と各メンバーが激しくぶつかりあうようなインプロヴィゼイション主体のフリー・フォームな部分が特に聴き所と言える。（賀川）

NORMA WINSTON



Edge Of Time

Argo ZDA 148

'72年

Norma Winston:vo
with
Alan Skidmore:t&s-sax,fl
Art Themen:t&s-sax,b-cla
Mike Osbourne:a-sax,cla
Henry Lowther:flh,tp
Malcolm Griffithe:tb
Paul Rutherford:tb,euphonium
Chris Pyne:tb
Kenny Wheeler:tp
Frank Ricotti:vib
Gary Boyle:g
John Taylor:el-p,p
Chris Lawrence:b
Tony Levin:ds
Produce:Peter Eden

ノーマ・ウィンストン。1941年ロンドン生まれ。'66年 N. J. O. に参加。数多くのセッションを経て、'77年、夫のジョン・テイラー（P）、ケニー・ホイラーと AZIMUTH を結成。E. C. M.に数枚の作品を残している。彼女はジャズ・ヴォーカリストとしてはシンプルなスタイルで、例えば'74年以降在英のA・ピーコックに近いが、しかし、そのフィーリングはスポンティニアスなものではなく、アカデミックな香りが漂う。本作は'72年に発表された初のリーダー・アルバムで、豪華なサポート・メンバーに負けず、清く、味わい深い好作品に仕上っている。（中藤）

CATALOG

POP & OTHERS

ALL ABOUT EVE



All About Eve

MercuryMERH119
'88 年
Ph:32PD-458

Julianne Regan:vo,key
Tim Bricheno:g
Andy Cousin:b
Mick Brown:ds
with
Ric Sanders:vln
Mark Price:per
Paul Samwell-Smith:str,hrn,p,vo
John Vettese:key
Greg Brimstone:ds
Wayne Hussey:vo

Produce:Paul Samwell-Smith

4AD等に代表される耽美派ニュー・ウェイヴ・サウンドはプログレ・ファンの間でも人気があり、個性派女性ヴォーカリスト、エリザベスをフィーチャーしたCOCTEAW TWINS等、注目されていたグループがいくつかあったが、'80年代末にひそやかに人気を集め出したのが彼らである。美しい透明な女性ヴォーカルに耽美的でロマンチックで、そして少しハードなサウンドは一聴で僕らを魅了した。あのロセッティやバーン・ジョーンズの絵画を思わせる"音楽のラファエロ前派"と言ったところか。'89年にセカンドを発表、変形等の数十種以上のシングルがある。(Luna)

CATHERINE ANDREWS



Fruits

Cat Tracks PURR LP2
'82 年

catherine Andrews:vo
with
Graham Preskett:vln
Dennis Haines:various instrumentation
Robin Bibi:g
Nic Turner:fl
Gordon Giltrap:ac-g

Produce:?

本作はカラフルなポスター・ジャケットが付された自主制作盤。全曲彼女が作詩、作曲、アレンジを手掛け透明感のある声も聴かせる。バックの人選も彼女に依る。フォーク系大物の参加や彼女の実力からキャリアを持つ人だと推測されるが前後の活動歴は不明。トラッド色は全くなく、独特のエコー感覚を持ったプロフェットを中心とした奥行きを感じさせる演奏。そこに彼女のイマジネイティヴなヴォーカルや神秘的なコーラスが加わるコンテンポラリー感覚を打ち出した作品。'80年代前半、当時のアコースティック・ブームに対するキャリア組の解答と言える水準を持つ内容。(吉野)

VIRGINIA ASTLEY



From Gardens Where We Feel Secure

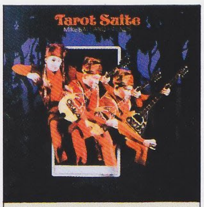
Happy Valley Rough58
'83 年
Col:CY-4457

Virginia Astley:p,fl

Produce:Virginia Astley&Russell Webb

美しい押し花のジャケット、イングランドの初夏の香りの中、動物たち、草花と木々、妖精たちと人々の躍動感あふれる営み。ナチュラルで優しいサウンドがあふれた、ヴァージニア・アストレイのファースト・アルバム。彼女自身ピアノとフルートを担当、ナイーヴな感性がうかがえる。また次作'83年「Promise Nothing」もポップ性がほどよくブレンドされた好作品。そして'86年「Hope In A Darkend Heart」は坂本龍一のプロデュースとなっているが、彼女のヴォーカリストとしての魅力が最大限に引き出された、優美なサウンドとなっている。(林た)

MIKE BATT



Tarot Suite

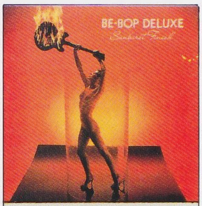
Epic EPC 86099
'79 年

Mike Batt:p,key,per,vo
Colin Blunstone,Roger Chapman:vo
Jim Cregan,Rory Gallagher,Chris Spedding,Tony McPhee:g
Mel Collins:sax
Harold Fisher,Trevor Morais:ds
Frank McDonald:b

Produce:Mike Batt

彼はプロデューサー、アレンジャー、そしてTV (Womble)・映画音楽、ヒット・メーカーのコンポーザーとして、様々なジャンルで実績を持った才人である。'77年ソロ・デビューし、本作はタロット・カードをテーマとしている。彼の全ソロ作品に言えることだが、英国の癖のある有名ミュージシャンを起用し、彼を中心としたプロジェクトで作品を制作している。又コンダクターとしての経歴もあり、彼のアレンジによるオーケストラをフィーチュアしている。そして常にコンセプト・アルバムとして作られ、ミュージカルやロック・オペラとして仕立てられている作品もある。(吉野)

BE-BOP DELUXE



Sunburst Finish

Harvest SHSP 4053
'76 年

Bill Nelson:lead-vo,g,hca,tubular bells,per
Andrew Clark:key
Charles Tumahai:b,vo,per
Simon Fox:ds,per
Andrew Powell:orch-arr.

Produce:John Leckie&Bill Nelson

'70年代のイギリスが多く輩出したポップ寄りのグループ中では中堅に位置する彼等。ロキシーやコックニー程のアイロニーを持たず、ストレートなR＆Rを基本とした音は聴き易いが、曲／バンド・カラー共に決定打に欠け、B級の名に甘んじている。ヒネリだらけの曲作りは十分に通受けすると思うが。この3枚目は④〜⑤の劇的な流れとネルスンの滑らかなプレイが特に耳に残る。ネルスンは'79年にRED NOISEとしてアルバムを発表、現在も自身のレーベルCocteauにて制作を続ける。先日我国の深夜TVで放映されたイギリスの実験番組「Map Of Dreams」の音楽も彼によるものであった。(古田)

MARC BOLAN&T.REX



Zinc Alloy&The Hidden Riders of Tomorrow

T.REX Wax Co.BLNA7751
'74 年

Marc Bolan:g,vo
Micky Finn:per,vo
Steve Currie:b
Jack Green:g
Bill Legend:ds
Lonnie Jordan:?
Danny Thompson:?
B.J.Cole:steel-g
The Cosmic Choir

Produce:Tony Visconti&Marc Bolan

13枚のオリジナル・アルバムを残し、'77年9月16日、自動車事故死したマーク・ボラン。初期のアシッド・フォークともつかない独特のサウンドでアンダーグラウンド・シーンに名をはせ、'72年前後、折りからのグラム・ロック・ブームに乗り、その筆頭に立った彼に陰りが見え始めた時期のアルバム。10作目。トニー・ヴィスコンティの誇張気味オーケストラ・アレンジ、大胆な女性コーラスの導入が輪をかけて屈折の度を強めている1枚。ポップというよりもグロテスクという印象が強い。腐り切ったようなこの濃厚なポップ感は、ドラッグに走った彼の生き写しにも思える。(松本)

KATE BUSH



Kate Bush:vo,p
with
Stuart Elliot:ds
John Gibson:b
Max Middleton:el-p
Alan Murphy:el-g
Brian Bath:el-g
Larry Fast:syn
Morris Pert:per
Roy Harper:vo
Duncan Mackay:syn
Del Parmer:b
Preston Heyman:ds
Paddy Bush:banshee
etc...

Produce:Kate Bush&J-on Kelly

Never For Ever

EMI EMA 794
'80 年
To:CP32-5276

「Lion Heart」から数えて20カ月振りに発表された「魔物語」においてケイトは誰にも到達できない領域（または聖域）にまで入り込んでしまった。彼女の完璧主義は相当なものでヴォイスを楽器として最大限活かしたアレンジが成されており、バックを固めるプログレ系一流スタジオ・ミュージシャンも彼女を立てて素晴しい演奏を聴かせてくれる。詩に関しても初期の童話的な詩から社会的で奥の深いものへ変化しており、次作である「Dreaming」までの長い苦悩の日々が痛い程、伝わってくる。そしてまるで後期P・FLOYD のように大物の風格と沈黙を守るのである。(金井)

COCKNEY REBEL



Steve Harley:vo
Stuart Elliott:per
Paul Jeffreys:b
Milton Reame-James:key
Jean-Paul Crocker:e-l-vln,mdn,g

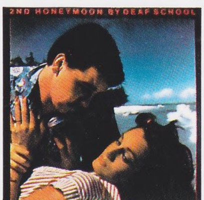
Produce:Neil Harris-on

The Human Menagerie

EMI EMA 759
'73 年

“デカダンス”美学を永遠に追い求め、ROXY MUSIC と共にブリティッシュ・ポップスを築き上げたスティーヴ・ハーリー率いる COCKNEY REBEL のファースト・アルバムは、壮大悲愴なオーケストレーション・アレンジを前面に押し出した作品。特に彼らの大ヒット・ナンバーである『Sebastian』は爪弾かれるピアノと絶望の淵から語りかけるS・ハーリーのボーカルとドラマティックなオーケストラが一体となって迫る名曲中の名曲。プログレ・ファンはあまり知らないようだが、一度聴いて僕と一緒に涙を流して欲しいな…。(UENO)

DEAF SCHOOL



Enrico Cadillac:Jnr:vo
Eric Shark:vo
Bette Bright:vo
Rev Max Ripple:key,accordion
Steve"Mr.Average"Li-ndsey:b,p,vo
"Cliff"Langer:g,p
Timothy Whittaker:ds,cymbal
Ian Ritchie:sax,rec
Paul Pilnick:g,acco-rdion,b,banjo

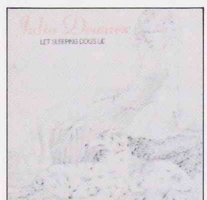
Produce:Rob Dickins

2nd Honeymoon

WB K 56280
'76 年

もう２度とこういうバンドは現れないだろう。それだけ傑出していた。イギリスという国土があったからこそ、この独特で優美な音の遊びが成り立つ。ロック、ジャズ、フォーク他多々有るカテゴリーのいずれにも属さずそれらの良い所だけを吸収して極上の POP MUSIC に仕上げる。それは彼等芸術職人達にしか生み出せないモノ。その証しに後進が殆ど生まれない。まるで光り輝く星座の様。この１作で芸が競われ過ぎてしまったのか、２作目３作目とヴォルテージは下降、その後解体という運命。10年20年経っても色失せない美がここに有る。(佐野)

JULIA DOWNES



Julia Downes:vo,key
with
Andy Latimer:g,syn,pipes
Alan Murphy:g
Ian Bairnson:g
Phil Spalding:b
Richard Cottle:syn,sax
Geoff Wessley:syn
Preston Heyman:ds
Mark Saunders:ds
etc...

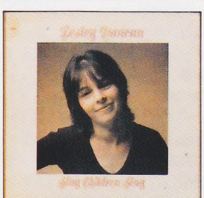
Produce:Julia Downes,Nick Ryan,Terry Bar-ham,Gordian Troeller,Andy Latimer,Peter Hammill etc...

Let Sleeping Dogs Lie

Naive NAVI 2
'83 年

ピーター・ハミルが設立したナイーヴ・レコードより唯一のアルバムを発表したジュリア・ダウンズは、美貌と才能を併せ持つ、天が二物を与えてしまった女性ヴォーカリストである。ハミルと CAMEL のアンディ・ラティマーが一曲ずつ共同プロデュースも手掛け、宝石の様な輝きとなめらかさ、そしてケイト・ブッシュになく、ILLUSION が持ち得なかった都会的な品格が醸し出されたロマンティックな世界。シングルのB面にもなったA⑥でのラティマーのギター、彼女自身の歌とキーボード。アレンジからジャケットに至るまで全てが練られた芳醇なワインの如き佳品。(高山)

LESLEY DUNCAN



Lesley Duncan:vo,g
with
Chris Spedding:g
Elton John:p
Terry Cox:ds
Tristan Fry:per
Toni Compo:b
Jimmy Horowitz:org,celeste,p
Joe Moretti:g
Ray Cooper:tambourine

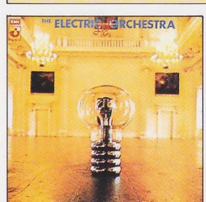
Produce:Jimmy Horow-itz

Sing Children Sing

CBS 64202
'71 年

イギリスのどことなく陰りのある控えめな感覚は、今も共通するとは言え、インターナショナル志向が入り込む以前の'70年代初期には、特に強く感じられるように思う。彼女と親交があり、本作でもピアノで活躍するエルトン・ジョンにしても、この時期はイギリスのシンガーソングライター以外の何者でもない、たそがれたサウンド志向を持っていた。彼のこの傾向に共通する初期のレスリー・ダンカンの作品には、女性ならではの柔らかな母性感覚にフォーク色がうっすらとかかり、女性ヴォーカルものとしては見逃せない。サンディー・デニーにも通じるものがある。(松本)

THE ELECTRIC LIGHT ORCHESTRA



Roy Wood:vo,cel,oboe,g,b,bsn,cla,rec,p-er
Jeff Lynne:vo,p,g,b,per
Bev Bevan:ds
Bill Hunt:hrn
Steeve Woolan:vln

Produce:Roy Wood & Jeff Lynne

The Electric Light Orchestra

Harvest SHVL 797
'71 年

MOVE のロイ・ウッドとジェフ・リンが中心となり結成された ELO のデビュー作。二人の作品が約半々ずつ収録されており、ロイのマルチ・プレイによるA④のような実験的感覚とジェフのA②のようなイギリス的ポップな才能が見事に共存したブリティッシュ・プログレッシヴの名盤。内ジャケットには各曲のヒプノシスによるイメージ写真が載せられている。なおロイは本作で脱退し、WIZZARD を結成する。ジェフは次作で弦楽器奏者３人を含むロック・オーケストラとしてクラシカル・ポップのスタイルを完成させ、後にワーナー、ジェットと移籍し世界的成功を収める。(吉野)

ENYA



Enya:vo,key

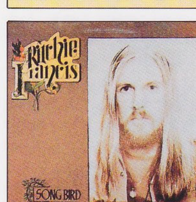
Produce:Nicky Ryan

Watermark

W.B. WX 199
'88 年
WP:25P2-2465

1980年〜82年の２年間、兄姉達がすでに加入していた CLANNAD に在籍し、自らの音楽性を見いだした彼女は、脱退後 BBC の「The Celts」という番組の音楽を担当、そのサントラとも言える「Enya」を'87年に発表。しかしそのアイリッシュ・トラッドを基調にした、ヴォイスの何層もの多重による、神聖な響きはすでに確立しており、本作品にも反映している。エンヤはキーボードとヴォーカル、レコーディングまでも自分でこなし、時間をかけて「自分の音楽」を紡いでいく。英語とアイルランド語による不思議な透明感にあふれたサウンドにケルト民族を感じます。(林た)

RITCHIE FRANCIS



Ritchie Francis:p,vo
with
Mike Kell,Barry Mor-gan,Wil Malone:ds
Paul Curtis,John Ro-stil:b
Taff Williams,Jim S-ullivan:g

Produce:Lou Reizner

Song Bird

Pegasus PEG 11
'72 年

'60年代末に活動した EYES OF BLUE に在籍、と言うよりも、彼抜きで'70年に１枚のアルバムを残した ANCIENT GREASE を経て、'71年、彼等が再会したグループBIG SLEEPのメンバーと言うべきか。グループ解散後、ジョン・ウェザーズが GENTLE GIANT へ、フィル・ライアンが NEUTRONS へ走った一方で、彼は１枚のソロを残した。骨子はポップながら良質のシンガーものに仕上っている。この上なくイギリス風味をかもし出すリリカルなピアノや、何曲かでの秋を想わせるひっそりとした曲想、オーケストラの包み込みは、特筆されるべきだ。(松本)

FUTURE SHOCK



Future Shock

Shock Records 1
'77 年

John Saxby:vo
Lionel Gibson:vo,g,p
with
CIRKUS
Derek Miller:key
Alan Roadhouse:sa-x,fl,vo
Stu McDade:ds,vo
John Taylor:b
Dog:g,vo
John Prior:key,vln
Linda Garbet:vo

Produce:Peter Wilson, John Saxby

アルバム1枚で消滅してしまったと思われていたあのCIRKUSが、なんと2人の無名のフォークシンガーのバッキングとして参加しているレコードが出ていたとは知らなかった。それがこのアルバム。演劇的要素が強く、トータル性を持っていてアルバム1枚が1曲として成り立っている。肝心の音の方だけどほとんどお遊び。ギター・シンセのインプロヴィゼイションから始まり、ハチャメチャ16小節ブルース・語り・男女の雄叫びなど下らないモノばかり。唯一の救いはB①〜④。囁く様なヴォーカルにフルート・シンセ・泣きのギターが絡む。この4曲だけでも買得。（佐野）

CHRIS HARWOOD



Nice To Meet Miss Christine

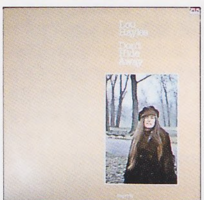
Birth RAB 1
'71 年

Christine:vo
with
Tommy Eyre:g
Roger Sutton:b
Dave Lambert:g
Geoff Matthews:g
Mike Maran:g
Ian McDonald:sax,fl
J.Kay Boots:ds
Peter York:conga
John Morgan:tambourine
Peter Banks:g

Produce:?

KING CRIMSONのイアン・マクドナルド、RIFF RAFFのトミー・アイアー、ロジャー・サットンなどバックアップ・ミュージシャンの豪華さや、アルバム2枚を制作しただけで潰れてしまったBirthレーベルの事などで有名なクリス・ハーウッドの唯一のアルバム。ややハスキーで低めの声質のせいか、マイナー調の曲が多く、バックのメンバーもジャージィな演奏を展開し、雰囲気をもり上げている。CSN & Yの曲を取り上げたり、ブキウギ風ピアノが入ったり、アメリカ指向もみうけられるが、彼女の歌、洗練された演奏から受ける印象は、小雨にけむるロンドンの街である。（佐藤）

LOU HAYLES



Don't Hide Away

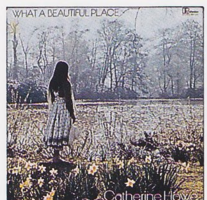
Myrrh MYR 1055
'77 年

Lou Hayles:vo,key
Barry Morgan:ds
Dave Markee:b
Kevin Peek:b
Lizzie Mills:oboe

Produce:Jon Miller, Rod Edwards,Roger,Hand

又もや無名の女性シンガー・ソングライター。所はもっと無名のMYRRHレーベル。素性は全く判らず、バッキング・メンバーとプロデューサーの名前だけで購入した次第。得てしてこういう場合当たり外れがあるけどこのアルバムは前者。流れる様に華麗なストリングス、硬質で囁やく様な声、クラシカルタッチのピアノ、覚えやすいメロディ・ライン、どれを取っても言う事なし。仕事で疲れて帰って来た後にコーヒーでも飲みながら聴くと心が洗われる思い。特にハープシコードとストリングスをバックに歌うA⑤、オーボエが心地良いB⑤のタイトル曲が好きです。（佐野）

CATHERINE HOWE



What A Beautiful Place

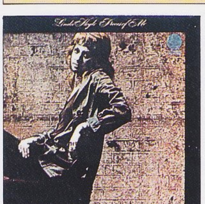
Reflection REF 11
'71 年

Catherine Howe:vo

Produce:Andrew Cameron Miller

例えば、イタリアの'70年代中半のカンタウトーレ・アルバムに感じられるイタリアならではのみずみずしさを、イギリス独自のものに当てはめた場合、この1枚は文句なしに筆頭に挙げられる。古過ぎず新し過ぎず、まさに'70年代初期という時期が守り抜く、ブリティッシュ感覚いっぱいのヴォーカル・アルバムである。包み込むようなオーケストラや時折、耳に残るオーボエ、弦楽器との柔和感も果たされている。'70年代中半に、フォーク・ロック色のあるアルバムを残しているが、この最初期の1作目から溢れ出るみずみずしさには、比べようもない。（松本）

LINDA HOYLE



Pieces Of Me

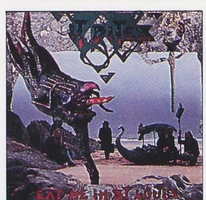
Vertigo 6360 060
'71 年

Linda Hoyle:vo
Chris Spedding:g
John Marshall:ds,per
Jeff Clyne:b
Karl Jenkins:p,oboe
Colin Purbrook:p

Produce:Pete King

AFFINITYのヴォーカルとして知られるリンダ・ホイルが'71年11月に発表した唯一のソロ・アルバム。カール・ジェンキンスを中心としたNUCLEUSのメンバーが演奏を担当している。タイトル通り、ヴォーカリストとしての彼女の様々な歌唱スタイルが収められているが、その魅力を余す所なく伝えている。特にA②④B①③⑤といったバラードでの彼女は、カールのアレンジの見事さとあいまって素晴しい。また、数多くのセッションに参加しているクリス・スペディングだが、本作品での演奏がベストと思われるがどうだろう。A①でのブルーズは特に味がある。（後藤）

IT BITES



Eat Me In St. Louis

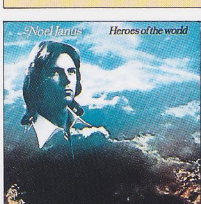
Virgin CDV 2591
'89 年
VJ:VJD−32213

Francis Dunnery:g, lead-vo,tapboard
Richard Nolan:b,vo
John Beck:key,vo
Robert Dalton:ds,vo

Produce:Mack

曲が良い、アレンジ／演奏も一流、しかし根がポップ志向でルックスもヘタに良いため、あらゆるジャンルのファンからソッポを向かれ続けているIT BITES。いくらイメージ先行のこの業界とはいえ、彼らのように誠実なロック・バンドを真正面から評価できないようでは、お先真っ暗ではないか。本サードは、微に入り細に入った前作のような装飾音を極力排し、骨太のビートと明快なメロディをきわ立たせた快心作。ギター／ヴォーカルのフランシスの、内から湧き上がってくる情感がバンドの音楽を決定している。冒頭4曲（英国盤）で聴かれるセンスは唯一無二のもの。（古田）

NOEL JANUS



Heroes Of The World

DJM DJF 20509
'77 年

Noel Janus:vo
with
Kirby:lead-g
Jeff Rich:ds
Steve Emery:b
John Cook:key,syn

Produce:Clifford Davis

2〜3曲の対象外があるにせよ、どこかK・エアーズにも似たイギリス然とした彼のヴォーカルを中心にした良質のポップ作。唯一の作。バックはSTRETCH。言うに及ばず彼らの的を得た演奏との一体感も十分だ。中でもA①、B①他でのシンフォニック効果ある情感豊かな曲想は、イギリスならではの色合いが強い濃密な味がある。オーケストラの使用は、ややイージー。ギターは元CURVED AIRの他、ソロと様々なセッション歴有り。キーボードはKESTRELで最も有名な実力派。ドラムは近時ジュディー・ツークにつきあっている。なるほどピアノのセンスは抜群だ。（松本）

JET



Jet

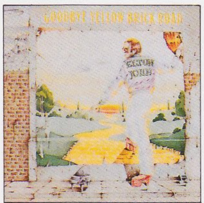
CBS 80699
'75 年

Andy Ellison:vo
Davey O'List:g
Peter Oxendale:key
Martin Gordon:b
Chris Townson:ds

Produce:Roy Thomas Baker

NICEのオリスト、伝説のバンドJOHN'S CHILDREN（マーク・ボラン在籍）からエリスンとタウンス、SPARKSからゴードンとオクセンディルと、実績を持った人達によって結成されたハード・ポップ・バンド。'75年当時のシーンを象徴する音だが、ロイのプロデュースの為か、音が詰め込まれている。そこにエリスンの絡み付くようなグラム的ボーカルが加わり、アクの強い音になっている。曲展開や演奏はキャリアを感じさせるが、バンド・コンセプトの詰めの甘さが感じられる。第一線で活躍できる可能性を持ったバンドであった。（吉野）

ELTON JOHN



Goodbye Yellow Brick Road

DJM DJLPD 1001
'73年
Ph:23PD-103〜4

Elton John:vo,p,org,mtn
Bernie Taupin:lyrics
Dee Murray:b,vo
Davy Johnstone:g,vo
Nigel Olsson:ds,vo
with
David Hentschel
Del Newman
Prince Rhino
Ray Cooper
Kiki Dee
Leroy Gomez

Produce:Gus Dudgeon

レノン=マッカートニーと並ぶイギリスのシンガー・ソング・ライターは数少ない。'68年、本名レジナルド・ケネス・ドワイトでデビューを飾って以来、ポピュラー界の名物としても有名。'70年代中半過ぎまで続いたバーニー・トゥピンとの作詩・作曲協力は、まさに'70年代のそれだ。事の他イギリス。その集大成がここにある。参加メンバー間との結束も強く、劇的な幕明けから全て素直なメロディーで綴られた珠玉の名作とはこれだ。三枚目、喜劇役者といった仮面の裏側には、どこか内省的な、秋の寂しさを想わせるポップスがあり、それは心に浸み入るものだ。（松本）

KESTREL



Kestrel

Cube HIFLY 19
'75年
Te:22DN-62

Dave Black:lead-g,vo,rhythm-g
John Cook:key,syn,vo,mtn
David Whittaker:ds,per
Fenwick Moir:b
Tom Knowles:lead-vo

Produce:Martin Hannett

コレクターズ・アイテムにはB級なサウンドを持ったものが多いが、このケストレルに限っては全くその図式はあてはまらない。一応プログレッシヴ・ロックということになってはいるが、彼等の本質はブリティッシュ・ポップスであり、その磨かれたフレーズに、素晴らしい感覚で彩られたアレンジがなされ、躍動感に満ちた作品に仕上げられたのである。これ程のヴォルテイジに作品が高められたのもミラクルなら、当時人気のでなかったこともミラクルだ。デイヴ・ブラックがSPIDERS FROM MARSに移籍した為、グループとしての活動は1年足らずであった。（山崎）

LINDA LEWIS



Say No More...

Reprise K 44130
'71年

Linda Lewis:vo
with
Chris Spedding:g
Ray Cooper:vib,per
Ian McDonald:fl
Louis Cenamo:b
Terry Cox:ds

Produce:Ian Samwell

リンダは、2人のヴォーカリストを擁したFERRIS WHEELを経て、ソロ活動に入る。本作はデビュー作。彼女は黒人であるが、無垢でチャーミングな声を特徴としており、ソウル的感触の全くないスタイルを取っている。天性的なものであろうが、声質が多彩であり、細部に至るまで表情が豊かである。B⑥のオーケストラを導入した曲もあるが、全体的にヴォーカルを際立たせる多彩でシンプルなアレンジが施されている。スペディングが音楽監督的立場で参加し、堅実なプレイも聴くことができる。2枚目も同傾向の名盤。'77年ジム・クリーガンと結婚する。（吉野）

MAGNUM



Kingdom of Madness

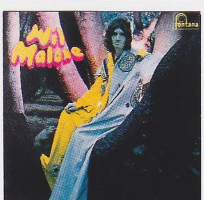
Jet JETLP 210
'78年

Tony Clarkin:g,vo
Richard Bailey:fl,vo,key
Bob Catley:vo
Kex Corin:ds
Colin Lowe:b,vo

Produce:Jake Commander

一般にハード・ロック／ヘヴィ・メタルのカテゴリーに整理され勝ちなMAGNUMであるが、実際に音を聴いてみれば、彼等の本質はそうした枠組みを越えたオーセンティックなブリティッシュ・ロックであることが解るだろう。湿り気を帯びた旋律にドラマティックな曲展開、時にQUEENを想わせるコーラス等、プログレッシヴとハードの妙味を備えた英国的好典型とも呼び得る彼等の音楽は、デビュー作にあたる本作において既に開花している。彼等はメンバー・チェンジを経て現在も活躍中。中期のアルバムでのロドニー・マシューズによる美しいカヴァー・アートも忘れ難い。（高山）

WIL MALONE



Wil Malone

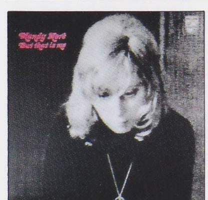
Fontana STL 5541
'70年

Wilson Malone:p,per,vo

Produce:Wilson Malone

ORANGE BICYCLE、BOBAK JONES MALONEに在籍し、後にプロデューサーに転向したW・マローンのソロ1作目。前2グループではカヴァー・ヴァージョンも多く、明確な姿勢は打ち出されていなかったが、ここでは、私的な音世界が広がっている。単なるシンガー・ソングライターに陥らないドリーミィな木管楽器や弦楽器の室内楽調アレンジが全編にいきわたっており、その質素な驚きと彼の柔らかなヴォーカルは、非常にイギリスらしい落ち着きあるムードとなってとけ合っている。'70年代初頭の空気と彼の内省感覚が絶妙にマッチしている。静かなる個性ある作品だ。（松本）

MANDY MORE



But That Is Me

Philips 6308 109
'72年

Mandy More:vo,melodica,p,celeste,hca
with
Roon Hutton:g
Mike Todman:g
Philip Chen:b
Richard Bailey:ds
Lennox Lengton:congas
Jake Falsworth:g

Produce:Tony Hall

年齢、経歴一切不詳。バック・ミュージシャンもベースとドラムス以外全く不明。BEACH BOYSのB⑥以外全て彼女自身のオリジナル。全曲に流れる波のようなストリングス。フォークの香りなど微塵もなく、全体に漂うのはジュリー・アンドリュース風ミュージカル調歌曲。が歌い方がそうであっても、ピアノとストリングスだけは聴きモノで、特にB②などの使い方は最高。まるでコンチェルト・グロッソみたいな盛り上がり方。これ1曲でこのアルバムは決まりみたいなもの。声も可愛いしネ。たぶんこれ1枚だけだろうけど2曲目も出てるのかな。誰か御存知？（佐野）

SALLY OLDFIELD



Water Bearer

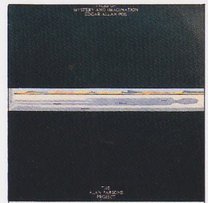
Bronze BRON 511
'78年

Sally Oldfield:vo,p,vib,g
with
Trevor Spencer:ds
Dave Lawson:key
Frank Ricotti:b,mba
Brian Burrows:sax

Produce:Sally Oldfield

マイク・オールドフィールドの実姉。'68年、姉弟デュオSALLYANGIEがプロ・デビュー。1作のみで解散。シーンから退くが、本作は10年後のソロ・デビュー作。トラッドを基盤とした音作りであるが、彼女に依る癖の無い、POPなクラシカル感覚のアレンジの為聴き易くなっている。そしてコンポーザーとしての実力も示している。又弟と同様にA②の組曲志向の作品や、マルチ・プレイヤーとしての力量も発揮させている。高音の抜けが良い、清楚な声が特徴。彼女はアニー・ハスラム、マディー・プライアーと並ぶ、ブリティッシュ美声ヴォーカリストである。（吉野）

THE ALAN PERSON'S PROJECT



Tales Of Mystery And Imagination

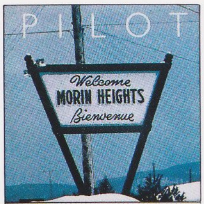
Charisma CDS4003
'76年

Dave Paton,Joe Puerta:b
Stuart Tosh,Burleigh Drummond:ds
Ian Bairnson,David Pack:g
Billy Lyall,Christopher North,Francis Monkman:key
John Miles,Arthur Brown,Terry Sylvester:vo

Produce:Alan Persons

「狂気」のエンジニアで有名なアラン・パーソンズはプロデューサーとしても活躍している。彼の本格的初仕事は「Abbey Road」であり、このプロジェクトは後期BEATLESのようにスタジオワークによる音作りを志向した。又各曲想に合わせた人選を、彼の幅広い人脈からレーベル制約を越えて行っている。デビュー作である本作は、ポップな曲から15分以上の組曲まで収録され、クラシック畑の新鋭であるA・パウエルのアレンジにより、E・A・ポーの世界を具現化している。2作目はA・アシモフ、3作目ピラミッドそして10作目では、建築家A・ガウディをテーマとしている。（吉野）

PILOT



Morin Heights

EMI EMA 779
'76年

David Paton:vo,b,ac-g
Ian Bairnson:g
Stuart Tosh:vo,ds,p-er
with
Peter Oxendale:key

Produce:Roy Thomas Baker

アイドル・バンド的ルーツをもつ PILOT の3作目。彼らはベスト盤を含む5枚のアルバムを残していて、どれも同傾向の作品だが、メリハリと歯ごたえ（？）の良さでこの作品が一歩リードしている様だ。人なつこいメロディーやきれいなコーラスを持ち味とするポップなサウンドは、「いつかどこかで聴いたような……」という、ある種のなつかしさを感じさせるものだ。どことなく BEATLES というよりは WINGS に近い雰囲気を感じさせる。なお、ベースのデヴィッド・パットンは、後にケイト・ブッシュのバックや再編 CAMEL へと参加した。（沢田）

SAILOR



Trouble

Epic S-EPC 69192
'75年

Grant Serpell:ds,per,vo
Phil Pickett:b,nickelodeon,guitarron,p,vo
Henry Marsh:nickelodeon,accordion,p,marimba,vo
Georg Kajanus:12str-g,charango,veracruzana harp,vo

Produce:Jeffrey Lesser

AFFINITY のドラマーであったサーペルと、デュオ・グループ、KAJANUS PICKETT が中心となり'73年に結成されたグループ。ニッケルオデオンというマンドリンの音色を想わせる楽器をメインに使っているが、フォーク・トラッド色は薄い。グループ名どおり、世界各地を題材とした曲が多く、異国情緒あふれる洒落たブリティッシュ・コーラス・ポップ・サウンドが特徴であった。B①「二人のシャンペングラス」が当時ヒットした。6作目から、中心人物であったカヤナスとサーペルが脱退し、女性リード・ヴォーカルが加入したが、その後に解散した。（吉野）

SHELLEYAN ORPHAN



Helleborine

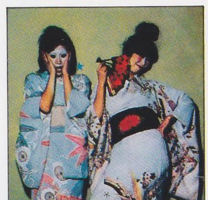
Rough Trade
'87年
Vic:VDP-1212

Caroline Crawley
Jem Tayle
with
Andrew Powell:p,hpd
Danny Thompson:b
Stuart Elliot:per
Paddy Bush:tamboura,mln
Bernard Partridge:v-ln
Ian Jewel:vla
Steven Orton:cel
Thomas Davey:oboe
Elma Cole:fl
Nicky Holland:cor,anglais
Prudence Whttaker:c-el
Nicholas Hunter:bassoon
Ruth Holden:harp

Produce:Haydn Bendall

1986年にラフ・トレードよりデビューした彼等は、キーツと共に英国ロマン主義を代表する詩人P・B・シェリーの「孤児」を名乗る男女2人のデュオ・グループである。SKY や CAMEL も手掛けたハイドン・ベンドールのプロデュースの下、電気楽器やドラムスを一切使わずに作られたこのファースト・アルバムでは、木管や弦楽器の豊かな調べに乗せてたおやかな英国的夢想風景が綴れ織られていく。A・パウエル他ケイト・ブッシュゆかりのミュージシャンや PENTANGLE のダニー・トンプソン、ニッキー・ホランド等が参加、'89年にはセカンド「Century Flower」を発表。（高山）

SPARKS



Kimono My House

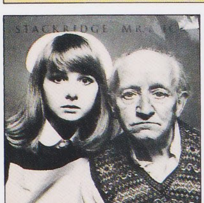
Island ILPS 9272
'74年

Dinky Diamond:ds
Ron Mael:key
Russell Mael:vo
Martin Gordon:b
Adrian Fisher:g

Produce:Muff Winwood

ロス出身のロンとラッセルのメイル兄弟は'68年 HALFNELSON を結成、トッドのプロデュースでデビュー、'71年に SPARKS と改名し同作を再発、2作目も発表するがパッとせずイギリスに渡り、本作を発表、ラッセルのファルセット・ヴォーカルと新月にも影響を与えたというロンのファッショナブルでセンスの良いキーボードが独特のポップ感覚を生み出している。次の「Propaganda」も同傾向の代表作。後にも NY パンク風の「Big Beat」、ディスコ・ビートを導入した「No.1 In Heaven」等、うまく時流を取り入れた作品を含めて LP を10枚以上もリリースしている。（高橋）

STACKRIDGE



Mr. Mick

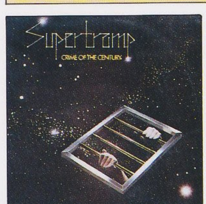
Rocket ROLL 3
'76年

Andy Davis:g,key,vo
Mutter Slater:fl,key,vo,narration
Keith Gammell:sax,c-la
Crun Walter:b
Pete Van Hooke:ds
Dave Lawson:key

Produce:Andy Davis

日本語では、「気まじめ」をからかうのに使われるので、私は「ユーモア」という言葉は大嫌いなのですが、逆に「ウイット」というのは、いい意味で頭のいい感じがするので、私は好きです。ウィットに富んだ、何から何までイギリスらしい、私の大好きなバンド、STACKRIDGE。これは5枚目にして最後のアルバムですが、このジャケの二人の対比、これこそがイギリス人のウィットなのです。D・ロウソンが参加して、やはりいいメロトロンを弾いているということで、今回はこれが選ばれましたが、彼等のアルバムにハズレはありません。私はどこへも行きたくないわ。（斎藤）

SUPERTRAMP



Crime Of The Century

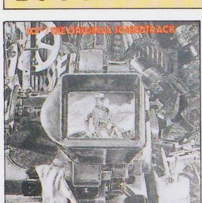
A&M AMLS 68258
'74年
PC: D32Y-3556

Bob C.Benberg:ds,per
Roger Hodgson:vo,g,p
John Anthony Helliwell:sax,cl,vo
Dougie Thomson:b
Richard Davies:lead-vo,key,hca

Produce:Ken Scott & SUPERTRAMP

ファースト、セカンドと大したセールスを得ることができず、バンドは大幅にメンバー・チェンジ、プロデュースにD・ボウイ等で有名なケン・スコットを加え制作されたのが本作である。ユーモアと哀愁たっぷりのちょっと屈折したポップなプログレ・サウンドはいかにも英国的。バックに流れる壮大なストリングスもこのアルバムを一層盛り上げている。特に哀愁のタイトル・チューンは彼らをそしてブリティッシュを代表する名曲と言える。本作によって彼らの人気は一気に決定着けられる。その後も数々のヒットを生み、今なお人気の高いバンドである。（神山）

10CC



Original Soundtrack

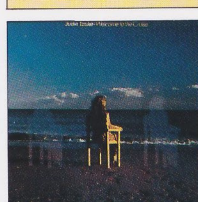
Mercury 9102 500
'75年
Ph:23PD-113

Eric Stewart:g,vo,p,org,steel-g
Graham Gouldman:g,vo,b,per,mandolin
Kevin Godley:ds,vo,per,syn,marimba,c-el
Lol Creme:g,vo,p,vib,per,org,vln,gismo,mdn

Produce:10CC

歴戦のポップ職人E・スチュワート、G・グールドマンに、旧友のL・クレームらが合流、RAMASES への全面協力や HOT LEGS 名義のレコーディングを経て実現した'70年代型プログレッシヴ・ポップの最高峰。人を喰った詞世界とツボを心得た曲作りの妙は KINKS を例に挙げるまでもなく英国性を継ぐものだが、この3作目から「How Dare You！」に至る重箱の隅をほじくるような凝り方は、明らかにゴドリー＆クレームの偏執性が露見したもの。レコーディング・アーティスト究極の姿がここにある。なかでもサンプリングを先取りしたA②には脱帽するしかない。（古田）

JUDIE TZUKE



Welcom To The Cruise

Rocket TRAIN 7
'79年

Judie Tzuke:vo
with
Roy Babbington:b
Mo Foster:b
Barry De Souza,Simon Phillips,Peter Van Hook:ds
Ray Russell,Mike Paxman:g
Chris Parren,Paul Hart,Steve Nye:key
John Punter,Morris Pert:per
Ray Warleigh:sax

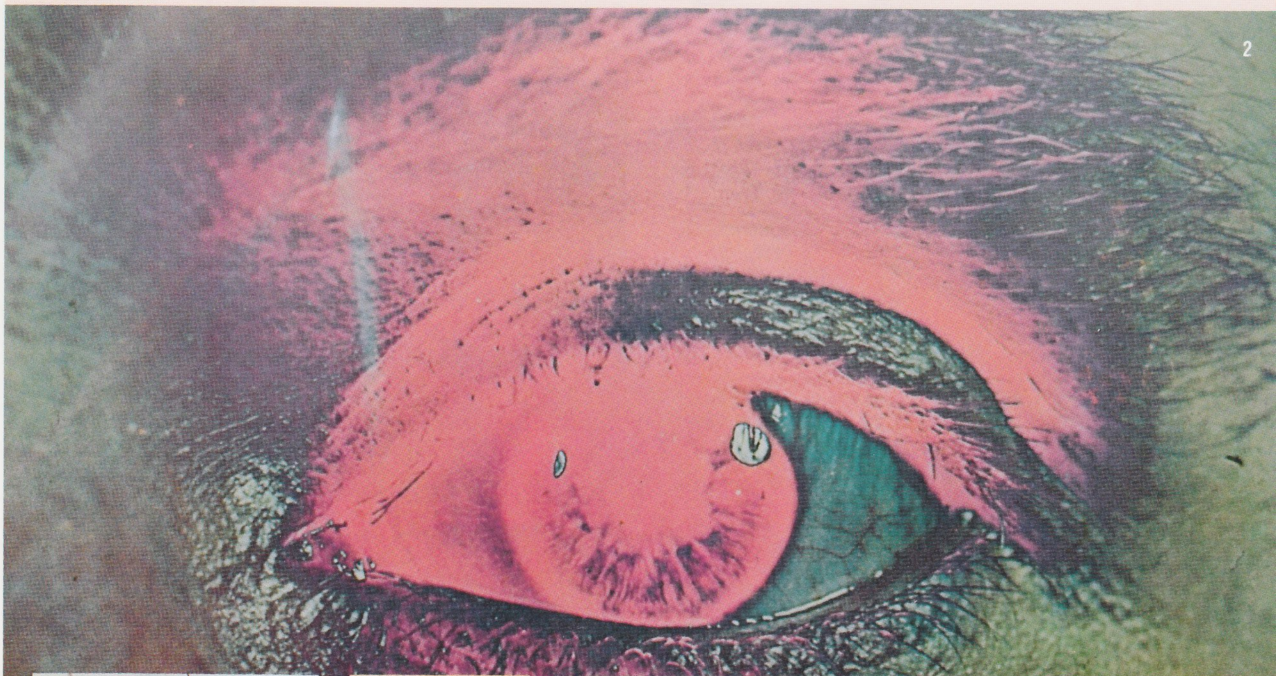
Produce:John Punter

本作はルックスも水準を保っているヴォーカリストである彼女のデビュウ作。全体の曲調は英国色が強いポップ。アップ・テンポからバラードまでバランスの良い配曲。各曲彼女の声が幾重にもダビングされており魅力を余すことなく伝えようとしている。バック・メンバーはベテランを揃え、曲によっての使い分けがなされている。そして各面ラスト曲のポール・バックマスターの参加も然る事ながら、あのレイ・ラッセルによるストリングス・アレンジは注目に値する。個性派が多い英国勢の中で本格的正統派を狙っている彼女及び回りのスタッフの意気込みが感じられる作品。（吉野）

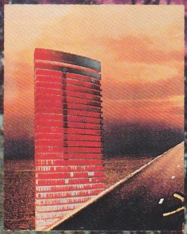
PSYCHE, BLACK MAGIC

1 | BLOSSOM TOES
2 | TEN YEARS AFTER
3 | PINK FAIRIES
4 | PRETTY THINGS
5 | SYD BARRETT
6 | JOHN MAYALL
7 | KENNETH ANGER
8 | SWEET PAIN
9 | KENNETH ANGER
10 | ARTHUR BROWN'S KINGDOM COME
11 | FLEETWOOD MAC
12 | ROLLING STONES
13 | JIMI HENDRIX
14 | RICK WAKEMAN
15 | STILL LIFE
16 | BEATLES
17 | BLACK SABBATH

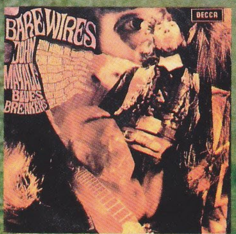

1


2


3


4


5



6



7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17

眼で見るブリティッシュ・ロックの世界

FASHION

'60

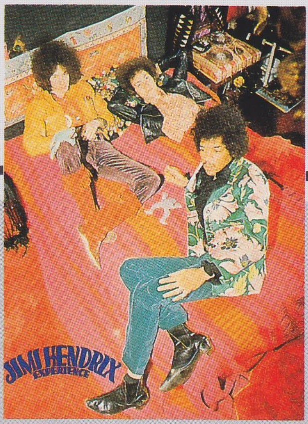
マージー・ビート

モッズ



モッズの代表格

サイケ



うーん、サイケな人たち…

'70

チープさ

ハード・ロック

自由性

色彩感



？

ヒッピー



攻撃性

グラム

プログレ


口を開けているのは何故？

元祖、様式美ファッションはこの人！



パンク

短髪

化粧

様式美系ポップス(？)
(Queen, Japan, etc.)

ロンドン・ブーツ

革ジャン

'80

ニュー・ウェイヴ

NWOBHM

アクセサリー

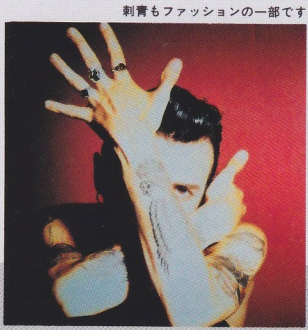
様式美系JAP'sプログレ
(Novela, etc.)

彼女のストッキングに注目！



メタル

刺青もファッションの一部です



ビート・パンク

リヴァイヴァル・ポップス
(ファッショナブル・サイケ)

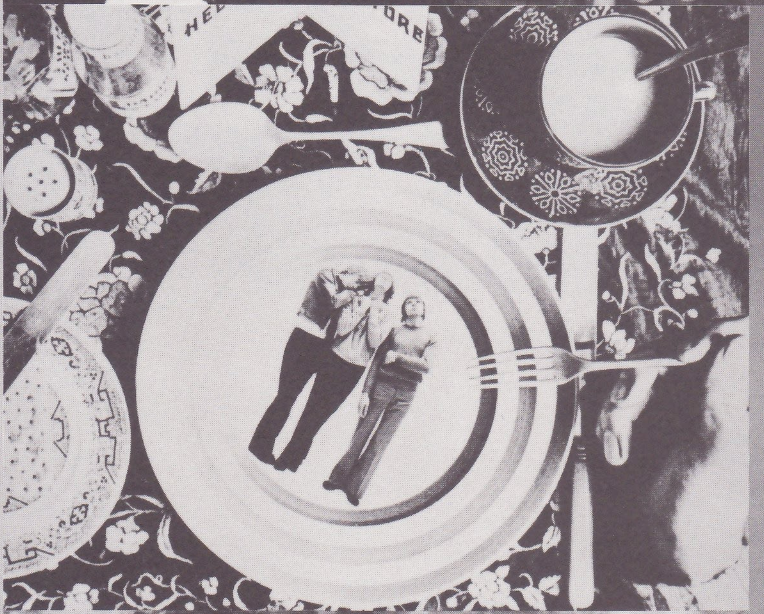
'90

ハウス

眼で見るブリティッシュ・ロックの世界

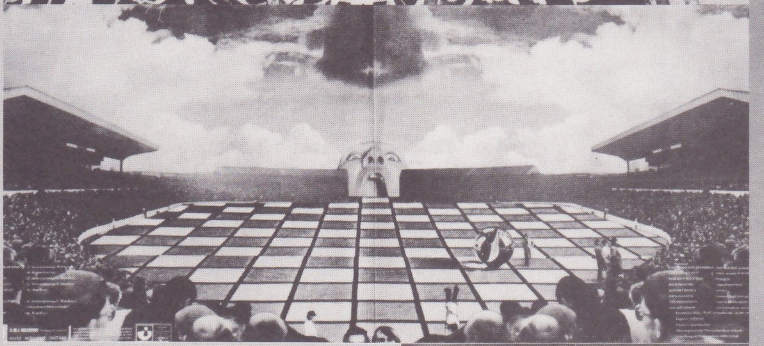
HUMOR

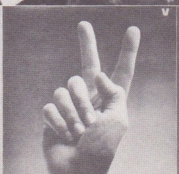














FEMALE VOCALIST





Kate Bush



Julianne Regan
(ALL ABOUT EVE)



Bridget St. John

Sandy Denny



Danielle Dax



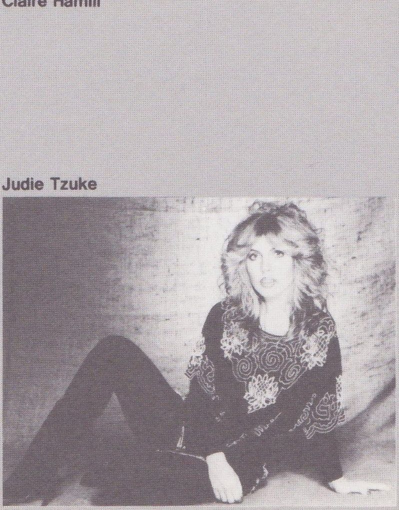


Claire Hamill

Sonja Kristina
(ex-Curved Air)



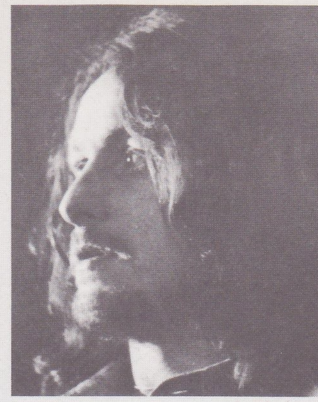
Judie Tzuke



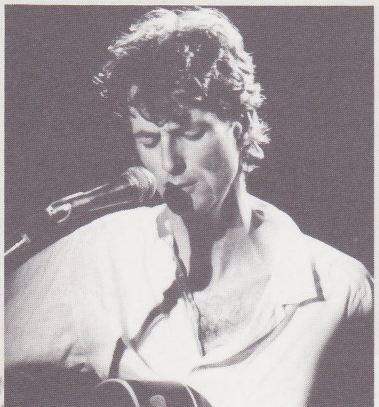


眼で見るブリティッシュ・ロックの世界

POET



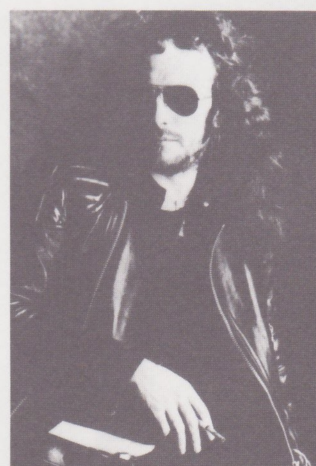
Jon Anderson



Peter Hammill



Pete Sinfield



Ian Anderson

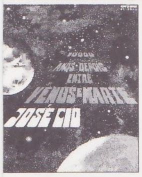


BELLE ANTIQUE
404, SY Bld
3-15-18 Shimo-Ochiai
Shinjuku-ku Tokyo 161
JAPAN 03-954-2055

BELLE ANTIQUE NEW RELEASES IN MARCH/APRIL

TO FOREIGN MUSICIANS & DISTRIBUTORS.
WE ARE SPECIALISTS OF PROGRESSIVE ROCK. PLEASE SEND US YOUR UNKNOWN MATERIALS. WE MAY INTRODUCE THEM IN JAPAN. WE ARE LOOKING FORWARD TO YOUR CONTACT. THANKS.

MARQUEE/BELLE ANTIQUE RELEASES



ジョセ・シッド 10,000光年の果て

LPサイズカヴァーCD：
MARQUEE 9452-S
¥3,500(税抜価格)
ノーマルCD：
MARQUEE 9452-N
4月上旬発売予定

コッパ最果ての国、ポルトガルのサウンド。今まントラくらいしか日本へは伝えられていませんたが、このジョセ・シッドやペトルス・カストルスD化が待たれているアルバムが存在します。本はメロトロン、ハモンド、ムーグ、グランド・ピアノ時の名器群を駆使してアレンジのしっかりしたンドを聴かせてくれます。LPサイズ・カヴァーはログの良さを伝える為、美しいリーフレット(必)が付いています。ノーマル・サイズにも一応、イを見ることはできます。



マンティコア タイム・トゥ・フライ

MARQUEE 9456
¥2,920(税抜価格)
好評発売中

スウェーデンからのニュー・シンフォ・グループとして、アングラガルド、アネクドテンあたりが大評判となり、日本でも好セールスをあげたことは記憶に新しい。彼等がこれ程までにファンの支持を受けたのは、単に'70年代的なアナログ志向の音をしていたからだけではない。技術的にも大変レベルが高く、周到なアレンジとエンジニアリングを駆使して制作されていたからに他ならない。音を聴いた関係者の間では、アングラガルド以上？という声も上がっている。楽曲のメリハリという点からも、真打ち登場という感が強い。シンフォ・ファン必聴アイテム



フォン・ツァムラ ツァムラランナンマ

MARQUEE 9455
¥2,920(税抜価格)
4月5日発売予定

大好評だったツァムラの2種のアルバムに続き、このフォン・ツァムラ(スウェーデン語ではボン・サムラ)の作品をお届けします。「家庭のひび割れ」の後、分裂したメンバーの内、ハッセ・ブルニウソンとエイノ・ハーパラが結成したグループのデビュウ作。ツァムラの発展型といっていいサウンドで、どこかユーモラスながら、やっていることは技巧的なサウンド。そういう意味で、「家庭のひび割れ」に続くツァムラのニュー・アルバム的に聴いてもらって全く問題ないと思います。御期待下さい!!



ヴィジターズ ヴィジターズ

MARQUEE 9451
¥2,800(税抜価格)
3月中旬発売予定

ロックウッドの最初期の録音としての歴史的価値のあるこのヴィジターズですが、サウンドの素晴らしさばかりでなく、その希少性から、マニアの間で高額のプレミアムが付けられていた幻の作品(日本に数枚しかないでしょう)でした。ロックウッドのヴァイオリンをリード楽器にし、ヘヴィーなシンフォニック・サウンドをブレンドした力強い作風です。フォルムラ・トレが1stで演奏していたミサ曲〝DIES IRAE〞を始め、どの曲もみずみずしい躍動感に満ちています。今回のCD化にあたって2曲のボーナス・トラックスを収録します!!

GLORY OF JAP'S PROGRESSIVE SERIES

月25日を第一回として、数回に渡って(毎月！)3タイトルずつ日本のプログレッシヴ・ロックの名作/未発表音源をリリースするシリーズがスタートします。(魅力的なアイテムが尽きるまで発表していきます！)以後の候補としては、クェーサーの'70年代に制作された幻の組曲、美狂乱の前身のまどろみ(後期クリムゾンのナンバーを演奏しています)、全盛期のアウター・リミッツのライヴ、ページェントの中嶋一晃と永川敏郎が在籍していた幻のランブル、シェラザード、東京で活動していたグリーン、イル・ベルリオーネの新作、ラクリモーザのChihiro S.の別ユニット、ゴールデン・アヴァンギャルドetc,etc.。現在、様々なグループと権利を獲得の為、交渉中です。お楽しみに!! リクエストも待ってます!!

25/MARCH ON SALE



フロマージュ オンディーヌ

BELLE ANTIQUE 9458
¥2,920(税抜価格)

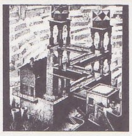
日本のインディーズ・シーンの幕開けを告げるメモリアル・アルバム。ジャケットも新たにCD化。精緻なアレンジを誇る〝月に吠える〞、叙情的なタイトル・チューン、どれもがナイーヴな感性とシンフォニックな曲創りで、ファンの心の琴線にふれるはず。ボーナス・トラックとして、'81年録音の未発表曲〝岸辺のない海〞(10分余りの大曲)のスタジオ・デモを収録。初期のライヴでは必ず演奏されていた重要な曲です。未だフロマージュの音を知らない新しいファンの方も、ぜひとも聴いてみて下さい。



フロマージュ オフェーリア

BELLE ANTIQUE 9459
¥2,920(税抜価格)

'87年制作のセカンド・アルバム。大幅なメンバー・チェンジの後に制作されたこのアルバムは、ファーストに較べるとよりシンフォニック・ロック的になったと評判の作品。ボーナス・トラックとして、'83年、京都のサーカス・サーカスのライヴから「トーマ」と「セルロイドの空」を収録。「トーマ」はキーボードが嶋村のオリジナル・ヴァージョン。「セルロイド～」は後にページェントを結成する中嶋一晃の曲。ページェント・ヴァージョンとの比較も楽しいのでは？



ヘレティック 1984-88

BELLE ANTIQUE 9457
¥2,920(税抜価格)

後期クリムゾンやエルドン的な音を出す、日本では特異なところに位置するアヴァンギャルド・シンフォニック・ロック・バンド。本CDは'84～'88年の間の彼等の作品からのベスト・テイクスを集めたもの。ラクリモーザのチヒロ・Sと伝説のアクアポリスのドラマー、竹迫一郎という貴重なセッション・テイクも収録。シンフォニック・ロックとエルドンの音楽性との中間に位置するようなヘレティックの独特なサウンド・ポリシーは、数多くのシンフォニック・ロック作品があふれている今でも、きっと新鮮に響くことでしょう。

25/APRIL ON SALE

NOW PRINTING

マジカル・パワー・マコ ミュージック・フロム・ヘヴン

BELLE ANTIQUE 9460
¥2,920(税抜価格)

マーキーがまだマーキー・ムーンだった頃、クリアー・ヴィニールにて限定発売した幻のマコのアルバムを覚えているでしょうか？ ファウストとの類似性も指摘された、この重要なアルバムがCD化されることになりました。ファーストを聴いて驚かれた方も多いはず。そんな方の期待をうらぎることのない出来の重要な作品です。(マコの2ndは発売延期となってしまいました。発売日が決定次第、再度告示致しますのでお待ち下さい。又、1stも現在、品切れとなっております)



V.A. 70'Sウェスト・ジャパニーズ・ロック・シーン

BELLE ANTIQUE 9461
価格未定

以前、MADE IN JAPAM・レーベルからリリースされたCD。残念ながら、限定発売の為、アッというまに売り切れてしまいました。というわけで、多くのファンの方々の御要望に答えて、再度、ベル・アンティークより再発売致します。'70年代の関西のロック・シーンは東京方面には情報が伝わってこなかった為に知られてはいませんでしたが、一部のファンの間で熱く燃えていました。そんな幻のグループ達の未発表音源のオムニバスであるこのアルバムを聴いて、当時のシーンのレベルの高さに驚いて下さい!!

NOW PRINTING

アウター・リミッツ オリジナル・アウター・リミッツ(仮題)

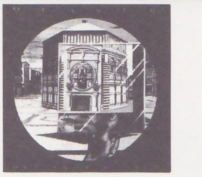
BELLE ANTIQUE 9462
¥2,920(税抜価格)

結成当時のオリジナル・メンバーによるスタジオ録音。'80～'82年頃までに録音されていた大変貴重なマスターを発見しました。大幅にアレンジの違う〝ミスティ・ムーン〞や〝ペール・ブルーの情景〞を始め、未発表曲2曲を加えたアルバム。洗練度では後のアルバムに一歩譲るものの、技術的には既に完成されていたアウター・リミッツの、より夢幻性のあるパフォーマンスを聴くことができます。日本を代表するシンフォニック・ロック・グループ、アウターの知られざる一面を、どうぞお聴きのがしなく!!

好評発売中



美狂乱
乱(LIVE VOL.3)
BELLE ANTIQUE 9343
¥2,920



クェーサー
アウト・フロム・クェーサー
BELLE ANTIQUE 9449
¥2,920



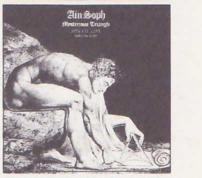
フィンチ
グローリー・オヴ・ジ・インナー・フォース
MARQUEE 9450 ¥2,920



ツァムラ・マンマス・マンナ
初老の新来者の為に/親しみ易いメロディーの神秘
MARQUEE 9341 *2CDs ¥4,855



ツァムラ・マンマス・マンナ
家庭のひび割れ
MARQUEE 9342
¥2,920



天地創造/アイン・ソフ
過去への扉(アーリー・ライヴ Vol.2)
BELLE ANTIQUE 9336
¥2,920

—これ以外にも豊富に旧譜のストックの在庫があります、御問い合わせ下さい——

ベル・アンティーク商品販売店大募集!!

マーキー/ベル・アンティークではできるだけ多くのファンの方に素晴らしい作品を入手できるよう、販売店を募集しています。当方の作品は現時点では直接マーキーからしかお求めになれません。輸入盤店/国内盤店を問わず、御連絡下さい。詳細をお話し致します。

〒161 東京都新宿区下落合3-15-18 SYビル404
マーキー/ベル・アンティーク
TEL.03-3954-2055 FAX.03-3954-9563

要販売店リスト

ーキー/ベル・アンティークの商品は以下の主要販売店で入手できます。通販の場合はTELにて在庫確認の上、代金＋送料(1枚なら350円)をマーキー内ベル・アンティーク係までお送り下さい。

〈京〉
ーズ・レコード 03-3461-1134
スク・ファン 03-3367-0668
レコード 03-3363-3669
ファン 03-3468-9543
0427-23-1005
ディスクユニオン新宿店 03-3352-2691
ディスクユニオン渋谷2号店 03-3461-1121
ガーデン・シェッド 03-5389-6721
ピース・アイ・レコード 03-3380-7332

〈東北・北海道〉
仙台 ディスク・ノート 022-222-2837
レコード・ギャラリー 022-221-5308
オールド・レーン 022-213-0141
札幌 グルグル 011-271-0161

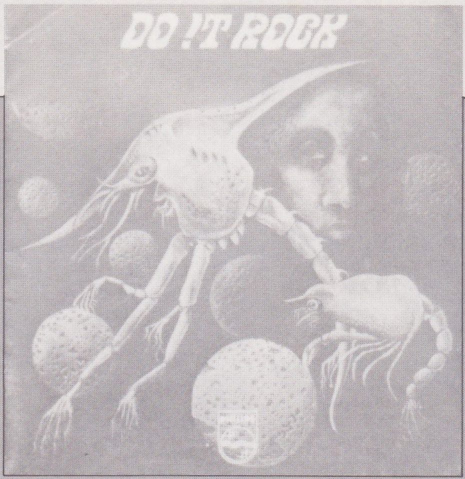
〈関西〉
大阪 ディスク・インなんば店 06-644-2822
神戸 ハックルベリー 078-332-0766

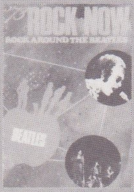
〈東海・中部・甲信越〉
沼津 シーザー 0559-62-9070
名古屋 ディスク・ヘヴン 052-853-3571
エイト 052-735-0988
マスタングレコード 052-265-0452
金沢 レコード・ジャングル 0762-64-3672

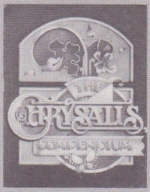
「プログレッ史ヴ」番外編

ブリティッ史ュ・ロック創世記

たかみひろし













●当時（'70年代）レコード店でタダでくれた読本，及びカタログ類。資料不足の時代ゆえ貴重だった。

29号（「私の愛聴盤」）でぼくは、ユーロピアン・ロックも良いが、なにはともあれ、始めにブリティッシュ・ロックありきなのだ、というようなことを書いた。具体的にいえば、PFMやフォルムラ・トレあたりならまだしも、ブロンゾ、ロカンダ、ムゼオ、クエラにヤクラなんていうところまでハマリ込むのは自由ではあるが、そこまで追っかけるなら、まずフロイド、クリムゾン、イエス、ELP、ジェネシス、なんていうバンドの全アルバムを、しっかり所有（友達のところでちょっと聴いたことがあるなんてのはダメだゾーイ!）したうえにすべきでは、なんてことぶちまかしてみたわけだ。そうすれば、ブリティッシュ・ロックというベーシックをしっかり聴くことによって、ユーロピアン・ロックの面白さを、正常な形で味わえるからだ。

のっけからおセッキョぼくなってしまったが、そのようなわけで、今この本が出るのは大変喜ばC～ことなのであります。諸君も友人には内緒でかまわないから、この際、例えば「時間と言葉」（イエス）、「ウマグマ」「モア」（ピンク・フロイド）、「アースバウンド」（クリムゾン）、「マクドナルド＆ジャイルス」、「ワンス・アゲイン」（BJH）、なんていう一般的にはプログレ常識盤、実はしっかり聴いたことのあるユーロ党はほとんどいないというハズカシ盤を、雨戸でもキッチリ閉めて、こっそりと聴いてみよう。

ゲロゲロ、BJHってこんなにいい感じでメロトロン使ってたっけなんて、ひとりで赤面してみるのもまた楽しというものだ。結局のところ、痛リアンも、ハレンチ・ロックもドイツもコイツもみな栄光と伝統のブリティッシュ・ロックがルーツなのだ。ブリティッシュ・ロックこそが、唯一無比のプログレ・ヴィンテージ・サウンドなのだ。そいつをハッキリ認識した上で、もう一度ヤクザでもなんでも聴いてみて欲しい。たぶん諸君のプログレ・ライフ（なにこれ？）が、少しばかり向上することだろう。

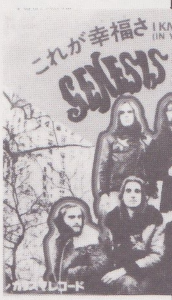
ところで今回のこの本だが、先日ここで取りあげるバンド（レコード）のリストを見せてもらったのだが、ウームお見事。よくぞここまでリスト・アップしたものだ。ブリティッシュ党、党主を勝手に自認する私めがチェックしても、ほとんどモレはなかった。ただ、取り上げる範囲をどこまでにするかが、一番問題だったようだ。しょせんプログレだハードだといったところで、聴き手の方が勝手に便宜上カテゴライズしてしまっただけで、演り手としては、カテゴリーをいちいち意識して演っているわけではないのだから、いろんなバンドがあるのは当り前だ。それにしても'70年代のブリティッシュ・ロックというのは（もう何度も書いてきたことだけど）、まるでオモチャ箱をひっくり返したみたいにわけのわからないバンド



●東芝のROCK NOWのシリーズの帯につけられたコピーは、なんだかわけがわからないものが多かったが、とにかくこのコピーに魅かれて、買ってしまったことは確かだ。



●日本における"プログレッシヴ・ロック"という言葉は、この帯から始まったのだ。



●クリムゾンやイエスはともかく、ジェネシスだってシングルが出てたんだぜ！（いったい何枚売れたのか？）



●う〜む。やっぱりグリ・ティッ・シュというのは、クリネックスの新製品とは違うのだろうな!?



●"幻想ロック"というのが泣かせるね!!

がたくさんあった。いったいどういう発想（またはきっかけ）からこんな音楽が生まれてくるのか、聴くほうとしては実に楽しいというか、正にドキドキワクワクのアルバムがひしめき合っていた。

そんなブリティッシュ・ロックに夢中だったぼくは、ひととおり有名バンドを聴き終えたあと、今度は無名バンドの発掘作業に没頭し始めた。もともと好奇心は強い方だったし、一種の怖いもの見たさ的な興味もプラスされ、あらゆる方面から判断して（例えばそれは、ジャケットであり、バンド名であり、アルバム・タイトルであり、曲名であり、楽器編成であり、時には曲の長さでさえあった。大体長いということは何かやってるケースが多い）、わけのわからない、怪しげなアルバムをせっせと集め始めたのだった。マイナーなアルバムなど誰も買わないから、当時（70年中頃）まだ数少なかった中古店に、貴重なアルバムがゴロゴロしていた。まるで昔のアフリカで道を歩いていて、いきなりダイヤの原石を拾うようなものだった。アフィニティやクリシダが、ベガーズ・オペラにレア・バードが、そしてベーカールーが、売れないまま半年もハンターの棚で眠っていたいい時代だった。記憶によると値段の方は、大体1500円前後（中古）だった。

そんな頃バイト先で友人となっていた赤岩和美や、中古バーゲンでよく顔を合わせた石井俊夫（特にブリティッシュ・ジャズとジャズ・ロック周辺に詳しかった）が中心となって、凄い本が創られた。「ブリティッシュ・ロック大名鑑」だ。この本は'78年「音楽全書」という文字の多さで群を抜いていた雑誌の別冊として出されたものだが、編集は頑張り屋の府川充男君（彼どうしてるのかな？）で、彼のバイタリティなくしては、とてもこの本は完成しなかったことだろう。実はぼく自身何度か同企画本を考えたこともあったが（「ロッカダム」や「ブリティッシュ・ロック・マガジン」なんていうのがあったの知ってるヒトいる？）、根気のなさでは誰にも負けない（?!）私では到底無理な話だった。

この「ブリティッシュ・ロック大名鑑」の時も最初は欲張って、かなりの数のバンドを選んだのだが、〆切が近づいてくるにしたがって、どんどん数を減らしてもらうことになり、赤岩、石井両君に迷惑をかけてしまったのだった。結局ぼくが書いたのはクリムゾンとあといくつかだけだった。このようないわゆる"エンサイクロペディア"ものは、海外では既に幾つかあったが、日本ではこの本が初の本格派といえる。取りあげたバンド数も凄いが、圧巻はミュージシャン名による索引だ。表紙に書かれているコピーによると、「750項目5000名を網羅」だそうだ。遅筆人間のぼくにとっては、正に気が遠くなるような作業の結果完成したものらしい。

もちろんいまでは入手不可能な本（古本屋でも見たことがない）だが、この本の存在が今回のマーキー版WHO'S WHOを生んだことになるのだろう。もちろん23号として出た「エンサイクロペディア・オブ・ユーロピアン・ロック」の一部もベースとなっている。読んで聴くのも良し、聴いて読むのも良し。大いに本書を活用して、原点に一度戻って欲しい。そしてブリティッシュ・ロックの懐の深さを知ることは、繰り返すが、単なるプログレトロということだけでなく、今後ユーロピアン・ロックを聴く上で、新鮮な感覚をもたらすことになるだろう。ビバ！ブリティッシュ・ロック！（古いなあ…）

CHAPTER 1

◉序◉実践から認識へ

テクノロジーの進歩がもたらしたプログレッシヴ・ロックの変貌

●伊藤政則●

ミュージシャンは意外に自分のアルバムを持っていなかったりする。自分の作品に対する愛情と、アルバムやシングルという形になった商品に対する愛情は別問題と考えているのかどうかは分からないが、僕の人脈上に存在するミュージシャンは商品に対するこだわりの気持が希薄である。ということは、他人のアルバムやシングルに関しても同様で、コレクターまではいかなくとも、とりあえず特定のジャンルの音楽やアーティストの作品（商品）を集めているという噂は聞いたことがない。そんな中で、例外中の例外と言えるのがアイアン・メイデンのスティーヴ・ハリスで、彼は海賊盤を含めたジェネシスの収集家として知られている。アイアン・メイデンの作品群の大半を占める大作主義のイデオロギーの源泉は、この強い影響を与えたジェネシスの世界観とは無縁ではなく、さらにネクターの'76年の名作「リサイクルド」を好きなアルバムとして挙げるなど、興味深い音楽的背景を告白している。

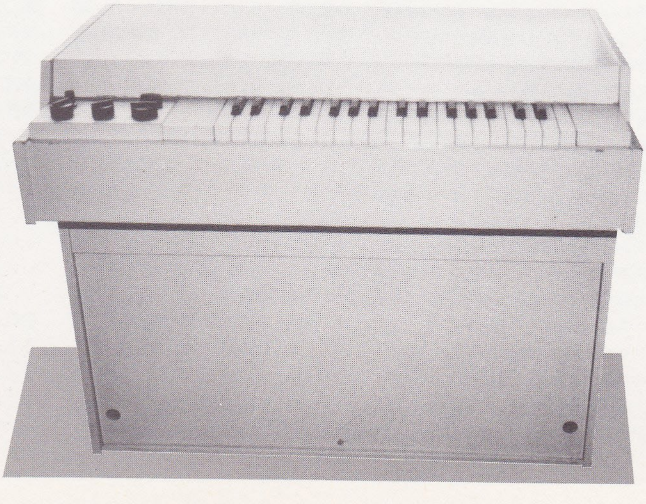
現代ヘヴィ・メタルの大作主義の基盤は、このスティーヴ・ハリスの発想が核となり、アイアン・メイデンの方法論の提示によって成立したと考えられている。こだわりを持つミュージシャンを触媒としての継承ではあるが、プログレッシヴ・ロックの精神は脈々たる歴史の中で確たる生命の胎動を続けているのである。

英国のプログレッシヴ・ロックは完全に形骸化してしまっている。しかし、その実験的な発想の加速度を刺激したのがムーグ博士の開発したムーグ・シンセサイザーだったことを考えれば、機材や、その工学的発達によって、実験そのものが一般的なレベルで実践されることで、友関的な結末を迎えざるを得なかったとも読める。

プログレッシヴ・ロックの誕生の起源は曖昧だが、レコード・メイカー側のオーディオにおける実験、つまり、再生能力への挑戦といった、企業努力の一連の動きがムーヴメントを支えたという事実は否めない。当時のメロディ・メイカー紙の辣腕記者であったクリス・ウェルチもまた同様の見解を述べている。

R&Bからの発展、ブリティッシュ・トラッドからの発展と、あらゆるジャンルの音楽が、実験的、冒険的であろうとするミュージシャンの精神と融合し、一本の奔流として形を成したのは'60年代後期のことである。ムーディ・ブルースのマイク・ピンダーによって紹介された形となったメロトロンは、その後、キング・クリムゾンの登場によって完全なる市民権を獲得するが、このメロトロンの存在がプログレッシヴ・ロックという音楽の色合いに大きな影響を与えた。キーボードを主体とするサウンド形態に特殊な光を投影させたプログレッシヴ・ロックは、そのメロトロンという楽器の価値感の低下によって失速したとも考えられる。

'60年代後期から'70年代前期にかけてのレコーディング技術と現代のそれとでは雲泥の差があるのは説明するまでもない。メロトロンに代わる新兵器が工学上の発達から生み出されたことと、メロトロンそのものの水準を保ち続けるメンテナンスの難しさが複雑にからみ合って、現代の向上したレコーディング技術とメロトロンの共存は成



立しにくいとの結論がはじき出されている。先日、ブルーズ・アルバムを制作したゲイリー・ムーアは、当時の薫りを意識するあまりメロトロンをレコーディングに用いることを決意するのだが、現代のレコーディングとの適正を得るために、その修復に膨大な時間と金をかけたと説明している。

メロトロンの限界をミュージシャンがいつ頃から考え始めたかは不明だが、'74年、英国でグリーンスレイドのコンサート後にデイヴ・グリーンスレイドに取材した時に、彼がその限界について語ったことを思い出す。キーボード奏者の体質という問題もあるのだろうが、レフュジーのライヴにおけるパトリック・モラーツの奏法形態を分析すると、彼は明らかにシンセサイザーを優先させる音の組み立てに比重を置いていて、メロトロンそのものに依存しない技術を見せつけていた。音響工学の進化に最も敏感だったプログレッシヴ・ロック畑のミュージシャンは、自己の音楽の進化と音響工学や機材そのものの発達を合体させるべく真正面から取り組んでいたわけだから、メロトロンの限界と、その代役の発見という新しいレベルへの到達は、プログレッシヴ・ロックという'70年代初期の概念を大きく変えることになったと言わねばならない。

技術や、音楽の根底に脈々と流れるイデオロギーに支えられたプログレッシヴ・ロックの崩壊は、新参者が簡単に演奏できてしまうキーボード群の発達と密接に関係している。'70年代後期に登場したニュー・ウェイヴのシンセサイザーの乱発は、その顕著な例でもあった。数学的な組み合わせの方法論を用いたキーボード群の開発は、楽器からマシーンへとその姿を変え、演奏者をエンジニア的なレベルに導き、個性的な音作りは組み合わせの技術によるとの世界観を築き上げてしまう。進化する音楽と呼ばれながら、結局はマシーンの進化に属するという、何とも皮肉な現象が誕生するわけである。

これはキーボードだけに限定された問題ではない。インストゥルメンタル群の画期的な進化が、プログレッシヴ・ロックの構造そのものを変えたというのが僕の見解である。

進化するは精神にあり。これは“核”の部分を支えていた。しかし、サウンド的な形態でいえば、プログレッシヴ・ロックには基本となる約束事があったこともまた事実で、その暗黙の了解である約束事を踏襲しながら、新しい体系に挑むという流れが存在していた。この微妙な感覚の中に成立したものがプログレッシヴ・ロックだった。

多くのミュージシャンは特定の音楽ジャンルを超越して広義的な意識を外に向けて放射した。そういう意味では、総合的な音楽を凝縮したものがプログレッシヴ・ロックであり、そのアーティストの進化の度合いや、挑む際の手段の選択方法が、大きな幹に発生する枝葉となり、それぞれが個性を持ったのである。

現代のプログレッシヴ・ロック・シーンは、発掘作業の動きに代表される、古典への憧れを強く打ち出している。それは、プログレッシヴ・ロックが本当にプログレッシヴ・ロックであった時代への敬意の表われでもあり、結局、そこにしか存在しなかったとのマニアの正直な気持が映し出された動きだともいえる。非生産的な作業ではあるが、古典に対するこだわりの強さと、その古典の卓越した音空間の素晴しさへの情熱は、その空気を胸一杯に吸い込んだ者だけの快楽なのである。音楽や作り手の精神に潜む特殊性が、時代を超えて認識されていることを裏付ける動きでもある。

アメリカの'60年代後期を象徴したサイケデリック・ロックとヒッピー・カルチュアの影響を受けながら、その色に染まり切れなかったところに英国のロックの特質が見え隠れしている。独特な英国の風土と、その日の煙草を買う金もなかったミュージシャンの日常性が、カリフォルニア・ドリーミンに明確な差別化を与えたところから、ブリティッシュ・ロックはスタートしている。その背景とプログレッシヴ・ロックの誕生をからませてみると面白い。オックスフォード通りの裏手にあったスピーク・イージィでばらまかれたドラッグが、アメリカのバンドとは色合いの違うロックを生み出し、ファンタジィという自己の内側に向かうエナジィを内包しながら、プログレッシヴ・ロックは産ぶ声をあげた。

情報過多で丸裸になりながら、依然として妖精伝説を信じているような国だから、英国のプログレッシヴ・ロックには妙なリアリティがあったと思う。

◀メロトロン
ムーグ・シンセサイザー，ハモンド・オルガンと共に三種の神器と呼ばれ，プログレッシヴ・ロック時代を象徴する超アナログ・インストゥルメンツ。プログレッシヴに限らず，大抵のアーティストが一度はレコーディングに使用していた。



GREENSLADE

CHAPTER II

ブリティッシュ・プログレッシヴ・ロックへの流路

●松本昌幸●

プログレッシヴ・ロックの台頭

'69年10月10日。プログレッシヴ・ロックは、遂にその全貌を明らかにした。ここにポピュラー音楽史は、享楽を超えた音楽理念の具体化を、究極の構築美をもって実現させた。これは、過去10年来、'60年代を通しての音楽的蓄積の上に立脚し、'69年当時の時代感覚を取り込みながらも、決してそこに止まらない。「In The Court of Crimson King」と題されたこのアルバムとは、最も核心の部分で、音楽を通じての内的深化による産物であると同時に、個性表出の手段としての音楽の有り方を新たに示したものだった。そして、このアルバムが指標になるのも、様々な音楽エッセンスを吸収した上での多様で高度な表現テクニックが、コンセプトを明確化するに十分な簡潔性を持つ点にある。'60年代後半のロックの分化と融合のアマルガムは、音楽ジャンルの壁をも打ち破ろうとする力動を伴って、この時期、最大の異化作用となり、ムーヴメントを形造っていたに違いない。このアルバムを筆頭とするプログレッシヴ・ロックの台頭とは、こうした異化作用を経験することで成長してきたロック史が、その必然の帰結として導いた、音楽表現における個性の表出化、そして個性の内奥に横たわる共通・普遍観念の台頭を意味している。そして、更に有弁に語られる事実とは、この台頭がKING CRIMSON、彼らの成果を超えて集合無意識にも似た時代認識を鏡映しにしていたことである。でなければ、'60年代を絶対的な力で制していたBEATLESに取って替って、アルバム・チャートを制することなど有り得ない。「In The Court of―」は、小手先の珍奇さではなく、時代の胎動―新たな認識の台頭―を象徴した点で、ポピュラー音楽が、より個人と内的な部分で直結しようとする方法論を持ったことをも示している。それが、プログレッシヴ・ロックと言われる音楽表現である。

プログレッシヴ・ロックの形から

プログレッシヴ・ロックの音楽形態に共通することは、ジャズ、クラッシック、ブルース、そして'60年代の様々なロックなど、既成音楽要素の取り込みにある。ロックが統合の順応性



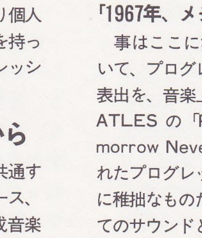
KING CRIMSON

故に成長するものと言えるならば、プログレッシヴ・ロックの共通スタイルこそは、確立期に当たる'70年前後において、あらゆる音楽要素の集積であるロックの中でも、音楽の最前に立っていたとも、文字どおりプログレッシヴな有り方を表していたとも言えるだろう。ただし、KING CRIMSON にせよ YES にせよ、初期の立ち上がりの時点で、一早く独自のスタイルを築いていることは、'60年代末の音楽的アマルガムを昇華したことを十分に窺わせる。では、確立された有弁な語法、ロックにおける表現主義、プログレッシヴ・ロックを産み出したこの音楽的アマルガムとは、何だったのか。プログレッシヴ・ロック出生の秘密を探る手立て、それは、'60年代後期にある。

ブリティッシュ・プログレッシヴ・ロックへの流路

「1967年、メジャー・シーン」

事はここに始まる。1966年、イギリスにおいて、プログレッシヴ・ロックに内在する観念表出を、音楽上、予感させた作品がある。BEATLES の「Revolver」に収録された『Tomorrow Never Knows』である。後の完成されたプログレッシヴ・ロックからすれば、非常に稚拙なものだが、サウンド・コラージュ仕立てのサウンドと暗示風のタイトル、歌詞は、まさにその原型と言うにふさわしい。このアルバ



BEATLES

Revolver

'66

前作'65年の「Rubber Soul」表ジャケットのレタリングでその片鱗を見せたサイケデリック感覚が、'66年このジャケットにずばりあらわになった。まるでサウンドの急速な多様化をも目に見えて示すかのようだ。ここにきて、彼等はスタジオ・ワークに突入していく。この作品には、実験色豊かな『Tomorrow Never Knows』、シタールとタブラの導入『Love You To』の、なんとメロディ志向でない BEATLES までもがいる。まさに象徴的だ。他にブラス・ロックの原型B⑥、サイケデリック感覚のA③、⑦、本格的なヴァイオリンの導入A②など、時代を先取りした博物館だ。（松本）

ムで追い打ちをかけるように、グループBEATLESは、４人の個の集合体へと転換の度を速めた。たとえ誰かが、この変化を察知していたとしても、一方では、当時『Paperback Writer』などのヒットを次々に飛ばす有能なコンポーザーとしての、彼らの姿が歴然としてあった。恐らく、この曲も、そうしたレノン＝マッカートニーの才能の多様性を示すものとして、一実験作に位置づけられるのが精一杯だったことだろう。しかし、彼らのこうした精神は具体的には、'67年の「Sgt. Pepper's Lonely Hearts Club Band」、'68年の「Magical Mystery Tour」でのコンセプチュアル・アプローチ、同じく'68年の通称「White Album」の中の『Revolution No.9』、'69年の「Yellow Submarine」中の『Only A Northern Song』などに姿を変えて受け継がれていく。

もう一つ、非常に表立った作品がある。ROLLING STONESが'67年に発表した「Their Satanic Majesties Request」である。BEATLESの場合は、４人が様々な音楽性を曲単位で打ち出したため、あくまでも一要素として珍しがられる程度に今もっておさめられているものだが、STONESの場合は違った。このアルバムが彼らの奇作だとされるのも、紛れもないR&Bのイギリスにおける先陣である彼らの音楽性、経歴から掛け離れ過ぎた、その内容の特殊なことを物語る。このアルバムが、当時来のBEATLES対STONESという図式をあてはめた「Sgt. Pepper's―」のコピー作であるとする意見の真偽など、問題ではない。問題は、この音楽を創り、このアルバムを発表した事実それ自体だ。'67年という時期に。

BEATLESとSTONESの、冒険と言い捨てされるこうした行動は、当時既に得ていたイギリスきってのヒット・メイカーとしての彼らの顔と、各々BEATLES、STONES内に視野を狭めた暗黙の了解でもって、今なお見て見ぬふりをされている。しかし、ロック史を大局的にとらえれば、これらは氷山の一角であり、水面に現れた頂上の一つ、一つであって、時代の象徴に位置づけられる重大な意味を抱えているのである。

それが証拠に、メジャー・シーンでの出来事故に見過ごされがちなこの動きも、この時期を底辺から支えたアンダーグラウンド・シーンでは、目もあてられない程に顕著だ。JIMI HENDRIX EXPERIENCE、SOFT MACHINE、TYRANOSAURUS REX、PINK FLOYD……あらゆる音楽スタイルをも凌駕して、そこにもここにもうごめく時代の胎動は、現在へもその数多くの作品がサンプルの如く伝えられている。

1967年のイギリス。その集積地ロンドンのアンダーグラウンド・シーン。イギリスの地理的狭小さとロンドンの中央集中的性格は、雑多なアーティストとともに様々な音楽性を呼び込み、音楽上の空白地になっていたに違いない。あらゆる音楽的因習が取り払われ、短期間に瞬発的とも言える多様化や急変をみせるイギリスの音楽事情は、ここに第一の原因を探り当てることができる。そして、毛を逆立てたパンカーと羽毛のついた帽子をかぶる貴婦人が、地下鉄の座席に隣り合わせになった現実の構図、この一見区分けされない自由尊重に背中合わせする現存の階級の接触を持つ点こそが、事があれば一触即発といったロンドンの集積地としての特異性を物語る。'67年前後、こうした性格を持つ受け皿、ロンドンとは、まさに出生を見る前夜の混沌―アマルガム―であったに違いない。

音楽ライター、マイルスは、「ポール・マッカートニーが、'67年のPINK FLOYD、SOFT MACHINEの実験を観る為、当夜、ラウンドハウスを訪れていた」とレポートに伝えているが、事をはっきりさせるには、この一例でもっても十分だ。この受け皿の中にあっては、有名も無名もなく、ライヴ・ハウスでの画策は毎夜続いた、ということだ。BEATLESもSTONESも、この足元の揺れに不感症であるほどまだ鈍感ではなかったことなど、両者の問題作以後の進展が明らかにしている。この時、命の泉、ロンドンのアンダーグラウンド・シーンの胎動は、ヒット・チャートの頂点にまで響いていたのである。これは、即刻、音楽事情を通り越して、一時代を築くに足りる文化に相応していたに違いない。

「サイケデリック・ムーヴメントの到来」

この受け皿、文化を築いたもの。BEATLES、STONESまでもが揺り動かずにはいられなかった時代の胎動。ポピュラー音楽史を恐らく当時にあっては、行き先の見えない暗中模索、嬉ぶべき奈落に送り込んだもの。これこそ、名実ともにカウンター・カルチャーに他ならない。既成文化に台頭するこの新たな文化、つまり認識とは、個性の発見と尊重であった。これは、そのまま、地固めされたシングル志向の音楽基盤を揺がし始めた、探求、触媒としての音楽の有り方とその試行錯誤にあてはまる。サイケデリック・ムーヴメントは、その最も表面化した動きとして口火を切った時代の胎動である。

イギリスに話を絞れば、'66年頃、アメリカ西海岸で起こったこのムーヴメントの波及は無視できないとしても、ベトナム戦争突入という深刻な社会性を背負うアメリカの精神的背景までは、輸入され得ないものだったに違いない。DOORSやボブ・ディランのメッセージが信実味を持って迎えられたであろうアメリカと、PINK FLOYDやSOFT MACHINEが、極言すれば、音楽認識の実験を繰り広げたイギリスとの違いは、社会性をおびた歌詩の現実味、肉迫さ、あるいはGRATEFUL DEADやJEFFERSON AIRPLANEなどのライヴ演奏に顕著な、音楽を問う以前に音に瞑想を志向しようとする傾向のアメリカと、歌詩の面白味、音に創造性を志向しようとする傾向のイギリスに換言できそうだ。まず、国民性を問う以前に、イギリスにおけるカウンター・カルチャーが、守られた日だまりの中で起こったが故に、創造する余裕を与えられていたことは、少なくとも間違いではないだろう。

さて、本来、サイケデリック・ムーヴメントは、アートの世界に現われたものであるが、音楽に波及したのも、これがジャンル内の手法改革といった表面的な事柄ではなく、社会性を反映する言語として現われたものであるということは、念を押されるべきだ。では音楽におけるサイケデリック傾向とは何だろうか。これをつきつめると、具体的な手法としてコラージュが思い浮かべられる。1920年代に、マックス・エルンストが絵画の上で確立したこの手法は、何ら関連性を持たない対象を、二つ以上、隣り合わせることで、そこに第一、第二の対象それ自体が発するイメージとは別の、第三のイメー

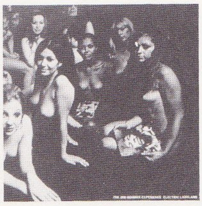


THE ROLLING STONES

Their Satanic Majesties Request

'67

同年発表されたBEATLESの「Sgt. Peppers―」とともに、本格的な英サイケ・ブームの到来を告げた象徴的な１枚。誰もが知るR＆Bバンドとしての彼等とはまったく毛色の違った作風だけに、賛否両論だったに違いない。が、ポップ・シーン表層のこうした思いつきとも思える変化も、この時期、地下では着実に息づき、後のニュー・ロック、プログレッシヴ・ロックの引き金となっている。B①をはじめ印象的なメロディー、ポップ色は守られているとしても、様々な効果音、ギミックの脈絡のなさ、メロトロンの使用、東洋志向のごった煮など、まさにサイケデリック。（松本）



THE JIMI HENDRIX EXPERIENCE

Electric Ladyland

'68

国籍はアメリカ、本作もニューヨークで録音されたが、彼の本当に活動した場は'60年代末ロンドンのアンダーグラウンド・シーンだ。表面上、平穏な無味乾燥に近かったイギリスに底辺から強迫観念に似た衝撃をもたらせ、この国を爆発させた彼の資質は、やはりイギリスのものではなく、所謂才能というよりも無自覚に飛び散る彼の個性だったのだと思う。音楽を単なる楽しむものから精神世界に影響を及ぼす良き毒にまで引き上げたこの既成概念の打破が、直後に具体化することを御存知か。本作はコントロールされた分、完成度が高く、彼本来の魅力、効力が半減した集大成である。（松本）

ジを深層から引き出すところに目的がある。この意外性がもたらせる効果は、この時期、急速に音楽へ持ち込まれている。この不意の感覚には、LSD に代表されるはずの、ドラッグの介在をなくしては語り得ないサイケデリック傾向の本性をも明かすものがある。色彩の強烈な差異が持たらす効果も、そのまま音色に移され、例えば、ジミ・ヘンドリクスに代表される音色のけばけばしさ、強いては、初期 MOTHERS OF INVENTION など数多くのミュージシャンが試みた、効果音、語りなどの混入に、感覚的に通底するものだ。こうした効果を求める志向自体、その背後には既に、無意識方向への、より深層への探求―内的志向―としての音楽の有り方が問われている。例えば、社会を形造る一員として意識することなく収まっていた個人が、社会的な挫折を経験することで、社会を対象化し、同時に個人性を自問自答していくといった試行が、音楽の身の上にも起こったのが、この時期だ。つまり、醒めたのである。そして、アメリカにとっての社会的挫折が何であったかは、繰り返すまでもなく、イギリスの音楽におけるそれに相当するものがあるとすれば、それは、'60年代の中で繰り返されることで強固なものとなった既成音楽形態の定着である。アメリカをも制覇した BEATLES、STONES を抱えたのは、どこでもないイギリスだった。ここにアメリカからのサイケデリック・ムーヴメントの波及が、ステューデント・パワーとドラッグをもって、まさに全貌を明から様にしようと爆発寸前にまで押え込まれていたイギリスのカウンター・カルチャーを、一気に触発したのである。一たび留金がはずされれば、もう収拾はつかない。いずれにせよ、音楽が精神的に関与していく志向こそが、サイケデリック・ムーヴメントの特徴であり、ここにドラッグの介在が大きく影響した事は、否定されることのない事実である。

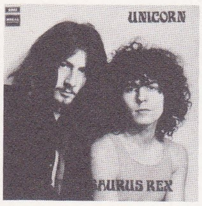
ただし、音楽上、このムーヴメントを特質づけ、そして後のプログレッシヴ・ロックの根本原理とも言える手法としてのコラージュに話を絞れば、エルンストのダダ時代のそれに相応する原始的なものに止まっている。これは、STONES の問題作をはじめ、JULY、初期 SOFT MACHINE など、この時期の数多くの作品に共通して言えることだ。つまり、コラージュされる対象の必然性が欠けているため、全体の統合性がなく、コラージュ部の衝撃度、意表性が先立つばかりで、より深い内的イメージを想起させる効果が図られていない。言い替えれば、サイケデリック・サウンドは、この衝撃、意表を突いた際に発せられる瞬間のインパクトに多くを依っていると言えるだろう。



'71年6月20日(日)〜24日(木)、ウッドストックの夢をそのままに行なわれたフリー・コンサート "Glastonbury Fayre"。イギリスきってのサイケデリック大会。見ての通り。

「第1期 DEEP PURPLE と NICE の可能性」

サイケデリック・ムーヴメントの所産、コラージュが、内的表出の重要な方法論の一つとして、プログレッシヴ・ロックへと昇華される過程において、ロックは様々な音楽形態を取ったとは言え、これをプログレッシヴ・ロックの視点から見る時、第1期 DEEP PURPLE、NICE などが試みた応用には、単なるコラージュ効果を超えた重要な問題が含まれている。それは、コラージュされる対象として、クラシック、もしくは、そのイディオムを選択していることにある。言うまでもなく、クラシック・イディオムの吸収は、プログレッシヴ・ロック確立へと導く鍵の一つである。たとえ、その吸収の方法が、第1期 DEEP PURPLE、NICE 各々の極点である「Concerto For Group & Orchestra」、「Five Bridges Suite」のような、ロック(グループ)とクラッシック(オーケストラ)の並列的な組み合わせといった、コラージュによる引用の域を出るものではないとしてもである。そして、この選択の必然性が、ひとえに、ジョン・ロード(DEEP PURPLE)やキース・エマーソン(NICE)の経歴、素養に依るものだとしても、それでも、サイケデリック・ムーヴメント全盛の'67年に初めて示されたこれら音楽性は、ロック史の中に、クラシック・イディオムが、明確な形をもって抽入された第一歩であることには違いない。そして何より、これは、クラシックの構築性や情緒をロックに取り込もうとする意志の、前段階的なアプローチである。しかし、ロックとクラシックの出会いに留まるこうした方法論は、異種の要素を統合して新たなものを産み出そうとする意志に反して、それらの対比による力関係を、そして出会わす際の均衡の崩れに、曲の源動を負っている点で、コラージュの方法論を拡大したものに留まっている。そして、これらを有機的に結びつける方法を見い出せないまま、彼らが方向転換、解散したことは、そのまま'60年代イディオムの限界点、音楽形態を単にコラージュすることの不毛性を示している。それでもなお、これは、ロックの異化作用がプログレッシヴ・ロックの方向に向けて行なわれた重要な布石には違いない。

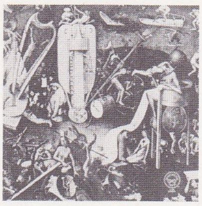


TYRANNOSAURUS REX

Unicorn

'69

'60年代末のロンドン、アンダーグラウンド・シーンに君臨していた頃のマーク・ボランは、全てがアコースティックだ。その彼をまるで夢想することが大好きな吟遊詩人などと感じてしまうのも、後の大スターとしての姿を思うためかもしれない。独特の声質は変わらずとも、実際は INCREDIBLE STRING BAND などと同傾向のサウンドが4作目まで続く。この時代は一方で新興宗教や瞑想、ヒッピー感覚が音楽を取り囲んでいて、ライフ・スタイルとして密着していたように思う。つまり社会を遮断でき得た時代なのだ。疑いを持たず羊水の中で歌い続けたのである。やがて時代が来た。 (松本)



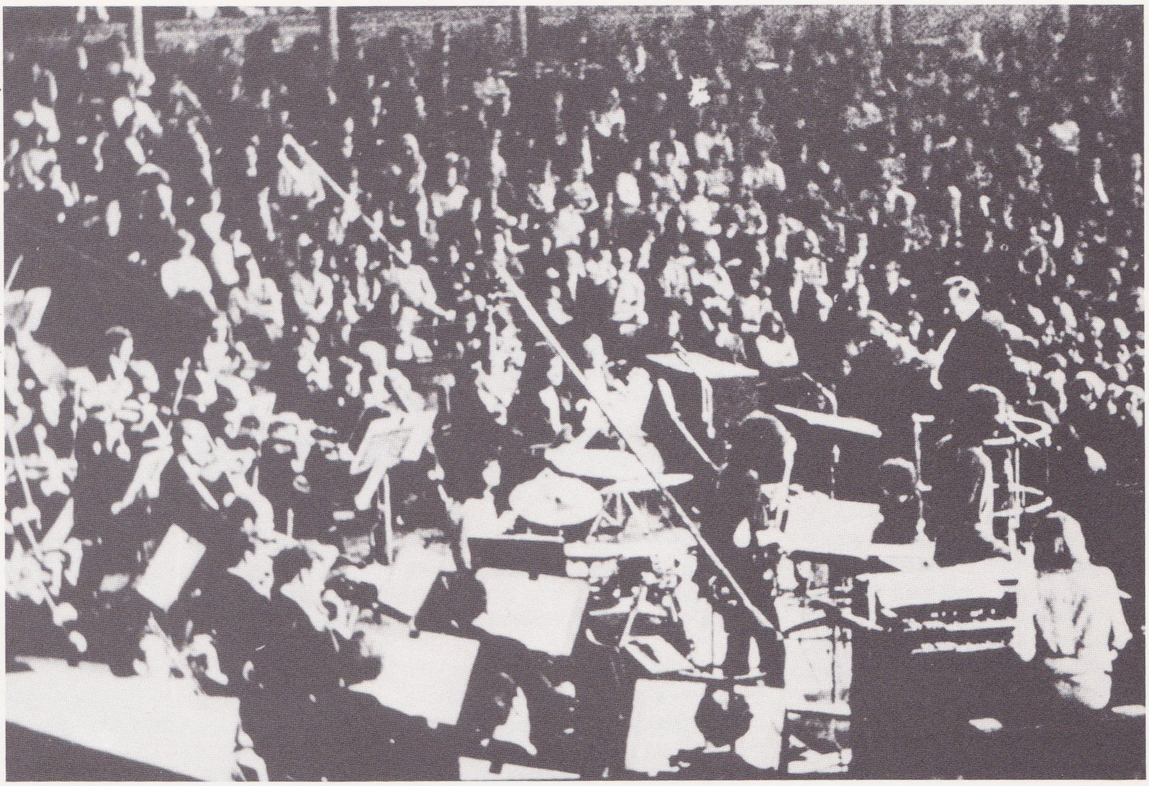
DEEP PURPLE

III

'69

「In Rock」以降、リッチー・ブラックモアに主導権が移る前は、完全にジョン・ロードがバンドをコントロールしていた事がわかる。ハープシコードを使った『Blind』やドノヴァンの『Laleña』は名曲中の名曲。'60年代ということもありやはりブルーズ・ベースの曲が多く、そこにジョンがクラシカルなアレンジを施し、または ジャジーなオルガンを弾きまくり、その上にまるでジミ・ヘンのように巧みにワウを使いこなしたギターが乗るというスタイルだった。ラストを飾る『4月の協奏曲』は、三部構成の大曲でクラシカルなパートは特に素晴しい。 (金井)

"ロックとクラシックの融合"という言葉が，真にプログレッシヴだった時代。'69年，DEEP PURPLEとロイヤル・フィルハーモニック・オーケストラ。



「CREAM, COLOSSEUMにみるインプロヴィゼイションによる異化作用」

そもそも、クラシックによる異化が、この時期、ほとんどの場合でコラージュという形をもって表われたには、理由があるように思える。それは、クラシックという音楽形態の性格に由来するものだ。このことは、形式、音色などの取り決め、完結性の強さ故に成り立つクラシックの性格が、引用という形をもってしか異化を及ぼせ得ない立場にある音楽形態であることを、逆説的にも明らかにするものだ。クラシックにおいては、音，音楽は、完結性を見ようと完成の方向に向うが、これとは逆に底辺を広げていく表現手段が、既に存在していた。第二の鍵、インプロヴィゼイションである。'60年代後期に至るまで、それはジャズの領域に留まっていたが、ロックのみが持つ統合の柔軟性は、この、音楽形態ではなく、第一義に概念であるインプロヴィゼイションをも、取り込み始めることになる。

'66年のCREAMのデビュー、'68年のCOLOSSEUMの結成は、その後の活動と音楽性を吟味すれば、この点で非常に大きな出来事である。周知の如く、後期KING CRIMSONにおいて、内的表現の手段にまで昇華されるこの手法を、ジャズから持ち込んだ彼らの嬉ぶべき非道行為の背後には、'60年代既成音楽に飽き足らない探求が窺がえ、何より、インプロヴィゼイションの命とも言える個の尊重に関心を寄せている点で、これは個人性、内的希求の発露に沿ったものである。それでも、この時期が、あくまでも'60年代であるのは、CREAMに代表されるように、ライヴでは不作法とまで言えるこの手段の行使があったにもかかわらず、スタジオでは、'60年代既成音楽のスタイルに従っていた点にある。この両者のギャップと各々の徹底ぶりをして、CREAMをロックにおけるインプロヴィゼイションによる異化の原型に当てはめるには十分だ。

そしてCOLOSSEUMとは、CREAMのもたらせたそれの次期なる姿、インプロヴィゼイ

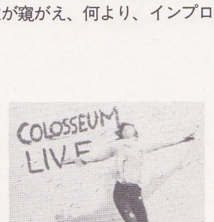


CREAM

Wheels Of Fire

'68

彼らのとりとめない即興を初めて聴いた当時のシングル曲志向層には、ノイズに接したシンフォニック・ファンにも似て、居心地の悪さがあったに違いない。「これは音楽ではない」。これが台頭する先鋭さと既成との葛藤を象徴する一言であり、何より個人の奥底に眠る認識の葛藤でもある。つまり個人の内のアマルガム状態の集合とはムーヴメントだ。今やこれを通過し、ロックの流れを切り開いたと賞讃されたには、一方で20年の歳月がもたらせた多大な回顧意識による美化、忘却、そして口乗せがある。そして容認されたが、実際の音は歪で旧態だ。内的発露の熱気だけが今も通じる。（松本）



COLOSSEUM

Live

'71

'60年代末のわずか3年間の活動にもかかわらず、各メンバーの音楽背景（ジャズ、R＆B、ブルース、ロック)、ブリティッシュ・シーンを渡り歩いて来た経歴が物語る実力と音楽性で真に革新をもたらせた最重要グループ。強力なリード奏者4名という大編成の上に、英ロック史上でも最強のドラマーに数えられる要のジョン・ハイズマンを抱え、ジャズの方法論の中で各音楽要素が絡みぶつかり合う時のヴァイタリティー、即興力は、安易さのかけらもない極度にレベルの高いものだ。残された5枚の中でも、各個性がバンドを破綻寸前にまで高めた本作は真に歴史に残る一作だ。（松本）

ションの有機性を示すものだ。ここでは、インプロヴィゼイションによる異化作用が拡散することなく、グループの目指す統合的音楽性の一点に向って、一勢にその力を発している様を見ることができる。彼らの「LIVE」とCREAMの「Wheels of Fire」「Live Cream」との、濃密度の差としてとらえられる本質の差異は、ここにある。COLOSSEUMは、各メンバーの持つ音楽的背景の集合体であり、何よりミュージシャンの有り方として、個の集合であるジャズと個の結束であるロックの中間に位置する存在である。そして、彼らの個の衝突は、そのまま各メンバーの背景にある既成音楽のそれを意味することで、'60年代既成音楽のアマルガムとしての'60年代後半をも象徴する最小単位とも言える。それ故に、「Live」でのこの衝突による力動が、全体統合に破端をきたしている様は、'60年代の限界点、インプロヴィゼイションによる有機的異化の極限を示すものだ。個の尊重であるインプロヴィゼイションとは、言い替えれば、個性間の衝突によってより高次の均衡を保つことで、それ自らの命を紡ぎ出すのだとすれば、この個を尊重する性格故に、リード奏者4名(ドラムのジョン・ハイズマンを入れるならば5名)といった複数の強力な個性同志の主張が、ある時、均衡の歯止めを突き抜けて自ら地盤沈下を起こしてしまったのが、彼らだったと言えるかもしれない。それは、彼らの音楽が純粋なインプロヴィゼイションそのものであるジャズでもなく、前提枠に押し込まれたロックでもなく、その中間にあったことに帰因するように思える。しかし、この中間的存在であったからこそ、インプロヴィゼイションを展開したに留まったCREAMとは違って、グループの音楽性に、源動力としてそれを取り込めたと言えるだろう。

では、インプロヴィゼイションの有機的結合を自らの音楽性として確立したCOLOSSEUMと、後期KING CRIMSONのそれとの違いとは何だろうか。それは、前者がその力動を内面から発せようとも、音楽形態の完成に向って放たれたものであるのに対して、後者は、第一に内面下に眠る観念表出の手段として、それを用いた点にある。そのまま音、音楽性に秘められた直観力、イメージ力の差として明らかである。すなわち、目指していく方向に違いがあるのである。そして後者には、内在する主題といったものがある。双方とも、各々にインプロヴィゼイションを昇華しているには違いないのだが。'60年代後期のインプロヴィゼイションが、音楽形態の異化に留まるとは言え、これもまた、プログレッシヴ・ロックを開花させるに至る重要な布石であることには、違いない。



'69年モントルー・ジャズ・フェスティヴァルでのCOLOSSEUM。'60年代末の英ロック・シーンを代表するグループ。

「コンセプチュアル志向の萌芽」

3分間の歌詩に盛り込まれたメッセージ。これが、'60年代の既成音楽形態を何よりも有弁に物語る。が、この裏に潜む本質とは、こうした形態を堅持しようと暗黙の内に働く規制であり、それを生かしている音楽認識である。'67年、BEATLESの「Sgt. Peppers —」が、衝撃として受けとめられたのは、1曲目からラスト・チューンに至るまで、一続きの物語のように受け取れる流れが、そこに感じられたからである。そして、独立曲(シングル指向)の寄せ集めに過ぎなかったアルバムという媒体が、ここに命を持ったのである。やはりこれは、認識の転換をもたらせた事件と言うにふさわしい。'60年代既成概念は、「Sgt. Peppers —」をムーヴメントの旗印にして、音をたてながら崩れ始める。'68年にKINKSが発表した「Village Green Preservation Society」にしても、果たした役割は同じである。ここで1曲の歌詩に盛り込まれたメッセージは、1枚のアルバムへと及び、各曲はそれを構成する部分になった。しかし、この認識の転換を本当に導き、担ったものの正体は、コンセプト、物語性であり、形式から解放された自由な発想とその希求、そして商品から創作物へと格上げする結果となる創造意識の深化である。遂にロックは、その内面から表面形態はおろか、媒体をも変質させるに至ったのである。

しかし、「Sgt. Peppers —」や「Village Green—」は、一方で各曲が自立し得る各々のテーマと音楽形態が、アルバムの流れに、より勝っている点で、多くを'60年代既成形態に依っている。コンセプト、物語性も、まだ希薄である。この相関関係を具体化し、コンセプトが音楽に先行した最初の完全作は、1969年、WHOが発表した「Tommy」である。この大作で、音楽はコンセプトを伝える手段ともなって作用している。この作品は、サウンド自体こそプログレッシヴ・ロックに縁が薄いとはして



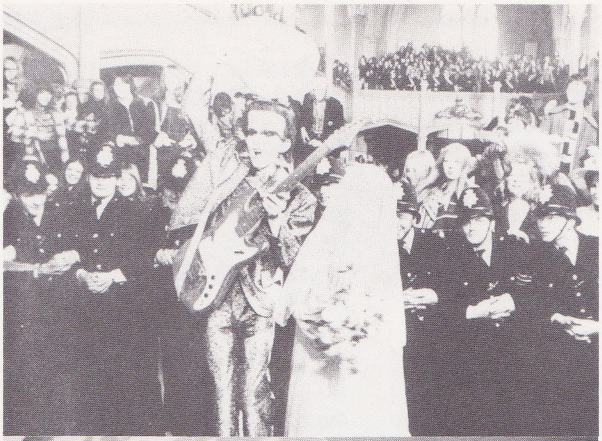
BEATLES

Sgt. Peppers Lonely Hearts Club Band

'67

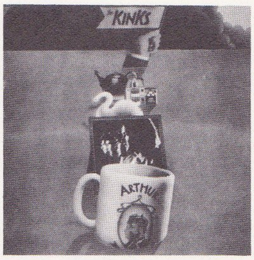
時代が到来したと言うべきか。ジャケットのコラージュは、前作のそれを一歩進め、シュールレアリズムの原理語法をユーモア混えて華やかにぶっちゃけたものだ。ザッパに先行したアヴァンギャリストとは、彼等だったのかもしれない。時代の経過から、あらゆる意味でポピュラーという仮面をつけられ、陳腐にされているが、本作前後における彼等の創造力には限度がない。一体『Revolution No.9』のコラージュをどの様に受け取るというのだろうか。本作B⑥の展開、ポップスによる情景描写と劇中劇効果の斬新さを抜きにして一級のメロディで語らせる天才が彼らだ。

(松本)





⬅「Tommy」は偶然の産物ではない。彼らのコンセプト志向は，前作「Who Sell Out」に 原型があり，それはやはり'67年のことである。写真は映画「Tommy」より。有名人が総出演してもただのお祭りに止まらなかった時代背景がそこにはあった。



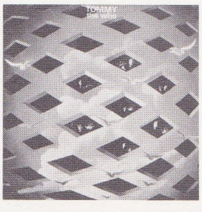


➡ KINKS,「Arthur or Decline of British Empire」の表，中ジャケット。レイ・デイヴィスのブラック・ユーモアがよく表れている。イギリス以外の何者でもないグループの一つ。

も、KINKS、'69年の「Arthur or Decline of British Empire」、同じく'70年の「Lola Va Powerman And The Moneygoround Part I」といった他の同アプローチ作に大きく水をあけている。それは、『Do You Think Its Alright ?』や『There's A Doctor』といった30秒にも満たないナンバーの挿入や、後にオペラ化される際の最大のとっかかりでもあるストーリーに沿った曲進行など、アルバム構成、ジャケットにまで及んでの完全なトータル志向の徹底にある。これは、BEATLES が「Sgt. Peppers ー」で指し示した方向性の帰結であり、ストーリーのテーマを担う、個性の醒め、そして個人と社会との関係を、主人公トミーに暗喩させるこの着想をも含めて、例えば「狂気」('73)「幻惑のブロードウェイ」('74)といったプログレッシヴ・ロックの、サウンドではなく、方法論を、既にこの時点で先取りしているのである。残るは、サウンド自体が持つ暗示力、効果といった次元にまで到達しているのだが、しかし、ここでプログレッシヴ・ロックの果たすそれが応々にして、言葉による説得力をも超えることを思えば、この差は、やはり非常に大きなものがあると言わざるを得ない。

プログレッシヴ・ロック確立へ

こうして'60年代後期の、恐らく後にも先にもロック史上、最大のアマルガムの中から、ロックが本来、果たすべき内的表出の語法としての表現を導く布石がしかれるに至る。そもそも、コラージュ、インプロヴィゼイション、コンセプチュアル志向という目立った'60年代後期の方法論は、それ自体が、音楽の有り方の探求により導入されてきたものである。コラージュは、異種の要素を混合し、インプロヴィゼイションは、力動を産み出し、コンセプチュアル志向は、概念を浸透させる。そして、これらを統合し、ロック史は、よりサウンド面で関係を深めることで有機的な昇華に至ったのである。



THE WHO

Tommy

'69

キース・ムーン死去後の'83年、長い活動歴に一応の終止符を打ったイギリスの超大物。'60年代の彼等は、数々のヒットを産み、荒々しいステージ・アクトで当時の不満因子モッズ族の象徴として取り沙汰されることが多いが、一方でアーティストとしての資質を持っていたことは、本作や'73年の「四重人格」に表われている。本作はポピュラー史上初のトータル・コンセプチュアル作としてモニュメンタルな大作であり、コンセプトは FLOYD の「Wall」の原型とも言えるものだ。劇化され華やかな賞讃を受けた裏側で、実はプログレッシヴ・ロックの重要な方法論を確立している。（松本）

CHAPTER III

ブリティッシュ・プログレッシヴ・ロックの確立

序

松本昌幸

ブリティッシュ・ロック、'60年代後期の葛藤―既成音楽概念とカウンター・カルチャーの衝突―からもたらされた様々なロックの方法論―コラージュ、インプロヴィゼイション、コンセプチュアル・アプローチなど―は、'70年代が近づくにつれて、各ミュージシャン各々の音楽スタイルを形造る上で昇華され、各々の音楽性の中で生きていくことになる。しかし、こうした'60年代後半のシーンが用意した音楽上の方法論によって、プログレッシヴ・ロックなる音楽が確立されたかと言えば、決してそうではない。むしろ、こうした方法論は、どちらかと言えば、'70年前後の時代の語法というべきものだ。なぜなら、これらが同時代のハード・ロック、フォーク、ジャズなどジャンルに隔たりなく見受けられるからである。確立に導いたもの、カウンター・カルチャーを契機に、いわば時代の流れが必然的にもたらせてきた精神的なものである。とは言っても、'60年代末の"ラヴ＆ピース"といった短絡的な精神志向の延長でもない。ではプログレッシヴ・ロックとは、本当は何なのか。これに対する答えこそが、なぜ「今もってプログレッシヴ・ロックなのか」をも説明してくれる。

まず素直に、"形態は内容の表れである"という原点から遡って探れば、所謂プログレッシヴ・ロックが、所謂ロックという自我の行為とは対極にあるイメージの表出に、より多くを負っている音楽スタイルの表れ方をしていることから、それは自我＝意識からより隔たったもの、イメージとしかとらえられないもの、つまり、意識下に潜む心理の表出だと言える。そして表出とは、それ以前に探究であることを前提にしている。その心理とは、言動や行動として直接、現れる意識を補いながら支えるもの。自我＝意識をつかさどる、より潜在的な感知されにくい意識のことである。この意識が恐らく存在するだろうというのも、例えば、"夢"に代表されるように自我＝意識とは別の意識が、人間には存在するという事実でもって誰にでも想定できることだ。これは、状況の変化に左右され易く、十人十色、千差万別の形で表面に現われている自我＝意識を形作る、より原意識に近いが故に、より普遍性をおびたものとして想定される意識、言葉に語弊を共ない兼ねないので、ここでは、"原イメージ"としておきたい。この原イメージこそ、言い替えれば、より絶対性をおびているものなのだから、何より意識下、つまり無意識の領域に潜む原イメージの音像化とは、絶対性への希求、そして絶対性の究極とは"真理"という言葉に置き替えられる概念の希求―「存在とは何なのか」という問いに対する答えの希求―を暗に秘めているもの、間違っても、直接表れたものとは言わないにしても、少なくとも、そうした方向性をもった表現に属したものとは言える。再度、繰り返せば、音楽というジャンルにしばられず、なぜ内的言語（もちろん"言葉"という意味ではない）を人間は必要として、時代をも超えて、芸術家、哲学者、宗教家、数学者、科学者、心理学者、その他と呼ばれる探求する人々を産み出し続けているのか、なぜなら、それら各々が各々の観点から探求する方向の奥の奥には、"存在観念"という最も抽象的で、考えも及ばない規模の、しかし人間共通の希求、恐らくその解答"真理"がそこにある、と直観的に、あるいはある程度まで理論的に嗅ぎ分けてきているからに他ならない。

プログレッシヴ・ロックとは、どちらの方向を向いているかと言えば、この方向を向いているのである。こうした方向性を内在した音楽のことである。控えめに見ても、内的言語としての音楽であり、個人の価値観とは別の所で、しかも共通する根源的な問題を喚起させる可能性のある一種の触媒である。

ただ、'70年前後にあっては、イメージをより具体的に表現する上で、'60年代からの流れが産み出した様々な方法論を駆使したに過ぎない。とは言い過ぎだが、こうしたスタイルが，内的イメージを表現するには、少なくとも適切であることを、この章のミュージシャン達は，音楽をもって立証している。何のための方法論の昇華なのか、更には、昇華することによって、より具体化したイメージの指す方向はどこなのか、ここに指向を置いたからこそ、確立されたと言って過言ではない。テクニカルな問題以前に。

EMERSON LAKE & PALMER

賀川雅彦

初めに

EMERSON LAKE AND PALMER について考える場合、やはりキース・エマーソンを中心とすべきであろう。同じトリオ編成の NICE と比較してグループとしてのヴォルテージが著しく向上しているのを見ると、グレッグ・レイク、カール・パーマーの存在も決して無視できないが、彼らのサウンドを特徴づけている最大の要素がエマーソンのプレイであるということに異論はないと思われる。というわけで、エマーソンを中心に、ナイスに対する考察を含め、ブリティッシュ・プログレッシヴ・ロック・シーンにおける彼らの位置について考えてみたい。

ポップスからロックへ

今でこそ「ロック」という言葉はミュージック・シーンにおいて確固たるものになっており、その範疇も本誌で扱うようなものから歌謡曲調のものまで極めて広範囲に渡っている。しかし、外国では'60年代後半頃まで、我国においては'60年代末頃まで、「ロック」という言葉は一般的ではなかった。当時よく用いられたのは「ポップス」「ロックンロール」などであった。そして、所謂「ニュー・ロック・ムーヴメント」の盛り上がりを契機として、「ポップス」とは異なる音楽として「ロック」が認識されるようになった。その頃の両者の間には大きな違いがあった。それは「ポップス」がシングル指向、「ロック」がアルバム指向ということに端的に象徴されている。ポップ・ミュージシャンにとってはできるだけ多くのファンを獲得することが大切であり、結果、シングル・チャートの順位が重要な意味を持ってくる。そのためミュージシャンのキャラクターが重視され、それを最大限に生かすために、ミュージシャン自身ではなく、その道のプロが作曲、演奏等を担当することになる。彼らはシングルと同時にアルバムもリリースするが、そのメインはシングル・カットされた曲であり、他は付け足しの感が否めない。彼らのアルバムの中でベスト・セラーとなるのはシングル・ヒットを集めた「ベスト・アルバム」である。これに対して、ロック・ミュージシャンはアルバムを中心に活動を行った。(当時は宣伝を兼ねてアルバムの中から1〜2曲がシングル・カットされ、それもヒットした。また、アルバムとシングルの両方を重視した中間的ミュージシャンもいた)。アルバム製作に重点を置くということは「ポップス」以上にミュージシャンとして多くのことを要求されるということである。そのいくつかの重要な要素の中に演奏力と音楽に対する幅広い教養がある。これを武器にしたひとりがキース・エマーソンである。

ロック・シーンのヴァーチュオウゾ、キース・エマーソン

多くの人々に「ロック」を「ポップス」とは異なる、よりアーティスティックでプログレッシヴな(当時このような表現は使われなかったが)ものと意識させた要素の1つにロック・ミュージシャンの演奏力があった。演奏技術の向上が目覚ましい現在のロック・シーンのレヴェルから見れば必ずしも傑出したものとは言えないが、その頃はクラシック、ジャズ以外のミュージシャンが演奏主体の音楽活動を行うことは稀であった(厳密にはラテン、トラッド等、他のジャンルでも演奏主体の活動が行われていたが、それらはかなりマニアックなものであり、一般の人々には馴染みの薄いものであった)。こうした状況下、最初に注目を集めたのが、エリック・クラプトン(g)、ジャック・ブルース(b)、ジンジャー・ベイカー(ds)の3人から成る CREAM である。彼らはイギリス、アメリカ、そして日本の各種音楽雑誌に新設された楽器別プレイヤーの人気投票で(当然のことながら、「ロック」登場以前には「グループ」「ヴォーカリスト」「曲目」などの部門のみで、「楽器別」の部門はなかった)首位を独走した。ジャズ専門誌や一般誌でも特集され、また、音楽を表現する上でのテクニックの重要さを若者を中心とする多くの人々に認識させるなど、ロックの定着化や発展に大きく貢献した。しかし、今彼らの演奏を振り返ってみると、彼らは決してヴァーチュオウゾ(名人)とは言えない。彼らに限らず、現在のロック・シーンのレヴェルから見ると、当時活動していたミュージシャンの多くはプレイヤーとして技量的に傑出した存在ではない。こうした中、数少ない例外がキース・エマーソンである。エマーソンの場合は彼以前にキーボード・プレイヤーとして注目を集めたアル・クーパー、スティーヴィ・ウインウッドらとは次元が違っていた。当時、日本を含む各国の音楽雑誌がエマーソンを取り上げた場合、その比較対象となるのはジミー・スミスら、常にジャズ・シーンのミュージシャンであった。また、ロックを技術的に稚拙なものと考える傾向のあったジャズ・ファンにも支持され、スイング・ジャーナル誌の読者人気投票のオルガン部門でジミー・スミス、ラリー・ヤングに次いで第3位にランクされたこともあった。このことはエマーソンが当時のロック・シーンにおいて突出した技量の持ち主であったことを示す一例であろう。勿論、音楽、特にロックは技量だけではない。しかし、優れたテクニックを持つことによって初めて、可能になる部分もあり、それが音楽の幅を広げることは否定できない。



キーボード・プレイヤーとしてのエマーソン

エマーソンはキーボード・プレイヤーとしてオルガン、ピアノ、シンセサイザーの3つを巧く使い分けている。この3つの中で最も独自のスタイルを持っていたのがオルガンである。NICE 以後キーボード・プレイヤーを中心としたロック・グループが数多く現われ、オルガンはファンにとって馴染み深い楽器となった。しかし、それ以前はロック・シーンはもとより、ジャズ・シーンにおいてもかなりマイナーな存在であった。オルガンをメイン楽器とするミュージシャンは極めて

少なく、そのスタイルもジミー・スミスに代表されるスケール的動きの早弾きが一般的であった。こうした中、エマーソンのクラシカルな、あるいはポップなフレーズをメロディアスかつテクニカルに弾く奏法は新鮮であった。彼はそのようなスタイルを一般化した、そしてそのようなスタイルで最初に成功したオルガン奏者である。これに対して、エマーソンのピアノ・プレイには多くのピアニストの影響が感じられる。ホンキー・トンクからクラシックまで変幻自在な奏法を見せるが彼独自のスタイルというのはあまり感じられない。ちなみに彼が幾つかのインタヴュウにおいて、影響を受けたと名前を挙げたピアニストには以下のような人達がいる——ファッツ・ウォーラー（ジェームス・P・ジョンソンの影響下にあった'20〜'30年代のピアニスト。左手の動きに特徴のあるスライド奏法で知られる)、フロイド・クレーマー（ホンキー・トンク・タッチのピアノが有名)、アンドレ・プレビン（ジャズとクラシックの両分野で活躍した）等。また、実際の演奏力からはビル・エヴァンス、キース・ジャレットらの影響も感じられる。エマーソンを語る時に忘れられないのがシンセサイザーである。シンセサイザー（ムーグ）が非常に単純であった最初期の段階からその可能性に注目し、その発展に即して次々に独自のサウンドを作り出し自らの音楽の幅を広げていった。ポリフォニック以前の時代におけるそうした作業は試行錯誤の繰り返しであり、多大な時間を要したものと思われる。



NICE そして EMERSON LAKE & PALMERへ

NICE、そしてEMERSON LAKE & PALMER はキース・エマーソンという卓越した技術を持ったプレイヤーを主たる素材として音楽活動を行ったグループである。そして、エマーソンのキーボード・プレイヤーとしての技量は、「ニュー・ロック」の時代にともに活躍した多くのミュージシャンとは異なり、全ての面で成長、高度化した「プログレッシヴ・ロック」の時代においてもそれを武器に出来る程に卓越していたのである。

NICE時代、エマーソンはクラシック及びジャズに対する教養と卓越した演奏力をバックにクラシックやジャズの要素を次々にロック・ミュージックの中に取り入れていった。クラシックのオーケストラと共演するなど、彼もそうした方法で新しいタイプの音楽を作り出せるのではないかと思っていたのであろう。当時のロックと比較して、音楽的にも技術的にも遥かに高度でクラシカルな、あるいはジャズィな演奏をロック・ミュージシャンが行なっただけで価値があり話題となった時代である。こうした意味においてはエマーソンの試みは成功だったと言えるかもしれない。しかし、ジャズ的な部分では未だしも、ことクラシックに関しては単純なリズム・セクションをバックにエマーソンがクラシックの曲のフレーズをテクニカルに演奏するという非常に表層的融合であった。ただ、こうした試みがロックの発展にとって重要な意味を持っていたこと、そして、それがエマーソンという素材をもってしてのみ可能であったということは忘れてはならない。

NICEという枠組みに限界を感じたエマーソンはグループを解散、新たにグレッグ・レイク、カール・パーマーとEMERSON, LAKE & PALMER（ELP）を結成した。NICEと比べた場合、ELPはかなりスケールの大きなグループである。「Lucky Man」「C'est La Vie」に代表されるようにグレッグ・レイクにはメロディ・メーカーとしての才能があり、ヴォーカリストとしても独特のスタイルを持っていた。また、ベーシストとしてのプレイも安定したものと言える。一方、カール・パーマーも、多少の問題はあったものの、あのエマーソンのスタイルに合わせられるドラマーが当時何人いたかということを考えれば、有能な人材であったと言えるだろう。多少の無理を覚悟してNICEとELPを料理に喩(たと)えると、ともにエマーソンという最良の素材を使っているが、NICEが刺身（エマーソン）を中心にした日本料理の小鉢であるのに対して、ELPはフランス料理の皿と言えるのではないだろうか。素材の良さを殺すことなくソースで味付けしてより一層の旨味を引き出しているのがELPである。グループという観点から見れば後者の方がより優れたものであるのは言うまでもない。「Works」（1〜3面）という各メンバーが個々に作った作品を集めた特殊なアルバムと比較して他のアルバムを聴けば、ELPの音楽が3人のメンバーの一体化した結果であり、決してマエーソンひとりのものではないことが分かるだろう。また、彼らはバルトーク、ムソルグスキー、コープランド等、クラシックの曲を幾つか題材として使っている。しかし、非常によく知られた一部のものを除けば、どの部分、どの曲がそうしたものであり、どの部分、どの曲がオリジナルであるのか、仲々区別がつきにくい。これは彼らがそれらの題材を掌中のものとして使いこなし、無理なく自らの音楽に取込んだ結果であり、融合としてはかなりハイ・レヴェルのものと言える。





EMERSON, LAKE & PALMER はキース・エマーソンというジャズ及びクラシックにも造詣のある名キーボード・プレイヤーを擁し、ロック・プレイヤーとしての究極の姿の一つを示すとともに、ロックの限界を技術的、音楽的に大きく広げたグループである。

キース・エマーソン来日パフォーマンス

賀川雅彦



EMERSOM, LAKE & PALMER の東京公演を見てからほぼ18年の月日が経った。当時の我国のプログレッシヴ・ロックに対する認識を垣間見るためにコンサートの様子を改めてリポートしてみたい。

公演は72年7月22日(土)、会場は後楽園球場。前年、GRAND FUNK のコンサートを同じ場所で見た僕には不適当な会場のように思えた。アルバム「展覧会の絵」を大ヒットさせ、「ナットロッカー」を洋楽シングルのベスト10に送り込んだ彼らは人気の絶頂にあり、横尾忠則が公演のポスターを描いた。また、公演前に各地方でフィルム・コンサートが開かれ、ほぼ全てのメジャー音楽誌が彼らの記事を掲載した。その盛り上がりは先日のマドンナほどではないにしてもかなりのもので、正にメジャー・アーティストのそれであった。球場のスタンドをそのまま観客席として用いたため、ステージとの距離が遠いとの理由でS席はなし。A席2,300円が最良の席だった。なお、コンサート当日には東京12チャンネルによる放映（数時間遅れの録画中継）が予定されていた。

コンサートの当日、僕は2人の友人と会場に出掛けた。僕と1人は所謂ロック・マニアだったが、他の1人はラジオの音楽番組も聴く程度のファンで、ロック関係のレコードはほとんど持っていなかった。僕達の左隣の席にはかわいらしい中学生の女の子が2人座っていた。ステージを見てまず驚いたのはシンセサイザーの大きさ。まるで壁のようだった。しかし、いざコンサートが始まってみると、エマーソンの目まぐるしい操作と努力にもかかわらず、音は不安定でレコードと比べてかなりふらふらしたものであった。プロモーターの要請か必要以上に日本のファンを意識しすぎたせいか、エマーソンはかなりのオーヴァー・アクションであった。ナイフに換えてちゃちな日本刀の模造品をハモンドに突き刺したがうまく決まらず、また、シンセの端末を持ってステージを下り、球場のフィールドでそれを体の各部分に擦り付け音を出すというアクションを長時間に渡って繰り返していた。出て来る音はあまり変化のない単音で、僕にとっては全くつまらないものであった。このように、当時、EMERSON, LAKE & PALMER が大好きだった僕にはこのコンサートは決して満足のいくものではなかった。しかし、会場の多くのファンには大受けであった。当日唯一僕がエマーソンはやっぱり凄いと思ったピアノ・ソロの後、会場が一瞬しーんとしたのとは対照的に。後日行われた大阪公演ではファンがステージに向って雪崩込み、途中でコンサートが中止になったという。本当に大好きで心から期待していた EMERSON, LAKE & PALMER の日本公演。一体勘違いしていたのは僕だけなのであろうか。それとも……

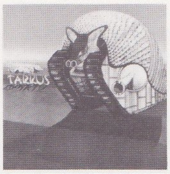
REVIEW



Emerson, Lake & Palmer

'70

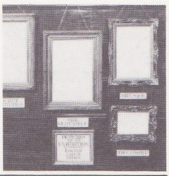
デビュウ作。同じトリオ編成ではあるが、NICE と比較してグループの質が格段に向上している。古典音楽、近代音楽、ジャズ等に精通したエマーソンの教養とレイクのメロディ・メイカーとしての才能が十分に発揮され、ファースト・アルバムながら、彼ら独自のサウンドを作り出すことに成功している。エマーソンのプレイヤーとしての力量は凄まじく、ピアノ、パイプ・オルガン、オルガン、クラヴィネットのいずれにおいてもヴァーチュオウゾぶりを見せつける。彼らの作品の中でも最もヴァラエティに富んだ内容であり、そこに多くの可能性が感じられる。（賀川）



Tarkus

'71

A面が組曲『Tarkus』、B面は軽い感じの小曲集となっている。A面はオルガンとシンセサイザーをメインとした力強くドラマティックな作品で彼らの代表作の一つと言える。ナイス以来実験を繰り返してきたシンセサイザーを非常に魅力的な楽器として使いこなした最初の作品でもある。また、エマーソンがオルガニストとして独自のスタイルを持った孤高の存在であることを再確認できる。レイクのヴォーカル・パートも印象的であり、サウンドをよりリリカルなものにしている。B面の小品も重みにこそ欠けるものの、彼らならではの味わいが感じられる。（賀川）



Pictures At An Exhibition

'72

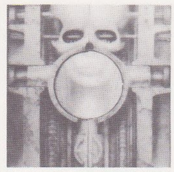
クラシックの作品を、ここまでワイルドにロック的処理でアレンジした例はほとんどない。ロックとクラシックがアグレッシヴに融合した稀な例である。音楽を形成する手法という点ではELP は正にプログレッシヴなグループであった。しかし、内的なプログレスというものとはあまり関係のないグループでもあったわけで、姿勢としては HR／HM と似たようなアプローチであった。そんな彼等のスタイルが端的に表現されたライヴ・ワークの記録が本作であり、当時、プログレッシヴ界に君臨した、他のグループとは次元の違うパフォーマンスを演じている。（山崎）



Trilogy

'72

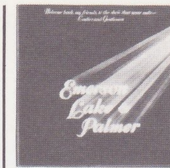
前作「展覧会の絵」が世界中でベスト・セラーとなり、最も人気が高かった時期に発表された作品。多くのファンを意識した明快で親しみ易い内容になるのではという事前の予想に反して、グループとして指向性を押し進めたやや実験的なものになっている。既にシンセサイザーを掌中のものとしたエマーソンはそれを如何に効果的に用いるかという視点から曲作り、アレンジにも大きな興味を持っていたものと思われる。こうしたこともあってか演奏自体は多少地味であるが、トータル的には凝ったものとなっており、聴き応えがある。（賀川）



Brain Salad Surgery

'73

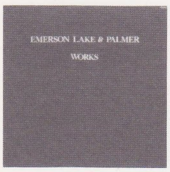
「恐怖の頭脳改革」という邦題がついた５枚目のアルバム。教会音楽調の『Jerusalem』、シンセサイザーを大胆に使ったパーカッシヴな『Toccata』、レイクのヴォーカルならではの『Still You Turn Me On』等いずれもよく練られた完成度の高い作品である。そして、彼らの集大成ともいうべき『悪の教典』。エマーソンがその実力をフルに出しきってオルガン、シンセ、ピアノを弾き捲っている。他の２人もそれについていくべく、力一杯のプレイを展開している。次の作品を発表するまでに３年以上の時を要したのも無理からぬほどの完成度を誇っている。（賀川）



Welcome Back My Friends To The Show That Never Ends, Ladies & Gentlemen

'74

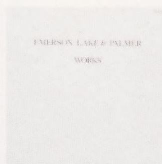
３枚組のライヴ盤。非常にハイ・レヴェルの出来であるが、数種類のブートレッグと比較した場合、必ずしもベストと言えないのが残念である。ファンの間では賛否両論があるが、彼らはライヴにおいてヴィジュアルな部分を非常に重視している。ロック以外のジャンルの音楽に精通したエマーソンがその担い手であることに彼のロック・ミュージシャンとしての意地が感じられる。しかし、レコードからはこうしたことが十分に伝わってこない。本作品の聴き所はエマーソンのピアノ・ソロであろう。プレイヤーとしての並々ならぬスケールを見せつける熱演である。（賀川）



Works

'77

本作は前作で一つの区切りを付けた彼等の新たなる方向性を模索した作品。A面キース・サイドはNICE時代にもオーケストラ共演を経験した彼が、クラシックに対し直接的アプローチを試みている。B面グレッグ・サイドは弾き語りによる歌物が中心。C面カール・サイドは様々なジャンルのリズムに挑戦。しかし各個人共に趣味の域を出ていない。グループとしてのD面は今迄のスタイルをライト感覚により踏襲しただけに過ぎなく行き詰まりを感じさせる。当時D①はプロモ・ヴィデオが制作されまたプロモ・レコードにはロンドン・フィルによる『奈落のボレロ』を収録。（吉野）



Works Vol. II

'77

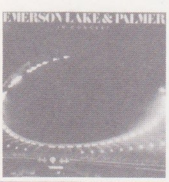
既発シングルのアルバム未収曲と前作アウト・テイクスから構成された作品。シングル関連ではA②が『エルサレム』のB面。A④は「頭脳改革」発表当時NMEの付録ソノシートとして発表され、後に前作D①のエディット・ヴァージョンのB面にも収録。B③はグレッグ名義のリリース、同じくB⑤はキース名義、そのシングルのB面が本作のA⑤。全12曲中５曲がシングル関連、残り７曲が未発表。グループ休止状態期に発売された本作の内容は当然前作の延長であり、結局ファンに向けてのサーヴィスと契約履行を目的としたとしか思えない。（吉野）



Love Beach

'78

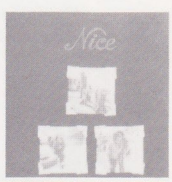
本作は'73年以来、約５年ぶりの三人とP・シンフィールドによるスタジオ録音のフル・アルバムとなっており、実質的ラスト作品でもある。A面は録音場所がバハマ諸島ナッソーである事も多少影響しているだろうが、彼等の特徴であったスケールのある攻撃性が無い。単にグレッグのヴォーカルを中心とした当時のマーケットを意識し、リラックスした音。B面でも割とピアノを多めに使った組曲形式を取っているが、往年の緊張感を保った演奏は聴かれない。次作はライヴ、そして'80年に最初のベスト盤をリリースした。後にグレッグはG・ムーアと組み２枚の作品を残す。（吉野）



In Concert

'79

大赤字で終わったと伝えられたラスト・ツアーの模様を収録した作品。A①に続きH・マンシーニのお馴染みA②と続くオープニングは意表を突いているが只それだけの事。A⑥は彼等にしては珍しいリフを中心とした展開、ステージ向きの曲。キースはB①を聴衆の前で演奏したい為に、自身のミュージシャン・エゴを押し通し50人近いオーケストラをこのツアーに同行させたと思われ、これが赤字の要因となる。B②はアレンジを変えている箇所もあり聴き所はあるが、ここでのオーケストラ導入（特に管楽器）はダイナミズムという面からはマイナスに作用している。（吉野）

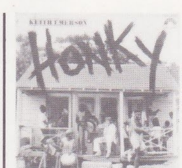


NICE

same

'69

NICEのサード・アルバム。A面がスタジオ録音、B面にはフィルモア・イーストでのライヴの一部が収録されている。A面の４曲はいずれもヴォーカル・パート入りの曲であるが、やはり聴き所はエマーソンのプレイに尽きる。ピアノ、オルガンを使い分け、クラシカルな、そして、ジャズィな演奏を展開するエマーソンと他の２人のメンバーとの間には、プレイヤーとして、力量に大きな差がある。一方、B面はライヴならではの熱気を感じさせるもので、演奏内容もシンプルかつよりロック的である。B①の『Rondo』はELPのライヴでも数多く演奏されている。（賀川）

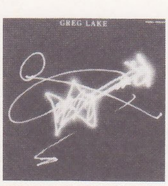


KEITH EMERSON

Honky

'79

キース・エマーソンの創り出した独自の音楽的イディオムはELP時代に開花したが、グループ解散後は不思議なことに、一つとして新しい手法は創られなかった。よって、以後のソロでは、EL&P時代に何らかの形で使われたイディオムを変型させているにすぎない。進歩的ではないが、ここでは以前の彼の作風が様々な形で再現し、ファンの耳を楽しませてくれる。肩の力を抜いて聴くことのできる小品集で、バロック・ピアノ、ホンキー・トンクはもちろん、「トリロジー」や「頭脳改革」のフレーズがパロディ風に変型して登場してくる。（山崎）



GREG LAKE

same

'81

「Works」のB面の延長上と言ってしまえばそれまでだが、それが全てのような気もする。A①を除き、ポップな曲とバラードを収録。A①はゲイリー・ムーアの曲だが、ヴォーカルがフィットしていない。救いはバラードだろう。メンツは、ゲイリー・ムーア、テッド・マッケンナ（dr）、トミー・アイアー（key、ex.RIFF RAFF）、新人（b）。以上がGREG LAKE BANDで、他にマイケル・ジャイルス等も参加。'81年のレディング・フェスに㊕ゲストで登場。『精神異常者』『エピタフ』を演奏、盛り上がるが、2nd「Manoeuvers」以降、自然消滅する。（川上）



EMERSON, LAKE & POWELL

'86

静かな佇いを見せる、とある農場の昼下がり。牛の乳しぼりを終えた経営者のエマーソンさん（４？）は思わず両手に持ったバケツを落として立ちつくした。彼がスタジオとして使用している納屋は、トラクターの暴走によって破壊されていた。これで新作のリリースが延びる。思えば不吉なプロローグだった。だが、この暴走トラクターより危険な男の存在に、彼はまだ気付いてはいなかった。再結成組が次々とポップ路線に走る中、あくまで"ELPの音"で勝負を賭けたのは彼の意地だったのだろうが、日本がこのNew ELPに与えた評価はスポーツ番組のBGMだった。（川上）



THREE

To The Power Of The Three

'87

'87年、コージー・パウエルが予定通り脱退し、New ELPは終わる。残った２人は、カール・パーマーを呼んでオリジナルELPを復活させるが、ほとんど何もしないまま分裂。グレッグ・レイクの代わりにG-TRの後進型であるNEROTRENDのロバート・ベリーを迎え、３を結成する。前のバンドでよほど懲りたのか、エマーソンの意地も後退し、ASIAもどきの産業ロックの乗りになっている。レーベルもゲフィンだから仕方ないか。アトランティック40周年記念コンサートで「Rondo」を演っていたが、他のZEP、YES、も含め、中年バンド受難ギグだったようだ。（川上）

PINK FLOYD

松本昌幸

PINK FLOYDという ソロイストとグループ

24年間、約4分の1世紀。PINK FLOYDは、良くも悪くも、アーティストである前に、似た趣味・志向性を持ち、意気投合しては分かち合える仲間であったことなくして、この24年間を紡ぎ出すことなど有りえなかっただろう。それでも、この10年来、ロジャー・ウォーターズとグループは、別行動を取り続けている。名は、デイヴ・ギルモア率いる現在のフロイドが継いでいるが、メンタリティー共にデビュウから「ウォール」プロジェクトに至る本来のベクトルを踏襲しているのは、明らかにロジャーだ。彼は現に「Radio Kaos」ツアーでもフロイド・ナンバーの数々を完璧にこなし、更にはグループ以上に新生面を見せるアレンジを施こし、しかも自からの「Radio Kaos」コンセプトに包み込んで演奏している。(ブートレッグやビデオで追える) このように、テクニカルな面を見てもしかりだし、今もって PINK FLOYD で有り続けるのは、ソロイスト、ロジャーであることは疑いようがない。ところが、分裂後に出た全てのアルバムを聴いても「狂気」や「ウォール」を超えるものは何一つないどころか、音楽的に二分されたような物足りなさが、双方共に残る。おまけに、それらが往年のフロイド路線ときたからには尚更だ。一体、あの集中力、質感は、どこへ行ってしまったというのか。極言すれば、PINK FLOYDは、4人の良き妥協の上にこそ最も彼ららしさが浮き彫りにされるタイプのアーティストだ。

シド・バレット幻覚

シド・バレット崇拝こそ、ジャーナリズムや風潮に潜在操作された誇大妄想、虚像過信の骨頂である。これには理由がないわけではない。確かに残された作品は、非常にナイーヴで機知に富んだものだ。ところが、「シドは発狂した」という決まり文句が、「天才」という二語にすり替わって「凄い!」の連呼だ。これで美化された虚像シド・バレットが出来上り、更にサイケデリック文化への回顧意識が重ねられる。そして、初期フロイドを非創造的な方向に導いた数々の奇行は神格化され、シドはピッタシ、トレード・マークだ。数々のインタヴューからも伺い知れるように、この"天才行為"の実像とは、非常に苦み走ったもので、誰よりもシド本人が一番顧みられたくない部分だろう。苦労話なのだ。短絡的に"天才"と省略される"綺麗"なものでもない。実はこれが、シド・バレット崇拝の言ってはならない暗黙の了解なのである。先ず、これを取り払わなければならない。そうしてこそ、彼の日常感覚に貫かれた、個としてのベーシックな部分「The Madcap Laughs」は、もう一度聴かれるべきだろう。そこには、シド・バレット崇拝から最も離れた所に居る、内向的で感受性の強そうな一人の青年が居るはずだ。熱に浮かれた感情移入ほど、真実味のないものはない。





PINK FLOYD、形而上分裂、第1回戦

「Ummagumma」が、この時である。もちろん、実際には分裂していない。なぜ、このアルバムは、ライヴ・アルバム(グループ作)とソロの寄せ集めによるパッケージ作なのか。デイヴはこう答えている。「ソロの作品をやりたがったのはリックだと思うな。俺たちが進みかけていた音楽的方向とか、その類のことについて、一番ぶつくさ言いがちだったのはあいつだからね。本物の音楽を作りたいとか言ってたな。そして『シシファス組曲』が出来上った。つまり、リック・ライトのソロ発案と強行こそが、製作動機である。そして表立ってはいないものの、この時期、彼らがステージで熱中していたコンセプト大曲「The Man」と「The Journey」が、遂に未完に終ったことの代償だったとも言えるだろう。そもそも、ライヴ録音という既存物と各人の関心事でパッケージすること自体、グループの有り方としては穴埋め仕事には違いない。が、これは反面でピュアな個人の精神を通し、自立性を促す。仮にグループを人間に例えるならば、このアルバムは思春期における情緒不安定が形をとったようなものだ。特にリックの『シシファス組曲』とニックの『統領のガーデン・パーティ』は、まさしく良き妥協の為の排泄物である。こうしたグループとしての未完な姿は、実はシド独裁が取りはずされかかった「神秘」にその青写真があり、「原子心母」中半にまで及んでいる。極言すれば、彼らは『Echoes』に至るまで、真の有機的結合が希薄だったグループなのである。そして「Ummagumma」は、具体的にはリックが先陣を切り、デイヴが嫌々ついていった形で、グループが見えない部分で分裂していた証明なのである。ちなみに第2の分裂は、「狂気」大成功の功罪による'74年の解散危機、第3の分裂は、「Wall」プロジェクトの中で表面化し、現に分裂してしまった。

小道具による ヴィジュアル効果

彼らこそ小道具の先駆者である。そして、これを使って彼らが究極的にねらったものとは、ヴィジュアル効果だった。つまるところ、'67年の"光と音を結びつける運動"は、様々な過程を踏んで、'79年に始まる「Wall」プロジェクトに極められたといっていいだろう。

ここで言う小道具とは、スライド、アジマス・コーディネイター(音群移動装置)、豚のバルーンといった定石の物はもちろんのこと、その他、ヒプノシスによるジャケット、音楽上における効果音やギミック奏法、そしてステージにおける、例えばデイヴをして「あんないい加減な仕事をしたことがない」と言わせた『アランのサイケデリック・ブレックファスト』演奏中でのティー・タイム、といった余りに短絡的で貧困な発想のパフォーマンスであり、ローラン・プティ・バレエ団との共演であり、ヴィジュアル面の関心が具体的な姿をとった数々の映画関与にまで及ぶ概念としてのそれ、彼らの音楽の性格とも言うべきヴィジュアル面を具現化する為の手段のことだ。こ

こに彼らの音楽性の特徴があり、指向性がよく読み取れる。彼ら自身には、強度の映像感覚と演劇性への関心が息づいているということだ。

カウンター・カルチャー期には、これが聴覚からの感覚異化―イメージによる解放―に結びつき、表立っては既成音楽形態の逸脱として、『神秘』や『ユージン、斧に気をつけろ』のような音楽性に形を現わした。やがて、それはロジャーによる心理分析と社会批判を感覚的に補強し、演出するものとなる。「アニマルズ」での三匹の鳴き声の各効果音などは、陳腐なまでにそれをよく示している。彼らの場合、この、意味内容を通じさせる為の音の置き替え、その短絡さが、余りに即物的で発想として稚拙だ。

しかし、究極は映画「Wall」だろう。ここにヴィジュアル効果の関心は、そのものずばりとなって示された。が、ロジャー自身も指摘するように、各場面ごとのインパクトが、互いに打ち消し合い、全体を窒息させてもいる。映画「Wall」は、映像の効果音でしかなかった「砂丘」や「雲の影」を遥かに超えてはいるものの、映画の生命力を大きく担う映像の前後相関関係が欠落していて、映画というよりは、ビデオ・クリップ集になってしまったのである。その先駆けと言えば、そうだが。そして、「Wall」と言うよりは、むしろ既に「Final Cut」に通じているものだ。結果の是非はさて置き、"光と音を結びつける運動"の精神は、こうして生き続けていることに変わりなく、それを最も試行錯誤してきたグループであることにも違いない。今もって根底には、音、音楽によるイメージの表出が、潜在しているとは言える。ただし、「狂気」以来の傾向として、言葉の力を取り込み始めたことで、かつてはイメージによる意識の解放を指向していた彼らの音楽性は、意味内容を伝えようとして、言葉というものが持つ直接・狭小さが、イメージの奔放さを殺し、時には単なる説明ともなって、音楽性の硬化を高めてきている。ニュー・ウェイヴ時代を経て、増々、彼らのこうした方向性とは相反する方向に向かった現在にあっては、もはやその精神も、PINK FLOYD の中でのみ生きるものであって、外へはほとんど通用しないものだ。



Pic.: Kees Nijtels

'70年代後半のPINK FLOYD

「狂気」を分岐点にして、それ以前の彼らは、'60年代後期の爆発の余韻を響かせた時代感覚が、そのまま彼らのものでもあったことで、まさしく分化したブリティッシュ・ロックの一つを象徴するものだった。厳密には、シド・バレット脱退後、「Echoes」（'71作曲）に至る期間のことだ。この期間、フロイド・サウンドにとって、リック・ライトの占めた割合は決して小さくない。『太陽讃歌』や『ユージン〜』など、この時期のフロイド・サウンドを代表する曲想で主役を握っているのは、まさしく彼のあやつるオルガンだった。

「狂気」（'73）は、彼らが時代の空気を吸い込んで、これを独自に体現した最後の作品である。この直後、翌'74年の解散危機を他のグループに照らし合わせてみると、KING CRIMSON；'74年の解散、GENESIS；'75年のピーター・ゲイブリエル脱退、EL&P；'75年の活動休止、YES；'74年の活動休止といった具合だ。ブリティッシュ・ロックにおける創造性の神(?)は、この時期、所謂プログレッシヴ・ロックから去った後、パンク、ニュー・ウェイヴに宿ったのである。そして所謂プログレッシヴ・ロック・グループが引きずってきた精神―'60年代後期の爆発に起因する精神―は、'70年代中半に置き去りにされたまま、グループが生き残れば残るほど、否応なく時代感覚から離されていった。この点で、唯一きっぱりと、解散という形で'70年代精神に見切りをつけ、'80年代イディオムで復活し得たクリムゾンは、偉大だったとしか言いようがない。この、時代認識を常に先取りしていたかのような端的さをして、時代を象徴しているのである。

'70年代型 K・CRIMSON 心中、GENESIS の性転換、EL&Pや YES の病弱化を導いた'70年代中半と、それ以後1990年の現在に至る期間、では PINK FLOYD がどのようであったかは、もう周知のとおりだ。以後のフロイドは、この期間を生き延びた者として、クリムゾンとは好対称の位置にあったと言える。時代の大きな流れの上で、カウンター・カルチャーによって形作られた'70年代イディオムの精神音楽―所謂プログレッシヴ・ロックをとらえる時、だからこそ、この期間の、特に'70年代中半からパンク、ニュー・ウェイヴ全盛期の'80年代初頭における PINK FLOYD の有り方は、更に紙面をさかれてもいいはずだ。では、数々の酷評を食らいながらも、所謂プログレッシヴ・ロック・グループの大半が腐っていく中で、「炎」（'75）「アニマルズ」（'77）「ウォール」（'79）が、大成功をおさめたのはなぜだろうか。

リック・ライトのオルガンは、時代の流れによって、'70年代中半に死亡させられたのである。彼のオルガンとは、フロイドにおける'70年代イディオムの象徴である。言い替えれば、カウンター・カルチャーによるイメージの表出は、既に時代感覚に取り込まれてしまったのである。時代は、これが日常感覚になるほど進んでしまったとも言えるだろう。デイヴのインタヴューによれば、リックはほとんど「Wall」に関与していない。そして'83年の「Final Cut」を待たずして、グループをクビになったのが、彼だった。

彼らの分岐点「狂気」以後、替って、ロジャーのコンセプトが常に優先されることになる。「狂気」以前との

差違が、このコンセプトである。そして、これこそが、彼らを生き延びさせ、成功させたと言えるだろう。ロジャーは、音、音楽によるイメージの表出を支柱にして、コンセプトという矢倉をたてることで、PINK FLOYDをパンク、ニュー・ウェイヴの波から守る結果となったのである。このコンセプトを通して、彼らは、最終的には個人に帰結する問題意識を外なる社会性に求めることで、内的発散の突破口を常に持ち続けていたからこそ、急速に個の意味が問いただされてきた時代の流れに同調できる余地を持っていたということだろう。つまり、個人の内面と社会との間を問題意識が通流する過程に、一応なりともPINK FLOYDは居たのである。「アニマルズ」の“人間は三種類のタイプに分類される”というコンセプト、「ウォール」の“個人は社会を形造る一個のレンガに過ぎない”とするコンセプト、更には、これらの事実上の出発点ともなった「狂気」の“月の裏側”にたとえられた意識＝自我の裏側━深層心理━といったコンセプトを持って、外の動きや流れに、アーティスト個人の内面意識が敏感だったところに、この時期を乗り越えた、そもそもの原因があったのではないかと思う。ただし、この強引な見解めいたコンセプトは、PINK FLOYDの音楽世界では有効に機能していても、時代の意識は、これを現実味の薄い作り事ととらえるほど、切迫し個人の日常レベルにまで達していたのだろう。社会性をおびた問題意識は、PINK FLOYDの虚構の世界に比喩としてあるのではなく、イギリスの現実の中に、誰もが認識できる目の前にあった。これをとらえた音楽ムーヴメントが、パンク、ニューウェイヴであったことは言うまでもない。そして、'70年代後半のPINK FLOYDを支えもした、このロジャーの個人意識は、更にエスカレートし、「Final Cut」で遂にデイヴとも対立して、グループとしては自滅してしまった。分裂は、PINK FLOYDの結成からこれまでの素性を追えば、やはり必然的結果だったと言わざるを得ないだろう。



Pic.: Kees Nijtels



Pic.: Kees Nijtels

再編？ PINK FLOYDの象徴性

'90年7月、ベルリンでロジャー・ウォーターズとPINK FLOYDが「Wall」を再現すると発表された。これが一時的な再編に終わるのかどうかは現時点では分らないものの、契機になる可能性は十分にあると思う。

　この発案は、昨年のベルリンの壁の崩壊以来、ロジャーがグループに働きかけてきたプロジェクトである。そもそも「Wall」のコンセプトは、断絶関係回復の構図だから、このモデルは、ベルリンの壁の崩壊を通して、社会・政治的に現実投影され、また、フロイド自身の身上にも投影される。そしてベルリン事情は、現在進行形の世界史を集約して、精神史の分化から再統合への新生をも意味するから、その壁の崩壊は内面統合の今日的な象徴で、フロイドの「Wall」の意味合いは更に具体化されることだろう。多分、現実の接点をもつ点で、'80年代初頭のステージとは質的な違いを含み得ると思う。

　ベルリンで「Wall」を行なうことは、歴史の祭典を装いながら、PINK FLOYDのメカニズムを露見させると同時に、もしかすると、時代性の流れを打ち明けているのかもしれない。彼らのメカニズムは、'70年代ムーヴメントの、音楽を媒体にした連帯意識を借りて、内面意識と社会性を通流させるものだ。音楽が個人言語となることで、純粋にイメージと同化・同質になる過程に、これは反していて連帯性の欺瞞を浮き出たせるが、しかし、散在する個人意識＝主観の内奥に潜むイメージの共通項が動きを持って集合化した時、時代意識が外（社会性）にも内（個人主観）にも形造づくられるのだとしたら、この集合イメージから外的仮像である社会性へと貫く比喩は、象徴性を持って現実を転写し得るように思う。蓄積され今日に至ったベルリン事情の歴史・精神的意味を思うと、この点で彼らのメカニズムは、同調して、時代性の流れを発動させる根源の個人内奥の普遍意識、その発動を代弁する指標なのかもしれない。恐らく、個人イメージとなった音楽が行き着く先は、主観ではとらえ切れない普遍性＝客観的自我の抽出に更に進むだろうと思うと、ここに連帯性の新生をも読み取れるから、地域単位、もしくは民族、思想単位で、これが外的に表面化してくるのではないかと思う。'70年代末の彼らを支えたのは、欺瞞めいた主観連帯の残響だったと言える、本質的に。ただし、形として内面性と社会性を通流させるメカニズムのようなものに合致する時、彼らの音楽性は音色、曲構成といった単なる流行の動きに左右されないところで真に注目を浴びるのかもしれない。その意味で「狂気」以来の盲目的な絶賛は除かれて見られるべきだと思う。真に彼らを問う時は。

　蛇足ながら、今年予定されている「Wall」公演に際して唐突な象徴性を一つ。ベルリンが分裂したのは、1948年、統合への象徴である壁崩しが1989年、つまり分裂後41年後の統合への現実的な一歩だ。西洋史を精神面で追うと大戦がヨーロッパ精神の導いた帰結であることは、哲学方面でも言及されるとおりである。ヨーロッパ精神の根底にはキリスト教精神があることも言及済みだ。キリスト教系思想では、数には意味があり、これは宗教、哲学などをも貫く深層心理学も解き明していることだ。真偽は分らない。41年。40という数字は、サタン分離数と言われ、未分化なものを対極の性質、例えば善と悪、陽と陰などに分離する数であるとされている。この数字が41年に非常に近いことと、ベルリン、強いてはドイツという国、大戦で明らかになったヨーロッパ精神の象徴という事実を照らし合わせ思うと、誰がしくんだのか、偶然とは思えないような謎がある。ベルリンというあらゆる意味での特質、象徴性の背景に歴然とした歴史蓄積があるからだ。この分離期間を経て統合するという裏には、目には見えない何かの復権のような意味合いを感じる。個人の策略では動かしようのないことだ。歴史の謎を感じさせる。

フロイド史，7つのツボ

松本昌幸

さて、アルバムや曲を出来、不出来といった個人的感想でみる以外に、いかにして産まれてきたかを、事実から裏付け、活動の証しとしてみた場合、フロイドのツボはどこにあるか？独断、七つのツボ。

その①「夜明けの口笛吹き」

活動歴の第１歩は、「シド・バレット＆PINK FLOYD」「UFO クラブ」「大音響を出し、スライドを使用するアンダーグラウンド・グループ」「光と音を結びつける運動」に集約される'66～'67年の活動だ。'66年10月11日、ロンドンのライヴ・ハウス、ラウンドハウスでのギグは、要点をかいつまめば、こうだ。「一人一人がやっと通れる入口では、幻覚剤が配られた。当夜は様々な格好をした人が集まった。アルミ箔の面や冠をつけたり、金粉をまぶす者、ゴリラのぬいぐるみ、軽騎兵の上着をつけている者など…。ポール・マッカートニーは、アラブ人の扮装で来ていたし、映画「欲望」を撮影中だったミケランジェロ・アントニオーニは、モニカ・ビッティと同伴だった。また、ブロンドの少女が修道女の服装をし、その裾はヒップさえ隠していなかった。この少女とは、マリアンヌ・フェイスフルである」。つまりゴッタ煮だ。その中でフロイドは「すさまじい音で不思議な音楽を演奏した。彼らの肌の上には、スライドが映り、ペンキのしずくが宇宙的な、あるいは古代調の織り目をなし、スポット・ライトは、ドラムに合わせてきらめいていた」（マイルス著「ピンク・フロイド」ＣＢＳソニー出版）と、これは想うにサイケデリック!!。そして、これをレポートしたのが、若き日のマイルス自身であり、当時、アングラ雑誌「IT」を主宰していた張本人なのだから、また楽しい。こぞって“サイケデリック”を体現していたわけだ。これが時代状況。

このアルバムは、彼らにとって結果物に違いない。これには二つの大きな理由がある。一つは、ブレインだったシド・バレットの才能は、'67年春頃以後、精神的に変調をきたすまでにすり切れており、同年夏に残骸処理されたのが、このアルバムであること。二つめは、彼らの活動を支えたUFO クラブの当時最も先鋭な耳々が、このアルバムを評して「フロイドのサウンドを適確に表現していないと感じた」とレポートされていることを裏付けるように、ロジャー自ら「自分たちでさえ聴いたことのない部分があるよ」とインタヴューに答えていること。新人にありがちな、プロデューサー（この時はノーマン・スミス）のコントロールによる、アーティストの製作（実像）とのズレをうかがわせる点で、このアルバムがつくられた一結果物の一性格を帯びているということか。実は。魅力の“ポップ色”とは何なのだろう。

その②『ユージン、斧に気をつけろ』

'68年６月10日 BBC、トップ・ギアー・ショーで演奏された「Murderlistic Woman」とは、このナンバーの原曲である。わずか２分半ほどの、気味の悪いオルガン・ソロを前面にした演奏だ。これが改名、アレンジされて'68年12月17日発売のシングルＢ面に公式収録されるが、何かにつけて顔を出す曲である。「ウマグマ」のライヴ・テイクやサントラ盤「砂丘」中の変名曲『51号の幻想』は有名なところとして、他にポール・ホワイトヘッドの映画「The Committe」中のテイクがあり、ずばり初期のスタンダード・ナンバーだ。たとえ『神秘』が、シドを抜きにしての初の即興曲であるとしても、『ユージン～』は、'68～'69年のフロイド・ミュージックの特異性である“映像的なサウンド”を最も具体化している点で、『神秘』の“記念すべき”という文句を越えて、象徴的な曲調だ。それは、サイケデリック感覚というよりは、スペース感覚、陶酔感覚と言うべきものだ。効果、ムードこそが曲の命であり、イマジネーションを広げる為の触媒である。

その③『原子心母』

アルバムではなくタイトル曲。“傑作”『原子心母』とは何か。「ウマグマ」以前のアルバムに差をつけるこの“傑作”の正体とは、冷静になれば、紛れもなく混声コーラスであり、管、弦楽器によるメロディー、音色であり、これらはロン・ギーシンの書いたスコア、そしてアレンジなのである。彼の有益な協力がなかった頃、この曲は『ユージン～』が３度のテーマを繰り返し、ソロとの対比を示すといった程度のものだった。『原子心母』とは、すなわち、脚色の勝利であり、製作経緯からしても異色であることは、サウンドの特異性にそのまま表われている。

その④『エコーズ』

「狂気」以前の基本作風がこれだ。全てを自らの手によって製作した分、それは、『原子心母』以上に顕著だ。「原子心母は、'70年４月から始まるアメリカ・ツアーの為の、やっつけ仕事だった」とニックが語るように、「あれ（原子心母）は、特別実習なのさ。完全な成功作とは言えない」と反省したのか、'71年に入るや１月４日からスタジオにこもる。そして断続的に７月まで続く。『エコーズ』は、こうしてスタジオ内でこねくり返されては、単発のライヴで試演された、実践を考慮してのナンバーである。この長大曲は、いかにもスタジオ・ワークらしく、断片をつなぎ合わせたパートごとのメリハリの強化が計られていることと、更に増して反復の度が強まっていることなど、彼ら独特の並列的な曲作りの頂点にある。収めれば５分にもなる曲の骨子が、延々と引き伸ばされた感は、しかし、単なる冗長さを通り越して、時間の流れを同時体験させる、新たな曲想とまで成り得ている。それは、型破りな斬新さとも、手の施しようのない行き詰りともとれるほどに至っているものには違いない。

その⑤「狂気」

数々のブートレッグを聴くと、レコーディング（'73年１月）以前の『狂気』とは、『ユージン―』から『原子心母』そして『エコーズ』へと複雑化、大曲化してきた彼ら独特の曲想、その延長にあることがよく解かる。しかし「狂気」とそれ以前との決定的な違いは、明確なコンセプトが、サウンドに先行して意味を持っている点だ。それは、そのまま歌詞の重要性をも初めてフロイド・サウンドにもたらせた。何より「狂気」の説得力は、曲内容を象徴した効果音の適所挿入がもたらすサンウドの簡略さ、そして現実や社会性にのびる人間心理といった万国共通のテーマをコンセプトに持つことの明晰さ、具体性の点にある。遂に、ムード「ユージンのあの斧には用心」ムード、に終わりを告げ、以後の発展と応用の布石になった。と同時に演奏から言葉へ、感化から強要へ、PINK FLOYD がロジャー・ウォーターズへ凝結されていく。

その⑥『狂ったダイアモンド』

シド脱退後、デイヴ・ギルモアなくしてフロイドはなかった。しかし、自作曲『でぶでよろよろの太陽』にせよ、彼の発案『原子心母』にせよ、彼本来の位置、ギタリストとしての特質を示すものではなかった。この曲は、トータル・コンセプトを打ち出すロジャーに対する、有能な代弁者としての彼の位置を知らしめたものだ。彼はこの曲で、従来のギミック奏法から離れ、彼のルーツになるブルーズを正攻法でもって、フロイド・サウンドの中に開花させている。冗長な流れにもかかわらず、引き伸ばしやムードに陥らないのも、彼の持つ懐の深いブルーズ感覚がもたらすメロディーのふくよかさと起伏感、そしてこれらが十二分に感情表現たり得る彼の力量に他ならない。この曲が初演された'74年のツアーでは、新たに『Raving & Drooling』とデイヴ作曲による『You've Gotta Be Crazy』も初演されていて、彼らはそのままこの３曲で新作を製作する意志を堅めていた。'75年初頭までは。が、この意向を最後まで貫こうとしたデイヴに対して、ロジャーは『狂ったダイアモンド』をのみ抜き出し、この曲をも取り込んだ新たなコンセプトを持ち出した。これが「炎」である。このアルバムの弱さは、明らかに『狂ったダイアモンド』と、これに挟まれた三つの新曲との間の、ちぐはぐな質感、重量感のギャップに帰因しているが、全ては、この企画崩れの経緯に由来する。こうしたコンセプトの変更にもかかわらず、一曲『狂ったダイアモンド』のみが、初演以来まったく曲想に変化がないのも、デイヴの演奏の果たすインパクトが、この曲の命であることに他ならないことを示しているとも言えそうだ。しかし、だからと言って、大局であるコンセプトを決定したわけではなかった。この冗長で沈うつなムードが、ロジャーの新たな発案の契機になった事実を前にしても、この曲のインパクトですら、新たなコンセプトに吸収されたことには違いない。あらゆる意味で、この曲は、デイヴの力量がフロイド・ミュージック中、最も発揮された部分だとは言える反面で、彼は所詮プレイヤー以上の何者でもない限界をも明らかにしている。

その⑦「ウォール」

「ウォール」はメロディや構成といった音楽上の気配り以前に、ロジャーの偏執狂的性格が、息使いも明確に隅々まで感じとれるほどに昇華され、しかもその先で、ステージ、映画へと、コンセプト具体化の為の空しい堂々巡りをする様を明らかにした。手法の違いによるコンセプトの深化は、残念ながらうかがえなかった。少しばかり、ピーター・ゲイブリエルの「幻惑のブロードウェイ」にも似た行き詰まりと、観念世界への踏み入れがある。念を押せば、「ウォール」とは、作品ではなく、それ自体が、“個人は社会を造る１個のレンガに過ぎない”という文句に集約されるコンセプトである。「ウォール」は、アルバム、ステージ、映画が等価にあり、各々がコンセプトを表現する為の手段になっている点で、「狂気」「炎」「アニマルズ」には水を開けている。例えばライヴ・ステージは、既成曲をステージ効果多彩に再現する所謂コンサートの域を突き抜けて、ステージそれ自体が独立した作品の意味を持つ次元にまで高められたものだ。ステージに巨大な壁を造り、恐らく視界的というよりも演劇的に進行するそれは、一個のドラマであり、プロモートの次元をも突き抜けていることなど言うまでもないことだ。全ステージにおいて、「ウォール」以外の演奏はなく、もちろんアンコールもなかった。ドラマたる完結性を示すものだ。更にロジャーは、セールス上、切られてしまったLP １枚分のピースをソロ・アルバム「ファイナル・カット」とし、グループであるべき必然性のかけらも感じさせないほど、誠実で正直な個人的見解、価値感に「狂気」以後の PINK FLOYD の方向性を凝縮させて、非常に質の高い音楽性を確立した。音や音楽が良い悪いといった全世界各々の個人的感想とは、まったく別の次元で。

ピンク・フロイド'69年の可能性

松本昌幸





'68年5月31日，アムステルダムFantasio Clubにおけるロジャー・ウォーターズとデイヴ・ギルモア。

Pic.: Cor Van Ingen

徹底した資料追求で'70年代中半にして一早く国内専門誌の草分けとなった「Rockin' Balls」には、'72年3月4日号ニュー・ミュージカル・エクスプレス紙が、その直後の4月から5月にかけて録音されるYESの新作について、「同年2月、ニューヨークのアカデミー・オブ・ミュージックでのライヴとの2枚組でリリースされる」、と報じた記事を掲載している。この新作とは「危機」だ。

今や一方で、グループの継続自体が惰性ともとられ、ナツメロ大会と化したステージに対して悪態をつかれるとしても、こうした独自の音楽を確立したアーティストたちですら、確立期に登りつめる過程には、様々な試行錯誤があったことを、我々は忘れがちである。彼らの新陳代謝の最も激しかった時期には、同じように様々な謎と経緯があり、それらはまた、プログレッシヴ・ロックを確立した彼らだからこそ、我々の関心を強く引くものだ。

PINK FLOYDがこの時期に相当する'69年とは、シド・バレット不偶による暗中模索と、その中から見出した第2の醒めを表立って伝える「神秘」('68)から、グループのサウンド、志向を'70年の「原子心母」へと確立していく期間である。少なくとも、表面上の事の順序はそうだ。が、この間にリリースされた「モア」('69年7月22日発表)、「ウマグマ」(同年10月25日発表)と、ブートレッグやライヴ・テープ、もしくは記述資料から知り得る'69年の実際の活動との間には、後の彼らからは想像もできない程の開きがあって、不可解なのである。5人のメンバーによって製作された「神秘」が、過渡期の産物故にまとまりに欠けるとしても、「モア」と「ウマグマ」におけるアルバム自体の決定的な個性欠落とは何を意味するのだろう。一般には、それを前者はサントラ故の、後者はライヴとソロのカップリング故の結果としていて、一方で真でもあるが、この時期の製作過程をインタヴュー記事から追うと、「モア」は、極言すれば、当時の彼らにとっては高額だった一人頭600ポンドの報酬あって、69年の7月以前のある8日間に録音されたものであり、一方、6月に録音された「ウマグマ」のスタジオ盤は、各メンバーが独自に製作した、いわばスタジオ・ワークである。いずれもライヴ活動とは直結しないのである。では、この時期におけるグループの活動とは、何だったのだろうか。ここにFLOYD'69年の大きな謎がある。

「Pink Floyd — The Journey Thru Time & Space」の著者、ジョン・ローゼンバーグによれば、'69年のライヴは54回確認できる。内8回のフェスティヴァル出演、8回のBBC、ビート・クラブ他でのライヴ・セッションも、この年の目立った特徴だ。しかし、残された音源は、知りうる限りで13公演分、コンサートの概様をつかめる資料となれば、更に少なくなる。その中で、ブートレッグとしても知り得る'69年の5回のギグを追うと、内2回に『The Man』という未発表曲が演奏されていることに気がつく。LP 1枚分に相当する大曲である。そればかりか、同時期の『Keep Smiling People』『Moonhead』といった気まぐれな即興とは異なり、人間の1日の生活を綴った明確なコンセプト曲である。このナンバーは、若干の形を変えながらも'69年4月14日の「オーキシモンの塊からもっと激しい狂気を」と題されたロンドン、ロイヤル・フェスティヴァル・ホール、同年5月12日のBBCトップ・ギア・ショウ、同年8月8日のプランプトン・フェスティヴァル、同年9月17日のアムステルダム、コンセルトボウ、更には'70年1月23日のパリ、サンゼリゼ劇場での各ライヴ録音と記述から確認できる。最も完全な形で残されたアムステルダムでのヴァージョンは、以下のパートから成っている。①Daybreak ②Biding My Time ③Doing It ④Sleep ⑤Cymbaline ⑥Labyrinth ⑦Green Is The Colour ⑧Careful With That Axe, Eugene ⑨The Narrow Way Part 3

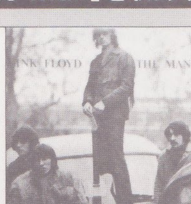
このナンバーの特徴とは、⑤がショート・ヴァージョンであること、『グランチェスターの牧場』の変名(原曲名)である①、そして②や⑨(風の効果音を初めて使用したナンバー)が含まれていることがそれだ。そして何より、デイヴ・ギルモアの、未発表曲『Embryo』に関するインタヴューに興味深い発言がある。次のものだ。「未完成のエンブリヨを演ったのはあるコンサートの時で、もともとは“The Man And The Journey”とかなんとか呼ばれてたな。で、そのショウのアルバムを作ろうって話が持ち上がったことがあるんだ。でも結局はそうしなかった。既にレコードにした曲からピック・アップしたものが多かったっていうのが、主な理由だね」(カール・ダラス著「ピンク・フロイド」CBSソニー出版)。

つまり、謎とは可能性のことである。極めて確証のある推測として、もしも、バルベ・シュローダーが「モア」のサントラを依頼しなかったならば、あるいは、リック・ライトがソロ製作を押し通さなければ、「モア」と「ウマグマ」の替わりに、彼らは'69年にして「狂気」に先行した、そしてロック界において、WHOの「トミー」に並ぶ初の完全なトータル・コンセプト・アルバムを製作した可能性があった、ということだ。しかも、プログレッシヴ・ロックという言葉に相当するサウンドでもって。仮に『天の支配』や『太陽讃歌』『星空のドライヴ』といった既存曲による構成のステージが通常であったとしても、'69年の彼らの関心の中心は、『The Man』であり、やはり未発表曲に終った『The Journey』だったことは確かだ。この時期の新たなコンセプトだったからである。そして、それは『原子心母』が、『エコーズ』が、何より『狂気』が、スタジオ盤として収められていった過程によく似ている。「モア」と「ウマグマ」の決定的な個性欠如は、幻のアルバム「The Man」に起因している、という見方は的をはずしてはいないように思えるのだが…。ここに言わずと知れた彼らのアルバム作りの原点がある。

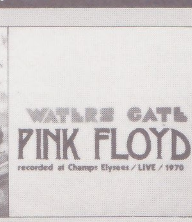
＝未発表曲「The Man」を収録するブートレッグ＝



『Live 1967-68』
'69.5.12, BBC Top Gear, London (Side D)



『The Man』'69.9.17, Concertgebouw, Amsterdam



『Water's Gate』'70.1.23, Theatre De Comedie Champs Elysee, Paris (Side A)





The Piper At The Gates Of Dawn

'67

シド・バレット＆PINK FLOYDの唯一の作品。エフェクト効果がたっぷりと抽入された、恐ろしく'60年代後期ブリティッシュ・ポップス寄りの曲が並ぶ。唯一、「星空のドライヴ」が、ライヴでの実験精神を伝えそうだが、これですらスライド効果なしには、単なる即興をまとめた域を出ない。これらのギャップは、3分間のヒットと音楽による冒険との狭間を揺れ動いていたこの時期の彼らを浮き彫りにしてもいる。シドの愛らしいメロディーが、冴える『Scarecrow』、同時期のヒット・シングル『エミリーはプレイガール』、サイケデリアのテーマ曲『Arnold Lane』などは真に佳曲。（松本）



A Saucerful Of Secrets

'68

5人のフロイドによる唯一の作品。初期フロイドが、音楽上BEATLESの亜流であることを示す『Corporal Clegg』と、イメージの音像化を計った『太陽讃歌』や本作中、唯一、スタジオ内での即興から起こされた『神秘』といった新旧の音楽性が同居している他、この頃にしか聴くことのできない『追想』『See-Saw』といったリックのラヴ・ソングも収録。おかげで、アルバムとしては非常にまとまりに欠けるが、ようやく各人が自立し始めた息吹きのようなものが感じ取れる。新加入のデイヴは、本作、この時期のライヴともに、まだグループのサポートの域を出ていない。（松本）



More

'69

バルベ・シュローデル監督の依頼を受け製作されたサントラ盤。この話が入ったことで「The Man」は製作未遂に終わったと見てよいだろう。内2曲は、その大曲に収められる前に本作に収録、発表されたもの。他に「Up The Khyber」が、この頃の『星空のドライヴ』のライヴ・ヴァージョン中間部を再録したものなど、さすが7日間のやっつけ仕事である。曲想は全作品中、最も多岐に及んでいる。幻想的なイメージを醸し出す『Cirrus Minor』などの佳作もあるが、演奏ともに荒さが目立つ。むしろ'69年〜'70年は、ライヴでのイメージ豊かなサウンドにこそ、彼らの姿が集約されている。（松本）



Ummagumma

'69

A・B面のライヴが、この頃の通常スタイルだ。この陶酔感が充満するような曲想は、「Wall」の彼らとはまるで別人のように思えることだろう。音に身をまかせてイメージを開くといった聴かれ方をされるべき時代の産物ではあるが。一方、スタジオ・サイドは、各人が趣味に走っていて更に実験色が強い。圧巻はリックの『シシファス組曲』。彼はラヴ・ソングを書く一方で、こうしたコンクレート調のクラシカル・ナンバーを書いていて、「砂丘」の没テイク『Oenone』などもそのたぐい。グループが急成長していく際の斬新さが、そのままイマジネイティヴな曲想に表れている好作品だ。（松本）



Atom Heart Mother

'70

「神秘」や「モア」でヒプノシスが果たした視覚効果は、音以上のものだったが、本作のそれは"幻想性"の逆を突くことで、フロイドに対する一般認識との間のバランスを崩し、新鮮味を与えた。しかし、これを元に戻してしまったのが邦題「原子心母」だった、このカラクリは面白い。この大曲は、ロン・ギーシンの成果であり、クラシカル・ロックとは呼べないサウンドの希薄さがフロイドらしさでもある。非常にイギリス然としたアレンジの名曲？だ。むしろ小粒のソロ3曲の方が素直にまとまっている。ラスト曲は穴埋め曲だがイギリスの片田舎の朝、陽だまりを想起できる。（松本）



Relics

'71

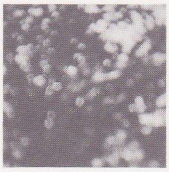
「原子心母」で一気に注目された情況を利用して？発表された自らの回顧録。ジャケットもニック自身。幻想サウンド・メイカーのもう一面をのぞかせるポップなシングル曲をも収録し、単なる編集盤には終わっていない。もちろん、間違ってもベスト盤ではない。アルバムとしては「モア」と同レベルのものだ。それでも『夢に消えるジュリア』『ユージン、斧に気をつけろ』などには、'68年のシド脱退の痛手から立ち直ろうとする創造力のみなぎりが感じられ、みずみずしい。できれば、『Point Me At The Sky』を収録してほしかった。入門編には向かないアルバム。（松本）



Meddle

'71

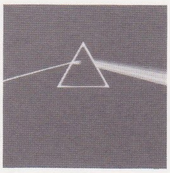
『吹けよ風、呼べよ嵐』と大曲『Echoes』を収録した彼らのポイントになる作品。遂にスタジオ・ワークの神様が、本領を発揮し始めたというべきアイデアの豊かさとテクニカル面の消化が、この2曲に凝縮されている。他には『A Pillow Of Winds』といった肌目細かで非常に心地良いナンバーを筆頭にアコースティック・ギターをいかした素直な小曲を収録。簡潔明瞭なアルバム構成。テクニックも向上していて親しみ易さも増した。そして古手のファンには来日記念盤として、懐かしの1枚に違いない。最初、本作が「Return Of The Sons Of Nothing」と呼ばれていたことは有名。（松本）



Obscured By Clouds

'72

映画自体は、さほど大したものではない。各曲は単なるバック・サウンドであり、むしろ映画と切り離して聴かれた方が、音の繊細さを読み取れそうだ。「モア」とは比較にならないほど練られている。アコースティックな曲が多いので地味な印象を受けがちだが、メロディーも申し分なく腰のすわった演奏だ。かすれた歌声、ハモンドの響きなども融合感があって、気持ちが柔らぐ。A①はテーマ曲。シンセサイザーを本格的に用いていて実は異色。佳曲ぞろいだと思う。確かに「おせっかい」の応用編という点で印象は薄いが。この頃、彼らはステージで「狂気」に熱中していた。（松本）



The Dark Side Of The Moon

'73

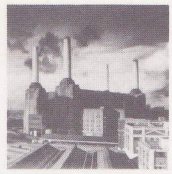
まず彼らの傑作だと言う前に、この作品がプログレッシヴ・ロックを認知させた偉業を評価されるべきだ。流行でもネーム・ヴァリューによってでもなく、純音楽的にカウンター・カルチャーの精神が結実したことによって終わりを告げたのである。時代精神の分岐点が本作である。複雑さ、緻密さの簡略によるポピュラリティが、時代を越えさせる。そこには深層イメージが潜み、象徴的効果音が駆使され、メロディが練られ、有機的に詩やジャケットを絡めていく。これ以上の適確さはなく、あらゆる音配慮と計算を極め切った末の明確さが不滅だ。不朽の作の一つ。（松本）



Wish You Were Here

'75

「狂気」の思わぬ大成功は、未完作「Household Objects」を産んだ他、グループを崩壊直前へとまで導いた。PINK FLOYDというネームが一人歩きし始めた事で、この個人的感傷のムードが産まれてきたと言ってもいいだろう。雰囲気を表現手段として操れる力量は完璧に近く、「狂ったダイアモンド」でのブルーズの変容などは、他のどんなグループも演り遂げたことのない域である。この作品の分り易さは、全て感情に由来するメロディー、詩にある。その率直さである。その点で人間味が感じられ人気がある。ヒプノシスのデザインは更に過激に、独自の世界を持つ程だ。(松本)



Animals

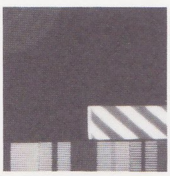
'77

曲構成、テーマとも全作品中、最も明解である。「アニマルズは炎よりもウォールに近い」とロジャーが答えたように、「炎」の自白的自己確認といったきわどさは少なく、明確な社会性をテーマに、たとえ話の中に洞察を盛り込むある種よそよそしさを感じさせる。力強く外向的なサウンドに、当時話題が集まった。その実、「炎」のように感情移入されて聴かれることが少なかった。完成度の高さでは「狂気」をもしのぐが、誇張されたテーマが曲をもしめこむような堅さが表立って打ち出されているためか、コンセプト作であるべきことの不自由さ、無理が時として鼻につくかもしれない。(松本)

The Wall

'79

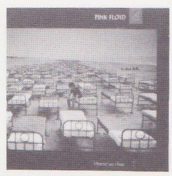
ロジャーのPINK FLOYDによる総決算。「炎」以後のサウンド傾向を継ぎ、物語は劇化されているが、内面的だ。各曲は物語に代替された(演出された)コンセプトを形造る構成部分として働いていて、曲単位で抜き出すと、これまでの彼らの音楽性を各々に活かしたシンプルさ・凝縮感があって濃密だ。従って重厚感も自然に出ている。しかも練られた末のポップさをも伴っている。ロジャーの偏執的性格がつけ入るすきなく行き届いているため、のめり込むと聴く者を抜け出せない甘美な重苦しさにとらえるフロイド・サウンド・メカニズムの完成作である。分り易さの中に毒がある。(松本)



The Final Cut

'83

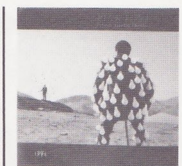
3枚組のはずだった「Wall」の商業上カットされた1枚ながら、更にロジャーの個人的な色相いを打ち出すことで、「Wall」の陽に対する陰としてあるのが、本作である。そのため、一聴すると「Wall」には似ないサウンド傾向だ。が、両作品の真中に映画「Wall」を組み込むと、一続きのコンセプトとしてとらえられる。「Wall」の重苦しさを抽出して作られたような陰うつなムードが、荒涼とした音空間を作り出し、この掘り下げの度には聴く者を寄せつけないロジャーの内面性の塗り込みがある。超フロイド・ファンが狂喜し、初心者が拒絶する作品。凡ファンは今一と言うはず。(松本)



A Momentary Lapse Of Reason

'87

ロジャーの偏執さなくしてフロイドは有り得ない。ここに有るのはペルソナであり、フロイドを装ったデイヴのソロである。彼が分裂以前の音楽性をロジャー抜きで踏襲しようとする意思が、新生フロイドというものを邪魔しているとも、これがデイヴのPINK FLOYDだとも言える。イマジネイティヴな響きは機材の進歩を抜きにすれば、同時代というよりも、「炎」から「Wall」に至るもの。ストレートな曲想は、彼のソロ・ワークのものだ。十分に彼のブルーズの持ち味が活かされてはいるものの、往年の有機的な絡みによる質感はない。この質感の代替がまだ打ち出されていない。(松本)



Delicate Sound Of Thunder

'88

初の完全なライブ・アルバム。同時に自ら往年を模倣したかのような音楽性、そして製作だ。気を吐くデイヴのギターとヴォーカル、これが現在のフロイドであり、音楽産業を動かすPINK FLOYDという実体のないネームこそが、その正体である。個人の創造性を問うことは不毛であり、存在自体が現在の彼らの意味である。この重量感、有ることの意味は、R・STONESというものと同義だ。落ち着いた聴き易さ一色である。フロイド色のみで成り立つ音楽性だ。前作と往年の代表曲を収録。かつては、L・ZEPPELINなどとは比べようもないほどライヴをこなしていた事実も忘れられている。(松本)

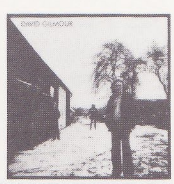


SYD BARRETT

The Madcap Laughs

'69

'70年代初頭に音楽活動を離れて以来、今や噂すらも流れない伝説の人となった。彼が最も創作力を漲らせた'66〜'67年前半も、今や美化意識によって引用の被写体になった。20年以上を経て今、彼をフロイドのメンバーの一人だった事実に帰してもいいだろう。ヒプノシスの、シドの心理をえぐり出した視覚描写は圧巻だ。このソロ処女作は純個人的なだけに、彼の感覚が隅々にまで息づいていて、感性の裡のみで成り立つような音楽性が恐ろしく純粋だ。ナイーヴ過ぎて彼の感性の糸が切れそうなまでに鋭い。音の背後から伝わる閉鎖感にとらわれるほど、彼の心理発露は顕著だ。(松本)



DAVID GILMOUR

David Gilmour

'78

「狂気」以後、グループはロジャーのコンセプトが実践される場だったと言える。彼によって導かれた高完成度の結果の為に、そこに至るメンバー間の創作葛藤が、遂にグループの有り方への不満として流出して形となったのが、本作でありリックのファースト・ソロだ。だから外見上、フロイド色そのものだが、決定的な重味がない。本作こそデイヴによる新生フロイドの原点であり、この路線拡大が「うつ」である。その点で鎖から解き放たれた処女作らしいナイーヴさが先立つ。純だ。A①の意味内容の希薄さは、フロイド音だけに意外で新鮮だ。内省的な軽さ、これが彼だ。(松本)

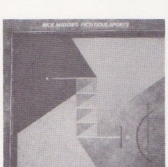


RICHARD WRIGHT

Wet Dreams

'78

グループの高完成度のもう一つの代償が本作である。デイヴとリックが、最初にソロを発表したことは、グループが「アニマルズ」に代表されるロジャーの意思のものであることを思えば、当然のことだ。しかもグループのサウンド面を担ったのは、デイヴとリックだったのだから。これらソロの伏線は「炎」である。それはロジャーのコンセプトが弱まった時だった。その為の音楽的補償を担って、デイヴは音楽自我を開花させたが、リックはそれまでの音楽性の終着点だったところに、後の両者の活動差がある。よってデイヴのソロに近い。フロイド路線。次作より方向性を変えた。(松本)

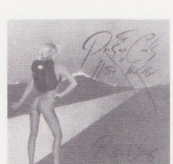


NICK MASON

The Fictitious Sports

'81

デイヴとリックがフロイドを担っていたのに対し、ニックは最もソロというものを自覚していた節すら思わせる。唯一、フロイドという準拠集団に対して客観的視点を持ち得た彼の天性が結実した一作である。こうして適所(ソロ)で趣味に存分走れる身軽さこそが、グループに欠けているものだ。これが応用力につながるからだ。彼はこの能力を'70年代のプロデューサー業を通じて養ったに違いない。「Wall」期にカーラ・ブレイらジャズ面と原点に戻って創作力を発揮できた余裕が、逆にロジャーのグループへの貫徹力を浮き出たせる。カンタベリー・ジャズ色濃厚。さすがだ。(松本)



ROGER WATERS

The Pros And Cons Of Hitchhiking

'84

分裂後の彼らの活動は、ロジャーとデイヴに二極化された。「狂気」以後の流れを追うと、PINK FLOYDを脱退したのは、まさしく現在のフロイドであることも一目瞭然だ。大プロジェクト「Wall」を成し遂げた後のロジャーの脱力感が伝わる好作である。一人に帰った時、「Wall」の余韻が響く、といった作風だ。それが、いかにあのコンセプトが彼にとって全力を尽くした関心事だったかを解き明かす。非常に純個人的な内容である。従って内省さが通っていて、それは「ファイナル・カット」とも異質なものだ。彼の溜息が音になったような印象を受ける。彼が生きるフロイドである。(松本)

YES

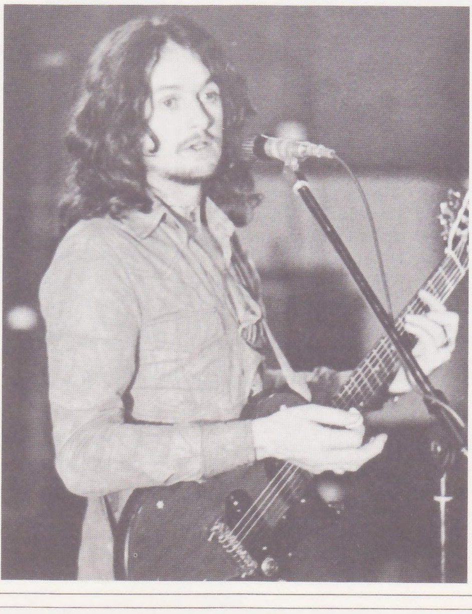
中野泰博



YES はフリップの KING CRIMSON やピーター・ハミルの VDGG とは異り、ひとりのカリスマによるバンドでは無かった。アンダーソンがコンセプト・メーカーではあるが彼はインタヴュー等からうかがえるように善人と言うか、押しの弱い人間で、他のメンバーを統率する才能には欠けていたようだ。

ファースト、セカンドあたりではYES は独自の音楽性を固めておらず、わずかにヴォーカル・パートやスクワイアのベース・フレーズにクセを見つける事が出来るが、それも全盛期と比較しての話である。この2作で確認出来るのは YES はその根本においてロック・バンドだった事だ。後の傑作群により、プログレッシヴ又はシンフォニック等と呼ばれて行くのだが、他のバンドと比べなくとも彼らの音楽はロック色が濃い。

サードにおいて初めて7〜8分という当時においては長時間の曲に着手した訳だが、曲自体の構成は割と単純である。彼らが試みたのはアレンジ・ワークの方で、中心となるべきフレーズを変奏して行く過程で、結局全員が原曲から離れてしまい、それゆえに複雑に聞こえるという効果を出した。偶然にか意図的にか、作品を重ねる毎にこの傾向は加速し、ひとつのスタイルを作り上げた。彼らの楽器演奏技術はロック・バンドとしては超一流の部類で、それゆえ演奏における自己主張も強力である。通常のバンド形体の「バッキング」部がほとんど無く、二重三重に交錯する各楽器のリード・パートを解読するのは、YES の音楽を聴く時の醍醐味である。こうした手法にとってリック・ウェイクマンのマルチ・キーボードによる音色の増加はそのまま、音楽のスケール・アップに直結し、「こわれもの」「危機」の傑作を生んだ。この後のビル・ブルッフォードからアラン・ホワイトの交代はファンの中にも不満の声が高い。たしかにミュージシャンとしてはブルッフォードの変拍子ドラムは、YES の他のメンバーと互角にわたり合い、時には進行の中枢をなしていたし、対するホワイトは平凡なドラマーの域を出る物では無い。しかし YES というバンド全体の音楽性を考えると、「危機」までの作品はハード・ロック色が濃く、「海洋地形学」、「リレイヤー」に見られる小節ごとの繊細さまでには至っていない。一見逆に見えるこの変化はホワイトのコントロール・タワーとしてのリズム・キープにある。ブルッフォード時代はドンカマ（リズムボックス）不在のため全員が完全な逸脱には至れず、曲自体の構成まで複雑化出来なかったのだ。「リレイヤー」の演奏を考えてほしい。あの曲のドラムスがブルッフォードだったら、多分事実上演奏は不可能だろう。（聴いてみたい気がするが）この変化に比べるとウェイクマンとパトリック・モラーツの交代は音楽性には大した影響を与えていないのが理解していただけるだろう。この後の「究極」までは安心して聴けるアルバムである。間にソロ・アルバムのシリーズがあり、各メンバーの YES における役割を良く表わしている。アンダーソンは予想通りコンセプチュアルにストーリーを展開しているが、演奏自体はあくまで雰囲気程度。ハウは様々なスタイルをモチーフとして、その中でのギター・プレイを披露しており、音楽的にも精神的にも、YES を感じる部分は少なく、YES においてもこの人は「ギタリスト」なんだと言う事を実感する。ホワイトに至っては当然のセッション・アルバムである。この時初めてクローズ・アップされたのが影のリーダー、スクワイ





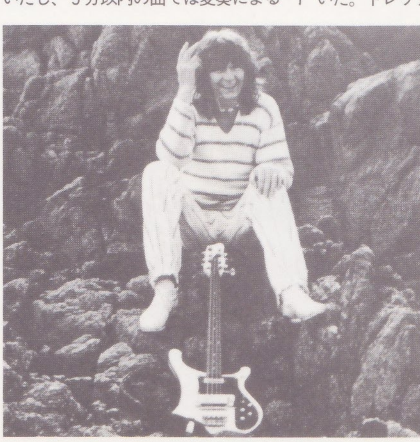
アだった。現在から見れば唯一のオリジナル・メンバーとして本家YESの看板を守っている人物なので、当然とも言えるが、一番イエスらしい音楽を作っていた。

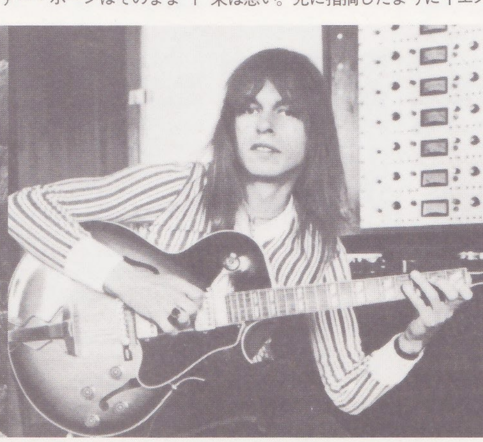
このチーム・ワークをくずしたのは誰あろうアンダーソン本人だった。問題作、「トーマト」においてである。ソロ・アルバムのブランク後、ウェイクマンの復帰によって見事にカムバックした時、時代はニュー・ウェイヴの最中であり、正直者アンダーソンはこの影響をモロにかぶってしまった。結果は全て裏目に出た。対象の明確な歌詞はかつての難解ゆえにイメージのふくらんだ作品よりあきらかに退化していたし、5分以内の曲では変奏による曲展開も出来ないうちに終ってしまった。わずかに音色のみ多少新しめになってはいるが、魅力は半減といった所か。実質上、このアルバムの後、イエスは分裂しており、この後の時期はYES として語りたくはない。ただし、アンダーソン脱退後の「ドラマ」はスクワイアとハウによる遠慮の無いアレンジとハード・ロック的ナンバーの復活で、全盛期の演奏をほうふつさせた作品となった。この時加入したトレヴァー・ホーンとジェフ・ダウンズのバグルス組だが、機械の進歩によりほとんど演奏上のマイナスが見られなかったし、ヴォーカルの録音に関しても気持の悪いほどアンダーソンに似ていた。トレヴァー・ホーンはそのままプロデューサーとしてスクワイアのYES に関わって行くのだが、同時に新レーベル ZTT を発足させ、「ロンリー・ハート」で用いたサンプリングを駆使してダミー・バンドを次々とヒット・チャートに送り込んだ。初期からシンセサイザーに取り組んでいただけあって彼は実の所、深いプログレ・コンプレックスを持っており、FRANKIE GOES TO HOLLYWOODのLP には『Wish You Are Here』という曲を入れていたし、ART OF NOISE の2作目は『Close To The Edit』というタイトルだった。

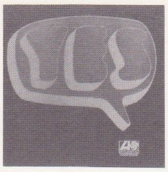
「トーマト」以後のグループ分裂により、アンダーソンはヴァンゲリスの共作シリーズ、ハウは ASIA から GTR、ウェイクマンはニュー・エイジ・ミュージックにまで至るソロ活動へと移行して行ったが、それぞれ発表した作品はほめられた内容を持ったものでは無い。個性がぶつかり合いながらも、全体は定規で計ったかのごとく完成されていた YES の音楽は、それを作り出した彼らにさえ、再び同じテンションの作品を生み出す事が出来なかった。

その後「ビッグ・ジェネレイター」を経て再び、アンダーソンの脱退があり、ABW&H 結成に至る。本家のスクワイア・イエスは名前の使用権についてのトラブルに勝ったものの、新作はリリースされていない。前作がさらにトレヴァー色の濃い作品だったため、今後の作品にしても想像の範囲内ではあろうが。ABW&H について筆者の見解を書くと今回のアルバムの出来は悪い。先に指摘したようにイエス・ミュージックの最大の魅力である「複合するリード・パート」が欠落しており、単なるアンダーソンのソロ作品を元メンバーがサポートした程度の出来である。もちろん、このメンバーで演奏される旧ナンバーはファンとして文句を言いたくないが。先の来日公演を含むツアーでは反則のサポート・メンバーを入れていた事自体、音楽性の低さを物語る物だろう。もちろん、これは YES だから言う注文である。だがアンダーソン自身はこのバンドを「YES」と自覚している様だし、だとしたらこれは「トーマト」の二の舞である。

さて、アルバム・レビューも含めいささか手厳しく彼らの音楽性と、その変化について書いてみたが熱心なファン諸氏にとっては多分文句をつけたくなる内容だったと思う。(それでも大分表現は柔らかくしたつもりだが) しかし初めて「危機」「こわれもの」を聴いて以来、その後の全てのアルバムを同時代で体験して来た筆者としては、彼らの音楽性、及び活動の遍歴を美化して書きたくはないのだ。安易に「天才」の冠をつけたがる世界ではあるが、彼らはあくまで努力型の人間の集合であり、その歴史の中半以降は試行錯誤がそのまま音にも表われていた。バンドとして昇り調子にあった'75年ぐらいまで、彼らは自己のミュージシャン・エゴを全てバンドにつぎ込む事によって、音楽自体が単なるパートの足し算ではない強力なマジックを創造出来た。(たとえばアンダーソンが、フィル・コリンズの半分でも器用さを持っていたらこんな複雑なバンド・ヒストリーにならずに済んだろうに。) バランスをくずした彼らは何度も建て直しを計り失敗 (長く続かないという事はやはり失敗なのだろう) して沈黙をくり返す事になった。彼らは同時代性を無視しなかったが、それに合わせる事も結局出来なかった訳だ。絶頂期の音楽だけで話を進め、その残り香を各作品に求めるだけの冷酷さを筆者は持ち合わせない。それよりも結果として失敗したにせよ、後期の各作品を制作するに至った誠実さを評価したい。筆者のフェイヴァリット・アルバムは「危機」でも「リレイヤー」でもなく「トーマト」である。



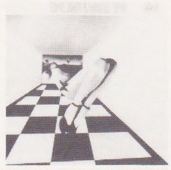




Yes

'69

デビュウ・アルバム。スクワイアのベースは音色、フレーズ共にほぼ現在のスタイルになっている。多少の大仰さがその後を感じさせるが曲自体の魅力も乏しい。YES は天才的なひらめきを持った一人の人間がリードして行くバンドでは無く努力形のバンドだという事が良くわかる。ブルッフォードのプレイにしても平凡な物だ。YES のアルバムを全部そろえる場合にのみ、最後に買えば良い物だろう。初期のアメリカ盤と日本盤のみ、メンバー写真を使用したジャケットでリリースされていた。作曲でクレジットされているベイリーとはオリジナル・メンバー。 (中野)



Time And A Word

'70

ファーストよりはだいぶ進歩の見られる作品。曲が良くなって来たがストリングスの導入はひとつもプラスになっていない。1曲目のスクワイアのリード・ベースは圧巻であるが、この後脱退するピーター・バンクスはフテクサレていたのかほとんど目立ったプレイをしていない。意地になってオルガンしか弾かないトニー・ケイのプレイは仲々良いと思う。A④、B④がその後にライヴで復活するナンバーだが、これもたいした出来ではない。この2曲にクレジットされているフォスターとはアンダーソンのいたWARRIORS のメンバー。 (中野)



The Yes Album

'71

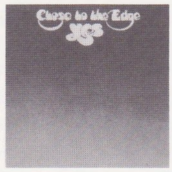
後期まで重要なレパートリーとなる曲を多く含むサード。YES の音楽と言えるのはここからだろう。ウェイクマン等のマルチ・キーボードのアレンジに比べると、トニー・ケイのオルガンはトーンが重く全体的にヘヴィな印象を残すが、アルバム単体を聴く場合、マイナスのイメージが無いのは、走り回るハウのギターと、ルートを弾かないスクワイアのアレンジのためだろう。初参加にして『クラップ』を入れるハウの性格には恐れ入る。一曲が長くなって来たが、曲自体は割と単純な構成で、ハード・ロックの進化形といった感があるが……。(中野)



Fragile

'71

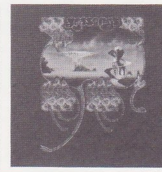
ロジャー・ディーンのファンタジックなカヴァー・アート、ウェイクマンの七色のキーボードを加え、YES 黄金期の始まりを告げる傑作。アンダーソンの誇大妄想的人間讃歌も、たたみかける各メンバーの細かなアレンジとハード・ロック的なスピード感のある曲展開により充分な説得力を持ち得た。各メンバーのソロ小品が入っているが単なる曲以外のものではない。A面の『南の空』は何故か一度もライヴ・テイクを聴いた事が無い。『ハート・オヴ・サンライズ』は現在に至るまで、ライヴで演奏され続けている代表曲だが、手の込んだ曲の割には感動は少ない。 (中野)



Close To The Edge

'72

代表作。どのパートのどの楽器をとり上げても聴き所があり、歌詞も含む大きな構成がラストまで走り頂天を迎えるタイトル・ナンバーでプログレの魅力にとりつかれた人も多いはず。『同志』は壮大なテーマの割には内容が伴わず、(アンダーソンの弱点をモロに出してしまったようだ。) 楽曲としての魅力には欠ける。個人的に『ラウンド・アバウト』より名曲だと思う『シベリアン・カートゥル』は短期間しかライヴでも演奏されていないが、この時期の YES のエッセンスを凝縮した好ナンバー。このアルバムは予約時にゴールド・ディスクとなっていたが、時代は変わるものである。 (中野)



Yessongs

'73

スタジオ作と変わらない演奏で当時のファンの度胆をぬいた3枚組ライヴ。ドラムのみブルッフォードとアラン・ホワイトの交代があるが他はベスト・メンバー。『危機』や『ラウンド・アバウト』のテイクも良いがファンとしてはサードの曲がウェイクマンのアレンジにより見事にイエス・サウンドとしてカラフルに仕上がっている所が聴きものだろう。当初2枚組の予定だった。もちろん、YES の演奏だからして他のロック・バンドと比べるとアドリブ・パートは少なく、曲自体は変わらないので、ライヴ用インストゥルメンツの音色で別ヴァージョンとして楽しむべきである。 (中野)



Tales From Topographic Oceans

'73

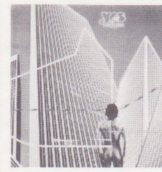
前作の成功に気を良くしたアンダーソンがさらに壮大なスケールでぶち上げた2枚組大作。スクワイアが最も難色を示したというだけあって、全体的にスピード感の欠ける出来ではあるが、構成はさらに細かくなりアレンジも極まっている。個々のプレイは様々に聴き所があるのだが、大きな曲をリードすべき流れが弱い所が決定打とならなかった理由だろう。『儀式』のみがその後のレパートリーとして残り他の3曲はこのアルバム発表時のツアー以外では演奏されていない。ホワイトがマトモなだけ、他のメンバーが好き勝手に演奏してしまった、といった所だろう。(中野)



Relayer

'74

REFUGEE からのパトリック・モラーツを加えての唯一のスタジオ作品。発表当時はあまりの細かくこみ入ったアレンジにより、曲が把握出来なかったためか、割と問題作扱いされたが、「海洋地形学」よりは整理された構成である。参加プレイヤーが火花をちらす演奏の『錯乱の扉』前半分は、イエスの作品中でも屈指の出来。B①は当時ステージのオープニング・ナンバーで、例によって『火の鳥』からのメドレー (?) で演奏されていた。彼らのナンバーの中でも最もヒステリックな曲。アンダーソン節のB②はしかたないとはいえ、アルバムの印象としてはマイナス。(中野)



Going For The One

'77

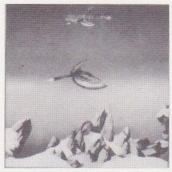
ソロ・シリーズの休止期間後、ウェイクマンの再加入による復帰第一作。オープニングのロックンロールに一瞬驚くが基本的には YES のアルバムになっている。3曲目は久々のスクワイア流ハード・ロック。4曲目はシングル・カットされまあまあのヒットとなった。目玉はラストの『アウェイクン』での互いに譲らない各楽器の衝突だろう。YES ならではの破綻したアンサンブルが異様なテンションを創出している。ジャケットはついにロジャー・ディーンからヒプノシスにバトン・タッチ。変形ジャケットだが必然性はないのでは…。 (中野)



Tormato

'78

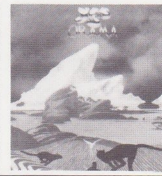
時代はニュー・ウェイヴの最中、新しい音色と価値観を誰もが求めていた。心ある音楽家は多少なりとも同時代性を意識せざるを得ない状況にあった訳だが、ここへ来てアンダーソンの善人性が裏目に出てしまった。短い曲では YES の持ち味である各パートのバトルが展開出来ず、対象が具体的な歌詩は失笑さえもらされてしまった。平均以上の曲は④と⑧ぐらいの物。録音、音色は近代的になっているのだが、全盛期の魅力は半減している。結局この後にグループは分裂、実質上、YES のラスト・アルバムと言えるだろう。 (中野)



Yesshows

'80

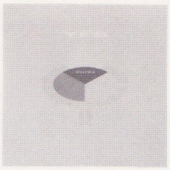
ふたたび暗礁に乗り上げた YES のライヴ2作目。予定より一年以上も遅れてリリースされた。『錯乱の扉』『儀式』のふたつの大曲を収録。この二曲のみパトリック・モラーツ時代のもの。「イエス・ソングス」と比べ聴き所の少ないライヴではあるが、スタジオより7分も長い『儀式』のアレンジは良い。他の曲は再現の域を超えておらず、『不思議なお話を』などはライヴ・レコードの必然性ゼロである。このアルバム・リリースと前後してアンダーソンとウェイクマンが脱退。10年の活動に終止符を打った——はずだったのだが…。 (中野)



Drama

'80

BUGGLES の二人を加え再スタートを計ったスクワイアのイエス・アルバム。4曲目は元々バグルスのナンバーだった曲で、セカンド・アルバムにオリジナル・ヴァージョンが収録されている。トレヴァー・ホーンのヴォーカルが、アンダーソンのそれに驚くほど似ていた。アンダーソンの思想性が欠けた事により、ハウとスクワイアが思い切って演奏していて、全盛期のイメージを取り戻している。久々の好アルバム。ただしこの時期のライヴは、ハウとスクワイアのソロが延々続き、とても誉められた物ではなかった。 (中野)



90125

'83

ついにハウもいなくなってしまったスクワイアとホワイトが、トレヴァー・ホーンをプロデュースに新グループ「シネマ」を結成。録音中にゲストに迎えたアンダーソンが結局全てのヴォーカル・パートを担当したため、YES 名義となった作品。つまりコンセプトは全くY-ES では無い訳だ。その後、音楽シーンを席巻するサンプリング音（オーケストラ・ヒット）を初めて使用した『ロンリー・ハート』は全米トップ10に入る大ヒットとなったがそれは JO-URNEY や STYXS と同次元の話だ。プロデュースはトレヴァー・ホーン。　（中野）



Big Generator

'87

前作から参加したトレヴァー・ラヴィンは元々メタル・ポップよりの人間だし、アンダーソンのコンセプトにより活動を停止し、『ロンリー・ハート』で久々に表舞台に立てたバンドとしてはもはや音楽上の冒険をくり返す気にはならなかったのだろう。YES という名前が無ければ、不自然さを感じない'87年の産業ロック・アルバムである。むしろトレヴァー・ラヴィンのヴォーカル曲の方がすっきり感じるが、考えてみれば現在のこのメンバーはスクワイア以外はプログレとは関係の無い人間だった事に気がついた。一応、YES 名義の最新作ではある。　（中野）



ANDERSON, BRUFORD, WAKEMAN, HOWE

same

'89

90125グループに対抗すべく集められたジョン・アンダーソンのプロジェクト。先の来日では『危機』まで含むイエス・ナンバーを演奏し、オリジナルの演奏者としての意地をみせたが、アルバムの方はいただけない。結局アンダーソンのソロを各メンバーがプレイしている様な出来である。これはつまりリード・パートが少なく、かつそれが複合されていない点が大きなマイナスなのだ。これでは普通のバンドである。ただし歌詩には少々驚いた。アンダーソンがこれほど明確に他者を非難したのは初めてである。次作があるとしたら他のメンバーの奮起を期待したい。　（中野）



JON ANDERSON

Olias Of Sunhillow

'76

「こわれもの」のカヴァーで登場したロジャー・デイーンの有翼飛行船のストーリーをまとめた作品。予想通り一番コンセプチュアルな作品となった。演奏自体は単純な物だが多重録音により厚みを与えられており、不足感は無い。アンダーソンもこの後、多数のソロ作品をリリースしているが本作が最も内容があり、楽しめる。しかしストーリー自体はほとんど訳が解らない。アルバム・カヴァーにも膨大な量の文章が残っているが、歌詩と合わせてもチンプンカンプンである。あるイギリス人に、YES の歌詞について尋ねた所、「Nonsence」と一言でかたずけられた。　（中野）



JON & VANGELIS

Short Stories

'80

アルバム「Tormato」発表後 YES を離れたアンダーソンはかねてから親交のあったヴァンゲリスとコンビを組み、'80年に本作を発表する。ヴァンゲリスのホンワカしたヒューマンなキーボードとアンダーソンの天界からふり注ぐようなハイトーン・ヴォイスは意外にもツーカーの仲で、味のある作品に仕上がっている。以後の2作は同傾向ながら、ややリズミカルな曲もあり。一時アンダーソンの新生 YES 加入のために活動を休止するが、近々本当に久々の新作発表の予定もありとか。アンダーソンにしてみれば、今の ABWH の結びつきよりもこちらの絆の方が強いのかも。　（内田）

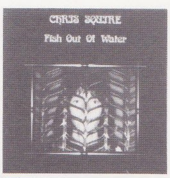


STEVE HOWE

Beginnings

'77

ハウは YES においてもギタリストであり、決してソング・ライティングの中心存在では無い。このソロ・アルバムにおいても様々なスタイルの曲の中で、彼はギターを弾きまくっており、イエス的なアレンジやコンセプトは全く見られない。A③には GRYPHON のメンバーが参加しており、やはりトラッド風。彼はインタヴュウでもグレアムの事を誉め、何度か YE-Sのサポートで共演している。意外な事にインストゥルメンタルが3曲のみで、他の曲全てに彼自身のヴォーカルが入っているのだが、声質、声域共にほめられた物ではない。　（中野）



CHRIS SQUIRE

Fish Out Of Water

'75

ソロ・シリーズ第一作。ブルッフォード、メル・コリンズが参加。テクニックも充分なプレイヤーの変拍子セッションがつまらない訳は無く、結果的にソロ・アルバムの中では最もイエス・サウンドに近い仕上がりとなった。元々バンドではアンダーソンと共に、ほとんど歌いっぱなしの彼だからしてヴォーカルもハマッている。ただしオーケストラはほとんどプラスになってない。キーボードやギターと言ったメロディ楽器はそんなに目立たない構成に関わらず、スクワイアのリード・ベースが充分に歌っており、ブルッフォードとのからみは快感である。　（中野）

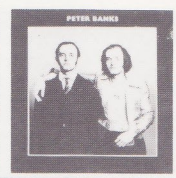


ALAN WHITE

Ramshackled

'76

本文中でも触れたが彼の参加により、他のメンバーが晴れて好き勝手なアレンジが出来るようになった訳だが、ソロ・アルバムとなると分が悪い。プログレの音楽とは元々別次元の人間だし、リラックスしたロックのアルバムとしか言えない。一応、YES のメンバーは全員参加しているのだが。まあクリムゾンだってボズ・バレルがいた訳だしね。当然の事ながら、長く廃盤だったのに、今回 CD 化されたが、「YES のメンバーだから」という理由以外たいした存在価値は無い。もちろん各曲はそれなりに完成度は高いが、やはりカテゴライズされた枠の中の音楽である。　（中野）

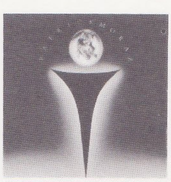


PETER BANKS

same

'73

YES 初代のギタリスト、ピーター・バンクスは、2枚のアルバムを発表した後の'70年1月に YES を脱退。その後、自己のバンド FLASH で3枚のアルバムを発表。'73年に FO-CUS のヤン・アッカーマン、GENESIS のスティーヴ・ハケットらをゲストに迎え、本作品を発表。A面は組曲風、B面はジャム・セッション的で、全体的に未完成さはあるが、気迫のこもった演奏が展開される。硬めのトーンで、ジャズっぽいフレーズを多用したアドリブ主体の演奏を得意とする彼の能力は、もっと評価を受けてもよいと思うのだが、現在の彼の活動状況は不明である。　（佐藤）



PATRICK MORAZ

i

'76

現在までの数作のソロ名義の作品を発表しているモラーツだが、YES 在籍中の本作が最も完成度が高い。（録音に湯水のごとく金をかけられるという事は幸せな事だ。）「リレイヤー」で聴かれた小節ごとのキーボード・チェンジも鮮やかに、ソロ作品とは思えない確固とした内容を持っている。もちろん、それは YES の音楽性とはかけ離れている。楽器のプレイのみに依存せず、曲としての出来に心を配った作品で構成されており、正直な話、YES のメンバーより大分音楽的な人間だったようだ。カリズマからのリリースだったため、CD 化されていないのが実に残念。（中野）

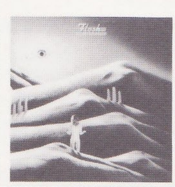


BADGER

One Live Badger

'73

YES の3作目「The Yes A-lbum」発表後、バンドの目指す音楽性の違いにより、'71年7月 YES を脱退した初代キーボード奏者、トニー・ケイが結成した BADGER は、'72年12月15・16日のレインボー・シアターにおける YES の前座を努めた時のライヴ録音である本作品でレコード・デビュウ。YES 時代よりもロック色が強くドライヴ感あふれる曲調が多い。ヘヴィでありながらも繊細なメロディの美しさを強調し、伸び伸びとしたソロを展開してくれる好作品に仕上がっている。又、ロジャー・ディーンの手による飛び出す絵本式の見開きジャケットも秀逸である。　（佐藤）



FLASH

Out Of Our Hands

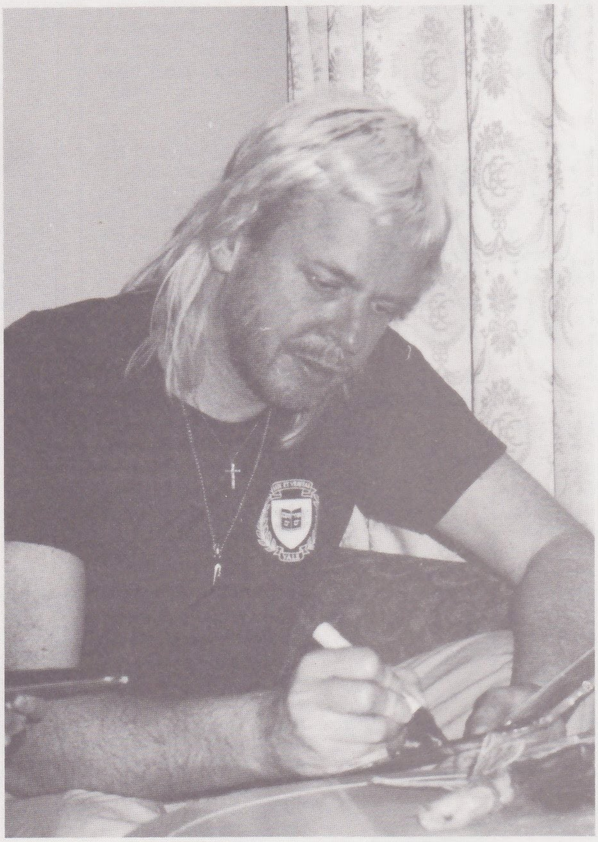
'73

前作迄バンクスの個性と他のメンバーの特性が合い入れない志向性を示しているのを露呈させ、各曲の関連性が感じられない散漫な印象を残していた。本作は1～2作のジャケットとはスタイルが異なっている事に象徴されている通り、バンクスがジャズ志向を残しつつもサポート的役割に徹する事によりバンド優先の姿勢を見せている。このバンドの一つの側面であったコーラス・ハーモニーを中心としたスタイルを取っており、演奏部分では捻りのあるプログレッシヴな展開。結果曲調が統一されトータル性を持ち、バンドの方向性を安定させた好作品となるが解散する。　（吉野）

INTERVIEW

RICK WAKEMAN

'90年3月1日：新宿センチュリー・ハイアットにて
インタヴュー●三浦奈緒美（ROSALIA）：M
通訳●小木曽代史子：O



「当時手に入るものといえば悲惨なメロトロンぐらいのもので…音は外れる，テープは悪くなる…」

M：まず機材のことを聞かせて下さい。ストローブスの時と「危機」の頃と今と……。

R：ストローブスだって？君は生まれてもなかったよ。もし生まれていたとしても、こんなこと聞かれるとは思わなかったなぁ……。

ストローブス時代は、私がエレクトリック楽器にとりかかった頃で、そう機材も多くなかったよ。メロトロンを使ったなぁ。メロトロン、知っているかい？

M：はい、使っています。

R：えっ、ほんと？古いタイプのかい？テープの入った？

M：はい。

R：そうなの……。ユニークなサウンドだよね。音が外れるし。テープが悪くなって……。そうなった？

M：ええ、鳴らなくなったりします。

R：以前持っていたのは、3年程前にアメリカ人に売ったよ。それからハモンドのC3オルガンやハープシコードを使った。これは、チェレステというやつで、ストローブスで主に使っていたんだ。ボブ・ムーグがちょうどシンセサイザーを開発した頃だ。で、イエスに加わった頃、早速ミニ・ムーグとフェンダー・ローズを取り入れた。それと……RMI エレクトリック・ピアノだ。その頃はもうエレクトリック・ピアノの時代だね。1976年、プロフェット5が出てキーボードをすっかり変えてしまったね。ポリフォニックになった最初のキーボードだったからね。ヤマハもその頃だ。'80年代になると、目を見張るばかりだった。コルグのカーターやヤマハのような会社が、独自のものを作り始めたとたん、一番いい音をつくり出したんだ。だから'80年代というのは重要なんだ。つまり、いろんな膨大な量のキーボードは、その頃から出だしたんだ。DX 7が運命を変えたよね。

よく人から聞かれるけど、「どうして、あなたはラックマウントの小さいチータを使うんですか」とか、「どうして、カワイKIR のような安くて値打ちのない物を使うのですか」と。あまりお金をかけないキーボードで素晴らしい音を作り出すことはできるよ。カワイのそれは、本当に私が望む音を出してくれるし、例えば、ヤマハのV50はもう作られていないけど、音の響きという点では、これはとてつもなくいい物だと思う。私はそれをずっと使い続けるつもりだ。チータにしても、すごく安い上に、リードの音が素晴しくファンタスティックなんだ。ウェールズの小さな会社で作られているものなんだけど。機材を選ぶことができるなんて素敵なことだよ。私が始めた頃なんてひどいものだった。手に入れることができたのは、悲惨なメロトロンぐらいのもので……わかるだろう、何かが欠けていたんだ。今じゃ、色々選ぶことができるんだからすごい時代だよね。

M：昔のことをお聞きしたいのですが。あと、16分音符などを多用されていますが、作曲のこともお願いします。

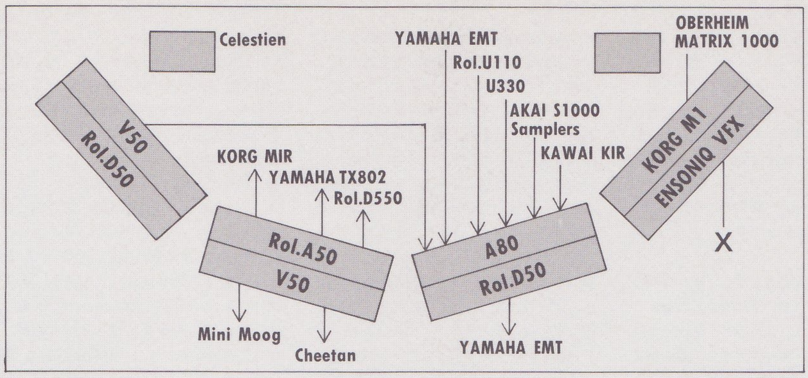
R：正直に言うけど、何も計画してやってるわけじゃないんだ。何も考えずに座って音楽を書こうかなと思って、演奏しはじめるだけだよ。最悪なのは、何かを書かなくてはいけないという状況で、こういう時は何も書けないんだ。エルトン・ジョンは全く私とは違っていて、彼は素晴らしい友人なんだけど、彼は非凡なんだ。私たちはこのことで、すごく面白い話をしたことがあるんだ。というのは、私の作る曲は長くなりがちで、ヒット・シングルも出せたためしもない。いつも、3分間の曲を書く、ということを考える度に、はかってみたら9分30秒なんていうのになってしまう。エルトン・ジョンは全く逆で、「さて、今から叙事詩を書き上げよう」なんて言って何時間もかけて仕事にとりかかる。で、でき上ってみると、3分26秒なんて具合だ。だからね、クレイジーなんだ。私は予め計画的に座って音符を書いていくわけじゃない。ただ演奏するだけなんだ。そしてロードに出る時は、いつもキーボードを持ち歩き、部屋に据えつける。今も私の部屋にはテープレコーダーと五線紙といっしょにあるよ。今朝も4時に書いてたんだ。アイデアが浮かんで、これはちょっといいぞ、と思ったら起き上がってピアノの前に座って、録音して書きおろして、また眠るんだ。どんな音楽も全てインスピレーションから生まれるのだから、時間なんて関係ないよ。例えば、ジョン・アンダーソンは、いつもポケットにカセット・レコーダーを入れて持ち歩いていて、音が浮かんだ時、それを取り出してバスの中だろうと車の中だろうと、おもむろにその曲を口ずさむんだ。やってみるだけの値打ちはあるよ。まじめな話、これは夢として言ってるわけでも何でもないんだ。それは本当に浮かんで来るんだ。ギタリストは何年もの間、こういうことをやって来た。特に旅廻りのフォーク・ギタリストは、いつだって自分のアコースティック・ギターを持ってるよね。偉大なロックの曲といわれるものの幾つかは、ホテルの部屋で書かれたもので、ギタリストが部屋にギターを持ち込んで演奏したものなんだ。もし君が小さいキーボードをケースに入れて持ち歩けば、少なくとも君は、今書いている2倍のものが書けるということがわかるだろう。私が保証するよ。

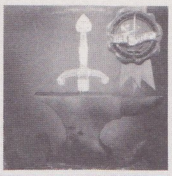
「学校をやめるのはひとつの賭けだったよ。チャンスをつかみたかったんだ。」

M：キーボードを始めたきっかけは何ですか。

R：5歳の時にピアノを始めたんだ。父がピアノ・プレイヤーだったし。父は結構ビッグなジャズ・バンドと一緒にプレイしてたんだ。私が4～5歳の頃、'50年代の初期には、テレビがなくて一つまりテレビは、イギリスには'50年代後期まで入って来なかったからね。それで日曜日には、わが家ではラジオをつけることが禁止されていたんだ。私たちは朝に教会に行って、昼食後にはラジオはつけていなかった。私たちが日曜の夕方に家でよくやったことは、ミュージカル・イヴニングだった。父はピアノを弾いていたし、母は歌っていた。それから伯父がいて、彼は小さいギターを弾いていた。そして私はと言えば、5歳の少年で、そこに座ってとてもうっとりしていたよ。また同時に、隣の家に3人の小さい女の子たちが住んでいて、壁がすごく薄かったから、彼女たちが練習するのがきこえたんだ。それで私もピアノを弾きたがった。それから、え…と、私にとってラッキーなことに、南イングランド全土でも最も優れたピアノ教師が、家から1マイルの所に住んでいたんだ。だから15年間、彼女の所に通ってクラシックのプレイの試験を受けたんだ。そのうちの2年、多分1年間ぐらいをのぞいてね。10代の若い時は、色々心の乱れなんかがあって、とても難しい年頃で、やらなければいけないのに、あまり熱心に練習しないものだろ？フット

リック・ウェイクマンのキーボード・セッティング





RICK WAKEMAN

The Myths And Legends Of King Arthur And The Nights Of The Round Table

'75

ソロ第3作。1作目がYESのライヴ等でもしばしば演奏されていたので有名だが、作品の熟成度ではこの作品がベストであると思う。かのアーサー王の伝説をモチーフにしたコンセプト・アルバムで、ウィル・マローンによるオーケストラ・アレンジを加えて見事なロックとシンフォニーの融合を聴くことができる。作詞、作曲、プロデュース、そしてもちろん全てのキーボードはリックの手によるものである。YESでの成功により、この円熟期にこれだけの労力と経費をかけられたことは、リックにとって非常に運がよかった。これだけのスケール感はそうはお目にかかれない。（山崎）

ボールのような他のものに気がいってね。また、ロック・バンドやジャズ・バンド、クラブ・バンド、パブ・バンドなんかと色々やったよ。演奏できるのなら、どこだってやったよ。で、19歳になった時、ロンドンの王立音楽学校へ行って、3年コースの音楽学部をとった。で、2年めの時にセッションをやり始めたんだ。私は運が良かったのだと思う。デヴィッド・ボウイやマーク・ボランの仕事を始めたんだ。また、エルトン・ジョンとも仕事をした。そこで二つのことが私に起こった。一つは、私が音楽教師にはなりたくない、ということに自分で気づいたこと。それからもう一つ気づいたことは、ただクラシック音楽だけを演奏するということを望んではいない、ということ。音楽を書いたり、演奏したりしてみたかったんだ。当時の音楽には、大きな隙間があるように感じていた。実際、1960年、'60年代のポップ・ワールドでは、ミュージシャンの欠落があった。あまりたくさんいなくて…彼らは方向性を持たず、だから私は、いい機会があると思った。そこへ入っていくトレーニングを受けて、それを演奏する人間にとってね。人にきいたんだけれど、私がカレッジを出て教師になったとしても、1週間18ポンドが稼ぎの全てだ、というんだ。だけど、それが1960年代の給料だった。だから、そういうものは「絶対に嫌だ」と思ったんだ。それで、やめてしまってチャンスをつかんだ。私は父に会いに行って言ったよ、「私は学校をやめます」って。

O：じゃ、学位は修めなかったのですか？

R：修めなかった。私はよくよく考えた。あと1年行ってれば、学位はとれたんだ。そこで父に言ったんだ。彼は「どうして留まって学位を終えて、それからロックンロールなどを演る、というふうにしないのだ？」って言った。私は父に「ロックンロールの世界では、今、大きな隙間があって、キーボード・プレイヤーというものは存在していないんだ。彼らは単に居るというだけで、らしいことを演ってるだけなんだ」と言った。「レコーディング技術が進歩してきているんだから、次の年には誰かが現れて、この隙間を埋めてしまうだろう」「これがうまくいくかどうかは分からないけど、少なくとも自分でやってみなくては、結果はわからないんだ」こう言ったんだ。それで私は学校をやめた。最初の2年間は、とても難しかった。ほんの少しのセッションしかしていなかったから。キャット・スティーヴンスのような人とね。それからブラック・サバスのバックの幾つかを演った。でも、生活費を稼ぐのは、とても大へんだった。私は週8ポンドのアパートに住んでたけど、家賃が払えず追い出されてしまった。なぜなら、私はお金をとても気をつけて使ってたからね。1%は食事と音楽に、99%は飲み代に使うように、ね。

それからストローブスに加わった。私が最初に結婚した頃だ。つまり私は3回結婚したんだよ、その最初だ。私のもう一つの趣味だね、とても高くつく趣味だけど。加わった頃…そりゃあ辛かったよ。週20ポンドしかもらえなかったから、支払いはできなかったしね。どこでも演れる所でプレイしたよ。凄い、凄い日々を見ていたと、今でも思うよ。ホテルなんかには泊まることはできなかった。それでゲスト・ハウスのような所に泊まった。ストローブスにはトニー・フーパーというギター・プレイヤーがいて、彼だけは体裁のいい身なりをしていたんだ。そこで、何をしたかというと、ネクタイをしめてね、かっこよくジャケットを着て、ゲスト・ハウスに行って言うんだ。「ハロー！私はビジネスマンなんだが部屋を借りたいんだ、一部屋」そして「O. K. どうぞ」と言われる。別に問題はない。一晩5ポンドだったし。そして更に彼は言うんだ。「避難装置の近くの部屋を頂けますか？私はとても火事に神経質でね」主人は「O. K.」と言う。そして彼をそこに入れる。彼は上っていって、我々みんなは壁をよじ登り裏を越えて、避難具をとって床に入ったんだ。すごく面白かったよ。そういうことを18カ月、18カ月やったんだ。それから1971年の中頃。こんなこと、これ以上できないと思った。1971年の7月か8月だった、生活費が稼げなかったのは、2、3枚レコードつくって、それが売れなかったから、また元のようにセッションに戻ろうと考えたんだ。丁度、一人めの子供が産まれた頃で、自分には責任があったしね。ストローブスを脱けよう、と決心したんだ。

イエスから電話があって、「入らないか」と誘われた。私は「No！」と言ったんだ。なぜって、「もうバンドで演りたくないから」とそう言ったんだ。長い話なんだけど、簡単に言うと、彼らは4回ほど電話をかけて来て、その都度、私は「No、No」と言っていたんだ。そうしたら、マネージャー―彼は今も楽しくマネージャーをやってくれているけど―が、私を見つけて言った。「ねぇ、我々は君がNoと言っているのは知ってるけど、少なくとも、一緒に来て彼らが演ろうとしている音楽を聴いてほしいね。少なくともそうしてから、背を向けて『聴いてみたし、奴らとも話をした』と言って、Noと言えばいいじゃないか。」そこで私は「わかったよ、そうしよう」と言ったんだ。よく覚えているよ。その朝、家を出る時に当時の妻に「4時頃には戻るよ。ちょっと行って、奴らにハローと言ってくるだけさ、サンキューと言われたら、ノー・サンキュー（いや、けっこう）と言って帰ってくるよ」なんて言った。行って、彼らの買ったロンドンのメイフェアにあるリハーサル・ルームに着いた。そこはブラッセルの上にあって、私はそれがわからなかったのだけど、だから下階の騒音は何だろう、と思っていたんだ。ブラッセルというのは、女性のいる遊戯場のことで、女の人たちが……まあ、そういう所だ。着いてみたら、とても奇妙な所で、そういった女の人たちだらけで、私たちはお互いに「ハロー」なんて言ったよ。彼女たちは、すごくフレンドリーだなぁと思ったね。それで階上へ上がっていって、リハーサル・ルームで「階下の女の子たちは何をしてるの？」と聞いたら、そんなことについて色々言ってくれたよ。リハーサル・ルームで、我々は「ラウンド・アバウト」とか「ハート・オブ・ザ・サンライズ」を書いたんだ。それから夜中に家に帰ったから、車を運転できるのは私一人だったから、スティーヴを送っていったんだが、おかしなことに彼は「明日、リハーサルに行くのに僕をひろって行ってくれ」と言ったんだ。私は「O. K. 何時だい」と聞いて、彼が「11時だ」と言った。誰も私にたのんだり、自分がバンドに加わったなんて意識もないまま、私は家へ帰ったんだ、車で。これが最初に参加した経緯なんだ。それから1974年に脱けて、また'76年に加わり、再び'80年の1月に脱けた。今やまた参加してるんだけど、2年前から。ばかみたいだよね。



「皆歳を取って，今ではバンドもやりやすくなった。20歳だと頭に血が上るし，30ならまだ議論。40になると，もう誰も気にしない。」

O：その間にどんな秘話があったのですか？

R：そんな秘密なんてものじゃないよ。最初のソロ・アルバムの頃のことなんだけど、A&Mと契約した時、「我々は君の次の作品をたのしみにしているよ」と言われたんだ。家に帰りながら、もう1枚アルバムを書けるだろうか、と本当に心配だった。イエスに加わった時、A&Mはこう言ったね「1枚、ソロのアルバムをつくってくれ。そうしたら我々は様子を見よう」それで私は「ヘンリー8世と6人の妻たち」を1972年にレコーディングした。その時は自信があって嬉しかったし、長いツアーに出て、A&Mに顔を出して「ほらっ！」なんて言っていた。そして、ロンドンのA&Mのメイン・ルームで、マネージング・ディレクターとかレコード会社の人たち皆

揃ったところで、2作めのテープをセットしてまわした。終わった時、ディレクターは私に「とてもいいよ。我々はこれに歌詞がついて、人々がそれを唄うのを聴くことを楽しみにしているよ」と言った。で、私はそれはもう完成されたインストゥルメンタルなんだ、ということを言ったら、彼は「誰もインストゥルメンタルなんて買わないよ」と言った。「でも私は唄わないよ」という私に対して、彼は「喜ばしくないね。全く」というようなことを言った。それでマネージャーと一旦そこを出たんだが、彼は再び戻って行って、このアルバムを12,000枚製作することを決めた。もし世界規模で売るならこのコピー数は、金銭的に回収できるだろ、そうしたら今後は一切私に会わなくて済むから。というのも彼らは、そのアルバムをひどいものだと思っていたからね。A&Mはプロモートしたがってはいなかったよ。でも面白かったのは、あるテレビ番組で1曲だけプレイしたら、750万枚も売れたんだよ。だから、その時は、レコード会社の方から「ハロー、リック。次は何をしようかね？」と言って来たよ。

2作目についてはもっと面白い話がある。ディレクターが「何をするつもりなんだい？」「オーケストラと一緒にアルバムをつくろうと思う」と答えると、「No、No、一体何をするつもりなんだ？幾つ演るんだい？」「えーと1曲！」と言うと「だめだよ、1曲で演りおおせるものじゃないだろう」と言った。私は「ジュールベルヌの地底探検を演るつもりなんだ」と言ったが、彼は「だめだ」と言った。それで仕方がないから家を抵当にお金を借りた。それから出来上がったテープを聴かせたら、ただ、ただ「No」だった。私にとっては大問題だったよ。家をかたに借金してあったのだから。だからレコードが出来上がらないことには、破産だったんだ。ひどいことになるところだったんだ。で、アメリカA&Mのジェリー・モスに話をつけ、彼がロンドンにリリースをするよう発注したんだ。900万枚売れたね。感謝しているよ彼には。このあと5枚のアルバムをA&Mに対して作った。あの会社と組んで、とても運良くやってこれたよ。で、他に何か？

M：以前のアルバムであなたの名前がクレジットされていないのですが…（「こわれもの」「危機」）

R：はじめの2枚のことかな？そうだね。

M：あなたにとって、その時の役割は？

R：言っておこう。これはね、私がイエスに加入した時に、我々は大きな問題を抱えていたんだ。著作に関して契約をしていたんだ。今もそうなんだけど、ロンドー・ミュージックという所が私の出版元でね、もう21年間もそうなんだ。イエスは当時、ワーナー・ブラザーズと著作契約を結んでいたんだ。ワーナーはこう言った。「イエスのアルバムにおけるいかなるものもワーナー・ブラザーズのもとに出版されなくてはならない」そこで問題だったのは、私が別の出版元と契約をしていたことだった。それで、バンド内ではプライヴェートに金銭的なやりとりを少しばかりしていた。たとえ、私がそのアルバムの曲をたくさん書こうと、また基になるものを書こうと、プライヴェートでのみお金が渡されていたんだ。もし、私の名前を載せたら、ワーナー・ブラザーズは、リリースを許可しなかっただろうから。全く厄介なんだ、契約とかは。けど契約について言えるのは、サインした日だけ本当に納得のおけるものだ、ということだ。誰だって立場や状況は変化するからね。

M：新作では、どんなサウンドを心がけていますか？

R：私個人かい？それともABWHとして？前者なら2、3できているのがある。1枚は「アンサムズ」というタイトルで、本来なら去年、イギリスで出るはずだったものだ。我々は全員、個人プロジェクトはリリースしないということで意志決定していたので、抱えたままだよ。もう1枚は、ヘヴィ・ロックっぽいアルバムでアメリカの映画用のものだ。「オペラ座の怪人」のオリジナル・サイレント・ムーヴィーだよ。私はいつもリリースの間隔を見はからっているんだ。「アンサムズ」については、自分自身のイギリス、ヨーロッパ・ツアーを6月か7月にやるので、それに間に合うように出したいんだよ。しかし問題なのは、もう1年も置かれたままだから、聴くたびに変えたいと思う箇所がきこえてくることなんだ。難しいところだよね。自分のスタジオがあるから簡単にそれができてしまう。

M：ソロを演るのと、バンドの一員で演るのと、どういった違いがありますか？

R：そうだね、君はリーダー？おぉ、ボスか。君がみんなに何をするのか言うわけ？私の2番目の奥さんもそんなふうだったよ。ABWHでは、皆同等なんだ。だからちょっと大変なんだ。妥協を見い出さなくてはいけないだろう？けど、まあ、今はやりやすくなってるよ。歳をとったからね、そんなに傲慢じゃなくなっている。20歳だったら頭に血が上ってね。30歳ならどうかと言うと、まだ議論だね。40歳だったら、誰も気にしない。

M：久し振りのバンド活動ですが、他のメンバーからどのような刺激を受けますか？

R：そうだね、ちょっと変な感じだね。みんなで、いつも言っているのだけど、時というものがまるで……その、我々はまた再び1から出直した時のようなんだ。で昔の、18年前の頃の写真を見ると、ね、みんな自分たちの子供の様に見えるんだよ。奇妙だったね。私の16歳になる息子もね、16歳の方の息子は素晴らしいキーボード・プレイヤーなんだ。

O：後継ぎ、というわけですか？

R：そうだなぁ、言えるのは、彼は信じられないテクニックを持っているということ。本当にうまく演れると私は思うね。そろそろ彼はビジネスというものを、多少知ってもいいだろう。若いミュージシャンとしての若い考え方を持っているんだ。だって音楽技術がずっと進化を続ける'80年代に育っているのだから、とても商業指向なところがあるよ。

O：で、あなたは彼のプロデュースを？

R：そうだなぁ、彼の為になるプロデューサーを捜してやるな。例えば、妻とか息子に運転を教えてやれるかい？きっとすごく難しいよ。やれば素晴らしいものになるよ、ね、でも一方ではそうではないかもしれないし、だって"父と息子"なんだから。

彼らが演っているのを観に行ったんだ、クラブへ。そりゃ実際にとてもおかしなものさ。だって……私の妻が言うには、彼らの観客とABWHの観客には、一つ大きな違いがあるらしい。ABWHの観客は95%まで男性なんだ。彼のバンドはあの年頃のことだし95%女の子だって。

M：じゃ、そろそろ時間ですので、とても楽しいお話でした。

R：私も楽しかったよ、ありがとう。テープ（ロザリアの）を聴くのをたのしみにしてるよ。

INTERVIEW

BILL BRUFORD

'90年3月1日：新宿センチュリー・ハイアットにて

インタヴュー●坂本理：S
通訳●小木曽代史子：O

「『危機』を東京でプレイするというのは，最も起こり得ない事だった。音楽シーンではそういうおかしな事が起きるんだ。」

S：今回のバンドについて、またこれ迄の活動について伺いたいと思います。まず、バンド名が長いですがYESの再編成と見なしていいですか？

B：そうだね。でもちょっと説明させて欲しいな。YESという名前のバンドはあったが、グループの皆がそのバンドをやめたんだ。我々は今は新しいバンドABWHにいる訳だ。つまり誰もYESの一員でありたいと思っていないのだから。YESは今も続いているよ。ハリウッドで……。とてもポピュラーだね。そして我々は今は違うグループに居るんだ。

S：このバンドが結成されてまず僕らが思った事ですが、ジョン・アンダーソンやリック・ウェイクマン、スティーヴ・ハウとの交流は今迄にもされていたんでしょうか？

B：ジョン・アンダーソンとは何年もの知り合いだし、我々はずっと付き合いはあった。彼がYESを脱けた1984〜85年頃に、彼は結局また古い仲間と一緒にやる為に戻ろうと考えるようになったんだ。精神を再び作り出すためにね。

S：クリス・スクワイアが参加しなかった理由というのは何だったんでしょう。

B：誰も彼と一緒にプレイしたいと思ってないからだよ。皆そう思ってる。単純なことさ。

O：何か特別な理由でもあるのでしょうか？

B：何もないね。思いあたらない。それに加えて、彼は今YESで楽しくやっているよ。YESはとてもポピュラーで、少なくとも私達と同じ位にポピュラーだから…。我々2つのグループの違いというのは、実際、私達の方は前進しようとしている、ということ。ヒット・レコードや3分のポップな曲というものに重きを置くのではなくて。一方、彼らはヒットというものに大変こだわっている。流行を追いかけている。その違いだね。ジョンは夢を夢見る人でね。だから3分間という枠にはめるという必要はないんだ。

S：今回のバンドはYESとは違う訳ですから、昔一緒にやったメンバーと一緒にやる事には全然抵抗はなかった訳ですね。

B：私には何の問題もなかったよ。それに私は新しい曲と古い曲を演奏する事には慣れているよ。もしコンサートの間、新しい曲をやる為に古い曲も演奏しないといけないのなら、それはグループでの事として受け入れるよ。私は『危機』よりも『バース・ライト』とか『ブラザー・オブ・マイン』の方がプレイしたいけどね。でも、観客が本当に聴きたがっている音楽を持つ数少ないミュージシャンである事はとても嬉しい事なんだ。だから演奏するのはとても

幸せなんだ。しかし将来、我々は今と昔の二つのバンド（の音楽）が別れていくのを知っている。今後は新しい方向へと向かっていくだろう。

S：メンバー4人の比重を考えると、やっぱりジョン・アンダーソンがバンドのイニシアティブを握っているのではないかと考えられるのですが、彼のプロジェクトだと考えてはいけないのですか？

B：そのとおり。この一枚目のレコードはジョン・アンダーソンがまとめあげたものだ。彼が、「こういう曲が揃っているんだけど、やってくれないか？」と言い出したんだよ。でも二枚目のレコードは、今とりかかっているんだけど、既に4人全員から曲がいっぱい持ち寄られているんだ。前のとは少し重点を置いている所が変わったという事に、君たちも気付いてくれると思うけど、皆が創り出したものを投入する方向になる筈なんだ。

S：じゃ、もう具体的に次のレコーディングの計画が入ってるんですか？

B：そう。もう南フランスのスタジオをおさえてあってね。4月頃…、曲が出来あがった頃にね。今は沢山ある曲の中で何を使うべきか、何を使わないでおくかを考慮中なんだ。我々にとっては曲を創り出す事など全く問題ではないんだ。ただ、あるタイプの、あるスタンダードな形に収めないといけない。

S：1stアルバムでは全曲がメンバー全員の共作になっていますけれど、そこであなたが担当したのはドラム・パートだけですか？

B：ABWH で？　それはそうなんだけど、色んな意味で曲はちょっと……。クレジットの点では……。（訳者註：様々な理由によりクレジットは4人になっているらしい）けれども実際は大部分がジョンの音楽で、いくつかはスティーヴ・ハウなんかのだよ。

S：ABWH はメンバー各々の活動と平行して今後も長く続けていく予定だと聞いてますけど、あなたもその計画ですか？

B：そう。自分のバンドやレコードの事もあるしね。EARTH WORKS は主にジャズをやってるバンドで、ドラムが主体、私のドラムの音楽が多いね。と言っても半分キーボードで半分ドラムだね。

S：今、ツアーの真最中なんですけど、ツアーの御感想はいかがですか？

B：そうだね。全体的にちょっとおかしな感じだ。もしどこかつねったら、すぐ目覚めるかもしれないよ…。というのも、もし君が6カ月前とか1年前に私に尋ねていたら、つまり私が『危機』を東京でやるのかどうか？ということを聞いていたら、そういう事はとにかく考えた事がない、と答えただろうね。それは最も起こり得ない事だったよ。けど、音楽シーンではよくそういうおかしな事が起きるんだ。

S：伺うところでは日本の客は割と熱狂している様に聞いてますけれど、ファンの反応はどう感じますか？

B：うん、とても熱狂的だね。それに日本の観客はいつも独特だ。いつも喜んで来てくれる。我々にとっては実際大きなエネルギーになってるよ。もちろん、特に若い人達の顔がある事もね。

S：ツアーではトニー・レヴィンが参加していますけども、彼の代わりにジェフ・



バーリンが参加した事もあるんですか？

B：ジェフ・バーリンは私の古くからの友人で、彼は私のソロの音楽に取り組んでくれた。カリフォルニアでトニーが病気になったので一週間我々とプレイしたんだ。

S：うまくはいったんですか？

B：ジェフとかい？　そうだね。彼はよくやってくれたよ。私はすごく良かったと思う。けど、トニーがいる方がそりゃあずっといいよ。

「ひとつ気がかりなのは，音楽に貢献できるか，音楽にずっと関心を持ち続ける様にできるだろうか，という事だ。」

S：これ迄の活動に関してお伺いします。

B：いいよ、でも古い話は2、3だけにしてくれよ。

S：ロバート・フリップとは今でもコンタクトをとっているんですか？

B：彼には会っていないね。ずっと一緒にやって来たけど。何年も彼とは会ってない。多分 KING CRIMSON が活動を停止した1984年以来。……6年間だ。

S：じゃ、KING CRIMSON はもう解散してしまったんですね？

B：そうだよ、冬に。

O：誰もその名前を使うことは……？

B：いや、そうしてほしくないね。

S：もっと昔の話ですが、NATIONAL HEALTH や GONG に参加した時のいきさつをお伺いしたいんですが。

B：ええと、それらは単なるグループなので……。ちょっと待ってくれ。GONG は本当に好きだったよ。で、そのドラマーは信頼できない人で、8～9週間、彼らのやったツアーに代わりで入ったんだ。NATIONAL HEALTH の方は全く実験的なグループだったよ。デイヴ・ステュワートとはその頃からのつきあいだ。

S：デイヴ・ステュワートと出会った事で、あなたのその後の活動に大きな影響力があったと思うんですけど。

B：そう、デイヴは私が音楽を書くのに、作曲するのに大変な手助けとなった人だ。1976年頃には、私は自分の音楽を書きたいと思う様になったんだ。というのも、それが何か自分の2番目の道を生み出すようなものだと思ったからで、彼はそれが私の進路を拓くだろうと言ってくれたんだ。そして音楽のレッスンをしてくれた。（曲を）書くのを手伝ってくれたよ。初期の私のレコードに収められている曲の多くは彼と共作したものだったよ。

S：BRUFORD について、解散のいきさつをおしえて下さい。

B：どうして解散したかって？　お金がなくなったから解散したんだよ。いつもそれだ。バンドが……、というか、私のバンドは、よくお金がなくなって解散するんだ。お金がなくなってしまう明らかな理由は、ハモンド・オルガンをアメリカ中運ぶ為の飛行機代だったよ。もしハモンド・オルガンを使いたいなら、もしハモンド・オルガンを（ツアーに）持って出たかったら、バンドを解散してしまうという事になるね。だけど、あのバンドは他の私が入っていた多くのバンドと同じ様に、解散した時だけ全員が喜ぶ、といったタイプのバンドなんだ。失くしてしまって――またそこへ戻って楽しもうという……。グループをやっていくのはとても高くつくんだ。それで君たちがレコードを買って我々を支えてくれる事を必要としているんだ。レコードを買う事で君たちはグループを支える事になるんだよ。けど、3年の間に買う、なんて事じゃない。レコードが、今、売れる必要があるんだ。そうしたらグループの活動を維持するお金が手に入るからね。皆はそういった、グループがどの様にして成り立つのか、といった事がわかってないんだ。

S：あなたが拠点としているバンドは EARTH WORKS だと考えていいわけですか？

B：そう、そうだよ。私自身はそういうふうに考えているよ。私は EARTH WORKS のメンバーで、ABWH に入ってまた別な仕事をやっている、と。今はドラマーが3つのバンドでやるっていうのはよくある事だよ。

S：前にやっていたバンド、MORAZ & BRUFORD はどうなってしまったんですか？

B：いや、もう私はパトリックと一緒にやる事になるとは思っていないね。そのグループはちょっとだけの、ほんの短い期間だった。すごく重要な事だったんだけど、それも遠い昔の事だ。

S：渡辺香津美の『スパイス・オヴ・ライフ』に参加してましたけれど、どうでしたか？

B：カズはいいね。彼はすばらしい。すごいプレイヤーだよ。とてもいいミュージシャンで、とてつもなく、おどろくほどいいミュージシャンだ。

S：他にも井上鑑なんかと一緒にやってますけれども、外国人のバンドに加わる事に違和感はないですか？

B：日本人のグループに加わること？　いや、全然ないよ、全く。音楽においてすばらしいのは、両方にとってそれが共通した言語になる、という事だ。奇妙なことに。香津美が猛烈にやってたら私も猛烈にやる。それが我々の言語、我々の話すものなんだよ、ね。我々は双方が同じ事をやってるんだということがわかってる。そりゃ、すてきなことだよ。

S：演奏に関してお伺いしますけど、あなたは、ジャズやロックという区別には全くこだわらない、と発言していますけど、イギリスのミュージシャンである事にはこだわるんですか？

B：いや、私には何の関係もないよ。

S：自分は自分である、と？

B：ただひとつ、自分を悩ませるものといえば、音楽に貢献できるか、という事。それから音楽にずっと関心を持ち続ける様に出来るだろうか、という事。

S：あなたのプレイは非常にユニークなものだと思いますけれど、バンドの中で演奏する時に特に何を考えて演奏していますか？

B：そうだね、ベストをつくす事だね。それから……、そう、ドラムで冒険的である事は今はかなり難しい事でね。まず第1に色んな事が既に行なわれてしまっているんだ。それから2つ目に、TV やラジオ、ポップ・ミュージックがオリジナリティをだめにしてしまう。

S：今、特に興味を持っているミュージシャンや、共演したいミュージシャンは？

B：いや、ないね。今やっている人達に十分満足しているよ。けど、将来どうなるかわからない、というのが面白いところだね。

S：ジョン・アンダーソンっていう人について個人的にどう思ってますか？

B：ああ、彼はいいものがある。彼はまあ OK だ。ちょっと変なところがあって、狂気じみた……。けど、彼には最高のパフォーマーの持つあらゆる要素がある。そんな風に感じないかい？　そうだろ？

KING CRIMSON

村上常博

Original King Crimson

オリジナルKING CRIMSONを一言で語るならば“5人のエゴイスト達による歪つな集合体”とでも言えば良いだろうか。そして、一瞬の均衡を計る事により、1stアルバム「In The Court Of The Crimson King」を生み出せたと言えないだろうか。当然、製作段階において意思の相違や、対立があったのは言う迄もない事だ。色々な音楽要素の融合であるのだから、アイディアの豊富さ、方法論が明確に確立している者の意思が、優先されているのも当然である。その中でも、イアン・マクドナルドとロバート・ボブ・フリップの2人の占めている割合が多く、2人の互いに寄せ合うコンプレックスが、より完成度を高めたと言えるだろう。そして、ボブ・フリップを語るならば、“未完の大器”であろうか。彼の才能は強力なパートナーの存在によって、大きく開眼したと言えるだろう。ボブはイアンをパートナーにしたかったに違いないし、強く望んでいたと思われる。しかし、それが成功しなかったのは、互いが自己至上主義であり、内心的な部分に優劣を競い合う対立が、日増し大きくなって行ったからだと思われる。もし、ボブとイアンの関係が成立し、ピートを加えた三位一体が実現したならば、CRIMSONはBEATLESを遙かに越えていただろうし、最高のコンテンポラリーなバンドに成っていただろう。又、メロトロンの導入についても、この3人がいたからこそ、強力な印象を与えられたと考える。ピートの抽象的な詩が、より効力を発揮する為のオブジェであるのと、その為の作曲、編曲、各楽器の配置、配色、音処理等の深い部分に至る迄、考え抜いた結果の導入と言えるだろう。そして、CRIMSONはライブにて本領を発揮するバンドである。ポイントとして、即興演奏の比重が、かなり大きかった点。アルバム曲の再現も忠実であった点。ジャズの色相が非常に濃かった点などが上げられる。とりわけ、イアンの存在感、表現力は他の3人より数段上であり群を抜いていると言えよう。サックス、フルートなどが肉声により近い楽器であると言う事もあるが、技術と感性のバランスが理想的な状態で保たれており、自分が何を言いたいかが明確にされている。即興でのイニシアティブはイアンが握っていると言っても過言ではないだろう。又、ボブも素晴しいと言えるがギターに関しての完全な確立は、キース・ティペットと接触後であると言いたい。

KING CRIMSONから生まれた、3つの兄弟バンド

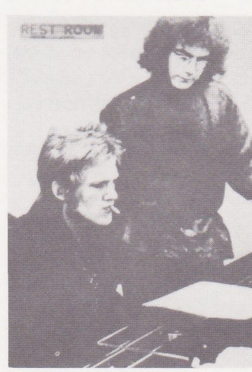
オリジナルCRIMSONの崩壊が新たに3つのバンドを誕生させた。それがMcDONALD & GILES、EMERSON、LAKE & PALMER、そしてボブとピートのKING CRIMSONである。この3つのバンドにはオリジナルCRIMSONの重要な音楽要素が確実に継承されており、ここからのC-RIMSONはボブの理想を表現する場であり、本質的にオリジナルとは異ったバンドであると言えよう。同じ母体から生れた兄弟バンドの進む方向はそれぞれ違いを見せており、特にMc-DONALD & GILESの『Flight of The Ibis』と、CRIMSONの『Cadence & Cascade』は、同じモチーフより生れた曲であるが、それぞれが与える印象は交わう事が出来ない2人を象徴しているかのようである。オリジナルCRIMSONの崩壊は当然の結果であり、外的要因がなくともいずれ同じ運命を迎えたであろう。





Fripp's KING CRIMSON。キース・ティペットとの出合い

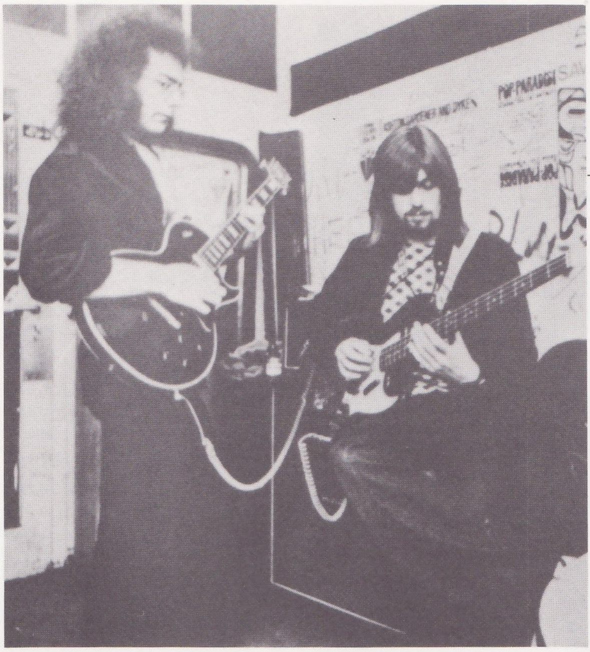
2ndアルバム「In The Wake Of Poseidon」の製作の為、新メンバーのオーディションが行なわれ、元CIRCUSのメル・コリンズ（Sax、Fl.）JACOB'S LADERのアンディ・マックロック（Ds）ゴードン・ハスケル（Vo、B）を迎え第2期CRIMSONが編成されたが、実際の録音にはマイケル・ジャイルス、ピーター・ジャイルス、グレッグ・レイクの面々によって行なわれ、部分的にメルやゴードンも参加した。そしてこの「Poseidon」のセッションで最も重要な参加であるのが、ジュリー・ドリスコール（後のジュリー・ティペット）に紹介された前衛ジャズ・ピアニストのキース・ティペットである。資質、理想、方法論等に相違する部分はあるが、ボブにとってキースは紛れもなく音楽を創造し合えるパートナーであったと言える。ジャズへ傾斜、導入、ギターに関しての開眼、より深い音楽的視野の発展は、キース無くしては有り得なかったと言えるし、この協力関係は3rd、4thアルバムへと発展し、更には後期CRIMSONに流れる方法論の布石になったと考えられる。



2nd「Poseidon」のA面とB面は、それぞれ異ったコンセプトによって創られており、特に前作と酷似した構成にあるA面には、とても深い意図が隠されていると思われ、推測による三つの仮説をたててみたいと思う。①前作及びオリジナルCRIMSONへの敬愛による表現。②前作及びオリジナルCRIMSONへの挑戦。③アイディア不足の為の応用。①については、CRIMSON解散後に発表された2枚のベスト・アルバムの選曲からして、いかに1stがボブにとって重要であったかがわかる。②について厳密に述べるならば、イアンに対しての挑戦と言うべきか。即ち、彼無くしても同様のクオリティ、いや、それ以上の作品を創造しようとする表われだと言えないだろうか。そしてオリジナルCRIMSONへの完全なる決別と区切を付ける為の創作であろうか。③については、試みの発展、応用の為にモチーフのパクリが時折あるのも事実である。しかしこのアルバムのポイントはB面であり、新たな方向性が打ち出されている。キースのピアノが無ければ平凡なコメディ曲に終っていただろう『Cat Food、B③』の斬新な編曲や、コラージュ、即興要素は新しい試みと言える。「Poseidon」はアンバランスだからこそ重要であり、色々な意図が隠されている意欲作と言えるのではないだろうか。

転換期
中期 KING CRIMSON

前作に引続きキースとの協力関係を更に発展させる事により、即興的要素を強めた構築と破壊による対極を配した3rdアルバム「Lizard」が製作さ



れた。ここでの特色はキースと彼のグループは勿論だが、YESのジョン・アンダーソンのゲスト参加が上げられる。バンド・ヴォーカリストのゴードンとは対照的であるが、少しも違和感が無くむしろゴードン以上に嵌っており、このセッションの成功がボズ・バレルの起用に大きな意味を持ってくると言えるようだ。ボブはアルバム製作後、キースと彼のグループ、そしてジュリー・ティペットにCRIMSONへの加入要請をした。女性ヴォーカルの導入はより繊細で構築美に溢れた歌曲への試みと、キース達との結束を更に強める事により、集団即興、ヴォイス・インプロヴィゼイションの導入、そしてアルバム曲の完璧な再現を狙った物と推測する。もしこの組み合せが実現していたならば、スタジオとライヴの間にギャップがない完璧な演奏が望めるだろうし、ライヴはスタジオ以上の緊張感に満ちた物になっていただろう。即ち、後期CRIMSONの青写真が芽ばえていたと考えられないだろうか。結局キース達の加入は実現しなかったが、ボブは即興の導入をライヴに計り、スタジオは即興的要素を強めながらもより構築を強調する事により、ライヴとスタジオを完全に切り離した2面性的方法論をバンドに持ち込んだ。元WORLDのイアン・ウォーレスの起用も、攻撃的でロックのエネルギーを持ったドラミングがもたらすリズムの強化は、ライヴに比重を置いた人選と考えられる。そして元MIRRORSのボズ（Vo、B）は、女性的表現も可能なヴォーカリストであり、今迄以上に静と動のコントラストを用いた楽曲創りと、スタジオとライヴの両方に十分な可能性を持っている為、彼の起用はボブにとって必至であったと言えるだろう。しかし、ボブの進む方向がサウンド本位になるに従い、ピートとの関係に亀裂が生じ始めた。ピートの理想はサウンドと詩が相互作用を起し対等の立場で干渉し合う事であった。CRIMSONにとって詩の効力が2次的存在として扱われる事を嫌い脱退してしまった。思うに2人の関係は最初からズレがあり、創造を重ねるごとにズレは開き始め、このような結果に至ったと考えて良いだろう。だが彼等の最終作である4th「Island」に見られる互いの干渉は、完全なる一体感を生み出していると言えよう。

試行模索のライヴ・バンド

中期CRIMSONのライヴは、オリジナルCRIMSON同様のアプローチで即興を行っていたが、クオリティの面に関してはオリジナルCRIMSONには及ばなかったと言える。原因として上げるならば、①インプロヴァイザーとしての能力不足。②明確な方法論の確立が出来ていなかった。③音楽的理想の相違と認識不足。④感情的な部分に埋めがたい亀裂が生じていた。などがあり、集団即興を導入してみたものの、大半が目的地点に到達出来ず中途半端な終焉のパターンが多かったと言える。メルやイアンも凄いプレイを行っているが観点がズレている為、虚しい自己満足に終っているし、ボブにいたっては何か押え切れない苛立ちさえ感じてしまう。高い技術だけでは良い音楽が創造出来ないと言う事を、この中期CRIMSONが身を持って証明したのだと思う。そしてこの失敗がボブにとって、後期CRIMSONの大きな布石になったと言えるだろう。

後期KING CRIMSON　完全なる有機的集合体

元YESのビル・ブルッフォード（Ds）、元FAMILYのジョン・ウェットン（B、Vo）、デヴィッド・クロス（Vil、key）、元BOLIS OF ASAGAI、M.I.C.のジェイミー・ミュアー（Per）による後期KING CRIMSONは、深い洞察と自由な発想を起因する集団即興に方法論を打ち出し、前回の失敗を踏まえた慎重な人選によるグループである。ここでボブに自由と自信、そして解放を与えたのは、前衛パーカッショニスト、ジェイミー・ミュアーであり、彼をパートナーとする事により、ボブはオーガナイザーとギタリストの部分を完全に確立したと言えよう。そしてボブの意図する理想は一つのピークを迎え、6th・アルバム「Larks' Tangues In Aspic」は、正に1stと対極を成すCRIMSONの代表作と言っても過言ではない。

後期CRIMSONが以前と違うのは音楽的な部分だけではない。ボブの意識する対極的な静と動の配色は楽曲以上に楽器の配置、アーティストの性格に至る迄配慮されている点であろう。まず考えられる点はヴァイオリンの導入である。中域に特長があり極端に歪んだファジーで暴力的なギターが男性的であるならばヴァイオリンは非常に女性的であると言えよう。線が細く高音域に特長があるこの楽器は、女性の声帯によく似ており、クラシックにおいてもしばしば女性的な音として用いられると言う。CRIMSONにおける役割とそれらに多くの類似性があり応用されているようだ。又、ボブとデヴィッドの2人が使うメロトロンも単に叙情性を生む為だけの安易な使用法ではなく、ギターとヴァイオリンの接点的役目を果し、特にジェイミー脱退後の4人編成になってからは、これ以上の使い方はないだろうと思われるぐらい効果的な使い方がされている。2台のメロトロンからギターとヴァイオリンへ移る為にあったり、対ギター、対ヴァイオリンの為だったり、そこから各々へ移るなど対楽器としてのあらゆるパターンが考えられ、現代音楽あたりの雰囲気に似たアレンジに、多く使用されている。そしてこの2人の遣り取りが理性での対極ならば、直接的なジェイミーは正に本能であろう。後期CRIMSONの最大の特色は理性と本能による対極であり、その為に楽曲、楽器などのいくつかの対極がちりばめられ、ピラミッド状を形成していると言える。緊迫した極限状態に生まれるビッグ・バーンは、暴力的であるが沈着冷静なボブの理性と本能を剝き出したままのジェイミーによって導かれ、他の3人を巻き込んでしまうと考えられないだろうか。ビルのドラムもどちらかと言えば理性を強く感じる方であり、ジェイミーの自由と解放を支える存在であったと思う。彼の完全なる開眼はむしろジェイミー脱退後であり、精神的な部分に強く影響があったと言える。そして、性格的部分や楽器部分においてより自然な流れを作る為の橋渡し的存在、もしくは鋭角的に成りすぎるバンドの緩和材となっているのがジョンであろう。楽天的な性格や



ラウドでルーズなベース、ヴォーカルは非常に男性的であるがとてもジェントルで、リズムとメロディの中間に属し、ポリリズムを形成する上で非常にシンプルな軸になったと言えよう。何層にも重ねられたピラミッド状の対極、そして中和的要素を配するなど深い思案があればこそ、完璧な一体感や複雑化した高度な音楽が誕生し完成したと思うのだ。ジェイミーを加えた活動期間は7ヶ月と短命に終っているが、この凝縮された短期間に音楽的理想の大半を実現してしまったと言えないだろうか。後期CRIMSONの均衡が崩れ出す原因はジェイミーの脱退であり、ボブの受けた失望がどれほど大きいものであったかは、徐々にであるがCRIMSONに対する価値の変容によって表われてくると言えよう。又、7thアルバム「Starless and Bible Black」の大半がライヴ録音であった理由も、前作を上回る為の唯一の打開作だったと推測する。ライヴにおける偶然性や緊迫感が、ジェイミーの欠落を補ったと考える。秀作であるがスタジオ・テイクの2曲と前作を聴き比べると、その質の差は歴然としていると言わざるをえない。だが4人編成になった事により、ボブ以外のメンバーが更に明確な姿勢を打ち出し、著しい成長を伴なった事も事実であり、よりきびしい責任を負う事で以前に増した有機的結合を実らせたと言えよう。同じアドリブ展開を2度くり返す事ないCRIMSONのライヴは、正に緊張と興奮に満ち、又反面、不安と苛立ちの連続であったと言える。



新生KING CRIMSON

'81年、ボブとビルは、元F・ザッパ・バンドのエイドリアン・ブリュー(Vo、G)、NYのセッション・マン、トニー・レヴィン(B、Vo)と新生KING CRIMSONを結成した。「Discipline(鍛練、規律)」のテーマは、創造、演奏レベルの向上を目的に、音楽、プレイヤー、大衆の三者が相互作用する物であると言えよう。そして新たな試みはリズムの追求に置かれ、役割も均等に分担化されている。楽曲に関しても、初期や後期に見られた叙情性、魔術的部分は極めて後退し、ポリリズム化、ミニマル化した部分やダンサブルな楽曲が大半である。実験色や即興の部分もむしろボブのソロに近く、CRIMSONの代名詞であったメロトロンも排除され、その必要性もなくなったと言える。新生C-RIMSONは以前とはまったく異質であり、スタイルの変容だけでなく音楽に求める価値も変化したと考えられる。メロディ、ハーモニー、リズムの3位一体を装っているがポイント的な点はあくまでもリズムである。極端な言い方をすれば、メロディ、ハーモニーはリズムをより効果的にする為の装飾、もしくは付随物である。即ち、音楽の発展を突き詰めた結果がリズムであり、ボブとビルの音楽的接点もリズムであると言えよう。3枚のアルバム「Discipline」「Beat」「Three Of A Perfect Pair」に聴かれるアフリカン・リズム、ダンス・リズム、民族系リズム、そしてミニマルなどの様々なリズムが導入されており、複合し融合を計る事でうまくCRIMSON流にアレンジされていると言える。しかしその試みやアイディアも、以前のように意識変革を起こそうとするような、確固たる執拗さを感じる事はない。そしてエイドリアンとトニーの起用も、特異な楽器、奏法を使い個性的な表現力を身に付けている点の他に、彼等が有能なセッション・マンであり、大変柔軟で器用であった点も見逃せないと思う。ボブがCRIMSONで起用したミュージシャンの中でも一番使い安く、それでいて十分に効果的な役割を果したと考えて良いだろう。しかし演奏クオリティの高さはさすがであり、旧CRIMSONと比べても劣る所はない。ボブのクロス・ピッキングなどに見られる技術は、正に精密機械の如く正確無比であり、それでいてスピード感、スリルに溢れていると言えよう。だがこれだけのメンバーによって創られた3枚のアルバムも、発展に関してはそれほど極立っておらず、テーマの本質も「Discipline」に集約されており、他の2枚は単なる延長に終っているのが残念でならない。そして新生CRIMSONのラストを飾る「Larks' Tangues In Aspic III」に見られるコンセプトは、単なるジョークなのか、それとも新世代への啓示なのだろうか。しかしその真意のほどを明らかにせず終焉を迎えてしまった。



ROBERT FRIPP HIS METHOD

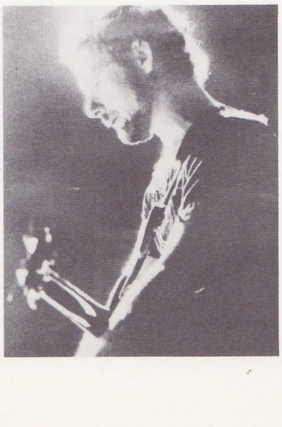
山崎尚洋

1981年。僕は新生キング・クリムゾン結成のニュースを受け取り、ロバート・フリップ自身による声明文を読む。フリップはクリムゾン再開は次の3つのコンセプトから成るという。第一に「クリムゾンとして活動することが生活の糧を得るのに最も効率の良い方法である。」第二に「クリムゾンの活動をフリップにとってのアイディアの試行錯誤の場にする。」第三に「フリップにとってクリムゾンは個人的な訓練の場である。」第二と第三は、特にキング・クリムゾンというグループの中で試みなければならないという強い必然性を僕は感じなかった。僕の当時のこの声明文に対しての解釈はこうだ。「ロバート・フリップは、再び、彼にとって金儲けの効率の良いはずであるキング・クリムゾンを復活させ、金儲けはするが、その落とし前はきちんとつける。」ということだろうと。

もちろん、この動機自体は、彼の創り出す音楽とは何の関係もないはずである。しかし、この声明文を読んだ時、フリップの芸術家としてのあり方が僕の脳裏に明確に浮かびあがってきたことは確かだ。

ロバート・フリップは安定指向のアーティストである。では安定指向とはどういうことかをまず説明させていただこう。

音楽家とは何か？　この問いは人間とは何か？と問うことと同じ漠然とした問いである。しかるに、音楽家とは「音楽という手法（メソード）を通して、自分とは何者か？世界とは何か？自分は何処へ行こうとするのか？真実とは何か？というような問いかたこそ違うが、実は同質である問いに答えようとする人間」ではなかろうか。そして、音楽家（あるいは芸術家）には、大別して破滅型と安定指向型のアーティストがいる。この二者は「生」と「死」というものに対する考え方の違いからくる性質上の違いを有している。破滅型のアーティストは、例え本人がこの哲学的命題に無自覚であろうとなかろうと、「死」というものを否定的に考えはしない。その「死」という行為自体をも、そのプログレスの手段にも選び有る



アーティストである。例えるなら、ジミ・ヘンドリックス、三島由紀夫、ショパン等はこのカテゴリーに属する。一方、「生きて、生の範疇でできる最大限の正直を行う」タイプのアーティストを安定志向型と呼びたい。もちろん、このタイプの芸術家は多い。ロバート・フリップもそのタイプだ。そればかりか、彼は自らの芸術の鍛練の為には、自分をいつも心身共にベストの状態におくことをこころがけてきたアーティストだ。

フリップはアメリカの雑誌「ソルデス」のインタヴュウでジミ・ヘンドリックスの死をこう解釈している。

「ヘンドリックスは『人生自身よりもさらに現実的な源泉』と確かにコンセントレイトしていたようだ。しかし、彼はこの源泉とまともに対決することができずに、それによって殺されたのだ。私達は自分が対決すべきエネルギーが良質であれば、それだけそのエネルギーを受けとめるのに精巧な変圧装置とならねばならない。そしてここに訓練の必要性が生じる。いわば日々の《受信機》を確立するための訓練というわけだ。創造的なミュージシャンはなるべく性能の良いラジオ受信機にならなくちゃいけない。ヘンドリックスの受信機はあいにく性能が最高とは言えなかった。私は彼に一度だけ会い言葉を交わした。ヘンドリックスは確かに私が今まで出会った最も輝かしい人間のひとりだった。彼は驚異的なまでの光を放ったにもかかわらず、あの『源泉』と対峙することはできなかったのだ。」（北村昌士著「キング・クリムゾン」より抜粋）

フリップは生というものをたえず肯定的に考え、ミュージシャンのあり方を「創造的なエネルギーを日常の中にうまく融合させていく」ことと自ら定義しているようだ。

ロック産業という巨大なコマーシャリズムの中で生き、その中でさえ、自己の状態をベストに近いところで保ちながら創造活動を続けていく為には、なるほどフリップの思想は健全で正しいのかもしれない。だからこそ、いくつかの音楽的ピークを数度に渡って迎えられたに違いない。

しかし、生を超えることを恐れていては、秀れた芸術は生まれにくいとも言える。「生」と「死」の可能性に関して意識的であろうとなかろうと、自己のコントロールを失ってさえ、素晴らしい芸術を残したアーティストはいくらもいる。

キング・クリムゾンというグループの歴史の中で、確かにロバート・フリップはグループのブレインであり続けた。しかし、彼の冷徹な視野を持ってしても、他の多くの要因なくしては、あれ程のグループに育つことはなかったといえると思う。特に初期に於いてこの傾向は強く、「太陽と戦慄」以前の作品達は、他のメンバーの感性や、フリップの計算の外側で働いた要因が、それらの作品を生む上でプラスになっていることを気付いてもらいたい。

新生クリムゾン来日の際の記者会見席上で、フリップは古い作品を「若気のいたり」というような言葉で表現していたが、あれは、フリップが自分の意識下にコント



Robert Fripp

ロールできなかった作品群であり、又、それでさえ評価され続ける作品を嫌っての発言であったに違いない。ここにもフリップの独善的で完全主義的な傾向が感じられる。

一方、「太陽と戦慄」以降は、フリップのコンセプトが明確化し、作品群は彼の意識下でコントロール／計算された産物であった。彼としては、自分自身の牙城を形成したそれ以降の活動を評価してもらいたいということなのだろう。

'74年に生じたキング・クリムゾンの解散には様々な解釈があるだろう。この解散はしかし、「太陽と戦慄」以降にすでに生じていた自滅への回路をグループが歩み続けてきた結果生じた運命であるとも言える。

フリップのキング・クリムゾンとしての方法論は「太陽と戦慄」に於いて完成されてしまっていた。彼のギター奏法もここに於いて明確なアイデンティティーを主張し、計算された楽曲とインプロヴァイズドされた偶発的なサウンドは対峙され、全てのフレーズは偶発的に生じたものなどなく、非常に良いバランスで、かつ明晰に分析され、吟味され、構築されていた。さらに、フリップもまだ若く、若いが由のロック的ダイナミズムも強烈なエナジーとなって発散された。キング・クリムゾン＝ロバート・フリップという図式にたちもどるのであれば、これが彼のロックというフィールドで成し得た最高作であると言い切ることに僕は躊躇を感じない。以降、彼はこのマスターピースを自己模倣し、様々に衣がえした楽曲を着せてグループを存続させ、新たなる地平を探して暗中模索したのだ。そしてその地平への契機を見い出せないままにキング・クリムゾンは自滅した。

'74年以降'81年までの空白は、フリップの新たなる地平を求めての実験と自己修練の期間である。この結果、キング・クリムゾンは新しいポリリズムという音楽的新境地をひっさげて再浮上することになる。この新生クリムゾンは計3枚のアルバムを発表、再び沈黙するわけだが、キング・クリムゾンがロック・バンドという宿命を背負っていた以上、「太陽と戦慄」を超える為には、当時の若さに変わる「何か」が必要であった。それを手に入れないままに新生クリムゾンが始動した為に、評価は2つに分かれることとなった。支持者は音楽面でのハード的な評価がその基本となっているのに対し、否定的なファンの耳には、当時の若さのエナジーが生み出した何かを見い出せなかったのだと思う。そういう意味ではキング・クリムゾンでさえ、'81年には形骸化してしまったと見ることも可能だ。しかし、これらの3枚の新生クリムゾンのアルバムで聴けるポリリズムの戦慄とインプロヴァイズド・ミュージック、あるいはポップ・ミュージックとの融合体の音楽的魅力は素晴らしく、ポリリズムによって生じる様々なギミックと迷宮的な宇宙は、元をかえせば、神秘主義とかオカルトとかいうものを飛び越えて、フリップの、生の内側から探究する世界の意味への挑戦が再び音楽として明確化されたものだ。フリップという人間は、いかに年をとっていこうとも、その時その時に彼の能力でできうる最大限のものを作品に投下していけるだけの力を持っているアーティストであり、それは生の内側から世界を浸食するという彼のライフ・スタイルが明確化された時から続けられるディシプリンでもある。これ程のアーティストが存在しながらも、否定的なファンが増すということは、ロックというものが内包する方法論の問題と交差するのではないか。元来、若者の音楽であるロックというものの性質が、生というものに対して否定的なベクトルを持ち有るものであったということを今一度考えてみる必要がある。ロバート・フリップの芸術とはロックという宿命との戦いでもあったわけで、彼のコンセプトが明確化した日から現在まで、彼のスタイルが深化していけばいく程、ロックから遠ざかろうとする奇妙な性質が、再びキング・クリムゾンを自殺においやったのではなかろうかと思う。

ピート・シンフィールド

賢者 そして幼子であること

訳と文●高山直之

Pete Sinfield



彼女の名を呼ぶ　月の子供と
河の浅瀬で踊る
一人ぼっちの月の子供
柳の影で夢見る

見慣れぬ蜘蛛の巣の張った木々に語りかけ
泉の踏台に眠る
夜鳥の歌に魔法の杖を織り
向こうの山から陽が昇るのを待っている

彼女は月の子供
庭の花々を摘んでいる
愛しの月の子供
時のこだまの吹きだまり

乳白色のガウンで
風に乗って飛んで行く
夜明けの亡霊とかくれんぼ
太陽の子の微笑みを待ちながら

『Moonchild』

詩人とは、ロマン派的な言い方をするならば、司祭・予言者でありまた同時に子供でもあるような存在である。1969年に発表されたKING CRIMSONのデビュウ・アルバム「クリムゾン・キングの宮殿」の意義は、単に高度な音楽性や演奏技術だけでなく、それらとピート・シンフィールドの詩との有機的な結合によってこそもたらされたものであった。それゆえ初期C-RIMSONに於いて彼はPROCOL HA-RUMのキース・リードやエルトン・ジョンにとってのバーニー・トーピン以上に重要な存在だったと言えるだろう。特に同作は彼の象徴性と装飾的な美を備えた詩と音楽との見事な結晶体である。『21 Century……』『Epitaph』の予言的ヴィジョン。そしてこの『Moonchild』の煌めき。当時これを「お伽噺」と一笑に付した評論家がいたが、いわゆるお伽噺こそ古来からの普遍的な知恵や秘儀伝授、C・G・ユングの言う「元型」の宝庫たる文学形態であることは今や世の認める所である。因みに錬金術の二元論にあって月とは女性原理の象徴であり、それは近代的理性によって抑圧された夢や無意識、魔術の領域の象徴とも見ることができるだろう。

われは炎に照らされし大海
われは高き山
わが名は平和
われは風にさざめく川
われは物語
けして終わることはない

『Peace / A Biginning』

永い歴史の中で抑圧され、今再び見直されている幻視豊かな民ケルト民族。古代ケルトの司祭ドゥイルド僧の詩人頭アマーギンが吟じたとされる詩に次のようなものがある。

われは海を渡る風／われは深き淵の波／われは七度戦いし牡牛……

この詩は、ケルトの世界観、輪廻転生の死生観を表したものとして度々引用され、この形式は後の詩人たちにも使われているが、シンフィールドもやはりそうしたものからインスピレイションを得ていたものと思われる。

まだ僕は小川がどうして小川なのか訝しい
暗き泉より絶え間なく流れ行き
海へと蛇行する苔むした太古の車輪
もう知らずとも良いことだろうか
まだ僕は木がどうして木なのか訝しい
季節をめぐる奉公人
ただ空に呼吸し、冬の風をかき集める
そうすればもう
確かな理由などいらなくなるだろうか

まだ僕は何故自分がここにいるのか訝しい
この美しい星をなぞろうとしても
僕の言葉はすべてただの空ざおの柄
自分の尾を追いかける犬みたいに
仕立屋、鋳掛屋、王子様にインカ人たち
船乗り、彫刻師、僕の前の僕に似た人々

まだ僕は鳥がどうして鳥なのか訝しい
夜明けのたびに甘く歌いさえずり
世界がうつろえば遠く羽ばたく
もう確かな結論を求めることなく……

『Still』より

フランスの詩人ピエール・ジャン・ジューヴは「感嘆する心をもつことは、こども時代を学ぶことである」と説いた。そしてここには生まれたばかりの子供のような眼で世界を見つめる詩人の魂が剝き出しにされている。世界が不思議に満ちていること。それを問い続けること。かつて（あるいはこれから）鳥であり、小川であり、木である自分への想い。CRIMSON脱退後に制作したソロ・アルバム「Still」の表題詩には言葉の装飾から手を休め、ふと自分自身を見返す詩人ピート・シンフィールドの“想い”が込められている。これを経てのち、彼がELPの「Works」や「Love Beach」の為に書いたどちらかと言えば直截なラヴ・ソングには大人になってしまった者、職業詩人たる自分自身への後ろめたさも感じられるが、むしろ彼自身にとってはこれで良かったのかも知れない。幻視者、司祭、予言者そして子供であり続けることの苦しみは他者には決して推し量れないのだから。

風に語りかければ
言葉は遠く運ばれて行く
風に語りかけても
風は耳を傾けず
風に私の言葉は届かない

『I Talk to the Wind』より

風に語りし者の詩。彼が紡いだ言葉はハミルやジョン・アンダーソンと比しても最も純粋な詩人による宝石として、風に散らばることなく私達に届き、未だ輝き続けている。



In The Court Of The Crimson King

'69

1969年に発表されたキング・クリムゾンの記念すべきデビュウ・アルバムである。G・G＆Fの頃にフリップの頭にあった西洋音楽における構築美とジャズからの即興演奏を取り入れたスタイルを見事に完成させている。静と動の対比によるドラマティックな展開を持つタイトル曲等、R・フリップ、I・マクドナルド、G・レイク、M・ジャイルズ、P・シンフィールドの5人だからこそ、ここまでのシンフォニー（宮殿）を築き上げる事が出来たのだと納得させられる。フリップの神秘主義、ピートの幻想的な詩の世界が一体となり正にプログレッシヴ・ロックのバイブルとなった。（金井）



In The Wake Of Poseidon

'70

前作を発展させた「ポセイドンのめざめ」はA面が同タイプの曲、曲順で『ケイデンス＆カスケイド』のみゴードン・ハスケルが歌っている。攻撃的なA②、美の象徴といえるA④。B面に移ってキース・ティペットのピアノが光る『キャット・フード』、洪水のように押し寄せるメロトロンと狂気のようなアンサンブルを聞かせる『デヴィルズ・トライアングル』では『クリムゾン・キングの宮殿』が一瞬挿入されたりしている。アルバム発表後、マクドナルド＆ジャイルズ、グレッグ・レイクはEL&Pへとメンバーはそれぞれの活動に入り第一期クリムゾンは終わった。（金井）



Lizard

'70

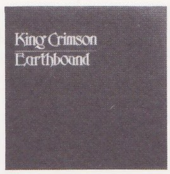
'70年暮れに発表された3作目。形式的には、以前の2枚のアルバムを土台にしながらアンサンブルを大切にした部分よりもソロ・パートを重要視した作風になっている。これはキース・ティペット・グループに依る所が大きい。次作「アイランズ」では益々その傾向が強くなる。G・レイクの後釜として加入したゴードン・ハスケルは今一つクリムゾンに溶け込んでない様子でB面の組曲『リザード』の一曲目で歌うゲストのジョン・アンダーソンの方が印象深い。アンドリュー・マックロックの素晴らしいスティックさばきはこのアルバムがベスト・プレイではないか。（金井）



Islands

'71

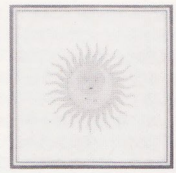
M・コリンズとP・シンフィールドそしてK・ティペット・グループを残してメンバーを入れ替え、ベースとヴォーカルにボズ・バレル、ドラムスにイアン・ウォーレスを迎えた。前作にも増してジャズ色が強くこれがクリムゾンかと思う程、らしくないのである。M・コリンズが各所に於いて健闘しており、演奏面ではフリップは影に隠れてしまっているようだ。また『レターズ』『アイランド』でのボズの味のあるヴォーカルは聴き所といえる。クリムゾンとしては、初の管弦楽曲『プレリュード：かもめの歌』はアコースティックでとても美しい曲に仕上がっている。（金井）



Earthbounds

'72

イギリスでのみ発売された'72年のアメリカン・ツアーのライヴである。カセット録音の為、音質は歪みっぱなしだがR・フリップ、M・コリンズ、B・バレル、I・ウォーレスの4人による格闘をしているような壮絶な演奏を聴く事ができる。ここでの主役もやはりM・コリンズである。とにかく絞り出すようなサックスのアドリブの連続で構築美も幻想も美しいメロディ・ラインのかけらもない。『21世紀の精神異常者』『セイラーズ・テイル』シングルのB面の未発表曲『グルーン』の他2曲はブルーズっぽいインプロヴィゼイションでひたすらアグレッシヴ。（金井）



Larks' Tongues In Aspic

'73

6枚目にして後期クリムゾンの1st アルバムとも云える本作は、黄金期のラインナップであるB・ブルッフォード、J・ウェットン、D・クロスにJ・ミュアーを加える事によって音楽的にも演奏面に於いても頂点を極めた傑作である。各曲で聴かれる民族音楽からのアプローチに加えJ・ミュアーの鬼気迫るパーカッションがクリムゾンに与えた影響は凄まじい物がある。『イージー・マネー』『エグザイルス』『太陽と戦慄パートII』等のライヴでは、お馴染みとなる名曲も生まれた。また魔術、秘儀といった思想にフリップが傾倒していったのもこの頃である。（金井）



Starless And Bible Black

'74

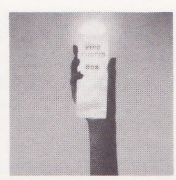
'74年に発表された「暗黒の世界」では、既にJ・ミュアーは脱退してしまったが、その意思はB・ブルッフォードが受け継いだと云ってもよいプレイを聴かせてくれる。激しい渦のようなリフで始まる。『グレート・ディシーヴァー』、ピートの装飾的な詩とは、対象的で難解な詩を書くR・P・ジェイムス、『ラメント』『ナイト・ウォッチ』では男性的で魅力あるヴォーカルをとるJ・ウェットン、『トリオ』での美しいヴァイオリンはどうだろう…。それとは対極的にB面は、完全に光の介入を拒絶した闇その物である。次作「レッド」では、更にこの世界は強調される。（金井）



Red

'74

解散発表の翌日にリリースされた曰く付きのラスト・アルバム。圧倒的な迫力で迫ってくるタイトル曲をはじめ、最後の悲しみを湛えた『フォーリン・エンジェル』そしてクリムゾンの歴史の最後を飾る『スターレス』は、とても3人とは思えない壮絶なエネルギーに満ちている。バンドが危機状態だったにもかかわらず、ウェットンとブルッフォードのコンビネーションは、最高頂を極めておりエンディングを迎えた後の脱力感は、一種のカタストロフにも似た感動を覚える。ゲストとしてD・クロス、M・コリンズ、I・マクドナルド他が参加している。（金井）



USA

'75

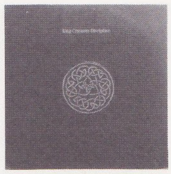
'74年のアメリカン・ツアーを収めたライヴ・アルバム。フリップ&イーノのテープを掻き消すように攻撃的なギターのリフで始まり『太陽と戦慄パートII』が演奏される。引き続きウェットンのヴォーカルが冴える『ラメント』『エクザイルズ』スタジオ盤よりも躍動感溢れるパワーを放ち充実したプレイである。ブルッフォードの叩き出すリズムを縫うようにしてウェットンとフリップが激しいインタープレイを繰り広げる即興演奏『アズベリー・パーク』。ツアー・メンバーの4人に加え、エディ・ジョブソンがスタジオでヴァイオリンとピアノをダビングしている。（金井）



The Young Persons' Guibe To King Crimson

'75

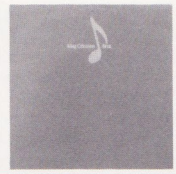
'75年の9月にフリップの選曲、編集で発表されたベスト・アルバム。「リザード」を省いた1st から「レッド」までの6枚から配分よく選曲されている。'70年にリリースしたシングル『キャット・フード』のB面の未発表曲である『グルーン』はフリー・ジャズ的なナンバー。『風に語りて』では、ジュディ・ダイブル（後にT-RADER HORNE を結成）がグレッグ・レイクとは、また一味違った美しいヴォーカルを聴かせてくれる。暫くこのベストは廃盤で入手が難しかったが、CD で再発されたのでこれからクリムゾンを聴きたいと云う人には良い機会と思う。（金井）



Disciplin

'81

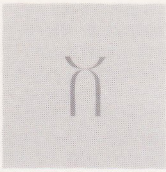
7年を経てキング・クリムゾンが復活した。'81年に発表された「ディシプリン」。新生クリムゾンには、B・ブルッフォードをはじめ、ザッパ・バンド、ボウイ、トーキング・ヘッズで活躍したエイドリアン・ブリュー、数々のスタジオをこなしているトニー・レヴィンの3人が召集された。バリのケチャに用いられる音階、ポリリズム等のエスニックな要素を消化した新生クリムゾンのサウンドは、正確無比なフリップのシーケンサーのようなギターに効果音はカッティングで責め捲くるブリューの対比を核としているが、ブリューの歌い方は、まるでデヴィッド・バーンである。（金井）



Beat

'82

翌、'82年の2作目タイトルも「ビート」とクリムゾンにしては、異常と思える程解り易くポップな内容である。リリックス・バイ・エイドリアン・ブリューとクレジットされている通り、彼のヴォーカルと個性を強調して益々、トーキング・ヘッズに似てきた。ブルッフォードのトレードマークとなってしまったシモンズのエレ・ドラを駆使して複雑な変拍子を叩き出し、レヴィンは、スティックで異様に低い音域のフレーズを並べていく。前作での方法論を更に押し進めた内容である。ラストの『レクイエム』で後期クリムゾンを彷彿させる即興演奏が聴ける。（金井）



Three Of A Perfect Pair

'84

'84年、3作目にしてラストの作品である。この間に新生クリムゾンは、2度の来日公演を果たしている。3部作で完結するというこのアルバムのタイトルのスリーとは、音楽、プレイヤー、聴衆を意味する。フリップによれば、「バンドの内部にある二つの混合した面を表している」という訳でA面には、ポップな曲、B面には、プログレッシヴな曲をという具合に配置している。基本的には、前2作の延長線で新鮮味には欠ける。新生クリムゾンのラストを飾るのは、何と『太陽と戦慄パートIII』だが、以前のような緊迫感や荘厳さは感じられない。　（金井）



GILES, GILES & FRIPP

Cheerful Insanity

'68

本作はCRIMSONを知る上で、とても重要なGILES GILES & FRIPPの唯一の作品である。ロックの持つエネルギッシュな面や、強烈な個性はあまり感じられないが、クラシック、ジャズ的要素や実験的色相いを見せるなど、地味ながらも大変に良質と言える。各人共、安定した演奏を行っており、ボブのギターに関しては、バッキング・プレイ、フラット・ピッキングによるアルペジオなど特筆すべき物があり、それらはソロ・プレイよりも素晴らしいと言えよう。CRIMSONと比べなく聴けば、独特なユーモア・センスやF・ザッパ的な部分があったりして、魅力ある作品と思われる。　（村上）



McDONALD AND GILES

same

'70

KING CRIMSONのオリジナル・メンバーであった、イアン・マクドナルドとマイケル・ジャイルスによる唯一のアルバムが本作品である。自信と余裕に満ちたイアンの才能が、アルバムの随所に光っており、彼のソロ・アルバムと解釈してもおかしくないほどである。融合に見られる複雑化した音楽の根底には、BEATLESからの深い影響と敬愛があり、作曲、アレンジに対する、一つのRootを垣間見る事が出来る。又、アコースティック楽器の配置、配色、シンフォニックなアレンジ等は、CRIMSONと並び、初期GENESIS辺りへの、手本になったと思われる部分もある。　（村上）



PETE SINFIELD

Still

'73

初期CRIMSONに見られた構築性は明らかに詩の効力を最大限に発揮させる為の方法論であり、相互が細部に至る迄干渉し合う事でイメージの同一化を計り、切り離して物語る事が出来ないほどの一体感を生み出したと言える。詩は音と共に、音は詩と共にある関係がピートの理想、創造的価値と存在価値であったと言えよう。脱退をし、ソロ・アルバムを製作するにあたり、想い描かれた理想が初期CRIMSONの1stであり、そこへ立ち戻ろうとしたのは言う迄もない事だ。サウンド的にはELPとCRIMSONの中間に位置するが、そこにはCRIMSONが失った暖かい美と愛が確かに存在する。　（村上）

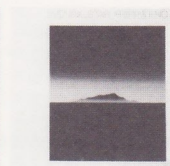


GORDON HASKELL

It Is And It Isn't

'74

本作はCRIMSON脱退後のソロ2作目。ヴォーカル・アルバム色の濃い1作目に比べ多様な面をも見せるシンガー・ソングライター作品。彼の持味は、内省的で素朴な語り掛ける様な唱法でありながら、妙な説得力を持ったヴォーカル・スタイル。「リザード」でのヘヴィな曲は、彼の声がスタジオ処理されていたのを思い出す。すでに骨太なベースを聴かせるジョンと共にフリップと古くから親交のあるアランが参加。FIELDS結成以前に当るこの時期の彼は、同じドーセット周辺の出身アンディ・サマーズのように堅実な職人気質を感じさせるプレイを聴かせる。　（吉野）

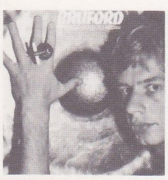


FRIPP & ENO

Evening Star

'75

KING CRIMSONのロバート・フリップと元ROXY MUSICのブライアン・イーノは、「No Pussyfooting」（ISLAND HELP 16）と本作を、それぞれ'73年と'75年にリリースした。テープ・ループと一種のフィード・バック効果をねらったギターによるサウンドである。前作が実験的なイメージが強いのに対し、本作になると、音楽的なハーモニーも重視されてきており、非常に叙景的なものに変化した。感覚的に聴ける要素が加わったことにより、セールス的にも成功した作品である。イーノはオブスキュア・レーベル設立へ、フリップはフリッパートロニクスへの布石となった作品。　（山崎）

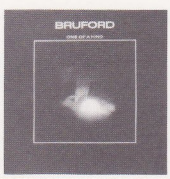


BILL BRUFORD

Feels Good To Me

'77

元HATFIELD & THE NORTHのキーボーディスト、デイヴ・ステュワートの全面的な協力によって完成された本作品は、単なるドラマーのソロなどではない良質な作品であり、クレジットに見られるように、作曲家としても並々ならぬ才能を発揮していると言える。変拍子などを巧みに取り入れたタイトで幾何学的なサウンドと、アネット・ピーコックの特異なヴォイスに見られる試みは、とても実験的であり、そしてそこには創造的な意思と常に進歩しようと努力するアーティストとしての真剣な姿勢が感じられると言って良いだろう。　（村上）

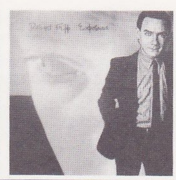


BRUFORD

One Of A Kind

'79

KING CRIMSON以後のビル・ブラッフォードの活動範囲は非常に広く、音楽ジャンルとしての指向性は不明確だ。半面、自己のスタイルやドラミングそのものの追求は徹底しており、常に質の高いプレイをしている。多くのミュージシャンに影響を与えた事も周知の事実であろう。本作はグループBRUFORDとしてのデビュー作で、彼のリーダー作としては2作目にあたる。当時は"元KING CRIMSON"という肩書きが彼の評価を左右していたが、客観的に見たレヴェルの高さは誰もが認めるだろう。リズムの面白さを重視した個性的な作曲法は高く評価したい。　（沢田）

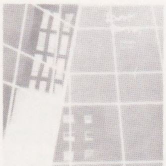


ROBERT FRIPP

Exposure

'79

P・ゲイブリエル、D・ホール等をプロデュースし、共演を続けて来たロバート・フリップの、実験の成果とも言うべき結果が本作品であり、彼のファースト・ソロ・アルバムである。イーノの影響か、アルバムは全17曲の小曲によって構成されているが、どれも素晴らしい出来であり、ゲスト達の強い個性がオーガナイザーであるフリップのコントロールによって、より一層の力を発揮していると言えよう。特にP・ゲイブリエルの『Here Comes The Flood』は、ヴォイス、ピアノ、フリッパートロニクスの配色によって、オリジナル以上の美を生み出していると言える。　（村上）



DEREK BAILEY & JAMIE MUIR

Dark Drug

'81

もしフリップがミュアーに出会わなかったなら、あの後期クリムゾンは、なかったのかもしれない。実践上ミュアーの触発がどれほど大きかったかは、『太陽と戦慄パートI』によく示されている。一柄にミュアーを理解したフリップの明晰さだ。脱退後、彼は僧侶になったと伝えられた。これは、かつて一度顔を合わせているCOMPANYの著名フリー・ジャズ・ギタリストとのデュオである。'81年8月の録音だ。極めて感覚的な彼のパーカッション・プレイが、ベイリーのギターによく反応している。互いにツボを得てテンションもある。ジャケットもミュアーによるもの。　（松本）



DAVID CROSS

Memos From Purgatory

'89

長い沈黙を破り、'80年代後半になって突如として営業を再開したデヴィッド・クロスのソロ作品。全体として現代的なアレンジを施したヘヴィなジャズ・ロックという印象が強いが、それでも曲間をぬって繰り広げられる彼のヴァイオリン・プレイは一筋縄ではいかぬ強烈な個性を有しており、曲によってはあの「ひばりの舌」の影もちらつく。ともするとニュー・エイジになってしまいがちな曲調を「カッコイイ」と思わせてしまうセンスは流石、メロディアスな部分も実に上手くアルバムのカラーに溶け込んでいる。休業期間がムダではなかったことを示す好作品。　（内田）



JOHN WETTON

Caught In The Crossfire

'80

自分の好きな事のできるソロ・アルバムで、この音なのだから、ウェットンはこういう音が本当に好きなのだろう。明らかに後のASIAへの布石といえるポップな曲と、泣き系の曲が程よくブレンドされ、業界屈指のヴォーカリストとしてのウェットンが前面に押し出された"歌物"アルバムといえる。B④はほとんどURIAH HEEPの『Woman Of The World』なので笑えるが、パクリ（？）の曲でも歌い出した瞬間に存在感を感じさせるのはさすが。プレシジョン・ベースを持って歌う姿を再び目にしたいものだ。
（ASIA来日時のベースは、サモ・ハン・キンポーだったから……。）　（川上）

GENESIS

古田 賢

ジェネシスが、ブラックな笑いを含んだ歌詞とヴォーカリストの異様なパフォーマンス、ムーディ・ブルースやキング・クリムゾンに比肩するシンフォニックな音楽性でヨーロッパの人々の耳目を集めるのは、通算3作目にあたる「Nursery Cryme」発表後のことであった。フィル・コリンズ、スティーヴ・ハケットという有能なミュージシャンを迎え、それまでの牧歌的で内向性の強いグループの音楽に新たな活路を開いたアルバムである。この時点で、正体不明の個性がしのぎを削るブリティッシュ・ロックからまたひとつ新しいスタンダードが誕生したわけだが、ジェネシスの衝撃力はむしろイタリア、フランスに強く及び、本国で明らかなフォロワーが登場するのは'70年代後半、イギリスのロックが停滞期に入ってからになる。

ジェネシスの特徴的なスタイル、その礎を築いたのは、オリジナル・メンバーで12弦ギターを得意とするアンソニー・フィリップスであった。再デビュウ・アルバム「Trespass」の全編に渡って展開されている、アコースティック・ギターによる多面的アプローチは、ヴォーカルやキーボードなど他のどのパートをも凌駕し、完成の域に限りなく近付いていた。残念なことに、あまりの内向的な性格ゆえロック・ミュージシャンとしての活動をあきらめ、バンドとしての完成を見ないままみずから身を引いてしまったアンソニーだが、彼の方法論はトニー・バンクスとマイケル・ラザフォードを仲介役として、スティーヴ・ハケットに受け継がれる。というより、この3人によってアンソニー・フィリップス個人の好みは、ジェネシスの個性へと昇華されたのだ。

フィル・コリンズを除くメンバー全員が、ロック・ミュージシャンのイメージとはおよそ掛け離れた大人しい性格のため、初期はかなり神経質なギグが続いたという。曲間の気まずい空気を埋める苦肉の策が、ゲイブリエルのあのアドリブ・トークだ。それは次第にメイク、奇抜な衣装へと発展し、彼は憑かれたように一見無意味なパフォーマンスに拍車を掛けていった。

ジェネシスの歴史は、自己愛と対人恐怖が交錯するゲイブリエルの歴史でもあった。「Trespass」中の一人称《I》がゲイブリエルなのか、あるいは作中の主人公なのかは不分明のままであるのに対し、「Nursery Cryme」以降の歌詞中の《I》は、いったん第三者に仮託されたそれ——つまりゲイブリエルにとってはシェルターのようなもの——に成りかわっている。結局はどちらもゲイブリエルであることに違いはないのだが、性質の差は明白である。

シェルターに亀裂が生じ、ゲイブリエルの内部で自己が分裂をはじめた時期に制作されたのが「幻惑のブロードウェイ」で、ゲイブリエルの人格はここでひとまず円環を閉じ、ジェネシスもひとつの時代を終える。ゲイブリエルが描こうとしたもうひとつの円、その第一歩はロバート・フリップとの共同作業、セカンド・アルバムにあたるだろう。一方ジェネシスはアルバムごとに同心円を増やそうとつとめるのだが、いつしか中心は横すべりして、現在に至っている。彼らも、ピンク・フロイドやその他ビッグ・ネームと同様、たまには再会してアルバムを作るといった程度にしか、もうバンドに興味を持てなくなってしまったようだ。

マニアックなプログレッシヴ・ロック、ユーロ・ロックの世界において、ジェネシスほどの影響力を発揮したグループは他にいない。事の良否を問うているのではなく、またジェネシスの優位を証明したいのでもない。これは



事実だ。

試しに、'80年以後に出たプログレッシヴ・ロックと名の付くレコードを聴いてみるといい。ランダムに10枚選ぶとすると、その内の7～8枚にジェネシスからの引用かパクリを指摘できるだろう。

知っての通り、ジェネシスの主なメンバー達は幸運なことに"それなり"と言うにはあまりに大きな成功をおさめている。現在の彼等を仮にポジとすると、'80年以後のプログレッシヴ・ロックという特殊なシーンの中でのジェネシスはネガと言うべきものでしかない。なぜネガなのか。それは、当人達のあずかり知らぬ場所で畸型的な発展を遂げたという、否定的な結末しか意味しないからである。"ジェネシス・タイプ"という定番の形容もあるように、最初から地に堕ちている価値をこりずに再生産する運命にあるのが、すなわち私を含むジェネシス・ファンの形成するシーンなのだ。

彼等が今のショウ・ビジネスの世界で成功すればする程、ネガとしてのシーンにも一種異様な一体感が生まれはじめる。

彼等がある時点で捨てたもの、ジェネシスの人格があるシステムに順応するために捨てざるを得なかったものがいかに特異な形態をとっていたにせよ、それが人間の青年期を普遍的に貫く性格のものであるという意味では、ロックが持つ一般的な性格にぴったり符合するはずである。



例えば『Supper's Ready』は当時のジェネシスがとりうる有効な手段のひとつではあったろうけれども、ベストだとは誰にも言えまい。ところがジェネシス・タイプと呼ばれるグループの多くは、『Supper's Ready』の方法をとることで、自身の心象をジェネシスと同じくらい効果的に表現出来ると信じ込んでいる。これがまったくの勘違いであることは言うまでもない。

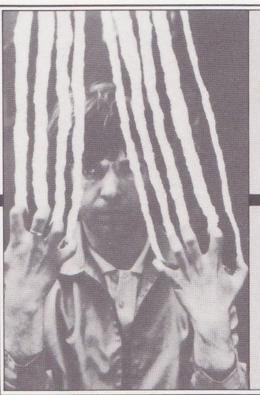
確かに、ジェネシス自体にも、こうした状況を生んだ要因はある。私のような素人にもすぐそれと分かる特徴的なコードと構造を持ち、超絶的なテクニックを必要とせず、おまけにヴォーカルはあの極端さである。ジェネシスの音楽は最終的に"かたち"へと集束してゆく。内部でどんな葛藤があるにせよ、"かたち"のまとまらない次元で彼等の美意識が発揮されることはなかった。ツアーに出れば、同じ構成、同じソロ、同じ長さの曲が毎晩繰り返された。これはこれで、ジェネシスらしさの一端ではあった。

'70年代のジェネシスの音楽と独自性は、充分古典の名に値する。だから古典として聴き継がれてゆく事に何の不満もありはしない。ただしその場合、話をブリティッシュ・ロックの枠内にとどめておくべきだ。人々が当時のジェネシスを愛するのは、イギリスに生まれ育ち、ブリティッシュ・ロック律動の現場に立ち会い、彼等なりの産みの苦しみを味わいながら独自の音楽を創造した姿を通して、その向こうにあるイギリスという国の風土に触れることができるからではないのか。正にそこにのみ、ジェネシスの普遍性はあると思う。



L'ANGE GABRIEL

中野泰博



音楽のみならず絵画でも文学でも、いわゆる創作活動において後世に名を残す人間は、追従者を多く生み出す反面、当人は一定のスタイルに満足する事無く新しい方向を模索し続けてゆくものだ。「Trespass」から「The Lamb Lies Down On Broadway」までのジェネシスが創り出した音楽性なら、危険を犯してまでソロに転向しロックンロールから始める必要は無く、たとえばPINK FLOYDのようにナツメロのヒットパレードで数万人の観客を満足させる事が、10年後でも出来るのである。コピーであるMARILLIONさえ活動可能なスタイルを創り上げたゲイブリエルは、しかしそこに止まらなかった。

彼の脱退前後のイギリス音楽シーンはパンク～ニュー・ウェーブの嵐の真中で、過去の価値観を一度ゼロにする所から始まっていた。現在はロックの一ジャンル名となった「プログレ」が時代をリードしたのは誰もが認める通り'70年代中半までであり、その後音楽の現場はニュー・ウェーブと呼ばれて世代が交替した。当時の大物バンドはそれゆえフットワークが重く、ポップスの世界に居残るか、解散を余技なくされていた。ニュー・ウェーブの大きな特徴のひとつに斬新な音色と切れの良い構成があったが、ゲイブリエルが初期のアルバムにおいて試みたのもその点だった。GENESIS時代に培った変幻自在のヴォーカル・ワークはそのままに、小僧には書けない何重にも含みを持つ歌詞を時代の音に乗せた彼のアルバムは当然の事ながら評価されない訳は無く、'79年当時においてもベスト・ヴォーカリストに挙げられていた。さらに彼の転機となったサード・アルバムはオープニングのゲート・リヴァーヴ音に話題が集中しがちだが（たしかにその後10年にわたり、このドラム処理は世界中に流用されたが）やはり注目すべきは『ビコ』に代表される第三世界音楽の導入だろう。現在ようやく「ワールド・ミュージック」等と呼ばれてファッショナブルな注目を浴びてはいるが、当時のロック・ミュージシャンの音楽探究はたかだかソウル・ブーム止まりであり、彼の様な試みは皆無であった。この彼の方向性は'80年代を通してその正統性を立証するに至った。

4枚目において、さらに大幅なフェアライトの導入により、彼の音楽はその音色までもが完全な独自性を持ち始める。その前のシンセサイザーにしても99%の音楽家が既成の楽器のイミテーションか、オルガンのお化けとしての使用法しか出来てはいなかったのに、ゲイブリエルはこの「どんな音でも出る楽器」を「聞いた事の無い音を出す楽器」として使用する事により、コピー不可能の音楽性までを確立して行ったのだ。もっとも4枚目の内容自体はまだ過渡期を思わせる部分も多く、外野からの評価はさほど高くは無かった。

そして次作「So」において到達した進歩とポップの融合は全米No.1という信じられない成果を上げた。高度な内容を持ちながらも決して難解では無い音楽とは、正にこのアルバムの事だろう。くどくは書かないが同時に制作されたビデオ・クリップにしても、あらゆるメディアから絶賛された。

しかしゲイブリエルは彼にとって最大の人気と名声を得たこの時期に、活動の場と収入の全てをアムネスティ平和運動とワールド・ミュージックをリリースするためのスタジオ制作につぎ込んでしまう。（ポップ・スターに安住し、自家用ジェット機やプール付きの豪邸を持つ事だって出来たろうに）

その成果として昨年リリースされたのが、オール・インストゥルメンタルの「Passion」である。WOMADにおいて親交を深めた、アフリカ、パキスタン、エジプト等からの実力あるアーティストをゲストに参加させ、数々の音源を用いて展開される音世界は、かつての高い文学性を持った歌詞と表現力に溢れたヴォーカル・ワークを捨ててなお、圧倒的な内容であった。ひとつひとつは各国の民族音楽をモチーフとしながらも全体として大きなうねりを持ち、言葉にならない声と音響処理により、ほとんど神がかった感動を与えてくれる。いわゆるロックの楽器音は何ひとつとして聞かれないこのアルバムこそ、真のプログレスとは何かを教えてくれるだろう。過去に知った感動の何%かを再体験するために似たようなつくりの音楽を求めるのは愚かな事だ。未知の領域に踏み込み、自己の知識と感覚を拡大させ、試行錯誤をくり返しながらも新たな高みを目指す、ゲイブリエルの音楽はなお現在進行形である。

ジェネシス——天使の率いる悪魔のバンド

内田哲雄

イギリス人の放つ一種独特のユーモア感覚の本質は「逆説」にあると思う。彼らは文学や演劇をこよなく愛し、それらを育んできた祖国の伝統に対して人一倍強い誇りを持っている（大英帝国なんて言葉も未だ残っているしね）。しかしその反面、国営放送BBCのコメディ番組で自国の文化や歴史をキツーク皮肉ったり、王室の人間を徹底的におちょくったりしているのである。こうした感覚は日本人には理解し難いかもしれないが、その中に潜む「ふくみ」の部分に彼らの自国への愛着心が感じられ、思わずニヤリとさせられる。つまりストレートに自分の本心を見せず、ウィットやアイロニーのオブラートで包み込んでしまうのだ。この一風ひねくれた感じのする裏返しの部分、つまり「逆説的」な感覚こそイギリス人のユーモアの本質であり、一見とっつきにくそうだけど一度そのとりこになると「ニヤリ」とか「クスクス」といったふくみ笑いがなかなか離れない（アメリカや日本のスラップスティック・コメディにおける「ゲラゲラ笑い」とは質的に異なる）。こうした独自のユーモア感覚、そして文学や演劇を偏愛するといった「イギリス気質」が如実に感じられるロック・グループといえば、初期、すなわちゲイブリエル在籍時のGENESISに他ならない。彼らはこうした気質をかたくなに守る貴族階級の出身であり、その意味ではイギリス特有の上流意識がにじみ出たグループともいえるだろう。

初期GENESISがリスナーを魅きつけるファクターの大部分はゲイブリエルの存在にあった。彼のヴォイスの表現力（いわゆるシアトリカルというやつ）は極めて個性的であったし、ライヴでは様々なコスチュームを身にまとい、観衆の目をクギづけにした。他のメンバーの演奏も彼の個性を浮き立たせる裏方に過ぎなかった（しかしトニー・バンクスとの相性は実にヨイ）。'80年代に入り、多くのポンプ・ロック勢が彼の唱法をマネた（ほとんど声帯模写）ことからも影響がうかがえる。しかし重要なのはそうした表層的部分ではなく、その先だ。彼らの描き出す世界はよく「奇怪なファンタジィ」といわれる。なるほど彼らの用いた題材はマザーグースやギリシャ神話、童話や幻想文学などがバック・グラウンドになっている場合が多い。しかしなぜ「奇怪」なのか？　もちろんそれは表現者ゲイブリエルの何かに怯えたような唱法によるものだろうが、ただ気味悪い歌い方をするだけなら単なるお遊びだ。何回か聴けばメッキがはがれてしまうだろう。彼らがファンタジィを題材として選択するにあたり、あのような表現形態をとった裏には必然性があるはずだ。思うに彼らはイギリス人特有のユーモア感覚、すなわち冒頭で述べた「逆説」によってファンタジィを料理することでその中に元来潜在的に眠る「奇怪なもの」を浮き立たせようとしたのだろう。そしてそれらをイギリス人が最も好む演劇という形態で表現したのだ。ゲイブリエルの一見こっけいとも思えるステージ・コスチュームもこうして考えると説得力がある。曲の合い間における彼のおしゃべりに対して、観客はあの独特の「クスクス笑い」で答えるのだ。彼の裏側を見透かす鋭いヴィジョンがなければ、GENESISは単なる道楽バンドで終わったにちがいない。

具体例をあげてみよう。彼らの持ち味が開花した作品としてまず思い浮かぶのは、アルバム「Nursery Cryme」（このタイトルも童謡を意味する"Nursery Rhyme"のもじり）のオープニングを飾る名曲『Musical Box』だろう。この曲のバック・グラウンドは、有名なマザーグースの一曲『コールの王様』であり、中間部でその頭の部分をそのまま歌っている。数多くの子供達に親しまれているマザーグースであるが、ゲイブリエルの歌うこの曲を聞かせたらこわくて泣き出してしまうかもしれない。しかし、マザーグースのもつ雰囲気は実はミステリーにピッタリ合ったりするのだ。「クックロビンの唄」なんかは日本のミステリー小説にもよく顔を出すではないか。子供心を捨て、ある程度人生経験を積むとわかってくるこの童話、童謡の「こわさ」をゲイブリエルはいち早く見抜き、ロック・ミュージックに加工したのである（そういえば「イソップ物語」も人間性の裏側を風刺したコワーイ作品といわれている）。その意味では「Nursery Cryme」は「オトナのための童話、童謡集」という見方もできる。日本では勇壮なイメージばかりの浮き立つギリシア神話も実はよく読むとかなりドロドロしており、彼らの格好の題材となっている。

それが「月影の騎士」になると、そのモチーフは現実、つまりイギリスの経済情勢へと向けられる。演奏技術も向上し、最もカラフルで幻想的な作品と人気の高いこの作品だが、表面とは裏腹にその中味はタイトルやジャケットを見てもわかる通り、非常にアイロニカルなものとなっている。登場人物こそ英国騎士やロミオとジュリエット、演劇ではおなじみの顔ぶれなのだが、やっていることはというとこれが痛烈な経済批判だ。ゲイブリエルによって操られたこの架空の人物達はイギリスの腐敗した経済を見事に浮き立たせている。現実世界をお得意の「逆説」を用いて空想化し、そこに眠る核の部分を強調しているのだ。この手法はパンク・ロックに見られるストレートな反骨精神よりもはるかに有効だと思う。そしてそのアイロニーの中にやはり自国への深い愛着が見えてくるのだ。

この頃までの彼らの手法、すなわち裏側からのアプローチは何かアンブロース・ビアスの「悪魔の辞典」に通じるものがある。ここでいう「悪魔」は事物を対極からのぞき、そこに眠る真実を抉り出す。この意味では、当時のGENESISはまさに「悪魔のバンド」であり、そのリーダー格が天使の名を持つなんて、これもやっぱり「逆説」なのだろうか？

松本昌幸

間違いなく、これは心理学上で言う“自己実現”“個性化”のモデルだと断言できる。紛れもなくゲイブリエルの明晰な深層心理解釈に基づく必然性ある物語である。奇想天外とされる展開は、むしろ“個性化”の主旨を通すための結果であり、深層心理を象徴し具体化するためのものであって、思いつきでも死とセックスの物語でも決してない。これほど明確な筋の通った解釈は、ロック・フィールドでは他にはない。モチーフになったバニヤンの「天路歴程」なるお伽噺に、ゲイブリエルは、お伽噺というものの本質が“個性化”のたとえであることを読んでいたことさえ窺えるほどだ。

本題に入ろう。物語に入る直前の内ジャケット説明序文中には、「レエルは私を嫌っており、私はレエルを気に入っている」とある。そして「レエルは楽しむのが好きで、私は韻を踏むのが好きだ」ともある。これは、ゲイブリエル自身（自我）と彼の内面の凝人化、レエル（無意識の自我）の対置である。そして、物語に入るとゲイブリエルは、この無意識の自我を意識自我に置き替え、喋らせる形をとって本作の物語を綴っていく。ゲイブリエル流お伽噺の始まりである。この物語が彼のウィットに留まらない明晰さとは、つまり、ストーリー自体にユングやシュタイナーの指した“夢”が、“夢”という以前に深層心理解釈が、歴然と通底していることである。現実の世界に居るレエルが、あたかも眠りに入ったかのように無意識の領域に入って以来、ストーリーでは、レエルが繭の中から出て“洞窟”などに書き示された通路を通るかのように様々な場面を経ていく。場面とは、ユングの言った、無意識の成長段階を示す“部屋”であり、確かにこのストーリーは、場面が進むことで、彼が何らかの成長の為の、何かを勝ち取る為の、段階を踏んでいく。そして最後に示される「巨大な地下の峡谷の激流、水の底」とは、深層心理学では無意識の奥深くをイメージするものとして神話や伝説に外的投影された集合無意識のシンボルとされており、レエルの内的探求が深化されたことを示している。ここに至る直前、レエルは「ドクター・ダイパー」に会いに行く。「苦しい試練を乗り越え、彼ら（レエルと兄ジョン）は、金の鎖がついた無菌の黄色いプラスチック・チューブに入った攻撃用の武器を渡される」とある。何かを勝ち取るための知恵を与え、決定的な方向性へ向かわすこの性格は、“夢”で直接経験される元型の一つ、“老賢人”をゲイブリエルがウィットをこめて代替したものである。この物語を読む際、物語の骨子をレエルの行動に負い、彼の心情と行動を位置づけていくのが情景展開であることは注意すべきだ。そして最後に、水におぼれる兄ジョンを助け上げたレエルは、兄ジョンが自分自身になっていることに驚くが、やがて両者は一体になる、とある。（『サルマシスの泉』のモチーフ、ギリシャ神話中のナルキッソスの物語の深層をも貫く。）兄ジョンは、ストーリー中で、さまようレエルに示唆をしていて、彼が自我＝レエルに対置されるレエルの無意識自我であることを明示している。

ユングは、この、意識自我とこれをつかさどる無意識自我の一体化を“個性化”という言葉で表している。ユングは、フロイトと違って、この影の存在＝無意識自我を拒否されるものとはせず、またシュタイナーが言った“下意識”というニュアンスの裏に示される“劣等”なものとはせず、これを意識自我に同化することによって、本来自己の実現、完成、内的宇宙の開示に導く重要な分身と見て、更には西洋の表層史（キリスト教史）に抑圧された原始宗教（宗教としてのグノーシス主義、錬金術、地母信仰など）をもその影の存在として解き明かし、西洋と東洋そして未開民族へも通底する人間の内面世界をも解読して普遍性を示した。彼は自論を打ち立てたのでもなく、哲学者でもなければ宗教家でも民族学者でもない。一般には彼がこうした宗教の本質、神観をも貫いて存在観念に最も近づくグノーシス精神に基づく為、俗的にオカルティストと偏見しがちだが、何よりも彼は生涯を通じて一人の精神科医であり、実践経験を通じてしか示され得ない内的世



「幻惑のブロードウェイ」とは

三橋 暁

「眩惑のブロードウェイ」とは、一体なんだったのか？　これは、すべてのジェネシス・ファン、いやプログレッシヴ・ロックのリスナーにとって興味の尽きない問題である。

そもそも発表当時「眩惑のブロードウェイ」が多くのファンを戸惑わせたのは、この作品がそれまでのGENESISというバンドのイメージをいとも簡単に覆してみせたからである。前作「月影の騎士」までの英国の伝統的ファンタジィという彼らの方法論は、突如として無国籍のシュールレアリスティックな物語へと変貌を遂げた。まさにファンには寝耳に水のコペルニクス的転換であった。

このアルバムの見開きジャケットの内側をびっしりと埋めるキャプションは、一種のト書きのような役割を果していて、この「眩惑のブロードウェイ」がひとつの戯曲として意図されていたことがそこから推察される。「眩惑のブロードウェイ」は、ひとことで言ってしまえば、主人公レエルのモノローグによって語られる自己発見の旅の物語である。

主人公であるレエルというプエルトリカンの青年が、兄弟を捜して旅するのは現代都市のひとつの象徴とでもいうべきニュー・ヨークということになってはいるが、彼が彷徨うことになるのは、実はレエル自身の心の内側なのであり、最後に見つけ出すのは自分自身の姿なのである。行く手に立ち塞がる数々の不条理な虚構の中で繰り広げられるレエルの奇想天外な冒険物語は、ねじれて屈折こそしているが、歴とした成長の物語になっている。そんなコンセプトに、この「眩惑のブロードウェイ」という不思議なアルバムを読み解くための鍵が隠されている。

「眩惑のブロードウェイ」の構造は、実に複雑であると同時に奇妙でもある。冒頭、夜明けのブロードウェイに姿を現した主人公のレエルは、突如衝動に駆られて、タイムズ・スクエアに向かって雨の中を駆け出し始める。ところが、気がついてみれ

界を代弁した、真の意味で探究者である。極めて現実的な好むと好まざるとも重要で、有り続ける問題を解き明かそうとしたスイスの医師である。“影”の存在は、“コンプレックス”（必ず感情を帯びる）をつかさどる部分、個人無意識の更に奥に有るイメージでしかとらえられない（主に夢）人間共通の無意識にあり、彼はこれを“集合無意識”と呼び、状況に応じて凝人化、凝体化されるこのイメージを“元型”と呼んだ。混沌を示すここに彼は意識自我を内奥からあやつる創造性を見い出している。が、ここは情念のうごめく世界であって、芸術家が時として紙一重なのも、この律動する集合無意識に対峙して、意識自我がこれをコントロールし切れない場合は、非常に危険なのだと言う。無意識に呑み込まれた姿が、自己崩壊・分裂であり、例えば、シュールレアリストの自殺の数の多さも、つまりはここに帰結するだろう。

　レエルは、ゲイブリエルにとってユングの言う“№.2”“影”“コンプレックス”を劇化した存在である。例えば、レエルが出会った“道案内を求めていた盲目の中年女性”は、どうだろう。「32のドアのうち一つだけが外に出ることのできるドアだ」という複数の叫び声に困り果てたレエルに、「私を連れ出してくれるのなら」と案内をたのんでいるにもかかわらず、あたかも行く先を知っているかのように、「彼女の自信たっぷりの足取りに対して、レエルの方は暗闇の中で何度も転びかける」とある。ゲイブリエルは、この女性を「リリス」と命名しているが、若者をたぶらかす女性人格として神話から取られたリリスというよりは、困り果てたレエルを勇気づけ導いていくこの女性人格とは、まさしく深層心理上で言う、レエル（男性）のアニマ（男性内の女性性、創造を産み出す影の人格、元型の一つ）が人格投影され“良き母”として人格を持つ点で、むしろ“ソフィア”（ヘレニズムーユダヤ教ーキリスト教の知恵の女神の名と性質に由来）的な人格の代替に他ならない。

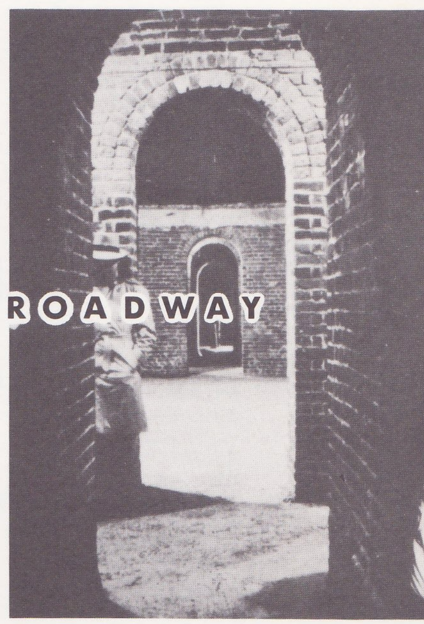
　当然、このレエル物語の本質は、決してゲイブリエルの着想に終止していない。未分化な状態が、正と負、陽と陰に分離し、各々が深化する期間を経て後、両性質の再統合をすることで新生し、理想を実現する、という各探究学でも示唆されている真理的なモデルでもある。

　そして、この劇化された深層心理モデルは、ゲイブリエル自身と対峙していることで、大きな含みを持つ。説明序文の終盤には、こうあるからだ。「でも、もうレエルは私（ゲイブリエル）をじかに見ることはないだろうね。彼は私がまとわりつくのを嫌がるから」とあり、更に「韻を踏むことが好き」なゲイブリエル自身について、「即ち、押韻というのは計画的な、いわばダミーなのだから」と自から結んでいる。

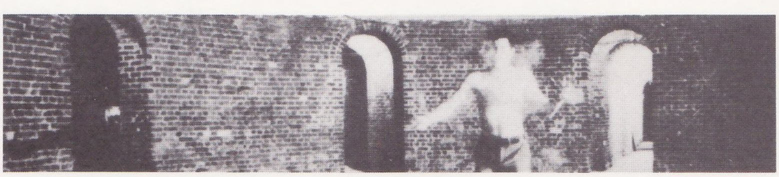
　“レエル”とは本来のゲイブリエルであり、“私”とはGENESIS（'74年当時）のゲイブリエルである。つまり、「押韻」が明示するように、GENESISでの自分は、計画的な自己の凝態であると帰結し、本来の自己＝レエルは、そうした凝態を嫌っているとは、すなわちゲイブリエル自身の内での決別表明である、GENESISからの。この作品を製作する時点で、ゲイブリエルは脱退を深層心理的に書き表し表明していたのである。

　この作品は、彼自身の自己深化であっただろうものを劇化したものであり、以前（GENESIS）の凝態性を帯びたものとも、以後（ソロ）の彼にとっての純音楽欲求によるものとも異質な、発表されなければ、本来はそれで済んでいるはずの性質の作品なのである。ゲイブリエルの立場に立てば、成果ではなく、決意をこじつけた作品である。後に彼がユングに傾倒するのは、そして、ここにゲイブリエル自身も知り得ていない暗示が含まれていたからである。

　この作品が好きか嫌いかといった主観には関係なく、レエル物語が示す存在観念の問題は関心のあるなしに関係なく有り続ける。ゲイブリエルはミュージシャンという姿をした魂の探究に関心のある人であって、彼の音楽がプログレ調だろうが、ニュー・ウェイヴ調だろうが、さしたる差はない。自己深化はまず個人の問題であり、この誠実さなくしては借り物にしか過ぎなく、他人事でありつづけるはずだ。プログレッシヴ・ロックの本質とは、この点の手段であって目的でもない。ちっぽけな、しかも手段に価値基準を見い出すなど大したことには思えない。自己発露の延長にそれがあるべきであることを、この作品は唯一述べているといっていい。



THE LAMB LIES DOWN ON BROADWAY



ば彼は奇妙な繭の中に捕らわれている。しかし、その夢のような時間が過ぎて、レエルは周囲が再び現実の世界であり、自分は奇妙な回廊に立たされているのに気付いた。不良少年時代の過去の回想が切れぎれに頭をよぎる中、レエルは前途に待ち受ける奇怪な世界へとさらに歩を進めていく。

　演劇仕立てのロック・ミュージックという趣向は、なにも「眩惑のブロードウェイ」に始まったことではない。しかし「トミー」の例を持ち出すまでもなく、それまでのこの手の作品はあくまでフラットな物語作りに終始していた。そんな中で、この「眩惑のブロードウェイ」の迷路にも似た錯綜した構造は、きわめて斬新なものだった。その多重的、多層的に物語を展開せんとするドラマツルギーによって、突如これまでとはまったく異なった価値観を'70年代のロック・シーンに浮かびあがらせたのである。そんな一種のメタシアターとでも呼ぶべき構造によって、「眩惑のブロードウェイ」は'74年当時の時代のリアルな姿を描き出すことに見事成功したといって良いだろう。

　そして、歌詞による自由奔放なフィクション操作と同時に、起伏にとんだ展開の間をぬうようにいくつかの印象的なテーマがまるで万華鏡のようにスタイルを変えて次々に姿を現す楽曲の構成もこのコンセプトに一役かっている。プログレッシヴという手法が、これほど作品の成立に有機的な作用を及ぼしている例も珍しいのではないか。'70年代初期をピークに、プログレッシヴ・ロックというジャンルが一様に沈滞へと向かった中、「眩惑のブロードウェイ」は、メタシアターという新鮮な手法を駆使してGENESISが当時のロック・シーンに放った強烈な一閃だったのだ。

　牧歌的な妖精物語は、ある朝目覚めると大都会の闇を従えたコンテンポラリーなフィクションへと姿を変えていた。多くのファンはその変貌ぶりに意表をつかれたが、しかしグループは後退したのではなく、さらに数歩進んで少しばかり時代を追い越してしまっただけだった。「眩惑のブロードウェイ」は、期せずしてバンドとしてのピークを迎えていたGENESISというグループが、したたかにもプログレッシヴ・ロックのアイデンティティーを時代に対してつきつけた作品なのである。



From Genesis To ReVelation

'69

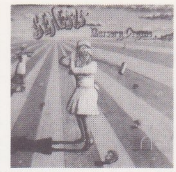
ジョナサン・キングの御膳立てにより、短期間で録音されたファースト。いくらチャーターハウスの後輩であるとはいえ、プロ・デビューには余りに時期尚早であった事は明らか。育ちの良い、無知な少年達による作品という以上に特筆すべき点はない。ヴォーカル・ナンバーとして光るメロディはあるが、当時のポップ／ロック界の水準を考えても遜色だらけである。後で加えられたストリングスとブラスも、もっと気の利いたアレンジは出来たと思うが。ともかくゲイブリエル＋バンクスの共同作業はここに始まった。A・フィリップス独特の12弦がすでに一部で聴ける。（古田）



Trespass

'70

GENESIS真のスタート。後に完成されるすべてのスタイルは、ここに原型がある。またメンバー間の結束は本作が最も堅い。最高3名により奏でられる12弦のアンサンブルは「Foxtrot」までサウンドの中心をなす訳だが、これは本作録音後脱けたフィリップスの貢献が大である。オルガンはまだ平凡で、終始アコースティックで牧歌的な風景のなか、ゲイブリエルも達観したような内容の歌詞を淡々と歌う。唯一攻撃的な『The Knife』は次作の『The Musical Box』へと繋がってゆく。まとまりの良さが、本作を一介のブリティッシュ・ロックの地位に押し止めている。（古田）



Nursery Cryme

'71

昔、本作の歌詞を初めて訳してみて、内容の無茶苦茶さにブッ飛んだのを憶えている。これはギリシア神話からマザー・グース、現代の残酷譚に至るまでダブル・ミーニングのない、そのものの世界である。突出するのはゲイブリエルの詞に止まらず、新加入のハケットと共にオーケストラルなアレンジを導入したバンクス（本作でのハケットのプレイがライト・ハンド奏法の元祖と言われている。恐らく彼はキーボードに近付きたかったのだろう。）や、偏屈なラインを弾き始めたラザフォードに見る気迫は凄い。演奏は相変わらず拙いものの、信じられないオリジナリティである。（古田）



Foxtrot

'72

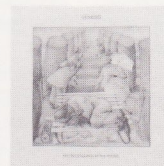
この非凡さは、たまたま少しばかり才能のある若者達が、ありきたりの音楽から極力遠ざかろうと努力した結果産まれた。GENESISにいわゆる天才は存在せず、また必要もないことを本作は証明している。ここから次作あたりの曲想は後にクローン達が嫌という程サンプリング（？）して陳腐化した。といって本作自体の価値が下がるはずもないが。このあたりの曲は'74～'75年の脂の乗り切ったライヴ録音の方が格段に良い。ゲイブリエルがいよいよ独り歩きを始め、バンドはバンドで音楽的完成度を高めてゆく、そのごく初期の記録である。（古田）



Live

'73

'73年2月のブリティッシュ・ツアー時に収録されたGENESIS初のライヴ盤は、トニー・ストラトン・スミス＝営業関係の要請により、強引にリリースされた。1stをとばした初期3作からの選曲。一曲が長いので仕方がないが、曲数が少ないのがイタイ。この為、多くのマニア（いい意味で。おこっちゃダメ）はブートに走る事になる。実際、『Watcher Of The Skies』や『Knife』などはこの正規盤よりすさまじい演奏のブートが存在する。"ライヴを出した後は音が変わる"という"業界不変の諺"通り、次に「月影の騎士」が出る。大したもんだと、妙に納得した。（川上）



Selling England By The Pound

'73

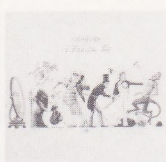
ゲイブリエル在籍時のアルバム中、最もとっつき易い音に仕上がっている。アレンジ・演奏ともにようやくプロらしさを身に付けると同時に、耳触りの良いシンセサイザーを大幅に導入したことが影響しているようだ。シンフォニック・ロックの古典と言うべき『Firth of Fifth』を含むA面からラストに至る流れにはケチの付けようがない。また、ジャズ的なセンスを吸収したコリンズをはじめ、皆が別人のように上手くなった。詞は行間を読む性格のものへ様変わりをとげ、幾重にも解釈が可能。実際、ゲイブリエルのヴォーカルと詞がなければ、かなり甘ったるい作品になっていただろう。（古田）



The Lamb Lies Down On Broadway

'74

メタ・テアトル・グループ、GENESISの最期を告げる大作。ゲイブリエルは最早バンドの音楽から遊離し、完全にイッてしまっている。前作からたったの1年、コンセプトが違うからといって、こうも音楽が変わるものだろうか。歌詞・演奏はコロコロとイメージを変え、10回や20回聴いた位ではなかなか全体像をとらえることはできない。ファンにとっては駄作と最高作の間をいつまでも激しく揺れ動く、そんなアルバムに違いない。演奏のダイナミズム、緊張感は恐らく本作がピーク。バンクスの肌理細やかなバッキング、コリンズのシンバル・ワークなど殆んど至芸である。（古田）



A Trick Of The Tail

'76

フロント・マンを失い、オーディションを重ねた結果、演技上手のドラマーが晴れてその座に収まった。冗談のようだが、まるで何事もなかったかの如く馴染んでいるから怖い。（「ブロードウェイ」中、コリンズが一瞬リード・ヴォーカルをとるのはどこでしょう？未だ気付いてないファンは即チェックのこと。）心機一転、バンドの命運を賭して望んだだけのことはあり、みずみずしく、今までにないスケール感も加わり、全盛期を継承・発展する申し分のない作品。執拗なまでに登場する4＋3のビート、このリズムの疾走感、心地良さを多くの人はこのアルバムから学んだことだろう。（古田）



Wind & Wuthering

'77

発表当時一番ショックだったのは、ハケットの居場所がなくなりつつあるという事。ひどい時はSE程度の扱いだ。替わってポリフォニック・シンセ類が巨大な音の壁を形づくる。ファースト・ソロの成功に気を良くしたハケットは次第にバンドにアイディアを提供しなくなったという事だが、要するに"出て行け"と言ってる訳か。案の定、間もなくハケットは脱けてしまう。楽曲・演奏水準ともに高く第2のピークとも言える。しかし機材面の充実がかえってサウンドを平板にしているようにも思える。『Your Own Special Way』など、平凡な所も見立ち初めている。（古田）



Seconds Out

'77

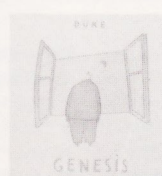
ゲイブリエルの声はやはり、ヘンだ。確かにフィル・コリンズと声質は似ているが、唱法が全くちがう。例えば"He rides majestic past homes of men"という一節（何の曲だ？）。㋙の場合homesにコブシが入り、ホォーオームズ（2個目のオが少しシャープ）になる他は素直に歌い切るが、㋘は最後のmenにおまけが付き，メンッナアになる。このッナアが実に役者な訳です。コリンズ歌唱による"昔の7曲"が入ったこの作品、"ピーターVSフィル唱法比較研究盤"として聴けば、新たな世界が開けるかも。他のメンツも最高のライヴ。ハケットのヴィブラートなぞ非常に色っぽい。（川上）



And Then There Were Three

'78

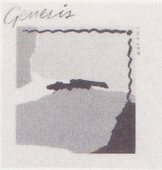
前作の"鍵盤の嵐"路線を継ぎながら、シングル・カット可能な長さに曲を抑さえ込んだ為、従来のファンの多くを失った。しかし人気が世界的に定着するのも本作あたりから。ハケットの異国情緒を一掃し、親しみやすい曲とコリンズのキャラクターがバンド・カラーとして前面に出る。バンクスは依然マニアックな曲を書いているのだが、全体の流れからは浮き気味。信じられないのは、かつては相当偏屈なラインを弾いていたラザフォードの書く曲の甘さである。よく分からない人だ。『Follow You Follow Me』は恐らくグループ史上最も凡庸な曲。決して悪いと言うのではないが。（古田）



Duke

'80

この甘さに関してはとやかく言うまい。ゲイブリエルもハケットも、とうの昔に居なくなったのだから。前作よりアレンジはすっきりまとまり、「Trick of ～」時の躍動感を取り戻している。長く、ダイナミックなインストは英国最大のプログレッシヴ・ロック・バンドとなった自身への別れの歌と受け取められる。同時に、『Turn It On Again』『Misunderstanding』は'80年代、世界のビッグ・ネームへとのし上がってゆく布石ともなった曲。コリンズの唱法にも年季が入ってきた（コブシは鼻につくけど）。良く出来たアルバムだと思う。（古田）



Abacab

'81

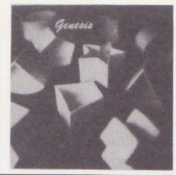
EW & F のホーン、跳ね回るコリンズ、「ブロードウェイ」そのままのバンクス、メロディを弾きまくるラザフォードが合体して独特のグルーヴを醸す『No Reply At All』が良い。他に、一発でバンクスと分るA③、コリンズ流“泣き”が堪能できるB④⑤⑥など聴き所はある。しかし寄せ集め的な統一感の無さがバンドの苦悩を物語る。そうした点を抜きにしても、バンクスの不器用さ（タイトル曲など特に）が裏目に出た水準以下のアルバム。A④、B③はお遊びというか捨て曲というか、面白くもなんともない。真の大衆化には、もう一歩お勉強が必要だろう。エンジニアにヒュー・パジャム登場。(古田)



Three Sides Live

'82

選曲は「…And Then There Were Three…」以降のアルバムからであるが、side 3 に『In the Cage』と『Afterglow』が入っていて、これにつられて買った人も多いと思う。実際、この2曲は非常にカッコよい。前者は、『Chinema show ～ Slippermen』の様式美的メドレーの流れが、ファンの心をくすぐり、後者は、コリンズ流“こぶし”が冴え渡り、「Seconds Out」のテイクよりドラマティックな盛り上がりを見せる。EARTH WIND&FIRE のようなSide 4 を入れるより、4面全部ライヴにした方がずっと良いと思うのだが…。（英盤のみSide 4 もライヴ。）(川上)



Genesis

'83

ヒュー・パジャムの発言力が増したのか、音響処理に格段の進歩が窺える。前作に見られた迷いはなく、ポップ・バンドとして最大限の誠意を尽くした好作という他ない。バラード・ナンバーにも以前のような甘ったるさはなく、黒人的ストイックさを体得したコリンズのヴォーカルが光る。ヒット曲『That's All』『Illegal Alien』の他では、GENESIS 流ファンク・ビートの極致と言うべき『Just A Job To Do』が出色の出来。反面、コリンズのソロとの差別化が難しくなってきているのも事実で、『Mama』などは『In The Air Tonight』と程んど同じ曲である。(古田)



Invisible Touch

'86

現時点では最新作。ここまで来るとさすがに解説も不要だろう。シングル集と見まがう程に、ヒット曲のオン・パレードだ。アメリカに魂を売ったなどと言われている割に、いわゆる安物の産業ロックとは一線も二線も画していると思えるのは、今だにイギリス的な翳りを残しているからで、その辺はチャートを追っかけている一般の洋楽ファンの方が敏感に察知しているのだろう。ヒュー・パジャムはもう四人目の GENESIS と化していて、彼の助力なくして現在の GENESIS は有り得ない。ともかく、彼等は色々なものを捨ててきた。それが気に喰わない人は聴かないことだ。(古田)

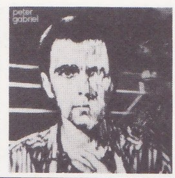


STEVE HACKETT

Voyage Of The Acolyte

'75

スティーヴ・ハケットのGENESIS における位置はとてつもなく重要で、ベースからキーボードに至るメロディ楽器を状況に応じてサポートした功績はもちろん、あの沈鬱で時に自虐的な攻撃性も、彼の存在にあってこそ醸されていた。ゲイブリエルの脱退と前後して録音されたこのファースト・ソロ、「ブロードウェイ」などよりはよっぽど GENESIS らしい曲想を持つ。バンド用にためておいたアイディアがゲイブリエルのワンマン経営でポシャった為に急拠ソロに切り換えたのかも。ともあれ、単なるギタリストのソロ・アルバムの域を超えた傑作には違いない。(古田)

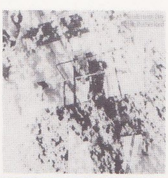


PETER GABRIEL

same (III)

'80

S・リリホワイトのプロデュースによる3作目は従来とは演奏形態が大きく異なっており、表面上は GENESIS の影を見出すことは困難である。しかし、ゲイブリエルの研ぎすまされたヴィジョンはさらに深化し、今ここに極まれりといった感がある。その刃物のような感性は現実の中に潜む裏側の世界を鋭く抉り出し、聴き手に圧倒的な強迫感を持って迫ってくる。ゲスト参加していたケイト・ブッシュの「Dreaming」をはじめとして、'80年代の音楽シーンに与えた影響は数知れず。黒人問題を扱ったラスト曲『Biko』はR・ワイアット等にカヴァーされ、今なお歌われ続けている超問題作。(内田)



MIKE RUTHERFORD

Smallcreeps Day

'80

フィル・コリンズを中心にグループが固まった時点で、各自がソロ・アルバムを製作したが、ラザフォードのこの1作目ほど、グループの旧来のサウンド指向を受け継いだものはなかった。「トリック・オブ・ザ・テイル」「静寂の嵐」を継ぐトータル作である。ヴォーカリストは、ゲイブリエル脱退後のオーディションで最有力候補だった人物だけあって、異和感がない。バランスのとれた完成度のある作品だが、欲を言えば、大胆さに欠ける嫌いがあり、彼の平凡さ（『Your Own Special Way』に示されるそれ）、俗っぽさも感じる。底の浅さが露見している。好作品なのだが。(松本)

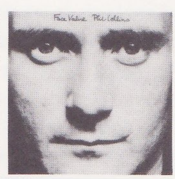


ANTHONY PHILLIPS

Private Parts & Pieces II

'80

ほとんどライフ・ワークと化した趣味の作品集 P,P&P のシリーズ2作目はマイク・ラザフォードとアンディ・マカロック参加によるバンド形態のドラマチックな組曲が収録されており、とりわけ評価が高い。しかし、その趣味性は相変わらずで、テープの逆回転で遊んだり、アコースティック・ギターを延々とタレ流したりと本当に気ままに演っている。モンティ・パイソンを思わせるピーター・クロスのアルバム・カヴァーも見ていて楽しい。この後もセールスをほとんど意識しないような作品群をマイペースに発表し続ける。彼は大きなお城に住むお金持ちの貴族様なのだ。(内田)



PHIL COLLINS

Face Value

'81

ソロ第一弾。以後ポップス路線をひた走り、一気にスターダムへとのし上がる基盤を築いた作品。「Abacab」で見せていたポップ感覚をさらに押し進めた形になっており、見事にスカシを喰った旧体制派からは「GENESIS 腐敗の元凶」とか「商業主義」とかボロクソに言われたりもした。しかし、ポップス作るだけで金がもうかるなら苦労はない。よく聴くとなるほど非常にセンスが良く、ヒット・チャートを上昇するのも実力に裏付けされてのことだということがよく分かる。今では押しも押されぬトップ・スター。でもやっぱり BRAND X での超絶ドラムがなつかしいなァ。(内田)



BANKSTATEMENT

same

'89

フィル・コリンズ空前の成功、マイケル・ラザフォードも自身のバンドでヒットを収めたことに触発されてか、やっと重い腰を上げたジェネシス・サウンドの要、トニー・バンクスの新プロジェクト。同輩にならってチャート狙いの感がなきにしもあらずだが、そこは滋味あふれるバッキングには定評のあるバンクスのこと、彼にしか出せない音の綴れ織りは見事。ソロ第1作の冗漫さを排し、ポップでありながら産業ロックの白々しさのカケラもない。人はこれを後退と呼ぶかもしれないが、本人が進んで切り捨てたものを今更求めるのは傲慢というものである。(古田)

原点への回帰，そして…

奈良裕明

誤解のない理解なんてあり得ないわ。偏見のない意見が存在しないのと同じようにね——ある議論好きの女の子が、かつて僕にそう言いました。「その通りさ」会話の内容より、彼女の胸のラインの方が気になってしかたなかった僕は、あえて彼女の「意見」に反論せず、どうしたらあの大きくて素敵なふくらみに触ることができるだろうかという考えで、頭の中をいっぱいにしていました。これから僕が語ろうとしているのは、そんな「かつて」——自分の10代とまるまる重なる、1970年代についての、きわめて個人的かつ偏見に満ちみちたお話です。

あの「'60年代」が未曾有の、そして今後とも存在しないであろう刺激的で凄絶な時代だったという事実に、異を唱える人はいないと思います。じっさい音楽を初めとした文化・政治・経済・日常生活のあらゆる面において、無数の問題提起と解答への模索が行われたのを肌で感じ、また知識として御存じでしょう。例をあげていたのではキリがないので、ここでは「自由と機会の国」アメリカにおいて公民権運動に端を発した“チルドレン・パワー”が、フランスでは1968年５月のソルボンヌのバリケードへ、そしてわが国では高校全共闘の結成にまで飛び火したことだけを指摘しておきます。

時計は進み、カレンダーは1970年へと——たしかに科学的にはそうでした。でも、あの「'60年代」は、本当に1969年の12月31日をもって幕を閉じたのでしょうか。欧米における真実の探求は、現在の僕の手にあまります。が、少なくとも極東のわが国においては、タイム・ラグがありました。

強引に断言します。わが国で「'60年代」が終了したのは、1972年の２月です。

思い出していただけるでしょうか、連合赤軍による浅間山荘事件を。この事件によって、ひとつの時代の終わりを実感したのは、10代、20代の若者たちだけではなかったはずです。ＣＭなしで生中継される（それは、1967年９月の吉田茂・元首相の国葬以来の出来事でした）テレビ各局の総合視聴率は96パーセントに達したとも言われています。まさにブラウン管を前に、全ての国民——幼稚園児から日ごろ世情にうといお婆ちゃんまで——が、巨大な祭りの終焉を言葉や理論でない、直截的な何かとしてつかみ取ったはずです。

逆に言えば、「'60年代」は、２年数ケ月の「お釣り」——余波をもたらすほど熱く・長い時代であった、と。

'70年代はいかなる時代だったのか？誰もが心の中ではつぶやきながら、いざ口にしようとすると躊躇せずにはいられないその答えを、僕が臆面もなく言ってしまいましょう。

1970年代は、プログレッシヴ・ロックの時代だった。

資料から拾ってみます。

◦ピンク・フロイド
　『狂気』(1973年)
　『炎』(1975年)
◦ジェネシス
　『眩惑のブロードウエイ』(1974年)
　『トリック・オブ・ザ・テイル』(1976年)
◦イエス
　『危機』(1972年)
　『リレイヤー』(1974年)
◦エマーソン・レイク&パーマー
　『恐怖の頭脳改革』(1973年)
◦キング・クリムゾン
　『太陽と戦慄』(1973年)
　『暗黒の世界』(1974年)
　『RED』(1974年)

ふうっ。

わが国における'70年代の文化状況を要約すると、「三無主義」と「カタログ文化」の二点で事たります。

「三無」とは祭りの後のシラケきった様を示す「無気力・無関心・無感動」のこと。「カタログ文化」は、アメリカでサブ・カルチャーを体系的に把握しようという意図のもとに刊行された『ホール・アース・カタログ』のスタイルだけを導入したため、わが国では単なる「商品」のカタログと化し、本来なら個々人が傷つき、学びながら成長していく機会を奪う「マニュアル」へと腐り果てました。

そして、セックス・ピストルズ、『ホテル・カリフォルニア』、マーク・ボランの死。

パンク・ロックは当時テクニック、コンセプト共にある種の行き詰まりを感じていたプログレッシヴ・ロックの送り手・聴き手双方へ、とてつもない衝撃を与えました。自分たちがそれまで信じ、愛してきた美的価値・世界観が、先祖返りしたビートの前に御破算にされてしまったのですから。ジョニー・ロットンの至言「ロックンロールは死んだ」は、ある者に青春の終わりを感じさせノスタルジィの彼方へ追いや

「チン・ドン・ジャン」
奈良裕明・著
第13回すばる文学賞受賞作
集英社刊



り、またある者には「ぼくらの時代が来た」と髪を切り、逆立てさせた。

『ホテル・カリフォルニア』の歌詞のあまりに有名な一節「スピリッツは1969年から切らせています」――これは「'60年代」に向かうところ敵無しだったロック・ミュージックの敗北宣言に他なりません。もう歌で世の中が変わるだなんて幻想は捨てなければいけないんだ……新興勢力のピストルズと、アメリカン・ロックを代表するイーグルスとが、同内容のメッセージを放つ。(もっとも、そこは古強者イーグルスのことですから、アルバムに『ニュー・キッド・イン・タウン』をさり気なく入れておき、再生の可能性・かけらを示すことを忘れない。実際アメリカでも、シングルは『ホテル〜』より『ニュー・キッド〜』の方がヒットし、僕は一縷の望みを見つけた気がしたものです。)

マーク・ボランの死――今でこそ、その音楽性が高く評価されていますが、現役時代のT・レックスは完全に「女子供」のアイドル扱いでした。当時、10代、20代の男性が彼らのファンであることを公言したり、シングルを買い求めるには、かなりの勇気が必要とされたのです。ボランの死は、女性たちにピンナップ・スターとの密月時代の終わりを、ごく僅かの男性には秘密結社の崩壊を告げました。その先に待っているのは……。

パンクの先に待っていたのは、テクノ、ニュー・ウェイヴ、エスニック等々「何でも有り」の混沌でした。言い換えれば、パンク以降のロックに主流は存在せず、順列・組み合わせのマイナー・チェンジだけがくり返され、'80年代を過ぎて、'90年代にまで流れこもうとしているのです。ロック・ミュージックの総中道左派化。

すでにお気づきの方もいらっしゃるでしょう。ピストルズ、『ホテル・カリフォルニア』、ボランの死。これらは全て1977年の出来事なのです。ついに僕だけが知っている事実を明らかにする時が来ました。実は――'70年代は1977年で終わっていたのです。

初めに「'60年代」が幕を閉じたのは'72年の2月と書きましたから、'70年代は実質的に5年強の期間しかなかったわけです。現在からふり返って、なるほどと思える他の例をいくつかあげてみます。'76年から'77年にかけて、ザ・バンドが解散し、エルヴィスが死に、ボストン、ランナウェイズがデヴュウしました。

僕はザ・バンドの解散の持つ意味がリアル・タイムでは理解できませんでした。雑誌の紹介記事でアメリカでの騒ぎ、扱いの大きさ、映画のヒットなどは知ってましたけど。数年遅れで映画『ラスト・ワルツ』が日本公開された時もまだ、事の重大さに気づきませんでした。僕がザ・バンドの解散こそ'70年代的なものの、ひとつの終わりであったとわかったのは1984年です。1977年を舞台にした小説を書こうと、意識的に音楽や風俗に関する資料・年表を読み始めた頃ですから。ニブイですね、遅すぎますね。

では、先にあげた5大バンドの代表作が発表された年を見直して下さい。どうです？

見事に僕の言う「'70年代」に当てはまっているでしょう。以上が「'70年代はプログレッシヴ・ロックの時代だった」証明です。

さて、ここから先はほとんどの人が「馬鹿、阿呆、キ×ガ×」と一笑に付すかもしれません。もしロック・ミュージックの進化が1977年で終わり、以降、順列・組み合わせの変化だけで、新しいものが何も生まれていないとしたら、それは'70年代の終わりを告げているだけでなく――世界は1977年で終わっているのです。後の世界をうろつき回り、プログレッシヴ・ロックを聴いているぼくらは、実は幽霊なのです。

石を投げないで下さい。

反論は当然です。ケンソーやプロビデンスのメンバーは幽霊なのか、PFMやエニッドのCDを買うぼくらは幽霊なのか、ディストリビューションに関わる人々は幽霊なのか。

これらの問に解答を与えることができるのは、今この文章を読んで、反応を示しているあなただけです。この文章を読み終えたあなたが、何を考え、どう行動し、いかに生活していくか。プログレッシヴ・ロックを幽霊にしないために、ミュージシャンをゾンビにしないために、ディスク・ショップを象の墓場にしないために、あなたは？　僕は？

その手がかりは、どこにあるのか。青い鳥はすでにぼくらの手の中にいるのです。『おせっかい』の中に、『フォックストロット』の中に、『こわれもの』の中に、『タルカス』の中に、『アイランド』の中に。

なぜなら、プログレッシヴ・ロックをあなたを自分を幽霊にしないために、'90年代を生きるぼくらは、プログレッシヴ・ロックを愛し続けるのですから。

CHAPTER IV

ブリティッシュ・プログレッシヴ・ロックの多様性

序

賀川雅彦

「プログレッシヴ・ロック」という言葉は狭義にはシンフォニック・ロックを意味することが多く、特に我国においてはその傾向が強い。しかし、諸外国ではもとより、我国でも広義のものとして用いた場合、その範疇に含まれる音楽は非常に多い。広義に「プログレッシヴ・ロック」と言われるものの中には以下に挙げたジャンルの音楽を主要素としたものがある——シンフォニック・ロック、ジャズ・ロック、ハード・ロック、フォーク・ロック、ブルーズ・ロック、エレクトロニクス・ミュージック、コンテンポラリー・ミュージック、伝統的ポップス（シャンソン、カンツォーネ等）他。ジャズや他のロックと比較した場合、その形態は極めて多岐に渡り多様性を有している。しかし、それはロック・シーンにおいて「プログレッシヴ・ロック」というものが形成された過程をみれば当然のことと言える。

’60年代中期以降、ポップスとは異なるものとして登場してきたロックはまるで液体のように定まった形を持たず、また、津波のごとく周囲のものを飲み込んでいった。当時はPINK FLOYDも、CREAMも、CREEDENCE CLEARWATER REVIVALも、そして、BLOOD、SWEAT & TEARSも全てロック（「アート・ロック」あるいは「ニュー・ロック」という言葉がよく使われた）であり、何々ロックという細かいジャンル分けはもとより、アメリカン・ロック、ブリティッシュ・ロックという区別もほとんどなかった。ただ、CREAMがスーパー・グループとして持て映やされ、そのルーツにブルーズがあったためか、彼らやTEN YEARS AFTER、FLEETWOOD MACらの音楽を一時「ホワイト・ブルーズ」と呼んでいたこともあった。ロック自体が非常に新鮮なものであり、またグループの数も限られていたため、聴き手の側も今考えると形態の異なる色々な作品を抵抗なく積極的に聴いていた。その頃はCREAMとCHICAGOをフェイヴァリット・グループに挙げるといったことも珍しくなかった。音楽にとどまらず、他の芸術や政治的・社会的要素も貪欲に取り入れ、各アーティストがほとんど無の状態から独自のロックを作り上げようと試行錯誤を繰り返していた時代である。言い変えれば「何でもありの時代」であり「全ての試みが斬新であった時代」である。多くのミュージシャンが非常に広範囲のものに目を向け、それらの要素を取り入れることで新たな活路を見い出していった。また、社会現象となったロックに興味を持ち、ジャズ等の他のジャンルからロックに接近してきたミュージシャンも少なくなかった。そうした試みの幾つかが実を結び異なったタイプのロックが生まれ、ジャンルが形成されていった。こうしてロックは次第に細分化され、それぞれの領域で発展していった。’70年代に入って最も発展したのが所謂「プログレッシヴ・ロック」である。当時の「プログレッシヴ・ロック」は芸術的な意味において文字通り進歩的であった。’60年代のロックが社会的、政治的側面を重視し、それがストレートに大きなパワーを持った社会現象になったのとは対照的である。あるものは音楽的、技術的に高度化し、また、あるものは芸術的な意味での思想性を追求した。このように懐の広くなったロック＝「プログレッシヴ・ロック」が多様化したのは当然の帰結である。マルチプルに大きく成長した「プログレッシヴ・ロック」には、従来のロック以上に、多くのものを受け入れ独自のものを作り出す能力が備わっていたのである。

以下、VAN DER GRAAF GENERATOR、RENAISSANCE、MOODY BLUES、CAMEL、BARKLAY JAMES HARVEST、GENTLE GIANT、CURVED AIR、STRAWBSの8グループとカンタベリー・ミュージックをブリティッシュ・プログレッシヴ・ロックの多様性の象徴として取り上げてみた。いずれのアーティストも数多くのアルバムを発表し、長い間活動を続けてきたものたちである。その独自性を見るにつけ、ブリティッシュ・プログレッシヴ・ロックの層の厚さとユーロ・ロックに与えた影響の大きさを多くの人が痛感するに違いない。

PETER HAMMILL and VAN DER GRAAF GENERATOR

北村昌士

ピーター・ハミルが歌うのは、歌うことでしか話せない言語があるからだ。それは語の本来の意味での〈メッセージ〉とは違う、もっと流動的で、逃れやすく、深い裂け目のようなところから発せられる一種確定不能な運動として、音楽に向かう人の根源的な欲求と結びついた何かである。

けれども根源には〈身体〉の問題があると決めつけるのは軽率なことかもしれない。これは明らかに、性や食や排セツとは遠く隔った別の結びつき、別の解消に向けられた、いうなればとある共同性に関する欲求であったのかもしれない。ことばとは別の規範によって、彼は音楽独自の言説性みたいなものを捜し求めていた。

それはまちがっていたか、正当であったか、失敗したか、成功したか、と問うべき質の試みではありえなかった。なぜならそのプロセスは結果というものが存在しないらしいからだ。

ピーター・ハミルは完成という最終的な充足にまったく意欲的でなかった音楽家であったように思われる。彼にとって重要だったのは持続すること、絶えまなく強度を生み出してそれを高め、あるいは維持することだった。声をはじめとした一切の身体性は、そのためのあるいは単なる道具であった。インストゥルメンツ。

言いたいことがどうして君に伝わろうとしないのだろう
ぼくにはどうしてもわからない
これ以上わかりやすくは言えないのに
まるでことばが邪魔をするかのようだ
これがほんとうにぼくの言いたいこと?
このままでは意志の疎通すらも怪しくなる
ぼくが必死でもがきながら
何とか活路を見出そうとしているのに
君は全然わかってくれない

話せば話すほど、ことばを使うのがバカらしくなる
いっそ手ぶりで会話をしたほうが
ことばを選んで話すよりも　よっぽどましだ
このままでは互いの会話が成り立たない
話せば話すほど　ことばは無意味になる
目茶苦茶なフラストレーションで
ぼくは爆発しそうだ
ことばが信じられない

「Losing Faith In Words」

日常で誰もがふとこんな思いに駆られる瞬間はよくあるものだ。ぼくも人と話をするのは苦手である。何かがあらかじめ断たれている、というあきらめのようなものが先だってしまい、特に親しい人以外の前ではお茶を濁すようなことばしか口をついて出てこないことがよくあって、話しているそばから話している自分のみにくさだけが顕わになるようで、いつでも身が縮むような気分になってしまう。

ことばを使うということは、どんな場合にせよ、それが自分のなかの固有（仮に今はそんなふうにしかいえない）のなにがしかを、ある共同規範に委ねる、あるいは売りとばすということではないのかという思いから脱け出ることができないのだ。

ことばの規範に従うことは、権力の規範に従うこととまったく同じであるみたいなことをミシェル・フーコーの書物で読み、とても衝撃を受けたことがあったが、考えてみればフーコーだってそのことをことばで書いていたはずであった。おそらくフーコーは、書きながらいつでも地獄をみていただろう。しかし悪魔と向かい合って事を進めることは、決して苦痛ばかりを生み出すわけではなく、むしろしばしばその逆の気分をつくり出してくれることがある。十全にあまねく張りめぐらされた規範の内部で、その規範を内破させるような運動に加担するのは快楽であった。

しかし、「ことばへの不信／Losing Faith In Words」を表明し、それを歌にしなければならなかったピーター・ハミルの場合、それは彼の音楽的な



衝動をいっそう強固なものにするための起爆剤として用いられることの方が重要だった。フラストレーション、もっと平坦にいえばそれはエネルギーの転化・転送であろう。先にも書いたように、この詩はごくあたりまえのことを言っている。ことばに対する自分のこらえ性のなさを、単に子供じみた単純さで暴露しているのにすぎない。

その昔、ニール・ヤングは「Words」という詩のなかに、「歌われたことばは時代と時代に線を画す」という感動的なリフレインをつくり出したが、そういうポジティヴな質の詩でないことは明らかだ。

とある共同性というのは、恋愛であっても家族であっても、社会であっても、バンドであっても、国家であっても、宗教であっても何でもよく、またそんなふうにことさら規定を受けた関係である必要もない。音楽を単純にエロスの言語として使用することの困難さ、災い、その他もろもろの危うさ、そしてその本質的な貧しさに気づいていれば、誰もが否応なく叫び声をあげるだろうという程度のレベルで、ピーター・ハミルは歌い続けることを—たぶん喜んで—選択しているように思われる。

ところが、歌が歌としての体裁を強め、音楽が音楽的であればあるほど、そのために逃れ去ってしまう何かもある。しかもそれは、単なる破壊や排除や思いつきの無秩序の導入などによっては、再び呼び戻すことの不可能な何かだ。

柔らかに天使たちが彼らの時と空間のリフレインを歌う
すべての事物に何かがある
その名前を指摘することさえできれば…
空中曲芸的思考がオレの頭の裏にある
オレたちが追いかけているのは
輪になった線でしかないのか？
DNAのらせん状のねじれにすぎない？
あしたから今日を振り返ることはできない
そして金具ははずされた
ほんの一瞬が次の瞬間へと流れた
へその緒ケーブルがはさみ取られた
これでオレたちは勝手に落ちてゆく
オレはその場所に立往生する



あたかもそれまでどこにいたのかを見るかのように……
オレたちみんなが　追いかける輪の線を落ちてゆくだけなんだ
DNAのらせん状のねじれを
追っているだけだ
きょうからあしたを眺めることはできない

生／死／力／日——
冷たい息が確実に飛んでゆく
オレの心の奥底にあるブラック・ボックスにしまわれた
知覚の帝国はそこに何らかの暗号で記されているのだろうか？
それが翼と祈りによって飛ぶという想像力を生涯かきたててゆく——
そういうことなのか？
これを振り返ることはない
ここにあるのは現在で、やがて過去になる
これは手段なのか？
オレが確かにわかっていることは
これが終わりだということだ

「Black Box」

「ブラック・ボックスに隠された知覚の帝国に何らかの暗号で記されているのだろうか？」音楽はいかなるタイプのことば（暗号＝解読可能な記号の集積）なのだろうかという疑問がしめやかに歌われるとき、ハミルの思考は音楽そのものとも断絶した別個の意識を詩のことばに託してしまっていることになる。

神の黒い穴について語ったアルトーは、作品や言説の糞便性について語ったが、ハミルは、身体が衝動に従って歌うときに「現在」があり、録音されて作品になったそれは「過去」に属するといいたいようだ。ふたりは同じことを言っているように思われる。当然のことながらハミルの「ブラック・ボックス」は、アルトーの「黒い穴」に対応するだろう。

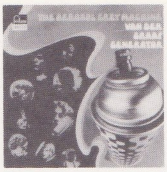
後戻りは許されない。ブラック・ボックスに何が記されているのかを探ろうとするしぐさじたいが卑劣なことだと、葛藤を混じえて唱えてみる。オレはいったい何を言ったことになるのか！という不安な調子を強めているのは、理性のことばと縁を切ることの絶対にできないはずの、生活者としてのハミルのいら立ちまぎれのつぶやきであるだろう。ぼくはこの種の不安感を「弱さ」と決めつけることができないほどには充分に弱い人である。

深淵の存在を知りながら、それを視界に入れないでひたすら飛翔を試みることの困難さを乗り越えることが、歌う人の使命であるようだ。バカになって、ラリって、酔っ払って、何もかも忘却した地点で、思いっきりロックンロールをやる。演技の一種としてなら可能かもしれないが、ふつうならばそんなふうに自らを位置化することなんて無理なはずだ。そしてロックのムーヴメントの基底を成すものの大多数は、その種の虚偽の上にあぐらをかいている。けれどむしろ勇気がいるのは、その一歩手前、別のいい方をすればロゴスとエロスの境界線上に何とか踏みとどまってそこに棲み家をつくり続けることである。そしておそらくそのような線上——それは絶えず移動し予想のできない軌跡を描き続ける線である——に身を置くほうが、ずっと困難で強度の緊張を強いられるはずなのだ。

逃れゆくものに対する寂寥感は、言語の明晰さ、それを享受する心地良さとは反対の生理的な運動によって生じる。それもまたたぶん〈欲求〉なのだろう。音楽を音楽でなくしてしまうまでに、その種の生理を増幅してゆくことは、過去さまざまな方法で試されている。こうした抽象化のベクトルが、音楽から顔や名前を殺りくする過程で、確かに政治的な意味合いをもった時代があったが、一方でぼくたちの周囲を埋め尽くす記号の帝国はさらに高度な手法でそうした動きすらも見事にコード化したのだった。

ピーター・ハミルの〈声〉、あるいは〈歌〉は、そのような推移のなかである時には脅威にさらされ、ある時にはきわめて投げやりなものになり、ある時にはそれらすべてに耐えて自律した。ハミルの声を聞くという作業において、体験することの時間的なズレがあまり気にならないのは不思議なことだが、それは彼がロック・シーン、マス・メディア、資本の流れといったもろもろのムーヴメントにまったく加担しなかったためである。もっと別のいい方をするならば、彼の音楽的努力の集中点というものは、聴者の体験の内部においてあまりにも固有であることに固執せざるをえなかった、それだけが決然となされた、ということだ。孤立、ということになるのだろうか。ぼくにはよくわからない。いずれにしても、あくまでもロックを集合的、あるいはいくつかの異なったカテゴリーの抗争として把えようとするようなタイプの耳には、彼の音楽はソリを合わそうとはしなかった、というよりまったく無関係であり続けたといってよい。

ここでも心理上の時間系列の問題が準備されてしかるべきかもしれない。はっきりいえるのは、ぼくたちが彼の音楽を体験していた場所というものが、ちょうどいく層にも無限に差異化して重なり合っている心理的な時間系列のうちの、最も奥深くスタティックで遠いところだったらしいことである。



Aerosol Grey Machine

'68

独白の人、P・ハミルの特質は、グループの音楽性がサイケデリック傾向を帯びていたこのデビュウにあってさえ、既に後の研ぎ澄まされた強靱さを予見させる。グループとしての姿が未完なだけに、オルガンのたなびきを始め、なかば'70年時代感覚にとらわれた音色、曲想とは対照的に、一人ハミルの個の発露が突出している様が、見て取れる。初々しい限りの歌声は、時として余りにナイーヴで、深く陰影に富んではいても、感傷に酔える余地を十分残している。時代の空気を満喫したV・D・G・Gの上昇気運が、若さの記録と重なり合うのか、未だ新鮮に感じる。（松本）



Pawn Hearts

'71

VDGGはピーター・ハミルの思想性を抜きにしては語れない感があり、その難解さ故にとっつきにくさを感じている人もいるだろう。しかし、これは彼らの作品の中でも、最もプログレ色の濃いサウンドを聴かせるもので、インパクトも強く、入門用にお推めしたい一枚だ。エフェクトやコラージュ等も用いられた特異な曲想は、個性的で質の高いもので、少々荒削りな印象もあるが、その分ダイナミクスに富み、非常に硬質できびしい世界を創り出している。最高作との声も多い。それでも、出来る事ならば、一度だけでも歌詞を読んでみてほしいとは思うが……。（沢田）



Still Life

'76

初期3部作のケイオティックな魅力こそ薄れはしたものの、バンド自体がハミルのエゴに充分拮抗しうるだけの表現力を備え、強力な一体感を生んでいる。分裂・再編をくり返すなかでこれ程密度の高いアルバムを再び創造しえた事実には、驚嘆するのみだ。エキセントリックなメンバー達の中にあって、ともすると独走しがちなハミルのメロディを縁の下にまわってサポート（理論付け）するヒュー・バントンの力量には恐れ入る。元来あまり音楽的ではないハミル・タイプのアーティストには、やはりバントンのようなパートナーが必要不可欠だと思うのだが。（古田）



World Record

'76

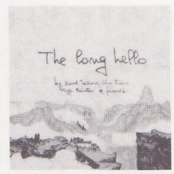
VDGG名義の最終アルバムである。前作「Still Life」で見られた後期VDGGの美しさが色付いた秋の壊れゆく季節であるとすれば、このアルバムには晩秋の冬へと向かう朽ちたたたずまいが感じられる。最も感動的な響きを持つのはラスト曲『Wondering』である。僕にはこの曲は彼等の10年の過去を凝縮したアリア（詠唱）のように響く。ハミルのいる位置は、今から14年も前に、すでに冬の時代へと入ろうとしていた。それはグループの終着点であり、又、ハミルが新たに歩み始める明けることのない長い長い冬の始まりでもあったわけである。（山崎）



Vital

'78

弦楽器に活路を見い出そうとした、という音楽見解など、まるで通用しそうにない。なぜなら、彼は音楽家ハミルを盲目的にペルソナにしてしまったことなど一度もないからだ。常に自己内面に対峙する結果が彼の音楽である。本作ライヴ盤発表直後、解散した。パンクに触発された音などというアホなことは言わないように。この轟音は、彼を音楽家に止めていた理性が時折とぎれて、情念のうごめきが音に投影されてしまったと言うべきだ。絶対に最初に聴かないこと。自虐的でサディスティックな音の強姦に近い。音のバランスが崩れている？本質をつかむ上で何の関係があるのか。（松本）

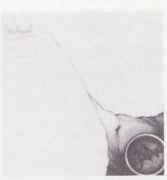


LONG HELLO

same

'76

「Pawn Hearts」後の一時的なグループ解散後、'75年に「Godbluff」で再編する間の'74年に、ピーター・ハミル以外のVDGGのメンバーによって制作された作品。ハミル的要素は一切排除され、メッセージ色や問題意識は全くなく、アコースティック楽器を多用して、例えるならJADE WARRIORのような叙景的な透明度のあるインストゥルメンタル曲が収録されている。このプロジェクトは以後も断続的に継続するが、ヴォルテイジは本作が最も高い。VDGGやハミルとは別のグループとして受けとめる必要のある作品であり、作品自体の魅力は非常に高い。（山崎）



The Silent Corner And The Empty Stage

'74

ハミルのソロ2作目『Cameleon ～』と3作目（本作）はスタイル的に同傾向の作品であり、初期の私的な日常に疑問符を投げかけた作風が全体を占めている。詞はシンボリックなオードを持つ以前の直接的な感情の変化を書きとめていた頃のものだ。前作同様、ギターによる弾き語りが表現方法の主幹であり、音楽的な味付けは次作『In Camera』には及ばぬが、よりストレートに語りかけられるような印象を持つ。この為、リスナーはいやが上でもハミルの言葉と対峙することとなる。結果として受け取め難いようなヘヴィネスが我々の前に提示される。（山崎）



In Camera

'74

2曲の例外を除き、'73年の12月から'74年の4月の間に作曲から録音までを行なった。'73年にハミルはイタリアのLE・ORMEの英語ヴァージョンの為に作詞をしたが、その詞と本作の詞との間には、比喩的な言い回しにシンボライズされたいくつかの曲の共通項を見出すことができる。サウンド的にはグループ的な着想でアレンジされており、後に来る内省的なものよりも抑揚に富み、色彩感のある味付けをされている。音楽的なバランスとしては非常に均整のとれた作品であり、その意味では初期から中期にかけてのソロ・ワークの中でもマスターピース的な作品である。（山崎）



Over

'76

壮絶な金切り声の「Vital」を前後して、対照的に内にこもった作品がこれだ。私的な色相いだ。内省的なサウンドにもかかわらず、芯の通った強靱さは、生き方、心情の持ち方のレベルに音楽が有ることの反映である。曲想や出来不出来では押し測れず、ましてやコピーなど論外、アーティストとしての有り方を問うているのに、好き嫌いでしか接し得ないリスナーの浅はかさを突くほど彼の音楽は誠実な所から出てきているということだ。聴き易いかもしれないし、この窒息しそうな息苦しさは不快かもしれない。こうした有り方をダサいという風潮の軽薄さを見せつける。（松本）



A Black Box

'80

ハミルのソロ作を聴いていつも素直に感じるのは、詞が音楽のかたちをとることが、彼にとってどれだけの必然性を持つのか、ということだ。素人にそんな心配をさせてしまう程、ハミルの書く曲には打算がなく、無防備そのものである。バンドであれ、弾き語りであれ、打ち込みであれ、時代に即した音を取り入れ、詞を乗せては来た。しかし、ハミルの詞のたどった変遷が、状況の変化に必ずしも合致しているとは私には思えない。それはあくまで彼自身の内部に起こるドラスティックな欲求の成せる技であろう。本作で聴けるサウンド傾向も、たまたま手の届く所にあったから、と解釈したい。（古田）



And Close As This

'86

ピーター・ハミルとロバート・フリップはその独善的なスタイルに共通点があるが、ハミルのほうは、芸術家としての発露を余りに個人的な内的要因に求めた結果、必然的にソロ・ワークを続けることになった。彼の音楽的スタイルは時にプログレッシヴな衣を着せられてきたが、ピーター・ハミルとは、すなわち自らの体験を通して世界に疑問を投げかけ続ける一人のシンガー・ソングライターである。本作ではゲストさえ迎えずに、たった一人で曲を創り、歌い、演奏している。世界を相手にまる裸になって歌い続けるハミルの歌は、今、ストレートに僕達の心につきささってくる。（山崎）

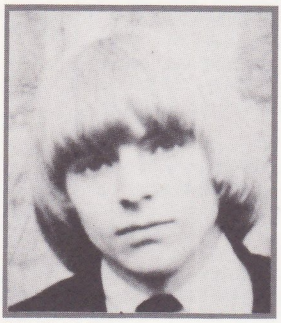
RENAISSANCE

内田哲雄

①悲運の男、キース・レルフ物語

RENAISSANCEの前身がYARDBIRDSであるという事実は今や公然の秘密、もはやすっかり忘れ去られてしまっている。'90年代に突入し、アメリカやソビエトがUFOとコンタクトを取っているといわれるこの御時勢に、20年も前のことをアレコレ言ってもはじまらないのかも知れない。しかしちょっと考えてみて欲しい。YARDBIRDSの発展形がかの有名なLED ZEPPELINであることはよく知られている事実だが、この進化系図を逆方向、すなわちZEPPELINの方から辿って行くとキース・レルフの名が消失してしまうのだ。確かにキースはYARDBIRDSの創始者で、生粋のブルーズ屋でもある。しかしバンドはだんだんとギタリストの占める割合が大きくなり、ベック、ペイジ、クラプトンという大物三大ギタリストが鳴り物となった頃にはキースのカラーは薄れてしまった。さらに後になってジミー・ペイジに牛耳られ、LED ZEPPELINへと発展したその流れはまさしく進化、ロック界に一本の大きな柱を立ててしまった（クラプトンもベックもその流れに準じてギター小僧達に神格化された)。だからZEPPELINから系図を逆辿りすると三大ギタリストのあたりで立ち止まり、キースの存在を呑み込んでしまう。彼は'60年代末から'70年代へと至る分岐点において、ロックのメインストリームから足を踏み外してしまったようだ。

次にプログレッシヴ・ロックに分類されるRENAISSANCEの方から系図を逆辿りするとこれが大変、サウンド面でYARDBIRDSとつながらなくなってしまうのだ。つまりキースがRENAISSANCEを創始したその原点は進化論における「突然変異」的な色合いが濃く、NICEがELPへと発展したような、「付属校持ち上がり進級型」ではない。脈略がないのだ。一時の気の迷いかはたまた異星人の洗脳か？　どうやらRENAISSANCEのサウンドのルーツはブリティッシュ・フォークにあるようだ。このバンドの系図をゆっくりとなぞって行くと、TOGETHERというグループに行き当たる。そう、キースとジム・マッカーティがYARDBIRDS脱退後に結成したフォーク・デュオだ。YARDBIRDS



●キース・レルフ

のキースといえばブルーズ専業、ヴォーカルを取りながらハーモニカを吹く姿が印象的だった。そのキースがフォークを演ることは当時のファンにとってみれば恐ろしく場違いに感じられたことだろう。このフォーク・グループがプログレッシヴに転身した経緯については後で考察するが、このフォーク的要素が第一期RENAISSANCEのサウンドの要となったことは否定できない事実である。こうして出来上がったグループのリーダー格は一般にキースと言われているが、実はジム・マッカーティとの双頭グループ、いや、むしろマッカーティ色の方が濃いような気がする。特に2ndでは作曲面でマッカーティの占める割合が高くなり、大部分の曲を作曲している（この時点でキースはグループとしての活動意欲をなくしており、主導権をマッカーティに譲ってしまったのかも)。

第一期グループ解散後、キースはしばらくプロデューサー業に専念する。そんな彼が突如として'75年、ARMAGEDDONというグループをひっ下げて再登場する。メンバーはハード・ロック界の強者揃い、キースはハーモニカを片手にヴォーカルを取った。YARDBIRDSのサウンド復活をもくろんで結成したであろうこのバンド、キースの意図とは裏腹にこの流れはZEPPELINによって確固たる流れが出来上がってしまっていた。バックのメンバー達もそれに準じてストレートな演奏を繰り広げ、'60年代の影を引きずったキースの存在は完全に浮き上がった。キースはこの時期になって、自分がロックのメインストリームから外れてしまったことを再び身をもって実証してしまったのだ。そしてグループを解散させたキースは、RENAISSANCEサウンドの復活をくわだて、旧メンバーを集めた。まさに「歴史は繰り返す」である。NOWと名付けられるはずだったこのグループ、結成を待たずしてキースはリハーサル中に感電死する。まさに不遇の最後であった（後身バンド、ILLUSIONと第一期RENAISSANCEを比べると、第一期グループにおけるマッカーティの比重の高さがよくわかる)。こうしてYARDBIRDSとRENAISSANCEというロック界の重要バンド結成の「きっかけ」を作りながら、これらのグループの存在の大きさに呑み込まれてしまい、そのまま浮上することなく不遇の死をとげた男、キース・レルフ。彼の生涯はまさに悲運そのものといっても過言ではない。



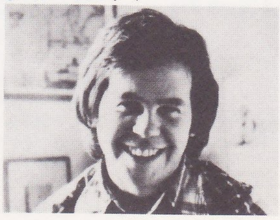
②マイケル・ダンフォード空白の時間

その昔「空白の一日」という流行語があった。江◯卓がいつの間にか巨人軍へ入団したあの事件だ。ロック界の◯川卓といえば何といってもマイケル・ダンフォードだろう。彼は第一期と第二期のRENAISSANCEを橋渡しをする重要人物なのだが、彼こそグループの人脈図をややこしくしている張本人なのだ。彼は第一期グループ時代にいつの間にか入団し、2ndアルバムで一曲のみクレジットされていた謎のメンバーである。そして新生グループではその仕掛人としてほとんどの曲を作曲しながらもフロントには出ず、3作目「運命のカード」で初めて正式メンバーとなるのである。果たして彼のグループ加入のきっかけ、そしてこの空白の期間はいったい何だったのだろうか？　これは長い間謎であった。

彼と旧グループを結びつけるカギとなる人物はジョン・ホウクンで、この2人はその昔NASHVILLE TEENSというグループで同じカマのメシを喰った仲だったのである。ホウクンはRENAISSANCE結成後、昔のよしみで彼をバンドに招き入れたのだという。その時期については定かではないが、おそらくはキースが活動意欲を失い、グループが解散を決意した後、つまり2ndアルバム制作途中の時期であろうと思われる。あの謎の一曲、「Mr. Pine」でひと通りのプレイヤーを揃えているところを見ると、アルバムの制作中に中心メンバーがグループを去った可能性が高い（実はこの曲、ホウクンのキーボードとジェーンのヴォーカルが確認でき、この二人に代役メンバーが加わったものと考えられる)。

ダンフォードによる新生グループがデビュウしたのは'71年のこと、彼らはマイルス・コープランド（POLICEのスチュワートの実兄）の共同プロ

●マイケル・ダンフォード







デュースのもとにデビュウ作（？）にあたる「Prologue」を発表する。何故そこにダンフォードの名がなかったか？　一時の気の迷いかはたまた異星人の……（これぱっかり）、答えは簡単、彼は作曲に専念するためにグループを離れ、放送作家的に裏側からグループをバックアップする役割を担ったのである。当初彼に代わるギタリストとして、ミック・パーソンズという人が参加していたが、何と加入直後に交通事故で他界するという不幸に見舞われる。「Prologue」でエレクトリック・ギター（イモ!!）を弾いているロブ・ヘンドリィは代打の代打である。しかしエレクトリック・ギターはバンドの音にそぐわないとの理由からヘンドリィはクビになり、以後はアコースティック・ギターを多用することになる。そのギタリストの必要性からダンフォードが正式にプレイヤーとして復帰するというわけだ（その意味ではロック界の青島幸男）。その後の活躍ぶりはご存知の通りである。以上、空白の謎にまつわるお話でした。しかし本人呼び出して直接聞いてみればすむことだったりして……。

③プログレッシヴ・ロックと RENAISSANCE

さて話は核心、RENAISSANCE のプログレッシヴ・ロックにおける位置付けと存在意義について考えてみよう。元々前身がフォーク・グループであった彼らのサウンドが何故プログレッシヴ・グループへと転化したのか？　そこには当時のイギリスにおける音楽シーンの時代背景が微妙にからむ。確かに彼らがブリティッシュ・フォークを母胎としていたのは事実だが、それだけならそこで終わり、せいぜい後になって TOGETHER が「後の正面」シリーズで取り上げられるくらいが関の山だ。彼らがプログレッシヴたる所以は、その中にクラシックやジャズの要素を取り入れ、それが'60年代末期のプログレッシヴ創生期とオーヴァーラップしたことにある。この頃のプログレッシヴ・ロックの意図するところは、「ロックのフィールド拡大」であろう。それは単にロックの中に他ジャンルの音楽を取り入れるだけにとどまらず、思想や哲学、文学等ありとあらゆるエッセンスを盛り込み、ロックそのものが大きく「デフォルメ」された。ロック改変のために行われた様々な「実験」が、そのまま「オリジナリティ」へと転化された（要するにオリジナリティとはメーカーの製法特許みたいなもの、早い者勝ちなのだ。その意味ではこの言葉をタテにメディアにつつかれる'80年代のバンドは損だ）。RENAISSANCE はフォーク・サウンドの延長線上にクラシックやジャズのエッセンスを取り入れ、それをロック的に昇華したわけだが、それが'60年代末期のプログレッシヴ・ムーヴメントの中で「実験」と解釈され、NICE と並ぶクラシカル・ロックの草分け的存在として語られるようになったわけである。しかし NICE がロックを本流にクラシックのもつ交響楽的構成を取り入れ、ロック自体を「複雑化」したのに対し、RENAISSANCEの取った手法はむしろ「単純化」、フォーク的な味わいにクラシックの美しいメロディがからみ、シンプルで親しみやすいものとなっている。彼らはプログレッシヴ＝進歩的な音楽をクリエイトするというよりは、フォークやロックをよりポピュラーなものとするためにクラシック等の要素を取り入れただけかも知れない。この手法は新生グループにおいても全く変化していない。彼らの「実験」はグループ結成時にすでに終了していたのだろう。

彼らのカラーは新生グループにおいて確立し、以後は「クラシカル・ロック」の代表格として'70年代を歩み通す。イギリスにおいては ENID と並ぶ数少ない純正クラシカル・ロックの成功例だろう。確かにドイツとイギリスはクラシカル・ロックの根付きにくい国である。これはクラシック音楽の浸透性の薄さの他に、彼らゲルマン民族の音楽のとらえ方、感じ方が起因するものと思う。イタリア等ラテン民族が音楽をありのままに肌で感じ取るのに対し、彼らはいったん音楽を頭の中でとらえ、思考する。ロックやクラシック等を肌で感じ取り、それを感性のおもむくままに結びつけるイタリアン・ロックはその融合がごく自然に行われる。それに対してジャーマン・ロックもブリティッシュ・ロックもクラシックを題材とする際、いったん頭の中でフィルターに通してから融合する。過程がひとつ多い分、結びつきが不自然になる。ブリティッシュの場合、そのフィルターにあたるのがいわゆるユーモアとウィットである（ドイツの場合は純正な融合を拒否する場合が多い）。

さて、ENID の場合はロック的な側面を捨て去り、純粋にクラシックをロックの演奏形態でアレンジする方法をとった。しかし RENAISSANCE はあたかもイタリアン・ロックのように、ロックの中に牧歌的なブリティッシュ・フォークの味わいとクラシックのフレイヴァーを実にさり気なく感覚的にブレンドしている。だから聴き手はイギリス特有のシニカルなオブラートに悩まされることなしに、彼らの音の中に入り込むことができるのだ。特にアニーの素敵な歌声にはついつい最大限の感情移入をもって接してしまう。アメリカにおいてもそのありのままの姿がリアル・タイムに受け入れられた。'70年代中期にアメリカ市場進出のあおりを受け、多くのグループがそのプログレッシヴたる本質を失ったその時期に本来の姿を持続したまま乗り切ることができたのもそのためだろう。

早いもので RENAISSANCE が誕生してから20年もの歳月が流れてしまった。彼らの存在はもはや過去のものとなってしまったが、彼らの残した作品の輝きは少しも損われていない。宝石のようにきらめくアニーの歌声、セピア色にくすむジェーンの歌声、どちらも時を超えた感動を与えてくれる（今回の特集では彼女達にあまりスポットを当てることができなかったのは残念だが、つまらない文章をウダウダ読むよりは自分の耳で確かめてほしい）。アメリカやソビエトが UFO とコンタクトを取っているこの時代でも、むしょうにこういう音が恋しくなる時がある。ひょっとすると「永遠」を誓い合える音って、こんな身近にあるのかも知れない。



Illusion

'78

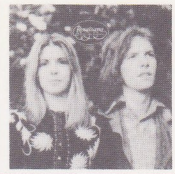
オリジナル・ルネッサンスの2 nd。前作とほぼ同傾向の作品で、今聴くと時代的な古めかしさをひきずった感じもするが、ベートーヴェンのピアノ・ソナタに影響を受けたピアノ・プレイとブリティッシュ・フォーク的味わい、一種独特の憂いを帯びたジェーン・レルフのハスキーな歌声は時を超えた感動を与える。この人間臭さこそがオリジナル・ルネッサンスの持ち味であり、B①はそれが最大限に活された涙ものの名曲。このころグループは解散へと向かっており、契約関係等複雑な問題があったようだが、こうしたお家事情とは裏腹に極めてシンプルなサウンドである。 (内田)



Prologue

'72

フル・メンバーチェンジ後の一作目。以前の作品とその手法はほぼ同じであるが、より各メンバーの個性が明確に押し出されるようになってきた。キーボードのジョン・トウトのプレイは実に多彩かつキメ細やかで、前任者のジョン・ホウクンと比べると幅広い素養が感じられる。そして以後のグループの決定的なカラーとなった歌姫アニー・ハスラムの声量豊かな美声は表現力も抜群、聴く者をある時は別世界へ誘い、ある時は傍で優しく包み込む。本作は未消化な部分も多いため粗野な印象を与えるかも知れないが、その分ノスタルジックな魅力にあふれている。 (内田)



Ashes Are Burning

'73

前作と比較すると作曲面においてかなりの進歩が見られる。優雅で流麗なピアノとどこか人なつっこいブリティッシュ・フォークの暖かみがほどよく溶け合っており、時折登場するオーケストラもさりげなくイヤ味がない。アコースティックなカラーをもった親しみ易い曲が多く、特にB①はアニーの大のお気に入りの曲て、自ら「ハッピーソング」と呼んでいたりする。タイトル曲は美しいピアノのイントロで始まり、ハードな一面も見せながら劇的に展開する初期の代表作と呼ぶに相応しい力作。一般のリスナーにもスンナリ聴いてもらえそうなアルバムだと思う。 (内田)



Turn Of The Cards

'75

影のリーダーとしてグループを水面下でバックアップしていたマイケル・ダンフォードの名が正式にクレジットされた3 rdアルバム。曲調がマイナーなためか地味な印象を与えるが、アルバム全体に統一感があってまとまりが良い。曲自体も大作が増えて着実にスケール・アップしており、タイトル曲をはじめとして適度な緊張感を伴うようになってきた。旧メンバー時代のアルバム「Illusion」におけるA④（ダンフォード作）のフレーズがとび出すA①は後々までライヴで好んで演奏されており、この曲に対するダンフォードの愛着心が窺えるようで興味深い。 (内田)



Scheherazade & Other Stories

'75

A面3曲、B面1曲の構成で、ツブ揃いの大作が顔を並べている。童話的で不思議な雰囲気を持ったA①やアニーの歌声とベティ・サッチャーの幻想的な歌詞がみごとにマッチしたA③は特にファンの間でも人気の高い秀曲。B面はアラビアン・ナイトのストーリーに基づく一大組曲で通して聴くとややまとまりを欠く箇所があるものの、個々の曲は十分魅力的である。素晴らしいピアノ・ソロをフィーチュアした『Love Theme』を含む中間部が劇的な盛り上がりを見せている。エキゾチックなカラーが漂う本作は彼らの音楽的視野を拡大したという意味でも重要な位置にある。 (内田)



Novella

'77

ワーナー移籍後の一作目。オーケストラをより前面に押し出し、キーボードも以前に増して重層的になっている。前作が演劇的なら本作は映画的な感じを受け、より視覚的である。特にA面はクライマックスを見るような高揚感をもたらし、目を閉じるとその光景が浮かんできそうである。また、音だけでなく歌詞も十分に味わってほしい。この手法はまかり間違うとチンケでクサイものになってしまいがちであるが、彼らはアコースティック・ギターをからませた絶妙のアレンジで消化し、むしろ気品すらも匂わせている。全作品中最も鮮烈なインパクトを放つ一枚。 (内田)



A Song For All Season

'78

曲数が増え、またメロディに丸みが出てきたために影の薄い存在になりがちなアルバムだが、グループとしての持ち味は全く損われていない。むしろその「丸み」が良い方向に作用して開放感のある飽きの来ない作品に仕上がっている。オーケストラとのからみも相変わらず見事で、ドラマティックな展開を見せるオープニングから一気に引き込まれてしまう。9分を越えるA②、B④も静と動のメリハリのつけ方がうまく、過去の名曲群と比べても聴き劣りしない。小曲は親しみ易いものが多く、B①はテレビ・ドラマのテーマ・ソングとして使用された。 (内田)



Azure D'or

'79

前作で見せていたポップなアプローチがより具体化した作品。しかしそれは決してポップス・バンドへの変身を意味するのではなく、これまでの長所を活しながら新しい要素を取り入れ、新境地を開いた感があり好感が持てる。収録された曲はいずれも小粒で物足りなさを感じるかも知れないが、センスの良いメロディと夢見るような幻想的雰囲気は不変で、聴けば聴くほど味わいが増す。シングル向けの曲が多く、何曲かビデオ・クリップも作られている。肩ヒジ張らずにリラックスして楽しんでほしい。ジャケットの色合いもとてもキレイだ。 (内田)



YARDBIRDS

Five Live Yardbirds

'64

リード・ギターにエリック・クラプトンを擁した初期YARDBIRDS、入魂のライヴ盤。当時、白人のロック（R & B）バンドが自作の、しかも質の高いナンバーを演奏する事は一部の例外を除いて皆無に近く、その多くは職業作家によるヒット性の高い楽曲をシングル盤として発表することに主眼が置かれていた。業界の上層部にとってはただのジャリタレに過ぎない彼等が日頃のウサを晴らすのはもちろん、ライヴにおいてである。「俺達が本当に演りたいのはこれだ！」とでも言わんばかりの気合い一発のR & Bナンバーの数々が、当時のストリートの熱気を伝える。 (古田)



ARMAGEDDON

same

'75

STEAMHAMMERから特に音色の面では進歩を見せているマーティンによる複雑なリフより始まる。オープニングにふさわしい曲。健闘したヴォーカルを聴かせる故キースはひさびさのハープ・プレイも披露。そして全体的にハードな曲では、リズム・セクションが今迄のキャリアに裏付けられた冴えを見せる。またキースがYARDBIRDS解散以降に見せた志向性の成果が、キーボードが使われていないにも拘らず各バラードに表われている。発表年度から見てハード・ロック衰退期に活を入れることのできる内容を誇っていた。しかし本作発表後解散してしまう。 (吉野)



ILLUSION

Out Of The Mist

'77

オリジナルRENAISSANCEのメンバーが中心となり亡きキース・レルフの意志をついで結成されたILLUSIONの1stアルバム。1曲目の『Isadora』から涙が出る程の美しいメロディ。アニー・ハスラムのRENAISSANCEは同じ美しさでもILLUSIONよりもややドライな印象を受ける。ILLUSIONはウェットな感覚があり、私達の心の奥底に浸透してくるのである。ジェーン・レルフのヴォーカルはアニーより技量的にはやや落ちるが彼女にしか出せない味がある。リーダーはキースの右腕と言えるジム・マッカーティだが、鍵をにぎるのはキーボード奏者のジョン・ホウクンだろう。 (三橋)



ANNIE HASLAM

Annie In Wonderland

'78

ジャケット・デザインも手がけている才人ロイ・ウッドのプロデュースによる1st ソロ。彼の影響もあってか、同時期に出されたグループの作品「Azure D'or」のポップ感覚とは趣向の異なるほのぼのとしたポップス・アルバムである。プログレッシヴ・ロックのカテゴリーからは外れるかも知れないが、アニーの素敵な歌声はこうした曲想ともバッチリ溶けあってなかなか魅力的。ラスト曲はルイス・クラークのアレンジにより、ドヴォルザークの『新世界から』に詩をつけて歌っているが、この試みは後の2nd ソロ「Still Life」で具体化、一気に開花することになる。(内田)

MOODY BLUES

的場ひさし

MOODY BLUESほど、イギリス本国と我国において人気の差があったグループも珍らしい。大物プログレッシヴ・バンドと呼ばれることはあっても、彼等の音楽は決して大げさなものでも、テクニックを強調したものでもない。多くの日本のプログレ・ファンにとってこうした彼等の音楽は、ともすれば平凡で、とらえ処のないものだったのかもしれない。それでは、ジミー・ペイジが「真のプログレッシヴ・ロック」と呼んだ彼等の音楽とは、一体どのようなものだったのだろうか。

MOODY BLUESが結成されたのは1964年のことである。メンバーは、デニー・レイン（Vo ,G)、マイク・ピンダー（Vo, key)、レイ・トーマス（Vo, fl）グレアム・エッジ（Dr)、クリント・ワーウィック（B)、以上の5名であり、それは後の姿からは想像できないほどR&B色の濃いグループであった。デビュウ間もなく『Go Now』などのヒット曲もあったが、'66年にはデニー・レインとクリント・ワーウィックが音楽的志向の違いから早くも脱退してしまう。しかし残されたメンバーはその後、ジャスティン・ヘイワード（Vo, G）とジョン・ロッジ（Vo, B）を迎える事により、R&Bからは大きく離れ、アルバム作りを通して真理を見出そうとするプログレッシヴなグループへと成長してゆくのである。

'67年、マイク・ピンダーがメロトロンを使用し始める。9月に発表したシングルには、旧MOODY BLUESの面影が残った曲調にメロトロンがしみ渡り、なんともユニークな作品となっている。そして11月、実質上のデビュウ・アルバムでもありロックの歴史を塗りかえたといわれる「Days Of Future Passed」を発表。“1日”をテーマにした完全なトータル・アルバムであることや、オーケストラの大胆な導入などは当時としては実に画期的な試みであった。同年に発表されたビートルズの「Sgt. Peppers～」同様音楽界に衝撃を与え、後には「プログレッシヴ・ロックの夜明け」と謳われた。また、このアルバムでもメロトロンはすべての曲に使用され、オーケストラ以上の存在感を持っている。だが、彼等にしては多少物語性を意識し過ぎたアルバムとなった感もあり、そのせいか、大ヒットした『Night In White Satin（サテンの夜）』より、むしろ『Tuesday Afternoon』などの曲の方が彼等らしさがよく出ていると言えるかもしれない。

そして'68年7月、アルバム「In Search Of The Lost Chord」発表。ここからプロデューサーは、“6人目のムーディ・ブルース”と呼ばれたトニー・クラークに固定される。それと同時にオーケストラとの共演をやめ、すべての演奏は5人だけでなされるようになる。“ドラッグ体験より得るもの”をテーマとした、その聴く者を幻覚の世界に引きずりこむかのような独特なサウンドは、前作以上に音楽関係者を驚かせたと同時に、後のプログレ・バンドの出現に大きな影響を与えたのである。このアルバムのオープニング『出発』から、彼等の旅は始まったのである。

続いて'69年4月には「On The Threshold Of A Dream（夢幻)」を発表。前作の幻覚的な世界からは脱し、人間の平凡な日常生活が描かれている。テーマは、“神から見た人間の姿”であり、このアルバムは初めて全英チャートで1位となる。そしてその後、彼等は自分達でレーベル“Threshold”を設立し、より一層“MOODY BLUESの音楽”を確立してゆくのである。（クリムゾンのファーストも、初めはこのレーベルから出す予定で録音までされたが、結局実現しなかった。)

11月には、熱狂的ファンの間では最高傑作と呼ばれたアルバム「To Our Children's Children's Children」を発表。この'69年は人類が初めて月に到達した年でもあり、“宇宙”をテーマにしたこのアルバムで彼等は精神的なピークを迎える。そして再び、全英アルバム・チャートで1位を記録するのである。

'70年に入り7月、アルバム「A Question Of Balance」発表。彼等にとって初めてのコンセプトを持たないアルバムであり、曲ごとに作曲者の個性がより強く出たものとなっている。前作、「To Our Children's～」では、“宇宙における人間の存在の小ささ”を痛感したかのように思えた彼等であった。だがこのアルバム発表後は、“自分達が音楽を通じて出来る事は何か”を考え始め、現実的なものに目を





向け始めた彼等はまた新たな一歩を踏み出すのである。

'71年7月「Every Good Boy Deserves Favour（童夢)」発表。このアルバムについて彼等は、「子供達にとって音楽教育は重要なものではない。だからそれ以上の意味を持った何かを表現したかった。」と語っている。曲調は親しみやすく深みのあるもので、1カ月後にはイギリス・チャートで1位、そして世界中でも大ヒットを記録するのである。また、コンサート・ツアーなどでたくさんの人々に出会った彼等は、自分達の音楽が世界中の人達に対して大きな影響力を持っている事を確信する。

'72年10月、MOODY BLUES黄金期の最後を飾るアルバム「Seventh Sojourn」発表。このアルバムを最後に「In Search Of～（失われたコードを求めて)」から始まった真理探究の旅は終わりを迎える事になる。そして各メンバーが、それぞれ見つけた答えを歌に表現している。ジョン・ロッジの言葉を借りれば、「僕等はただのミュージシャンにすぎないが、たくさんの人達を幸せにする事が出来るようだ。」といったところである。この「Seventh Sojourn」は5週連続でチャートのトップを飾り、彼等はイギリス最高のベスト・セラー・グループと呼ばれるようになるのである。

MOODY BLUESは、メンバー全員が作詞、作曲を手掛け、ドラムスのグレアム・エッジを除いた4人がそれぞれリード・ヴォーカルをとるグループであった。そして各メンバーが、自分の感性を詞やメロディに表して歌い、それらを均等に出し合って1つのアルバムを作ってゆく方法をとっていた。また、全員がマルチ・プレイヤーでもあり、レコーディングにおいてはそれぞれの担当楽器を取り替え合う事もしばしばであったらしい。彼等のこうしたやり方で7枚ものアルバムを制作する事は、よほどメンバー同志の信頼関係が成り立っていない限り不可能であると言える。「最良の友はグループの中に」と語った彼等だが、実際MOODY BLUESほど“メンバー同

志の仲の良さ”を感じさせるグループは少ない。彼らは’69年には、サリー州の田舎に大きな家をグループで買い入れているが、そこでは連日のように音楽的な事はもとより、さまざまな身の回りの出来事や疑問などが語り明かされていたらしい。そう、彼等の音楽の魅力は、そういった親しい仲間同志の会話が、そのままアルバムに形を変えているかのようにも聞こえるところではないだろうか。

それでは、その5人のメンバーについて更に細かく見ていく事にしよう。

●マイク・ピンダー（Vo, Key)、彼はレコーディングではキーボードの他に、ギター、チェロ、ハープなども担当する事がある。彼のメロトロンは“ピンダトロン”とも呼ばれMOODY BLUES のほとんどすべての曲に使われている。その音色と奏法は、他に類を見ない非常に独創的なものであり、特に「To Our Children's～」は実にさまざまな彼の奏法を聴く事が出来るアルバムである。デビュウ・アルバム「Days Of～」の印象が強かったせいか、我国ではMOODY BLUES のメロトロンの導入について“オーケストラの代用品”などとみる向きもあったが、彼等の一連のアルバムを深く聴き込めばそれがいかに見当違いの見方であるかがわかるであろう。マイク・ピンダーの作る曲は内面的で実に奥が深く、代表的なものをあげるならば『Have You Heard』、『Out And In』、『My Song』、『When You're A Free Man』といったところだろうか。

●ジョン・ロッジ（Vo, B)、彼のベースはおそらくポール・マッカートニーの影響もあると思われるが、「童夢」の『Nice To Be Here』などのように、さりげなく歌っているベース・ラインが多い。また、彼の作る曲は明るいものが多く「夢幻」の『Send Me No Wine』では、まるで笑いながら歌っているような楽しいコーラスが聴ける。他には、『House Of Four Doors』、『Candle Of Life』、『One More Time To Live』などが代表的な曲といえる。

●レイ・トーマス（Vo, fl)、彼のフルートは、たいてい深めにリヴァーヴ処理がされている。彼の代表曲『Legend Of A Mind（ティモシー・リアリー)』では、感情のこめられた、荒々しくも美しいフルート・ソロが聴ける。また、釣り好きな彼の作る曲は、実に牧歌的なものが多い。

●グレアム・エッジ（Dr)、彼の落ち着いたリズムと的を得たドラミングは、MOODY BLUES にとって不可欠なものである。Vo を担当しない彼の曲は、他の4人が協力して全編コーラスで通すものが多い。「童夢」の『After You Came』はそういう作品で、途中にマイク、レイ、ジャスティン、ジョンの順でVo のかけ合いも登場する。また、ほとんどのアルバムに聞かれる神の言葉のような語りは、すべてグループの哲学者グレアムの作詞によるもので、彼の志向がよく表われている。

●ジャスティン・ヘイワード（Vo, G)、彼のギターはアコースティック中心で、いかなる曲においても実に的を得たバッキングを聞かせている。また「童夢」あたりからみせるギブソン335による、ファズで歪ませながらもなぜか非常に爽やかな音色は、彼独特のものである。また、レコーディングにおいてはギターの他に、メロトロン、ベース、チェロ、シタール、タブラなどを担当する事もある。彼の作る曲はさまざまな情景が目に浮かんでくるようなものが多いが、それは彼が少年期に体験した2年近くもの放浪の旅が関係しているようだ。「遠くの樹々が僕に手招きする、そのわけを僕は知りたい」このような歌詞も実に彼らしいものと言える。そう、他のギタリスト達がギター・テクニックを磨いている時に、彼はイギリスの寒空の下を一人さまよい歩いていたのである。『Voices In The Sky』、『Watching And Waiting』、『Dawning Is The Day』、『You Can Never Go Home』、『The Land Of Make Believe』などは、そんなジャスティン・ヘイワードならではの曲である。

親しみやすさの中にも、なんともいえない深みをを感じるMOODY BLUES 独特の音楽は、こうした5つの個性が集まった時初めて生まれるのである。

さて、「Seventh Sojourn」でグループでの活動に一応の区切りをつけた彼等は、ソロ活動の時代に入る。まずジャスティンとジョン二人によるジョイント・アルバム「Blue Jays」が’75年に発表され、その後各メンバーもそれぞれソロ・アルバムを発表する。そして’78年、彼等は久しぶりに再会し約6年ぶりのアルバム「Octave」を発表するが、このアルバムを最後にグループのサウンドの核であったマイク・ピンダーが脱退してしまう。

’80年に入って彼等は、YES の異色作「Relayer」でハイセンスなプレイを聞かせたパトリック・モラーツを正式なメンバーとして迎え入れ、本格的にグループ活動を再開する。そして’81年に発表した「Long Distance Voyager」と’83年は「The Present」はイギリス、アメリカで大ヒットとなり、見事にカムバックを果たすのである。しかしその後グループはしだいにポップ色を増してゆき、’86年「The Other Side Of Life」、’88年「Sur La Mer」では完全に昔の面影は消えてしまう。また、最近になってジャスティン・ヘイワードは、元RENAISSANCE のVo であるアニー・ハスラムのソロ・アルバムに曲を提供し、バック・コーラスもつとめている。

こうして歴史を振り返ってみると、’67年から’72年までの5年間で、彼等は言いたい事をみな言い尽くしてしまったようである。特に「In Search Of～」から「Seventh Sojourn」までの6連作とも呼べるトータル・アルバムには、MOODY BLUES のすべてが凝縮されていると言っていいだろう。

最後に、前にも述べたが、我国において彼等の音楽は「プログレらしくない」という評価が多かったようだ。だが、ジミー・ペイジや多くのイギリス人が考える“真のプログレッシヴ・ロック”とは、変拍子や複雑なアレンジに頼っただけの表面的なサウンドをいうのではなく、精神的なものから自然と曲が生まれ、それでいて独特な世界を生み出したロックの事をいうのである。つまりそれが、幾つかの優れたプログレッシヴ・バンドの音楽であり、黄金期のMOODY BLUES の音楽なのである。







Days Of Future Passed

'67

世界中のあらゆる音楽関係者から絶賛を浴びた、ロンドン交響楽団との共演による彼等の実質上のデビュウ・アルバムである。このアルバムは世界で初めての完璧なトータル性を持ち、後に続出するトータル・アルバムの先がけとなった歴史的な一枚である。また、クラシックとの融合はロックの枠を広げ、その実験的な精神は多くのプログレ・バンドに受け継がれる事になる。だが、MOODY BLUES の音楽の本質とは決して実験的な面が先行するものではなく、後の"先駆者"という肩書も、彼等はまったく意識せずに自分達の音楽を追究してゆくのである。　(的場)



In Search Of The Lost Chord

'68

前作「Days Of ～」は確かに見事なアルバムであったが、彼等にしては少々映画的な印象を受けるものでもあった。彼等の精神的な"旅"は、このアルバムから始まったといっていいだろう。また、オーケストラとの共演も一切やめ、以前にも増してメロトロンが活躍している。本作は"ドラッグ体験から得るものは何か"がテーマであり、『House of Four Doors』、『Legend Of A Mind』、『Om』などは、まさに幻覚的な曲と言える。そのサウンドは、当時の音楽界では他に類を見ないものであり、ある評論家からは「ムーディ・ブルースは音楽的に思い上がっている。」と批評されたほどである。　(的場)



On The Threshold Of A Dream

'69

"神の目から見た人間の日常生活"がテーマになったアルバムである。この"神の目"は、まさにドラムスのグレアム・エッジの思想である。そして他のメンバーは、それぞれが感じる人間の平凡な日常生活を歌に表わしている。一連のアルバムの中でも、おそらく最も地味に聞こえる本作であるが、ファンの間では人気の高かった一枚でもある。また、当時レコード会社からは過少評価されていた「アルバムジャケットのデザインと音楽とは一体のものである。」という彼等の主張も、このあたりからしだいに認められ始めた。このアルバムは、全英チャート1位を記録する。　(的場)



To Our Children's Children's Children

'69

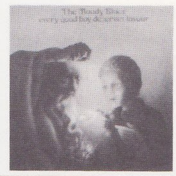
彼等が設立した、スレッショルド・レーベルからの第一弾である。ここでは、"宇宙の中で、人間の存在とはどのようなものか"を考えている。この作品発表後 MOODY BLUES は、しだいに現実的なものに目を向け始める。そういった点からも、一つのピークを迎えたアルバムであったとも言え、これを最高傑作と呼ぶ人も多い。グループの性質上、楽器を全面に出す事は決してないのだが、メロトロンを駆使した『Beyond』や『Out And In』などは、実に見事に"宇宙"を表現している。また、プロデューサーであるトニー・クラークの業績も大きい。全英アルバムチャート1位。　(的場)



Questions Of Balance

'70

前作「To Our Children's ～」で、精神的な面でのピークを迎えたと思われる彼等は、このアルバムで実にのびのびとした姿を見せている。そしてこの作品以降は、サウンド面でのプログレ色は薄まってゆくのである。このアルバムは、明確なテーマを持っていない点で彼等にとってはやや異色なものではあるが、その音質やアレンジ面などからはまったく"古さ"を感じさせず、とても'70年の作品とは思い難い。また、ここで見せる、オープニングで問題を提起し、ラストの曲でその結論を打ち建てるというパターンは、彼等お得意のものである。メロディ・メイカー誌アルバム・チャート1位。　(的場)



Every Good Boy Deserves Favour

'71

我国においては初めての大ヒットとなったアルバムであるが、彼等にとっては精神的にもかなり落ち着いた時代の作品である。そして、初めて"人に喜ばれる音楽"を意識して作られたものであり、そうした音楽の持つ意味を彼等自身ここで学ぶのである。アルバム全体から伝わるものは「優しさ」であり、彼等がなによりもメロディを大切にしていたグループである事を再認識させられる。また、このアルバムでも見せるイギリス人らしい深みのある4人のコーラスも、MOODY BLUES の大きな特徴の一つである。全英アルバム・チャート1位。　(的場)



Seventh Sojourn

'72

アルバム・タイトル「Seventh Sojourn」は、聖書にいう"7日目の安息日"であり、デビュウより数えて7枚目のトータル・アルバムにして、ようやく彼等が旅を終えた事を表わしている。『The Land Of Make Believe』は、爽やかで、親しみやすい素直な曲調の中にも実に深みがあり、まさに長い旅で多くの事を得てきた人間のみが作り出せる世界である。また、旧友への想いを歌った『When You're A Free Man』は、涙なしには聴けない名曲である。このアルバムも、イギリス・チャートで1位となるが、すべての事をやり尽くしたかのように、その後活動を中止してしまうのである。　(的場)



Caught Live Plus Five

'77

彼等のライヴ・アルバムは、後にも先にもこの一枚限りである。彼等自身は「僕等は決してエネルギッシュなライヴ・グループとは言えない。だから僕等にとってライヴ・アルバムは、おそらく何の長所も認められないだろう。」と語っている。だが彼等のコンサートは、イギリス本国はもちろん、アメリカ・ツアーにおいても、マジソン・スクエア（2万5千人収容）でさえ、発売当日2時間でチケットが全席売り切れたほどの人気であったらしい。このアルバムは'69年の録音である。また'67～'68年の未発表曲（スタジオ録音）が5曲も聴けるのは、ファンには嬉しい限りである。　(的場)



Octave

'78

グループとしては約6年ぶりに発表された、実に小じんまりとした作品である。ここにはもう以前のような"一つのアルバムの中で、あるテーマを全員で追求する"という彼等独特のトータル性も見られない。本作以降の彼等の姿は、"それぞれの家庭を持ちながら音楽活動を楽しんでいる人達"という印象を受けるのである。このアルバムを最後にマイク・ピンダーはグループを脱退し、その後は音楽活動そのものからも身を引いてしまう。彼に向けて、このアルバムのラストを『The Day We Meet Again』という曲で飾っているのも、実に MOODY BLUES らしい。　(的場)



Long Distance Voyager

'81

マイク・ピンダーとはまったく対照的なキーボーディストであるパトリック・モラーツの加入は、多くのファンを驚かせた。彼の現代的なセンスは、MOODY BLUES の音楽にポップ色を加え、このアルバムは全米チャートで長期間に渡りトップを記録するのである。そのサウンドは、昔とは違い"スタジオで作られた音楽"を感じさせるところはあるが、ポップな中にもイギリスらしい深みは失っていない。また、ラストの曲でパトリック・モラーツが、YES やソロなどでも見せた、"拍子のとりにくいキーボード・リフ"を登場させているのは意外ではあるが、またおもしろい。　(的場)



The Present

'83

前作「Voyager」の続編的な要素の強いアルバムである。だがここには、前作ほどの熱意は感じられない。どちらかと言えば、"部屋の中でのんびりと作られた音楽"といった印象を受ける。しかしそんな中でも『Going Nowhere』は、ヴォーカルでのかけ合いも含めて、久しぶりに彼等の強いチーム・ワークを感じさせる曲である。"MOODY BLUES らしさ"が残ったアルバムとしては、これが最後のものとなってしまった。この後彼等は、プロデューサーにトニー・ヴィスコンティを起用する。そしてそのサウンドは、深みのないポップなものになってしまうのである。　(的場)



BLUE JAYS

The Blue Jays

'75

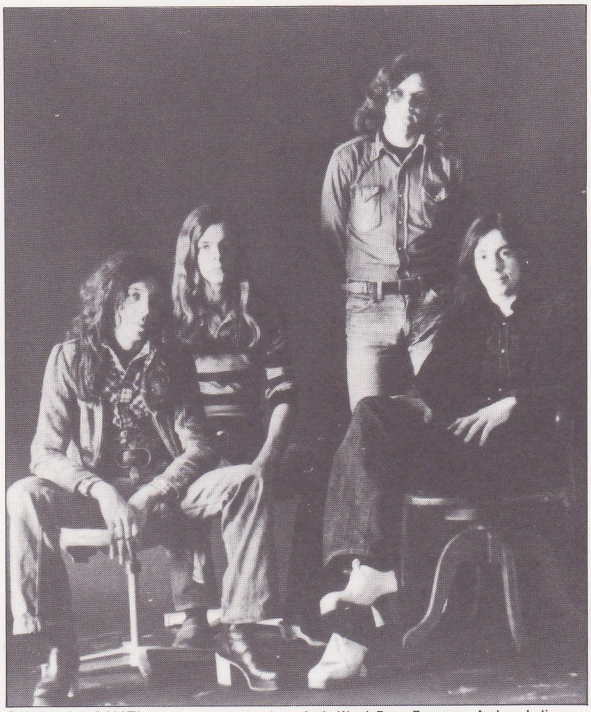
ジャスティンとジョンによる唯一のジョイント・アルバムであり、そのサウンドは明らかに MOODY BLUES の延長線上にあるものと言える。この中には、'79年にグループを脱退してしまうマイク・ピンダーのことを歌ったと思われる『My Brother』などの曲もあり、ファンには大切な一枚である。だが、オーケストラ導入のせいもあってか、やや"甘すぎる"という印象を受けるのもまた事実であり、MOODY BLUES の魅力はやはり、5人が集まり初めて生まれていたものである事を感じさせる。なお、ジャスティンは後に、MANDALABAND などにも参加している。　(的場)

CAMEL

蠟山陽子

CAMEL はイギリスの叙情派プログレッシヴ・ロックを代表するバンドであり、そのサウンドは優雅で洗練されたスタイルと、心の琴線に触れるような美しいメロディを備えている。こうしたバンドの資質は、リーダーであり、かつ、最後までバンドのオリジナル・メンバーであり続けたアンドリュー・ラティマーの才能によるところが大きい。彼はギター・プレイにおいて決して派手なところを見せないが、彼等のサウンドに非常によく合った暖かい音色で、常に無理のない、安定したプレイを聞かせてくれる。そして、彼の演奏するフルートも CAMEL サウンドの重要な柱のひとつになっていることを忘れてはならない。「Snow Goose」では純粋な心の美しさを見事に表現し切っているし、「Moonmadness」では私達を一時、幻想的な世界へと誘ってくれる。次に重要なメンバーであり、CAMEL サウンドの確立者とも言えるのが、キーボードのピーター・バーデンスである。初期から中期にかけてのアルバム中で傑作に数えられている作品は「Snow Goose」を始めとして殆どがラティマーとバーデンスの共作となっていることから、彼の存在がいかに大きなものであったかがお分かり戴けると思う。彼は CAMEL 結成当時、メンバー間では最もバンド経験が豊富で、ラティマーよりも彼のほうがリーダー・シップを握っていたようだ。バーデンスの演奏スタイルは、ハモンドによるブルーズ・オルガンを主体に、曲のスタイルによって様々なキーボードによる味付けを施してあると言ったもので、ファースト・アルバムではまだ無駄な部分があるが、「Mirage」以降では全く隙のない優雅で完璧なアンサンブルを披露している。また、アルバムを追って聴くごとに、その時代の新しい機種を取り入れた新鮮なキーボード・ワークを披露してくれる反面、得意のハモンドも必ず聞かせてくれるという保守的な部分も合わせ持ち、幅広いファン層を満足させてくれている。

さて、'72年の CAMEL 結成時には、もう２人のメンバー、ダグ・ファーガスン（ベース）とアンディ・ワード（ドラムス）がいた。彼等は'68年頃からラティマーと共に STRANGE BREW というバンドを始めていたが、翌'69年には早くも解散し、そ



●オリジナルCAMEL。〈L to R〉Peter Bardens, Andy Ward, Doug Ferguson, Andrew Latimer

れぞれセッション活動を行っている。そのなかでも当時まだ10代だったワードが CHAMPION JACK DUPLEE のツアー・バンドに、ミッキー・マウスのドラム・キットで参加していたという話は何とも微笑ましい。'70年に入ってから BREW は再結成された。当時の彼等は典型的なブルーズ・ロック・バンドで、フィリップ・グッドハンド＝テイトのバックを務め、初めてのレコーディングを体験した。(「I Think I'll Write A Song」('71年)）フィリップ・グッドハンド＝テイトは自ら作詩、作曲、ピアノ、ヴォーカルをこなす、いわゆるシンガー・ソングライターとして知られている。グッドハンド＝テイトと別れてからキーボード・プレイヤーを求めて彼等は M. M 誌に募集広告を打った。これがラティマー等とバーデンスの運命的な出会いとなり、CAMEL の誕生につながった。バンドは早速、作曲及びリハーサルを始め、'72年には早くもライヴ活動に入り、'73年３月には MCA より待望のファースト・アルバムが発売された。しかしこれは音的にはまだ試作段階と言えるもので、サウンドの方向性がはっきりしてくるのは２作目の「Mirage」('74年) からである。このアルバムはデッカ・レコードに移籍し、プロデューサーにはデヴィッド・ヒッチコックを迎えて製作された。フルートの使用と物語性をもたせた長編の導入で、前作よりもずっとファンタジックなアルバムに仕上がっている。シンセサイザーや効果音も必然性をもちはじめ、一曲一曲に、より豊かな表情を与えている。また、この年には前年に録音されたライヴが自主レーベルから発売されている。「Greasy Truckers」というタイトルで、４バンドのライヴからなる２枚組のアルバムである。これに収められているのは『God of Light』という、バーデンスがソロ時代に作った曲の焼き直しで、オリジナルは「The Answer」に収録されているが、CAMEL の作品としては特別面白いものではない。それよりも、HENRY COW やGONG と一緒に収録されているといった事のほうが面白い。そして初のヨーロッパ・ツアーの後、バンドはいよいよ全アルバム中最も高い売上を記録した「The Snow Goose」を作り上げることになる（'75年）。バックに壮大なオーケストラを従えて織り成される40分余りのこの一大叙情詩には、言葉がいっさい使われていない。彼等はギャリコの綴った感動の物語を見事に音だけで表現しているのだ。彼等の音楽はまさに言葉の壁を乗り越えて世界中に響き渡り、CAMEL の人気は揺るぎないものとなった。彼等は同年のM. M 誌のブライテスト・ホープの１位に選ばれている。「Snow Goose」はプログレッシヴ・ロック・ファン以外の幅広い音楽ファンに受け入れられ、これ以後ライヴでも『Lady Fantasy』と並んで、繰り返し、よく演奏されるようになる。さて、「Snow Goose」による大成功を収めた彼等が次に作り出した作品は、前作よりもずっとリラックスした、こじんまりとしたアルバムとなった。このアルバム「Moonmadness」('76年) は「Snow Goose」ほどのセールスは見せなかったものの、作曲の面でもテクニックに於ても、ずっと卓越したものになっている。ラティマーのフルートは健在であるが、バーデンスはこのアルバムよりメロトロンの使用を止めている。これはメロトロンがメンテナンスの難しい楽器であるからという理由もあるだろうが、バーデンスの用意した、メロトロンに代わる新兵器、フリーマン・ストリング・シンフォナイザーは、月の砂漠を行く駱駝達の新しい試みに、スペイシーな情景を与えることに成功している。そしてもう一つ特筆すべきことは、ワードのドラム・プレイが今までよりも豊かで広がりのあるものになってきたことである。その秘密は彼のテクニックの向上だけでなく、良く研究された、非常にデリケートなシンバル・ワークにある。何度聴いても飽きのこないアルバムというのは、バックにまわって、リードをとる楽器を支え引き立てる部分にこそ、非常によく気を配られているものだと思う。次のアルバム「Rain Dances」('77年) では、さらに実験的で興味深いパーカッション・ワークを聴くことができるし、ワード自身このアルバムが一番気に入っているという。しかしこのアルバムではいくつかの大きな変化が起きている。一つはメル・コリンズやイーノをゲストとして迎えていること。そしてもう一つは、ベースがファーガスンからリチャード・シンク



●第Ⅱ期('77〜'78)
〈L to R〉
Andrew,
Richard Sinclair,
Peter,
Andy



●'79年，初来日時のラインナップ。
〈L to R〉
Jan Schelhaus,
Mel Collins,
Dave Sinclair,
Andrew,
Richard,
Andy



●「I Can See〜」時のメンバー。
〈L to R〉
Jan,
Kit Watkins,
Andrew,
Colin Bass,
Andy

レアに代わっていることである。ファーガスンはメンバーの中では一番控え目で目立たない存在だったが、日ごとに大きく育っていく駱駝の体重を支える大事な４本の足のうちの一本であったのだし、CAMEL を成功に導いた「Snow Goose」のコンセプトを提案したのも彼だった。そんな彼をおいて他に CAMEL にぴったりのベース・プレイヤーなどいるだろうか。しかし駱駝はみごとに甦った。それもCARAVAN, HATFIELD & THE NORTH で活躍してきた、リチャード・シンクレアという強力なメンバーを迎え入れて。彼が加入したことによって、リズム体はよりタイトになり、ヴォーカル・パートも強化された。「Moonmadness」で月の世界におり立った駱駝は、太陽のハイウェイに乗って、再び地球を目指した。しかしここで最大の危機が訪れた。ラティマーと共に舵を握っていたはずのバーデンスが降りてしまったのだ。「Breathless」('78年）はバーデンスにとって、CAMEL における最後のアルバムとなった。このアルバムでは今までになく、沢山の「言葉」が語られている。今までは歌詞が曲の一部だったものが多かったのに比べて、ここでは楽器がバックにまわって歌詞を盛り立てている曲が多い。そしてその内容はほとんどが去っていくバーデンスを送る言葉になっている。暖かく優しいメロディに乗せて、彼等は語り合う。

Black against white made it all right.
Things are different.
Now we've grown apart.
We have no choice.
Change is a thing we cannot hide.
Even though we sing in different songs.

「黒対白のままでもいいんだ。何もかも食い違い、これから僕らは別々の道を行く。僕らには何も選べない、お互いの変化は隠しようがない。それでも僕らは別々の歌を歌っていくんだ。」ー『Rainbow's End』より。

バーデンスの去った後にはデイヴ・シンクレアとヤン・シェルハースをキーボードに迎えてツアーを行った。さらに次のアルバム「I Can See Your House From Here」('79年）では２人のシンクレアが CARAVAN 再結成のため抜けてしまい、ツイン・キーボードの片割れにキット・ワトキンス、ベースにはコリン・ベースを迎えて、レコーディングされた。このアルバムのジャケットは、地球から遠くはなれて漂う十字架上の宇宙飛行士とアルバム・タイトルから、「神はあなた方の髪まで数えられている」という聖書の一句を彷彿させる。あるいは、十字架上の飛行士はバーデンスなのだろうか。「Nude」('81年）になると、ワトキンスが脱退し、代わりにダンカン・マッケイが加入している。「Nude」は、演奏もアレンジも確かであり、どこも遜色はないが、エモーショナルな部分では今までのどのアルバムよりも劣っていると思われる。コンセプトの内容は実にエモーショナルであるのに、何故か演奏は淡々としていて、心に強く訴えるような響きに乏しい。いくら CAMEL 節の美しいメロディやアレンジを盛り込んでも、昔からのファンはだませまい。内容が日本の話に題材を求めたものだけに、残念でならない。ワードは何らかのアクシデントのため、このアルバムを最後に脱退してしまった。その後、MARILLION のツアーに参加しているというニュースもあったが、正式なメンバーになることは辞退してもっと小さな、リラックスした仕事をしているという。'81年には結成10周年を記念してベスト盤が編集された。「Chameleon」である。続いて'82年に発表された「The Single Factor」は、ほとんどラティマーのソロ・アルバムと言っても差し支えあるまい。ジャケット・アートも、CAMEL 脱退後初めて発表されたバーデンスのソロ・アルバムのそれと対照的である。

Solo rise—have to keep going for the song and the road.

「ひとりぼっちの上り坂、歌い続け、歩み続けねばならない。」ー『Camelogue』より。

こんなラティマーの歌声も辛そうだ。このアルバムでは一曲だけ、バーデンスがゲスト参加している。ほかにもサイモン・フィリップス、アンソニー・フィリップス、フランシス・モンクマン等々、錚々たるメンバーが参加している。これも、ラティマーの人柄が成せる技であろう。そしていよいよ「Stationary Traveller」('84年）は CAMEL の最後の作品となった。参加メンバーはラティマーを中心に、クリス・レインボウ、トン・シャーペ

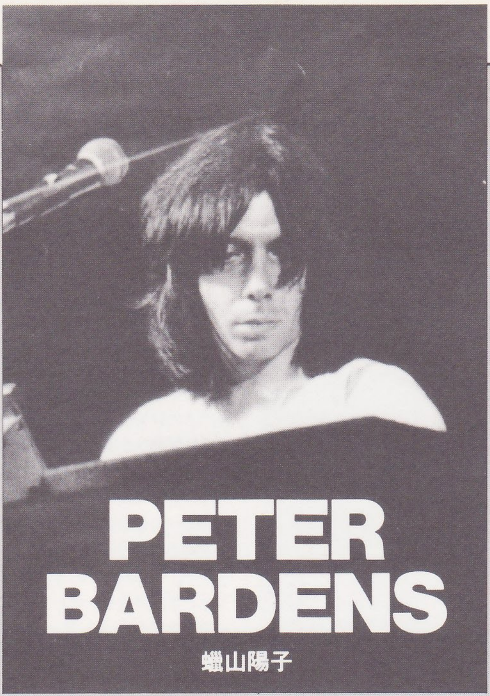


ンヴィール、デヴィッド・ペイトン、ポール・バージェス、メル・コリンズ、ハイドン・ベンドール。ベルリンの壁が舞台となっているこのアルバムのサウンドはひたすら暗く、悲しみに満ちている。自らの壁に行き当ってしまったラティマー自身の気持ちそのままなのかもしれない。ベルリンの壁が壊されたように、彼自身の壁も打ち破られ、再び新しいアイディアと共に CAMEL が甦ることを期待してやまない。CAMEL 最後の曲『Long Goodbyes』はそのまま彼等からの別れのメッセージとなる。

Long goodbyes、make me so sad.
I have to leave right now.
And I hate to go.
I know it's for the better.
Forgive my leaving now.
You know I'll miss you so.
and days we spent together.

「しばらくお別れだ、とても寂しいよ。
今すぐ発たなくては。
行きたくないけれど、そのほうがいいんだ。
去っていく僕を許しておくれ。
君のことも、共に過ごした日々も、
とても懐かしく思うだろう。」

さよなら CAMEL。

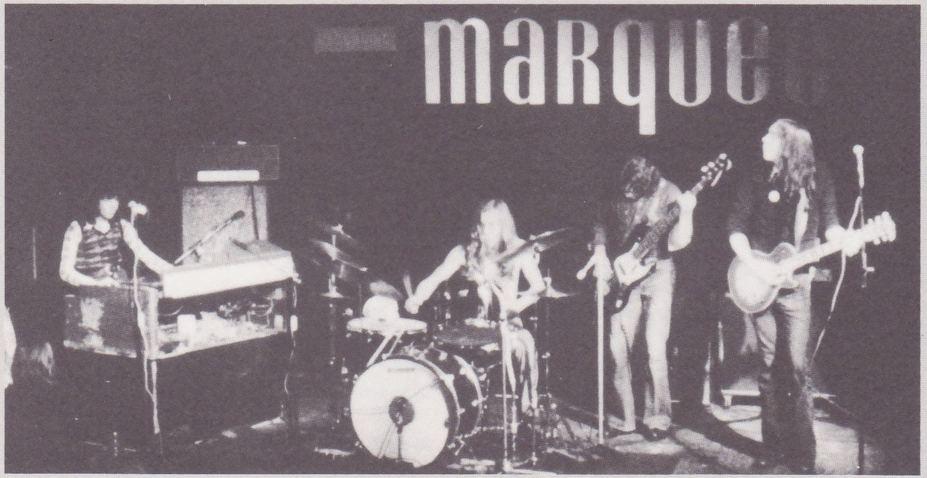


PETER BARDENS

蠟山陽子

ここではCAMELを代表するキーボード・プレイヤー、ピーター・バーデンスにスポットを当てることにする。ピーター・バーデンスは古くはHAMILTON KING'S BLUES MESSENGERS（'62）から始まって、多くのバンドでの演奏経歴をもっており、その中でもヴァン・モリソン率いるTHEM（'65年）に参加していたことや、ミック・フリードウッド、ロッド・スチュアート等が在籍していたSHOTGUN EXPRESS（'66年）にいたことなどは、比較的良く知られているところである。また、彼自身のバンドも幾つか結成しており、それにはTHE CHEYNES（'63－'65年）、PETER BARDENS' LOONERS（'66年）、VILLAGE（'68－'70年）、ON（'71年）等がある。上記のバンドで何枚かレコーディングしている他、2枚のソロ・アルバムも製作している。「The Answer」（'70年）、「Peter Bardens」（'71年）。また、CAMEL脱退後も精力的に音楽活動を続けている。脱退する直前の'78年にはヴァン・モリソンのアルバム「Wavelength」に参加し、CAMEL脱退直後はヴァン・モリソンのツアーに同行している。そして翌'79年には、ソロ・アルバム「Heart To Heart」がリリースされている。このアルバムにはメル・コリンズも参加している他、CAMEL参加以前からの仲間も交えて、透明な水の流れのような心地好いサウンドを展開させている。THEM, SHOTGUN EXPRESS等、今なお名を残すバンドに在籍しながら、彼の存在は常に目立つものではなかった。「僕はいつも他人の陰になっていた。正当な評価を受けたこともあったが、落ち目になると誰からも忘れられてしまった。全てのシーンからはみ出して、僕は傷いつた。」と、彼は言う。様々なスタイルの音楽が生まれ続けていた'60年代のロック・シーンの中で、自分の取るべき道をはっきりと見定めることができなかった、彼の怒りや悲しみ、そして悔しさ、以前、CAMELが有していたあの独特な哀愁や暖かみは、こんな彼の思いの上に築かれたものだったのかもしれない。アルバム「Heart To Heart」には、再びそんな彼のどこか悲しげなサウンドがぎっしり詰まっている。'80年になると彼はPETER BARDENS' MOLESという、女性ヴォーカルを中心に据えたバンドでライヴ活動を行っている。ライヴの音を聴くかぎりでは、かなりポップなバンドだ。残念ながらこのバンドでは何も発表していない。その後は、元ZOMBIESのヴォーカリストとして知られるコリン・ブランストーンのシングル「Touch」に参加したり、ピーター・グリーンのカムバック・アルバムに友情出演したり、サンディ・ショウのアルバムにも参加したりと、結構忙しく活躍している。そしてCAMEL時代からのファンにとって最も嬉しかったのは、'84年のハマースミス・オデオンにおけるCAMELの解散コンサートに駆けつけ、「The Snow Goose」のナンバーや「Lady Fantsy」を披露してくれたことだ。このライヴの模様はCAMELの2枚目のライヴ・アルバム、「Pressure Points」で聴くことができる他レーザー・ディスク等も発売されている。同時にこの年、彼はKEATSというプロジェクトを結成している。このバンド名は詩人ジョン・キーツからとったのだろうか。アルバム「Keats」は、「僕らがどこへ向かっているのか、その答えは神のみぞ知る。僕らの歩む道のりは険しい。」という歌い出しで始まる。勿論これはバーデンスの詩だ。プロデューサーはアラン・パーソンズで、音もかなりALLAN PARSONS PROJECTに近いと言ってもいいかもしれない。ヴォーカルは「Touch」で共作したコリン・ブランストーンで、かなり強力であるし、どの曲も非常によくまとまっている。しかし、このバンドはこれ1枚きりで解散してしまった。

彼のプレイはいつも非常にエモーショナルだ。「僕は感情もテクニックの上に反映させるんだ。自分でもエモーショナルなプレイヤーだと思っているよ。」という彼自身の言葉そのままである。それからしばらくのブランクがあったが、'87年になって再びシネマ・レーベルより、「Seen One Earth」というソロ・アルバムを発表した。彼によると、これは「ライト・スタッフ」の原作を読み、そこからインスパイアされた作品であるということだ。音の方は、スペイシーなシンセサイザーを軸に彼独特のブルージィなサウンドが展開する。'88年にはシネマ・レーベルからの2枚目のソロ、「Speed Of Light」がリリースされている。これもやはり音的にはCAMEL脱退後の2作のソロ・アルバムの延長上にあるものだが、「Seen One Earth」が宇宙から見た地球をテーマに描いたコンセプト・アルバムであるなら、こちらは人間の心の中の小宇宙について語られているといえよう。彼の詩はいつも、人生の悲哀や、はかない夢に託す希望に満ちている。彼の魂は大気となって地球の遙か上空を漂い、あるときは光となって宇宙の彼方へと飛んでいく。彼の音楽がこれからの若者達に受け入れられるのは少し難しいことかもしれない。彼の曲はどれも'70年代の亡霊の影を引きずるものだ。YESやGENESISが時代のニーズにあった作品を生み続けているのに対して、CAMELもバーデンスも、かたくなに自分たちのスタイルを変えなかった。新しい世代の音楽ファンはそれを時代遅れというだろうが、CAMELの夢が過ぎ去った後も、彼が地道に音楽活動を続け、アルバムを発表し続けてくれるだけで、私達バーデンス・ファンは満足なのである。





Camel

'73

デビュウ・アルバム。メンバーはアンドリュー・ラティマー（ギター）、ピーター・バーデンス（キーボード）、アンディ・ワード（ドラムス）、ダグ・ファーガソン（ベース）。ギターとハモンド・オルガンを中心にブルーズ、ジャズ、ラテンなどの要素を取り入れ、少々ハードで粗削りだが、自由な演奏を展開している。VCSシンセサイザーやメロトロンを駆使したキーボードが、プログレッシヴ・ロックの味を出している。アルバム中『Never Let Go』が代表的な曲であり、ライヴでもよく演奏された。（蠟山）



Mirage

'74

バーデンスはこのアルバムよりミニ・ムーグを使用しており、ハモンドB－3、メロトロンと、三種の神器の揃った、プログレ・ファンにはこたえられない作品。ラティマーもこのアルバムよりフルートを使用。ラテン風なところがとれ、美しくファンタジックなメロディが展開する。ハードな作品『Free Fall』から始まり、フルートの甘い響きを効かせた美しい小品『Supertwister』、ファンタジックでミステリアスな味を持つ組曲『Nimrodel』と『Lady Fantasy』。特に、『Lady Fantasy』は物語の展開と、それに合わせた音の静と動の組合わせの絶妙さで、初期の傑作とされている。（蠟山）



Snow Goose

'75

ポール・ギャリコの同名の小説を、従来のCAMELサウンドにクラシカルな趣を添え、音楽だけで表現したコンセプト・アルバム。デヴィッド・ベッドフォード指揮によるオーケストラとの共演が素晴らしい。小説の内容はイギリスの小さな漁村を舞台に、傴僂の画家ラヤダーと漁師の娘フリーザとの白雁（スノー・グース）を媒介とした、純真で無垢な心の交流を描いた作品。メンバーそれぞれの才能が遺憾無く発揮された、美しき最高傑作。この短編小説「白雁」には、いくつかの日本語訳が出ているので、原作を読みながら聴くことをお勧めしたい。（蠟山）



Moonmadness

'76

邦題「月夜のファンタジア」。月が人間にもたらす狂気をテーマにしたアルバムだが、サウンドはどこまでもファンタジックで美しい。バーデンスはこのアルバムより、メロトロンに替えてストリング・シンフォナイザーとアープ・オデッセイを使用して、月のスペイシーな情景を描き出しているが、ラティマーのギターとフルートによる甘い、暖かい響きによって、サウンドが無機質になり過ぎるのを防いでいる。明るい満月の夜、妖精の吹く笛の音に誘われて、透き通った夢の世界へ落ちて行き、月の照る、澄んだ大気の中や、きらめく水面を滑るように飛んでいくような感覚にさせてくれる。（蠟山）



Rain Dances

'77

邦題「雨のシルエット」。ベースが元CARAVAN、HATFIELD & THE NORTHのリチャード・シンクレアに代っているほか、メル・コリンズ（サックス）、ホーン・セクションにマーティン・ドローバーとマルコム・グリフィスを迎えて、ジャズ風のナンバーも聴かせてくれる。また、『Elke』（「白鳥のファンタジー」）では、イーノがゲストでキーボードを担当しており、夢あふれるお伽噺のような小品となっている。雨の中の植物たちは皆、生き生きとしてライトグリーンにみえる。そして雨の後のすがすがしい空には美しい虹、それが彼等の『太陽のハイウェイ』なのかもしれない。（蠟山）



A Live Record

'78

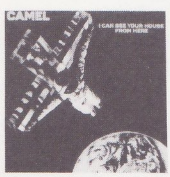
邦題「ライヴ・ファンタジア」。ライヴ・アルバムはこれと、「Pressure Points」の2枚がある。こちらは「Rain Dances」までのアルバムからのライヴにおけるベスト・テイクで構成されている2枚組アルバム。『The Snow Goose』は、1975年10月のロイヤル・アルバート・ホールでの、デヴィッド・ベッドフォード指揮によるロンドン交響楽団との共演が圧巻。また、未発表曲も含まれている。どの曲もアレンジにもう一つ、工夫が加えられており、スタジオ録音盤を聴いた人も、もう一度楽しめるようになっている。（蠟山）



Breathless

'78

メル・コリンズが殆ど正式メンバーに近い状態で参加している。音のほうは、きらめくようなアコースティック・ギターの響きが印象的な『Breathless』、代表的なCAMELサウンドを持つ中期の傑作『Echoes』、のどかな農場の一日が様々な効果音とともに綴られている『Down On The Farm』（『田園の日曜日』）、フュージョン・タイプのインスト・ナンバー『Sleeper』（『夢想曲』）等、いろいろだが、全体的には良くまとまっており、少しポップで暖かみのある曲が揃っている。勿論夢見るようなファンタジックな曲もある。バーデンスはこのアルバムを最後に脱退している。（蠟山）



I Can See Your House From Here

'79

邦題「リモート・ロマンス」。ベースがシンクレアからコリン・ベースに代っている他、ヤン・シェルハースとキット・ワトキンスによるツイン・キーボードが今までにないスリリングで迫力のあるサウンドを作っている。ヴォーカルもコーラス・パートが充実して聴きごたえ充分。テクニックとアレンジの面では、本作が最高と思われる。人間的な暖かさに溢れたアルバムだが、哀愁のある美しいメロディを有する『Ice』や、テクノ・ポップ感覚を実験的に取り入れた『Remote Romance』も面白い。しかし残念なことにワトキンスのプレイが聴けるのはこの1枚だけである。（蠟山）



Nude

'81

「ついにヌードにも召集礼状がきた。軍服に身を固め、戦艦に乗せられ、前戦へと駆り出されて行くヌード。上陸した南の島のジャングルでヌードは仲間から離れて一人きりになってしまった。一人洞窟に潜んで敵の影に怯えながらも救助の時を待つヌードの毎日。二十数年の月日が流れた後、ようやく発見され、母国へ帰還したヌードは、国の変わり様や自分を取り巻くマスコミに神経を擦り減らしてしまう…。」そう、これは小野田少尉の物語。デジタル・ミックス採用による抜群の音質で送る、久々のコンセプト・アルバムである。ツイン・キーボードの片割れには元10C.C.のダンカン・マッケイが参加。（蠟山）



The Single Factor

'83

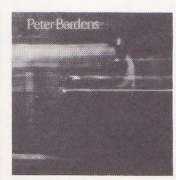
実質上アンディ・ラティマーのソロ・アルバム。参加メンバーはクリス・レインボウ(vo.)、デビッド・ペイトン(b.)、グラハム・シャービス(ds.)の他、サイモン・フィリップス、デイブ・マタックス、フランシス・モンクマン、ピーター・バーデンス、アンソニー・フィリップス、ダンカン・マッケイ等。ラティマー自身もベース、ピアノ、メロトロン等を演奏している。歌物が中心で、'80年代にふさわしい音作りになっているが、決してファンの期待を裏切るようなものではない。特にバーデンスを迎えての『Sasquatch』は流れるようなリズムが心地好いCAMELサウンドの快作。（蠟山）



Stationaly Traveller

'84

メンバーは、ラティマー、レインボウ、ペイトンの他、元KAYAKのトン・シャーペンヅィール（キーボード）、ポール・バージェス（ドラムス）、メル・コリンズ（サックス）等。ベルリンの壁がドイツを二つに分け隔てていた当時の、壁をはさんで生活していた人々の人生が描かれているアルバム。全体的に、暗く悲しみに満ちたメロディで溢れているが、厚みのある、大変豊かな音作りになっている。『Long Goodbyes』は、ラティマーのフルートをフィーチュアした、最後の名曲といえるだろう。（蠟山）



PETER BARDENS

same

'71

'60年代前半よりプロ活動を始めセッション・マンとしてのキャリアを積んだ彼は、トランスアトランティックとソロ契約。本作は彼を中心としたバンド形態の作品。様々なタイプの曲が収録されており、それ迄の活動歴から察せられるようにブルーズやR&Bをバックボーンに持つ曲が多いが、ハモンドを中心とした英国臭い演奏が聴ける。そして全体的にサイケデリック色が加わり、曲の発想は'60年代のイディオムに基づいている。しかし彼の持ち味と言える響きを大切にした、シンプルな効果的演奏がA④やB③において聴かれ、これは後にCAMELの個性となる。（吉野）

BARCLAY JAMES HARVEST

後藤秀樹

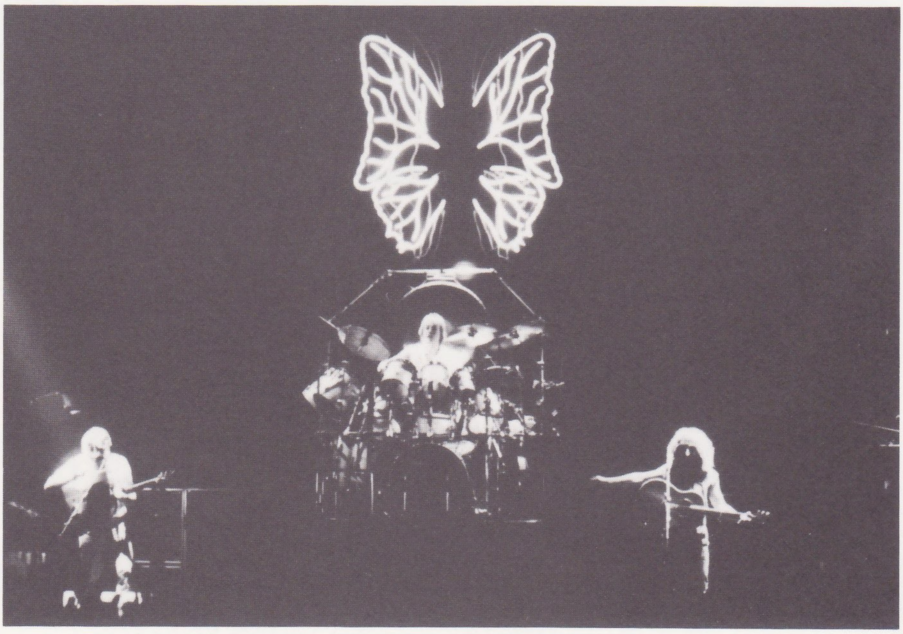
昨’89年11月、世界中が見守る中で、東西ドイツを分断していたベルリンの壁が崩された。その一件を契機として、東欧の民主化という大変革が行われていくのだから、これは歴史上の一大事件と呼んでいいだろう。

答えてくれ、
誰がことの良し悪しを知っているのか。
来てはまた過ぎていく歳月。
橋が燃え
時の輪が回り続けるのを
君は見たことがあるだろう。
（“Berlin” BJH<Les>　拙訳）

バークレイ・ジェームス・ハーヴェスト（以下BJHと略す）のメンバー達は、この歴史的な瞬間をどんな思いで眺めただろうか。と言うのも、BJHにとって東西ドイツ、とりわけベルリンは独特な思い入れを持った場所であるに違いないだろうから。

デビュウ当時から、直接的ではないにしても、彼らは世界を鋭く見つめていた。『宇宙の子供』では、南アフリカ、ベトナム、北アイルランドの子供達について歌い、『サマー・ソルジャー』では従軍兵士を歌い、『ベルリン』ではドイツの悲劇を歌ってきている。しかしながら、彼らの歌の奥にあるものは固い意志である。それは希望であり、夢であり、愛である。それらは決してチープなものではなく、人生哲学として詩に表現しているのだ。

特にドイツに関して言うと、’80年8月30日に西ドイツのベルリンの壁の前の広場でフリー・コンサートを開催した。のべ18万人もの聴衆を前に演奏し、圧倒的な支持を集めている。彼らはその後も何度かドイツ国内をツアーで回り、’82年の模様はフィルムに収められアルバム“ベルリン・ライヴ”として発表されている。イギリス出身のグループがドイツで人気を博すという例は、NEKTAR、BEGGARS OPERA、STEAMHAMMER 等数多く挙げられるが BJH ほど大々的なツアーを組んだという例は少ない。BJHのドイツへの想いは、遂に東ドイツへ及ぶ。’87年、今度は東ベルリンでコンサートを開く。これは西側ロック・バンドとしては、東ドイツで初めての公演であり、ベルリン開基750年記念祭の一環として招かれたものであった。この時の模様も、翌’88年「Glasnost」（本邦未発）としてCD化されている。これら2つのライヴ・アルバムに共通して収録された曲が2曲ある。ひとつは冒頭に詩を載せた『ベルリン』、もうひとつは『賛美歌』である。共に美しく叙情的な演奏を聴かせているが、特に後者では荘厳さ、力強さをみせており感動的である。野外コンサートということもあって、闇夜に飛び交う七色のレーザー光線、そしてスポット・ライトに浮かぶメンバーが振り上げる拳。まるで演奏する彼らを目のあたりにしているような錯覚に陥る程である。そして今、歴史は東西両ドイツを融合しようとしている。丁度、誕生した時と同じように……



BJH の歴史は’66年にさかのぼる。カレッジ・バンドであった WICKED と KEEPERS が合体し、バンドの母体が出来上がった。メンバーは、John Lees、Les Holroyd、Wooly Wolstenholme、Mel Pritchard の4人。彼らは自分達の音楽を生み出すために、18世紀に開かれた古い農場で共同生活を始めた。彼らの音楽に牧歌的な優しさを感じるのは、そんな出発点に関係があるのかもしれない。そうして1年が過ぎ、EMI と契約したBJHは、デビュウ・シングル『アーリー・モーニング』を発表。2年後にセカンド・シングル『ブラザー・スラッシュ』をノーマン・スミス（ビートルズの元エンジニア）のプロデュースで発表している。当時の彼らの音楽は、基本的にはアコースティックを中心としたメロディ重視のフォーク・ロックと呼んで差し支えないだろう。（ただし、メロトロン他のキーボードの使用は、その後のシンフォニック路線の布石としてとらえられる。）

丁度、その頃、彼らはロイヤル・アカデミーの音楽科を卒業したばかりのロバート・J・ゴドフリィと出会う。ロバートは仲間の学生達とともにBJHオーケストラを結成し、BJH のコンサートに同行した。ロンドン、マンチェスター、バーミンガム、エジンバラといった4都市を回るコンサートは大きな赤字を出したが、音楽的には大きな成果をもたらした。’70年6月に新興レーベルのハーヴェストからファースト・アルバムを発表。同時に発表されたシングル『テイキング・サムタイム・オン』に明らかなように、力強さを加え、またクラシカルなオーケストラの導入もあって、非常にプログレッシヴな方向性を示していた。’71年2月には2枚目の「Once Again」を発表。更にプログレッシヴで美しい叙情的な音楽性は大きな共感を集めた。特に彼らのクラシックともなっている『モッキンバード』はこのアルバムに収録されている。

しかし、オーケストラを同行してのコンサートは経費が莫大で、経済的にいよいよ苦しくなり、ライヴの方法を見直す時がやってきた。そして彼らの取った解決策が名曲『メディシン・マン』にあらわれている。同曲はアルバムとシングルでヴァージョンが異なる。アルバムでは大きくオーケストラを導入し雄大な曲となっているのに比べ、シングルではリズムを前面に押し出しロック色の強い曲として仕上がっている。これは、彼らがスタジオ・ワークとライヴとを完全に別のものと考えた証明であった。3枚目にあたる「Other Short Stories」は、その『メディシン・マン』を含めて、’71年11月に発表されている。

’72年に入ると、最初のベスト・アルバム「Early Morning Onwards」が発表される。ここには、最初の2枚のシングルと3枚のアルバムからのセレクションが収められ、PINK FLOYD の「Relics」、YARDBIRDS の「Remember」と同じシリーズとして EMI ／スターラインから発売され





ている。このベスト・アルバムは9月に出ているが、同月1枚のシングルがリリースされた。『ブレスレス／ホェン・ザ・シティ・スリープス』という2曲がカップリングされ、バンド名はBOMBADIL。実はBJHが名を変えて出したシングルなのだ。どちらもオリジナル作品ではなく、またポップな曲なのだが、ヴォーカルと演奏は間違いなくBJHそのものである。（この2曲はハーヴェストのヘリティジ・シリーズ"The Best Of BJH Volume II"で聴くことができる）11月にはハーヴェストからの最後のアルバム「Baby James Harvest」が発表される。その直後、リーダー格のジョン・リーズはソロ・アルバムの製作に入る。

'73年は大きな変化の年となった。6月にハーヴェストとの契約が切れ、12月にポリドールと長期の契約を結んでいる。そして'74年6月に「Everyone Is Everybody Else（宇宙の子供）」、11月に「Live」をたて続けにリリース。繊細な曲づくりと叙情的で美しいメロディ・ラインは相変わらずながら、大きな変化がみられる。その理由は、プロデューサーのロジャー・ベインの存在であろう。オーケストラを一切使用せずに、シンプルでしかもヘヴィでメタリックにライヴ感覚で音造りをする。そして、それは意外にもメロディを際立たせる。そんなロジャーの考えは、2枚組のライヴで大きな成果を挙げた。

プロデューサーの力量による効果は、以後のアルバムにも言えることだ。

'75年9月に「Time Honoured Ghosts（神話の中の亡霊）」、'76年10月に「Octoberon（妖精王）」を続けて担当したのは、エリオット・メイザーである。（「Octoberon」は最終段階でBJH自身のプロデュースとなったが、）彼は、ロック色を強めたBJHの音楽に、色彩感を与えた。それはハーヴェスト時代に聞かれたウーリィのクラシカル感覚の復活と、アルバムのトータル性にあらわれている。また、ジャケットに彼らのシンボルである蝶が戻ってきたことも嬉しい。

余談になるが、'76年にはENIDがデビュウしている。何故こんな話を書くかと言えば、BJHのデビュウ以来、音楽ディレクターとしてオーケストラを率いたロバート・ゴドフリィがその中心人物だからだ。彼は'74年にカリズマから「The Fall Of Hyperion（太陽神ヒュペリオンの堕落）」をソロとして発表しているが、ライナーでウーリィに謝辞を載せている。そのソロはクラシカルでデカダントな傑作で初期BJHのアルバムにイメージが重なってくる。そしてウーリィのアレンジとの共通性も感じられる。

BJHは、1年に1作のペースを守り、'77年には大傑作「Gone To Earth（静寂の海）」を発表する。プロデュースは彼ら自身となっているが、共同プロデュースとしてデイヴ・ロールの存在が見逃せない。彼はMANDALABANDの影の仕掛人だからだ。前2作の延長線上にありながらも、より空間的な拡がりを感じさせメロディもよく練られた素晴らしいものになっている。この頃になるとBJHの人気はアメリカ、ドイツで大きなものとなり評価も定着する。

'78年には2度目のライヴ（2枚組）を発表。より自信に溢れた演奏を聴くことが出来る。'74年のライヴはカレッジ・コンサートの模様だったが、今度は、ヨーロッパ・ツアーの記録である。更には、冒頭で記した'82年、'88年のライヴは野外コンサートからの収録であり、4種のライヴを発表していることも驚きではあるが、その内容をより拡大させていることは敬意を払うに値する。

続いて通算12枚目にあたる「XII」を発表。それは、丁度レコード・デビュウ12年目でもあった。このアルバムはドイツで大評判となり発表直後に8万枚のセールスとなった。彼らは安定した活動を続けていくように思えたが、'79年6月、何とウーリィがソロとしての独立を宣言した。バンド結成以来、不動だったメンバーの一角が崩れてしまったのである。彼の脱退によるメンバー間の動揺は想像に難くない。同年暮に発表した「Eyes Of The Universe」はどうも元気のない、精彩を欠いたものになってしまっている。しかし、残ったメンバーの意志は固いものがあり、決して新メンバーを補充することなく、'80年には大規模なツアーを行った。その中には、今や伝説になっているベルリンでのフリー・コンサートも含まれている。正に復活したBJHの感が強く、'81年半ばにリリースされた「Turn Of The Tide（蜃気楼の街）」でも、幻想的で美しい世界を取り戻している。一方、脱退したウーリィは'80年に「Maestoso」を発表している。

BJHは、'82年にライヴ・アルバム「Berlin」を、'83年には「Ring Of Changes」、'84年に「Victims Of Circumstance」、若干のインターバルをはさんで'87年に「Face To Face」'88年には4度目のライヴ「Glasnost」を発表してきている。'90年代を迎えた現在（いま）、新たなニュースは手元に届かないものの、近いうちに新譜とともに元気な姿を見せてくれそうな気がする。ベルリンの壁が崩されたからと言って、彼らの役割が終った訳ではないのだから。

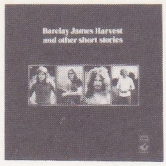
田園風景の中に暖かさを見出し、神秘的・幻想的な美しさを求め、限りなきロマンの世界にいるBJH。既にバンド結成24年を迎えベテランの上に超がつく存在になっている。日本では決して第一線に登場することはなかったが、彼らの熱心な理解者も未だ多いのは事実である。



Once Again

'71

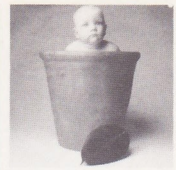
２作目は初期の彼らを代表する傑作だ。名曲Ｂ①を含むこの作品は英国ファンタジック・ロックの代表作でもある。大々的に導入されるメロトロンとシンフォニー・オーケストラ。後に ENID を結成するロバート・ゴドフレイが前作同様に音楽監督を担当している。構成の凝った曲が並ぶ中で、Ａ④、Ｂ②のような牧歌的な小品がまた素敵だ。嘗て日本でも「バークレイ・ジェームス・ハーベスト の叙情」という邦題でリリースされたが、叙情という言葉が実にピッタリとする。ジャケットもまた魅力的で、見開きで蝶とわかるステンドグラスはアナログ時代の遺産なのか。（後藤）



Other Short Stories

'71

３作目。前２作ではメンバーの詳細なクレジットが無かったが、ここでは一曲毎に詳細なクレジットが掲載されている。これ迄同様シンフォニー・オーケストラが加わっているが、指揮はマーティン・フォードとなり、ゴドフレイの名は見当たらない。Ａ①は彼らの代表曲で、シングルにもなっている（全くの別テイクで、シングル・ヴァージョンはライブで演奏されるアレンジである)。圧巻はメドレー形式で計10分に及ぶＢ③、④だ。MOODY BLUES にも共通する曲展開なのだが、ウーリィの曲創り、ヴォーカルの魅力を知るにふさわしい作品となっている。（後藤）



Baby James Harvest

'72

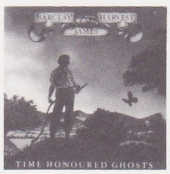
５作目は、タイトル及びジャケットが印象的だ。基本的にはこれ迄の延長線上にあるが、Ａ②のようなブラスの導入は新たな試みである。Ａ③は戦争をテーマにした大曲だが、当時のブリティッシュ・ロック・シーンではそれをテーマにした曲が不思議と多い。SPRING、DEEP FEELING、NUCLEUS、GENESIS、WILD TURKEY 等。その理由は反戦の意志をこめながらもドラマとして展開させるという時代性なのかもしれない。もうひとつ興味深いのは、Ｂ③。ウーリィが明確にクラシック志向を示した作品だ。浮遊感に満ちたその音世界は彼に影響を与えたマーラーに、確かに通じる。（後藤）



Everyone Is Everybody Else

'74

マネージメントのトラブルから、古巣ハーヴェストを離れポリドールに移籍して最初の作品。通算６作目となる。アルバム・デザインにしても音創りにしても随分スッキリとシンプルになってしまった。オーケストラも聴かれずメンバー４人の演奏のみだが、彼らの音楽的方向が大きく変化した訳では決してない。メロディアスで秀れた曲が並んでいるのだから…。しかしながら今迄感じられた温もりが欠けているのは確かかもしれない。彼らのトレード・マークだった蝶もどこにもいない。一般的な評価は低い作品だが、確かに地味さを印象づけたようだ。（後藤）



Time Honoured Ghosts

'75

ジャケットが、収められた音楽をうまく表わしている。邦題は「神話の中の亡霊」。昼から夕暮へと移る時の中に寓話が用意されている。明るい陽の光の下では実体を成す蝶（彼らのシンボル）も、夕刻になればその影のみが浮かび上がる。そんなあたり前のことも、BJH にかかると、とても幻想的な音世界として描かれてしまう。Ａ③では、BEATLES のタイトルをつなぎ合わせた遊び心が見られる。Ｂ③は「Moongirl」という曲名から想像出来るように KING CRIMSON の「Moonchild」のアンサー・ソングのようだ。とても優しくデビュウ当時を思い出させるアルバムだ。（後藤）



Octoberon

'76

邦題の「妖精王」。ポリドールに移籍してからはシンプルが身上だった彼らだが、本作では再びストリングスを、そして混声合唱までも取り入れ、シンフォニックな線に戻ったかのようだ。アルバムは大作３曲の Red Side と軽目の曲を含んだ Blue Side とに分けられている。歌詩も内省的なものが多くなり、トータル・アルバムとしての意識が強いようだ。聴き物はＡ③とＢ④。特に前者はウーリィのクラシカルな素養がよく生きた神秘的かつダイナミックな作品だ。後者の方は淡々と弾き語りが続くが、タイトルからも想像つくだろうが意味深で恐い曲である。（後藤）



Gone To Earth

'77

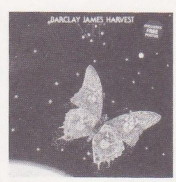
通算10作目のアルバム。趣味の良い変型ジャケットに包まれた音楽は、前作にも増して繊細なものとなり、それでいて力強い意志が感じられ、感動を覚える程だ。イギリスでシングルになったＡ①は荘厳で、広大な拡がりを見せるが、録音そのものは凍りついたように穏やかで、邦題「静寂の海」のイメージを喚起する。収録された全９曲、どれもよく練られたもので魅力的である。特にＢ②はウーリィのクラシカルな曲だが、単に彼の最高作というばかりでなく、BJH のベスト・ソングと呼びたい位に素晴らしい曲だ。アルバムの統一感は好プロデュースによるものだ。（後藤）



Live Tapes

'78

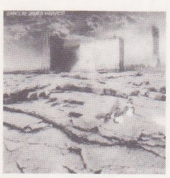
BJH は、現在迄に（'90年）４種のライヴを発表している。本作は、そのうち２番目に出されたもので'78年に発表されている。選曲は『Mockinbird』を除いて12曲が、ポリドールに移籍してからのものである。重厚でメタリックな印象のライヴだが、彼らの身上である優しさはアコースティックな楽器の使用とあわせて感じることが出来る。Ａ①の『宇宙の子供』のオープニング、Ｄ③『賛美歌』の感動的な迄のダイナミックさ、全編を通じて正に完璧なライヴ・アルバムである。内ジャケットに掲載された４人のメンバーの自信に溢れた表情もまた印象的だ。（後藤）



XII

'78

結成12年目にして通算12枚目のアルバム。タイトルも「XII」。前作のライヴで一区切りをつけた BJH の新生面を見ることができる。Ａ①のような、ビートを活かしたポップな曲には意外性があるものの、他の曲では一層深味を増した味わいのある演奏、詩を聴かせてくれる。トラッドな雰囲気を感じさせるＡ⑤、彼らの代表曲にもなったＡ②、Ｂ①、そして超名曲はＡ⑥。例によってウーリィのクラシカルなメロディと拡がりを持った曲なのだが、GENESIS の「月影の騎士」に通ずるテーマを持っていて興味深い。本アルバムのヨーロッパでの評価は非常に高かったようだ。（後藤）



Turn Of The Tide

'81

伝説のベルリンの壁を前にしてのコンサートから帰った後、ロンドンで録音され、翌'81年に発表された14作目のアルバム。ジャケットの美しさは特筆もので、水中から地上を見上げた風景とその逆の風景とが、アルバム表裏で見事に表現されている。ウーリィ脱退直後の前作がひどかっただけに、本作での復活はとても喜ばしいものだった。全体に、ゆったりと暖かみのある曲調が多く、彼ら自身の落ち着きが感じられる。Ｂ④はとびきりポップで軽快な曲。ヨーロッパではシングル・カットされ大ヒットしたようだ。本作ではコンポーザーとしてのレス，彼を再認識した。（後藤）



JOHN LEES

A Major Fancy

'73

'72から'73にかけて録音されながら、'77年になってハーヴェスト・レーベルのヘリティジ・シリーズの１枚としてリリースされたジョン唯一のソロ・アルバム。全編リラックスしながらも繊細な感性が窺える好作品である。Ａ②の『宇宙の子供』は BJH のアルバムに収められたものと同曲だが、録音時期はこちらの方が早そうだ。参加メンバーには BJH のメンバーは一人もいなく、趣味の世界に遊ぶ印象がある。10CC 結成前のケヴィン・ゴドレー、エリック・ステュワート、そしてロッド・アージェントがサポートしているが特にロッドのオルガンは良い。（後藤）



WOOLY WOLSTENHOLME

Maestoso

'80

「XII」を最後に BARCLAY JAMES HARVEST を脱退した彼のソロ・アルバム。あの名作“マンダラバンド”を作り上げたデヴィッド・ロールのプロデュースでリリースされた本作は、全体的にこの頃の BJH の音楽性とあまり差がない。初期の BJH はオーケストラを導入していたためハモンドやメロトロンを中心にした地味なプレイだったが、「妖精王」から「ライヴ・テープス」の頃には、多種のキーボードによる壮大なオーケストレーションを聴く事が出来る。本作でもＢ面に ENID ばりのスケールのシンフォニックな大作が収録されている。（Luna）

GENTLE GIANT

Chihiro S.
(Golden Avantgarde, Lacrymosa)

ジェントル・ジャイアントに関するヒストリー等は「ユーロ・ロック集成」P.190、本誌 Vol. 28のP20の特集記事に詳しい。ここでは同じ内容が繰り返されることを避け、上記の物に補遺する形で話を進めたいと思う。

1、テキストの中の『巨人』について

ジェントル・ジャイアント（以下GG）のテキスト中に『巨人』が最初に姿を現すのは1stアルバムである。『認識の誕生』という唄い出しで始まるA面トップのナンバー、「Giant」。ここでの『巨人』は当然グループとしてのGGのことである。曲調としてもバンドのイントロデュース的な意義が強く、1st発表当時は、かなり重要なナンバーであったのではないかと思われる。（ライヴのオープニング／エンディング・ナンバーとして使用されていたのではないだろうか。）

1stにおいて、もう一方の巨人は、プロデューサーのトニー・ヴィスコンティが内ジャケに書いた童話／フラワー・ムーヴメント風ファンタジー／ヨタ話に出現している。優しい巨人がGGの音楽を気に入り、メンバー達と仲良くなるという、たあいのない内容だが、注目すべき点が2つある。

1つは『優しい巨人』のフランスのガールフレンドが、『ガルガンチュワの娘』であるという設定になっていること。もう1つは、巨人の大きさに関する荒唐無稽な描写の仕方が、フランソワ・ラブレーの手法に類似していること。要するに、1stの時点で、少なくともトニー・ヴィスコンティは、ラブレー作品を読んでいたと思われる、という訳だ。

2nd以後、『巨人』はジャケット以外に姿を現さなくなったかのように見える。しかし、実際には必ずしもそうではない。トニー・ヴィスコンティが同じくプロデュースした2nd「Aquiring The Taste」を見てみよう。A①のタイトルは「パンタグリュエルの生誕 Pantagruel's Nativity」だ。これは詩を見ても明らかなように、ラブレーの代表作である「乾喉人国王パンタグリュエル物語及びその驚倒すべき言行武勲録」（略称「第二之書」）の第三章に取材したものである。（詩ー1参照）

巨人王ガルガンチュワの息子、パンタグリュエルの誕生と同時に、王姫バドベックは死亡。その喜びと悲しみの間で、巨人王の気持ちは吉本の芸人のように大袈裟に切り変わる。

残念なことにGGは、この軽妙さを歌詩のみでは表現出来ていない。しかし、曲に乗った時の微妙なバランスには思わず微笑みが浮かんできてしまう程だ。

ところで、このパンタグリュエルは4th「Octpus」にも出現している。やはりA①である「パニュルジュの到来 The Advance of Panerge」がそうだ（詩ー2参照）。これもラブレーの「第二之書」第九章のエピソードを元にした作品である。

或る時、パンタグリュエルは臣下を連れてパリ郊外を散歩していた。するとシャラントン橋の方から、手傷を負い、乱れた衣装の男がやって来る。だが、格好に反して高貴な家柄のように見えたので、パンタグリュエル一行は男に問いかけてみる。すると男は一行に対してドイツ語／アラビア語／イタリア語／スコットランド語／バスク語／オランダ語／イスパニア語／デンマーク語／ヘブライ語／古代ギリシア語／ラテン語で答える。一行が困り、フランス語を話せないかと尋ねると、男は『実は一番得手である』と答えた。この男がパニュルジュである。パンタグリュエルは非常にパニュルジュを気に入り、その場で臣下に取り立てた。ちなみにパニュルジュは各国語で『飯を食わせてくれ』と言っていただけであった。以後、パニュルジュは臣下としてだけでなく、友人としても重要な役目を果たすこととなる。

この話は、本作からGGにとっての「永遠のドラマー」であるジョン・ウェザースが加入していることを合わせて考えると非常に興味深い。パニュルジュ＝J・ウェザースなのだろうか？　今となっては証明材料不足であり、何とも言い難い。パニュルジュの性格に関して、ラブレー研究の第一人者である渡辺一夫は『下品なことをこの上もなく好む性格』と愛情を込めて評しているが、ウェザースが下品であったかどうかは定かではない。（笑）だが、ウェザースはパンタグリュエルにとってのパニュルジュ以上に重要な役割ーバンドにビート感をもたらしたーを果たしたと言えるだろう。

ここでも歌詞が物語世界を完璧に説明している訳ではないのだが、改めて曲を合わせて聴いてみると、シャラトン橋からやって来る男が、かなり非道い奴だということは感じられる。

この4th頃までGGはラブレー的なユーモアを意識していたという点は注目に価する。この辺はシリアスな路線が主流だった当時のプログレのメイン・ストリームと違うところだろう。

2、私がジェントル・ジャイアントについて知っている2、3の事柄

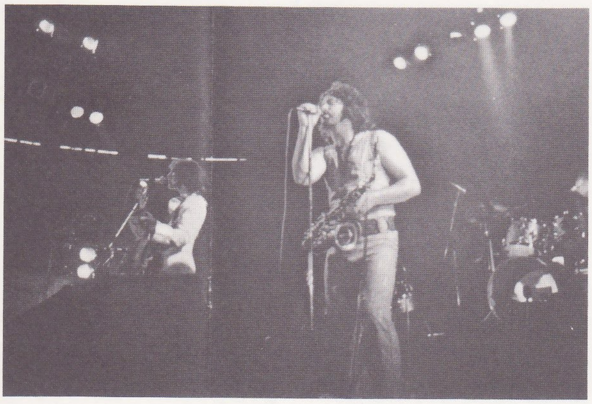
GGの歌詞は一部の企画物を除くと、内省的であったり、社会内部における個人の疎外を唄ったものが多い。これは当時のプログレッシヴ・グループが、いたずらに哲学的／高踏的な方向に走ったり、楽観的な理想主義的内容に陥り易かったのに比較すると、非常に興味深い。GGのやろうとしたことは、うまく周囲との関係を表現出来なかった場合には、非常に底の浅いものになったり、ジョン・ウェットン等に見られるように愚痴の羅列に終わったりし易いことだった。それを1stのA④の「Isn't It Quiet And Cold」に見られるように、都会のエア・ポケットのような孤独感を気のきいた短編小説のように仕上げている点等は評価されるべきだろう。（1st国内盤訳詞参照）

「Three Friends」のA③の「一日中働いて／Working All Day」で表現されているのはヘッセ的な労働者の姿だが、この労働者の姿は現代ではサラリーマンの姿とオーバーラップされるのは言うまでもない。笑えない事実だが。（詩ー3参照）

GGは身近なテーマや内省的な想いを、ヴォルテイジを下げることなく、



明るく唄い切ったバンドだったと思う。（もっともシニカルな明るさではあったけれども。）歌詞の重さは、曲がこれ以上暗かった場合、救いのないものとなったろう。まあ、日本人は比較的、そういうのを好んだりしたものだが……。



ガルガンチュワとパンタグリュエル物語

F・ラブレーが創造した、ガルガンチュワとパンタグリュエルの2代に渡る、巨人王物語の成立には多少複雑な事情がある。現在では「第一之書ガルガンチュワ物語」、「第二之書〜第五之書パンタグリュエル物語」となっているが、『第何之書』というという表現は後年のもので、実際には「第二之書」が最初に出版されている。「第二之書」が出版された1532年11月に先んじる形で、作者不詳の中世民間伝説物語「巨人ガルガンチュワ大年代記」という作品が発表されていることに注目して欲しい。『ここ9年間の聖書の売り上げを2カ月間で抜いた』というこの本とラブレーとの関係については諸説が多い。ラブレーがゲラの段階で読んでいたとする説、校訂者の一人であるとする説、単なる読者とする説等。大切なのはこの本がラブレーに筆を取らせる動機のひとつとなっていることだ。

逆にラブレーのオリジナルな部分として、民話の中の巨人に人間味を与えたこと、博識に裏打ちされた漫画的で痛烈な諷刺が盛られている点等があげられるだろう。又、パンタグリュエルは本来、民話の中の海の精であったのだが、ラブレーはこれをガルガンチュワの息子——巨人王Jr.と設定している。これは、1532年という年が6カ月も旱天続きであったということと無関係ではなく、事実、『周囲の者の喉を乾かせ、酒を飲みたくさせる』という属性を、ラブレーはJr.に与えている。

物語は、或る意味で山上たつひこ並みにアバウトである。例えば巨人であるという特性も話をおもしろくする為に極端に強調されたりするが、時には等身大であるとしか思えないこともある。諷刺も教会や大学に対して向けられたかと思うと、ただの下ネタで一章使ったりもする。このフランス的なエスプリとユーモアにあふれた作品は、当時、パリ大学ソルボンヌ神学部からほぼ全巻禁書の認定を受けている。

詩①

「パンタグリュエルの生誕
Pantagruel's Nativity」

いかように泣き、笑えば良いのか
心引き裂かれる想いの時に？
バドベックは死なねばならなかった
かわいいパンタグリュエルが産まれる為に
わしは泣くべきだろうな、そうだ、しかし理由はどうする？
それでは笑い飛ばすか

言語を絶する力を持って産まれ
偉大な生涯を予感させる
巨大な姿で
楽しそうに笑っていても　すぐに憤激する
王子にふさわしい知恵、勇敢な性格
権力と名声、賞賛されるべき賢人

パンタグリュエルが産まれ
大地は乾き焼けつく
天国でバドベックは
息子の為に祈りを捧げる

詩②

「パニュルジュがやって来る
The Advent of Panurge」

パンタグリュエル——ラブレー的などぎついユーモアを持った巨人王——は生涯の友であり、仲間であるパニュルジュと出会う。

シャラトン橋を越えてやって来る
貧乏そうだがおもしろい奴

何を望む？　何処へ行く？
誰だ？　何処から来たんだ。
名を名乗ってくれないか？
一寸休んで友達になってくれ
一緒に居てくれ、助けになろう

すると彼は言った——
私は白面で　喉が焼けつき
話せそうにありません
御助け下されば
疑問に答えましょう
友達というなら御助け下さい
連れてって下されば
御側を離れますまい

そして彼は言った
パンタグリュエル殿よ
我が名はパニュルジュ
地獄よりまいりました

我が友を見よ
我が伴を見よ

これからは仲間だ
さあ、友よ！

詩③

「一日中働いて
Working All Day」

一日中働いて道路を掘りおこす
一日中働いて
金の為に土を掘り　好きなものに費す
何も文句はないさ
汗で溺れそうだけど　金が救いだ
後悔はしない
一日中働いて
一日中働いて

若い頃は幻覚を見たものだ
夢なんて簡単なものではない
父親は乱暴で無教養
生き地獄は辛いものだ
人間は皆平等だと言うは易いが
嘘だってことは一目了然だ
俺はカス（ダスト）を食らい
ボスは金をもうける
（以下略）

フランソワ・ラブレー

フランソワ・ラブレー（FrançoisRabelais：1494？〜1553？）は宗教改革期の修道士／医師である。青年期を修道院で過ごした後、遍歴時代を経て、モンペリエ医科大学に入る。1530年の暮には医学得業士となっている。1532年に、当時パリと並ぶ文化都市であったリヨンに移り、3冊の学術書を発表している。同年、「第二之書パンタグリュエル物語」発表。以後1534年に「第一之書ガルガンチュワ物語」、1546年に「第三之書」、1548年に「第四之書」を発表。

当時はソルボンヌ大学神学部のギリシャ語研究禁止、フランチェスコ会修道院の盲従といった時代背景があり、ラブレー自身もギリシャ語書籍を没収されており、時の宗教制度に対する反発／反感は大きかったと思われる。ラブレーは宮廷からは好意的に見られていたものの、晩年には旧教側からも新教側からも攻撃罵倒されたりする。

死後、「第五之書」が発表されたが、偽作とする説もある。

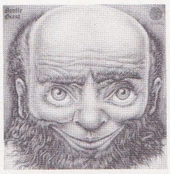
対談 ジェントル・ジャイアントは『音楽の発明』だ！
◎音響面から見たGG 柳田克×Chihiro S.

Chihiro（以下C）：音響効果の面から見たジェントル・ジャイアント（以下GG）、ということなんだけど。
柳田（以下Y）：一口で言うと、「多彩なエコーを使ったエフェクト」という事かな。
C：エコーと言っても、当時はデジタル・ディレイもデジタル・リヴァーヴもまだ存在していない。アナログ・ディレイはどうかな？
Y：微妙なところだろうね。まあ、テープ・エコーがあるから。
C：わかり易い部分としては、あの「Octopus」の「Racouteur, Troubadour」ですか。
（この曲に関する雑談が、今回の企画の源になっている。）
Y：そう。ヴォーカル部のリヴァーヴ音のみをショート・ディレイで逆方向に持って来ているという。GGは残響効果も編曲の一部として考えていたのかもしれない。
C：十分、あり得る話だよね。俺でさえ、スコアを書く時にパンの位置程度は考えていたりするし。ところで2ndのA②の「Edge of Twilight」の中間部の遠くで聴こえるような音像空間はどうやって作ってあるのかな。
Y：この辺がGGらしいところで、何種類ものディレイを使って、ライヴでは体験できないような、あり得ない空間を作ってしまっているんだよね。擬音空間というか。
C：具体的にはどんなことをやっているのだろう。
Y：ショート・ディレイで間近な空間を、リヴァーヴ処理されたロング・ディレイで遠くの音を表現している。それにリヴァーヴで不自然さのない声を作る。ノン・エフェクト音を加えたりね。ある意味では絵画的なミックス・ダウンだね。
C：成程。ところで、この時期の各楽器の録音の仕方についての特徴は？
Y：まず、ドラムについてなんだけど、スネアの裏——サイド・ヘッドにもマイクを持って来ているね。
C：それはどんな効用を想定しているのかな？
Y：スナッピーの鳴りを取る訳なんだけど、これが時にはひずんで聴こえてしまう。ボブ・クリアマウンテンも、最初は裏からも取ってたらしいんだけど、どうも、うまくいかない。
C：で、表だけにした？
Y：うん。ただし、表のヘッドに2本付けた（笑）。GGの場合も、1stでは少し割れてるように聴こえるんだけど、他の音がこもっているのが、逆に救いになっている。2ndではイコライジング処理の上達というか、サイド・ヘッドと表のヘッドのマイク・アレンジがうまくなったというか、それが気にならない。
C：この辺はT・ヴィスコンティがプロデュースをしている頃だね。いなくなってからはどうなのかな？
Y：先日聴いた「オクトパス」なんだけど、これが——割れている（爆笑）。
C：まあ、セルフ・プロデュースになってから苦労したのかもしれないね。「Three Friends」も、前2作に比較すると、音が時代に逆行してるように悪いし。
Y：でも、今になって聴き直してみると、色々なアイディアが豊富で、音質の多少の悪さなんか気にならないね。
C：まあ、GGは聴く度に発見があるバンドだから。俺にしてもGGの初期作品（1st～4th）の怖さが身にしみて来たのはここ数年だしね。で、ベースの録り方なんだけど。
Y：ベースは途中からリッケンバッカーのような音色になってるけど……。
C：それは僕も気がついたけど、実際はどうもフェンダー系のようなんだよね。
Y：録音自体は最後の「Civilian」を抜かすと、大体アンプから取っている。ただしドラム等へのかぶりが無いので、非常に定位がはっきりしてるね。音色が変わったのは、新しい弦を張ってアムペッグ系のアンプで少しひずませて鳴らすようになったからだと思う。
C：「Civilian」だけはラインで録っている、と。
Y：そうだね。それと「Civilian」からはデジタル・リヴァーヴが導入されているね。
C：それでは最後にGGって、何だったのか、という話なんだけど。
Y：GGって、極端に言うと相対性理論を小学生にもわかるように説明しようとしたバンドだと思うんだよね。
C：複雑な編曲をビートに乗せて聴かせてしまうというような。
Y：サウンド的には、GGは「音楽の発明」をしようとしたバンドのような気がするね。
C：2ndでも「ポピュラー・ミュージックの境界を広げる」というようなことを言ってたね。GGはディスコ・ビートやレゲエのリズムも取り入れてるんだけど、全然黒人臭くならないし、違うものになってしまう。
Y：単に素材として使っているんだよね。
C：素材に対して良い意味で思い入れがない。
Y：GGってサーカスみたいなバンドだったと思うんだよね。すごいことをやってるのに客は裏のすごさに気がつくことはない、みたいな。
C：逆にプレーヤー連中はそこに気がついたんだろうね。それでプレーヤー受けをするように言われた訳だ。

柳田 克：1954年生。スタジオ・アワー・ハウスのオーナー／エンジニア。スタジオはJ・A・シーザー・バンド、A－Musik、ハイディナッシュ等様々なミュージシャンのレコーディングに愛用されている。昔からのジェントル・ジャイアント・ファンである。

Chihiro S.：1960年生。現在アワー・ハウスでゴールデン・アヴァンギャルドのレコーディング中である。柳田氏とはラクリモーザの録音（LP）の時から交友がある。他の近況としては長らく活動停止していたラクリモーザを再始動、今年5月よりリハーサルに入っているというニュースがある。

REVIEW



Gentle Giant

'70

楽器の持ち変え、変則拍子とアフター・ビートの混合攻撃、独得のコーラス・ワークとすでにGGの要素が全てそろっている1st アルバム。後のライヴでは1st からはA②位しか演奏されていないが、他の楽曲もハイ・ヴォルテージである。後のビートに乗せた変則拍子路線のプロト・タイプとなるA①、A③、途中のリコーダー・ソロが美しいB②等は押さえておきたいナンバーだ。又、B①後半やB③のようなアバウトな展開は、後のGGには見られなくなるもので、逆に興味深い。これ以後、GGは聴き流せる複雑なサウンドを作り続けた。
(Chihiro S.)



In A Glass House

'73

WWA レーベル移籍第一弾、通算5枚目のアルバムである。オリジナル・ジャケットはフィルムを使った変形物であった。シャルマン3兄弟の一人、フィルがグループを抜け5人編成になっているが、サウンド自体に大きな変化はない。彼らの場合、デビュウの時点で既に一つのスタイルが出来上がっており、本作以前の4枚のアルバムも高い完成度を誇っているが、ここではサウンドがよりニートなものになっており無駄がない。極めてテクニカルな演奏を展開しているにもかかわらず、良質のポップスのようにメロディが親しみ易いのは正に実力のなせる技と言える。（賀川）



The Power & The Glory

'74

前作よりはリリシズムをおさえたアルバム。その分リズム本位に楽曲が制作されている。中華風のリズム／音形を素材に使ったA④、ディスコ・ビートを導入したと思われるB③、どちらも原形をとどめていない点が素晴らしい。GG が恐ろしいのは、素材はどこにでもあるようなものを使いながらも加工の段階で極端に変容されてしまう、という点だ。前作及び本作、続く「Free Hand」、「Interview」といったアルバムはプログレ・ファンにとっては、どれをとっても納得のできる作品であると思う。その中でもトータルなノリの良さでは本作が一番である。 (Chihiro S.)



Free Hand

'75

WWA が活動を停止したため、クリサリスに再移籍して発表した7作目。ハイ・レヴェルの出来ながら最高の評価を得ることのできなかった前作へのうっ憤を一掃するかのような快心作である。ロック・シーンにおいては数少ないコーラス・グループとしての、また、変拍子、クロス・リズムを巧みに使いこなしたインスト・グループとしての完成した姿を見ることができる。デビュウ以来の方法論で作られた作品としては頂点を極めたものであり、彼らのスタジオ盤を代表するものと言える。そして、この作品を最後に彼らはその性格を徐々に変えていくことになる。（賀川）



Playing The Fool

'76

GENTLE GIANT の全盛期のライヴを収録した2枚組。本作以前に8枚のスタジオ盤を発表しているが、セカンドを除く全ての作品から曲が選ばれている。スタジオ盤の持つ繊細さ、緻密さを失うことなく、ライヴならではのダイナミズム、熱気を感じさせる名作である。変拍子、クロス・リズムを多用し、数多くの楽器を使い分け、抜群のアンサンブルでのりの良い演奏が展開されている。彼らの持ち味が十二分に発揮された集大成的作品であり、プログレッシヴ・ロックの一つの究極の姿を示している。（賀川）



The Missing Piece

'77

ジャイアント・サイズ・エラーとまで言われた問題作。実際には最後期の傑作と言うべきである。前作で、リズム物とコーラス物の限界に挑戦したGG が『ポピュラー・ミュージックは何処までポピュラー・ミュージックか？』というテーマに取り組んだ作品であるとするのが正しい解釈。ここまでトリッキーなものが、それでもまだポップであるという状況は、すでに芸である。今だに本作の評価が世間的に低いのは、はっきり言って間違いである。GGを従来のプログレッシヴ・ロックの狭い枠内で理解しようとするところに全ての誤りがある。認識を改めるように。
(Chihiro S.)

CURVED AIR

沢田 守

CURVED AIR の概要については、種々の解説や国内盤ライナー等の資料が充実しており、反復を避ける為にここでは触れません。又、彼らの人脈は複雑に入り組んでおり、重要なものではありますが、ぼくには難しい部分も多いので、他の人に譲ります。マーキー26号に掲載された、やすいひろみ氏の記事や、「Live」の国内盤に附された、たかみひろし氏の人脈図等を御参照願います。

1．虹は何処に……

最終的な結論を言えば、CURVED AIR とは出来損いのプログレッシヴ・ロック・バンドであったと思う。ヴァイオリンと女性ヴォーカルをフィーチュアし、クラシックの知識とロックの冒険心を兼ね備えてスタートした彼らは、スタッフにも恵まれ、デビュウと同時に大成功を収める。以後、彼らは様々な音楽ファクターを吸収して成長していったが、最終的に辿り着いた所は何処だったのだろうか？


●ダリル・ウェイ


●ソーニャ・クリスティーナ

言うまでもなく初期 CURVED AIR で主導権を握っていたのは、ダリルとフランシスの２人であった。個々に音楽的実験精神を持っていた彼らは、早速グループをその実験室として利用し始める。前者はエレクトリック・ヴァイオリンとクラシカル・ロックの探求、後者は、シンセサイザーが具体例である。「Air Conditioning」ではダリルのヴァイオリンが全編に渡ってフィーチュアされ、曲は常にクラシカルな趣を含んで進行する。彼が作曲した『Vivaldi（A⑤）』や『It Happened Today（A①）』の少々強引なヴァイオリン・ソロは、その典型的代表例だが、更には『Screw（A③）』での微妙に調性感を揺らした和声進行や、間奏部分のヴァイオリンに絡んでくるメロトロンやギターの動きにも、クラシック畑からの発想を垣間見る事ができる。彼らがクラシカルな趣を有していたのは、ヴァイオリニストの存在よりも、むしろこうした作・編曲面での工夫による所が大きい。それはちょっとした“エリート魂”の様なものだったのかもしれない。曲の細部にわたるアレンジや、メロディに対する“装飾法”は見事に徹底されている。その観点からすれば『Rob One（B③）』などは完全な手抜き品なのである。

ただし、ソーニャのヴォーカルに関しては若干話が異なる。おそらくは彼女の声の弱さをカヴァーする為の処置だろうが、他の楽器がヴォーカルとユニゾンを取る場合が目立つ。加えて、ヴォーカル・ラインの装飾は“一対一対位法”が圧倒的に多く、“絡んでくる”のではなく、似て非なる、もう一本のラインを形成するケースが多い。所謂“ハモリ”というヤツがやたらと多いのだ。再び『Screw』を例にとる。ソーニャのヴォーカル・ラインに対し、ダリルのヴォーカルによるハモリ、ヴァイオリンのユニゾン、ヴァイオリンによるハモリ、途中から加わる形でメロトロンのハモリ、ギターの……（歪んでいてよくわからんが）。こうした処置は作曲上の定石なのかもしれないが、逆にソーニャ自身の存在インパクトを弱めている部分もある。しかも、この様に隙間なく充填された上声部に対し、根底を支えるベースとドラムは貧弱であり、不安定さを感じさせる。２人の“エリート魂”は、キメの細かいクラシカル・ロックを生み出してはいるが、半面、作品のつかみ所を失わせてもいるのだ。

彼らの初期の作品にはこの手の作業があちこちに見られるが、「Air Conditioning」においてそれは最も顕著であり、彼らの意気込みと、そして、緊張をも感じとる事ができる。又、そうした意識は、結果がどうであれ、各人のアイディアを有機的に結合させる方向へ向かわせていると思う。それがこの作品の長所だ。

「Second Album」では、前作と異なりインストゥルメンタル作品が収録されていない。ヴォーカル・カヴァーの為の小細工も減少しているが、それはむしろ、ソーニャを前面に出す為の試みだったと思う。一見、彼女を中心にグループがまとまり始めたかに見える。しかし一方では、ダリルはA面、フランシスはB面と、完全に作曲作業を割り振り、個々の実験室に閉じ籠もってしまう。

ダリルの曲は『Jumbo（A③）』の様に、とても印象的なメロディとクラシカルな進行を有してはいるが、断片的である。言わば彼はメロディ・メイカー的な存在であった。一方フランシスは大曲指向であり、楽曲の展開という点にも興味を持っていた様だ。種々のキーボードを駆使した上に、ストリングスやブラス・セクションを加えてアレンジされた、『Piece Of Mind（B③）』がその好例で、構築性にはやや欠けるが様々な聴き所を持った曲だと思う。しかし、彼の興味の中心はシンセサイザーであり、未知の音であり、極言すれば、音そのものだったのだ。それが作曲法にも反映し、様々な音色の組み合せを用いて曲を展開させる為に、演奏楽器のパート数を増加させたのだと思う。又、大金をはたいて購入した VCS 3 シンセサイザーを、あちらこちらで使用している。それを前に出す形でダリルは一歩引いた位置にいる様だ。事実、彼のヴァイオリン・パートは減少しており、曲によってはピアノやバック・ヴォーカルのみでしか参加していない。これを彼らの試行錯誤と見るのは無難な線だが、説得力には欠ける。彼はソーニャを前に出すために、そして自分の興味の対象にのみ目を向けていたフランシスの存在ゆえに、ヴァイオリンを弾けなかったとぼくは見る。

「Second Album」は、ソーニャ、ダリル、フランシスの３人を主軸にして、各メンバーが自己を主張し始めた状態ではある。だが、同時に答も出ていた。既にこの段階で、フランシスは他のメンバーとの共同作業に疑問を持ち始めていたと思う。彼はダリルの生み出す美しいメロディなどには興味がなく、もっぱらシンセサイザーのツマミの位置ばかりを気にしていたのだ。そして自分の実験室に閂（かんぬき）をかけ、その止め金の強さ故にバンド内での発言力を保っていたのである。

こうした傾向は次作「Phantasmagoria」で更に表面化する。前作同様B面を好き勝手に使いまくったフランシスには、ダリルの才能を積極的に活かそうとする意志は見られず、彼に対してセオリー通りのヴァイオリン・パートを与えているのみである。それは安定したアレンジ法ではあるものの、「Air Conditioning」以降いささかパターン化したものでしかなく、既に有機体としてのバンドが生み出す発展性は失われている。

確かにこの作品の質は高い。ソーニャのルーツを反映したフォーク・タッチの小品『Melinda（A②）』、ジャズ風のリズムを持つ『Not Quite the Same（A③）』や『Over And Above（B③）』、シリアス・ミュージックの領域へフランシスが先走った『Whose Shoulder〜（B②）』等々。音楽スタイルは多岐に渡っているが、そのどれもが過去の作品を上回る出来だ。あいかわらず全体にクラシカルな味つけがなされていて、所々登場するブラス・セクションや、フルート、ヴァイヴ等の使用により、面白味も増している。各メンバーもレヴェルの高い演奏をしており、アンサンブルも良い。

しかし、彼らの努力はもっぱら既成の音楽スタイルの中に留まっており、新しい音楽形態の創造を目指した融合の試みはあまり見られない。逆に、



各々のスタイルの中に何とか自分達の味を出そうとしていた様に思える。この２つの差を設定するのは難しい。前者は“プログレッシヴ”であり、後者はそうではない、とするのは少々安易な話だ。

ただ一つ言える事は、音楽的な質の高さとは裏腹に、この作品には、各人から生まれたアイディアや思考法を一つにまとめて、一段高いレヴェルに持っていこうとする意識が見えない、という事である。そうした意識を“プログレッシヴ”と呼ぶかどうかは知らないが、良いバンドには必ずこうした意識が存在しているとぼくは思う。

「Phantasmagoria」は惰性で作れる様な作品ではないが、この観点から見れば「Air Conditioning」制作時に比べ、バンドが死んできていた事は明白だ。エリート魂も、知識も、そして冒険心も、たいした意味は無い。重要なのは、バンドを有機体として促え、それに生命を与えられるかどうかだ。

そして彼らは崩壊した。屈折した大気に光があたる事はなかったのである。

2. 異様に短い以後の解説

ダリルとフランシスに焦点を絞るならば、以後の重要な作品はダリルのソロ、「Concerto For Electric Violin」である。

フランシスはキーボードとアレンジで全面的に参加しているが、その協力の仕方は只事ではなく、既に共作と見なしてもよかろう。バックを努めるオーケストラは、生の弦楽器とキーボードをミックスしたものだが、ほとんど異和感は感じられず、改めてフランシスの才能に驚かされる。それはすべてダリルのソロ・ヴァイオリンと彼の音楽の為に行使され、２人の見事な統一性が感じられる。

一つの作品に生命を与える過程で、互いに協力し、刺激し合い、成長する事。ぼくはこれを“有機体”と呼ぶ。

それがCURVED AIRに欠けていた全てだ。

3. ソーニャちゃんのスケルツォ

プログレ・ファンの多くが女性ヴォーカルを指向する中、ソーニャの影は意外と薄い。数々の資料を集め持っているファンは別として、彼女の顔をハッキリと頭に描ける人は少ないのではないだろうか？　ましてや、CURVED AIRのレコード一枚すら所有していないぼくにとっては、絶望的だったのだけど、マーキーで集めた資料によりそれは克服できた。よって、本来ならここで顔とスタイルについて解説しなければならないのだろうが、コノミではなかったので中止。ただ、ちょっとキツイ感じの目はなかなかイカしてると思う。

実際、彼女は女だてらに最後までグループを引っ張ってきた訳で、性格もかなり強気だったのだろう。グループ解散後も音楽活動を続けていたし、TUNISなるバンドとツアーにも出たらしい。'84年には、何とダリルと組んだCURVED AIR名義のシングルをも発表している。Pearl Keyなるレーベルからリリースされたこのシングルは、残念ながら少数限定プレスで、ぼくも未聴なのだが……。おそらく彼女は今でも、いや今だからこそ、再結成を狙っているに違いない。

あーあ、そんな事だからナイーヴなプログレ少年に敬遠されるんだ。しかし、まあ、強気な女というのもナカナカ……。

などど勝手に想像しているが、そん



なイメージとは裏腹に、ロック・ヴォーカリストとしての彼女の声は、非常に弱々しいものだった。それは年月と共に解消されていくのだが、CURVED AIR においては、声の弱さをカヴァーする為の様々な工夫がなされている。それは前述の様な作曲面にとどまらず、録音作業にまで及んでいて、例えば『It Happened Today』、『Back Street Luv（2nd　A②)』等のヴォーカルはダブル・トラック録音、『Young Mother（2nd A①)』はダブリング、『Jumbo』はエコーを左に抜けさせて広がりを持たせる、という具合である。実際には、これらの技術が様々に組み合わされているが、これまた、厚みを増してはいるものの、存在感を弱めている部分もある。

うっとうしいので具体例を示すのはやめるが、こうした録音上のトリックはヴァイオリンやギター、キーボード、果てはドラムに至るまで、初期作品のあらゆる所に現れる。「Air Conditioning」を丹念に聴いてみると良い。音質ばかりが先行する画一化された現代の録音法とは異なり、アイディアや遊びの詰まった、何と創造的な音空間である事か……。

ところで『Proposition（1st B②)』の中間部においては、テンポに同期させたエコーが用いられているが、ギターはそれを意識した演奏がなされており、フランシスがシンセサイザーのみならず、種々の録音機器やエフェクターにも興味を持っていた事がわかる。実は、ここでのエコー音の用い方は、テリー・ライリーの『A Rainbow In Curved Air』でのそれに酷似しており、彼のエコー・マシンやエフェクトに対する興味はここから始まり、しいてはシンセサイザーに対する興味も生まれていったと思われる。

初期3作のエンジニアはコリン・カードウェルだが、実際のミキシングやエコー操作は、グループとの共同作業だったのだろう。フランシスは“文句マン”と化したに違いない。

「Air Cut」以降のエンジニアは一作ごとに交代しているが、ソーニャの声に対しては最後まで小細工をする傾向が強く、本人がそれを望んだのか、それとも彼女の声を誰も信用していなかったのか、興味のある所だ。

そんな中で「Live」は唯一、彼女の声をストレートに出した作品で、逆に新鮮な魅力を感じる。当然ここでも、後のスタジオでのリミックス操作はなされているが、他の作品に比べ地のままで迫ってくるソーニャは、ワイルドな魅力をたたえた“ロッカー”である。オテンバ娘に引っ叩かれたい人はコレだね。

4. 無理矢理に付け足された最終章

で、『Air Cut』とはいったい何だったのか？　と言われると非常に困る。できれば言わないでほしかったが、仕方あるまい……。

CURVED AIR に限った事ではないが、多くのロック・バンドは2つの音楽的側面を持っている。一つはフランシスに代表されるスタイルで、音を加工し、構築してゆく“スタジオ・ワーク”。もう一つは“Live”。文字通りライヴ。そして“演奏”する事。それを楽しむ事。彼らの中では、若い頃からフォーク・クラブを廻って歌っていたというソーニャが、最もこの感覚を備えていた様だ。

そしてソーニャは CURVED AIR の鍵だ。

彼女の書く詩は淡々とした語り口を持つ。歌い方もしかり。その激しい内容とは裏腹に醒めた感覚で綴られた、『Marie Antoinette（3rd A①)』を聴いてみてほしい。この様な紳士的抑制感覚は、フォーク、トラッド系のルーツを持つ彼女にして生まれたものだと思う。この感覚が緻密なスタジオ・ワークと結び付いた結果が、初期の3作である。

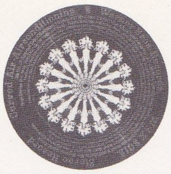
「Air Cut」において、部分的にとはいえ、その抑制感覚を取り外せたのは、ハード・ロック系の人間ロバート・カービィであった、という線が濃い。彼の持ち込んだ“Live”“演奏”の息遣いが「Air Cut」の原型であり、それがソーニャの内の“Live”を呼び覚まし、更には新人でヤル気マンマンだったエディを加えて、勢いフッ切れた作品が生まれたのではないだろうか？　事実、この作品には手の込んだスタジオ・ワークが見あたらない。最もプログレ色の強い『Metamorphosis（A③)』でさえ、過剰な細工はされておらず、以前の彼らに比べると非常にストレートだ。こうした点を考えると、「Air Cut」を後期の作品と同列と見なしてもおかしくはない。

ソーニャは自分を殺す事なく、うまくカービィを取り込んだと思う。彼女は「Live」の人ではあったが、もともとフォーク・トラッドの枠に収まっている人ではなかった。この彼女の柔軟性が「Air Cut」を生み、グループを存続させ、そして彼女自身をも成長させていったのだ。

では、CURVED AIR とはソーニャだったのか？　と言われると、これまた非常に困る。

確かに、彼女がいなかったら、このバンドはまったく別のものになっていただろう。そして、そこにある種の可能性を見出す事が出来ない訳でもない。

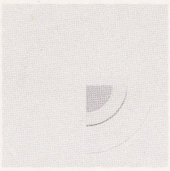
しかし、すべては20年も前の事。プログレッシヴ・ロックの最盛期を駆け抜けていった人達の事。ぼくは彼らが好きだし、とやかくは言うまい。



Air Conditioning

'70

彼らの作品中、ダリルのヴァイオリンが最もフィーチュアされており、"弦の入ったロック"が聴きたい人への推薦盤。若い情熱が素直に伝わってくるが、半面「作られた」イメージも含んでいる（本文参照）。全体の統一感にはやや乏しいものの、メロディそのものはどれも印象的でみずみずしく、好感が持てる。『Screw（A③）』や『Rob One（B③）』で泣かされる人もいるだろう。なお、再発盤はB②とB③が入れ換わっている。又、予約のみで2万枚を売り、その内1万枚がピクチャー・ディスクでのリリースだったと言われている。客が皆レコード・マニアであったなら、暴動が起こっただろう。（沢田）



Second Album

'71

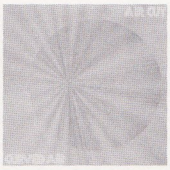
前作の録音終了直後に脱退したロブ・マーティンにかわり、新ベーシスト、イアン・エアを迎えた2作目。以後彼らはアルバム発表ごとにメンバー・チェンジを繰り返す事になる。ソーニャの存在が目立ってきた。ドラムレスの美しい作品『Jumbo（A③）』や、スタジオ・セッション風のラフな味を出した『Puppets（A⑤）』、12分を越える大作『Piece Of Mind（B③）』等、独自なメリハリも持っている。『Young Mother（A①）』でのフランシスのシンセ・プレイは、後のCAMELを先取りする様な感があり、非常にセンスが良い。6面開きのジャケットが形造る図形は、虹を意識したものだと思う。（沢田）



Phantasmagoria

'72

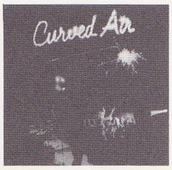
この作品は前作まで以上に様々な音楽要素を感じさせ、スタイルのみ追っていくとゴッタ煮的印象が強い。しかし、全体の雰囲気は、淡々としていて、どこか醒めている。加えて、何処とはなしに夢想的なイメージが香ってきて、全体を被っている。それ故、この作品を最高作と見る人は多い。それはソーニャの持っていたトラッド・フォーク系のジェントル感覚に端を発していたと思う。（本文参照）。本作から参加したベースのマイク・ウェッジウッドは、非常に味のあるラインを弾いており、ドラムのフローリアンもそれに触発されている様だ。「とりあえず、どれか一枚……」という人にお推めしたい。（沢田）



Air Cut

'73

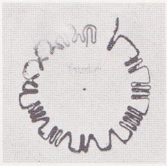
ソーニャ以外のオリジナル・メンバーは本作以前に全員脱退。一新されたメンバーにより制作された4作目。今までダリルとフランシスに独占されてきた作曲の場が開放され、全員が曲創りに参加。初めて専属のギター奏者を加えた事もあり、よりロック色が強くなっている。『Metamorphosis（A③）』は、今までの彼らには見られなかった起伏に富んだ作品である。一つの個性的なメロディを中心に据えて、そのヴァリエーションにより全体を構築させていったエディの作曲能力は、新たな地平を切り開いたと言っていい。前作までとは別バンドとして聴くも良し、最高作と見るも良し、一聴の価値はある。（沢田）



Live

'75

再編成ツアーの際のライヴ盤。これはギンギンである。すべて初期3作からの選曲だが、アドリブを交じえ、原曲以上の迫力ある演奏が楽しめる。メンバーは皆、ブランクを感じさせない熱気のある演奏をしており、これを聴くと、彼らはライヴ・バンドだったのではないか？と思ってしまう程である。逆に、これがCURVED AIRだと思い込むと、フォローが効かない部分もあるので要注意。終始シャウトし続けるソーニャには、パティ・スミスもマッ青であろう。この手の女性シャウトには生理的な嫌悪感を覚える人もいるだろうが、逆にゾクゾクスる人もいるハズだ。蛇足だが、女はオテンバに限る。（沢田）



Midnight Wire

'75

当初は一時的なものとして計画された再編成であったが、なぜかバンドは継続し、ダリルも結局残る事になる。一度はWOLFで自分の音楽を見つけていた彼が、なぜこの時期のCURVED AIRに参加したかは、正直なところ理解に苦しむ。本作はタイトル作（B③）に代表される様な、三拍子あるいは三連系の横揺れ感覚を含んだ、アメリカ風のブルーズ・ポップ作品。彼らがここまで変化した理由は今一つ不明な点もあるが、イキイキとしたソーニャのヴォーカルは象徴的である。ベースはCARAVANのジョン・G・ペリー、ドラムはステュワート・コープランド（デビュウ）である。（沢田）

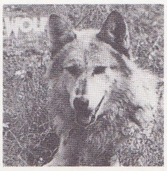


Airbone

'76

ソーニャの声はますますツヤを増し、ゆったりしたバラード等も自信を持って歌いこなしている。一方ダリルは完全に惰性である。言い方を換えれば、職人に徹しているという事だ。前作がまったくのポップスであったのに対し、初期の様な大曲もあるが、以前のみずみずしさは失われており、アンバランスである。むしろ、ソーニャを中心としたヴォーカリスト・アルバムとして聴くと、非常に良い出来だと納得させられる。アルバムの約半分はメンバー自身でプロデュースされているが、これは「Phantasmagoria」以来の事。なお、ベースはCOLLOSEUM、GREENSLADE等のトニー・リーヴスである。（沢田）



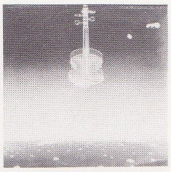


WOLF

Canis Lupas

'73

CURVED AIRを脱退したダリル・ウェイが結成したWOLFのファースト・アルバム。彼のスリリングかつ華麗なヴァイオリン・プレイと、ジョン・エサリッジのテクニカルなギター・ワークを中心としたそのサウンドは高い完成度を誇る。また、プロデュースにはイアン・マクドナルドが迎えられており、自らピアノで参加したB①、彼に捧げられた、D．ウェイの泣きのヴァイオリン・プレイがたっぷりとフィーチュアされたB②は、名曲として名高い。I・マクドナルドのプロデューサーとしての才能が発揮された、そしてブリティッシュの名作として名高いアルバム。（神山）



DARRYL WAY

Concerto For Electric Violin

'78

ダリルの求めていた音楽の、もう一つの具現化がこれである。完全にソナタ形式を踏襲した作曲能力は、高く評価して良いと思う。半面、ここでも彼（とフランシス）は既成の音楽形式を打破してはいない。A面はヴォーン＝ウィリアムスやウィリアム・ウォルトンといった近代英国作曲家を連想させる少々淡白な展開だが、第2楽章は『悲しみのマクドナルド』を発展させた内容で、強くアピールする。最終楽章ではイアン・モズレイのドラムをも加え、ロック色を前面に出している。フランシスは全編に参加しているが、Orchestra Synthesisedとクレジットされていて、ナルホド……と感心させられる。（沢田）



SONJA KRISTINA

same

'80

CURVED AIR解散から約5年後にリリースされた唯一のソロ・アルバム。当時、彼女は既に30歳を越えており、ヴォーカリストとしての成長が感じられる。本作は後期CURVED AIRの路線を更に押し進めた"ど・ポップ"作品。ソーニャの声が充分に活かされている出来の良い作品である。CURVED AIR関係では、唯一ダリルが一曲参加しているのみで……。ウーン、困った。当初ここに掲載される予定だった、ソーニャおばさんのエッセイの事を思うと、あまり書く事がない。今でも彼女はどこかのクラブで歌っている。要はこの姿勢なのだ。やっぱり"本物"なんだなあ、この人は。（沢田）

STRAWBS

田辺弘幸



アンティパスト

ウバタマというサボテンがある。中米ではペヨーテと呼ばれており、これにはメスカリンという成分が含まれていて、このサボテンを5～6個乾燥させて食すると、いわゆるLの効果が5～6時間持続する。普通の人がやったら確実に心臓にくる、それにとても苦いのでお勧めできない。似たような効果を持つものにハワイ産の朝顔、モーニング・グローリーの種や、シロシベ・メキシカーナというメキシコ原産のきのこにもシロシビンという成分が含まれており、これも最初にくる吐き気さえ我慢すれば向う側へ行ける。ただし日本で売られているモーニング・グローリーは水銀処理されているので危険、きのこでためしたいのならバリ島へでも行ってオムレツをきめるべし。さてメスカリンといえば、あのオルダス・ハックスリーがいまわの際に妻に頼んで注射してもらい、至福の表情で死を迎えたという。彼はメスカリンもシロシビンも愛用しており、さながら現代版ド・クインシーというところか。

時代状況

'60年代中盤より愛と平和の運動が盛り上がりをみせ、その象徴として花がもちいられてきた。もちろん花はアレゴリーでオピュームでありカンナビスである。そこには愛と歌で世界は変わるというきわめて甘い考えが流布し、音楽は目的でなく単なる手段として用いられていた。愛や歌で世界が変わるなどと薬物中毒者の嘆きにも似ている。当時アメリカはヴェトナム戦争という現実を抱えており、徴兵制や戦争の持つ悲惨さが、若者やその家族を痛めつけていた。世界的にはデタント時代だが、その裏ではいつボタンひとつで全ての歴史が灰になるかわからない状況にあった。そんな現実からの逃避以外何ものでもないこの明るい未来は、いっこうに変わらぬ現実や体制からの攻撃などで、しだいに挫折していく。意識革命を訴えプロパガンダとなったティモシー・リアリーは、その教祖的言動で大学を追われ（ハーバードからスイスへ、そして今はメキシコにいる）、地上最強の魔法の薬を偶然にも発見したアルベルト・ホフマンは子宮収縮剤の研究に戻り（麦角は元々壊疽を起こす血管収縮作用がある）、極上のシンセミアは現実を何も変えてくれないという事が、人々の中に空虚な挫折感と共に浸透していった。ディランやレノンは夢を見ていた。さて時は1972年、この年の前後1～2年はロック界では最も傑作を輩出した時代で、年代もここまで下ってくると、愛や歌で現実を変えようなどという幻想は既になく、愛や歌で現実が変わらないのなら、それが幻想だったのなら、いっそこの現実をこの世界をいったん止めてしまおう、終わりにしてしまおう、それはまるで中途半端なものにけじめをつけるみたいな一種の終末論的な考えが蔓延していた。当時本来的な世界でないこの状況を、つまらない現実に関わりあわないで（戦争やいがみあい、果ては現実のささいな事まで）、本来的なより存在そのものに立脚した世界をめざし、外的には世界を現実を止め、内的にはそれらの変革は自己内部から起こる。この事を端的に表してくれたのがイエスの「Close To The Edge」だった。あのアルバムでは、世界には『存在』とその『意味』と『言葉』が、時間性の中で自らを展開していく過程としてあり（時間性の中に浮遊しているとでもいうか。空間は存在の範疇の中にア・プリオリに内在している）、それを認識できるのは現存在たる人間のみで、それは人間の自己内部から現れでてくる、という事が言われ、当時の状況をよく反映していた。現実が何も変わらないのなら、その現実に在りながら人間も存在一般の一部である事を自覚し、そこから目覚めるべきだ。ハイデガー流に言えば、『故郷喪失』とでもいうような状態が、そして挫折の後の一種の開き直りにも似た状況があった（あれだけ難解なアルバムが受け入れられる事自体、当時の状況をよく表している）。ジョン・レノンが「イマジン」と歌う時、タルが演劇的なもので自己表現をする時、マハヴィシュヌが「火の鳥」の宗教性で、みんな本来的なものを探ろうとしていた。みんなみんな意味が在った。さて……

デイヴ・カズンズの場合－幻視者の旅

コリン・ウィルソンの「賢者の石」の中で、主人公が大脳を操作し、居ながらにして未来や過去を観れるというシーンがあるが、たどり着いた先はラヴクラフトの「ネクロノミコン」的邪悪な世界だった。彼はそれを『ヴィジョン』と呼んでいたが、イギリスには元来そんな作りものではない、英詩の世界に代表される本物のヴィジョン、本物の世界（幻視者の夢）がある。それに何もグルジェフやクロウリーを持ち出すまでもなく、ウィリアムのオッカムやボナヴェントゥーラ以来の神秘主義的土壌が、ピューリタン的風土と相俟って独特の世界を築いている。靴屋のベーメが、ある日突然木の下で恍惚となったその白日夢にも似た光景が、文学や音楽の世界に投影されている。ハックスリーの「知覚の扉」で幻視者の鏡として幾度となく語られているウィリアム・ブレイクの絵が「Grave New World」のジャケットに使われているのも、現実が変わらないのなら、現実を止めてその後に一体何が来るのか？　という問いに対し、そこには何もない、何も起こらない、とすれば幻視者として、幻視者としてのみのヴィジョンの内に真の現実があるのだというデイヴ・カズンズな

りの解答であり、それはプロテストとかメッセージとかを超えて、ある時は贖罪の為に各地を巡礼する者であり、ある時は風刺劇のアクターであり、そしてある時にはユイスマンスの描くジル・ド・レエであるのだ。彼のアイロニカルな歌はそのヴィジョンからの現実へのあてこすりであり、現実との対比なのだ。内在するヴィジョンの放出の為には、バンド・メンバーの変遷も手段を選ばぬ彼の姿勢があった。ストローブスの歴史をみると、デイヴ・カズンズ自身の流れと平行してバンド・メンバーの流れがあり、それが彼の内面と相乗作用を起こしている。あまり共通点を見いだせない各々のメンバーの前歴から、それをストローブスというバンドにまとめあげるにはオーガナイザーとしての力量が問われた。事実いろいろなフィールドのミュージシャンが集まる事によって、初めは説明的でまだ言葉が先行していた歌も、デイヴ・ランバートの加入あたりから実にすっきりと整理され、言葉とメロディとリズムが一体となる。演奏面も歌詞もうまくコントロールしていった。しかしそれがロック化したといわれようが、ポップな作品でヒットが出ようが、それは内面の必然性によって生まれてきたものなのだ。プロコルズが来日した時、ゲイリー・ブレッカーはステージから観客に向かって「テメーらにオレのキングズ・イングリッシュが解るか？」と叫んだ。それは言葉がどうの人種がどうのといった問題でなく、ただヒット曲を聴きに来た連中の、ひいては自分の音楽に対する無理解への叫びであり警告であった（普通なら「来てくれてありがとう」だが)。デイヴ・カズンズもまた然り。ステージではあまり無駄な事はしゃべらずに、時にはていねいに時にはアグレッシヴに、オペイションをかかえて歌うその存在感たるや、まるで各々のメンバーが無言のうちに統率されているかのようであった。

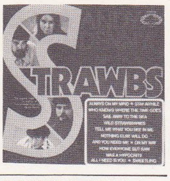


いちご達

昔イギリスは音楽を消費する国といわれ、大陸から音楽家が訪れてはこの国で稼いでいった。しかし需要もあったわけで、音楽に対する関心は並々ならぬものがあった。人が集まれば歌を歌い、それが後にマドリガルの伝統になり、楽器を演奏すればブロークン・コンソートとなった。時は現代、1960年代に入るとあの偉大なかぶと虫やまわる石たちによって、イギリスは音楽を消費する国から輸出する国へと変貌する。一方で多くの失業者を抱えるこの国は、音楽で一発当ててやろうとする輩や、音楽に現状の不満をぶつけようとする連中が楽器を始める。特にアカデミックな面では、アルフレッド・デラーがカウンター・テノールで歌い、夭折したデヴィッド・マンローが古楽器によって中世・ルネッサンスを奏で、今やイギリスは一躍音楽で脚光をあびる事になる（マンローの影響はロック界にも及んでおり、G・Gのあのルネッサンス・フレイヴァーあふれる曲は彼なしには考えられない。事実ロイヤル・アカデミーでは、ケリー・ミネアは彼とほとんど同世代であり、グリフォンのリチャード・ハーベヴェやウェイクマンは後輩にあたる)。当時のイギリスは今の日本（カラオケ人も含め）のように、皆歌い手であり皆ミュージシャンみたいな状況だった。当然楽器はうまくなる。さてデイヴ・カズンズは、どちらかというと最初社会的なものを歌うシンガーだったが、政治的にアジるとか民衆を扇動するような過激さはなく、またドノヴァンのような平和で牧歌的なポップさがある訳でもなかった。ただいい歌を作り歌っていき、それがメンバーの交替により音楽性が変化し高まっていった。単なるスリー・コード的演奏から、壮大なレクイエムを歌うまでに至る。いちご達の中で最も名が知れ渡ったのは、ご存知のようにリック・ウェイクマンだが、彼はピアノの特性を活かしたアルペジオ奏法でスタティックなフレージングを得意とする。クレジットされてはいないがキャット・スティーヴンスの「雨にぬれた朝」のイントロなど当時の彼のベスト・テイクといえよう。しかしストローブス在籍時から現在まで、そのスタイルに根本的な変化はなく十年一日似たようなフレーズを弾いている。確かにテクニックは一流だが音楽性は二流といえ、イエスでも結局装飾的意味しか持てなかった。その点ジョン・ホウクンはけっして派手ではないが古典を自らに消化して曲にあうみごとなバッキングをする。所詮当時流行だったジャズっぽいフレーズが少しできますとか、クラシックをやりましたとかいった、甘っちょろいものでなく、クラシックっぽいのとクラシックそのものはぜんぜん違うように、いかにそれを自らに消化した演奏をするかという点では、オリジナル・ルネッサンスをへて、ストローブス脱退後はナウから古巣のイリュージョンといったバンドを渡り歩いた、苦労人のこの人にお株が上がる。ブルー・ウィーヴァー関しては、ストローブス脱退後ビージーズで「サタデー・ナイト・フィーヴァー」する事になるが、かえすがえすもいろいろな人が出たり入ったりする。ストローブスを変えた張本人デイヴ・ランバートは、当時イギリス一の脳天気男レイ・ドゥーセット率いるマンゴ・ジェリーのポール・キングが分裂させて作った、これまた陽気なシャッフル・ジャグ・バンドのキング・アール・ブギ・バンド（DAWN DNLS 3040：King Earl Boogie Band／Trouble At Mill、同じくD-NLS 3035：Paul King／Been In The Pen Too Long にも参加）にいた人。前任のトニー・フーパーが「Grave New World」でエフェクトの使い方もまずく、フレージングに大きな問題を残した点（フォーク畑の人にロック・ギターを弾かせるのは無理。彼の脱退理由）に較べると、やたらにコード・チェンジが速くノリのいい人だ。カズンズの歌えないようなアップ・テンポの曲では、その鼻にかかった声を披露してロックしていた。変わったところでは、ドラムスのロッド・クームスはジューシィ・ルーシーからきた人。このバンドはアメリカ人のスティール・ギタリスト、グレン・キャンベルが売り物のブルーズ・ロック・バンドで、後にホワイトスネイクに入るミッキー・ムーディやテンペストのポール・ウィリアムスがいた。彼のドラミングは三連符を多用した小気味良いもので、ライヴではシンセやフェイザーをかけ、イコライズィングしたドラム・ソロを聴かせてくれた。クームスもランバートも最後までカズンズにつきあった。「Ghosts」を発売後だんだんと憑きものが落ちたようになり、もはや時代を見抜く力もなく、'78年にダブル・キーボードが何の意味も持たない「Dead Line」を出して解散する。近年トニー・フーパーとバンドを再結成しアルバムを出すが、もう一花咲かせましょうか的内容だという。今やカズンズもただのフォーク・シンガーに戻ったというところか…。

終わりに

ニーズの多用化が叫ばれて久しい。もはやプログレを暗い・重い・古いときめつける事自体が古い。それを心地よいと思い、それを人生の糧にしている人が要るのだから。プログレ食わず嫌いのリスナーや大衆誌の評論家諸氏に、ストローブスを聴けといいたい。



SANDY DENNY & STRAWBS

All Our Own Work

'73

1968年8月にコペンハーゲンで録音されたSTRAWBSのデビュウ作。このアルバムには、FAIRPORT CONVENTIONやソロ活動で有名な女性シンガー・ソングライター、サンディ・デニーが全面的にフィーチュアされている。S・デニーが正式メンバーとして活動したのか、それともセッション参加だけだったのか、謎の残る作品である。アルバムの内容は、ブルーグラスをベースに、ビートルズ的なメロディ・ラインを、ジョーン・バエズ風にS・デニーが歌うものである。後にみられるようなコンセプト・アルバム指向はまだなく、米国的な明るさを感じさせる小作品集となっている。（佐藤）



Strawbs

'69

デイヴ、トニー、ロンのメンバーにニッキー・ホプキンスやジョン・ポール・ジョーンズ等のセッション・メンを迎え制作。デイヴはドノヴァンを聴いて、この程度なら自分にも出来ると思い作曲を始めたそうだが、それが分かるポップス感覚でフォーク・タッチの曲を収録。そしてA①⑥B⑤のストリングス・アレンジやA⑤のエレクトリック・ダルシマーの導入等様々な捻りが加えられている。それらはミュージック・ヴァイヴレーションとクレジットされているトニー・ヴィスコンティのアイディアに依るものであろう。プロデュースはガス・ダジオン。（吉野）



Dragonfiy

'70

STRAWBSの3作目。前作よりプロデューサーにガス・ダッジオン、アドヴァイザーにトニー・ヴィスコンティを迎え、新たな歩みを始めたSTRAWBS。ここでは、ゲストとしてリック・ウェイクマン、ポール・ブレットらが参加。チェロやリコーダーの導入によるかげりのある音空間、リーダー、デイヴ・カズンズの美しい歌詞と暖かみのあるヴォーカル、中世伝承音楽への接近など、サウンド・カラーがまとまり始めた好作品に仕上がっている。ハードな展開をみせる曲もあるが、全体的には、なだらかな丘陵地帯をぼんやりとながめているような、おだやかな世界がここにある。（佐藤）



Just A Collection Of Antiques

'70

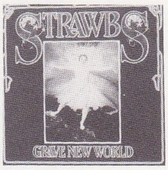
1～2作目迄はアコースティック・サウンドのゲストを迎えてのスタジオ・グループ的活動をしていた。そしてリックとリズム・セクションが正式メンバーとなり、ロック色が強くなったパーマネント・グループとして彼等はツアーを開始する。本作はロンドンのクィーン・エリザベス・ホールでの模様を収めたライヴ作品であり、全曲新曲から構成されている。リックをフィーチュアしておりA②の組曲でハープシコード、A③はピアノ・ソロそしてB③ではオルガン・プレイを堪能できる。B①では初期の特徴であったシタールやダルシマーを用いた東洋志向のサウンドが聴ける。（吉野）



From The Witchwood

'71

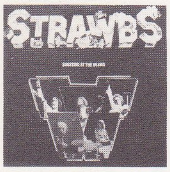
3作目を発表した後、リック・ウェイクマンを正式メンバーに加え、ライヴ・レコーディングによる4作目、そしてこの5作目を制作する頃STRAWBSはひとつのピークを迎える。「人間と神との関係」を主題に、宗教色を強く打ち出したこのアルバムは、フォーク／トラッドを基盤に、クラシック、中近東やジプシーなどの民族音楽などの要素を取り入れ、イタリアのグループとは違った色彩で仕上げられている。プロデューサーのトニー・ヴィスコンティの影響も大きいのだろうが、D・カズンズの素朴な歌声と気品のある演奏が相まって、聴き手に深い感動をあたえてくれる。（佐藤）



Grave New World

'72

本作はA④において顕著である、当時のアイルランド内紛（カソリックとプロテスタントの宗教的対立）の状況からデイヴがインスパイアーされた作品。タイトルも「Brave New World」からの引用。彼の信仰に基づいた見解や終末論が表されており、結果的には彼の宗教観をコンセプト化したアルバムとなっている。そしてその詩の内容から音の方も今迄のフォーク・ロック的な曲調から、新加入のブルー・ウェバーのキーボードをフィーチュアし、宗教的壮厳さと憂愁を帯びたサウンドとなっている。彼等の独自のスタイルも確立した記念碑的作品。（吉野）



Bursting At The Seams

'73

前作「Grave New World」発表後、グループ設立者の一人、トニー・フーパーが脱退、替わってデイヴ・ランバートが加入し、この6作めでは一層ロック色を強めている。本作でのチームもこの1作のみで終わっているが、極端な音楽性の転換はみられない。グループはデイヴ・カズンズの歩みであり、イギリスにおけるアコースティック・ミュージックの先鋭という点で一貫していたからである。親しみ易いスマートなフォーク・ロックに留まらせないカズンズのヴィブラート・ヴォイス、そしてB②に結集された古楽趣味など、多彩でイギリス情緒豊かな繊細さが息づいている。（松本）



Hero & Heroine

'74

前作発表後のツアー中にデイヴと元KING EARL BOOGIE BANDのデイヴ・ランバート以外は脱退。本作は元RENAISSANCEのジョン・ホウクン、SPOOKY TOOTH ～ STEALERS WHEELを経たロッド等を迎え制作。曲調は独自のポップ感覚を持ち、デイヴの声は以前のアクが少なくなりランバートとのハーモニーを聴かせる。曲展開は工夫が凝らされ特にジョンを中心としたインストゥルメンタル部分は充実しており、このグループの円熟を伝える内容。そして彼等の全作品中、シンフォニック色が濃く出た作品でもある。（吉野）



Ghosts

'75

「Hero & Heroine」と同メンバーによる8作め。このメンバーで来日も果たしている。まるでヴィクトリア王朝時代の心霊写真のようなジャケットが、エレクトリック・サウンド上に開花した古楽とイギリスのかげりある情緒を表現するかのようだ。RENAISSANCEより加入したジョン・ホウクン（key）の力量が活かされ、クラシカルな色合い、陰影のつけ方に彫の深さが感じられる。メリハリのきいたサウンドだ。重々しく劇的な曲想の大曲A①、B①などに、フォーク・ロックという概念にしばられることのない彼らの創作性が顕著だ。あまりに過少評価されていると思う。（松本）



Deep Cuts

'76

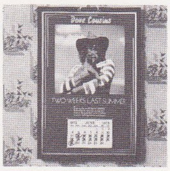
A＆M最後の作品である前作はJ・ホウクン脱退後正式メンバーが決まらないまま制作された。その為各曲メンバーが異なり曲の詰めも甘く、バンドが不安定状態であるのを思わせる内容であった。本作もニ人のキーボードをゲストに迎え、心機一転ポリドール傘下オイスター移籍後の一作目。彼らは、作品発表の毎にフォーク色が薄くなり、ロック的要素を取り入れ洗練されたプログレッシヴ・ポップに変化した。この作品ではウエスト・コースト感覚を取り入れたアメリカ志向となり曲調も明るい。しかし彼等の持ち味は失われておらず、新生面を見せた成功作と言える。（吉野）



Dead Lines

'78

アリスタ移籍後の初作品。前作はかなりコマーシャル志向を窺わせる内容であった。本作は彼等本来の姿であるブリティッシュの伝統を受け継いだメロディアスなプログレッシヴに戻っている。前作から正式メンバーとなったロバートとジョンによるキーボード・オーケストレーションがサウンドに溶け込み効果を上げている。当時のライヴでもその威力を発揮させていたが解散。'78年迄メロトロンを使い続けたメジャー・グループは彼等だけであろう。その後'79年デイヴはSTRAWBSの曲をアコースティック・デュオによって演奏したライヴ作品（限定2000枚）を発表した。（吉野）



DAVE COUSINS

Two Weeks Last Summer

'72

本作はSTRAWBS 5～6作目の間に発表されたデイヴのソロ作品。彼のキャリアから見て最も脂の乗った時期に制作されている。彼はドノヴァンを聴いてプロを目指すようになり、その事を思わせるアコースティック感覚の曲が収録されている。A①の幻想的な曲で始まるこの作品、KEEF HARTLEY BAND脱退直後のM・アンダーソンをパートナーに迎えている。彼のブルージィなギターを中心としたA②、B①③④では、デイヴのグループ活動とは異なる側面の音楽性を見せる。そして彼のシンガー・ソングライターとしての実力を再認識させる内容を持った作品。（吉野）

CHAPTER V

カンタベリー・ミュージック

～その音楽・思想・人脈の全容～

・坂本理（Chapter 全文）・

序

カンタベリー・ミュージックとは何か？

今年でWILDE FLOWERSが生まれて27年、SOFT MACHINEが結成されて24年になる。

マスコミに冷遇され続けて来たおかげで、いつの間にかカンタベリー・ミュージックを知らないロック・ファンがふえて来たというのもいたしかたないことなのかも知れない。最近のプログレッシヴ・ロック・ファンですら、ろくろく聴いたこともないという層が多いと聞く。情報が与えられていないのだから無理もない。

考えてみれば、昔から日本ではカンタベリー・ミュージック・シーンはマイノリティーへと押しやられて来た。SOFT MACHINEなど、ずっと噂ばかりのビッグネイムで、その音楽が例えば放送に乗る機会など滅多になかった。雑誌の記事の中ではPINK FLOYDやKING CRIMSONと同格に扱われながら、実際の採り上げられ方には極端な格差をつけられて来た。

なぜそうなったのかはよく判らない。あるいは偶然のイタズラだったのだろうか。まあ、想像してみるに、当時の音楽評論家達の理解出来る範囲を彼らの音楽は少し逸脱していたのかも知れない。ロック・シーンの最先端として紹介するには彼らのジャズ的な方向性が些かの躊躇を呼んだということもあり得る。あまりにもイギリス的な音楽性ゆえに、これはマニアのための音楽だと見做されてしまったきらいもある。

しかしイギリス国内では彼らは本当にビッグネイムだった。彼らのコンサートが今でも語り草になっていたりする。彼らの影響を受けたミュージシャンも数多い。そして今も尚その影響は広がり続けている。

取り敢えず、正しいカンタベリー・ミュージック観を提供すべくこの文章を書いている。まず、カンタベリー・ミュージックの何たるかを知らない読者に心して読んでいただきたいと思う。

カンタベリー・ミュージック・シーンとは何か。

一言で言えば、SOFT MACHINEとその取り巻きのことだと考えてもらえばいい。

KING CRIMSONやGENESIS、YESなども、ロック・シーン全体に多大な影響を及ぼし、また人脈的にもなかなか興味深い広がりを見せたバンドだろう。それぞれのファミリー・トゥリー（人脈図）も見応えのあるものだ。しかし、SOFT MACHINEのそれは、もっともっと多くのミュージシャンを巻き込んだ一大勢力だ。そして彼らは徒党を組んでいる。明確な組織がある訳でもないのに（部分的にはある）、皆で一つのシーンを作り上げ、各々のミュージシャンはそれぞれに別の方向性を持っているにもかかわらず、全体として非常に特徴的な音楽性を打ち出している。

本書に掲載したカンタベリー・ファミリー・トゥリーを見て欲しい。この信じられない程多くのミュージシャン達の編み上げた軌跡に圧倒されないだろうか。これでも横糸の多くは平面に納め切れず省略されている。この多くのミュージシャンの中には、おそらく相当知識に乏しいロック・ファンでも知っている名前も幾つか見つかる筈だ。これからカンタベリー・ミュージシャンを勉強しようという入門者は、その辺を手掛りにして探って行くのもいいかも知れない。

SOFT MACHINEとその取り巻きの音楽をなぜカンタベリー・ミュージックと呼ぶかと言えば、答えは明瞭、SOFT MACHINEのメンバー達の多くがイギリスの南東部、ドーヴァー海峡を挟んでフランスに対面するカンタベリー地方の出身であり、また、彼らの取り巻きの多くも同じカンタベリーの出身者達だったからだ。ロンドンからもそう遠くはないため、実際の活動は必ずしもカンタベリーに限定されないが、彼らを総称してカンタベリー・ファミリーと呼ぶようになった。

一般にカンタベリー系のアーティストかどうかは、ミュージシャンの出身地とその音楽性で判定されている。認定機関がある訳でもないので、一応習わしぐらいの意味合いだ。

本書掲載の系図の中には、一般には

カンタベリー系とは見做されていないグループも含まれている。例えば、NUCLEUS、CURVED AIR、POLICE、CAMEL、POXY MUSICらは普通カンタベリー系とは言われていない。しかし、取り巻きという意味ではそれらのグループはあまりにも関わりが深いので、敢えてこの系図の中に取り上げておくことにした。音楽的な関連について文章では深く追求しないので、関心のある方は個々に研究してみて欲しい。

ここで重要なのは、カンタベリー・ミュージックとはどんな音楽なのかということだ。これが昔から様々に議論されて来たのだが、耳では割にすんなりと理解出来るのに、それを言葉で表現するのが案外難しい。何しろ、個々のミュージシャンはそれぞれ別の音楽性を打ち出しているので、それらをまとめて一言でこうだとは断定出来ないのだ。

まずは、入門者のために、例外があることは置いておいて、これが典型だというカンタベリー・ミュージックを説明するのがいいだろう。

第一にそのサウンド。ギターにせよ、キーボードにせよ（特にオルガン）、また時にはベースも含めて、ディストーションなどを通して音を平らに伸ばし、各楽器の音を均質化する。これによって各メンバーが同等の比重で演奏を繰り広げていくことになる。誰かひとりがソロをとるという発想ではなく、全員で楽曲を織り上げて行くという発想だ。各楽器の音色の実験・研究には特に初期においてはおそろしく熱心だった。マイク・ラトリッジ、ヒュー・ホッパー、デイヴ・ステュワート、デヴィッド・シンクレア、フィル・マンザネラらのサウンドはちょっと聴いただけですぐそれと判る非常に独創的なものだ。

第二にそのメロディ・ライン。あまり大袈裟ではないが、妙に心に残るメロディがうねうねと綴られて行く。演奏する側にとっては覚えにくそうなフレーズが組み合わされ、尋常ではない展開を繰り広げて行く。素直に予想出来るような構成は極力避けられる。計算され尽くしているような展開の中でいつの間にかアドリブがとられ、アレンジとアドリブの区別が判然としない。その上複数の楽器で複数のメロディやアドリブが重ねられて行くことも多く、ちょっと聴いただけではよく理解出来ないことも多い。

そしてそのリズム。さり気なくたんたんと進行して行くくせに、よく聴くととんでもない変拍子や奇数拍子が頻発する。

ハーモニーも単純明快なものよりは、複雑で微妙なものを好む。転調などは朝飯前。

歌の内容、表現の方法はしばしば非常にウィットに富み、ひねくれたユーモアを駆使する（その方法論を自らパタフィジカルと呼んでいる）。

これらを総じて理解出来るのは、彼らが聴き手に気付かせないやり方で密かに凝りまくって、それを楽しんでいるということだ。禁欲的、抑制的な知性の遊戯に耽っているとも言えよう。例えば、これでもかこれでもかとむやみに盛り上げ、聴き手の心を煽り立てるようなある種の煽情的なプログレッシヴ・ロックとは正反対の方法論に基づいている。

こうした音楽を楽しむのに必要なのは知性を伴った感性だろう。演奏者の機知に富んだ感性を敏感に察知し、同じ次元で楽しむ。それ故に彼らはイギリスでは根強い人気を得た。

では、とにかくSOFT MACHINEを聴けばカンタベリー・ミュージックが判るのか、と言えば実はそれが違う。SOFT MACHINEはカンタベリー・ミュージック・シーンの中心的存在ではあるが、一つのバンドとして多くのメンバー・チェンジを経ながら長い期間に渡り活動を続けたため、彼らの音楽をそのままカンタベリー・ミュージックの典型と見做すことが出来ないのだ。

従ってここでは些かの偏見も混じるが、これがカンタベリー・ミュージックだという代表作を紹介しておこう。入門者が全くの予備知識なしに聴き始めるのなら初めはこの辺から入るのが判り易いと思う。

- 「Volume Two」 SOFT MACHINE
- 「In The Land Of Grey And Pink」CARAVAN （特にB面）
- EGGの全3作
- 「Mainstream」 QUIET SUN
- HATFIELD AND THE NORTHの全2作
- 「Fish Rising」スティーヴ・ヒレッジ

ここに選んだのは1960年代終わりから1970年代前半のものなので、作品によってはもしかすると多少の古臭さが感じられるかも知れない。これは特にサウンド面での特徴が顕著なものを選択した結果であり、このことで誤解されると困るので敢えて断っておくが、カンタベリー・ミュージックは決して過去の音楽ではない。そのことはこれからの文章で充分論ずるので、しっかり把握して欲しい。

各アーティストについて紹介する前に、もうひとつ大事なことに触れておこう。1960年代終わりから1970年代前半にかけてというのは、カンタベリー・ミュージックがイギリス国内で大きな評判を得た、つまり一種のブームを呼んだ時期に当たるが、同時にプログレッシヴ・ロックの最盛期にも当たる。このことが同時代的にもカンタベリー・ミュージックがプログレッシヴ・ロックの一部であるという認識を誘った。しかし、流行が去った後のカンタベリー・ミュージック・シーンを見ると（系図をよく見て欲しい）、そうした認識が甘かったことに気付く筈だ。カンタベリー・ミュージック・シーンにはプログレッシヴ・ロックやジャズ・ロックに限らず、ポップだろうがフォークだろうがジャズだろうがニュー・ウェイヴだろうが何でも受け入れる素地があるらしい。カンタベリー・ミュージックは決してただのミュージシャンズ・ネットワークではなく、同時にある種の音楽形態でもあるにもかかわらず、何故か既成の音楽構造の枠組みを超越した所にあるムーヴメントなのだ。だからこそ、流行に左右されることなく現在に至るまで様々な形でカンタベリー・ミュージックは継続し、拡散して来たのだ。今も生き続けている音楽シーンなのだということを理解しておいて欲しい。

1 SOFT MACHINE

SOFT MACHINE というバンドについて考える時、まず心しなければならないのは、絶えず変化し続けることを自ら心掛けていたバンドだったということだ。時代の先端を模索しながら、常に前進を自らに強いたという意味で KING CRIMSON の姿勢にも通ずる所がある。ロックというジャンルにも固執を見せず、とにかく自分達が前に進むことにこだわった。

従って彼らの音楽を考える時、何はともあれ全作品を把握していないと、盲人が象を撫で回していることになってしまう。しかし一から全アルバムを揃えようとすると結構簡単には行かなかったりする。周囲に持っている人がいれば貸してもらえばいい。ファンの間でも好きなアルバムは分かれるだろう。でもどの作品もがまさしく SOFT MACHINE ならではの魅力に溢れている。

彼らの音楽的変遷に焦点を当てて、彼らの歴史を辿ってみよう。

カンタベリー・ミュージック・シーンはまず WILDE FLOWERS というバンドに始まった。このバンドを母体に SOFT MACHINE と CARAVAN の二つのバンドが生まれることになる。両者の最初期の録音から遡って類推するに、WILDE FLOWERS はやはりフラワー・ムーヴメントの洗礼を受けたバンドだったに違いない。

1966年８月、WILDE FLOWERS を経たロバート・ワイアットとケヴィン・エアーズが、友人のデヴィッド・アレンとマイク・ラトリッジを誘って SOFT MACHINE が誕生した。最初の数回のギグには、もう一人ラリー・ノーランという謎の人物も参加していたらしい。PINK FLOYD の活動の拠点だった UFO クラブやラウンドハウスでサイケデリックなライト・ショウをバックにギグを行いながら、休暇はスペインのマジョルカで過ごし、またフランスでもライヴを行うなど、彼らの活動は相当新人離れしていたようだ。

1967年２月にシングルを発表してレコード・デビュウ。

４月には数曲分のデモ・テープを制作。公表の計画はなかったが、後にジョルジョ・ゴメルスキーの手で発掘され発表された。ここではポップではあるが既に独特のカンタベリー・サウンドの萌芽が見られる。後に正規のアルバムに収められる何曲かの原曲も聴くことが出来る。

９月、麻薬常習のためフランスからイギリスへの再入国を拒否され、デヴィッド・アレンがバンドを離れざるを得なくなる。つまり、アレンの参加した SOFT MACHINE の録音は正規にはシングル１枚で、アレン自身がその後カンタベリー・ミュージック・シーンに及ぼした波紋の大きさに比べると呆れる程僅かの期間だったと言えよう。



●オリジナルSOFT MACHINE。(L to R)ケヴィン・エアーズ，ロバート・ワイアット，マイク・ラトリッジ，デヴィッド・アレン。

しかし、ギタリストが抜けたことが結果的には彼らの音楽の独自性を強めることになった。ギターの抜けた穴をラトリッジが一人で埋めることになり、非常にユニークなオルガン・サウンドを追求し始めたのだ。様々なサイケデリック・バンドの模倣をしながら、取り敢えずオルガン・トリオという編成に独自な活路を見出そうと努力して行く。

翌1968年にはジミ・ヘンドリックスの前座で無謀にも最初のアメリカ・ツアーを敢行。５月からの２度目のアメリカ・ツアーには、サイケデリック・バンドの DANTALIAN'S CHARIOT のギタリストだったアンディ・サマーズが同行したが、バンドとはしっくり行かなかったらしい。おそらくバンドとしては、このままオルガン・トリオで行くことに不安があったのだろうが、既にラトリッジのオルガン・サウンドにギターが割り込む余地はなかったのかも知れない。サマーズは７月のツアー終了でバンドを離れた。

ツアー中の４月にニューヨークで、４日間で録音とミックスを終えた彼らのデビュウ・アルバムは、12月に発表された。音楽的にはアレンのいた頃と大差はないが、比較すると彼らがどう変化したかが判る。ギターのない分サウンドはユニークであり、リズムが流動的になっている。まだ変拍子は聴かれないが、この延長線上にあのカンタベリー・ミュージック特有のうねうねとしたメロディが導入されて行くことになる訳だ。

12月、ツアーの連続に疲れたエアーズがバンドを脱退し、バンドは存続の危機に瀕する。エアーズはベースを売り払い、イビザへ逃避行。ワイアットはアメリカにとどまり、ラトリッジはイギリスに帰国した。しかし、アルバムの売り上げが好調だったため、レコード会社（Probe）がバンドの再開を呼び掛け、WILDE FLOWERS 時代の同僚で、それまで SOFT MACHINE のロード・マネージャーをして来たヒュー・ホッパーを新しいベーシストに迎え、バンドは再出発することになる。もしバンドが再開しなかったなら、その後のカンタベリー・ミュージック・シーンはなかっただろうと思うと、これがいかに重要な選択であったかが判る。

1969年２月、活動を再開したバンドは早速レコーディングに入る。このセカンド・アルバム「Volume Two」は４月に発表された。メンバーではないがホッパーの兄、ブライアン・ホッパーもサックスで参加しており、バンドの音楽性がいきなり向上しているのが判る。ファースト・アルバムとよく似た、短い曲をメドレーで綴り全体で組曲のような構成にするというコンセプトを踏襲しながらも、前回には全く見られなかったジャズ・ロック色や変拍子の導入が見事な成果を上げている。演奏力の向上も際立っている。SOFT MACHINE はここで初めて一流のバンドに成長を遂げたと言っていいだろう。どうして存続の危うかったバンドが新メンバーを加えた直後にこういうアルバムを作り上げられたのか実に不思議だが、とにかく３人のメンバーの音楽性と実力が遺憾なく発揮された傑作となっている。極言すれば、カンタベリー・ミュージックはこのアルバムに始まった。

レコーディングの１カ月後にアムステルダムで行われたライヴが近年発売されている。その「Turns On Paradiso」を聴くと、当時の SOFT MACHINE がいかにバンドとして高いポ



●第II期。(L to R)ヒュー・ホッパー，ラトリッジ，ワイアット。

↑第II期のギグ。
↓サード・アルバムのレコーディング・セッション。エルトン・ディーンはじめ，ホーン・セクションを加えた編成。





テンシャルを持っていたかが判る。セカンド・アルバムの曲を殆どアルバムと同じようにぶっ続けで演奏する。決してラトリッジの一人舞台ではなく、メンバー3人が見事に調和して過不足のない素晴らしい演奏を繰り広げている。

10月に入ると、4人もの管楽器奏者を加えてツアーに出る。新しく加わったのは、新進気鋭のジャズ・コンボKEITH TIPPETT GROUPに参加していたエルトン・ディーン、ニック・エヴァンス、マーク・チャリグと、セッション・ミュージシャンのリン・ドブソンだ。おそらくセカンド・アルバムで到達した新しいジャズ・ロックの生成に決着をつけ、より緻密なアレンジとスポンテニアスなインタープレイを取り入れたもっとジャズ寄りの音楽を目指して行こうというメンバー達の意志確認が行われたに違いない。当時のライヴには、ジミー・ヘイスティングス（fl, sax）やパイ・ヘイスティングス（g)、ラブ・スポール（vln）も参加したことがあるらしい。

12月には早くもニック・エヴァンスとマーク・チャリグがバンドを抜け、翌1970年1月に3作目のアルバムをレコーディングする。ゲストとしてニック・エヴァンスやラブ・スポール、ジミー・ヘイスティングスも参加しており、やはり大編成の演奏を含んだものになっている。このアルバム「Third」は6月に発表された。2枚組ＬＰで、4曲が収められているが、それぞれの曲は組曲形式になっており、構成としてはそれまでのアルバムとそう違わない。しかし音楽的にはワイアットの作曲した'The Moon In June'を除くと凡てインストゥルメンタル・ナンバーであり、結局この1曲だけが前作の延長線上にあり、他の3曲ではがらりと方向性を変え、非常にジャズ的なアプローチを行っている。

SOFT MACHINEのジャズへの方向転換が何を意味するかは重要な問題だろう。バンド結成時はワイアットとエアーズが中心だったが、エアーズは自分の存在意義に疑問を感じバンドを去った。ホッパーが参加することによって、バンドの中での音楽的イニシアティヴはワイアット、ラトリッジ、ホッパーの3人が平等にとることになった。つまり、その時点でワイアットの発言力はいくらか弱まったことになる。そしてバンドがジャズ指向に転じ、以後ワイアットのヴォーカル・ナンバーが消えてしまったことにより、いかにもワイアットが疎外されて行ったかのように見えなくもない。しかし、事実はそうではないような気がする。サード・アルバムの時点でワイアットはやはりバンドの1/3の存在であったし、エルトン・ディーンが参加してからも1/4の存在ではあった。決してワイアットの意志が蔑ろにされたとは思えない。少なくともこの時点ではジャズへの転向はワイアットの意志でもあった筈だ。多分、彼がバンドとの齟齬を感じだすのはもう少したって、バンドがよりシリアスなジャズを目指すことが明らかになってからだろう。彼が積極的にフリー・ジャズを指向したのは彼のファースト・ソロ・アルバムを聴いてもよく判る。ただ彼はよりのびやかで、大らかな精神性をそこに求めていたのだろう。ジャズへの転向が飽くまでバンド（3人）の総意だったことは敢えて強調しておきたい。

1970年2月にはリン・ドブソンも抜けてしまい、結局大挙して加入したジャズ・プレイヤー達の中でエルトン・ディーンだけが残り、以後バンドでの発言力も平等に得ることになる。ディーンが参謀格に昇格したことで、バンドのジャズ指向はより先鋭的になって行った。

1970年8月13日にBBCの企画で行われたプロムナード・コンサートの模様が1988年に「Live At The Proms 1970」のタイトルで発表され、なんと現在日本盤で手に入る彼らの唯一のアルバムになっている。セカンドとサードの曲を相変わらずメドレーで演奏している。アルバムでの分厚い音づくりに比べると多少音が薄いものの、なかなかの熱演であり、聴き逃す訳に行かない。この時期のライヴは相当迫力のあるものだったらしく、今も語り草になっていたりする。

この頃ワイアットは一時SOFT MACHINEを離れ、ケヴィン・エアーズのバック・バンド、THE WHOLE WORLDに加わるが、すぐに復帰した。しかし、SOFT MACHINEとは別に、フリー・ジャズ・バンド、AMAZING BANDに参加したり、ディーンと共に、ネヴィル・ホワイトヘッド（b)、フィル・ハワード（d)を従えたカルテットを率いたり、また、ズート・マネー（kb）と共にジャズ・ミュージシャンを従えて、双頭バンドSYMBIOSISを結成したりと、精力的に対外活動を行うようになる。キース・ティペットの組織する大編成のジャズ・オーケストラ、CENTIPEDEにも参加する。この頃よりおそらくSOFT MACHINE以外で自分の音楽を追求したいと考えるようになったものと思われる。10月には初のソロ・アルバム「The End Of An Ear」を発表。何とも魔訶不思議なフリー・ジャズを繰り広げている。ユーモラスで力の抜けた遊びじみた音楽であり、こういう寛いだ実験音楽が彼の目指していたものなのだろう（実際には接触がないものの、ロル・コックスヒルの音楽に通じるものがありそうだ)。

SOFT MACHINEは翌年2月にアルバム「Fourth」を発表する。A面には3曲が収められ、漸く大曲主義からの脱却が見られる（B面は実験色の強い組曲になっている)。ロック色が一段と薄まって、エルトン・ディーンが前面に出て来た分フリー・ジャズに近付いている。これまでに比べると、インプロヴィゼイションの比重が相当大きい。やや焦点のぼけた散漫な印象は気の所為だろうか。この先どっちの方向へ向かえばいいのか自分達で戸惑っているような演奏に聞こえる。しかし、後にディーンやホッパーが展開して行くジャズの原型はこのアルバムに聴くことが出来る。

1971年9月、遂にワイアットがバンドを抜けてしまう。微妙な方向性の



●ロバート・ワイアット



Face & Places Vol. 7
'71



Soft Machine
'68



Volume Two
'69



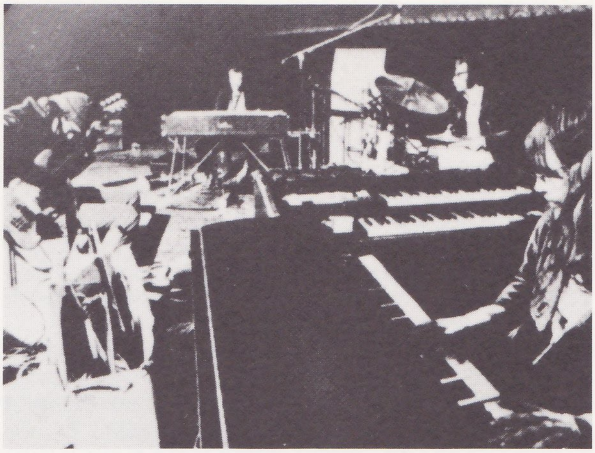
Third
'70



Fourth
'71



Fifth
'72


●フィフス・アルバム時のセッション。(L to R)ホッパー，ディーン，ジョン・マーシャル，ラトリッジ。

違いが原因だが、やはりワイアットは自分のバンドで自分の目指す音楽を追求したくなったということだろう。交代で加入したフィル・ハワードの参加でバンドは完全にジャズの世界に両足を突っ込んだ。ロック的なアプローチへのこだわりが払拭し、どこから見てもジャズ・バンドになり切ってしまった。11月より新作のレコーディングに入るが、なんとレコーディング中の1972年１月、早々とハワードがバンドを離れてしまう。２月に新しく、NUCLEUSのドラマーだったジョン・マーシャルが加入し、そのままレコーディングを続行。これは「5」のタイトルで６月に発表された。このアルバムの潔さは見事だ。研ぎ澄まされた鋭い感性が全編に漲っており、透徹したフリー・ジャズの音空間をきりきりと引き締めている。

５月、今度はディーンがバンドを去ってしまう。これは一体どういうことだったのだろう。「5」では作曲にこそ参加していないものの、彼の音楽性は相当強く打ち出されていた。にもかかわらず、彼はSOFT MACHINEでの自己表現を諦めてしまった。そもそもジャズ・ミュージシャンの常として彼は多くの活動を並行して行って来た。当時も自分のバンド、JUST USを率いており、1971年８月には初のソロ・アルバム「Elton Dean」を発表し、「5」とよく似た音楽性を披露している。SOFT MACHINEは基本的にラトリッジとホッパーのバンドであり、自分の発言力はふたりに劣ると彼は感じていたようだ。同じような音楽をやるのなら自分のバンドに優先しようと考えたのかも知れない。

●エルトン・ディーン


ディーンに変わって加入したのは元NUCLEUSのカール・ジェンキンスだった。彼はオーボエやバリトン・サックスの奏者として迎えられた訳だが、同時に優れたキーボード奏者であり、また作曲家だった。ジェンキンスの参加は結果的には非常に大きな選択を意味していた。最終的にSOFT MACHINEのイニシアティヴは彼が握ることになるのだから。

新しいSOFT MACHINEはジェンキンスの活躍により、基本的にツイン・キーボード・グループへと移行することになる。非常に先鋭的なフリー・ジャズに挑戦していた彼らは、こうした形態の変化により自然に軌道を修正して行った。再びジャズ・ロック色を増し、変拍子のリフを軸にした躍動するリズムを前面に打ち出すようになる。この方法論は当時アメリカで台頭して来たマイルス・デイヴィス門下生による新しいジャズの影響もあるが、明らかにテリー・ライリーらのミニマル・ミュージックから導かれたものでもあった。常に新しい音楽を模索して来た彼らはまた新たな段階に進んだ。

10～11月のライヴがアルバム「Six」のＡＢ面に収められている。このアルバムは２枚組で、1973年２月に発表されたが、ＣＤ面には11～12月に行われたスタジオ録音が収められている。ジャケットも含めて彼らの最高傑作ではないかと個人的には評価している。繰り返されるリフの上に繰り広げられるラトリッジのオルガン・ソロあるいはジェンキンスの管楽器ソロという形態はなるほどジャズのものではあるが、この執拗な奇数拍子の反復は、体が捩れるような強烈なビートを生み、じわじわと興奮を呼ぶ。そして何よりジェンキンスのオーボエの妙なる響きがこよなく美しい。


●NUCLEUSからカール・ジェンキンス(左端)を迎えた「Six」時のラインナップ。

ツイン・キーボードとなったことで、バンドはラトリッジとジェンキンスの双頭バンドへと変化した。これにより、今度はホッパーがバンドを去ることになった。彼は1972年７～８月に録音したソロ・アルバム「1984」を、翌73年３月に発表している。

1973年５月、ホッパーに替わって、新しくロイ・バビントンがベーシストとして加入した。バビントンは以前より時折ウッド・ベースで彼らのアルバムに参加していたが、正式メンバーになってからは主にエレクトリック・ベースを弾いている。彼も元NUCLEUSのメンバーであり、これでメンバー４人中３人がNUCLEUSの出身者ということになった。

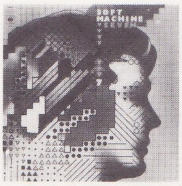
７月には新しいアルバムを録音し、10月に「Seven」として発表する。短めの曲がメドレーで演奏されるという、初期のアルバムに似た体裁になっているが、音楽的には前作と繋がっている。やはり反復されるリフが特徴的であり、何やら夢見心地にさせてくれる。ベースが替わったせいか、ドスのようなものが消え、純粋に快感だけを抽出したような音楽となっている。

さて、11月になると、今度はアラン・ホールズワースが加入し、５人編成になった。なぜ彼が加わることになったのだろう。ホールズワースにとってはその後の活躍に通じる大きな飛躍のステップだったことは間違いないが、バンド・サイドから見るとそれほどの必然性があったとは思えない。「Seven」での音楽を発展させて行く上で新しいメンバーの補充が必要だったとは誰も思うまい。ただ、ホールズワースもNUCLEUSの出身者であり、他のメンバー達も同胞意識は少なからず抱いていた筈だ。結果としてホールズワースの加入はバンドに決定的な変質をもたらした。ギタリストが加わったことによりジェンキンスの管楽器奏者としての役割が軽減され、ジェンキンスはキーボード・プレイにより専念することが出来るようになる。ジェンキンスとラトリッジの役割が完全に競合し、さらにジェンキンスが自らの人脈でバンドを固めてしまったため、ラトリッジはバンドのイニシアティヴを奪われる形になってしまった。また、サウンド的に比較的オーソドックスな形態のジャズ・ロックとなり、それまでの特殊性が大幅に薄れた。つまり、変種のジャズ・ロックから、よくありがちなジャズ・ロック（当時の分類で言う所のクロスオーヴァー、暫らく後に言われる所のフュージョン）へと移行して行くことになる。

レコード会社も変わり、彼らの作品が発表されたのは1975年４月のこと。タイトルは初めて番号ではなく「Bundles」と名付けられた。とにかくサウンド面で驚異的な変身を遂げており、まるで別のバンドになったかのような印象が強い。SOFT MA-



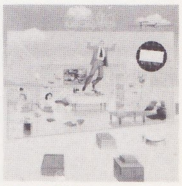
Six
'73


Seven
'73

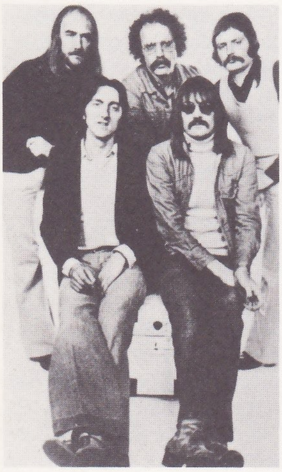

Bundles
'75


Softs
'76


Alive & Well
'78


Land Of Cockayne
'81

●「Bundles」時のラインナップ。(L to R)ロイ・バビントン，アラン・ホールズワース，マーシャル，ラトリッジ，ジェンキンス。



CHINE よりも NUCLEUS のカラーの方が濃く出ている。このアルバムによって彼らは一流のフュージョン・グループとして新しい評価を得ることになった。

1975年３月、ホールズワースはバンドを去り、長い流浪の経歴を重ねて行くことになる。代わって元 WOLF のギタリスト、ジョン・エサーリッジがバンドに加入する。もはや彼らにとってギター抜きの演奏は考えられないことだった。

そして翌1976年１月、遂に来るべき時が来て、ラトリッジが脱退してしまう。最後のオリジナル・メンバーが去り、SOFT MACHINE は完全にカール・ジェンキンスのバンドとなった。２月には新しくサックス奏者のアラン・ウェイクマンも加わり、ジェンキンスはキーボードに専念することになる。こうして制作されたアルバム「Softs」は６月に発売された。音楽的にはもう非の打ち所のないフュージョンだが、演奏、曲ともに前作を超える見事な作品だ。エサーリッジは本当に途轍もないテクニシャンであり、このアルバムの魅力も彼の演奏に負う



●マイク・ラトリッジ

所が大きい。バンドのこれまでの歴史を一切考えなければ、このアルバムをジャズ・ロック界屈指の名盤と言うことに躊躇はない。それ程凄い作品だ。

７月にアラン・ウェイクマンとロイ・バビントンが相次いでバンドを抜けてしまう。バビントンはジョン・マーシャルとのコンビも長く、一体何が原因だったのか気になる所だ。バンドはバビントンの抜けた穴を埋めるのに少々アワを食った様子だ。９月から始まったツアーにはウェイクマンに代わってヴァイオリニストのリック・サンダースが加入したものの、ベースは後任が見つからず、急遽 BRAND X のパーシー・ジョーンズに応援を頼んで急場をしのいだ。パーシー・ジョーンズには次のツアーも助太刀してもらい、漸く後任が決まったのは1977年２月のこと。GILGAMESH 等のバンドで活動していたスティーヴ・クックが加入した。



●ホールズワースにかわりジョン・エサーリッジ（中央）を迎えたSOFT MACHINE。この後，ラトリッジは脱退。

７月に行われたパリでのライヴ・レコーディングが次のアルバムとして翌1978年３月、発表された。このアルバム「Alive & Well・Recorded In Paris」には新曲ばかりが収められており、A面は短い曲のメドレーになっている。A面は前作の延長であり、めくるめく演奏が圧巻だ。それに対しB面はとりとめがない。１曲１曲は悪くないのだが、それぞれがバラバラで、ひどく散漫な印象なのだ。それはメンバー達の思惑の違いでもあろうが、それ以上にカール・ジェンキンス自身の気持ちの迷いの表われに見える。完全にバンドを掌握したはいいが、それからの展開をどうするかというヴィジョンが曖昧にしか描けなくなってしまったようだ。

結局ジェンキンスはその後一旦バンドの運営を放棄してしまったらしい。解散がいつのことだったのかは定かではない（おそらく1978年のことだろう）。メンバーのうち、エサーリッジとサンダースは良質のジャズ・ロック・グループ、２ND VISION を結成し、1978年よりライヴ活動を始める。もしかするとふたりが抜けたのでSOFT MACHINE が活動を停止したのかも知れない。

このまま SOFT MACHINE はその歴史を閉じたものと思われていたのだが、1981年、突然彼らの新作が発表され、ファンを驚愕させた。このアルバム「Land Of Cockayne」は1980年に録音されたもので、全曲カール・ジェンキンスの作曲になるものだ。バンドはジェンキンスとマーシャルのふたりで構成されており、ほかにアラン・ホールズワース（g）、ジャック・ブルース（b）らを中心に、イギリスの比較的売れ線のジャズ・ミュージシャン達が参加している。タイトルからして判るとおり、相当脳天気なコンセプトによるイージーリスニング・フュージョンが繰り広げられる。ストリング・オーケストラの起用もあり、もうそれはそれは爽やかなフュージョン・サウンドになっているが、まあ、２、３、悪くない曲も入っている。という訳で、これは SOFT MACHINE のアルバムとしては徹底的な拒絶で迎えられたが、これがもしカール・ジェンキンスの初のソロ・アルバムとして発表されていたなら非常に高い評価を得たに違いない。全くくだらない売り方をしてくれたものだ。売り方をしくじったおかげでカール・ジェンキンスはソロ・デビューする絶好の機会を失ってしまった。実はこの時期、ほかにも幾つかのプロジェクトでアルバムを発表しているが、全く評価されることなく彼はそのまま姿を消してしまった。彼ほどの才能の持ち主がもはや陽の目を見ることはないのだろうか。そして SOFT MACHINE も救い難い汚点を残して、その長い歴史に終止符を打ったのだった。

2

CARAVAN

CARAVAN も SOFT MACHINE と同じく、WILDE FLOWERS を母体として誕生したグループであり、カンタベリー・ミュージック・シーンに占める重要性も同じくらい大きい。しかし、バンドとしての音楽的方向性は、結果として全く異なったものへと変化して行った。SOFT MACHINE が次第にジャズに近付き、やがてジャズ・ロックへと進んで行ったのに対し、CARAVAN はある時期ジャズ・ロックへの接近も見られたものの、バンドとしては早くから抒情性の追求に力を入れ、それが段々ポップ性を増して行くことになる。とは言え、CARAVAN は SOFT MACHINE のように劇的な変化を続けたバンドではなく、寧ろ最初から首尾一貫した姿勢をとり続けて来たバンドだった。

1968年1月、CARAVAN は WILDE FLOWERS の最後のメンバーだったパイ・ヘイスティングス(g, vo)、デヴィッド・シンクレア（kb)、リチャード・コフラン（d）に、初代メンバーで、その後大学進学のためカンタベリーを離れていたリチャード・シンクレア（b, vo）を加えて結成された。おそらく WILDE FLOWERSの音楽性をそのまま受け継いだのだろう。1968年10月に録音され、翌年発表されたデビュー・アルバム「Caravan」では、SOFT MACHINE の初期の作品に共通するサイケデリック・サウンドが聴かれる。リチャード・シンクレアのヴォーカルがロバート・ワイアットの強い影響を受けていることはよく知られている事実だが、このアルバムを聴くとパイ・ヘイスティングスも負けじとワイアットそっくりのヴォーカルをとっていることに驚かされる。後の CARAVAN に比べるとシンプルな曲ばかりだが、不思議な魅力に満ちたアルバムで、確かに古臭い音楽であるにもかかわらず、斬新な録音技術も手伝って、今聴いても非常に新鮮な感動を受ける。演奏面ではやはりデヴィッド・シンクレアのオルガンに尽きる。テクニックが特に優れている訳ではないが、バンドのカラーを打ち出すのに充分なだけ頑張っている。

1970年9月にはセカンド・アルバム「If I Could Do It All Over Again, I'd Do It All Over You」を発表するが、この長いアルバム・タイトルと同名のシングルがヒット・チャートに登場し、バンドの一般的な知名度が急速に上昇するきっかけとなった。前作に通じる内容だが、サイケデリックな傾向は影を薄め、かわりに牧歌的なアコースティック・サウンドが導入されている。しかし、それ以上に大胆な変拍子をふんだんに取り入れた凝った作曲と、あのデヴィッド・シンクレア特有のくすんだオルガン・サウンドの確立を指摘すべきだろう。所謂カンタベリー色がこのアルバムにはハッキリと表れている。完成度という点では次作にかなわないものの、大曲も多く、特に、後に彼らの重要なレパートリーの一つになる 'For Richard' が収められているので、軽んじる訳には行かない。

1971年9月には、初期 CARAVAN の最高傑作「In The Land Of Grey And Pink」が発表される。これはまさにカンタベリー・ミュージックの代表作に数えられる名盤だ。A面に4曲のヴォーカル・ナンバー、B面に8部構成の組曲が1曲収められ、これまでの様々な要素の混在した音楽がきちんと整理し直されたことにより、彼らの音楽が判り易くなっている。ヴォーカル・ナンバーではふたりのメイン・ヴォーカリスト、パイ・ヘイスティングスとリチャード・シンクレアの個性の違いが明確になり、両者の音楽性の拮抗がバンドの中にスリリングな均衡を生んでいる。そして、このアルバムの白眉、B面の組曲 'Nine Feet Underground' では何と言っても見事な説得力で切々と歌い上げるデヴィッド・シンクレアの変化自在のオルガン・ワークが圧巻だ。決して大袈裟な演奏ではないのだが、休みなくたたみかける表情豊かなソロには返す言葉がない。もう何から何まで計算づくの曲に聞こえるが、実はこの組曲、バンドから提示された脈絡のない曲の断片をプロデューサーのデヴィッド・ヒッチコックが苦心の末に一つに纏めたものらしい。この時の体験をもとにヒッチコックは GENESIS の 'Supper's Ready' も一大組曲に仕立て上げたと言う。些か驚かされるエピソードだが、寧ろ才能あるプロデューサーに巡り合ったことの好運に感謝すべきだろう。



しかし、アルバムの発表も待たずに1971年7月、デヴィッド・シンクレアはバンドを抜けてしまう。ロバート・ワイアットの率いる新しいバンド MATCHING MOLE に加わるのは同年12月のことであり、引き抜かれたという訳ではなさそうだ。

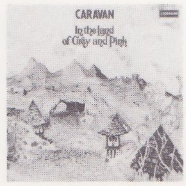
交代で加入したのは、DELIVERY というバンドでブルーズ・ロックをプレイしていたピアニストのスティーヴ・ミラーだった。人脈的には充分納得の行く人選ではあるが、今から見ると随分異質な取り合わせに思われる。このメンバーで「Waterloo Lily」を発表したのは1972年5月のことだ。一部、ミラーの曲もあることはあるが、基本的には殆どの曲が他の3人の共作であり、ミラーは助っ人として参加したことが判る。ちょっと地味な印象のアルバムだが、ここで彼らは典型的なカンタベリー・ミュージックから離れ、彼ら独自のシンフォニックな音楽を追求して行く最初のステップを踏み出す。その華やかな音楽が、デヴィッド・シンクレアよりもずっと控え目なキーボード奏者、スティーヴ・ミラーの参加によって始められたというのが



Caravan
'68



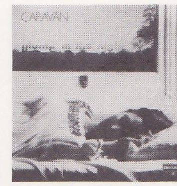
If I Could Do It All Over Again, I'd Do It All Over You
'70



In The Land Of The Grey And Pink
'71



Waterloo Lily
'72



For Girls Who Grow Plump In Night
'73



Caravan & The New Symphonia
'74

面白い。オーケストラを導入したB面の大曲 'The Love In Your Eye' がその後のCARAVANのシンフォニックな音楽性を反映している。A面の大曲 'Nothing At All' はおそらくリチャード・シンクレアが中心となって作られた曲（中間部はミラーの曲）だと思われるが、ロル・コックスヒル（sax）やフィル・ミラー（g）も参加してインタープレイを繰り広げるジャズ・ロック・ナンバーであり、明らかにシンクレアがバンドの中で孤立したことを示している。

結局こうした方向性の違いがもとになり、ジャズ・ロック指向のリチャード・シンクレアとスティーヴ・ミラーは1972年7月、バンドを離れた。リチャード・シンクレアは以後、まさにカンタベリー・ミュージックの王道を突き進んで行くことになる。

この時点で早くもオリジナル・メンバーの半分を失ったCARAVANは、直後にオーストラリア・ツアーを控えており、急遽デレック・オースティン（kb）、スチュワート・エヴァンス（b）、ジェフリー・リチャードソン（vla）の3人を補充した。この編成での演奏はこれまでの所一切公表されていないが、ヴィオラ奏者、ジェフリー・リチャードソンの加入はバンドに大きな影響を及ぼし、決して派手な演奏を披露したりはしないが、バンドのカラーを左右する極めて重要なパートを任うことになる。

1973年2月にはオースティンとエヴァンスのふたりがバンドを去り、代わって、MATCHING MOLEやHATFIELD AND THE NORTHを経て来たデヴィッド・シンクレアが復帰。ベースにはジョン・G・ペリーが参加する。CARAVANの歴史を振り返るなら、この時期が彼らの黄金時代と言えよう。10月に発表された「For Girls Who Grow Plump In The Night」は名盤として名高い。これまでのアルバムのように複数のメンバーによる共作をやめ、殆どの曲がパイ・ヘイスティングスの作曲となっており、彼の持つポップな音楽性とメンバー達の余裕ある演奏力が相俟って、抜群の



バランスを生み出している。プログレッシヴ・ロックと呼ぶにはポップ過ぎる内容だが、アルバムの最後に収められた組曲 'A Hunting We Shall Go' はCARAVANには珍しい、硬質なシンフォニック・ロックであり、感動の名曲として知られる。中間部で採り上げられているマイク・ラトリッジの作曲による 'Bachwards' はSOFT MACHINEの3作目に収められている組曲 'Slightly All The Time' の中の曲であり、ここではオーケストラも交え、オリジナル以上に素晴らしい演奏が繰り広げられている。

この時期の彼らがいかに順調だったかは、初めてライヴ・アルバムを発表したことにも表れている。1974年4月に発表された「Caravan & The New Symphonia」は、1973年10月28日にドゥルーリー・レーンで行われた貴重なオーケストラとの共演を収めたライヴ・アルバムだ。マーティン・フォードの指揮するTHE NEW SYMPHONIAは40人程の編成であり、中には後にPENGUIN CAFE ORCHESTRAを結成する連中や、クリス・ローレンス、モーリス・パート、それにジミー・ヘイスティングス（彼はパイ・ヘイスティングスの実兄であり、殆どのCARAVANのアルバムに参加している。フルートの名手）といった興味深いミュージシャンも参加している。演奏中はモニターが聞こえず、最悪の状態だったというが、白熱したプレイはまったくそんなことを感じさせない圧倒的なものだ。

1974年7月、ツアー前から脱退を考えていたジョン・G・ペリーがバンドを離れ、新たに、元CURVED AIRのマイク・ウェッジウッドが加入する。バンドとしてのパワーはそのまま衰えることなく引き継がれ、ライヴ活動も活発に行なう。1976年11月に発表された2枚組のベスト・アルバム「The Canterbury Tales」（日本では1枚に別編集され1978年に発表された）には1974年9月1日にクロイドンのフェアフィールド・ホールで行われたライヴの中から 'For Richard' が収められている。また、1980年にフランスで発売された2枚組ライヴ・アルバム「The Best Of Caravan "Live"」も正確な日時は不明だが、別の日に同じ会場で行なわれたコンサートの模様を収めている。

1975年7月に発表された「Cunning Stunts」までが彼らの全盛期だった。「For Girls Who Grow Plump In The Night」ではまだ帰って来たばかりで演奏以上の貢献を控えていたデヴィッド・シンクレアが、ここでは恰も「In The Land Of Grey And Pink」再びとばかりに活躍を見せ、聴き応えのある力作を作り上げている。アルバムの構成も似通っており、A面には軽いポップな小曲が集められ、B面にはこれぞ極め付けといった緻密なアレンジの組曲（それに1分ほどの小曲）が収められている。A面では、マイク・ウェッジウッドも活躍を見せ、ストリングスのアレンジまでも手懸けている。B面の組曲 'The Dabsong Conshirtoe' は極めて丁寧に組み立てられたアレンジが圧巻であり、とにかく音が厚い。1970年代後半にプログレッシヴ・ロックの流れを受けたある種のポップなロック、例えば10cc、STEELY DANらの方法論を先駆けたものだとも言えよう。シンクレアのキーボード・プレイを除くと、カンタベリー・ミュージックからは随分離れてしまったという印象も強い。ジェフリー・リチャードソンが隠れた才能を発揮し、ヴィオラだけでなく、ギターやフルートにも手を出し始めたのはこのアルバムからだが、バンドにとってそれが好ましいことだったのかどうかは判断の分かれる所かも知れない。

1975年8月、再びデヴィッド・シンクレアがバンドを去り、代わってヤン・シェルハースが加わる。バンドのイニシアティヴは再度パイ・ヘイスティングスが握ることになり、ポップ化路線は一段と強化されて行った。1976年4月に発表された「Blind Dog At St. Dunstans」は最早プログレッシヴ・ロック・バンドのアルバムとは言えまい。

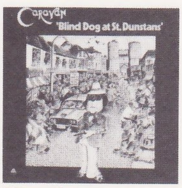
1976年11月、前述した2枚組のベスト・アルバム「The Canterbury Tales」の発売に合わせ、プロモーションのため短期間デヴィッド・シンクレアがバンドに復帰したが、12月にはまたバンドを離れた。同時にマイク・ウェッジウッドも夫人の郷里であるアメリカへと移住するためバンドを去る。交代で参加したのはカナダ生まれのベーシスト、元WOLFのデク・メセカーだった。1977年8月に発表された「Better By Far」は尚一層ポップ性を増したアルバムだ。

ツアーに疲れ果てたという理由で1978年2月、バンドは活動を停止してしまう。誰もがこのまま解散だろうと予想していたにもかかわらず、不屈にも1979年暮れ、バンドはツアーを再開する。ヤン・シェルハースに代わって、またしてもデヴィッド・シンクレアが復帰した。1980年、前述した2枚組ライヴ・アルバム「The Best Of Caravan "Live"」をフランスで発売した後、マネージャーのテリー・キングが設立したキングダム・レコードより新しいアルバム「The Album」を発表する。相変わらず軽いポップ・ソングをやっているが、デヴィッド・シンクレアのキーボード・プレイが光っている。ここまで来ると、やはりCARAVANはパイ・ヘイスティングスとデヴィッド・シンクレアが揃ってこそCARAVANなのだと言いたい。デヴィッド・シンクレアはCARAVANを離れている間にジョン・マーフィーというミュージシャンと活動し、「Moon Over Man」というアルバムのレコーディングを行っているが、結局発表されずじまいに終わり、その時に作った曲の幾つかがこのアルバムに収められている。'Pinao Player' もその中の1曲だ。「Moon Over Man」は今からでもいい、是非とも発売が望まれる幻のアルバムの1枚だ。

デク・メセカーとジェフリー・リ



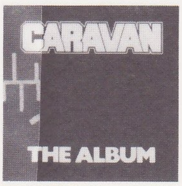
Cunning Stunts
'75



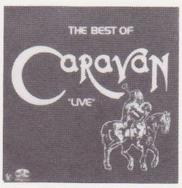
Blind Dog At St. Dunstans
'76



Better By Far
'77



The Album
'80



The Best Of Caravan Live
'80



Back To Front
'82



チャードソンがバンドを離れると、ファンの度胆を抜いてリチャード・シンクレアが復帰した。これはつまり、約10年振りにオリジナル・メンバーが顔を揃えたということだ。このメンバーで1982年、「Back To Front」が発表された。リチャード・シンクレアの存在はバンドに絶大なる魅力をもたらしている。彼の持ついかにもカンタベリー色の濃い独特のポップ・センスは、CARAVAN を昔に引き戻すのではなく、パイ・ヘイスティングスが見失いがちだったバンドのアイデンティティーに方向性を与えている。リチャード・シンクレアは1977年より2年間 CAMEL に加入し、多大な貢献をしたが、この時の同僚であるメル・コリンズ（sax）もこのアルバムに参加しており、いい意味で CAMEL によく似た良質の音楽を作り上げている。漸く不本意な低迷から抜け出した CARAVAN の起死回生の1作と言っていい。殊更気負ってはいないが、CARAVAN の魅力の本質が理想的な形で結晶した素晴らしい作品だ。

いよいよバンドも復調し、これからの活動が楽しみだったにもかかわらず、なぜかその後彼らは新作をまったく発表していない。残念なことに、彼らの情報も一切入って来ないため、現状がさっぱり判らない。おそらく暫くはライヴ活動を続けていた筈であり、少なくとも解散したという話は伝えられていない。あるいはメンバー・チェンジを経ながら今も活動を続けているのかも知れない。これだけビッグ・ネイムであっても、カンタベリー・ミュージックの情報は極めて得にくいというのが悲しい実状だ。いつの日か再び彼らの新作が聴けることを祈ろう。

3

GONG

GONG はご存じの通り、フランスの代表的プログレッシヴ・ロック・グループだ。従ってこの本の中で取り上げるべきかどうか些か議論の余地がある。第一この限られた紙面の中で彼らについて言及するのは僕には荷が重い。しかし、カンタベリー・ミュージック・シーンを語る上で彼らについて触れなかったら片手落ち以外の何物でもない。多少の領海侵犯には目を瞑り、紹介するほかあるまい。

1967年9月、イギリスへの再入国を拒否されたオーストラリア生まれのギタリスト、デヴィッド・アレンは、やむなく SOFT MACHINE を抜け、パリに戻ることになる。そこで彼はエコー・チェンバーのオペレーターを引き連れ、クラブでギターの演奏を始めた。やがてスペイス・ウィスパー（過剰なエコー処理を施した即興的ヴォーカリゼイション、或いは一種の読経）のジリ・スミスとジスカ・バウム、及びフルートのローラン・スタンドレイが加わり、バンドの体裁をなして行った。

1968年、学生達によるパリ革命が起こると、アレンとスミスは警察当局に追われスペインに逃亡する。スペインのマジョルカ島のデヤで、ふたりは BANANAMOON というバンドを率いて活動したと言う。

1969年、パリに戻ったふたりはBYGレコードと契約し、GONG を結成する。9人編成で発足したGONG は、同年9～10月、「Magick Brother Mystic Sister」をレコーディングし、翌年発表する。SOFT MACHINE 時代には殆ど表面化していなかったアレンの音楽性がここでは既にハッキリと打ち出されている。とは言っても、バール・フィリップスのような先鋭的なジャズ・ミュージシャンまで参加している割には微笑ましい稚拙な演奏を繰り広げており、まだサイケデリック・ミュージックの域にとどまっている。

メンバーはその後縮小して行ったらしいが、BANANAMOON での活動も並行しており（この辺の事情は煩雑でよく判らない）、1971年にはアレン名義で「Bananamoon」を発表する。GONG のメンバー達に混じって、ロバート・ワイアットやピプ・パイル等カンタベリーのミュージシャンも参加しており、ライヴではヒュー・ホッパーも加わっていたらしい。カンタベリー系の人脈によるセッション的な性格の強いバンドであり、音楽的にもちょっととりとめのない印象がある。GONG 独特のスペイシーなイメージも少なく、ケヴィン・エアーズの音楽に似た雰囲気を持っている。今から見ると脇道にそれたような内容だが、しかし当時アレンが GONG と BANANAMOON のどちらにウェイトを置いていたかは俄には判断しかねる。

とは言っても BANANAMOON のようなバンドが長続きする筈もなく、1971年、GONG として「Continental Circus」、「Camembert Electrique」の2枚のアルバムが発表される。この時点で漸く GONG はバンドとしてのまとまりを見せ、その特異な音楽性を確立する。前者は映画のサウンドトラックであり、全4曲、しかも内2曲は同じ曲のヴァージョン違いという長尺の演奏ばかりであり、必然的にインストゥルメンタル・パートを重視したジャズ・ロック色の強い内容になっている。演奏力の向上には目を見張るものがある。後者は最も GONG らしい内容の最初の録音と言えよう。スペイシーで、昂揚感と興奮を煽りながらも、決して深刻にならず、優しさと遊び心に満ちている。非常に充実したアルバムだ。

1973年5月、イギリスの新興レーベル、Virgin レコードより発表された「Flying Teapot」は3つの意味で重要なアルバムだ。まず、初めて彼らが本格的にイギリスに紹介されたということ。既に1971年冬にはイギリス・ツアーを行っており、またピプ・パイルやローリー・アラン、チャールズ・ヘイワード、或いはケヴィン・エアーズといった多くのカンタベリーのミュージシャン達が入れ代わり立ち代わりバンドを去来していたが、これを機に彼らは本格的にフランスとイギリスの両国に股がった活動を展開して行

くことになる。そして、このアルバムが彼らの代表作である“Radio Gnome Invisible”3部作の第1作目であるということ。以後彼らは自らの特異な音楽性を活かし、童話的なSFファンタジーの世界を表現して行く。3部作の中では一番おとなしいアルバムであり（特にB面が散漫に聞こえる）、今一つ物足りない気もしないではないが、自らの表現に一つの指標を与えたことによる余裕に満ちた求心性、ある種の潔さが聴き取れる。そしてもうひとつ、このアルバムよりギタリストのスティーヴ・ヒレッジが加わったということ。KHANを率いていたヒレッジは、GONGに加わるとアレンのギター演奏及び彼の音楽性を見事に自家薬籠中の物とし、演奏面でのリーダーシップを握って行くことになる。まだこのアルバムでは頭角を現していないが、明らかにアレンよりも遥かに巧いギタリストであるヒレッジの起用はやがてアレンの思惑以上のテクニック指向をバンドにもたらして行く。

波に乗りかけていたバンドを1973年春、アレンとスミスは2カ月間離れてしまう。ドラッグと手を切るための期間だったらしい。残されたメンバー達はストラスブール音楽学校で打楽器を学んでいたピエール・モエルラン（d）らを迎えてPARAGONGを結成し、ケヴィン・エアーズの曲などを演奏してボスの帰りを待つことになる。

結局このメンバーの殆どが6月のGONG再開に参加したが、まさしくこのメンバー達がGONGの全盛期を築き上げた。特にモエルランとイギリス人ベーシスト、マイク・ハウレットのリズム・セクションが強力であり、スペイシーで昂揚感溢れる、それでいて軽妙で優しさに満ちたGONG本来のエキゾティックな音楽世界はそのままに、バンドはより高度な音楽性を打ち出した一流のジャズ・ロック・グループへと成長を遂げてしまった。

1973年11月に発表された「Angel's Egg」、1974年11月に発表された「You」はそれぞれ“Radio Gnome Invisible”3部作の2作目と3作目に当たるが、「Flying Teapot」に比べても一段と演奏力がアップしており、また、メンバー各人の個性が作曲にも反映され、聴き応えのあるものになっている。飽くまでもアレンとスミスが全体のサウンドをコントロールしているのだが、それにもかかわらずメンバー各人の音楽性が無理なく盛り込まれ、バランスよく一つに纏め上げられている。この時期の彼らがいかに充実していたかはライヴを聴くともっとよく判る。1977年に発表された2枚組ライヴ・アルバム「Live etc.」には1973年8月、9月、1974年1月に行われた彼らの演奏が収められている。また、4グループによるオムニバス・ライヴ・アルバム「Greasy Truckers Live At Dingwalls Dance Hall」には1973年6月、10月の演奏が収められている。また、今年になって当時の未発表ライヴが2枚も発売されている。いずれも見事な熱演であり、これらを聴いた後ではスタジオ盤に物足りなさを覚えてしまう程だ。基本的に彼らはライヴ・バンドだったと言っていい。緻密さと奔放さを兼ね備えた彼らのプレイは本来ライヴでこそ最も効果的に実力を発揮される筈だからだ。

1975年4月、いよいよ絶頂期を迎えたバンドをアレンとスミスは抜けてしまう。スミスはふたりの息子の面倒を見るためだったようだが、アレンはどうやら肉体的精神的にバンドに付いて行けなくなったらしい。メンバー達が巧くなり過ぎたといった発言も残している。



とうとうリーダー達に逃げられてしまったGONGはこれ以降複雑な展開をして行くことになる。

あまりにも個性的な音楽性を身に付けたメンバー達は、創始者がいなくなったからといってすぐに音楽性を変えることも出来ず、取り敢えず音楽的なリーダーシップをスティーヴ・ヒレッジに一任し、ちょうど4月に初のソロ・アルバム「Fish Rising」を発表したばかりのヒレッジのバック・バンドを兼ねたようなライヴ活動を続ける。ヒレッジは最も正統的なGONGサウンドの継承者であり、このアルバムには当時のGONGのメンバーのほぼ全員が参加。デイヴ・ステュワート（kb）とリンゼイ・クーパー（bsn）も参加しており、非常に充実した内容の傑作が出来上がった。複雑さと判り易さ、変拍子とノリのよさ、繊細さと豪快さ、主役としてのギター演奏と見事なバンド・アンサンブルが両立した抜群のバランス感覚を持った作品だ。

若干のメンバー・チェンジを経てGONGは1976年2月、アルバム「Shamal」を発表するが、これまでに比べると妙に落着き払った心地好いサウンドになっており、最早自分がいる必要はないと感じたヒレッジは1975年12月、バンドを去ってしまう。ヒレッジは既に自らの音楽の展開に自信を持っていたのだろう。自分のバンドを率いて次々と素晴らしいアルバムを作って行くことになる。

残されたGONGを今度はピエール・モエルランが率いて行った。そもそもモエルランはあまりGONGというバンドを居心地よく思っていなかったのではないかと思われる節が見られ、実際何度となくバンドを離れては戻って来ている。そんな彼がGONGを率いて行くのは彼自身も抵抗があったようだ。バンド名を変えることも考えたらしい。新たにギタリスト、アラン・ホールズワースを迎えたGONGは、向かう所敵なしのテクニック集団となり、以後フュージョン街道をまっしぐらに突き進んで行くことになる。と言っても、ホールズワースは「Gazeuse!」一作で抜け、その後はアルバム毎にミック・テイラーや、マイク・オールドフィールド、ダリル・ウェイ、ディディエ・ロックウッドといった一流のミュージシャンをゲストに迎え、バンド自身はパーカッションを全面的にフィーチュアした非常にユニークなサウンドを探求して行く。1979年からはバンド名をPIERRE MOERLEN'S GONGに改めており、かつてのGONGとは違うバンドなのだということを明確にしている。モエルランはマイク・オールドフィールドやスウェーデンのグループ、TRIBUTE等との対外的な活動も盛んだが、その所為か一時自分のバンドの方の音沙汰がなくなっていた。しかし、1989年、久しぶりのアルバム「Second Wind」が発表され、彼らの健在ぶりが明らかになった。



一方、1975年4月にGONGを離れたデヴィッド・アレンとジリ・スミスは再びスペインのマジョルカ島、デヤに落ち着き、地元のEUTERPEというバンドと手作業による録音を行う。こうして出来上がった1976年5月に発表されたアレンのソロ・アルバム「Good Morning」はGONGに比べるとずっとアコースティックで、




←スティーヴ・ヒレッジ
↓ピエール・モエルラン

フォーク的なサウンドを打ち出しており、非常に優しさに満ちた美しい音楽が胸を打つ。とても4チャンネル・レコーディングとは思えない深みのある音も特筆していい。続いて発表された「Now Is The Happiest Time Of Your Life」も既に解散してしまったEUTERPEの元メンバーを中心としたスペインのミュージシャン達を迎えての録音であり、やはり同傾向の素晴らしい作品だ。

　こうした内省的なアルバムを作りながらも、アレンは次なる飛躍の機を窺っていた。1977年5月28日、パリに於いてファン達の企画で途轍もないコンサートが開催された。全盛期のGONGを1日だけ再結成させ、しかもGONGの派生バンドも一同に会して演奏を披露するというもので、スティーヴ・ヒレッジのバンドやSTRONTIUM 90なども参加して延々12時間に渡って様々なGONGが演奏を繰り広げた。この時の再結成バンドの演奏は2枚組ライヴ・アルバム「Gong Est Mort」として発表されている。このコンサートをきっかけにアレンは再びバンド活動を再開することにする。偶々知り合ったパンク・バンド、HERE AND NOWにジリ・スミスともども加わって、PLANET GONGとしてイギリス及びフランスでライヴ活動を行う。彼らのまさにパンク版GONGサウンドはライヴ・アルバム「Floating Anarchy 1977」で聴くことができる。

　翌年アレンは10年連れ添った伴侶、ジリ・スミスと別れ、アメリカに渡る。この混乱期にソロ・アルバム「N'existepas！」が録音されている。これはクリス・カトラー（d）やジョージ・ビショップ（sax, clr）、ペプシ・ミラン（g）らを迎えて制作されており、様々な音楽が渾然一体となって他に例のない均衡を生み出している。過渡期の作品ではあるが、個人的には最も気に入っているアルバムだ。

　アメリカに渡ったアレンはZU BAND の連中と組んでNEW YORK GONGを結成する。これはPLANET GONGのニューヨーク版といった性格のバンドであり、1980年にはアルバム「About Time」を発表する。NEW YORK GONGはある意味で極めて重要な役割を果たした。それまで潜在していたアメリカのアンダーグラウンドなカンタベリー・ミュージック信奉者達を目醒めさせたのだ。期せずして元HENRY COWの連中も同じシーンに触媒として働きかけており、ここから生まれた新しいムーヴメントは以後信じられない程の広がりを見せて行くことになる。このNEW YORK GONGがMATERIALへと成長を遂げて行ったことを指摘するだけでも充分にその意味が判るだろう。

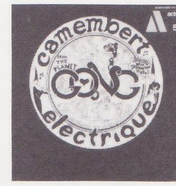
　NEW YORK GONGのアルバムに用いた録音のリズム・トラックだけを取り出し、それを再編集したテープをバックに、アレンは〈The Divided Alien Playbax Performances〉のタイトルでアメリカ及びカナダに於いて28回に及ぶ一連のソロ・コンサートを開く。これは音楽だけではなく、ヴィデオ映像も使った総合芸術としてのパフォーマンスだったらしい。その音楽部分のスタジオ・レコーディングが「Divided Alien Playbax 80」として発表されている。なるほど、一見陳腐なアイディアではあるが、殆ど原型をとどめぬ再構築の効果は予想以上のものだと言えよう。

　1981年、アレンは21年振りにオーストラリアへ帰国する。翌年には殆どひとりで多重録音して作り上げた「The Death Of Rock And Other Entrances」、パフォーマンス・アーティスト、デヴィッド・トリーとの共作「Ex；Stop/Don't」を発表。1983年にはアメリカ時代に行ったレコーディングをもとにしたと思われるミニ・アルバム「Alien In New York」を発表した後、なんと音楽を廃業してしまう。以後ニューサウスウェールズ州北部の森林地帯で隠遁生活を送りながら、音楽治療の研究などを行っていたと言う。

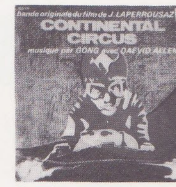
　1978年、アレンと別れたジリ・スミスの方は、まずアレンのプロデュースで初のソロ・アルバム「Mother」を発表しているが、これはスペインで録音したものを中心に、1972年頃の録音も取り混ぜて構成されているようだ。このアルバムのプロモーションのためスミスは新たにMOTHER GONGを結成し、元HAWKWINDのニック・ターナーが元GONGのミュージシャン達と結成したSPHYNXと合同でイギリス・ツアーを行った。当初MOTHER GONGはセッション的性格が強く、メンバーが殆ど固定してお



Magic Brother
'70



Camembert Electrique
'71



Continental Circus
'72



Flying Teapot
'73



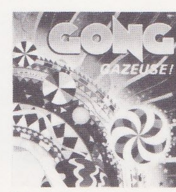
Angel Egg
'73



You
'74



Shamal
'76



Gazeuse
'77



Live Etc.
'77



Gong Est Mort
'77



Expresso II
'78



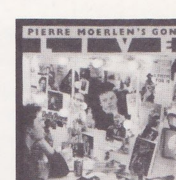
Live in Paris–Bataclan '73
'89



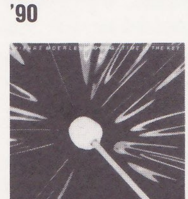
Live At Sheffield 1974
'90



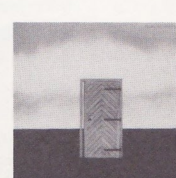
Downwind
'79



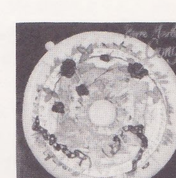
Live
'79



Time Is The Key
'79



Leave it Open
'81



Second Wind
'88



らず、HERE AND NOW のメンバーや、クリス・カトラー、元 GURU GURU のアックス・ゲンリッヒ、あるいはヒュー・ホッパー、ローリー・アラン、ピプ・パイル等々のミュージシャン達が参加した。また、デヴィッド・アレンもツアーによっては参加していた。1978年10月には、NEW YORK GONG と並んで NEW YORK MOTHER GONG というバンドもステージに立ったらしい。この年の暮には SPHYNX のハリー・ウィリアムソンが加わり、以後 MOTHER GONG はジリ・スミスとウィリアムソンの双頭バンドの性格を帯びて行く。ニック・ターナーやデイヴ・アンダーソンまで巻き込んで制作された彼らのファースト・アルバム「Fairy Tales」は1980年に発表されたが、これは非常にアコースティックなフォーク色の強い内容であり、GONG ファミリーの作品としては異質な印象も受ける。アレンの手が一切加わっていないスミスの音楽がここで初めて披露された。このアルバムのプロモーションで今度はアメリカ・ツアーが行われた。

1980年スミスはウィリアムソンと結婚している。そしてこの年より MOTHER GONG は新たな局面を見せて行く。レギュラー・バンドとしてメンバーを固定し、"Robot Woman" の3部作にとりかかったのだ。これはSF仕立てのコミカルなドラマだが、"Radio Gnome Invisible" とは大分趣が異なり、ファンタジー色はまったくない。コミカルではあるが、平和やヒューマニズム、反軍事力、反性差別といった非常にシリアスなテーマを採り上げた極めてメッセージ色の濃いストーリーだ。こういったメッセージ性は1980年代後半に入って再び市民権を得るに至っていることから考えれば、あながち古臭いとも言えない訳だが、表現方法としてはやはりあまり洗練されているとは言えまい。1982年、「Robot Woman」、「Robot Woman 2」の2枚のアルバムを発表し、スミスとウィリアムソンはふたりでオーストラリアへ移住してしまう。

オーストラリアへの移住は迫り来る核戦争への恐怖が理由だったと言う。メルボルンでウィリアムソンはレコーディング・プロデューサー兼エンジニアとして活動を始め、今もオーストラリアの民族音楽や地元のバンド、あるいは吟遊詩人達の録音を数多く紹介している。そうした中にはジリ・スミスやデヴィッド・アレンのゲスト参加したものも含まれている。

これらの活動はあまりにもローカルなものだったので、彼らの活動は実質的には地下に潜行してしまった。音沙汰のないまま月日を重ねていたのだが、1989年、突然様相が一変する。GONG という名前が使えなかったのか、まず「The Mystery And The History Of The Planet Gong」という2枚組の貴重な未発表録音集が発表されたのに続いて、既にバンド形態ではなくなっているがアレンまでゲスト参加している MOTHER GONGの「Robot Woman 3」、アレンとスミス、ウィリアムソンが共同で作り上げた「The Owl And The Tree」が発表されたのだ。アレンは1988年にイギリスに戻り、ワンダナ・ブルースという女性ヴォーカリスト兼ハーモニウム奏者と知り合い、共同生活を始めていた。従ってこれらの活動はイギリスとオーストラリアの両国に股がってのものということになる。その上、極め付けは GONG MAISON なるバンドの登場だ。これはアレンを中心に、ハリー・ウィリアムソン、ディディエ・マレエブ、グラハム・クラーク（写真から見るとグラハム・スミスの変名の可能性がある)、それにワンダナ・ブルースといった連中が集まったバンドであり、1989年夏の録音が「Gongmaison」のタイトルで発表された。このバンドはライヴ活動も行っている様子であり、これからの展開が非常に気になる。ちょうど「Camenbert Electrique」の頃の GONG に通ずるバンドとしてのポテンシャルを持っているので、アレンの意欲次第では相当の活躍が期待できる。

煩雑さを避けるため文中ではあまり触れなかったが、スティーヴ・ヒレッジ、マイク・ハウレット、ディディエ・マレエブ、ティム・ブレイクらのその後の活躍もそれぞれ特筆すべきものがある。それらも全部含めた上で GONG ファミリーの全体像が見えて来る。

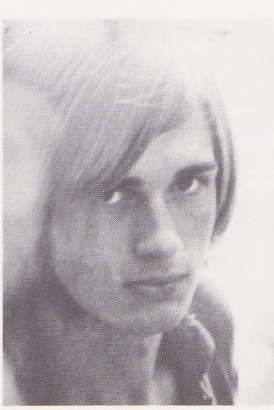
このように GONG の周辺だけでファミリー・トゥリーが形成される程その人脈は広がりと共通の音楽性を兼ね備えているが、と同時に GONG ファミリー自体が人脈的にも音楽的にもカンタベリー・ファミリーに帰属している。しかし、GONG をそうした面だけで捉えるのはやはり間違いであり、何と言ってもある時期フランスのプログレッシヴ・ロック・シーンの一つの中枢であったという厳然たる事実があるし、また、HAWKWIND との奇妙な繋がりや、マイク・オールドフィールドとの関係で見て行くと違った側面が見えて来る。このバンドを正確に把握しようとするなら、そういった多角的な視野が欠かせない。

この魔訶不思議な音楽集団を語るには、まだまだこれだけのスペイスではどうにもならないのだということは確かだ。

4
MIKE OLDFIELD

マイク・オールドフィールドはおそらくカンタベリーで最も成功したミュージシャンだろう。勿論レディング生まれの彼は正確にはカンタベリーのミュージシャンという訳ではないが、彼の人脈的出自は明らかにカンタベリー系と言っていい。ただ音楽的特徴から考えると彼を純粋にカンタベリー・ミュージシャンということには疑問がある。所謂カンタベリー・ミュージックの特徴を殆ど持ち合わせていないからだ。彼の音楽がどこからか派生して来たのだとすれば、それはブリティッシュ・トラッド・フォークを置いてほかにあるまい。取り敢えず彼の音楽はそれ自体オリジナルなものだと考えることから始めるべきだろう。イギリスのロックを語る上で彼の存在は非常に大きい。しかしカンタベリー・ミュージックを語る時、彼の音楽をそうむやみに大きく取り上げる訳にも行かない。一応そういったバランスに立って紹介せざるを得ないので、少々不満の残る方もいるだろうが、ご勘弁願いたい。

オールドフィールドは5歳年上の姉、サリー・オールドフィールドと14歳の時（1967年）SALLYANGIE というフォーク・デュオを組む。その後短期間自分のバンド BAREFEET を率いた後、1969年に KEVIN AYERS AND THE WHOLE WORLD にベーシストとして加わる。ここからカンタベリー・ミュージック・シーンとの付き合いが始まる訳だが、このバンドは正直言ってあまりカンタベリー色の強いバンドではなく、そのことが逆に彼のオリジナリティーを助長する結果となったに違いない。このバンドはそれ以上に、デヴィッド・ベッドフォードとの出会いに意味がある。ベッドフォードはバンドのキーボード奏者だったが、現代音楽の作曲家としても知られ、1971年バンドを去ったオールドフィールドはベッドフォードに作曲の手解きを受けることになる。



ひとりスタジオに籠もってオールドフィールドは多重録音を続け、やがてそれが新興レーベル、Virgin からの第1弾として発表される。この処女作「Tubular Bells」は1973年5月に発表され、一躍大評判を得る。現在までに800万枚を超えるセールスを上げ、この1枚で Virgin は大企業へと成長して行くことになる。AB面合わせて1曲というこのアルバムがそれ程売れた理由は色々あるだろう。しかし、煎じ詰めてしまえばやはりまだ20歳になったばかりのオールドフィールドの震えるように繊細な感性に聴く者皆が感銘を覚えたということに尽きるだろう。変拍子を使いながらも非常に判り易く美しいメロディー。丁寧に自然に盛り上がって行く構成。そしてあの独特の神経質なギター・サウンド。こんなロックもあるのだということを誰もが吃驚しながら認めた。テクニックや複雑さに向かって行ったプログレッシヴ・ロックとの違いも見逃してはならない。難しいことなど何も言ってないのだ。ただ音楽だけですべてなのだ。純粋音楽として蒸留されたロック。まったく夾雑物がないのかと言えばそうではないにせよ、これ程純度の高い音楽は殆ど例がなかったと言っていい。

続いて発表された「Hergest Ridge」、「Ommadawn」の2作もまったく同じ方法論による音楽だ。

若くして突然圧倒的な注目を浴びることになったオールドフィールドは自閉症を起こしたらしい。殆どスタジオに籠もりっきりの生活を送っていた人間が世界的な評価を得たのだから、ますます自分の殻に閉じ籠もりたくなるのも無理からぬことだ。モラトリアム期に入り込んだ彼は、1976年、これまでに発表した3枚のアルバム（一部リミックスしてある）と未発表曲を含むオニムバス盤1枚からなる4枚組セット「Boxed」を出した後、人前から姿を消す。



空白期間を経て、1978年、2枚組アルバム「Incantations」でオールドフィールドは活動を再開した。この2枚組で4楽章からなる1曲という大作は、純粋音楽としての頂点に立つ最高傑作となった。方法論としてはこれまでの作品を踏襲しているにもかかわらず、一聴して受ける印象は甚だしく異なる。それはまず力強いリズム、そして弦楽オーケストラやフルート、コーラスの大胆な導入に起因していよう。おそらくこの曲の録音に際しては非常に大掛りなスコアが用意された筈だ。音楽的構造は決して難解ではないが、徹底して譜面に書き込まなければ生まれ得ない音楽だ。勿論ミュージシャンはしゃかりきになって演奏しなければならない（クラシック・ミュージシャンにとっては楽勝なのかも知れないが）。ロック・シーンに於いてこれ程の曲が生まれたというのは今でも驚きに値する。クラシックとロックの融合という試みは早くから行われていたが、これ程の完成度を持った作品は他に例がない。両者が不可分に融合しており、まったく新しい音楽を創造していると言ってもいい。ミニマル・ミュージックからの影響も濃く、もしかするとミニマル・ミュージックの傑作に伍した作品だと言っても言い過ぎではないかも知れない。

この作品を作り上げたオールドフィールドは自分の中でふっ切れたものがあったらしい。内向的な性格が外向性へと転じ、音楽的にも閉鎖性を取り払い、極端なことに、1979年3月、'Guilty'というディスコ・シングルを発表し、ヒットさせてしまう。

同年8月に発表された2枚組ライヴ・アルバム「Exposed」には'Tubular Bells'と'Incantations'、それに'Guilty'が収められているが、これは3月から4月にかけて行われた総勢50名を超す大編成のバンドによるヨーロッパ・ツアーの録音であり、なんと言っても'Incantations'の演奏が圧巻だ。こんな曲をライヴで演奏しようというのが唯事ではないが、それを平気でやってのけるミュージシャン達の実力には脱帽せざるを得ない。このツアーでオールドフィールドは多額の負債を負ったというが、これをきっかけに彼はバンド形態の演奏に傾倒して行くことになる。

最早怖いものなどなくなり、手始めに作ったのが「Platinum」だ。A面の組曲'Platinum'は'Incantations'のディスコ・ヴァージョンといった内容であり、音楽構造さえ押さえておけばどんな見かけの音楽にも挑戦してみせようという意欲が溢れている。B面では短い曲を集め、曲によっては思い切りポップなセンスを打ち出している。これまでに比べるとエレクトロニクスを全面的に駆使しているのも新しい特徴だ。

「QE 2」ではプロデューサーのデヴィッド・ヘンツェルが演奏にも加わり、積極的に関与している。短い曲ばかりだが、前作よりもトラッド色を取り戻しており、いかにも彼らしいポップ・ソング集になっている。このアルバムに参加したミュージシャン達を中心に新しくバンドを結成し、ライヴ活動を展開して行くことになる。次作「Five Miles Out」はこのバンドによる録音だ。A面の大曲'Taurus II'は久々に本領発揮の多重録音による秀作だ。B面の小品群からはFamily Ma-

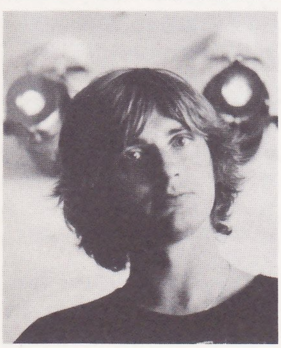
n'というヒット曲が生まれている。1983年に発表された「Crisis」も前作同様の構成のアルバムだ。このアルバムからは'Moonlight Shadow'というヒット曲が生まれている。続く「Discovery」は短い曲ばかりで、コンピューターを駆使して殆どひとりで演奏している。

1984年暮れには、デヴィッド・パットナム制作の映画「The Killing Field」のサウンドトラック盤を発表。ここではさすがにポップ化路線を離れ、オーケストラと合唱団を大々的にフィーチュアし、また、コンピューターでの音楽作りも大胆に行っている。映画の内容から必然的に要請されたのだろう、非常にシリアスな印象が強い。マイク・オールドフィールドの作品としては極めて珍しいタイプの曲が並んでいる。

この時期を境に彼はバンド活動を休止してしまったらしい。1985年に2枚組の貴重なベスト・アルバム「The Complete」を発表した後暫く沈黙する(ベスト盤はほかにも何種類か出ている)。1987年、アルバム「Islands」を発表し、健在振りを明らかにする。このアルバムで特筆すべきはケヴィン・エアーズの参加だろう。まさかふたりの再共演があるとは一体誰が想像していただろうか。

1989年には「Earth Moving」を発表したが、ここでは徹底してポップなナンバーばかりが集められており、これまでの節度を踏み外した感がある。幾ら何でもここまで来ると印象が平凡過ぎてオールドフィールドが演奏する必然性が感じられない。彼が今後もこの路線を進んで行くとすると彼に対する一般の評価も変動を強いられそうだ。

しかし、さすがに彼も自分なりのバランス感覚を持っていたらしい。1990年に発表された新作「Amarok」では初心に返って、多重録音による大作作りに取り組んでいる。結果として行き過ぎたポップ化路線に歯止めがかかる形となったようだ。



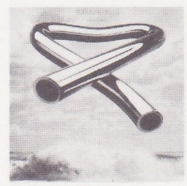
話題の新作「Amarok」を聴く

内田哲雄

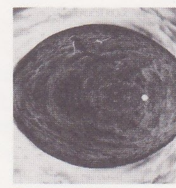
前作「Earth Moving」からわずか一年足らず、その舌の根も乾かぬうちにマイク・オールドフィールドが新作、「Amarok」を発表した。考えてみると'90年代に入って初の大物プログレッシヴ・アーティストの新作である。前作発表当時から、「次の作品はTubular Bells Part 3&4だぞ」と高らかに宣言していたのだが、はたしてその言葉通りこの作品、一曲のみで60分を越える超大作となっている。曲はECMのスティーヴ・ティベッツを思わせるイントロで幕を開け、何か'80年代の作品群とは毛色の違うものを感じさせる。オヤッと思って聴き進めていくうちに、いつの間にやら彼の創り出す音世界に呑み込まれてしまった。初期三部作のあの地平と'80年代に得たイディオム、更には他の様々な音楽要素が新しい時代へ向けて再加工されてゆく。早い話彼の歩んできた道のりの集大成的作品プラスアルファといえる。ヒネクレ者の彼らしく、時折聴き手をはぐらかすようなトリッキィなアレンジを施してはいるが、牧歌的でナイーヴなフレーズは本当に久々でノスタルジックな感動を呼び起こしてくれる。特に圧巻は40分すぎ、アフリカン・ドラムをバックに広がりのある女性コーラス、テンションの高いギターがからむ。まさにあの「Ommadawn」の再来、あの地平がまた我々の前に姿を現したのだ。この作品を聴くと、彼の「Tubular Bells宣言」は単なるハッタリではなかったことを納得せざるを得ない。脱帽である。

驚きはこれだけではない。ジャケット・スリーヴに目をやると使用楽器が2列にわたってズラリとリスト・アップされている(フェアライトかシンクラヴィアって時代にコレだもんな〜)。気を取り直して参加ミュージシャンのクレジットを見ると、元CHIEFTAINSのバグパイプ親父パディ・モロニー、幻の英フォーク・シンガー、ブリジット・セント・ジョン、更にはあの元MELLOW CANDLEのクローダ・シモンズとウイリアム・マーレイの名が見える。アフリカ太鼓は勿論ジャブーラ。そう、いずれも初期三部作の参加経験者ばかりである(もう一人のメンバー、ジャネット・ブラウンについては現時点ではわからず。ゴメン)。加えてエンジニア兼プロデューサーにはあのトム・ニューマンを起用する徹底ぶり。「Tubular Bells宣言」は想像をはるかに上回る重大な意味を持っていたのだ。

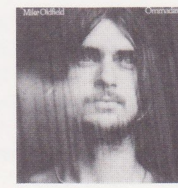
かくしてニュー・エイジに限りなく近づくだろうという安易な予測は見事にハズれてしまった。ポップ化したと言われて久しい'80年代の彼であるが、彼のポップ化は'70年代末の「呪文」から一足飛びで来た感じがするし、ポップな側面とそうでない部分を分けて考えていた節もある。YES や GENESIS のように徐々に自分の音を熟成(人によっては腐敗という)して出来上がったものとはちょいと違う。だから前作で片方の側面であるポップな部分を強調したからといって別にどうということはない。再び一足跳びして昔に立ち戻り、本作のような一大傑作を作ることなど、彼にとっては朝メシ前のアフター・ディナーだったろう。この分だとライヴではデヴィッド・ベッドフォードやピエール・モエルランが帯同するかもしれない。ともかく本作は'90年代のシーンを占う重要な作品となることは間違いない。なお、お聴きの際は裏の注意書きをよく読み、医者にかからぬよう十分健康に気をつけてご賞味下さいませ。(内田)



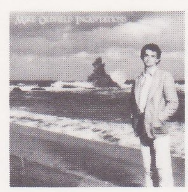
Tubular Bells
'73



Hargest Ridge
'74



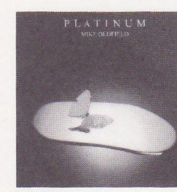
Ommadawn
'75



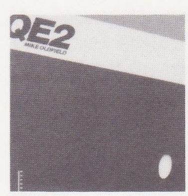
Incantations
'78



Exposed
'79



Platinum
'79



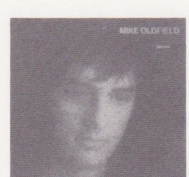
QE 2
'80



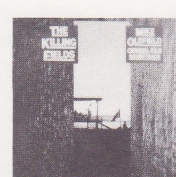
Five Miles Out
'82



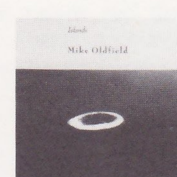
Crisis
'83



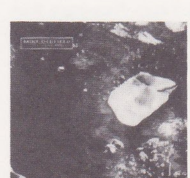
Discovery
'84



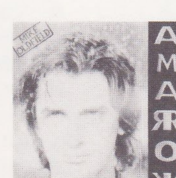
The Killing Fields
'84



Islands
'87



Earthmoving
'89



Amarok
'90

5

HENRY COW ART BEARS

HENRY COW の音楽は、ある意味でカンタベリー・ミュージックの異端であるが、それでいてまさしく正統的なカンタベリー・ミュージックでもある。これは、彼らがカンタベリー・ミュージックの最も複雑で緻密な作曲法と完全なフリー・インプロヴィゼイションの両方を自らの音楽の方法論として採用したからだ。その両者の徹底振りは他の追従を許さず、つくづく意志の力の強いバンドだと言える。また、彼らの打ち出した政治性も彼らの特異性の一端ではある。しかし、これについてはあまり強調し過ぎるのもどうかという気がする。確かに非常に重要なファクターには違いないが、彼らの政治性を語っても彼らの音楽を語ったことにはならない、ということをくれぐれも忘れないで欲しい。まず聞こえるままの彼らの音楽を聴き取らないと、彼らを大きく誤解しかねないということを憂慮しているのだ。

1968年5月、ROGER BACON というダンス・バンドで知り合ったケンブリッジ大学の学生、フレッド・フリスとティム・ホジキンソンのふたりが中心となってHENRY COW が結成された。当時彼らはスタンダード・ナンバーを演奏していたというが、8月にはPINK FLOYD とのジョイント・コンサートでデビュウする。やがてマルチ・プレイヤーのアンディー・パウエルが加入したことにより、今の彼らの音楽性が決定したという。つまり、パウエルが、惚れ込んでいたSOFT MACHINE の音楽の魅力をふたりにも教え込んだのだ。パウエルはSOFT MACHINE のメンバーと親交があり、一緒に演奏したこともあったらしい。それまでサックスとクラリネットを担当していたホジキンソンにむりやりオルガンを弾かせたというから、彼らが感化されたのは SOFT MACHINE のセカンド・アルバムあたりだったようだ。

しかし、パウエルは半年弱しか在籍せず、1969年10月、ジョン・グリーヴスが加入。だがドラマーがなかなか固定せず、ライヴ活動も中断してしまう。1971年5月、マーティン・ディッチャムが加わり、漸くライヴ活動が再開する。

1971年9月、ロバート・ワイアットに影響を受けたというドラマー、クリス・カトラーが加わったことで、遂に HENRY COW は強力なラインナップが顔を揃えることになる。カトラーは当時デイヴ・ステュワートと組んで、EGG や KHAN といったバンド、ミュージシャンの集合体である Ottawa Music Company を組織しており、HENRY COW もそれに加わった。こういった活動がカンタベリーのミュージシャン達に同胞意識を植え付け、彼らが大きなファミリーへと発展して行くきっかけになったことは間違いない。



1972年3月、Ottawa Music Company で知り合ったサックス奏者、ジェフ・リーが加わる。10月よりロンドンで〈Cabaret Voltaire〉という一連のコンサートを企画し、KHAN、ARCHIBALD、ケヴィン・エアーズ、レディー・ジューン、それに元EGG のメンバーなどが参加する。1973年3月には〈The Explorers Club〉なる一連のコンサートを企画し、ロル・コックスヒル、デレク・ベイリー、ロン・ギーシン、アイヴァー・カトラー、モント・キャンベル、それに THE SCRATCH ORCHESTRA やデヴィッド・トゥープらが参加する。7月にはマイク・オールドフィールドの初めてのコンサートに、バック・バンドとしてケヴィン・エアーズやデヴィッド・ベッドフォード、ミック・テイラー、ピート・タウンゼント、スティーヴ・ヒレッジらとともに出演。そして8月、いよいよファースト・アルバム「Legend」を新興レーベル、Virgin より発表する。これはこの年、5～6月に録音されたもので、既に彼らは信じられない程のテクニックを身に付け、途轍もなく複雑で緻密な作曲をこともなげに演奏しており、しかも各メンバーの特徴あるプレイが見事に絡み合って彼らならではのアンサンブルを築き上げている。ここに展開されるのは殆ど究極的なカンタベリー・ミュージックだ。カンタベリー・ミュージックの持つ特徴がもうこれ以上はないという程極められている。しかもそれに加えて、現代音楽及びフリー・ミュージックの強い影響も表れている。あまりにも凝縮された内容に初めて聴いた者は面食らうかも知れない。今聴き直してもまったく古くないし、新しい発見に驚くこともある。これ程までに高度な音楽をいきなり作り上げてしまったのだから、彼らが初めから並大抵のバンドではなかったことは改めて強調するまでもない。

1973年9～10月、ドイツのバンド、FAUST とともにイギリス・ツアーを行う。10月21日のレインボウ・シアターでの最終公演にはマーク・チャリグ、フィル・ミントン、ロル・コックスヒル、ゲイリー・ウィンド、ジミー・ヘイスティングス、エルトン・ディーン、マイク・ウェストブルック、ニック・エヴァンス、ピーター・ブレグヴァッド、ジェレミー・ベインズ等13人の錚々たる管楽器奏者が参加してシアターピースを演奏した。

11月4日、Greasy Truckers の企画によるコンサートに参加し、この時の模様がオムニバム・ライヴ・アルバム「Live At Dingwalls Dance Hall」に収録されているが、ファースト・アルバムとは打って変わって、これでも

か、とばかりの完璧なフリー・インプロヴィゼイションが繰り広げられている。プログレッシヴ・ロック・ファンの度胆を抜こうとする戦略めいた意志も感じられるが、それまでフリー・ジャズの専売特許だったフリー・インプロヴィゼイションをロックのフィールドに持ち込んだ意味は非常に大きかったと言えよう。勿論こういった試みは必ずしも彼らが最初だった訳ではない。しかし、ここまでやってしまったロック・バンドは彼らが初めてだった。

オランダ・ツアーの終わった12月にはジェフ・リーがバンドを去り、RADAR FAVOURITES を結成する。交代で加わったのが、元 COMUS の女性管楽器奏者、リンゼイ・クーパーだった。2～3月、早速セカンド・アルバムの制作に入り、アメリカのミュージシャン、キャプテン・ビーフハートとのヨーロッパ・ツアーを開始したばかりの5月、「Unrest」が発表される。ファースト・アルバムでは非常に入り組んでいた複雑な構成要素が、ここでは整然と整理され、明快に展開して行く。A面の3曲は相変わらず変拍子だらけの緻密な作曲作品だ。但し前作に比べると音数が多少減っており、その分聴き易い印象がある。'Ruins'は特に名曲として知られているナンバーであり、リンゼイ・クーパーの参加により、より現代音楽的な表現力を増したバンドの力量が好ましい形で発揮されている。B面の小品群は、室内楽的小品も含んでいるが、主


●SLAPP HAPPY

にフリー・インプロヴィゼイションが繰り広げられている。とは言っても、ここで繰り広げられるインプロヴィゼイションは明らかに何らかの譜面で統御されている。ここでも現代音楽の影響は顕著であり、それは作曲フォーマットにまで及んでいる。一体どういう譜面が用意されたのか、個人的には強い関心を覚える所だ。ロック、現代音楽、クラシック、ジャズのそれぞれが自己主張し合うことなく見事に統一の場を生み出し、静かな興奮を呼ぶ。実に深みのある、それでいて聴き終わった後にえも言われぬ爽やかな感動を残すアルバムだ。

リンゼイ・クーパーがバンドに寄与したものは非常に大きかったにもかかわらず、1974年9月、彼女はバンドを去ってしまう。残された4人でオランダ・ツアーを行った後、彼らはドイツ出身の無国籍バンド、SLAPP HAPPY と合体してしまう。SLAPP HAPPY は、イギリス人、アンソニー・ムーア (kb, g, vo) と、アメリカ人、ピーター・ブレグヴァッド (g, vo)、それにムーアの奥さんでドイツ人のダグマー・クラウゼ (vo, pf) の3人によって結成されたトリオで、非常に実験的な意欲に溢れていたものの、実際にはポップなフォーク・ミュージックを手懸け、ドイツではFAUST と深い交流を行なっていた。3人だけでは実際の活動が行なえないという事情もあって、Virgin と契約しイギリスに渡った彼らは HENRY COW と行動を共にすることにする。他方、HENRY COW は歌を欲していた。これまで彼らが採用していた極めて断片的な合唱では補い切れない歌唱の必要性を感じていた彼らは、また、奇妙なフォーク・ミュージックを奏でる SLAPP HAPPY との共同作業にこれまでの自分達の音楽にはないものを見出し、興味を覚えたのだろう。双方のニーズが合致したため、ふたつのバンドが事実上合体してしまうという、非常に珍しい形態へと移行する。

11月、SLAPP HAPPY の主導でアルバム「Desperate Straights」をレコーディング。翌1975年2月に発表されたこのアルバムは2バンドの連名ではあるが、実質的には SLAPP HAPPY の作品であり、HENRY COW が全面的にバック・アップしている。変拍子も多く尋常ではないが、ポップなフォーク・ミュージックという路線はそのままだ（但し、最後の1曲'Caucasian Lullaby'だけは現代音楽と言っていい）。

1975年2～3月、今度は HENRY COW の主導で「In Praise Of Learning」がレコーディングされ、5月に発表される。但し、最初の1曲'War'だけは1974年11月の録音であり、内容的に見ても本来「Desperate Straights」に収められるべきナンバーだ。残り4曲の内短い2曲が完全なフリー・インプロヴィゼイションであり、後の2曲が緻密な構成の作曲作品となっている。何と言っても聴き物はこの作曲された2曲だ。ホジキンソンのペンになる16分にも及ぶ大曲'Living In The Heart Of The Beast'、フリスのペンになる'Beautiful As The Moon－Terrible As An Army With Banners'（作詞はカトラー）ともに名曲中の名曲だ。今までと比べて大きく変わったのはやはりリード・ヴォーカルの導入だ。どちらかと言えば相当に長い歌詞をダグマー・クラウゼが感動的に歌い上げて行く。これ程込み入った曲をこれだけ表情豊かに歌える歌手は彼女以外にいまい。このアルバムの存在価値は殆どこの2曲だけにある。言い換えればアルバム全体の構成が些か狂っている。1曲1曲を見れば決して悪くないのに、全体像のピントがずれて、散漫になっている。従ってアルバムとしては残念ながらあまり高く評価できないのが苦しい所だ。折角素晴らしい名曲が入っているのだから、もうちょっと構成を工夫して欲しかった。それにしても SLAPP HAPPY のダグマーを除くふたりの存在感のなさ、貢献度の少なさは、両バンドの共生関係を考える上で問題と言わざるを得まい。

1975年4月、HENRY COW と SLAPP HAPPY とのハネムーンは終局を迎える。真冬の体育館でリハーサルを重ねるが、コンサートを開く金がどうしても捻出できず、結局フルタイムの演奏グループとしてはいつまでたってもやって行けないのだという結論に達したのだ。アンソニー・ムーアがまずバンドを去り、ダグマーは勿論 HENRY COW に加入。ピーター・ブレグヴァッドは9カ月間だけバンドに残ろうとしたが、バンドから拒絶されてしまう。

既に「In Praise Of Learning」のレコーディングにも参加していたリンゼイ・クーパーも復帰して、半年に及ぶツアーに出る。4～5月、ロンドン、パリ、ローマで3回に渡りロバート・ワイアットが共演した。このツアーの模様の一部が1976年6月、2枚組ライヴ・アルバム「Concerts」として発表されている。AB面がアレンジ・ナンバー、CD面がインプロヴィゼイション・ナンバーと、きっち


●'73年のFAUST。ピーター・ブレグヴァッド（左から2番目）とウリ・トレプテ（ex. GURU GURU：右端）が加わっている。



●THE ORCHESTRA。マイク・ウェストブルック・バンドとHENRY COWの混成楽団。

り整理されているが、最大の聴き物は、A面に収められた、8月にBBCのスタジオで放送用に収録された組曲だ。部分的にオーヴァーダビングも加えられているので純粋なライヴ演奏ではないが、'Beautiful As The Moon−Terrible As An Army With Banners'を前後に分けて、その間にメドレーで何曲かを挿入するという構成で、またその選曲がファンには心憎いばかりに気配りされていて、何遍聴いても嬉しくなってしまう。インプロヴィゼイション・ナンバーも非常にポテンシャルの高いものが収められており、聴いていて飽きることがない。全体のバランスも考えた上で僕はこのアルバムを彼らの代表作だと認めるのに吝かではない。A面を除くと、おそらくワン・ポイント・ステレオ・マイクで採ったのだろう、その分臨場感があるとは言え、若干録音が弱いのが唯一の難点だが、素晴らしい演奏の前ではそれも大した問題ではないだろう。

1976年3月、ジョン・グリーヴスが脱退する。彼はピーター・ブレグヴァッドと共感するものが多かったらしく、ブレグヴァッドの後を追ってアメリカに渡ってしまう。バンドが（特にクリス・カトラーが）次第に強めていた左翼指向について行けなかったという事情もあったようだ。グリーヴスの脱退はバンドにとって相当大きな痛手だった筈だが、逆にフリス、ホジキンソン、カトラーの3人が結束を固め、バンドを強力に推進して行くきっかけともなった。後任のベーシストを求めて元GURU GURUのウリ・トレプテやスティーヴ・ベレスフォードと音合わせをするが巧く行かず、またダグマーも病気でハンブルグにいたため、取り敢えず4人でスカンジナヴィア・ツアーを行い、インプロヴィゼイションのみを演奏する。

後任のベーシストが決まったのは漸く6月になってのことだった。新加入のジョージー・ボーンはチェロ奏者でもあり、彼女の加入により、何とメンバーの半分が女性という、当時のロック界では非常に珍しい構成となった。そのままバンドはライヴ活動を続け、翌1977年初めにはイギリスの有名なジャズ・ミュージシャン、マイク・ウェストブルックのバンドと大同団結した大編成のジャズ・ロック・バンド、THE ORCKESTRA を結成。HENRY COW の活動と並行してライヴ活動を行い、1978年4月まで活動を続けた。この THE ORCKESTRA はやがて MIKE WESTBROOK ORCHESTRA へと発展していくことになる。

順調に活動を行なっていた最中の1977年3月、HENRY COW は Virgin レーベルより突然の契約打切りを通達されてしまう。確かに彼らの音楽はどちらかと言えばアンダーグラウンドなものであり、なかなか大衆の共感を得にくいものではあったが、そもそもそういったシーンをバック・アップしようということで創設された Virgin より見離された意味は大きく、それは勿論 Virgin の変節、パンク・ムーヴメントへの路線変更によるものだった訳だが、同時に HENRY COW をして、自らの音楽を守るのは自分達以外にないのだという認識を促させ、音楽産業への徹底的不信、何もかも自主運営していくほかないのだという不退転の決意を呼び起こさせることになった。

新作の制作を計画していた彼らは予定を変更せざるを得なくなる。1977年5月に開催された MFS（社会主義音楽）フェスティヴァルに、RED BALUNE、ロル・コックスヒル、ジェリー・フィッツジェラルド等と共に参加するなど、以前にも増してイデオロギーの主張を強く行うようになる。

普段より病気がちだったダグマーは1977年10月（正式には11月）、バンドを去るが、翌1978年1月に行なわれた新作の録音には参加する。この録音は結局 HENRY COW ではなく、新しいバンド、ART BEARS の1作目として発表されることになる（内容は後述）。

1978年2月のイギリス国内ツアーの最中、ジョージー・ボーンが脱退を表明するが、暫くはとどまることになる。

3月には彼らの企画でR. I. O. フェスティヴァルをロンドンで開催。これにはヨーロッパ各国より UNIVERS ZERO、STORMY SIX、ETRON FOU LE LOUBLAN、SAMLA MAMMAS MANNA といった当時無名の、しかし錚々たる連中が顔を揃え、これを機に、HENRY COW 及び彼らの経理を担当していたニック・ホッブスが中心となって Rock In Opposition（R. I. O.＝反体制派ロック）が組織されることになる。同時にクリス・カトラーとニック・ホッブスによって Recommended レコードが設立され、当初はディストリビューションのみを行ってR. I. O. の活動の一翼を担ったが、1980年には新たにレーベルとして発足し、世界各国のマイナーな、しかし優れたプログレッシヴ・ロック・バンドを世界的に紹介して大きな成果を上げた。

その後の長いヨーロッパ・ツアーの間、リンゼイ・クーパー、ジョージー・ボーンらがイギリスに帰国してしまうなど足並みが乱れ、一時 THE ORCKESTRA のメンバー、フィル・ミントン（tp, vo）が代理でステージに立った。イギリスに戻るとリンゼイ・クーパーだけを呼び戻し、ホジキンソン、フリス、カトラー、クーパーの4人でフランスとイタリアへ最後のツアーに出る（フリスは主にベースを担当）。公演にはヨッコ・セフェール（s-ax）、ヘンリー・カイザーIII（g）、アンヌ＝マリー・ロエロフ（tb, vln）が随時ゲスト参加した。アンヌ＝マリー・ロエロフには残りのイタリア・ツアー及びスイスでのレコーディングへの参加を依頼し、受け入れられる。1978年7月25日、ミラノでツアーが終了し、この日 HENRY COW は公式に解散を発表。

8月にスイスのサンライズ・スタジオで最終アルバム「Western Culture」の録音を行い、そのままバンドは解散してしまった。このアルバムは12月、自主レーベル Broadcast より発表された。A面にホジキンソン作曲の3曲、B面にクーパー作曲の4曲という構成で、最後のツアー用に作曲されたナンバーが収められている。全曲インストゥルメンタルで、非常に難しそうな演奏を完璧にこなしているのはいつもの通り。ただ、これまでのどの作品と比べても際立って硬質な音楽であり、作曲・演奏共に凄味を覚える程の完成度の高さを誇っている。HENRY COW の最高傑作はどのアルバムか、ファンによって大きく意見の分かれる問題だが、僕個人はこのアルバムだと考えている。ロック、ジャズ、クラシック、現代音楽の融合を目指していた彼らの最終到達点がこのアルバムだ。ここにはインプロヴィゼイションの入り込む隙間すらなく、ありとあらゆる計算を施された、音楽それ自体で行ける所まで行ってしまった音楽がある。

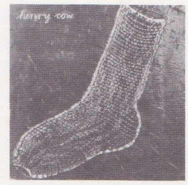
解散を決めた HENRY COW は、しかしそれを新しい活動の起点とした。少なくとも初めは HENRY COW そのものだった ART BEARS の結成が始まりだった。

1978年5月に自主レーベル Rē レ

HENRY COW



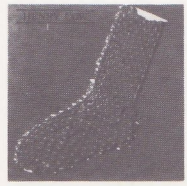
Legend '73



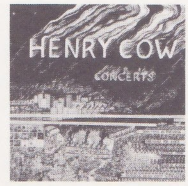
Unrest '74



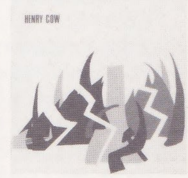
Desperate Straights '75



In Praise Of Learning '75



Concerts '76



Western Culture '78

コードより発表された彼らのファースト・アルバム「Hopes And Fears」はそもそもHENRY COWのアルバムとして制作されたにもかかわらず、これはHENRY COWとして発表すべき内容ではない、HENRY COWが目指していた方向性とは別の極性を持った音楽だという結論に達し、そのためにART BEARSが結成されることになる。ART BEARSはフレッド・フリス、クリス・カトラー、ダグマー・クラウゼの3人のバンドであり、何よりHENRY COWと違うのは、歌の重要性であり、思想性の表明だ。作曲法にもはっきりとした違いがある。暗い色調の曲が多いのは歌詞故の必然だが、基本的に歌曲だということからメロディ中心の音づくりがなされており、小難しい表現法を極力避けて、直截的な表現法を採用。HENRY COWより遥かにロック的な演奏を繰り広げている。フリスのヴァイオリンがトラッド・フォークの味を出しているも特徴だ。ちょっと聴いただけで耳に残る印象的なフレーズも多く、とにかくインパクトが強い。カトラーのドラムスとフリスのベースの実に刺激的な音色がまさに圧巻というほかない。1曲1曲が短く、曲数が多いのは、パンクやニューウェイヴの影響もありそうだ。

ファースト・アルバムには勿論HENRY COWのほかのメンバーも参加している訳だが、それでも殆どの演奏はフリスとカトラーのふたりによるものだ。第1曲目にベルトルト・ブレヒト作詞、ハンス・アイスラー作曲のナンバーを採り上げているように、彼らが目指しているのはブレヒト、アイスラー、クルト・ヴァイルの音楽の現代的展開だ。今世紀前半に個性的な活動を行った彼らの音楽に強い共感を覚えているのは、ART BEARSの音楽性にも明らかだ。

「Hopes And Fears」の歌詞を解く鍵はギリシア神話のミノタウロスに纏わる伝説だ。勿論神話に託して現実の中で苦しんでいる人々の抱えている問題が抉り出されている。難解ではあるが、訴える力に満ちた詩だ。ART BEARSはクリス・カトラーが詩人としての才能を花開かせたバンドと言うこともできる。

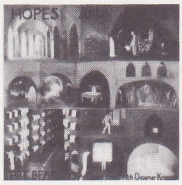
1978年10月に録音された彼らのセカンド・アルバム「Winter Songs」は翌年発表されたが、あらゆる意味で彼らの最高傑作であり、それどころかこの時代の音楽はこのアルバムを抜きには語れない程のメルクマール的作品だ。完全に3人だけの演奏は余計なものをこそげ落とし、これ以上はない鋭角的なものになっている。かつてKING CRIMSONが迫ったぎりぎりの音楽空間の先にある音楽であり、またパンク・ムーヴメントに対する彼らの回答でもある。詩も研ぎ澄まされ、言葉少なに多くを語る。カトラーのあまりにも繊細な感性によって抽出された象徴的情景。それは二重の車輪というイメージに基づく歴史観、時間論に導かれ、救済への手掛りを見出そうとする哲学的試行だ。



●ダグマー・クラウゼ

ART BEARSはこの作品を残したことでロック史上に燦然と輝いている。HENRY COWも素晴らしい成果を上げたバンドだったし、音楽的に高度なものを持っていたが、ART BEARSはそれ以上にロック・シーンの中で大きな位置を占め、この「Winter Songs」でカリズマティックな存在となった。それくらいこのアルバムはエポック・メイキングだった。何やかやと説明するより聴いて貰うのが一番なのだが、簡単に言うなら、知性に頼り過ぎて（必ずしもそれが事実ではないにしろ）パワーを失ってしまったプログレッシヴ・ロックと、反知性、粗暴で野蛮なイメージのパンク・ロックが、ここでは見事に統合され、止揚されて、前代未聞の目も眩む程ポテンシャルの高い、しかし知的でいたずらに複雑ではない、晦渋ではあっても直観的に理解可能なロック・ミュージックが生み出されている。彼らと似た次元で同じくエポック・メイキングだったピーター・ゲイブリエルのサード・アルバムが非常にオーヴァーグラウンドな評価を得たのに対し、彼らの評価はどうしてもアンダーグラウンドなものにならざるを得なかったが、それでもその大きさは決して劣るものではなかった。カンタベリー・ミュージック・シーンの中からこういう音楽が生まれて来たというのも、カンタベリー・ミュージックの本質を考える上で重要な鍵となるだろう。

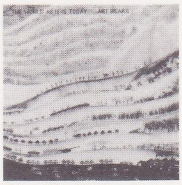
ART BEARS



Hopes & Fears
'78



Winter Songs
'79



The World As It Is Today
'81

1979年4～5月、ART BEARSはイタリア、フランス、ベルギー、チェコスロヴァキアで唯一のツアーを行った。このツアーにはピーター・ブレグヴァッド（b, g, vo）とマルク・オランデル（kb, sax, clr）が参加した。

1980年8～9月にはサード・アルバム「The World As It Is Today」を録音。同年発表された。前作同様一切を3人だけで演奏している。カトラーの詩はいよいよ研ぎ澄まされ、かつとても簡明になっている。11の視点でとらえた世界の現実。詩の内容がより具体性を強めた分、音楽もあまりむちゃなリズム、生活から遊離したリズムはなくなり、相変らず刺激的な演奏であるにもかかわらず、どことなくおとなしくなったように聞こえる。多分メロトロンだろうと思われるサウンドが全編に奏でられ、重苦しい狂気じみた雰囲気を演出している。

このアルバムを最後にART BEARSは幕を閉じた。基本的にレコーディング・バンドであったため、メンバー各自がそれぞれに並行して別の活動も行っていたりして、バンドの存続期間はハッキリとは捉えられない。その後も新作の計画などが伝えられることもあったことから考えれば、この時点で解散といった区切りはなかったようだ。

但し、1983～84年、ART BEARSの曲をライヴ演奏するためにDUCK AND COVERという、言わばHENRY COWファミリーのスーパー・グループが何回かライヴ演奏を行なったという事実がある。大した成果は上げられなかったというのが正直な所だが、この時点でART BEARSは終焉を迎えたと考えることも出来る。

ART BEARSに加わらなかったティム・ホジキンソンは、暫くの猶予期間を経てソロ活動を開始。1980年2月には、自らのバンド、THE WORKを結成する。達者なテクニックを排した、武骨なパワーに満ちた音楽を希求し、殆ど演奏経験のない新人を集め、自分でもわざわざ演奏経験のないハワイアン・ギターの演奏とリード・ヴォーカルに取り組む。当時よく言われた所謂〈ヘタウマ〉型の演奏であり、ART BEARSに対抗したのだとも言えよう。ART BEARSよりもうちょっとパンク寄りの音楽ではあるが、なかなかの成果を修めている。意図してテクニックを否定したにもかかわらず、実の所メンバーの実力は相当のものであり、作曲も変拍子だらけのまごうことなきカンタベリー・ミュージックにほかならない。ART BEARSと同じく、R. I. O.に所属し、Woofレコードを設立して1982年4月にアルバム「Slow Crimes」を発表。メンバー・チェンジの後、1982年6月にはクリス・カトラーも同行して来日公演を果たした。この時の模様は日本制作のライヴ・アルバム「Live In Japan」に残されているが、実に胸のすくような見事な演奏を披露してくれている。残念ながらその後間もなくTHE WORKは解散してしまったようだが、ホジキンソンは地道にソロ活動などを行う。また、ギタリストのビル・ジローニスはコールド・ストーリッジ・スタジオのレコーディング・

●ティム・ホジキンソン



エンジニアに転身した。1983年にWoof レコードより発表されたベルギーの女性歌手カトリーヌ・ジュニオーのソロ・アルバム「Fluvial」ではティム・ホジキンソン、ビル・ジローニスが全面的協力を行っており、ほかにもジョージー・ボーン、リンゼイ・クーパー、トム・コラ、チャールズ・バレン等が参加している。ファンは必聴だ。1989年、驚いたことに THE WORK はオリジナル・メンバーで復活し、アルバム「Rubber Cage」を制作。翌年発表した。想像以上のしぶとさで頑張っている。

HENRY COW 解散後よりソロ活動にも力を入れていたフレッド・フリスは、1980年、アメリカでの居住権を獲得し、ニューヨークで新たな活動を展開して行くことになる。ART BEARS が活動を停止した理由のひとつはここにありそうだ。1980年2月には早速トリオ編成のMASSACRE を結成している。これはNEW YORK GONG の一員として面識を得たビル・ラズウェル、フレッド・マハーを率いてのフリスのギター・トリオであり、当時より頭角を現し始めた MATERIAL 周辺の、所謂ニューヨーク・ロフトの一派との非常に重要な接触を意味した。MASSACRE は1981年に唯一のアルバム「Killing Time」を残している。極端にリズム・チェンジの多い、むやみやたらとテンポの速いスリリングな演奏は、後のニューヨーク・ロフトの一派の一つの特徴にもなった。

ソロ・インプロヴィゼイションも世界各国で繰り広げ、1981年を皮切りに日本にも何度となくやって来ている。

1983年、リンゼイ・クーパーの率いる新しいバンド NEWS FROM BABEL が始動する。クーパーは1979年頃よりソロ活動を行っており、特に女性解放運動に正面から取り組み、1977年より組織している F. I. G.（THE FEMINIST IMPROVISING GROUP）のメンバーらを迎えてのソロ・アルバムの制作も行っていた。しかし NEWS FROM BABEL はそうした活動とは別のヴェクトルを持ったバンドだ。もっとハッキリ言えば、ART BEARS を継承するバンドだ。クリス・カトラー、ダグマー・クラウゼの参加は、まさに ART BEARS 再び、を狙ったものに違いない。勿論作詞はカトラーの担当だ。加えてジーナ・パーキンス（hp, acc）なる新人も起用しての4人編成だが、ART BEARS と比較するにはあまりにもサウンドがユニークであり、音的には寧ろ違いの方が際立っている。作曲面でもクーパーのやはりクラシック・ミュージックの出自が大きく影響しており、HENRY COW 時代の作曲法を少しばかり平明にしたといった具合だが、何と言っても普通でないのは楽器編成であり、ギターもベースもないのではいくらカトラーのドラムスを以てしてもロック色の後退はいたしかたない所だろう。1984年にファースト・アルバム「News From Babel」が発表されたが、さすがに ART BEARS 程の反響を得ることは出来なかったようだ。ただ、彼らが以前より意識していたブレヒト、アイスラー、ヴァイルの音楽には一段と接近して来た感はある。


●リンゼイ・クーパー

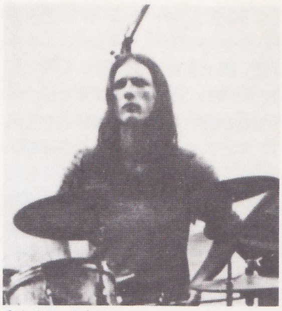
1986年にはセカンド・アルバム「Letters Home」を発表しているが、ここではダグマーが正式メンバーから降格し、ロバート・ワイアット、サリー・ポッター、フィル・ミントンと共にゲスト・ヴォーカリストとして参加している。また、ビル・ジローニスがギターとベースでゲスト参加しているのも特筆すべきであり、これにより前作よりは大分バランスのとれたサウンドに仕上がっている。全体に透明で繊細なイメージの強いアルバムだ。

これを最後に NEWS FROM BABEL の消息は絶えてしまった。やはり ART BEARS 程の評価を得ることが出来なかったというのが痛かったかも知れない。バンドとしての存在意義とは裏腹に、彼らの音はクーパーのソロ・ワークの延長でしかなかったとも言える。

一方フレッド・フリスは、1982年には MASSACRE に換わって SKELETON CREW を結成している。トム・コラ（vc）とフレッド・マハー（d）をメンバーとするトリオで、翌年にはマハーが抜け、コラとのユニークなデュオになる。1983年10月には早くも来日し、奇抜なステージを披露した。フリス、コラともにバス・ドラムとスネア、それにハイハット・シンバルからなるシンプルなドラム・セットに腰を据え、歌いながら、フリスはギター、ヴァイオリン、ベース、カシオトーンを、コラはチェロ、ベース、カシオトーンをとっかえひっかえ持ちかえて演奏するという、ロック・バンドにあるまじきスタイルで相当フォーク色の強い、だが凝りに凝ったスリリングな音楽を聴かせた。1984年に発表されたファースト・アルバム「Learn To Talk」はオーヴァーダビングされているため、ステージほど風変わりな印象は受けない。

1985年には NEWS FROM BABEL のジーナ・パーキンスが加入して3人になり、1986年1月には再来日している。セカンド・アルバム「The Country Of Blinds」は高い評価を得た。

フレッド・フリスだけでなく、クリス・カトラーも国外での活動が活発だが、1982年には西ドイツで CASSIBER というバンドを結成している。これは1975年よりデュオで活動していたハイナー・ゲッベルズ（kb, vln, g, b）とアルフレッド・ハルト（sax, tp, tb, clr, vc）を中心に、カトラー（d, noise）とクリストフ・アンデルス（vo, syn, g, sax, tape, perc, vln）が加わった4人編成であり、楽器編成を見ても判るように相当フレクシビリティの高い、言い換えれば出たトコ勝負のインプロヴィゼイション・グループだ。11月にアルバム（2枚組12" EP）「Man Or Monkey」でデビュウした。カトラーが予め用意しておいた詩をもとにスタジオでインプロヴィゼイションを繰り広げるという基本姿勢からは、とんでもないフリー・ミュージックを想像してしまうが、実際には信じられない程形をなした作品が出来上がっている。ゲッベルズとアンデルスはあまりテクニックを持っていない演奏者であり、バンドに荒っぽさを引き出しているが、ハルト、カトラーとのバランス感覚が絶妙であり、際どい成果を上げている。しかし、彼らはその基本姿勢故に好不調の差を免れ得ず、1984年に発表されたセカンド・アルバム「Beauty & The Beast」は今一つ乗り切れてない節がある。その後 GESTALT ET JIVE の結成で忙しくなったハルトが抜けて3人編成になってしまうが、尚も活動を続け、1986年にはサード・アルバム「Perfect Worlds」を発表。ここでは当初の方針を変更し、簡単な作曲行為を導入したため、非常に引き締まった鋭い演奏を聴かせてくれる。生憎その後の消息を聞かないが、とりたてて共演に不都合がある訳でもなさそうなので、いつまた復活しないとも限らない気がする。


●クリス・カトラー

あれ程世界中のアンダーグラウンド・ロック・シーンに一大旋風を巻き起こした R. I. O. も最近ではやや低迷している様子だ。とは言っても彼らの仕掛けた起爆剤は今も有効であり、現に彼らによって世に出、今も活躍しているミュージシャンが世界各地にいる。

フレッド・フリスは現在もニューヨークを拠点に、先鋭的なジャズ・ミュージシャン達と組んで頑張っているほか、ソロ活動の方も見るべき成果を上げている。

また、ダグマーも本格的にアイスラー、ヴァイルの音楽に挑戦したアルバムを2作発表している。

この項ではあまり触れなかったが、ピーター・ブレグヴァッドとジョン・グリーヴスは今もしっかりアメリカとイギリスを股にかけ頑張っている。アンソニー・ムーアも大分ニュー・ウェイヴ色を強めていたが、最近新作も出ている。HENRY COW ファミリーの動向は、カンタベリー・ミュージック・シーンの現在を語る上で今も目が離せない。

6

カンタベリー・ミュージックの担い手達

こうして5つのバンド（アーティスト）を中心に紹介して来たが、これらは長い歴史を持って活動して来たため、時間軸に沿ってその活動を追う必要のある連中であり、場合によってはカンタベリー・ミュージックの本筋から離れてしまった例もある。こうした老舗グループとは別に、活動期間は短かったものの非常に素晴らしい成果を残したバンドも多い。また、なかなかバンド活動が安定しないにもかかわらず、常にカンタベリー・ミュージック・シーンの中枢で活躍しているミュージシャンも少なくない。実の所カンタベリー・ミュージック・シーンは寧ろこういった連中によって形成されて来たと言っていい。主流はこういったミュージシャン達なのだ。この章では彼らにスポットライトを当てよう。

■ロバート・ワイアット

SOFT MACHINE を抜けた後、ワイアットはセッション活動を経て、1971年12月、MATCHING MOLE を結成する。元 CARAVAN のデヴィッド・シンクレア（kb）、元 QUIET SUN のビル・マコーミック（b）、元 DELIVERY のフィル・ミラー（g）、NUCLEUS のデイヴ・マックレエ（kb）を率いたこのバンドは2枚のアルバムを残しているが、今聴くとまだ発展途上のバンドだったようだ。しかし、カンタベリー・ミュージック・シーンが形成されて行く上でこのバンドが果たした役割は大きい。この錚々たるメンバーの顔触れ。既にワイアットはカンタベリー周辺のミュージシャンにとっては神格化された存在だった訳で、彼が声を掛ければおっとり刀で駆けつけるミュージシャンは数多かったに違いない。そんな中でまだ新進気鋭の若々しい連中を集めたこのバンドは、ワイアットにとって、原点に帰って新しいジャズ・ロックを創造しようという場だった。残されたアルバムの出来はそれ程のものではないにせよ、しかし後に彼らの曲を採り上げたミュージシャンは意外に多い。いかに彼らが注目されていたかの証左だろう。

1973年6月、ワイアットは落下事故により半年間の入院生活を強いられ、不幸にも下半身不随の体となってしまう。これにより彼はドラマー生命を断たれてしまった。しかし不屈にも彼はヴォーカリストとしての再起を目指し、入院中から HATFIELD AND THE NORTH の録音に参加したり、ソロ・アルバムの作曲に取り組む。SOFT MACHINE や PINK FLOYD の救済コンサートなどの支援を得、退院後には HATFIELD AND THE NORTH やロル・コックスヒルらの協力でカム・バック・コンサートを行う。2枚のソロ・アルバムを発表し、新しい境地を築き上げた彼は HENRY COW とも共演。

シンプルで切々と訴えかける彼の音楽は、その後暫く休止期間を経て、1981年、ニューウェイヴ系の新興レーベル Rough Trade に再発見される。以後マイ・ペースながらも活動を続けており、社会参加の姿勢も打ち出して大きな反響を巻き起こしていく。



●ロバート・ワイアット

■ケヴィン・エアーズ

SOFT MACHINE を抜けた後、ケヴィン・エアーズはスペインのイビザにしけ込んでいたが、やがてイギリスに戻り、ソロ活動を開始する。彼の音楽はカンタベリー・ミュージック・シーンに於いては非常に異質なもので、基本的にはロックと言うよりもポップスと呼ぶべきものだ。やたらと脳天気なハッピー・ソングが多く、ロック・ファンにどれだけアピールするかは完全に好みの問題になって来る。変なポップスが好きな人にはお薦めだ。1978年まではバンドを率いて順調な活動を続けていたが、その後スペインで隠居生活に入る。そのくせアルバムだけは今もしっかりと出し続けており、1988年には驚いたことにスペインのミュージシャンを引き連れて初来日を果たしてしまった。スペインに渡ってからの活動は情報がないため系図でも触れなかったが、旧友のオリー・ハルソールとの協力関係が今も続いている。

彼の音楽は最初から殆ど変化がなく、好きな人は何を聴いても満足出来るだろう。一般的なプログレッシヴ・ロック・ファンには初期の THE WHOLE WORLD による、プログレッシヴ・ロックならぬプログレッシヴ・ポップスの世界、あるいは「The Confessions Of Dr Dream And Other Stories」、「June 1, 1974」あたりを勧めたい。特に「The Confessions Of Dr Dream And Other Stories」はマイク・ラトリッジやニコなども参加して聴き応えのある演奏を聴かせてくれる。純粋にポップスとして楽しむのなら最近の作品もなかなか水準が高い。

彼の音楽は確かにカンタベリー・ミュージック・シーンにおいて異質な訳だが、それでも結構最近のピーター・ブレグヴァッドの音楽などに近いものがあり、一概に例外として無視するのも間違いなようだ。



●ケヴィン・エアーズ

■EGG／KHAN

1968年7月に結成された EGG は、最もカンタベリーらしい音楽性と並々ならぬ実験精神に溢れた実に初々しい素晴らしいバンドだった。デイヴ・スチュワート（kb）、モント・キャンベル（b, vo）、クライヴ・ブルックス（d）という当時ティーンエイジャーだった3人によって生み出された音楽は、クラシック音楽の強い影響の下、変拍子をふんだんに採り入れ、しかもウィットに富んだ詩を歌い、決して抒情に流れることなくスリリングな展開を見せる。新しい音楽を作るのだという意欲が漲っており、音楽のよしあしは自分達で決めるという姿勢も有無を言わせぬ説得力がある。一般にはデイヴ・ステュワートの最初のバンド（実際には彼らの前身バンド URIEL が ARZACHEL の変名を用いて録音した作品がある）として知られているだろうが、本当の所はモント・キャンベルの音楽性の方が強く打ち出されているし、また3人それぞれが平等に発言力を持っていたバンドでもあった。

「Egg」、「The Polite Force」の2枚のアルバムを残して経済的理由で解散したが、1974年10月、HATFIELD AND THE NORTH の一員として活躍していたデイヴ・ステュワートの尽力により3枚目のアルバム「The Civil Surface」が発表された。これはまったくの新録音だったが、バンド再結成には至らず、初めからレコーディング・セッションの形で進められたプロジェクトだったらしい。3枚とも大変な力作だが、ファーストとサードは特に傑作と言える。1971年4月に結成された KHAN は、URIEL 時代に EGG の3人と組んでいたギタリスト、スティーヴ・ヒレッジが率いていたバンドだ。彼はカンタベリーの大学へ通うため EGG に参加しなかったのだが、結局ミュージシャンになる夢を捨て切れずこのバンドを結成した。ヒレッジと言えば、GONG 以降のあの GONG サウンドのイメージが強いが、KHAN の残した唯一のアルバム「Space Shanty」は、彼がまだ GONG に加わる前の彼の音楽性を知るこ



●KHAN

との出来る貴重な録音だ。ゲスト参加のデイヴ・ステュワートがオルガンで大活躍を見せるが、ヒレッジも負けじと非常にカンタベリー色の強い演奏を聴かせる。今聴くとEGGに比べても少し古めかしいのが残念だが、力作として評価したい。ステュワートがクラシックよりもジャズ色の強いミュージシャンだったことも確認出来る。

その後、ヒレッジはGONGでの活躍を経てソロ活動に入る。自らのバンドを率いてライヴ活動も積極的に行ない、ギタリストとして相当の人気も呼んだ。GONGの音楽をもっと単純明快にし、ジャズ色を薄めたのが彼の音楽であり、センスのよさが光っていた。残念ながら、1980年代に入って活動が鈍り、現在はプロデューサーに転向してしまったようだ。

■ HATFIELD AND THE NORTH / GILGAMESH/ NATIONAL HEALTH

1972年10月に結成されたHATFIELD AND THE NORTHは、カンタベリー・ミュージック・シーンが生み出した最大のバンドだ。結成された時、メンバー達はまだそれ程の高い知名度や評価を得ていた訳ではなかったが、僅か2年半強の活動期間に於いて非常に高い評価と人気を得るに至った。元CARAVANのリチャード・シンクレア、元MATCHING MOLEのフィル・ミラー、元EGGのデイヴ・ステュワート（彼は途中からの参加)、元DELIVERY、GONGのピプ・パイルの4人は、まさにSOFT MACHINE周辺に集まってきたカンタベリーの精鋭達だった。彼らは最も高度な、そして親しみ易いカンタベリー・ミュージックを築き上げた。極めて複雑な音楽でありながら、遊び心に満ち、緊迫感と切々たる情感、それに爽やかな感動が同居した、一見あまり強いインパクトがないようでいて、聴き直す度にその凄さが判って来るこれぞカンタベリー・ミュージックの極め付けだ。1974年3月に発表されたアルバム「Hatfield And The North」で人気を得た彼らは、1975年3月に名作「The Rotters' Club」を発表し、カンタベリー・ミュージック・シーンの頂点に立つ。4人の異なった個性が相殺し合うことなく調和して素晴らしい成果を上げている。カンタベリー・ミュージックの最高傑作は何かと問われれば、僕は躊躇なくこのアルバムをあげる。とりわけHATFIELD AND THE NORTHで飛躍的な成長を見せたのはフィル・ミラーだろう。それまでのどちらかと言えばあまり達者とは言えないギター・プレイがユニークな境地に達しており、嘘のようなテクニシャンに変身している。



●HATFIELD & THE NORTH

HATFIELD AND THE NORTHの兄弟バンドのような活動をしていたグループにGILGAMESHがある。比較的オーヴァーグラウンドな活動をしていたHATFIELD AND THE NORTHに比べると彼らの活動はアンダーグラウンドなものだった。キーボード奏者アラン・ガウエンが率いるGILGAMESHは、なかなかメンバーが固定せず、特にベーシストがニール・マレイ、スティーヴ・クック、ジェフ・クラインと次々に交代。ステージではモント・キャンベル、リチャード・シンクレアが客演したこともあった。HATFIELD AND THE NORTHとステージを共にし、合同演奏を行うなど両グループの関係は深く、彼らのファースト・アルバム「GILGAMESH」はデイヴ・ステュワートがプロデュースで参画、アマンダ・パーソンズもゲスト参加している。HATFIELD AND THE NORTHに通じるジャズ・ロックを演奏しているが、もっとジャズ寄りの音楽性を持っている。メンバーが皆ジャズ出身だということが大きく関与しているようだ。

1975年6月、いよいよこれからが期待されていたHATFIELD AND THE NORTHだったが、突然解散してしまう。事情は明らかにされていないが、人気の割にはそれがセールスに結び付いていなかったとか、あるいはメンバー間の方向性の違いが原因になったらしい。デイヴ・ステュワートはGILGAMESHのステージ・メンバーとなったものの、結局GILGAMESHもすぐに解散。両バンドの大半が参加して新しくNATIONAL HEALTHが結成されたが、さすがにメンバーが多過ぎたのか次々と脱落者が抜けて行き、デイヴ・ステュワート、フィル・ミラー、アラン・ガウエン、アマンダ・パーソンズ、モント・キャンベルが残り、またステージでは元YES、KING CRIMSONのビル・ブルッフォードが全面的に協力した。モント・キャンベルの参加は大きな影響を及ぼし、当時の彼らの演奏はEGGの延長線上にあるものだった（少なくともBBCには当時の録音が残されているので、いつの日か正規に発表されることを切に望みたい)。しかしキャンベルの曲はあまりにもクラシック色が強過ぎるという理由でメンバー達から拒絶されてしまい、キャンベルは脱退してしまう。代わって加わったのはニール・マレイだった。ピプ・パイルも加わり、レコーディングの準備に取りかかるが、方針変更を打ち出したVirginレコードの態度が硬化し、契約することが出来なくなる。グループの運営は暗礁に乗り上げ、彼らの活動はいきおいアンダーグラウンドなものになって行く。1977年3月にはアルバムが完成したにもかかわらず出版が出来ず、1978年になって漸くファースト・アルバム「National Health」を発表した時には既にガウエンとパーソンズがバンドを去っていた。その時点でバンドは結局HATFIELD AND THE NORTHのベーシストが交代しただけの形になったが、音楽的にもやはりHATFIELD AND THE NORTHからリチャード・シンクレアの音楽性を抜いてもっとジャズ色を強めたような内容になっている。勿論録音時にはメンバーだったガウエンの音楽性も反映されており、それが作用してか、カンタベリー・ミュージック独特のアクの強さが逆に軽減されているようだ。

ガウエンは、エルトン・ディーン、ヒュー・ホッパーらと組んでジャズ・サイドでの活動を始め、SOFT HEAD、SOFT HEAPなどを結成して行く。また、そうした中で1978年、フィル・リー、ヒュー・ホッパー、トレヴァー・トムキンスを率いて一時的にGILGAMESHを再編し、アルバム「Another Fine Tune You've Got Me Into」を発表したが、これは結局レコーディングのためだけの再編に終わった。このアルバムはファー

ストよりも遥かにジャズ色が強く、ガウエンの音楽性が如実に現れたものになっている。ヒュー・ホッパーとのコンビネイションは殊の外具合が良かったらしく、1980年にはふたりでアルバム「Two Rainbows Daily」を発表しているが、これはふたりにとってそれぞれの最高傑作となっている。

1978年2月、ベーシストがジョン・グリーヴスに交代したNATIONAL HEALTHは、この年、セカンド・アルバム「Of Queues And Cures」を発表した。グリーヴスの参加は強力で、まさに適材適所の登用となる。前作よりも求心性が増し、デイヴ・ステュワートがバンドを完全に掌握している。バンドのカラーがハッキリして来たという点を含めて、よりパワー・アップした印象が強い。レコーディング中にチェロ奏者のジョージー・ボーンが正式メンバーとなっており、また、直後にリンゼイ・クーパーも加入するなどHENRY COWファミリーとの深い繋がりを持つに至ったというのも特筆すべき出来事だろう。

1978年12月、折角順調に行っていたNATIONAL HEALTHをデイヴ・ステュワートが抜けたのは、ビル・ブルッフォードの結成したBRUFORDへの加入を請われてのことだった。1977年12月に発表されたブルッフォードのソロ・アルバム「Feels Good To Me」がきっかけとなって結成されたバンドだが、音楽的にはデイヴ・ステュワートの寄与する所が極めて大きく、BRUFORDをカンタベリー系のバンドと見做してもさしつかえない。BRUFORDはBRAND Xと並んで当時のブリティッシュ・ジャズ・ロック・シーンを席巻した超一流の実力派グループであり、既に敗退の一路にあったプログレッシヴ・ロック・シーンを尻目に華々しい活躍を見せた。BRUFORDへの参加によりステュワートの知名度は一段と上昇し、結果としてステュワートはNATIONAL HEALTHを見限って金に走った形となった。但し、ブルッフォードの側からするとBRUFORDは経済性に大きな問題を抱えていたバンドだった訳で、逆に言えばいかにそれまでステュワートが金に恵まれていなかったかが判る。

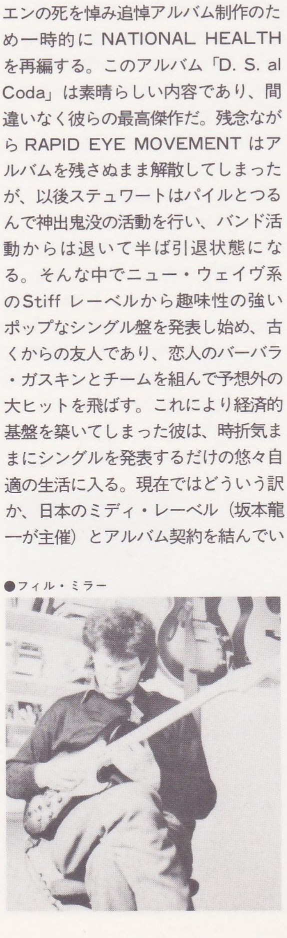
リーダーに逃げられてしまったNATIONAL HEALTHは不屈にもアラン・ガウエンを呼び戻し活動を続けた。しかし、いかんせんあまりにも活動がマイナーに潜行してしまい、結局1980年3月に解散を余儀なくされる。この解散はガウエンの白血病による入



●ステュワート＆ガスキン

院が原因でもあったようだ。以後ガウエンは闘病生活に入るが、1981年5月、惜しくも亡くなってしまう。この間、前述した「Two Rainbows Daily」、及び、死の僅か2～3週間前にレコーディングされたセッション・アルバム「Before A Word Is Said」を残している。

BRUFORD解散後、ステュワートはピプ・パイルと共にRAPID EYE MOVEMENTを率いていたが、ガウエンの死を悼み追悼アルバム制作のため一時的にNATIONAL HEALTHを再編する。このアルバム「D. S. al Coda」は素晴らしい内容であり、間違いなく彼らの最高傑作だ。残念ながらRAPID EYE MOVEMENTはアルバムを残さぬまま解散してしまったが、以後ステュワートはパイルとつるんで神出鬼没の活動を行い、バンド活動からは退いて半ば引退状態になる。そんな中でニュー・ウェイヴ系のStiffレーベルから趣味性の強いポップなシングル盤を発表し始め、古くからの友人であり、恋人のバーバラ・ガスキンとチームを組んで予想外の大ヒットを飛ばす。これにより経済的基盤を築いてしまった彼は、時折気ままにシングルを発表するだけの悠々自適の生活に入る。現在ではどういう訳か、日本のミディ・レーベル（坂本龍一が主催）とアルバム契約を結んでい

●フィル・ミラー


るらしく、最新アルバム「The Big Idea」はシングルで発表される前に日本で発売になっている。あまりにもポップなため日本のプログレッシヴ・ロック・ファンにはそっぽを向かれているようだが、一見シンプルな曲想の中にもさすが彼ならではの凝った解釈が盛り込まれ、一癖も二癖もあるユニークなポップスとして孤高のサウンドが光っている。

NATIONAL HEALTH解散後、フィル・ミラーはIN CAHOOTSを率い、ひとりでNATIONAL HEALTHの音楽性を引き継いで頑張っている。早くからレコーディングの計画が伝えられていたにもかかわらずアルバムが発表されたのは1987年のこと。しかもバンド名義ではなく、ミラーのファースト・アルバム「Cutting Both Ways」としてだった。IN CAHOOTS以外の演奏ではデイヴ・スチュワートが全面的に協力をしており、NATIONAL HEALTHでの戦友達の協調関係は今も健在のようだ。ミラーのセカンド・アルバム「Split Seconds」も同様の構成となっており、非常に聴き応えがある。従来からのカンタベリー・ミュージック・ファンには必聴盤だ。

■ピーター・ブレグヴァッド／ジョン・グリーヴス／ジャコ

1976年、ピーター・ブレグヴァッドとジョン・グリーヴスは、ニューヨークでリサ・ハーマンを加え、カーラ・ブレイらの協力のもと、アルバム「Kew. Rhone.」を制作するが、これがもとになり、1980年代に幾つかの興味深いプロジェクトが誕生した。

1982年にくだんの3人が集まり、ニューヨークでTHE LODGEの名前でライヴ活動を始める。1983年にはブレグヴァッド、グリーヴスが揃って初のソロ・アルバムを発表。ブレグヴァッドの「The Naked Shakespeare」はプロデューサーにXTCのアンディー・パートリッジを迎え、充実したポップ・サウンドを展開して評判となる。その後もふたりはそれぞれ2作目のソロ・アルバムを発表している。

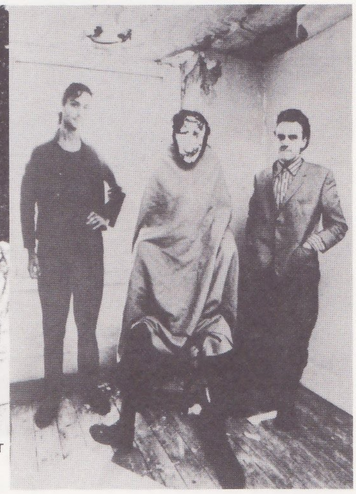
1985年、ブレグヴァッドは、それまでアート・リンゼイ、ビル・ラズウェル、フレッド・フリスらを迎えて硬質のアグレッシヴ・サウンドを追求していたTHE GOLDEN PALOMINOSに招かれ、ブレインとして活躍し始める。THE GOLDEN PALOMINOSは、元FEELIES、PERE UBUのドラマー、アントン・フィアーが率いるバンドであり、ブレグヴァッドが加わった時点で普通のロック・バンドにがらりと変身を遂げてしまった。何となくどこにでもありそうなロック・サウンドだが、時代性もあってか思いがけない程の評判を呼ぶ。ライヴではリサ・ハーマンも全面的に参加した。

一方グリーヴスはマイケル・ナイマンのバンドや、マイケル・マントラーのバンドに加わり活動。

そうこうする内にTHE LODGEの方も新しいメンバーなどを加え、1988年遂にアルバム「Smell Of A Friend」を発表する。リサ・ハーマンは正式メンバーからは降格し、ブレグヴァッドの兄弟、クリストファー・ブレグヴァッドやジャコ、それにアントン・フィアーがメンバーに加わった。THE GOLDEN PALOMINOSの逆影響が大きく、驚く程普通のロックになっている。

THE LODGEに参加したジャコは、RAPID EYE MOVEMENTでカンタベリー・ミュージック・シーンに登場した来た新人だが、非常に才気走ったミュージシャンであり、1982年頃からChiswickレコードやStiffレコードからシングルを発表。デイヴ・ステュワートのシングルにも多く参加しているが、少なくともシングルの出来はジャコの方が明らかに勝っている。味のあるヴォーカル、ホールズワースばりのギター・テクニック、そして何より良質のポップ・センス。個人的には非常に高く買っているのだが、どうもセールスが伴わないようで、予告されていたアルバムもこれまでの所発売された形跡はない。そのジャコが1988年、DIZRHYTHMIAを結成し、アルバムも発表している。残念ながら現時点で手に入らなかったため内容については触れられないが、気になるミュージジャン達が集まっており、ジャコの今後も目が離せないようだ。





⬆QUIET SUN ➡THIS HEAT

1989年暮れ、ピーター・ブレグヴァッドは3作目のソロ「Downtime」を発表しているが、このアルバムでは久々に古巣のイギリスに戻り、クリス・カトラーやティム・ホジキンソンらの協力を仰いでいる。どうした訳か地味なポップ・ソングに挑戦しており、ケヴィン・エアーズに先祖返りしたような具合だ。

■QUIET SUN

QUIET SUN は、1969年から1971年にかけて活動したバンドであり、SOFT MACHINE の練習場の近くに住んでいたということから直接 SOFT MACHINE の影響を受けた。活動期間中は全くの無名だったが、その後ギタリストのフィル・マンザネラが ROXY MUSIC で活躍を始めたことによりその名を知られるようになった。1975年1月、マンザネラのファースト・ソロ・アルバム「Diamond Head」の制作で顔を揃えたメンバー達が急遽意気投合し、スタジオの空き時間を利用して昔のレパートリーをレコーディング。これが彼らの唯一のアルバム「Mainstream」として発表された。ここで聴かれるサウンドはまごうことなきカンタベリー・ミュージックだ。4人のメンバーがいずれも優れたテクニックと音楽性を持っており、絶妙なるバランスで聴く者に興奮と感動を呼ぶ。

QUIET SUN の解散後、デイヴ・ジャレットを除く3人はそれぞれに音楽活動を続け、マンザネラは上記の通り ROXY MUSIC に加入、ビル・マコーミックは短期間 GONG に参加した後ロバート・ワイアット率いる MATCHING MOLE に加入、チャールズ・ヘイワードは ALL WET AND DRIPPING に参加した後 GONG に加入、その後再び、ALL WET AND DRIPPING に復帰したが、このバンドはやがて元 HENRY COW のジェフ・リーを迎え RADAR FAVOURITES へと名前を変えた。

「Mainstream」発表後、1976年夏 ROXY MUSIC が活動を休止すると、マンザネラはマコーミックを伴って801を結成し、精力的に活動を行う。801にはブライアン・イーノや元 CURVED AIR のフランシス・モンクマン、これがデビューとなるサイモン・フィリップスも加わり、途轍もない実力と確信に満ちた演奏でロック・シーンに新しいカンタベリー・ミュージックの姿を見せつけた。当時のマンザネラは本当に自信に溢れており、ソロ・アルバム「Diamond Head」や、「Mainstream」、それにこの801による「801 Live」のいずれもが非常にポテンシャルの高い素晴らしい傑作となっている。1977年には陣容を変えて再び801で活動。ソロと801の両方の名義でアルバム「Listen Now」を発表したが、ここでは良質のポップ・サウンドを導入し、幅広い支持を獲得した。1978年には3作目のソロ・アルバム「K−Scope」を発表し、前作同様のサウンドを披露するが、以後 ROXY MUSIC が活動を再開したためソロ活動は途切れてしまう。1982年に発表された4作目、「Primitive Guitars」では一転してタイトル通りのシンプルなギター・サウンドを聴かせ、殆どデモ・テープ集の趣だが、内向的ではにかみがちのギター演奏が妙にエロティックだ。

ROXY MUSIC 解散後のマンザネラの活動は以前に比べるとやや精彩を欠いている。食いぶちを断たれたという精神的圧迫が強いのか、変に売れ線を気にして余裕を失って見える。ROXY MUSIC での同胞、アンディ・マッケイに、新人歌手ジェイムズ・レイスを加えた THE EXPLORERS は ROXY MUSIC の二番煎じだし、ジョン・ウェットンと組んだ WETTON MANZANERA は ASIA に似過ぎている。1988年に始動した NOWOMOWA はおそらくニューエイジ・ミュージックを意識しているのだろうが、JADE WARRIOR を思わせる壮大な音の絵巻を繰り広げ、何か新しいものを摑んだようには聞こえる。

一方801でマイザネラと活動を共にしたマコーミックは、1978年、801の衣鉢を継いでニュー・ウェイヴ・バンド、RANDOM HOLD を結成する。ニュー・ウェイヴ・タイプのカンタベリー・ミュージックとして一部の注目を集めた。801の影響は強いが、音楽的にはマコーミックが単なるベーシストにとどまったこともあって、カンタベリー・ミュージック云々についてはあまり強調し過ぎない方がいいかも知れない。RANDOM HOLD はデヴィッド・ローズというユニークなギタリストを世に出したという点で寧ろ忘れられないバンドだ。ローズがピーター・ゲイブリエルの下で今も大活躍していることはご存じの通り。

チャールズ・ヘイワードは、1975〜82年、THIS HEAT というバンドを率いてロック史上に鮮烈な足跡を刻みつけた。THIS HEAT はニュー・ウェイヴというよりもパンクに強力なリズム操作を施して唯一無二の音楽を創造した。これはひとえにヘイワードの力業と言えよう。ノイズをトーン・クラスターとして捉えて築き上げた極めて革新的なロック・ミュージックだ。真の意味でのプログレッシヴ・ミュージックとして、KING CRIMSON と並び称されるのは、まさに至言だ。長い活動期間の割にアルバムは2枚しか残されていないが、これは当初の活動が地下に潜っていたためであり、2枚ともにロック史上に慄然たる異彩を放つ衝撃作だ。

THIS HEAT 解散後、ヘイワードは CAMBERWELL NOW を結成する。THIS HEAT と同様の3人編成だが、テクニックに格段の向上が見られ、メロディーの復権が顕著だ。その分だけ革新性は薄れてしまったが、ヘイワード自身がそもそも望んでいたのはきっとこの音楽だったのではないだろうか。2枚のアルバムと1枚の12"シングルを発表した後、残念ながら解散してしまう。その間にもヘイワードは、ロック版のミニマル・ミュージック・グループ、REGULAR MUSIC、及び、ドラマー3人組の LES BATTERIES を結成し、それぞれにアルバムを残すなど、気の赴くままに精力的な活動を展開した。いずれもなかなかの成果を修めている。1986年に CAMBERWELL NOW が解散し、翌1987年には殆どの楽器をひとりで手懸けた初のソロ・アルバム「Survive The Gesture」が発表される。明らかに CAMBERWELL NOW の延長線上にある素晴らしい内容であり、彼が理想としていた音楽がハッキリと表されている。ここでは特に歌に力点が置かれており、いかにして何を歌うかが問われている。1988年にはハイナー・ゲッベルズの初のソロ・アルバム「Der Mann Im Fahrstuhl」に参加し、フレッド・フリス、アート・リンゼイ、ドン・チェリーらと共演。案の定普通のロック・リズムを叩かせても相当達者なことを証明した。1989年暮れにはジジ・マシンというおそらくイタリアのミュージシャンとのカップリング・アルバム「Les Nouvelles Musiques De Chambre 2」を発表し、20分に及ぶ'Thames Water Authority'という大曲を披露しているが、ここではこれまでの彼のイメージを根こそぎ覆して、フランク・ペリーも真っ青という前衛的な瞑想音楽を、金属打楽器を弓で挽くという演奏法で繰り広げている（因みにジジ・マシンの方はピアノをメインにした美しいミニマル・ミュージックだ）。非常にマイナーな活動をしているくせに、この所妙に目立つ、気になるミュージシャンだ。

7

カンタベリー・ミュージックとは何か？

——今を見失わないために——

半年にも渡ってこの文章と系図に取り組んで来たが、改めて実感するのは、このシーンが今も生きているということだ。とうの昔に消息不明になり、今はどうしているものかと思っていた連中がブランクなど一切感じさせぬ雄姿を現し、驚かされたのも1度や2度のことではない。拡散が進んだ今では必要以上にカンタベリー・ミュージックにこだわっていると事実を曲解し兼ねないが、それでも彼らの連帯意識は健在であるし、煮詰まることなくシーンが進展しているのも事実だ。舞台がイギリスから大きく食み出していることは改めて言うまでもあるまい。寧ろ指摘すべきは、カンタベリー・ミュージック・シーンが世界中の面白いシーンとじかに繋がっているということだろう。例えば、ビル・ラズウェルやジョン・ゾーンらを中心としたニューヨーク・ロフトの一派。例えば、フランス、ドイツ、イタリア、スペイン、ベルギー、オランダ、あるいは北欧だろうが東欧だろうが凡てのユーロ・ロック・シーンや、北米、中米、南米のプログレッシヴ・ロック・シーン。例えば日本の前衛音楽やジャズあるいはロック・シーン。例えばカーラ・ブレイ、マイケル・マントラーらアメリカのジャズ・ミュージシャン達。ましてイギリス国内に於いてはあらゆる音楽シーンと繋がっていると言っても過言ではない。

カンタベリー・ミュージックはどこから生まれたのかということについて確認しておきたい。何も、彼らが突然何もない所からカンタベリー・ミュージックを作り上げた訳ではないのだ。

よく知られているのが、フランク・ザッパの影響だろう。例えば「Uncle Meat」辺りのザッパの音楽がカンタベリー・ミュージックの手本となっているのは間違いのない所だ。それと同時に忘れてならないのがマイルス・デイヴィスの影響だろう。勿論、1969年に発表された「In A Silent Way」、「Bitches Brew」以降のあの革命的なジャズ・ロック・サウンドのことだ。特にリズム・パターン、ベース・リフなどでの影響は顕著だ。極めてロック色の強いアルバム「Jack Johnson」でのマイケル・ヘンダーソンのベース・プレイなどを聴くと僕は無条件でリチャード・シンクレアのベース・プレイを連想してしまう。マイルス・デイヴィスの門下生であるジョン・マクラフリン、あるいは彼の率いていたMAHAVISHUNU ORCHESTRAの影響も強い。フィル・ミラーなどもハッキリとそれを口にしている。

ミュージシャンが同時代の音楽に関心を抱くのは当たり前の話であり、いくら独創的な音楽であってもそれが無から生じた訳ではないということはカンタベリー・ミュージックも例外ではなかった。

カンタベリー・ミュージックの成立を見て行く上で非常に重要なのがレーベルの介在だ。そもそもカンタベリー・ミュージックはマイナーなミュージック・シーンなのだが、それでいてそこでレコード会社の果たした役割は見逃すことが出来ない。

黎明期に於いてはさすがにレコード会社との契約もそれぞれに苦労があったに違いない。SOFT MACHINEもあまりスッキリとした契約では始められなかった。Polydorからシングルを発表した後、アメリカのProbeからアルバムを発表。漸くイギリスのCBSと契約したは1970年代に入ってからのことだ。CBSは以後、エルトン・ディーン、ロバート・ワイアット、ヒュー・ホッパー、MATCHING MOLEらのアルバムも発表したが、シーン全体の中で果たした役割はあまり大きくない。CARAVAN、EGG、KHANと契約したDeramもシーンでの役割はそれ程のものではない。Harvestもケヴィン・エアーズと専属契約を結んだに過ぎない（後にはSOFT MACHINEと契約したが）。

やはり何と言ってもカンタベリー・シーンの大きな後ろ盾となったのは新興レーベルVirginの存在だった。彼らはマーケットとして明確にカンタベリー・ミュージックを売り物にした。マイク・オールドフィールド、HATFIELD AND THE NORTH、HENRY COW、GONG、ロバート・ワイアット、スティーヴ・ヒレッジ等々、シーン全体の育成を目標に纏めて面倒を見るというVirginの果敢な姿勢は実際に相当の成功を修めた。レディー・ジューン、ロル・コックスヒル、GILGAMESH等、あまりにもマイナーなものについては傘下のCarolineを通じてバック・アップするという大変な肩入れ振りだ。その上、同じレーベルのFAUSTやSLAPP HAPPY、COMUS、CAPTAIN BEEFHEART & HIS MAGIC BAND、ペッカ・ポーヨラといったミュージシャンをカンタベリーのミュージシャンに引き合わせ交流を図るなどの業績も極めて大きな意義を持っていた。

Virgin程ではないが、ジョルジョ・ゴメルスキーの設立したフランスのレーベルBYGも初期のGONGや、SOFT MACHINEの未発表曲集を世に出すなど得難い援助を果たしている。ゴメルスキーはその後もデヴィッド・アレンに様々な形での応援を続けている。

デヴィッド・アレンが設立したCharlyレーベルも多大な貢献をしている。アレン自身やジリ・スミス、あるいはNEW YORK GONGのアルバムを発表したのは勿論のこと、Virginとの契約を切られて途方に暮れていたNATIONAL HEALTHや、SOFT HEAP、GILGAMESHなどのアルバムを発表し、カンタベリー・シーンの最後の砦となる。Affinity もCharlyの傘下だ。

再結成後のCARAVANを支えたのは、マネージャーのテリー・キングが設立したKingdomだった。勿論イギリスを拠点としているが、当初はフランスでディストリビュートを行なうという変則的な形となった。

フリー・ジャズ専門のOgunはハリー・ミラー、キース・ビールらによって設立され、キース・ティペット、エルトン・ディーン、マーク・チャリグ、マイク・オズボーン、ニック・エヴァンス、ハリー・ベケット、それにミラー自身といったミュージシャン達の作品を積極的に紹介し、必然的にカンタベリー・ミュージックのジャズ・サイドを支援する形となった。

Virginがカンタベリー・ミュージックに見切りを付けたことにより、最も目覚ましい反撃を見せたのが言うまでもなくRecommended Recordsだ。R. I. O.により設立されたこのレーベルは、ほかにRēやArc、Woof、Sync Pulseなどの傘下レーベルを持ち、また世界各国にその支部組織を形成してそれぞれに独自のリリースを行なうという見事な広がりを見せ、本体は勿論HENRY COWファミリーを主体としたアイテムを全面的に打ち出し、支部組織に於いては世界各国のユニークで一筋縄で行かない実力派を幅広く支援している。

Virginに見放された中で、ロバート・ワイアットはニュー・ウェイヴ系の新興レーベルRough Tradeと契約。このレーベルには間接的ではあるがHENRY COWファミリーの連中も様々に絡んだ。THIS HEATの2作目やREGULAR MUSICもここから出ている。また、アメリカのアヴァンギャルド・ロック系の新興レーベルRandom RadarやRalphは独自にアメリカのカンタベリー系バンドを発掘し、フレッド・フリスやロル・コックスヒルとも契約を結んだ。

アメリカに設立された。Europaは、まるでカンタベリー救援組織のようなレーベルだ。アラン・ガウエンの遺作や、NATIONAL HEALTHの3作目、或いはピーター・ブレグヴァッドやジョン・グリーヴス、ゲイリー・ウィンドらのソロ・アルバムを発表しており、どうやらフランスにも支部があるようだ。

最近ではジャズ系のImpetusや、ドイツのNo Man's Land、フランスのAYAAといったレーベルのアイテムが興味深い。また、デイヴ・アンダーソンが設立したDemi－Mondeや、レア・アイテムの発掘に力を注いでいるReckless、もっとメジャーではあるが、Island傘下のAntillesや、Virgin傘下のVentureも一部カンタベリー・ミュージック系のミュージシャンを起用しており、目が離せない。

以上はほんの氷山の一角であり、個人的な自主制作レーベルは数多い。ことほどさように、カンタベリー・ミュージック・シーンに於いてレーベルの果たした役割は大きい。

カンタベリー・ミュージック・シーンは、基本的には、些か規模の大きなミュージシャン達の仲良しグループであり、殊更に組織されたものではない。しかし、何かとつるんでいたためにレコード会社が纏めて面倒を見る成り行きとなったのだろう。つるんでいる、というレヴェルでは何人かの仕掛人はいた。その最初はデイヴ・ステュワートとクリス・カトラーによるOttawa Music Companyがそうだった。両人の思惑などおそらく遥かに超えて広がってしまったのがカンタベリー・ミュージック・シーンだったのかも知れない。HATFIELD AND

THE NORTH や NATIONAL HEALTH というバンドもある意味でシーンの縮図のような存在だったと言えよう。異なった場所で活動していたミュージシャン達が、音楽的な近親性を拠り所に寄り集まって来る。そして、ハッキリと組織作りを打ち出したのが、またしてもクリス・カトラーだった。カトラーの組織したR. I. O.は、結果としてカンタベリー・ミュージックを世界中に拡散させた。最早カンタベリー地方の音楽などではなく、全世界に共通の言語となったのだ。

改めて世界に広がったカンタベリー・ミュージックを振り返ると、最初の反応は意外だがオランダで起こった。SUPERSISTER というバンドは間違いなくEGGの影響を受けたバンドであり、後にエルトン・ディーンが参加することになるが、極めて早い時期のエピゴーネンとして特筆に価する。

イタリアの AREA もハッキリと SOFT MACHINE の影響を公言しているバンドであるが、彼らの場合はそれ以上に際立った独自性と超一流の技術、それに強力な求心力を持っていたため、ちょっと聴くとあまりカンタベリー色は感じられないかも知れない。

イタリアではPICCHIO DAL POZZO の存在を指摘すべきだろう。1作目では SOFT MACHINE や HATFIELD AND THE NORTH の、2作目では HENRY COW の影響を露骨に表しており、どちらもカンタベリー・ミュージック・ファンの必聴盤だ。

フランスの POTEMKINE もカンタベリー系のジャズ・ロック・バンドとして知られている。3枚のアルバムが残されている。

同じくフランスの ABUS DANGEREUX は1980年代より活躍しているジャズ・ロック・バンドだが、1作目の「Le Quatrieme Mouvement」はMAGMA とカンタベリー・ミュージックの強い影響下にある傑作だ。残念ながらそういった特異な音楽性は徐々に薄れてしまったが、4枚のアルバムを発表した後、現在では ABUS と改名して今も頑張っている。

ベルギーの COS はギタリスト、ダニエル・シェルの率いるバンドであり、初期は相当カンタベリー色の強い演奏を聴かせた。その後変に屈折したポップ・サウンドを打ち出し支持層を失ってしまったようだ。COS のメンバーだったマルク・オランデルの率いる AKSAK MABOUL (AQSAK MABOUL) もカンタベリー色を打ち出し、1作目ではジェフ・リーも一部参加したが、2作目ではフレッド・フリスとクリス・カトラーの全面的な参加もあって、硬派のカンタベリー・ミュージックを繰り広げる。しかし、その後バンドは同じくオランデル率いるポップ・バンド、THE HONEYMOON KILLERS に吸収され消滅してしまった。

スウェーデンの SAMLA MAMMAS MANNA (ZAMLA MAMMAZ MANNA) は、やや癖のある民族音楽風のプログレッシヴ・ロックを演奏していたが、次第にカンタベリー色を増し、やがて VON ZAMLA と改名して極めて質の高いユニークなカンタベリー・サウンドを追求する。

アメリカで結成された THE MUFFINS は、PICCHIO DAL POZZO 同様、HATFIELD AND THE NORTH 等の強い影響の下、次第に HENRY COW の影響を強めて行ったジャズ・ロック・バンドであり、4枚のアルバムが残されているが、海賊盤もどきの2作目以外はいずれもファンの必聴盤だ。また、THE MUFFINS のオリジナル・メンバーだったマイケル・ゼントナーのソロ・アルバム「Present Time」は、デヴィッド・アレンやフレッド・フリス、ピーター・ブレグヴァッド、ジョン・グリーヴス、ハンスフォード・ロウといったカンタベリーゆかりの連中や、パーシー・ジョーンズ、ケンウッド・デナード、カーラ・ブレイ、あるいは元 HAPPY THE MAN のフランク・ワイアット、MATERIAL のビル・ベーコン等錚々たるミュージシャンをゲストに迎えた途轍もない作品であり、聴き逃す訳に行かない。

そのほかにも、R. I. O. を通じて、スイスの DEBILE MENTHOL、メキシコの NAZCA、アメリカの BIRDSONGS OF THE MESOZOIC 等々のバンドが数限りなく紹介されており、とても凡てを網羅するようなスペースは今ない。

こうしてカンタベリー・ミュージック・シーンを俯瞰して見ると、改めてカンタベリー・ミュージックが様々な音楽を取り込んでとても一面的には捉えられないことが判る。

最大公約数的にはジャズ・ロックが基本になっていると言えそうだが、例外などいくらでも浮かんで来るので厄介だ。

所謂プログレッシヴ・ロック色は考えてみると殆どのバンドに見当らない。精々 CARAVAN やマイク・オールドフィールド、あるいは EGG に見られるくらいのものだ。

もろにジャズというミュージシャンも少なくなく、ある時期の SOFT MACHINE がそうだったし、当時のメンバー、エルトン・ディーンやヒュー・ホッパーも今ではどっぷりジャズに漬かっている。スティーヴ・ミラーもすっかりジャズ・ミュージシャンだ。

ポップスではないかと言いたくなるミュージシャンも意外に多く、ケヴィン・エアーズや CARAVAN、THE LODGE は勿論のこと、今ではマイク・オールドフィールドや STEWART & GASKIN も立派にポップスだ。HATFIELD AND THE NORTH だって結構ポップ色は強かった。

アヴァンギャルド・ロックという言い方を普通するかどうか知らないが、そういうジャンルがあるとすれば、MATCHING MOLE などまさにそれだった。ニューウェイヴ以降では、THIS HEAT や CAMBERWELL NOW もそうだし、ART BEARS、THE WORK、MASSACRE なども そう言えよう。

それに対し、フィル・マンザネラやスティーヴ・ヒレッジなどはごく普通のロックと言えそうだ。デヴィッド・アレンや RANDOM HOLD も普通のロックだ。

フリー・ミュージックと言えば、やはり HENRY COW、或いはフレッド・フリスのソロが筆頭に浮かんで来るし、ロル・コックスヒルもいる。

一時もてはやされたチェンバー・ロックもそもそも HENRY COW の一派から生まれて来たようなものだ。リンゼイ・クーパーのソロなどそういった色合が強い。

序でに付け加えれば、ニューエイジ・ミュージックだってしっかりと手を染めている。フィル・マンザネラの「Primitive Guitars」、スティーヴ・ヒレッジの「Rainbow Dome Musick」、ハリー・ウィリアムソンがアンソニー・フィリップスと作り上げた「Tarka」といった作品を引き合いに出すまでもなく、何と言ってもマイク・オールドフィールドこそ元祖ニューエイジ・ミュージックの第一人者だった。

これだけ多様な音楽性を持ったムーヴメントをどう判断すればいいかと言えば、これはもう何度も書いたように、強固な同胞意識でつるんでいる仲良しグループというほかあるまい。さすがにこれだけ拡散を続け、これからもそれを続けて行けばいずれムーヴメントとしてのパワーは稀釈されて行くだろう。それでも尚解体しないだろうということも予想される。これが彼らのしたたかな所だ。どんな状況にも適応して自らのバンドを保持する柔軟性が彼らをここまで導いて来た。聴く側としては後は情報だけを見失わないことだ（これが案外難しい)。

本当の所、カンタベリー・ミュージックにだけ網を張っていたんじゃ手不足だ。彼らが興味を抱きそうな音楽シーンに先手先手で網を張って行かなければ必ず見失ってしまうだろう。おそらく敏感なファンは無意識の内にでもそういった音楽の聴き方をしているに違いない。今のプログレッシヴ・ロック・ファンを見ているとあまりにも近視眼的ではないかと心配を覚えることがある。例えば日本にも相当大勢いた筈の BRAND X や BRUFORD のファンが今何を聴いているのかを考えてみれば、せめてジョン・スコフィールドやスコット・ヘンダーソンくらいは聴いていて欲しいし、出来ればビル・フリーゼルやデヴィッド・トーン、スティーヴ・コールマンなんかもキッチリ押さえておいて欲しい。今現在のジャズ・ロックと言ったらそれくらいは常識なのだから。勿論ウェイン・ショーターやマイルス・デイヴィス、ジョン・マクラフリン、マイク・スターンを忘れてはいけない。ましてジョン・ゾーンて誰だろう、なんてとぼけたことを疑問に思っている人間は自分の不明を恥じていい。ジャズ・ロックなんてどうでもいいと思っている人間はその限りではないが。それにしたって、せめて渡辺香津美、近藤等則、梅津和時、坂田明くらいは押さえておくべきだし、坂本龍一や井上鑑なんかも外すと痛い。そういうことなのだ。

カンタベリー・ミュージック・シーンは今も生きている。それが感じ取れるかどうかは聴き手の感受性にかかっている。鋭敏な感性の持ち主にはビリビリと聞こえる筈だ。さて、あなたには聞こえるだろうか。

補遺

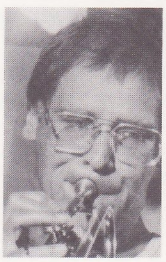
カンタベリー・ミュージックと関わりのない所で既に高い評価を得ているふたりのジャズ・ミュージシャンとカンタベリーのミュージシャンとの交流もここで採り上げておきたい。

ひとりは、アメリカのトランペッター、マイケル・マントラーだ。彼は夫人のカーラ・ブレイとの共同作業で前衛ジャズ・シーンに確固たる足跡を残している人物だが、カーラ・ブレイの陰に隠れて日本では今一つ地味な存在だ。しかし、彼の作曲はプログレッシヴ・ロック・ファンにアピールする部分の多い緊迫感のあるジャズ・ロックであり、まず誰よりもカンタベリー・ミュージック・ファンが聴くべきものだ。特に1976年に発表された「The Hapless Child」は全曲ロバート・ワイアットが歌いまくる変拍子中心の素晴らしい内容だ。ノルウェイのギタリスト、テリエ・リピダルの参加も強力だ。ワイアットは1988年発表の「Many Have No Speech」にも参加している。

もうひとり、イギリスのピアニスト、マイク・ウェストブルックは1960年代後半より特異なブラス・サウンドを打ち出してジャズ・ファンに知られている。彼は1977年、HENRY COW と共演してブレヒト、アイスラーの曲を採り上げたことにより急速にカンタベリー・ミュージックに接近し、1980年発表の「The Westbrook Blake／Bright As Fire」でその一端を覗かせた後、1982年発表の3枚組アルバム「The Cortege」でリンゼイ・クーパー、ジョージー・ボーン、スティーヴ・クックらを迎えて壮大な組曲を展開する。ここでの音楽はHENRY COW サウンドと後期 SOFT MACHINE のジャズ・ロックを融合したような内容であり、非常に聴き応えがある。リンゼイ・クーパーとはその後も、1987年発表の2枚組ライヴ・アルバム「Westbrook—Rossini」で共演している。

勿論ジャズ・ミュージシャンとの関わりを云々し始めたら幾らでも話題は尽きないのだが、カンタベリー・ミュージックの拡大を考える上でこのふたりについては特に注意が必要だろう。これからもどんなミュージシャンがカンタベリー・ミュージックと相まみえて行くか判らないというのがまた面白い所だ。

■マイケル・マントラー

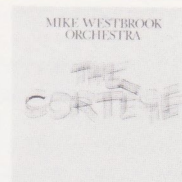




The Hapless Child
'76

■マイク・ウェストブルック

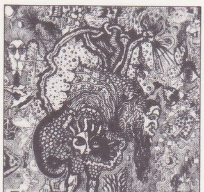




The Cortege
'82

CATALOG
CANTERBURY

ARZACHEL



Arzachel

Evolution Z 1003
'69年

Simeon Sasparella(Steve Hillage):lead-g, vo
Njerogi Gategaka(Mont Campbell):b,vo
Basil Dowling(Clive Brooks):ds
Sam Lee-Uff(Dave Stewart):org

Produce:Peter D.Wicker

ケント大学へ進学するためにS・ヒレッジが脱退したためEGG へと発展していく、URIEL のメンバーが再び集まり変名で発表した作品。もともと彼らがやっていたアンダーグラウンド系ビート・ポップの焼き直し的ナンバーに、EGG を思わせるクラシカルなメンバーを同居させたつくりで、SOFT MACHINE のナンバーなどに触発されたヒレッジがアヴァンギャルドなプレイを披露する部分もあり、全体の印象はつかみづらい。古くささとサイケデリック色が時代を感じさせるが、ヒレッジのギター・ワークの進化のルーツを見る上では重要な作品だ。　(深民)

KEVIN AYERS



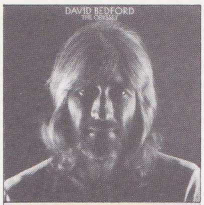
The Confessions Of Dr. Dream And Other Stories

Island ILPS 9263
'74年

Kevin Ayers:vo,ac & el-g,p
John Perry:b
Rupert Hine:per,syn, el-p,org,clavinet
Mike Giles:ds
John Gustafson:b
Mike Ratledge:org
Lol Coxhill:sax
Mark Warner:ac & el-g
Nico:vo
Mike Oldfield:el-g
Sam Mitchell:el-g
Doris Troy,Rosetta Hightower,Sean Milligan,Joanne Williams:back-vo
Ray Cooper:per
Mike Moran:p
Steve Nye:el-p
Simon Jeffes:brass-arr.
Produce:Rupert Hine

K・エアーズは、数多いカンタベリー系のミュージシャンの中でも、ひときわ光彩を放つ孤高の異端児である。本作は、古巣EMI からアイランドに移籍した当初の、通算5作目にあたる作品である。A面には、ブルースとエアーズならではのポップなバラードをうまく融合させた小気味のよい小曲を散りばめ、B面では、タイトルの「夢博士の告白」というスリリングな組曲を披露している。ニコの粘り気のあるボーカルに導かれて奈落の底まで引きずり込まれていくようなサウンド空間は、まさに圧巻の一言。また、ルパート・ハインを始め、多才なゲストの顔ぶれも見事。(山本)

DAVID BEDFORD



The Odyssey

Virgin V 2070

'76年

David Bedford:key
with
QUEEN'S COLLEGE CHOIR:choir
Mike Oldfield:g
Andy Summers:g
Anne Murray:rec
Rosalind Kandler:rec
Layne Halstead:oboe
Nicolette Alvey:syn
Sophie Dickson:vo
etc...

Produce:Peter Jenner

ベッドフォードは、元々若手現代音楽家として活躍していた（この時期の作品も数曲レコード化されている。）が、マイク・オールドフィールドやケヴィン・エアーズとの交流により、ロック・フィールドで活動していくことになる。'72年リリースの「Nurses Songs With Elephants（DANDELION 23 10165）」を始め、'85年の「Rigel 9」まで6枚のソロがある。'75〜'77年あたりの作風が最も耳ざわりの良いもので、マイク・オールドフィールドにも一脈通じる、スコットランドの大地を連想するかのような、雄大でしめりけのある世界を創り出している。アレンジャーとしても著名。（山崎）

PETER BLEGVAD



The Naked Shakespeare

Virgin V 2284

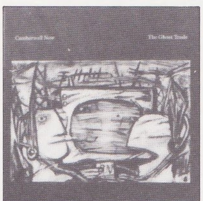
'83年

Peter Blegvad:vo,g,clave
with
Anton Fier:ds,lynn-ds
Andy Partridge:syn,turntables,lynn-ds,back-vo,shaker,mtn,vocoder,b,el-g,per
David Lord:syn
Colin Moulding:b
John Greaves:syn,p,b
Georgie Born:cel
Maggie Reily:back-vo
Dave Stewart:syn,lynn-ds,simmons
Jakko:g
Barbara Gaskin:back-vo

Produce:Andy Partridge & Dave Stewart

ピーター・ブレグヴァッドはSLAPP HAPPY解散後、そもそもアメリカ人ということもあってずっとニューヨークを拠点に活動を続けている。しかしイギリスのシーンとは密接に繋がっており、カンタベリー・ミュージシャン達のアメリカ進出に大きな力となった。この彼のソロ第1作目はずっと活動をともにしていたジョン・グリーヴスのほか、多くのカンタベリー・ミュージシャンに支えられ実に爽やかなポップ・サウンドが繰り広げられており、XTCのふたり、特にアンディー・パートリッジの全面的協力もいい形で実を結んでいる。その後2枚のソロが出ている。（坂本）

CAMBERWELL NOW



The Ghost Trade

Ink Records. INK19

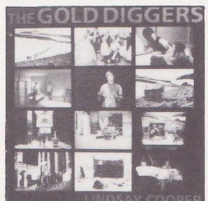
'86年

Trefor Goronwy:vo,b,g,erh hu,per,etc..
Charles Hayward:vo,ds,key,etc...
Stephen Rickard:recordings,tape,switchboard,autoharp,etc...
with
Mary Philips:vo
Polly Edmett:vo
friends and neighbours:vo

Produce:?

CAMBERWELL NOWは、ロック史上に極めて特異な足跡を残したTHIS HEATに引き続き、チャールズ・ヘイワードが率いたトリオであり、THIS HEATにも通ずる刃物のように研ぎ澄まされた音の輪郭は健在だが、リズム構造はずっとシンプルなものになっている。新たに加わった奇妙な抒情性も不思議な魅力を放っており、THIS HEATとは別の次元で突出した音楽性を打ち出している。トレファー・ゴロンウィーの音数の多いベース・プレイがサウンドの要だ。乱暴に言うなら、ニュー・ウェイヴ色とプログレッシヴ・ロック色が同時に増している。知られざる好グループ。（坂本）

LINDSAY COOPER



The Gold Diggers

Sync Pulse SYNC PULSE 0617

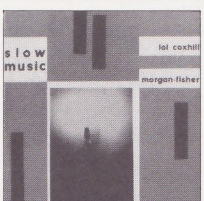
'83年

Lindsay Cooper:bsn,a&s-sax,oboe,p,g
with
Georgie Born:cel,g,b
Marilyn Mazur:ds,per
Eleanor Sloan:vln
Kate Westbrook:t-horn
Sally Potter:vo
Colette Laffont:vo
Phil Minton:vo
Lol Coxhill:sax
Dave Holland:p

Produce:BRITISH FILM INSTITUTE

あいにくその内容は知らないが、同名のイギリス映画のサントラ盤がこれだ。制作者の殆どが女性であり、フェミニズムをテーマとした作品であることは想像に難くない。演奏者も勿論女性が主役だ。おなじみの名前が並んでいるが、中では、近年マイルス・デイヴィスやウェイン・ショーターのバンドで活躍しているマリリン・マズールの参加が興味深い。リンゼイ・クーパーの独特のノスタルジックな音楽性は、その後NEWS FROM BABELへと発展して行く。クーパーは数枚のソロ・アルバムを発表しているが、いずれも甲乙つけ難い力作だ。これは2作目に当たる。（坂本）

LOL COXHILL&MORGAN FISHER



Slow Music

Pipe PIPE 1

'80年

Morgan Fisher:g,b,vo,tape manipulation
Lol Coxhill:sax,vo

Produce:?

ロルは、カンタベリー派でありながら様々なセッション、多数のソロ作品も発表し、多彩な活動をしている。モーガンはBRITISH LIONS解散後、ソロ活動に入り「Hybrid Kids」「Miniatures」等、興味深い作品を発表している。A面は、飄々としたソロが多いロルだが、淡白な透明感のあるソロで始まる。サックスのフレーズを繰り返し、ポリリズムの効果を狙った曲、実験的な重層音と続く。B面はモーガンによる24分以上のミニマル的性格の強い作品。そして異色作、ロルのヴォーカルが聞ける小作品で終る。全体的にアンビエント色の強い作品。（吉野）

CHRIS CUTLER&FRED FRITH



Live In Prague And Washington

ReRecords Re1729

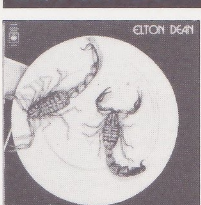
'83年

Fred Frith:g,adapted-g,6-str-b,vln
Chris Cutler:ds,el-ds,noise

Produce:?

1979年に行なわれたふたつのステージを収録したアルバムであるが、メインは飽くまでもプラハでの演奏だ。HENRY COW以来の、相手のプレイを知り尽くしたふたりによる完全なフリー・インプロヴィゼイションが繰り広げられている。たったふたりでこれ程豊富な音を作り出してしまうのが凄い。その美しさ、激しさ、躍動感、そして優しさ。どれをとってみてもロックそのものであり、百凡のフリー・ミュージシャンには決してまねの出来ないものだ。これまでに聴いたあらゆるフリー・ミュージックの中の最高峰だ。胸のすくような絶妙なる呼吸が見事。快感！（坂本）

ELTON DEAN



Elton Dean

CBS 64539

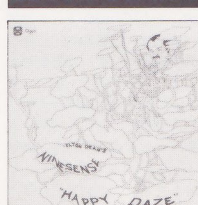
'71年

Elton Dean:a-sax,saxello,el-p
Phil Howard:ds
Mark Charig:cor
Neville Whitehead:b
with
Mike Ratledge:el-p,org
Roy Babbington:b

Produce:Elton Dean

まだSOFT MACHINEに在籍中だった1971年5月にレコーディングされたエルトン・ディーンのファースト・アルバムだ。当時率いていたJUST USが録音に加わっている。一時やはりSOFT MACHINEに参加していたフィル・ハワードがメンバーだということもあり、「Soft Machine 5」に通じる先鋭的なジャズが繰り広げられている。マイク・ラトリッジも参加したB面の演奏が圧巻だ。以後ディーンは様々なフォーマットでリーダー作を発表しているが、理想的な形で彼の音楽性が発揮されているのは、この処女作と「Cruel But Fair」の2枚だと思う。（坂本）

ELTON DEAN'S NINESENSE



Happy Daze

Ogun OG 910

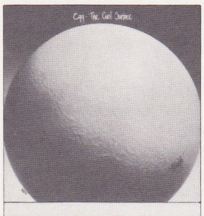
'77年

Elton Dean:a-sax,saxello
Alan Skidmore:t-sax
Harry Beckett:tp,flh
Marc Charig:cor
Nick Evans:tb
Raudu Malfatti:tb
Keith Tippett:p
Harry Miller:b
Louis Moholo:ds

Produce:Elton Dean, Keith Beal

ブリティッシュ・ジャズ界を代表する人物により構成されているNINESENSEの2作目。リーダーのエルトン・ディーンはこのユニットを、「昔のKEITH TIPPETT GROUPの精神を今に引き継いだものである」と語っている（アルバム的に見ると1、2の頃）。ブラックネル・ジャズ・フェスティバルの為に依頼製作されたこの「Happy Daze」は、キース・ティペットのピアノによってゆっくりと幕を開け、感情の高ぶりをそのまま音にしたように展開してゆく。しかも、乱調するのではなく、理路整然とした中で各プレーヤーのパワーが音の輝きとなって存在している。（佐藤）

EGG



The Civil Surface

Caroline C1510

'74年

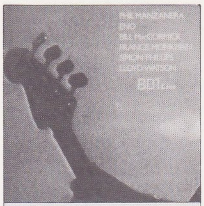
VJ:VJD-5026

Dave Stewart:org,p,b
Clive Brooks:ds
Mont Campbell:b,vo,p,frh
with
Jeremy Baines:germophone
Lindsay Cooper:oboe,per
Tim Hodgkinson:cla
Amanda Parsons,Ann Rosenthall,Barbara Gaskin:vo
Steve Hillage:g

Produce:EGG

'69年、'70年に2枚のアルバムを発表したEGGはその時点で解散状態となり、キーボーダーのデイヴ・ステュワートは友人スティーヴ・ヒレッジのグループKHANにゲスト参加した後、HATFIELD AND THE NORTHへと進んでいくことになる。が、HATFIELD〜のファースト発表の年、一時的にEGGを再編して本作をリリースするのである。構造的には全3作の内最も難解なもので、演奏水準にしても彼等の作品中最高のもの。モント・キャンベルの現代音楽風の曲もあるが、メインはHATFIELD〜にも似たディヴの成熟したプレイで、彼のベスト・プレイの一つが聴けるのである。（山崎）

801



Live

Island ILPS 9444

'76年

VJ:VJD-28058

Phil Manzanera:g
Lloyd Watson:g,vo
Simon Phillips:ds
Bill MacCormick:b,vo
Eno:key,vo
Francis Monkman:key

Produce:801

発表当時は、随分と実験的コンセプトということで話題を集めたが、今の耳で判断すると、むしろセッション的イメージの方が強い。アレンジどうのこうのより、既存の曲をどう解釈するかの高みに昇った感が強い。その上いずれ劣らぬ実力者達の自己主張と、古くからの仲間による気安さがうまく調和し、稀にみる密度の高い演奏が生まれたといってもいいであろう。イーノのいささか、腺病質なキーボードが気にはなるが、全編を貫く緊張感は、感動ものである。一糸乱れぬアンサンブルの見事さと曲間の切り返しの素晴らしさは語りつがれる価値を充分有している。（法水）

FRED FRITH



Gravity

US;RalphFF8057-L

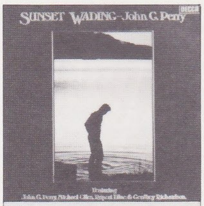
'80年

Hans Bruniusson:ds
Fred Frith:b,g,vln,key,ds
Lars Hollmer:p,org,accordion
Marc Hollander:sax,cla
Tom Scott:sax

Produce:Fred Frith

HENRY COW解散後、フレッド・フリスは精力的にソロ、デュオ及びセッション活動を行うようになる。アメリカはRESIDENTSでお馴染ラルフ・レーベルより3枚のバンド志向の作品を発表し、本作はその1作目。A面はZAMLAのメンバーと共に実験的で民族色の濃い内容。B面はマフィンズ、マルク・オランデル（AKSAK MABOUL）との実験的ブラス・ジャズの小品集。ETRON FOU LELOUBLANと共演した「Speechless」そして「Cheap At Half The Price」をリリースする。ジャケットはR・ワイアット夫人Alfredaに依る。（吉野）

JOHN G. PERRY



Sunset Wading

Decca SKL 5233

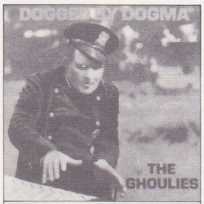
'76年

John G.Perry:b,vo,p
Michael Giles:ds
Rupert Hine:p,el-p,celeste,syn,vo
Geoffrey Richardson:vla,fl
Morris Pert:marimba,vib,per
Elio Danna:a&s-sax,fl
Carrado Rusticci:g
Beryl Streeter:vo
Roger Glover:syn
Simon Jeffes:koto,arr,cond.
Gary Wright:vln
Steve Rowlinson:vln
Levine Andradi:vla
Helen Liebmann:cel

Produce:Rupert Hine

元TRANQUILITYのベーシストであり、CARAVAN、CURVED AIR等でも手堅いプレイを見せたジョン・G・ペリーがブリティッシュ・ロック・シーンの強者や元OSANNAのエリオ・ダンナ、コラード・ルスティッチらと作り上げたソロ・アルバム。派手な演奏こそないが、各ミュージシャンがそれぞれの持ち味を発揮して中身の濃い演奏を展開している。ゆったりとした、しかし細かい部分にまで気を配ったプレイは各人の実力とキャリアを感じさせる。演奏全体のまとまりも非常に良く、流麗な印象を与える。正にブリティッシュ・ロックならではの一枚である。（賀川）

THE GHOULIES



Dogged ByDogma

Lounging LA 01

'82年

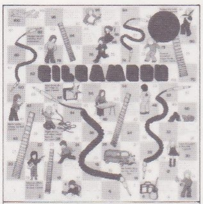
Group One(A1,3,B2)
Charlie Summers:vo,g,flageolets,org
Phil John:b,vo
Nigel Harris:ds,per
Spike Reptile:vln,g,vo
Ben Wilson:vo,b

Group Two(on rest of album)
Charlie Summers:g,vo
Dave Stewart:key
Pip Pyle:ds
Jake Bowie:b
Elaine Morgan:vo
James Driscoll Jnr:sexism

Produce:Ben Wilson & Charlie Summers

リチャード・シンクレアによく似た声と、フィル・ミラーを思わせるギター・サウンドを持つチャーリー・サマーズが率いるこのバンドは、HATFIELD AND THE NORTHの再来だ。なんと言ってもデイヴ・ステュワートとピプ・パイルの参加が心強い限りだが、他のミュージシャンも若々しいプレイで応戦し、怯んではいない。2チームに分かれているのは録音時期が違うのかも知れない。彼らの活動は少なくとも1980年まで遡れる。ジャコらと並ぶ新しい世代のカンタベリー・ミュージックの継承者の出現は嬉しい驚きだったが、この後の活動が伝わって来ないのが気になる。（坂本）

GILGAMESH



Gilgamesh

Caroline CA 2007

'75年

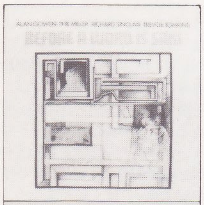
VJ:VJCP2534

Phil Lee:g
Alan Gowen:key
Jeff Clyne:b,double-b
Michael Travis:ds,per
Amanda Parsons:vo

Produce:GILGAMESH & Dave Stewart

GILGAMESHは1973年より活動を始め、多くのメンバー・チェンジを経て漸くしてこのアルバムを発表した。HATFIELD AND THE NORTHとの交流が深く、このアルバムもデイヴ・ステュワートがプロデュースをかって出ている。歴代のメンバーにはニール・マレイ、スティーヴ・クック、ピーター・レマーらがおり、このアルバムの録音に参加していると言う噂もある。アマンダ・パーソンズはゲスト参加と見ていい。アラン・ゴウエンの処女作であり、最もロック色の濃い作品だ。この年バンドはNATIONAL HEALTHへと吸収され、解散した。但し、その後1度再編されている。（坂本）

GOWEN/MILLER/SINCLAIR/TOMKINS



Before A Word Is Said

US;EuropaJP2007

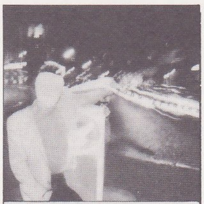
'82年

Alan Gowen:key
Phil Miller:g
Richard Sinclair:b,vo
Trevor Tomkins:ds

Produce:Jean-Pierre Weiller

1981年5月17日に白血病でこの世を去ったアラン・ガウエンの、その死の僅か2〜3週間前に録音された遺作だ。しかしこのアルバムにそんな死を匂わせるようなものは何もない。ガウエンの演奏は肌理細かくカラフルで華麗だ。だから純粋に音楽を楽しむことが出来る。馳せ参じたフィル・ミラーとリチャード・シンクレアの共演ぶりが素晴らしい。シンクレアの参加はかなり意表をついたものと言えよう。殆どの曲をミラーとガウエンが持ち寄っており、本来ふたりの共作と言った色合が強かったのではないだろうか。よくぞこんな録音を残してくれたと4人に感謝したい。（坂本）

JOHN GREAVES



Accident

仏 Europa JP 2010

'82年

John Greaves:vo,key,b
Armand Frydman:key
Pascale Son:vo
Jacqueline Cahen:vo
Pip Pyle:ds,el-ds
Kurt Rust:ds
Philippe Gisselman:a&s-sax
Yochk'o Seffer:sax
Marc Richard:a-sax,cla
Dominique Guiot:el-g
Jean-Luc Fauvel:ac-g
Jean-Michel Bertrand:per
Geoffrey Richardson:vla

Produce:John Greaves & Armand Frydman

ジョン・グリーヴスの初のソロ・アルバムは参加ミュージシャンがただ事ではない。いくら何でもここまで顔が広いとは……。そのくせ殆どの曲がピーター・ブレグヴァッドとのコラボレイションであり、もう何の躊躇もなく独自のポップ・ミュージックを作り上げている。その後の彼の展開からは充分に納得の行く作品だが、HENRY COWやNATIONAL HEALTHでのプレイを期待すると衝撃を受ける筈だ。ここで彼は飽くまでソングライターとして本格的に活動を開始したのであり、近年のデイヴ・ステュワートやジャコと同等に評価するのが正しいだろう。聴く価値はある。（坂本）

JOHN GREAVES&PETER BLEGVAD



Kew. Rhone.

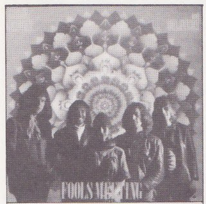
Virgin V 2082
'77 年

Lisa Herman:vo
John Greaves:key,b,vo,per
Peter Blegvad:vo,g,t-sax
Andrew Cyrille:ds,per
Mike Mantler:tp,tb
Carla Bley:vo,t-sax
Michael Levine:vln,vla,vo
Vito Rendace:a&t-sax
April Lang:vo
Dana Johnson:vo
Boris Kinberg:clave

Produce:?

HENRY COWファミリーのふたりが組んで、アメリカで制作した不思議な作品だ。マイク・マントラー、カーラ・ブレイ夫妻が全面的にバック・アップしており、両方の音楽性が見事に溶け合って、非常に質の高い音楽作品を築き上げている。カンタベリー・ミュージックが世界に拡散して行くその先駆けだったとも言えよう。音楽家としてジョン・グリーヴスの才能が初めて明示された作品であり、以後彼はソロ・アルバムなどでその偉才を発揮している。1981年に再びグリーヴス、ブレグヴァッド、ハーマンらはTHE LODGEを結成し、アメリカで活動を続けている。(坂本)

CAROL GRIMES AND DELIVERY



Fools Meeting

B&C CAS 1023
'70 年

Steve Miller:p,vo
Phil Miller:g
Roy Babbington:b
Pip Pyle:ds
Carol Grimes:vo,per
with
Lol Coxhill:sax

Produce:Tony Chapman

UNCLE DOGや数枚のソロ・アルバムを発表しているキャロル・グリムスがDELIVERYを率いて発表したのがこの「Fool's Meeting」。このDELIVERYはのちのカンタベリー・プログレの強者ばかり。ゲストにあのロル・コックスヒルも参加している。このキャロル・グリムスはSTONE THE CROWSのマギー・ベルと共にイギリスのジャニスと言われた人でその渋いしゃがれ声がとても個性的だが、バックの好サポートを得て単なるロック・アルバムでは終わっていない。と言うよりもAFFINITYあたりと双璧を成す作品と言える。(三橋)

HATFIELD AND THE NORTH



Hatfield And The North

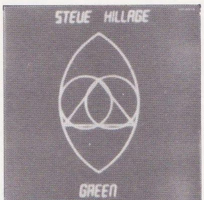
Virgin V2008
'73 年
VJ:VJD-5020

Richard Sinclair:b
Phil Miller:g
Pip Pyle:ds
Dave Stewart:org,p,tone generator
with
(THE NORTHETTS)
Amanda Parsons:vo
Barbara Gaskin:vo
Geoff Leigh:sax,fl
Jeremy Baines:pixiephone
Robert Wyatt:vo

Produce:Tom Newman & THE HATFIELS

元EGGのデイヴ・ステュワート等が加入して、さらに洗練度をました1作目。彼の自己流でありながらもエキセントリックな魅力に富むキーボード・プレイを中心に、自己主張のはっきりしたメンバー達が、バランスよく創りあげた傑作で、カンタベリーの自由な空気が感じられ、混沌としたイメージの作品である。'75年に「The Rotters' Club」(VIRGIN V2030)を残しNATIONAL HEALTHに発展。'79年にはシングル曲を含むベスト・アルバム「Afters」(VIRGIN VR 5)がリリースされている他、「V」(オムニバス)、「Over The Rainbow」(ライヴ)にも彼等の曲が収録されている。(山崎)

STEVE HILLAGE



Green

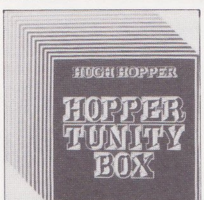
Virgin V2098
'78 年
VJ:VJCP-2532

Steve Hillage:g,g-syn,syn
Miquette Giraudy:syn
Joe Blocker:ds
Curtis Robertson Jr:b

Produce:Nick Mason & steve Hillage

4作目。GONG時代に多大な影響を受けたD・アレンの後を継ぐ形で始まった彼のソロ活動は、ここへ来てピークに達する。シーケンサーによる反復音、ディレイ音を活かした独自のギター奏法等、スペイシーなサウンドの中で、随所にハッとさせられる様な個性が感じられる。とは言え、スタイルは変化したものの、そのルーツはARZACHEL、KHANあたりまで遡るカンタベリー系のものだ。自由奔放な大胆さと一種独特な繊細さを合わせ持った彼のプレイは、おとぎ話とドラッグ、宇宙人とジャンキーの同居性を感じさせる。会った事はないが、いい奴だと思う。(沢田)

HUGH HOPPER



Hopper Tunity Box

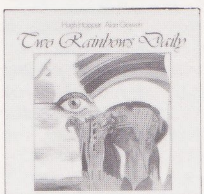
Compendium FIDARDO 7
'77 年

Hugh Hopper:b,g,rec,s-sax,per
Elton Dean:a-sax,saxello
Mark Charig:cor,t-horn
Frank Roberts:el-p
Dave Stewart:org,pianet,oscillators
Mike Travis:ds
Richard Branton:g
Gary Windo:b-cla,sax
Nigel Morris:ds

Produce:Mike Dunne & Hugh Hopper

ヒュー・ホッパーはロック・シーンにおいても、また、ジャズ・シーンにおいても、その実力を遺憾無く発揮出来る数少ないミュージシャンの一人である。こうした彼の特性を十二分に活かして作られたのが本アルバムである。ジャズ・サイドに位置するエルトン・ディーン、マーク・チャリグ、ロック・サイドのデイヴ・ステュワートなど、個性豊かな参加メンバーを独走させることなくその持ち味を見事に引き出している。ロックとジャズのそれぞれの要素が巧みにバランスした、ホッパーならではのジャズ・ロックの逸品と言える。(賀川)

HUGH HOPPER/ALAN GOWEN



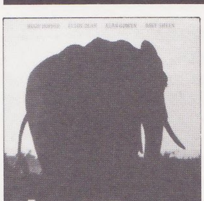
TwoRainbows Daily

Red Records Rouge 1
'80 年

Hugh Hopper:b
Alan Gowen:key

ヒュー・ホッパーとアラン・ゴウエンが多重録音によって作り上げた傑作。当時、相当地味な演奏に徹していたふたりが、こともあろうにベースとキーボードだけでこれほどに美しく、しかも躍動感のある見事な作品をたった5日間で作ってしまったというのは、今でも賛嘆に値する。カンタベリー・ジャズ・ロックの魅力の一端が結実した珠玉の1枚だ。ふたりの持つ美意識が理想的な形で表現されている。翌年他界してしまったゴウエンがこの作品を残せたのはせめてもの救いだが、発売元がマイナーなため、あまり出回らなかったのが非常に残念だ。(坂本)

HOPPER/DEAN/GOWEN/SHEEN



Rogue Element

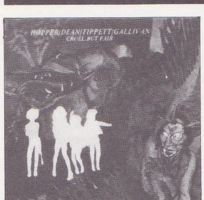
Ogun OG 527
'78 年

Hugh Hopper:b
Elton Dean:a-sax,saxello
Alan Gowen:el-p,syn
Dave Sheen:ds

Produce:Rou Barron

「Cruel But Fair」のセッションをきっかけとして生まれたと思われるこのグループはSOFT HEADの名でツアーを行い、このライヴ・アルバムを残した。ホッパー、ディーン、ゴウエンの3人をリーダーとするスーパー・グループだが、各人の演奏はいいとして、キーボードとドラムの音が今聴くとやや貧弱な気もする。ライヴであることを考慮すれば結構凝った演奏をしているのに、余りにもハッタリのない音色のせいで相当地味な印象を受けてしまう。少なくとも初心者が最初に手を出すべきアルバムではない、と忠告しておきたい。(坂本)

HOPPER/DEAN/TIPPETT/GALLIVAN



Cruel But Fair

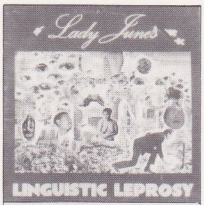
Norway;Compendium FIDARDO 4
'76 年

Hugh Hopper:b
Elton Dean:a-sax,saxello
Keith Tippett:p
Joe Gallivan:ds,per,syn

Produce:Froda Holm

アメリカ人ドラマーのジョー・ギャリヴァンが当時イギリスの若手ジャズ・プレイヤー達と制作した数枚のアルバムの中で、最も素晴らしい成果を上げた作品だ。ギャリヴァンを触媒として、エルトン・ディーンとキース・ティペットが研ぎすまされた白熱した演奏を繰り広げる。ブリティッシュ・アヴァンギャルド・ジャズの真髄が聴き取れる。この後ディーン、ティペット、ホッパーらは、それぞれこの延長上での活動を続けて行くことになるが、この作品を超えるには至っていないと言えよう。ホッパーがジャズ・シーンへの転向を宣言した作品としても重要だ。(坂本)

LADY JUNE



Linguistic Leprosy

Caroline C1509

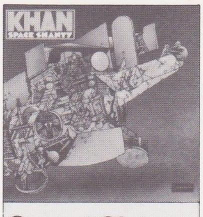
'74 年

Lady June:vo
with
Kevin Ayers:g.b.hca, vo
Kim Solomon:key
Brian Eno:key,str
Pip Pyle:ds
Martha:vo
David Vorhaus:Kaleidophone
Jakob Klaasse:p

Produce:Kevin Ayers

ケヴィン・エアーズの下宿の大家との噂のレディ・ジューンの唯一のＬＰ。実は、評価を下すのが非常に難しい作品でもある。一応トーキング・ヴォーカルを主体としたヴォーカリゼーションということになるのだろうが、楽曲構成は、当然のことながら、エアーズ色が強い。メレディス・モンクをみるまでもなく、ヴォーカリゼーションの難しさは、真にこのヴォーカルと演奏のバランスにある。結論を言えば、ジューンのヴォーカルのけだるさや詩の内容は、面白いのだが、どこか白々しい、散漫な印象をうけざるえない。そこが魅力でもあるのだが。でも好きだな。（法水）

KHAN



Space Shanty

Deram SDL-R11

'72 年

Po:P25L-25059

Steve Hillage:g,vo
Nick Greenwood:b,vo
Eric Peachey:ds
with
Dave Stewart:org,P, skyceleste,mba

Produce:Neil Slaven

スティーヴ・ヒレッジ、デイヴ・スチュワート等は'60年代後半に URIEL を結成。デイヴはこれを母体に EGG を結成するが、大学進学の為にケントへ行ったスティーヴはそこで K-HAN を結成する。レコーディングに際し、旧友デイヴ（当時 EGG は解散状態）をゲストに迎えてのラインナップになった。ディレイ効果を利用したスティーヴのギター奏法はここで確立され、デイヴのオルガンとのスリリングなかけ合い、そして巧みなコード・チェンジにより、比類なき魅力を持ったプログレッシヴ・ロックに仕上げられた。この後、スティーヴはG-ONGへと加入し、デイヴはHA-TFIELD〜へ。（山崎）

MATCHING MOLE



Matching Mole

CBS 64850

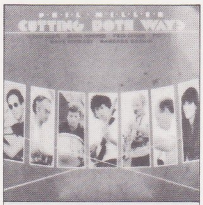
'72 年

Robert Wyatt:mtn,p, ds,vo
David Sinclair:p,org
Phil Miller:g
Bill MacCormick:b
with
Dave McRae:el-p

Produce:MATCHING MOLE

オリジナル SOFT MACHINE、カンタベリー派の重鎮。ミュージシャンとして、精神的支柱として影響力を持つロバート・ワイアット。３作目以後、急速にジャズに向った SOFT MACHINE に決別し、取り組んだ彼のこのグループは、まさに初期Ｓ・MACHINE が彼のイディオムだったことを証明してもいる。独特の浮遊感あるジャズ感覚、ユーモアある実験色、心暖まるポップ・センスを溶け合わせたようなこの１作目は、カンタベリー派の傑作に数えられておかしくない。カンタベリー・ポップス永遠の名曲、A①をはじめ、ねられた曲想、素直なメロディーが伝わる。（松本）

PHIL MILLER



Cutting Both Ways

US:CuneiformRUNE11

'88 年

Phil Miller:g
Hugh Hopper:b
Elton Dean:sax
Pip Pyle:ds
Pete Lemer:key
Dave Stewart:key
Barbara Gaskin:vo

カンタベリー・シーンを支え続けてきたギタリスト、フィル・ミラーのひさびさのアルバム。デビュー当時（DELIVERY の頃）はブルース色の強いサウンドを指向していたが、Ｒ・バビントン、Ｃ・グライムスの加入後からは、ジャズへの方向性も加わり独自のサウンドを確立。その後の活躍は衆知の事であるが、NATIONAL HEALTH 解散後、声を潜めていた彼がＥ・ディーン、Ｈ・ホッパーらと、IN CAHOOTS というバンドで'85年に復活。持ち前のクールさに力強さが加わり、硬派な作品となっている。又、Ｄ・スチュワートとの共演も２曲収録されており、華を添えている。（佐藤）

NATIONAL HEALTH



National Health

Affinity AFF6

'78 年

PC:29 ED 6030

Dave Stewart:org,p, el-p
Phil Miller:g
Neil Murray:b
Pip Pyle:ds,per
John Mitchell:per
Alan Gowen:syn,el-p
Amanda Persons:vo
Jimmy Hastings:fl

Produce:NATIONAL HEALTH

音楽形態としてのカンタベリーを定義するのは非常に難しく、種々の名盤を聴く限り、「モワー」という特殊用語に頼らざるを得ない。しかし、そのいずれの作品にも斬新な実験性が盛り込まれており、言わば「アイディアの宝庫」的な感があるのは面白い事実だ。この NATIONAL HEALTH のファースト・アルバムも、そうした名作群の中で光り輝く一枚。事実上の新生 HATFIELD & THE NORTH と見て良いが、枯れる事なく出てくるアイディアの量といったら……。このあたりのレコードをカンタベリー入門用として使うと、幸せな一生が送れる事は必至だ。（沢田）

NEIL



Neil's Heavy Concept Album

Ger;WEA 240524-1

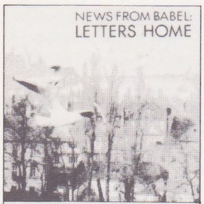
'84 年

Nigel Planer(Neil): vo
with
Dave Stewart:key,b, ds,g,vo
Jakko:g
Pip Pyle:ds
Gavin Harrison:ds
Jimmy Hastings:fl,sax,piccolo
Anni Whitehead:tb
Barbara Gaskin:vo
Ted Hayton:vo
etc...

Produce:Dave Stewart

ニールはイギリスの有名なコメディアンらしい。BAND AID のヴィデオにも出ていたと記憶している。その彼がデイヴ・ステュワートをプロデューサーに迎えて作ったのがこのアルバムだ。TRAFFIC や、PINK FLOYD、ドノヴァン、CARAVAN らの名曲を折り混ぜながらの抱腹絶倒のコメディー作品だ。全体がドラマになっているので、喋りが判らないのは辛い所だが、それでも大いに楽しめることは請け合いだ。ジャケットも存分に楽しみたい。それにしてもこのメンバーは嬉しい。もう目一杯心浮き立つ演奏を披露してくれる。デイヴ・ステュワートの余裕ある采配が見事だ。（坂本）

NEWS FROM BABEL



Letters Home

Re Records Re 1・・14

'86 年

Lindsay Cooper:p,key,bsn,s&a-sax
Chris Cutler:ds,per
Zeena Parkins:harp, accordion,E-bow-g
with
Robert Wyatt:vo
Dagmar Krause:vo
Sally Potter:vo
Phil Minton:vo
Bill Gilonis:b

Engineer:Bill Gilonis

リンゼイ・クーパー率いる NEWS FROM BABEL の２作目は、前作に比べると大分ロック色が増した分聴き易い。残念ながらダグマーはフロントラインから退いてしまったが、ロバート・ワイアットの歌がフィーチュアされるという嬉しい代償もあり、ファンにはたまらない贈り物となった。彼の参加は1984年発表の12”シングル「The Last Nightingale」が切っ掛けとなったのだろう。これだからこのシーンは面白くて目が離せないのだ。ジャケットも含めて、静謐な透明感が印象的なアルバムであり、このバンドが気に入るかどうかはクーパーの作曲に対する好みの問題だ。（坂本）

PAZ



Kandeen Love Song

Spotlite SPJ 507

'78 年

Brian Smith:s-sax,fl
Geoff Castle:key
Phil Lee:g
Ron Matthewson:b
Dick Crouch:electra-vibe,per
Dave Sheen:ds
Simon Morton:conga, per
Ray Warleigh:piccolo,fl,a-fl
Chris Fletcher:conga

Produce:?

PAZ はディック・クローチを中心にしたグループで、４枚のアルバムを発表している。本作品はファーストで GILGAMESH、NATIONAL HEALTH のフィル・リー、NUCLEUS のブライアン・スミス、更にデイヴ・シーンとロック・ファンにも知られたミュージシャンが参加している。そのサウンドは初期の RETURN TO FOREVER の影響を感じさせるもので、ブラジル音楽の香りを持ったパーカッションを効果的に用いたクリアーで耳に心地良い音と言える。スミス、リーの両者もジャズとしてオーソドックスかつのりの良い好プレイを展開している。（賀川）

PIP PYLE'S EQUIPE O



Pip Pyle's Equipe Out

仏52eRueEstRE004

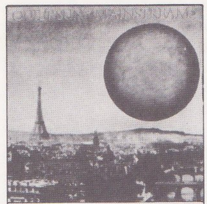
'87 年

Pip Pyle:ds
Elton Dean:saxelio, a-sax
Sophia Domancich:p, syn
Hugh Hopper:b
with
Didier Malherbe:fl, t-sax

Produce:EQUIPE OUT & Michel Pagiras

古くからカンタベリー・ミュージックの重要なシーンで活躍を続けて来たピプ・パイルの率いる EQUIPE OUT のこれまでの所唯一の作品だ。その場限りのセッションなのか、それともパイルのリーダー・グループの純然たる処女作なのか、少々解釈が難しい。メンバーも録音時期もフィル・ミラーの1作目とかなり重複している。全体に軽目のジャズといった趣で、期待し過ぎると肩透かしを食うが、それでも1曲目後半のベースには思わず笑みがこぼれてしまう。マレエブの参加は興味深いが、あまりピンと来ない。アレンジにもう一工夫欲しかった気がする。(坂本)

QUIET SUN



Mainstream

Island HELP 19

'75 年

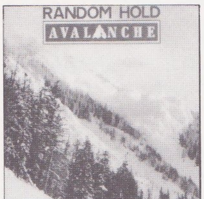
VJ:VJD-28057

Charles Hayward:ds, per,key,vo
Dave Jarrett:el-p
Phil Manzanera:el-6& 12str-g
Bill MacCormick:b
with
Eno:syn
Ian MacCcormick:back-vo

Produce:QUIET SUN

前衛的にして官能的。エモーショナルでありながらセンシティヴな側面も持つ QUIET SUN。フィル・マンザネラやイーノのクレジットから ROXY MUSIC のファミリーに数えられるが、サウンドの核はドラムスのチャールス・ヘイワードのリズム感覚であり、それが中枢となり、各メンバーの個性がはりめぐらされた独特のアンサンブルを創造している。カンタベリーのジャズ・ロック系のグループの中でも最も魅力的な作品の一つに数えあげられている。録音はグループ解散後、一時的に再編という形でフィル・マンザネラにより行われた。(山崎)

RANDOM HOLD



Avalanche

Upper Class DOUBLE CHIN 1

'81 年

Dave Ferguson:key,vo
David Rhodes:g,vo
Bill MacCormick:b,vo
Peter Phipps:ds,vo

Produce:Peter Hammill

カンタベリーの流れを汲むニュー・ウェイヴ・バンドだが、今ならピーター・ゲイブリエル・バンドのデヴィッド・ローズがいたバンドだと言った方が通りがよさそうだ。メンバーから想像するよりはずっとシンプルな演奏を聴かせる。これは1979〜80年に発表した作品を一つにまとめたアルバムだが、本来この形で発表しようと計画されていたらしい。ピーター・ハミルがプロデュースを担当している。中にはピンと来ない曲もあるものの、次第次第に興奮が高まって行くような力強い演奏であり、好みの問題はあろうが悪い内容ではない。ULTRAVOX タイプの音楽だ。(坂本)

REGULAR MUSIC



Regular Music

Rough Trade ROUGH 73

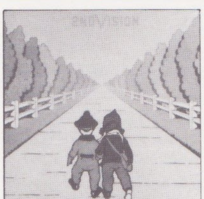
'85 年

Charles Hayward:ds, per
Sarsh Homer:s&a-sax
Maria Lamburn:vla
Helen Ottaway:p,key
Jonathan Parry:p,key
Jeremy Peyton Jones:s&a-sax
Mary Phillips:vo,a-sax
Jocelyn Pook:vln
David Powell:tuba
Bron Szerszynski:g

Engineer:Harun Coombes,Jon Wilkinson,Bill Buchanan

チャールズ・ヘイワードが CAMBERWELL NOW と並行して率いていたのがこの REGULAR MUSIC だ。音楽的には全く傾向の違うバンドであり、REGULAR MUSIC はロック・バンドとしては非常に珍しい、本格的なミニマル・ミュージックに真正面から取り組んだグループだ。聴けばすぐ判るように、マイケル・ナイマンの影響が極めて濃く、ナイマン経由でフィリップ・グラスのサウンドも聞こえて来る。こういう実験音楽にも挑戦してみたかったということなのだろう。むやみに深読みする必要はないが、このバンド、ちゃんとライヴも行なうくらいには真剣に活動していた。(坂本)

2ND VISION



First Steps

Chrysalis CHR1289

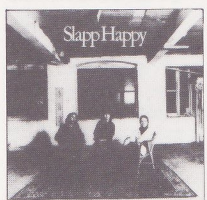
'80 年

Ric Sanders:ac&el-vln
Dave Bristow:p,el-p
Jonathan Davis:b
John Etheridge:ac&el-g
Micky Barker:ds,per

Produce:John Cameron

後期 SOFT MACHINE のリード奏者から成るグループ。本来、サンダースは'70年代フォーク界を渡り歩いた人だ。現在の ALL ABOUT EVE での客演にしてもトラッド調だ。その彼が中心になり、S・MACHINE 脱退後'77〜'78年に結成されていったSURROUNDING SILENCE は、ジャズ・フェスティヴァルなどに出演し、'79年秋本作を録音、2ND VISION と名乗って発表した。彼のジャズ志向期の活動記録といえる。センシティヴなジャズ・ロックだ。かつてのグラッペリ、メニューインとの共演の他、名手エサーリッジは現在ブリストウを含む4人編成のバンドを率いている。(松本)

SLAPP HAPPY



Slapp Happy

Virgin V 2014

'74 年

Dagmar Krause:vo
Peter Blegvad:2nd-vo
Anthony Moore:key
with
Marc Singer,Eddie Sparrow,Clem Cattini:ds
Dave Wintour,Jean Herve-Peron:b
Nick Worters:double-b
Graham Preskett:vln, mdn
Clare Deniz:cel
Jeremy Baines:bsn
Henry Lowther:tp
Geoff Leigh:sax
Andy Leggett:jugs
Keshave Sathe:tambora
Roger Wootton:back-vo
Produce:SLAPP HAPPY, Steve Morse

ドイツで活動していた"アヴァンギャルド"3人組によるイギリスでのデビュー・アルバム。非常にセンスの良いポップ・ミュージックである。妙にノスタルジックで、ほろ酔い気分のノリが心地良い。しかし、彼等の事、一筋縄ではいかない。タンゴ、カントリーからジャズやアヴァンギャルドまで、実にバラエティーに富んだ音楽性と品の良いアレンジにダグマー・クラウゼの七変化のヴォーカルがからみ、優雅ながらも屈折した感性がちらつく。極上のポップスとは、単に売れるメロディーが書けるという事ではなく、深い素養と思索から生まれる事を証明した一枚である。(高森)

SOFT HEAP



Soft Heap

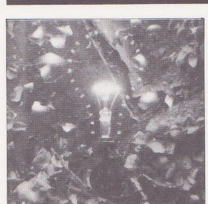
Charly CRL 5014

'79 年

Elton Dean:sax
Alan Gowen:p,syn
Hugh Hopper:b
Pip Pyle:ds
with
Radu Malfatti:tb
Marc Charig:tp

SOFT HEAD のドラマーがピプ・パイルに変わり、バンド名を SOFT HEAP に変えて制作したのがこのアルバムだ(その間に GILGAMESH の2作目が発表されている)。ドラムスがシャープになった分、よりタイトな演奏が聴かれる。但し、ここでもゴウエンのキーボードが地味過ぎる印象は拭い難い。この後ベーシストがジョン・グリーヴスに交代してヨーロッパ・ツアーを行ったが、バンド名は変わらなかった。次第にエルトン・ディーンがイニシアティヴを提って行ったようだが、アルバムは残されておらず、やがて解散してしまったらしい。(坂本)

DAVE STEWART & BARBARA GASKIN



The Big Idea

'90 年

Midi: 28 MD 1065

Dave Stewart:key,rhythm programming,pipe organ
Babara Gaskin:vo
with
Gavin Harrison:ds
Jakko:g
The Amorphous Choir:back-vo
Produce:Dave Stewart

日本先行発売 CD という形でリリースされた作品。カンタベリー派残党という言葉を一新する'80年代感覚のポップスで再登場して以来、我々のフィールドとは縁の切れた彼らだが、陰りあるファッショナブルさは、同系列のダンス・ビートにあって、やはり変。B・ガスキンの声質は、本来フォーク向きだが、そのナイーヴさがテクノロジーと対峙した時、更に歴然とした浮遊感が新たなファンをもつかみ込んだ。⑩に代表される内省感の強い作品。紛れもなくイギリス感覚が打ち出され、SPIROGYRA 以来のイディオムは、隠してもにじみ出てしまう。劇的な色合いが加わっている。(松本)

THIS HEAT



This Heat

Piano This1

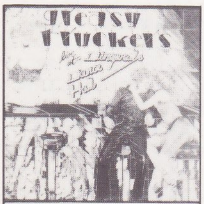
'79年

Charles Heyward:per, key,vo,tapes
Charles Bullen:g,cla, vla,vo,tapes
Gareth Williams:key, g,b,vo,tapes

Produce:Anthony Moore

元QUIET SUNのチャールズ・ヘイワードがチャールズ・バレン等と結成したグループ。初期にはデヴィッド・クロスも関わっていたらしい。よく練られ計算された高度な音楽性とアナーキーを兼備した彼等のサウンドは「クリムゾンとセックス・ピストルズの間を埋める存在」等と評され、一部の熱狂的支持を得ている。彼等は本1st以後、12"シングル「Health And Efficiency」(This 1201)を挟んで、'81年に2nd「Deceit」(ROUGH 26)を発表、解散した。ヘイワードはCAMBERWELL NOWを結成した他、ソロでも渋く活動中である。(森下)

V. A.



Greasy Truckers Live At Dingwalls Dance Hall

Greasy Truckers GT4997

'73年

CAMEL
HENRY COW
GLOBAL VILLAGE TRUCKING COMPANY
GONG

Produce:Richard Elan

1973年10月8日に開催されたコンサートの模様を収録したライヴ・アルバムだ。相互には殆ど関係のない4バンドの演奏だが、それぞれ非常に興味深い内容となっている。プログレッシヴ・ロック・ファンには特にA、B、D面が気になる所だ。CAMELは延々とアドリヴを展開する。HENRY COWは典型的なフリー・ミュージックを中心にして緩慢に盛り上がって行く。GONGは曲名が違っているものの、おなじみの曲をメドレーで次々と繰り広げる。いずれもなかなか意欲的で好感の持てる演奏だ。この時代のロック・シーン全体の昂揚感と許容性を如実に反映したアルバムだ。(坂本)

V. A.



V

Virgin VD 2502

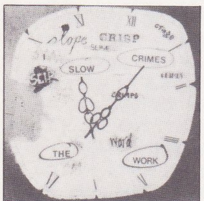
'75年

Robert Wyatt
Mike Oldfield
Ivor Cutler
TANGERINE DREAM
Kevin Coyne
Captain Beefheart
SLAPP HAPPY
HENRY COW
Tom Newman
CLEARLIGHT
HATFIELD & THE NORTH
WHITE NOISE
Steve Hillage
JUBULA
Chili Charles

Produce:?

軌道に乗り始めたヴァージン・レコードが制作した所属アーティスト達のコンピレーション・アルバム。当時のレーベル・カラーをくっきりと写し出し、半分近くがカンタベリー系のミュージシャン達で占められている。A面、B面の全曲と、D②、D④は正規のアルバムに収録されていない録音であり、ファンにとっては大変貴重なコレクションとなっている。今更再発されることも期待しにくく、できれば各アーティストが自分のアルバムのCD化に際し、オマケとしてここからの録音も追加してくれればありがたいと思う。その後の同レーベルの発展はご存じの通り。(坂本)

THE WORK



Slow Crimes

Woof Woof 003

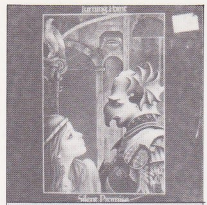
'82年

Bill Gilonis:g,b,euphonium,jew's harp, vo
Mick Hobbs:b,g,ds,vo, ukelele,rec
Tim Hodgkinson:vo,hawaiian-g,sax,key
Rick Wilson:ds,vo,b
with
Catherine Jauniaux: vo
Lepke Buchwater:b
Bob Van De Breuve:?
Chris Cutler:ds,per

Produce:?

ART BEARSと別行動をとったティム・ホジキンソンが結成したTHE WORKは、新人3人を起用し、テクニックを排した所から新しいロックを創造した。とは言え、相当の訓練をつんだのだろう、ここで聴かれる音楽は決して稚拙なものではない。作曲も並大抵ではない複雑さであり、容易にカンタベリー・ミュージックの一種と認知し得る。リック・ウィルソンの叩くユニークなリズムが非常に特徴的であり、バンドの個性に大きく貢献している。以後、メンバー・チェンジを経てバンドは解体してしまったが、何と1989年になってオリジナル・メンバーで再結成されている。(坂本)

TURNING POINT



Silent Promise

Gull GULP 1027

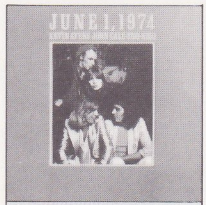
'78年

Jeff Clyne:b
Pepe Lemer:vo
Brian Miller:p,syn
Dave Tidball:t&s-sax
Paul Robinson:ds,per

Produce:Martin Levan

TURNING POINTはブリティッシュ・ジャズ・ロック・シーン全体の中では些か傍流的な位置にあるバンドだが、その音楽性は侮り難い高度なものを持っていた。ベーシストのジェフ・クラインを中心としたバンドで、1976年に結成。'77年に「Creatures Of The Night」を発表。これは2作目に当たる。どちらも意外にとっつき易い演奏で、アメリカ市場にも受け入れられている。適度に判り易く、適度に実験的な所が魅力だが、逆に押しの弱さにもなっていて、そうなっても不思議は無かったにもかかわらず、充分なポピュラリティーをかち得るには至らなかった。(坂本)

V. A.



June, 1, 1974

Island ILPS 9291

'74年

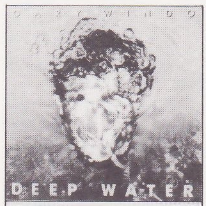
PS:PSCD1044

Kevin Ayers:vo,g,b
John Cale:vo,vla,p
Eno:vo,syn
Nico:vo,harmonium
with
Mike Oldfield:g
Robert Wyatt:per
Ollie Halsall:g,p
Rabitt:org
Archie Leggatt:b
Eddie Sparrow:ds
Liza Strike:back-vo
Irene Chanter:back-vo
Dorren Chanter:back -vo

Produce:Richard Williams

SOFT MACHINE脱退後、ソロとして自身のバンドを率い活動していたケヴィン・エアーズが'74年の6月1日に豪華ゲストを集めて行ったレインボーでのコンサートの貴重なライヴ盤。A面にはイーノ、元VELVET UNDERGROUNDのジョン・ケール(ケージじゃないぞ)及び、ニコ、そしてB面にはケヴィンをフィーチャーした曲がそれぞれ収録されている。全編での聴き所は未だアンビエントする前のサイケデリックなイーノと、故人となってしまったニコによるDOORS以上の迫力を持った「The End」だろう。他の曲でもワイアットのパーカッションや若きマイクのギターが煌めく。(高山)

GARY WINDO



Deep Water

Island ANCD 8719

'88年

Gary Windo:sax,vo,cla
Knox Chandler:g
Jack Robinson:b
Steve Moses:ds,tb
Ann Sheldon:cel

Produce:?

サックス奏者、ゲイリー・ウインドの型破りな音楽を捉える切り口は幾つかある。言わずと知れたカンタベリー・ミュージック・シーンでの活躍。ニューヨークに渡ってのカーラ・ブレイの下での活躍。老舗グループNRBQとの交流。トッド・ラングレンやハル・ウイルナーといった一癖も二癖もある仕掛人達との結び付き。1982年発表の1作目「Dogface」に続くソロ作品であり、パワフルで躍動感に溢れるロック・サウンドの中に彼ならではの個性が瑞々しく息づいている。THE PSYCHEDELIC FURSの曲まで採り上げており、この偏見のない姿勢が彼の真骨頂と言える。(坂本)

ROBERT WYATT



Rock Bottom

Virgin V 2017

'74年

VJ:VJD-5022

Richard Sinclair:b
Robert Wyatt:vo,key, James'-ds,g
Laurie Allan:ds
Hugh Hopper:b
Ivor Cutler:vo,b-concertina
Alfreda Benge:vo
Gary Windo:b-cla, t-sax
Fred Frith:vla
Mike Oldfield:g

Produce:Nick Mason

半身不随となり、ドラマーとしての道を絶たれたロバート・ワイアットは、第2のアーティストとしての人生をシンガーとして再出発した。その第1作が本作だ。このアルバムの前後では彼の芸術に対するアプローチは内的にも相当変化したはずで、以後は、プログレッシヴなアレンジこそ聴けるものの、その音楽的本質は、人間的な心情を歌うことによって自己を表現していくことになる。本作では、非常に純粋な表現が、まるで少年の目がとらえた人のいない風景を見るがごとくに感じられ、彼の全作品中最もピュアなイメージで貫かれている。心が洗われるようだ。(山崎)

CHAPTER VI

ブリティッシュ・プログレッシヴ・ロックの本質

1 THE HEART OF BRITAIN

高山直之

幸多き英国、ここほどに
私を満足させる緑青き国は見あたらず
気高きロマンスの薫る
丈高き森に吹くそよ風が感じられる地も
ここより他にない

ジョン・キーツ

英国——そう言った時私達が示しているのは、The United Kingdom of Great Britain and Northern Ireland のことであり、多くの場合それにアイルランド共和国（南アイルランド）をも含め「英国」として捉えているのが一般的な認識だろう。しかし、ブリテン島のなかにも周知の通り南部のイングランド、北部のスコットランド、南西部のウェールズの各地域があり、それぞれが首都と固有の文化・伝統を誇っている。英国の長い歴史は、それらの民族と時に他国との戦いと親和によって織り成されたモザイクのようだ。それは例えば北アイルランド問題の形で続いているし、19世紀末から20世紀初頭にかけて詩人のW・B・イエイツたちによって復興され、そして今また注目を浴びているケルト民族（アイルランド、スコットランド、ウェールズ、そしてフランスのブルターニュ地方等に暮らしている）の文学や音楽が持つ、どこか夢幻性を湛えた哀感も、そうした歴史的背景と各々の地域の風土・地理的条件を抜きにしては語り得ない。勿論それは、30年近い歴史（英国の辿った長い道程に比べれば僅かな時間だが）を持つ英国のロック（British Rock）においても同様である。「ロックはブリティッシュ」との思いは、伊藤政則氏に限らずとも英国のロックに魅せられた者ならば、共通して持つ認識であろう。そしてそうした人達は同様に英国そのもの、その国の他の様々な芸術に魅かれることが多いようだ。BEATLESから IRON MAIDEN そして COCTEAU TWINS に至るまで、これまで英国が育くんできたロックにはその形態の差こそあれ「英国的」という言葉で括ることのできる何かがある。その「何か」—現代のロックに限らずとも、英国の歴史や様々な芸術、生活様式などを通じて脈々と流れ、それらすべての根底にしっかりと根をおろす、いわば「英国的なるもの」の本質——について語り尽くすことのできる者は恐らく稀にしかいまい。音楽の深奥、あるいは「心」そのものがそうであるように、それはヴィトゲンシュタイン言うところの「語り得ぬもの」の領域に入ってしまうからだ。ここでは、英国の音楽や文学等を通して感覚的に届けられたその「何か」の周辺を辿ってみたい。それこそが私達を魅きつけてやまぬブリティッシュ・ロックの核である筈だから。

森のイングランド—British Gentleness

シェイクスピアと同時代の詩人、マイケル・ドレイトンは、イングランドを「大陸から切り離された妖精の島」と謳った。狭義のイギリス（英国）とはつまり、その言葉の通りこのイングランドを指す。それだけにイングランドの人々には自らの優位性に対する誇りが強いようだ。嘗て権勢を誇った者のプライドと翳りゆく威光という現実。そのアンビバレンスと、川が多くおだやかな田園地帯と緑輝く森とに恵まれた失われゆく自国の美しい自然への愛情が相まって、郷愁漂う「メリー・イングランド」への思いが育まれただろうことは想像に難くない。ケイト・ブッシュが「おおイングランド、私のライオンハート」と歌うとき、そこにはイングランドの象徴たる獅子に込めた、それこそシェイクスピアの時代より変わらぬ自国への思いがある。コンスタブルの描く風景、ラファエル前派の細部まで描き込まれた自然、ロマン派詩人の詩、そして『ピーター・ラビット』のベアトリクス・ポターも関ったナショナル・トラスト運動などを見るにつけ、彼等英国人の自国の自然に対する深い情熱を感じてしまう。CARAVAN の「グレイとピンクの地」（ジャケットのイラストはトールキンの『指輪物語』の世界を思わせる）、CAMEL の「ブレスレス」といったカンタベリー（中世英国文学の古典、チョーサーの『カンタベリ物語』でも知られる巡礼の地だ）系やA．フィリップスのソロ等に刻み込まれた STEELEYE SPAN、STEALERS WHEEL、MAGNA CARTA、AMA-



英国の擬人化地図：地方色も描き出されている。

ZING BRONDEL といったフォーク／トラッド系のアルバムに通底している英国の（時に夢想の場としての）田園風景。話をより一般的にするなら、BEATLES の例えば「リヴォルバー」のなかの『For No One』、マッカートニー（WINGS）やハリスン、更にH. ジョーンズ、XTC 等の旋律に漂う、陽光が差すような穏やかさ。ブリティッシュ・シンフォニックの佳作としてその名も ENGLAND の「Garden Shed」が知られているが、彼等が“ENGLAND”たる所以は、YES、GENESIS の影響云々やメロトロンの使用法など以上に、2曲の小品におけるポール・マッカートニー的な長閑さにこそある、と筆者は考えているのだが（叙情派の代表格 B.J.H も『Titles』で BEATLES へのトリビュートを捧げていた）。アルバム・タイトルの Garden（庭園）という言葉も「田園」や「森」と共に、17世紀以降イングランドの美を讃えてきた常套句であり、英国の庭園がピクチャレスクな、自然風あるいは自然（森や川）とひと続き（J・フォックスの『The Garden』の廃園の美も）のものであることを思えば、その音も理解できよう。

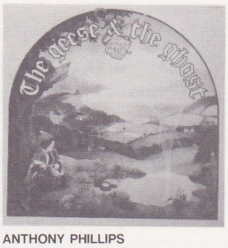
そして、森である。イギリスの国土面積に占める森林の割合は意外と少ないが、人々（私達をも含めて）の心のなかには未だ森が息づいていると言って過言ではない。グレート・ブリテンの地は嘗て森に覆われていたろうし、それは田園風景が出来上がるずっと以前から、時に日々の糧を与える恵みの森として、時に魔の潜む暗い森として、いわば日常と非日常、現実と幻想の2つの“場”として人々の生活と共に存在していた。そこは辺境に追い立てられる前のドゥルイド（この名からして樫と知識の合成語だ）僧が支配するケルトの森、精霊や妖精が棲む伝説の森であり、騎士や吟遊詩人の往き交う中世の森、ファンタジィの舞台としての“森”でもある。そこから聞こえてくる歌、木々の間に響き渡る音楽とはどんなものであったろう。過ぎし日のリュートやハープ、リコーダーの調べは、古楽アーティストの演奏や録音で偲ぶことができるが、'70年代の英国においてロックという同時代的音楽のなかにそれを映し出した好例として、私達は即座に JETHRO TULL の「Songs from the wood（神秘の森）」(1977年）と GRYPHON の「Midnight Mushrumps（真夜中の饗宴）」(1974年）の2枚を挙げることが出来る。ブルーズやジャズの影響下にデビュウし、更にトラッド色を強く持ち続けてきた TULL が、コンセプトの段階からそれを前面に打ち出し開花させた前者は、その発表前にリリースされた恐らくクリスマス向けの4曲入りシングル（『Ring Out, Solstice Bells』は本作より、B面の『Christmas Song』は'72年の「Living In The Past」よりのカット）も含め、トラッド・ロックの一つの碑であると言えるし、英国王立音楽院で学んだリチャード・ハーヴェイとブライアン・ガランドの2人を中心とした GRYPHON のセカンドにあたる後者も、通常のロック楽器にリコーダー、クラムホルン等の中世楽器を加えた独自の音世界を完成させた中世やファンタジィの香り高い秀作であると言えよう。特に'68年にデビュウし、'89年にはグラミー賞のヘヴィ・メタル部門で受賞した JETHRO TULL はその長いキャリアも含め、本稿でのテーマを語る上で欠くことの出来ない存在である。18世紀後半に児童書の出版者ジョン・ニューベリィが自ら集めたイギリス童謡集に冠した「マザー・グース」（元の言葉はフランス起源）。「英国的発想の原型」とも言われるマザー・グース（Nursery Rhymes）には、英国的なセンス・オブ・ユーモア、コモンセンスとノンセンスとのバランス感覚が現れ、日常表現の一部にまでなっているが、彼等の特質もそれと同質（実際彼等には『Mother Goose』という曲がある）。また IRON MAIDEN 等の後進に与えた影響も無視できない。マザー・グースと言えば、P・ゲイブリエル、S・ハケット在籍時の GENESIS を思い出される向きも多かろう。『エピング森の戦い』に象徴されるファンタジィ志向も、19世紀末のジョージ・マクドナルドやウィリアム・モリス以降、数知れないファンタジィ文学を産み出してきた実績を誇るイギリスならではのものだ。産業革命によって逸早く工業化が進み、その弊害が露わになった国だからこそ、一部の心ある人々は自国の自然や想像力を愛した。それらへの情熱はそのまま英国的芸術の一つの特質である。英国の音楽に流れるジェントリィな響きは、中世とそれを更に遡る「森の文化」の遠い木霊なのだ。



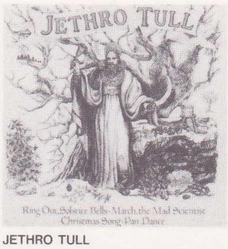
J.B.ラードブルック『河畔の風景』：英国19世紀の風景画。

ケルトの呼び声、あるいは歌の狭間より

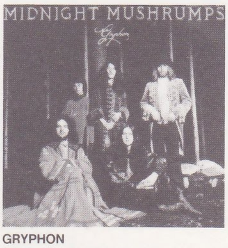
「森の文化」を辿れば、やはりケルトに行き着く。キリスト教と並び、もう一つの「ヨーロッパのルーツ」と言われるケルトのアニミズム的思考や想像力、詩心は異端とされながらもキリスト教と混ざり合い、イギリスやドイツ、フランス等の西欧文化の伝統を形成している。エンヤやU2等の商業的成功やワールド・ミュージックへの関心に後押しされ、アイルランドを始めとするスコットランド、ウェールズ、ブルターニュ地方（ケルト文化圏）のトラッドが注目を浴びている昨今であるが、各々の地方におけるケルトの血の見直しは、'70年代以降ブルターニュのアラン・スティーヴェル始め、



ANTHONY PHILLIPS
『The Geese & The Ghosts』



JETHRO TULL
『Ring Out Solstice Bells』(Single)



GRYPHON
『Midnight Mushrumps』

アイルランドではCLANNAD、PLANXTY、スコットランドではSILLY WIZARD、OISIN等といったトラッド勢（CLANNADは現在は多少性格を異にしているが）を中心に進められて来た。また一方では、BIG COUNTRYやPOGUES等が登場し話題を呼ぶ前の'70年代から、主にアイルランドやスコットランド出身のミュージシャンによって、ケルトの激情と叙情（夢想）性、トラッド独得の節回しを持ったロックが創造されて来たのである。'87年の「Wild Frontier」でアイルランドの代表的トラッド・グループTHE CHIEFTAINSのパディ・モロニィ（ウーリアン・パイプ。彼はマイク・オールドフィールドの「Five Miles Out」にも参加している）をゲストに迎え、COLLOSEUMII、G・FORCE、セッション、4枚のソロを経て色濃いケルトの血を示したゲイリー・ムーアが一時期在籍したTHIN LIZZY。彼等は'73年にトラッド曲『Whisky In The Jar』をヒットさせるなど、強くアイリッシュ魂を打ち出している。同じくアイルランド出身のロリー・ギャラガーもこうした視点で捉え直すことが可能だろう。また、妖精物語の故郷であり、オールドフィールド姉弟の諸作品やそのプロデューサー、トム・ニューマンの「Faerie Symphony」に描かれていたケルトの夢幻性を顕著に表現したグループとしてアイルランドのFRUUPPを忘れる訳にはいかない。彼等が残した4枚のアルバムには、荒涼としたアイルランドの風景と、海から野に吹き渡る風を感じることが出来る。A．Eやジェイムズ・スティーヴンスといったアイルランド詩人に共通する感性と言えようか。そしてクリス・デ・バーやスコットランド出身のA・ステュワートは勿論、ロッド・ステュワートにもトラッド、ひいてはケルトへの想いが未だ息づいている。例の郷愁漂う声で彼は歌う。

そして僕等は乾杯しよう
血の如く赤い薔薇に
暫しの間、
エメラルドの島（アイルランド）に
幸多かれと
『Every Beat of My Heart』

同様、スティーヴ・ウィンウッドにおいてもR＆Bと共にトラッドからの影響は無視できない。TRAFFIC時代に彼は有名なトラッドの『John Barleycorn』を取り挙げ、ソロとして成功を収めた今も（『Back in the High Life〜』のパイプ等）それは同様であろう。

ブリティッシュ・ロックには嗄れ声の系譜というものがある。ポール・ロジャース筆頭に前述のロッド、フランキー・ミラー、デヴィッド・カヴァーディル、SPOOKY TOOTHのマイク・ハリスン、FOREIGNERのルー・グラム（彼は米国人だが）、新人ではQUIREBOYSのスパイク等々……。彼等の声が醸し出すもの寂しい哀感はブルーズに根差したものだが、アイルランド出身で、元THEMのヴァン・モリスンがケルトの血に導かれTHE CHIEFTAINSと共演したアルバム「Irish Heartbeat」を聴けばそれがトラッドの伝統と決して無関係でなかったことが解る。LED ZEPPELINのジミー・ペイジとロバート・プラントがトラッドやケルトの神秘性に強く触発されているのも周知のことであるし、結局、ブリティッシュ・ロックの基底にはトラッド／フォークが何らかの形で根差している。彼等の歌の物語性もバラッド（物語歌）の伝統故だろうか。極端な話、ケルトやトラッドの影響なくしてはロバート・プラントもロッド・ステュワートも存在しないのだ。一方、女性ヴォーカルにおいてはそれはより顕著であろう。CLANNAD、CAPERCAILLIE、PENTANGLE、STEELEYEといったトラッド／フォーク・グループのシンギングと、RENAISSANCE、ILLUSION、CURVED AIR、クレア・ハミル、そして'80年代に登場した、COCTEAU TWINS、ヴァージニア・アストレイ、J・ダウンズ、ALL ABOUT EVEらの歌は英国特有のたおやかさという点で明らかに一本の糸で繋がっている。'60年代にYARDBIRDSで活躍したポール・サミュエル・スミスがこれ迄にILLUSIONやJETHRO TULLを手懸け、今またALL ABOUT EVE（1作めにはトラッドも取り挙げている）をプロデュースしているのはその象徴的な事例と言えようか。何しろ複雑な相関関係を持ち、人脈図を作ればHENRY COWとSWEETが繋がってしまうブリティッシュ・ロック・シーンのことである。いかなる神の御業によってか、どのような結びつきがあっても不思議ではない。増してPROCOL HARUMやMOODY BLUES、URIAH HEEP更にDIAMONDO HEADらとECHO＆THE BUNNYMEN、MISSION等が叙情性とアルカイック指向という点で通じることも。勿論、田園や森の音楽がある以上、街の音楽もイギリスには存在する（元来イギリスの街は、例えばパリのような閉鎖空間でなく、そのまま歩いて行けば田園にも至るが音も同様だ）。それは人によって10CCやROXY、S・ハーレイ等のひねくれたポップスであり、パンクでありと様々だろうが、筆者にとってはNATIONAL HEALTHの"英国紳士の音"がそれだ。英国を語るならば根強い階級意識（貴族といっても上級と準貴族Gentryなど様々）の問題にも触れなければならないのだが、本稿ではそれは控えたい。何れにせよ、始めより述べてきた通り、英国の音には時を越えた同一性がある。そこには歴史や国民精神、伝統性といった言葉で表現できる以上の、何か地霊、トポスの力が働いているような気がしてならない。また、これまで主に伝統性、保守的な面を中心に話を進めてきたが、もう一方で英国には新しいもの、個性的なものを求める革新の精神があることも付け加えねばならないだろう。コモンセンスとノンセンス同様に、伝統精神とその破壊、普遍と個のバランス感覚に学究的な職人気質。それあってこそPINK FLOYDやKING CRIMSONといった不世出のロック・グループが登場したのだ。

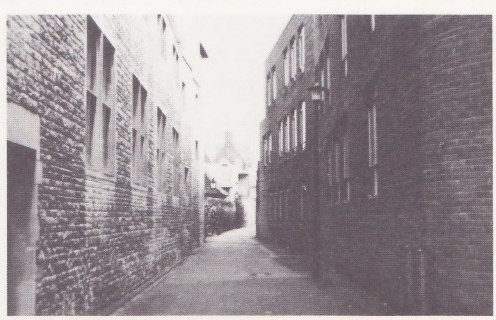
以上、感覚的な英国への思い入れを綴ったような文になってしまったが、気儘な「ブリティッシュ・ロック散策」としてでも読んで頂ければ幸いである。英国のロックを貫く「何か」が何であるかについては、またもや感覚的ながら「イギリスの心」であるとしか今の筆者には言いようがない。今でも多くの英国人にとって"成功"とは田舎に家を構えることであり、反体制の戦士と言えどもその誘惑から免れない。キーツの歌ではないが、ヨーロッパやアメリカの風景にも魅力はある。それでも、今暫しの間は、この「イギリスの心」を巡る石と岩と木々の径を歩いて行きたい。そこは中世のマドリガルから現代のロック、そして数多くの文学や美術に彩られた時に愛を語り、時に高みを目指さんとした「人の心」が辿った径なのだから。

われらのすべての探索の終りは
われらの出発した地点への到着となり
われらはその場所を
はじめて真に知ることになる
T・S・エリオット

1990年、春。
VAM MORRISON & CHIEFTAINSを聴きながら。

Thanks to Keiko Inoue, Yumiko Katoh, Akihiro Tohno, Fumiyo Ichikawa & Chika Uchida


アイルランド北端のGiant's Causeway。G.ムーアも踏んだ奇観名所。


オックスフォードの裏通り。近くにアリスの店がある。

2 ブリティッシュ・プログレッシヴの精神・思想

宮武和広

序 論
彼らをブリティッシュたらしめたもの

私は凡愚なる無宗教主義者であるので、率直なところ言葉のスペシャリストの如く流麗に奥義を語る術は持たない。そこで観点を変え、実践経験者（諸君が日本にもプログレッシヴの存在を認知してくれるならの話だが）の立場から私が楽曲にブリティッシュの血を込める時、いかに処するかを書き綴ってみたい。諸君が逆説的にそこからブリティッシュの精神を読みとってくれたなら至福といえよう。

英国の特異性というのは音楽的には欧州大陸の伝統を継承しつつも、ロック史実の変遷、精神構造の推移を考える時、合衆国が深い影を落としていることである。いつの世も最終的に表現しうる音世界を決定するのは民族の血であり、その意味ではブリティッシュとアメリカンは明らかに異なる血種に属していた。

私は楽曲にブリティッシュなるものを求める時、100の表現事象の内の何%かを曲中に含みとして持たせることにしている。この含みは楽曲に淡い霧にも似た音楽的湿度を齎（もたら）す。湿度が高まる程にヨーロッパの深淵なる色に染まりゆくのだが、ブリティッシュ・ロックにはもう一つの支柱があった。亡びゆく大英帝国への憂いが湿度により発酵し、深層心理の中に鎖国的プライドが形成されたことだ。

栄華を誇った帝国も、今や経済的には欧州の国数分の一にしか過ぎない。その憂いから生じたプライドこそブリティッシュの血だ。

ブリティッシュのロック家達にとっての幸運は、東西大陸を両極としたニュートラル・ポジションに立ち、音楽湿度を自由にセルフコントロールすることに依り、悠久なる歴史と莫大なる市場の双方を制しえたことである。

かくして’60～’70年代、プライドの持つベクトルが時代の求むる向上のエネルギーに相乗し、メジャーという化け者に転化してゆく。はからずも後にブリティッシュの血が、その化け者に食されてゆくという悲劇も知らずに。

ブリティッシュ・ロックにとってアメリカン・ロックは一種の悪性ウィルスである。それに感染した者は、ある時期純正ブリティッシュとは違った意味での頂点を極め、やがてその体内から真のブリティッシュを放棄してゆかねばならぬ数奇な運命を強いられることになる。最近のブリティッシュ・ロック・シーンが表面的には’70年代と同様の盛り上がりを見せつつも、内容的には実に荒涼殺伐たるものがあるのはウイルスが慢性化した為である。

アメリカンとブリティッシュ、この二大英語圏勢力が互いに畏敬の念を抱き、前者のマーケティング・パワーと後者のイニシアティヴがバランスされることこそロック繁栄の礎ではなかったか。

臨床例を挙げてみよう。かのスティーヴ・ハケットに潜伏するウィルスは「Please Don't Touch」でリッチー・ヘヴンスにトラッド・フォークを歌わせる事には失敗したものの、KANSASのハーモニーに新境地を見い出し、遂には黒人女性歌手ランディー・クロフォードのバラードにギター・シンセを絡ませ見事なミスマッチに成功する。が、やがてウイルスは彼をゆっくりと、しかも確実に啄ばんでゆき、GTR結成に及んでスティーヴ・ハウを道連れに末期的症候群へと突入していく。（ウイルスにメモリーを飛ばされたスティーヴ・ハウの末路はABWHで御覧になった通りである。）

彼を育んだGENESISとても例外ではない。「Lamb Lies Down On Broadway」でピーター・ガブリエル（ゲイブリルと筆するべきか）が持ち込んだウイルスはアメリカン・ミュージシャンのGENESISへの介在の余地を許容し、結果として今日のフィル・コリンズの世界的大成功につながってゆく。しかし冷ややかな目で注視するならば、GENESISの中の真のブリティッシュの核はEW&Fのフェニックスホーンを導入した時点で終わってしまっているのだ。

フィル・コリンズはこの強烈なウイルスを逆に楽しむかの様に、ステージで“Yeah”という意味不明な雄叫びを連呼している。

ブリティッシュ・ロックの精神構造を解く重要な鍵は、何と言ってもアンダーグラウンドにあると思う。前述した様に、英国は政治経済史に於いて常に欧州の指導的立場にあったが、文化風俗史の点では意外にも世界に流布しえたものは少なかった。パーセルの没後THE BEATLESの出現まで英国の風俗文化は長大な冬眠状態に陥っていた。やがて自然発生的にアンダーグラウンドのムーヴメントが起こりエゴイスティックな個性が育ってゆくのだが、それは当初からブリティッシュの血を維持するのに不可欠なものを有していた。創立精神を守る為にいかなるコマーシャリズムにも毅然として立ちむかい、偶然にメジャーになり得た後も自分達を今あらしめるものの原点を見つめ、クリエイティヴィティやオリジナリティを持ちつづけること。これには受ける立場のリスナーにも、当時はプログレッシヴな積極性が強力に培われていたことも見逃せない。元来非商業的であったアンダーグラウンドをアメリカのポップス・グループと明確に区別しながら競合・共存させていったロンドンの嗜好には心の高さがあった。

アメリカン・ロックのウイルスを解毒するワクチンの処方箋は、このアンダーグラウンドに帰依すること以外には手に入れることはできないと思う。それが現在の彼等のポリシーに矛盾すべき方向であったとしてもだ。

ティラノザウルス・レックスの天からの啓示を待ち望むのは私だけであろうか…

本 論
我々は巨匠達に何を見たのか

私は音楽家ではあるが、専門職業用語を乱発した退屈窮まりない文章は避けたい。この項では、今まで誰も語らなかった視野から巨匠達が後世に伝えた精神の功績を考察しよう。

《KING CRIMSONの偉業》

メロトロンという神器は、誇大妄想を打破してゆけば、あのスニオン岬に海神ポセイドンを祭る為に築かれた単なるオブジェにしか過ぎなくなってゆく。彼らの真骨頂はむしろ精神のダイナミズムの導入という偉業である。

大陸系のバンドが基本的に明（陽）と暗（陰）の対比に重きを置いたのに対し、彼らは

更に躁と鬱の座標を加える事により表現を多次元化し、あらゆる錯乱形態を体系化し統御することを可能にした。以後のシーンで聴き手の心理を大胆な思考メカニズムでコントロールする手法が多用されたのも、彼らの功績である。ロバート・フリップはたえず強烈な頭脳の体操を自らに課し、アルバムは対数螺旋の産物と考えていた。史実上の色彩感が変わりゆくとも首尾一貫するのは、ロバート・フリップの偏執狂的なまでのダンディズムである。彼の雄弁でとろける様な快術に魅入られた人は多い。彼はテンションの嵐の中に自らの涙を包み隠そうとするが、一度その涙を知りえる者は嵐の中でも潜在意識で来たるべきものを予感し、やがて現出した「悪魔の涙」はこの世のものとも思えぬ輝きで聴き手を魅了する。

彼がダンディズムを誇示する程に、黙されたロマンティシズムが冴えわたるのはCRIMSONの魔術的美学である。

彼らの精神上の最高傑作として「Island」を挙げたい。この曲集は、表面上の静の地下に根ざしたピート・シンフィールド有終美の燃焼エネルギーが、ラストの曲まで絶えることのない琥珀のベールを形成しているのだ。

感情の発露が知的なまでの静寂に包まれ、情念と理性が巧みなたたずまいをみせるタイトルチューンに私はブリティッシュ・プログレッシヴ精神の原形を見い出す。

多数のファミリーの中で最もKING CRIMSONを精神的に語り尽くした人物はジェイミー・ミューアである。器具の森に囲まれた彼にとって、楽曲は霊感の泉である。サルバドール・ダリは「私と狂人との違いは私が狂人でないことだ。」と語ったが、ジェイミーもダリ同様、眼の中に「柔らかい時計」を映していた。硝子体は現在にありながらも虹彩に近未来を映すその眼は、眼底に子宮を宿したケイト・ブッシュのそれと共にブリティッシュの中では別格に分類されよう。「動きまわる事は、つまり私の中で何かが唸りつづけているからだ。」彼はビル・ブルッフォードを背後からレイプし続けた。まるでその格の違いを見せつけるかの様に… 合掌。

《PINK FLOYDの体質》

プログレッシヴの意識操作術は本当にシュールレアリスムのアートと酷似している。前項でダリを比較考察したが、PINK FLOYDはルネ・マグリットの方法論に近い。

諸君が「Dark Side Of The Moon」を初聴した時、怠惰なスライド・ギターに歌という形態の声が重なった瞬間、全てが風になったに違いない。ロックンロール、R&Bを英国風土の中で発酵させたフロンティアであり、むしろストレートなロックを源流にもつ彼らが他の追随を許さないのは音楽ではなくして（この世に存在する全ての）音そのものに対する執拗なまでのこだわりと、それを駆使した断面の美術にあると思うのだ。そしてそれは後にデイヴ・ギルモアという媒体を通じて、ケイト・ブッシュの神聖な卵細胞の中で驚異的繁殖をおこし「Never For Ever」を受胎させる。音のヴィルチュオジスム（名人芸）はいかなる技巧も無為なものにしてしまう。



彼らにとって音楽とは、逆転的に音楽という名の煩悩から解脱する為のひとつの手段にしか過ぎない。

PINK FLOYDはエゴイスティックな個性を醸成することによってアンダーグラウンドの精神を活性化し、形骸化を回避することに成功した数少ないバンドのひとつである。

《YESの精神犯罪》

彼らの創立精神は先駆者のロック・コーラスへの憧視と嫉視であったと思うのだが、これは後にその卓絶した技量と相俟って、それまで閉鎖的なナルシズムであったプログレッシヴ宇宙に太陽の恵みの如き普遍を与える起因となる。クレオパトラを称えた周知の言葉ではないが、クリス・スクワイアのベースがもっと下手だったら歴史は変わったであろう。

クリス・スクワイアは明らかにベースを冒瀆している。近代音楽に通奏低音の理念が生まれて以来、ベースに攻撃的な歪みをさせる事は犯罪ですらあった。しかし背徳が戒律に勝り、真理に近づいた時に伝説は生まれる。彼がプログレッシヴ界の典型を作り後世に伝えた事こそ、YES精神の革命的犯罪である。

彼らのハーモニーは超犯罪であるのであえて触れないが、今一つの重罪は4拍子の中にいきづく大きなワルツである。脳天気なイタリアン・ドラマーが地中海のうねりに呼応して編み出した手法を、彼らはいとも簡単にメジャーにしてしまったのだ。

「Close To The Edge」を名盤にした本質はワルツであり、その大きなうねりの如きワルツは四拍子を駆逐する。洗脳された四拍子は潜在空間の中にワルツを投影してゆく。あたかもすべてがワルツであったかの様に…

ワルツは人が本来帰するべきものを表現しうる。ワルツが俗世界を意味する四拍子と交錯する時、人はまことに儚き一瞬の悠久を手に入れることができる。

イエスの隠れた罪である。

《EL&Pの亜流美学》

彼らの場合、その創立精神はキース・エマーソン二十有余年の知識のサーカスと読む。諸君は、彼らが宗教としては結局のところ何も我々に伝えてはくれない事にお気付きか。EL&Pを構築したのは音楽上の純粋な亜流の美学であった。

ひとつのジャンル、楽器に地球レベルで秀でた人々は超一流となりその道を極めようとする。が一方、亜流の人々はある時点から非常に柔軟で革新的な方向へ彼らの道を求めだし、その成功者がプログレッシヴの旗手と成りえる。例えばクラシカル亜流奏者が、逆にクラシックを手玉にとり、超一流が思いもよらぬ方向へ高めていく。芸の真髄はこのような高次元の客観から生みだされる。亜流奏者達は（キース・エマーソンといえども）その、巨大なる本流に交われば、超絶技巧の前に押し流される一握の砂にしか過ぎない。であるからこそ彼らはその母なる大河の流れの何たるかを、流れゆく水達よりも知っているのだ。彼らは亜流の美学を脈々と語り続けてくれた。

《GENESISの帰するべき大地》

我々音楽家にとってGENESISは聖域である。彼らの洗礼なくしてこのシーンへの入山は不可能なのだ。光輝燦爛たる歴史はピーター・ゲイブリルのカリスマ性のみで語られるべきではないと思う。

例えるなら彼らは巨木であり、ブリティッシュの深層に奥深く根ざして養分を吸収した。それはトラディショナルである。その意味でGENESISの本質を映すのは、アンソニー・フィリップスとスティーヴ・ハケットの一連の作品である。変拍子や技巧はトラディショナルの装飾であり、派手なライティングは形容詞にしかすぎない。私は波間に浮遊する小舟の如く見え隠れするトラディショナルの心に震え、感涙したのだ。思い起こせばYESの『And You And I』もトラディショナルあればこその方法論であったと思うし、ブリティッシュ深層のトラディショナルを自主放棄した「Abacab」以降の彼らは、もはや私にとってGENESISではない。

表現上の精神に於いて最も注目すべき点は今まで誰も語らなかった事ではあるが、彼らのシッティング・プレイである。かつて幕が上がった時にヴォーカル以外全員が座していたロック・バンドが存在したのか。

立位は躍動・前衛につながり、座位は英知・真実なるものの探求を意味する。私は彼らの心を読みとろうとする時、恣意的に座位を選択し秘められた英知を楽しんでいる。

ロックにパワーを求めるキーボード奏者が類人猿の進化の如く立位を選択していった中で、トニー・バンクスが座位に徹した気骨は特筆すべきことだ。当時の彼らのステージ・スタイルは画期的だが、言い換えればピーターのカリスマ性が四人の英知をもってしてもバランスされないパワーであるのを証明した。

核　論
プログレッシヴの内なる昇華

黒人音楽を発生基盤としたビートとしてのロックは、ブリティッシュの血によって現世社会へ対する先鋭なるアジテーションという生命力を吹きこまれてゆくが、プログレッシヴはそれを既存の音楽そのものに対するアンチテーゼのエネルギーに変換させていった。

プログレッシヴへ高まりゆく過程は、実践者の立場から省みれば浄化・深化、そして昇華という轍を経てゆく。

浄化——ここでいう浄化とは脳回路のフォーマットであり、すなわち非言語脳・言語脳併用プログラムにヴァージョン・アップすることを指す。これがプログレッシヴに於ける、基本的創造及び享受の姿勢となるのである。かくして意識の混濁は浄化されてゆき、情念の輪郭を次第に明確化する。

深化——私が知りえる深化の過程のいくつかを列記する。(無論、この限りではない)

1）あらゆるジャンルの音楽を遺伝子レベルで解体、まやかしのDNAを排除する。核となるものを意識しながら全く異なる形状物の再構成を繰返して精神の構築力を練磨する。

2）霊的に自らを客観するもう一人の自分と親



しむ時間・空間を、病理学上の限界近くまで増やす。むしろ楽器を持たない時の自己を凝視し、大切にしてゆく。

3）創造の為に血の代価を支払う。(それは偶発・作為の別を問わない）そして失ったものへの惜別の情を強烈に増幅してみせる。

4）敵対を意図した、音楽上の仮想敵国を作りあげる。ただし表面上の自らの環境には充足した上で、音楽に更なる戦いを挑んでゆく。仮想敵国とは生涯、和解することはない。等々

昇華——深化の至上の極みであり、魂が情念の純構成物となる瞬間である。昇華を極めた人物はブリティッシュでも稀有であるが、しかしながら昇華は生身の人間にとっては、音楽死と表裏一体を成した人間放棄の第一歩を意味している。深化の進行形の中で煩悩と共存してゆくのが最も賢明な選択に思える。

大陸系のプログレッシヴが、古典音楽の伝統をヨーロピアンの宿命とする「否定的肯定」の図式に辿りつくのに対し、ブリティッシュのそれは古典を畏敬しつつも破壊してゆく「肯定的否定」の矛盾方程式をうちたてた。

ジャンルの長たるブリティッシュ・プログレッシヴはロック界に残された最後の創造的手段であり、それが仮想敵国を失ないパワーを放蕩し尽くした時、ロック界は華やかな終焉をむかえる。「Dirge」私の次作は彼らに捧ぐ挽歌になるであろう。

プログレッシヴから発するものは何もなく
　すべての音はプログレッシヴに収束する
　　プログレッシヴは音楽にあらず
　　　プログレッシヴは言葉なり——

3 プログレッシヴ・ロックにおける音楽的側面 ——その概要

沢田守

キング・クリムゾン——イギリスのロック・グループ。1969年結成。従来のロックンロール中心に代わって、クラシック音楽に影響された構成感に富むロック・スタイルを開発、プログレッシヴ・ロックへの道をひらいた先駆的グループとして知られる。

——以上は平凡社刊「音楽大事典」からの抜粋である。現在の日本でプログレッシヴ・ロックが一般に紹介されている一例だが、この文章の興味深い点は、プログレッシヴ・ロックのスタイルがクラシック音楽の影響により成立した、という事を暗に示唆している点である。確かにそれは事実であろう。だが事実はそれだけではない。長年この音楽を聴いてきた人にとっては、単にスタイルのみを問題としてみても、様々な要因が複雑に絡み合っているであろう事は容易に想像できる。Chapter IIにおいて本誌松本が考察している通り、そこには社会学あるいは文化人類学的な問題さえも広く横たわっている。複雑な形の彫刻は様々な角度から光を当てなければ、その陰影を掴む事ができない。だが、ここではなるべく音そのものに視点を据えて、プログレッシヴ・ロックについて考えてみたい。

1. 第3フィルター

音楽美学的な見地においては、音楽に対して「感じる」事と「聴く」事を明確に区別している。前者は受動行為であり、後者は能動行為であるとされる。例えば、この原稿を書いている現在、ぼくの目の前に置かれたスピーカーからはキング・クリムゾンが流れている。ぼくはその音楽を認識し、感じてはいるが、意識はあくまでこの文章に向かっている。また、鉛筆を置き、音楽に身をまかせ、心に何らかの感情を味わったとしても、それは単に「感じている」状態にすぎない。「聴く」とは、キング・クリムゾンの音楽を自分の内に取り込み、自分の意識をその音楽に投影し、それによって触発された想像力を用いて、自分の内側にキング・クリムゾンの音楽[註1]を再構成する作業であるとされる。このある種の対話とも言える能動的行為を、音楽美学では「音楽聴」と呼んでいる。[註2]これは「分析」とは異なり非常に主観的な作業だ。現実的なレヴェルでこれを証明するのはぼくには困難だが、例えば「作者の手を離れた時から作品は一人歩きを始める」という言葉は、この様な観念を前提にしていると思う。また、同じ音楽であっても十人十色の理解の仕方を示したり、聴いた時の自分の状況によってすら、まったく違うものに聴こえたりする事実は、多かれ少なかれ、人間の主観的な能動性を顕している。

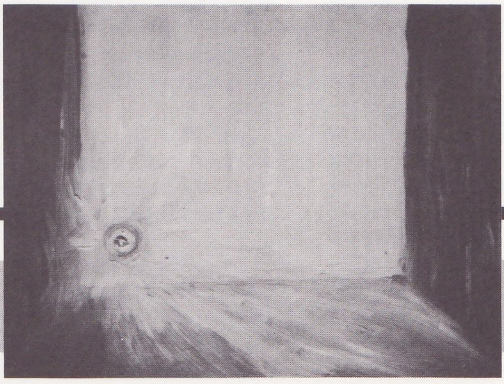
個人的には、「音楽聴」が行われる部分は人間の「精神」と呼ばれる部分と同一性の高いものだと思う。しかし、多忙を極める精神の働きの中で、こうした音楽的作業が行われる部分を、ここでは便宜上「第3フィルター」と呼ぶ。[註3]

ポピュラー音楽全般において「音楽聴」が要求[註4]される場合はあまり多くない。なぜなら、それは元来芸術音楽とは別の視点に立った娯楽性の強いものであり、むしろ聴き流されるべくして生まれたものだからである。

だが、どの様な音楽であろうとも、それを理解しようとする試みは、こうした能動的に「聴く」過程を通過するだろう。この作業なくしては、音楽は単に音の流れや相対性、そして感情的な音の現象にしかすぎず、どれだけ努力したところで、分析に近いものだ。「理解」とは、音楽聴や分析、作者の意図や作品の背景を知る作業等、あらゆる要素を含んだ主観的能動作業であると思う。

そして作品を理解する事は音楽家にとっても重要な意味を持っている。なぜなら「理解」は多くの事を彼に教えてくれるからだ。音楽的な技術、語法、作曲者の意識、世界、自分自身さえも…。いかなる音楽家であろうとも、彼がまず最初にリスナーであった事は、重要な事実だ。

では、「音楽聴」や「理解」の前提となる「第3フィルター」とはいったい何であろうか？ それは、人間の精神的な中心部に最も近い位置に存在する音楽的な作業場である。そして、このフィルターの性質はその人間の音楽的方向性に深く関与している。即ち、音楽をやるか否か、どういった音楽をやるか、何を用いるか…。広い意味での語法やテクニックの選択と開発は、すべてここを基盤として行われるのだ。それ故、音楽家は、たとえ自分で意識せずとも、このフィルターの質を高[註5]める為に絶えず努力を続ける。このフィルターを形成していく要素は無限にある。芸術、哲学、生活、他人、自然、そして音楽自体も。それは精神を形成していく要素とほぼ同数であり、一言で言えば広い意味での遺伝と環境であろう。[註6]そして彼の努力は、彼が音楽家であり続ける限り死ぬまで継続する。逆に、こうした努力を続ける人間は、楽器を演奏せずとも一人の音楽家であるとぼくは思う。



Arnold Schoenberg
Glückliche Hand

註1）それは具体的な形になる以前の音楽の姿でもあり得る。

註2）音楽美学に関する本は多数出版されていますが、その客観性と分り易さで、「音楽美学入門」(国安洋著 春秋社 1981）を推薦します。

註3）1、肉体 2、感情、思考 3、精神 ウーン、発想の貧困さは隠せないなァ。

註4）まったくだ。音楽が要求するのである。

註5）良否の判断基準は当然人によって異なる。曇りなく磨けば良い、という訳ではない。

註6）ここにぼくたちは第3フィルターとプログレッシヴ・ロックの、存在の仕方の類似性を見る事が出来る。両者ともあらゆる要素を取り込んで形成されていくが、形成する事自体が目的ではない、という点。

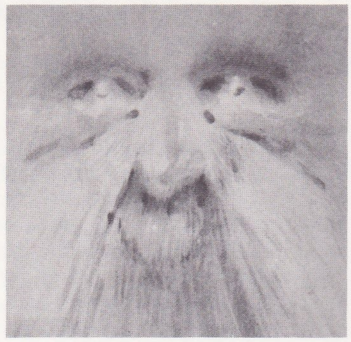
2．語法

音楽は社会的なコミュニケーションや思考の為に用いられる「言語」とは異なる。それ故表面的な意識に捕らわれる事なく第3フィルターへ、更に人間の根源的な所へ向かう。逆に「音楽」とは、その根源から発したものに、音楽的な語法が与えられたものを指すのではないだろうか？　音楽において語法あるいはテクニックとは、人間の根源的な所から発するものに対する伝達媒体なのである。あまり良い例を見つける事が出来ないのだが、感情を伝達したいと思っている人も、思考を伝達したいと思っている人も、その為に「音」を指向した段階で、既にその人が伝達したいと思っている事柄以上の何かが「音」の中に存在する事を、無意識の内に感じとっているのではないだろうか？[註7]

そして、根源から出てきた何かを、意識的なレヴェルでの「音楽」に変換する働きを持っているのが、第3フィルターなのである。[註8]

プログレッシヴ・ロックがそれまでのロックと異なる点の一つに、何かを表現しようとする意志を強く持ち、それをサウンドに具体化していった点がある。それ故、多くのバンドは思想的な側面（音楽以外の側面）を自身の基盤（表現の基盤）とした。また「Sgt, Peppers〜」、「Tommy」を経た後に生まれた「コンセプト」なる概念は、時として音楽以上に重要視された。

しかし、その思想やコンセプトに用いられた題材が、様々な形態をとってはいても、一様に人間の内側を向いていた事は見逃せない。[註9]その特殊性は彼らが表現しようとしていた事の異質さを示している。そして彼らが行った様々な音楽的実験は、その具現化の困難さを示すとともに、彼らが、音楽自体が本来伝達しようとしている事は何か？という問題すら自己の内で提議していたであろう事を感じさせる。なぜなら、それは明らかに通常の音楽の枠をはみ出した実験であったからだ。幻覚剤の使用という一例をもってしても、その逸脱の程は想像がつくだろう。断言はしない。しかし、音楽としてのプログレッシヴ・ロックが、音楽自体に目を向けていた時には、必ずやこうした問題に突き当たるベクトルを有していたと思う。つまり、プログレッシヴ・ロックとは、様々な音を通じて呼びかけられる「根源」からの声に耳を傾ける作業だったと思うのだ。



Arnold Schoenberg：Tears

また、コラージュやエフェクト、演劇的要素等風変わりな技法が注目されたのも、そこに従来のロックの流れには無かった、特殊なコンセプトの具現化という必然性が存在したからである。こうした技法の多くは、既に他の音楽や芸術で開発されていたものだが、プログレッシヴ・ロックはそれをロックのスタイルとして確立した点で評価されている。つまりは「ロック」と他の技法の融合という意識そのものが、プログレッシヴ・ロックの語法であったのだ。

しかし、こうした特殊な語法（技法）は万人に通用する物ではない。人によっては拒否反応すら起こすであろう。日本人が英語を用いて思考する事が出来ないのと同じ理屈である。それは音楽家とリスナーの第3フィルターの類似を前提とするのだ。[註10]その類似性はまず風変わりな音（技法）に対する興味として顕れ、ついでその音自体を探し求めさせ、ついに出会う、といった音楽聴以前の両者の方向性にも影響しているのである。

当時、プログレッシヴ・ロックが大規模なムーヴメントと成り得たのは、種々の理由により、多くの人間が類似性の高い第3フィルターを備え持っていた結果なのである。

'70年代中期以後、こうした語法が人々の間に浸透し、特殊性を持たなくなった段階で、プログレッシヴ・ロックは外見上のスタイルとして一般の間に定着した。それは、キーボード、シンセサイザーの多用、シンフォニックな曲想といった具体的なものから、融合の意識、更には音楽的な基盤をコンセプトに置き、バンドの基盤を音楽以外の所に求める、といった思想的な側面に至るまでスタイル化されたのである。

しかし、スタイルとしての確立が成された後に出現したバンドの多くは、試行錯誤性が薄く、その音楽が持っているベクトルの方向性も変化している。

実は、こういった事を音楽的な側面から証明するのは非常に難しい。ぼくがこの章のあちこちで言い淀んでいるのはその為だ。[註11]

だが、そのスタイルが確立されるまでに成された、多くのバンドの試行錯誤は重要視されるべきである。なぜなら試行錯誤をする事による意識の拡散と集中の反復は、自身との戦いを促す形で、意識の方向性を自身の内側へと向かわせるからである。既に確立されたスタイルの中に自己を塗り込めていく作業とは、明らかな相違点を持っている。

プログレッシヴ・ロックにおいて「ロック」に融合された様々な技法は、その性質から次の三つに大別できると思う。

a）構築性を持つ技法

クラシック音楽に代表される、その形式や様式自体に美学を持つ音楽の技法。作曲技法。

b）即興性を持つ技法

構築性と対照を成す、[註12]瞬間的な自己表現法。インプロヴィゼイション。ジャンルとしては、ジャズ、現代音楽、民族音楽等、様々なものに目が向けられた。

c）音楽以外の技法

語り、ドラマ、エレクトロニクス、照明、映像、演劇、LSD等幻覚剤（技法か？）、他。見方によってはジャケット等も含まれるだろう。

ここでは問わないが、例えばコラージュやパフォーマンスをどこに分類するか？といった問題は残る。

さて、'70年代中期以後、スタイルとして定着したプログレッシヴ・ロックとは、主として構築性に代表されるサウンドを持ち、この傾向は現在まで続いている。その良否をここで問う必要はないが、スタイルや技法として徐々に発展を続けていたのは事実だと思う。

註7）第3フィルターをフィルターと名付けたのは、音楽がそこを通過して更に先へ進む、と仮定したからである。そして、その到達点は、人間の精神の中心部、これがなくなったら人間ではなくなってしまう様なところのものなのではないだろうか？　それについてここで語る勇気は、ぼくにはない。

註8）誰しも経験があるだろうが、音楽を聴いている最中に突然体がピクッと動く事がある。こうした無意識のうちに起こる衝動的な肉体の動きを大切にすべきだ。それが「ピクッ」の一瞬で終るのは、次の瞬間に理性が働くからである。もし理性が働かなければ、自分はどうなっていただろうか？　その時の体の動きは、何を意味するのだろうか？　音楽を通して得られた、感情や思考や意識以外からの呼びかけを、大切にすべきだ。

註9）文学、哲学、人生、錬金術、etc、例えば宇宙を題材としていても、ベクトルは自身の内側を向いている、といった場合も多々ある。

註10）キング・クリムゾンを聴いた時に多くの人が口にする、「暗い」とか「気持ち悪い」といった言葉は、おおよそ的を得ている様に思う。しかし、「暗い」ものや「気持ち悪い」ものに馴染めない人の第3フィルターは、キング・クリムゾンの音楽を通過させる事が出来ないであろう。ぼく自身、この種の経験が多々ある。しかし、「暗い」とか「気持ち悪い」と思う事自体は、彼がその音楽を「聴こう」と努力している証拠だと思う。

註11）そう、「音」は「言語」程には感情や思考との相関性を持っていないのだ。

註12）しかし、対立するものではないと思う。むしろ、構築の原点が即興なのではないだろうか？

しかし、こうしたスタイルとしてのプログレッシヴ・ロックを目指すベクトルは、'70年前後から存在していたものだ。例えばNICE――EL&Pの流れの中に、それを見い出す事が出来る。NICEの持っていたロックとクラシックを融合しようとする意識は、EL&Pにおいて思想性に優先し、既成のクラシック音楽に対して可能な限りロック的なアレンジを施す実験を経て、そこからオリジナリティを抽出しようとする意識に変容した。つまり、EL&Pは「編曲」作業の中から独自の可能性を感じとり、それをアイデンティティにすべく努力し始めたのである。

そして、その意識を受け継ぎ確固たるアイデンティティを作りあげたのが、後のENIDである。ここではクラシック音楽の素材もロックの素材も等しく扱われている。キーボードは極力キーボードである事を感じさせない様オーケストラ的な音色に加工され、ギターはアド・リブを弾く事なく、完全にアレンジされたフレーズをなぞるだけ。ベース・ラインは対位法を基盤としており、ドラムは時としてリズム・キープを放棄する。では、彼らはクラシックをロック楽器で演奏しているのか？というと、そうではない。作曲面に注目すべきだ。クラシック音楽特有のメロディの発展性は、頻繁に顕れるロック的なリフの反復により確保されている。また、そこから生まれたリズムに対するアプローチは執拗で、ロックでしか味わえないスピード感を生み出すとともに、姿を変えて、各演奏パートの対位法にまで影響を及ぼしている。こうした思考法は重要だと思う。つまり、彼らは発想の段階から既にクラシック音楽とロックのマテリアルを区別しておらず、ただ単に彼らの音楽にとって必要なものを選び出しているだけなのである。[註13]

ここでは融合の意識よりも、融合によって生まれたスタイルを追求する意識の方がより強く、結果として融合の意識を打ち消す事により、彼らは一歩先へ進み出たのである。[註14]

しかし、こうした動きも、プログレッシヴ・ロックの語法が広く一般性を帯び、他の音楽ジャンルにおいても充分な効果を発揮し始めた頃には、ついに途絶えてしまう。

3. テクノロジー

プログレッシヴ・ロックのスタイルについて考える際、重要な要素となるものの一つに、レコードや録音技術の問題がある。[註15]所謂サウンド・テクノロジーの問題だ。

'58年から発売されたステレオ・LP・レコードが、当時のイギリスでどの様に普及していったかを知るのは難しい。モノラル盤とステレオ盤の同時発売等は、当時の状況を反映している。しかし、'69年には「In The Court Of The Crimson King」がステレオ盤のみで発売されていた。おそらく、一般市民の間でも「ロックは自宅で（しかもステレオ録音で）楽しむ事ができる」といった程度の認識は広まっていたであろう。立場感に富むステレオ録音には若者の興味が集中していっただろうし、金さえあれば自宅にステレオ・プレイヤーを備えていったであろう。プログレッシヴ・ロックは事実上ステレオ世代の音楽であったと思う。

またレコードの存在は、こうした同時代的な問題のみでなく、その後の多くのリスナー達とも深く係わっている。現在のぼく達について自問自答をすればよい。土地も時代も遠く懸け離れた事柄に関して、この様な本が出版されている事自体が、多くを語ってくれるだろう。即ち、レコードは単に音を伝達する為の記録盤には留まらなかったという事を。

しかし、レコードは広く一般に音楽を親しませていった半面、ある種のデメリットをももたらしている。急激に始まった「音楽聴」観念の弱体化である。目の前に演奏者が存在するか否かは、人間の集中力に大きく作用する。また、一回のみしか聴けなかった演奏が何度も聴けるという安堵感、何度も聴く事による惰性。足しげくコンサートに通っていた人が、家で、食事をしながら聴く、本を読みながら聴く、原稿を書きながら聴く（!!!）という事。

現在ではこうした問題を考える事は、各個人の内に深く沈静してしまった。[註16]

'60年代中期からレコーディングに導入された多重録音技術の発達は、演奏そのものとは少々異なった観点から音楽を見る可能性を示唆した。[註17]演奏会場では得られないバランスや音処理、ありえない音色、ブ厚いギター、何本もの手を持つキーボディスト、更には長大な楽曲を幾つかのパートに分割して録音していく技法……等。一度録音された音を「聴き」、そこから新たな可能性を引き出してゆく作業は、時間の許す限り音楽家に試行錯誤を繰り返させたであろう。なぜなら、彼は何度も聴いてきた既成の音楽の類似品を作ろうとしていたのではなく、手探りで新しい音楽形態を探し求めていたからである。

そして音楽家は、自身の音楽の形を頭に思い描くのと同時に、2つのスピーカーから流れ出る音の形をも思い描く様になった。スピーカーとリスナーが形成する音楽的な空間に、時間軸が加わった特殊な3.5次元世界[註18]すべてが、彼のキャンバスだ。多重録音技術の進歩は、その世界を外側から客観的にペイントしてゆく手法を、音楽家に教えていったのである。有能な彼は何度も絵の具を混ぜ合わせて、一見完成された様に見えるキャンバスに更に手を加えていったことだろう。[註19]

こうした作業はロックに構築性を与えていく上で非常に役立ち、更に、発想の転換をも促していったのだ。

すべてのテクノロジーは人間の肉体の延長として捉える事が出来る。一番良い例は、今ぼくが手にしている鉛筆だ。これは手の延長なのである。鉛筆が筆記用具である事を知らなければそれはただの棒だ。だが、それを知っていれば、絵も書けるし、字も書ける。自分の意識を文字として原稿用紙に記録する事も出来るだろう。かくして、原稿用紙はメモリー・バンクとなり、肉体の延長としての第二脳味噌と化す。だが、問題はその先だ。そうした筆記用具としての可能性を試しつくした後、彼は、それを単なる棒として再検討し始める。鉛筆は箸の代わりになるか？折るとどうなるか？鋭く削られたその先端で人が殺せるか？鉛筆で何が出来るか？削りカスで何が出来るか？そして、肉体の延長以外の何かになり得ないか？

サウンド・テクノロジーの分野がこの様な意識を持ち始めた時代に、プログレッシヴ・ロックは遭遇した。そこに相乗効果が生まれたであろう事は想像にかたくない。

日々開発されてゆくテクノロジーの最先端に近い部分は、いつの時代においてもすぐさま音楽へと投入されている。これは興味深い事実だ。商業的な問題を差し引いても、人間にそれだけの事をさせる原因があるのだとぼくは思う。

しかし、現在のサウンド・テクノロジーは経済的な問題の解決が最優先し、「便利さ」の追求故に創造性を失っている。つまり、プログ

註13）しかし、異なる二者の衝突により発生するエネルギーは、見事に利用されている。……すいません、私は彼らのファンです。

註14）ある意味ではJETHRO TULLと似たシチュエーションにあると思う。

註15）当然、楽器そのものも取り上げられるべきなのだが、ここでは省略した。

註16）この問題に関して、レコードの持つ商業性や資本主義社会と真向から対立してみるのもいいだろう。しかし、現在では、それを否定する事は、自分自身を否定する事と同義であるとぼくは思う。何かもっと別の解決方法が必要だ。

註17）現代音楽の分野では、非常に早い時期からこの種の技術が開発されていた。

註18）1、音　2、空間　3、時間　3.5、対話……笑わないでくれー！

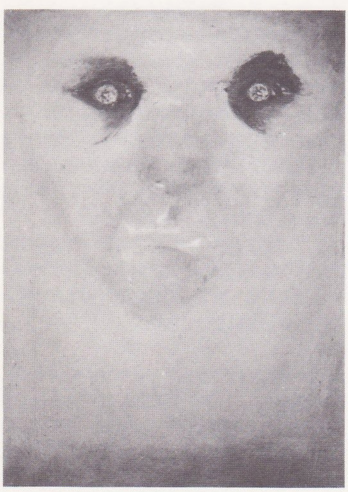
註19）たとえ譜面上でどれだけ完璧なアレンジがなされていたとしても、『Close To The Edge』がただの一回録音されただけで、完成されたと思う人はいまい。今ではそう確信できる程に、この技術も一般化した。

レッシヴ・ロックにとってサウンド・テクノロジーは、その試行錯誤性の故に重要であったのだ。

3.5 サブリミナル

ビートルズの「Sgt. Pepper's～」はレコード史上初のコンセプト・アルバムとして知られているが、実はこの作品が、当時の若者の深層心理に存在していたセックスやドラッグや革命への欲求を巧みに利用し、成功を収めたとする説がある。[註20]'76年に発表されたウィルソン・ブライアン・キイの説だ。サブリミナル・テクニックと呼ばれるこの技法は、現在世界中を覆っているマス・コミニュケーションの分野において、大きな関心事となっている。この例は商業的な面でのテクニックではあるものの、レコードの普及により、ロックと資本主義社会が緊密関係になり始めた時から、無視できない問題になっている。また、彼が同時に「Tommy」を例に上げているのは、非常に興味深い。

純粋に音楽的な観点から見ても、サブリミナル・テクニックは存在する。歌詩においての性的な暗示や、明確に認知できない様に加工された、動物の悲鳴（!）を用いた効果音等である。



Arnold Schoenberg: Gaze

サブリミナル・テクニックはそのテクニック自体を認知できないところに効果があり、言わば第3フィルターを擦り抜けてしまう透過光である。これは少なくとも重要な話だ。プログレッシヴ・ロックの特殊性を考えると、誰かがそれを用いていた可能性を考えずにはおれない。とは言え、この問題に関してはぼく自身考察不足であり、キイの著作を読んでいただいた方が早いと思われるので、ここでは省略する。

4. 融合に用いられた技法

a）構築性を持つ技法

クラシック音楽に話を限定するならば、構築作業の根底にある思考法は「変奏」あるいは「変形」の意識であると思う。一つのフレーズを変形させて他の部分を作り、全体に有機的な構成感を与えていく技法は、クラシック音楽の至る所に見られる。例えば、最も完成されたスタイルとされるソナタ形式では、対立するA、B二つの主題の提示、変形されたA、Bの対比による展開、修飾されたA、Bの再現、といった順序で楽曲が進行する。展開部における「変形」は、時に原形を留めぬところまで徹底されて行われるが、こうした作業の最終的な目的は、A、B二つの主題[註21]の絶対化と、有機的な全体構造の追求であると思う。一言で言えば、説得力を増強させる作業である。それが、プログレッシヴ・ロックがクラシック音楽の方法論を導入した理由の一つであろう。この「変奏」の意識は、アレンジ面で広く活用され、『Close To The Edge』の様な長大な作品を形成する際の、有効な手段となっている。

また、もう一つの理由は、そうした伝統的な形式（様式）の美学に含まれている、人間の普遍的な美の探求を、そこに見い出したからであろう。独自の語法を追求する姿勢自体が、音楽を普遍的なものにしようとする意識の顕れではあるが、その作業が文字通りクラシックの時代から現在まで継承され続けている事も重要である。

つまり、プログレッシヴ・ロックはスタイル追求の意識を極度に強調し、その作業を通して得られた、形式を探究する人間の美学自体を、ロックに融合していったと思うのだ。

b）即興性を持つ技法

それが指癖から生まれたものでない限り、即興演奏は深刻な意味を有している。それは思考の段階で理解しきれるものだとは、ぼくには思えない。単純に考えても、少なくとも即興演奏は直観的である。インプロヴァイザーには次の瞬間を考える余裕はなく、一瞬一瞬がすべてなのだ。そこに思考の入る余地はあまり無い。その為、彼らは理論や技法を頭で覚えるのではなく、肉体と精神に染み込ませる。音に対して瞬時に反応できる様に、肉体を訓練し、集中力を養う為の意識コントロールを目指す。つまり即興演奏とは、感情や思考や意識といったフィルターの透過性を高め、「根源」と「肉体」を可能な限り直結させてゆく作業ではないだろうか？　時にインプロヴァイザーがパフォーマーと化していく理由の一つがここにある。あるかないか分からない様なフィルターでは、光の強さは加減できない。「根源」から出てきた代物が、ちっぽけな楽器の中に収まってくれるという保障はどこにも無いのだ。体が震える位の現象は楽に起こり得る。

プログレッシヴ・ロックが即興演奏を取り入れたのは、この瞬間的に放出される「根源」からの光が、音楽にとって、人間にとって、重要な何かを意味している事を感じていたからだと思う。

後に即興演奏は演奏家同志の対話としてスタイル化されたが、まず第一にキング・クリムゾンを例に上げればあらかた片付いてしまうという事実も、やはり深刻である。

c）音楽以外の技法

これはコンセプトや思想と密接な関係にある場合が多く、非常に重要なものだが、ここでは取り上げない。

さて、本来ならここから具体例の紹介に移さねばならないのだが、お察しの通りページ数がない。それを実現する為には、この本と同じ規模のものをもう一冊分企画し直さねばならないだろう。そして、そこまでやるには、ぼくは力量不足である。そう、これは極めてプログレッシヴ・ロックよりの思考方法に捕らわれた、一素人の考察にすぎない。[註22]

冒頭に引用した音楽大事典は、3千ページ近い膨大な情報量を誇っているが、その内プログレッシヴ・ロックに関する記述は1ページにも満たない。有能な音楽学者が、音楽とはまず人間に作用を及ぼすものとして分析されるべきである事を認識し、これほど巨大だった精神作業のムーヴメントに目を向けるまでには、まだ長い年月を要するであろう。

註20）本当の問題はその後で、成功した事によって、逆にセックスやドラッグや革命への欲求を蔓延させたというのである。「メディア・セックス」（ウイルソン・ブライアン・キイ著　リブロポート）を参照にして下さい。

註21）AとB、二つという事！いつもこれだ！　男と女、静と動、肉体と精神、意識と無意識。

註22）それでも、こうした考察はなされるべきだと思う。誰でも最初は個人的なレヴェルから出発するのだ。

アーノルド・シェーンベルクは、それに気付いた最初の人だったと思う。――音と精神の接点を目指すシステムとスタイル。隆盛。無に向けて加速するスタイルの進化。終焉。反復。――現実が人間を殺さない限り、三度目は起こる……。

CHAPTER VII

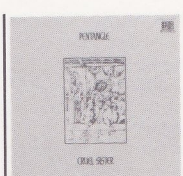
プログレッシヴ性——'70年代のサンプルとして

・松本昌幸・

大混乱の内に幕を閉じたイギリスの'60年代。新旧の衝突点だった'60年代後期のロンドン、その音楽シーンは、'60年代の小市民からすれば、得体の知れない変容物と突然変異のうごめく坩堝だったに違いない。KING CRIMSON、YES、PINK FLOYDなどの俗にプログレッシヴ・ロックと言い囲まれる一派は、純粋に音楽のみを見ても、当時のそうした最たるものだ。カウンター・カルチャーは、より深く認識を開くことで、既存の留金を一済なくし、こうした新たな創造物から、果ては狂人アーサー・ブラウン、ドラッグ愛好家のデヴィッド・アレン、“坩堝”と言うよりは永遠の“ウツボ”と言うべきTHIRD EAR BANDまでも産み出したのだから。その最たる異端が、では、所謂、異端扱いを受けたかと言えば、むしろ逆だったことが、この当時の時代感覚をよく表している。何よりこれこそが、カウンター・カルチュアの持たらせた最大の所産である。音楽が多彩で複雑になったことが、斬新だったというよりも、真の斬新さは、そうした音楽を産み出す音楽的な背景や意識が、形造られた点にあるといえる。これは、個人の意志では成し得ない集合意識の次元でのことだけに、測り知れないものがある。この認識の転換を'60年代後期に経て、新たな認識の上に立ったからこそ、この土壌をバック・ボーンに、雨後のたけのこの如く、見たことも聴いたこともないような音楽が、産まれ出てきては認知されたのである。もし、本来、それら音楽を指してプログレッシヴという言葉を使うならば、恐らく、この時期のロックの大半が、程度の差こそあれ、この感覚を持っていたとも言えかねない。言い替えれば、プログレッシヴ性とは、一種の感覚にも似た音楽の背後にあるもの、見たことも聴いたこともないものを産み出す、親のようなものである。また、ロック史というものを考えるならば、'60年代後期の未分化な状態こそ、いわば'70年代を形に現そうとする産みの苦しみのようなものだ。そして、いよいよ、プログレッシヴ感覚が、具体的に音楽のスタイルとして目の前に現れた時、それは'60年代とは比較にならないほど千差万別だった。なぜなら、カウンター・カルチュアは、何より自我の醒めを、個性の確立を、独自性を促していたからである。

ところで、'60年代後期から'70年代初期にかけてのブリティッシュ・ロックには、二つの通底する事柄がある。一つは、音楽に限らず、あらゆるものを包み込み、この時期に限らず表れているもの。イギリスらしさである。イギリスの基盤を成すこの感覚は、他国の例にもれず、国民性として表れているもののことである。音楽上では、内省志向（陰り、重苦しさ）から保守性（品の良さ、小綺麗なまとまり方）にかけての感覚と、これに対する反動性である。これらは、例えば、ブリティッシュ・ロック史上、3度の大きなムーヴメントだった'60年代初頭のビート・サウンド、'70年前後の広義でのプログレッシヴ・ロック、'80年前後のパンク、ニュー・ウェイヴの、各々の台頭といった一早く先駆ける斬新さそれ自体と、そしてその反動の中にさえも通底するもの（'80年前後では中半希薄だが）、控えめでポップなアレンジのことである。そしてまた、新たなものが入り込む際も、その取り込みの“素早さ”と、解釈、消化の“仕方”としてよく表れている。これらは、各々、同時期の他国のムーヴメントとの影響関係と、それらムーヴメントにおける音楽性や同傾向の音楽スタイルを持つものを、できる限り数多く並べ合わせてみると、事の他、わかりやすい。

そして、共通する二つめの事柄が、プログレッシヴ感覚である。これは、内的イメージを具体化しようとするスタイルとしてのプログレッシヴ・ロックを最たるものとする、この時期のより見たことも聴いたこともないものを創り出そうとする感覚、創造性のことである。当然のことながら、創造性は音楽形態を選ばない。'60年代既存形態は、カウンター・カルチュアによって消え失せたのではなく、何らかの形で必然的に変容したのである。ブルーズ・ロックにおけるBAKERLOO、'60年代ビート・ポップにおけるKALEIDOSCOPEなどは、そうした変容物だ。もちろん、そのまま形を残したものもある。しかし、真の例外は、例えばトラッドのように、スタイルを保持し伝承することに音楽性の命がある場合のみである。それでも、逆に例外とは言え、現在、エンヤやCLANNADがあるように、'60年代末、FAIRPORT CONVENTIONなどがエレクトリッ

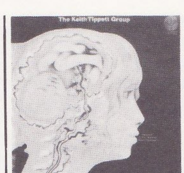


PENTANGLE

Cruel Sister

'70

英国フォーク界きってのギターの名手、ジョン・レンボーン、バート・ヤンシュ、そしてまさにそのサウンドにあった美しく澄んだ歌声を聴かせてくれるジャッキー・マクシーの3人が中心となって結成されたPENTANGLEの本作品は、4作目にあたる彼らの最高作。トラッドに彼ら独自のアレンジを加えたバラッド曲となっている。どの曲も甲乙つけがたい名曲揃いだが、特にA④のタイトル曲とB面全てをついやした大曲が最高。また、解散後もジョン・レンボーンはソロ、そしてジャッキー・マクシーとJOHN RENBOURN GROUPを結成、バートもソロとして活動。（林た）



THE KEITH TIPPETT GROUP

Dedicated To You, But You Weren't Listening

'70

キース・ティペットの第1のステップであるこのユニットは、'68年中半に始まり、'70年のデビュー作を経て、この2作目において完結している。この時期の彼の頭中には、時代の波でもあったロックへの接近が多少なりともあったに違いない。前作で部分的にみられたイージーなつめの甘さは、消し飛ばされ、各奏者のソロを絡めながらち密に怒濤のように流れ出していく展開を示したA面で、'70年代初期ジャズ・ロックのどのユニットよりも先鋭的なところを見せている。その一方では、B②などで次なるステップ、トータル・フリー・ジャズへの傾倒を既に窺わせてもいる。（松本）

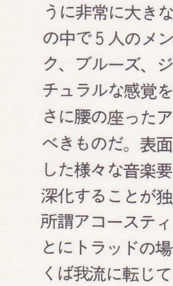
ク・トラッドを試みたように、最も保守的なフィールドですら、創造性を見ることができるのである。プログレッシヴ感覚が産み出した新たな形態、プログレッシヴ・ロックを見るばかりに、そうした既存スタイルの変容体に見出せるはずの創造性は、事の他、見過ごされがちだ。

FAIRPORT CONVENTION の試行。'60年代末、トラッド界に起こった革命、エレクトリック・トラッドの台頭は、イギリスが温蔵する歴史の蓄積としてのトラッドに、真向から挑戦したものだっただけに、派手な目立ち方をしたに違いない。トラッドとは、土地に密着し、生活の中に流れていたものであり、永い年月を経るつどに感情が塗り込められてきた地域の合言葉として生きていたという点で、ベーシックであり、真の意味でアコースティックなものである。マーティン・カーシーが STEELEYE SPAN に参加した時、エレクトリック楽器を極力遠ざけようとしたのも、このトラッドというものが持つ背景の重味を理解する、単なる唄歌い、楽器弾きではない、彼のトラディストとしての姿勢に他ならない。このイギリスの最も保守的な部分に大きく横たわる伝統の重味に対しては、エレクトリックによる挑戦が、いかに無鉄砲で無神経な横暴さに写ったか、というのも理解できないことではない。しかし、この革新をあくまでもトラッドに留めながらも最大限に、しかも音楽的に F・CONVENTION やS・SPAN 以上にニュアンスを深めたグループがあった。PENTANGLE である。彼らは'73年に解散するまで、遂にエレクトリック楽器を使用しなかった。これは、今となっては見過ごされがちだが、トラッドにあっては、上記のように非常に大きな意味合いを持つ。そして、この中で5人のメンバーの各経歴でもあるフォーク、ブルーズ、ジャズ、中世音楽が、独特のナチュラルな感覚をもって融合している様は、まさに腰の座ったアコースティックの革新というべきものだ。表面上のスタイルではなく、こうした様々な音楽要素の融合により、より内容を深化することが独自性に直結したグループは、所謂アコースティック系では非常に少ない。ことにトラッドの場合、踏襲に終わるか、さもなくば我流に転じてそれを離れるか、に分かれるのも、ひとえにトラッドという音楽自体が持つ性格と、最も保守的な部分故の動かし難いこの音楽に対する認識によるものだ。これらの点を経てこそ、彼らのプログレッシヴ性がどれほどのものだったのか、再認識されるべきだ。

トラッドほどではないにせよ、似たようなケースがもう一つある。ブリティッシュ・ジャズの場合だ。イギリスには本来のジャズは存在しないと言われれば、そうなのかもしれない。しかし、ブリティッシュ・ジャズは歴然として有り、伝統性の強い音楽形態であることにも違いはない。正確には'60年代中半のドン・レンデル、イアン・カーらの活動以来のそれが、既存するジャズに対してアヴァンギャルドな位置づけをされるものだが、スタン・トレイシー、マイク・ウエストブルック、グラハム・コリアーらのより'60年代型感覚の、より保守的な、品の良さを漂わすコンポーズに対するカウンター・カルチュアの影響には、多大なものがある。それこそがブリティッシュ・ロックとの接点である。ブリティッシュ・ジャズの持つ柔軟性は、やはり'70年前後、ロックの統合の志向性と手を結び、NUCLEUS や SOFT MACHINE といったジャズ・ロックと言われるジャンルをも確立し、持ち前のフリー感覚にロックの力動性を注入することになる。この時期のその最たる例が、CENTIPEDE（'71）である。そして、この大編成を意図した人物、キース・ティペットこそ、ブリティッシュ・ジャズにおけるカウンター・カルチュアが産み出した逸材である。'68年以来、現在もその先鋭さを失うことなく活動するが、'70年代初期におけるジャズ・ロック、大編成のジャズ・オーケストラ、小編成のフリー・ジャズといった実験的試行には、時代のエネルギーを背に受けたような、ジャズ、ロック、フリー・ミュージックのジャンルをも彷徨する感覚的な先鋭さが先走っている。明らかにスタン・トレイシーやマイク・ウエストブルックらにはないある種の無暴さと力動感を秘め、当然のことながら即興性、実験性が強い。そして、感覚を最優先する彼の瞬発力、集中力、緊迫感は、例えば、ロバート・フリップが KING CRIMSON の「Island」のプロデュースで見せたそれらに、どこか通底するように思える。精神性の持ち方として、彼の鋭さは、ブリティッシュ・ジャズとプログレッシヴ・ロックの極北を貫くものがある。いかに彼の感覚が先鋭であるかは、KING CRIMSONにおける彼の協力が、彼自身にとってさしたるものでないことで明らかだ。ちなみに「ポセイドンのめざめ」中の『Cat Food』のピアノ・プレイでさえ音遊びに等しいほどだ。

このようにプログレッシヴ感覚こそが、ジャンルの背後で大きな源動力となって作用していたのだから、本道のブリティッシュ・ロックにおいては、数限りないサンプルを見い出せる。そうした中でも、他を寄せつけないほどに、これを独自の確固たるスタイルとして確立した典型と言えば、LED ZEPPELIN と JETHRO TULL を置いて他にはないだろう。両者に見る総括的な音楽性は、もはやビート・サウンドの変容には収まり切らないどころか、実験段階を遙かに通り越した確固たる独自性になっている。

前者は、ブルーズ、ビート・サウンドを下地にする部分が多いために、一口にハード・ロックと言われる嫌いがあるが、その部分ですら、例えば「III」中の『移民の歌』での、明らかに通常のハード・ロックとは一線を画す独自の変則リズム感から曲が産まれ出てきたというべき着想の斬新さ、「II」中の『胸いっぱいの愛を』での、ハード・ロックの背骨というべき直進性を、サウンド上、ほとんど関連性のない、しかし曲内容を見事に感覚化した内的なイメージを備えるコンクレート部をコラージュすることにより、音を立てるように折り曲げて、その落差感覚をそのまま曲展開として誇張するというコラージュの有機的方法論など、通常のハード・ロックには本来備わっていないものだ。そうした斬新さに対比するかの如く一方で、'60年代のブルーズ・ロックを引き継いだ場合も、「III」中の『貴女を愛し続けて』を筆頭に、その徹底ぶりは、そこにブルーズの感情が生きるといった彫りの深い感覚を十分に伝えるという点で、例えば、ハード・ロックの代表格 DEEP PURPLE の最もブルージーなナンバー『Place In Line』の単なるスタイルの踏襲とは大差をつける、驚くほどの度量の大きさを見せつける。その他、『No Quarter』『Kashmir』といった劇的要素は言うに及ばず、トラッドへの

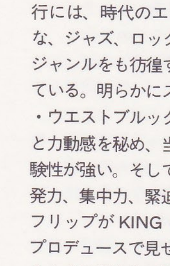


KEITH TIPPETT'S ARK

Frames

'78

キース・ティペットは'70年代のブリティッシュ・ジャズ・シーンを代表するミュージシャンであり、ピアニストとして多くの作品で好プレイを展開している。中でも、ロック・ファンには KING CRIMSON におけるきらびやかな演奏がよく知られている。本作品はそんな彼が作曲家、アレンジャーとしての才能をも遺憾無く発揮した代表作の一つである。10人を越える参加メンバーは随所でフリー・フォームなプレイを展開しているが、全体の流れは見事にアレンジされており、統制のとれたものとなっている。圧倒的迫力を持った文字通りのジャズ・シンフォニーである。（賀川）

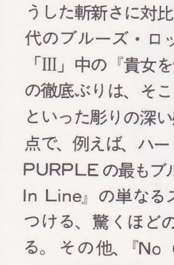


KEITH TIPPETT, LOUIS MOHOLO

No Gossip

'80

英ジャズ界の最も先鋭なピアニストの強靱さを示す一作。'80年3月ベルリンでのライヴ録音。共演する南アフリカ出身のルイ・モホロとは'80年代初頭、連名作「Tern」、そしてモホロのリーダー作で顔を合わせているが、終始アグレッシヴな緊迫感で押し通された本作には舌を巻くものがある。動のティペットらしく、感情の瞬間の爆発を音にたくすような連打、ヴァリエイションのひらめきは、躍動感あるドラムがぶつかることで火花を散らすかのようだ。'70年代の静のパーカッションとの会話、OVARY LODGE と対極にある作品と言えるかもしれない。極度に鋭い。（松本）



OVARY LODGE

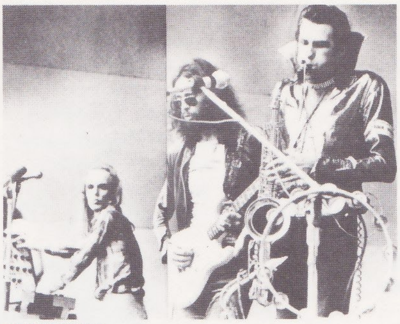
Ovary Lodge

'73

イギリス・ジャズ界最強のイノヴェイター、キース・ティペットを中心とする OVARY LODGE の2作目。前作「Blue-Print」に続いてロバート・フリップのプロデュース。このグループはティペットの内部では、パフォーマンス・ビッグ・バンド、CENTIPEDE と対をなしており、構築要素はコレクティヴ・インプロヴィゼイションである。同趣の COMPANY と比しても音楽的完成度が高く、音の拡散・ヴォキャブラリィの豊富さは群を抜いている。ティペットの音のモーメントに向う切れ込みは、この頃に養われたといってもよい。'76年に OGUN からサードを発表している。（中藤）



●LED ZEPPELIN



●ROXY MUSIC

精通を示す露骨な「III」や「In Through The Outdoor」中の『Hot Dog』でのジグのハード・ロック解釈など、彼らはプログレッシヴ感覚が強度に息づくグループである。

そして後者に至っては、ハード・ロックともブルーズ・ロックとも所謂プログレッシヴ・ロックとも言い当てることができないまま、手をこまねいているリスナーの顔々すら浮かび上がりそうだ。テクニック面からの雑多な音楽性の統合力もさることながら、アルバム、ステージまでを包括するコンセプトの先走りなど、彼ら以外の何者でもない、永きに渡る音楽性の強靱さには、確固たる精神性すら窺える。両者は、'70年代の多様化をグループ単位で示した好例である。

こうしたスタイルの多様化が、カウンター・カルチュアを出発点にしているとはしても、'70年代は既に、応用、細分化の過程を歩んでいる。中でも'70年に結成されたROXY MUSICの示したブリティッシュ・ポップスには、非常に興味深いものがある。言うまでもなく、ポップスとは、商業的アピール性から成る音楽性である。BEATLESのポップ性が、これそのものであるのに対して、ROXY MUSICのそれは、性倒錯、ナルシシズム、ダンディズムといった肉的生理感覚の内的イメージを強張することで、一見、表面上、既成ポップスを変容させているかのように見える。しかし、これらの特異性は、あくまでもポップなそのサウンドに留まるモチーフである。そして、彼らの音楽性をポップスの変容というよりも、転換だとしたいのも、なぜなら、彼らのサウンドが、所謂ポップス性を解体し、再統合した上での商業的アピール性の位置にあることを窺わせる点にある。彼らの大半のジャケットに登場する女性達は、彼らのモチーフをより一層、真実味のあるものにしている。しかし、この性的具象としての女性が、6作目「Manifesto」のジャケットを飾る、着飾ったマネキンの女性達の発するエナメル感覚につきつめられた時、"美女は野獣"を具現した女性達が、実は"美女は野獣"というキャッチ・コピーであることに気づかせられる。彼らの音楽性が、解体と再統合の跡を臭わせるのも、このジャケットの美女達の一件に通じる方法論をそこに見るからだ。つまり、それら特異なモチーフは、彼らのポップス性を売りもの、見せものとして誇張する役割を果たしており、このポップス性とは、BEATLESのある意味で素直なそれとは違って、演出している部分がどこかに感じられる、あまりにもポップス然とした、借り物のようなそれのことである。ポップスの命とも言える商業的アピール性を演出することで、本来のポップス性、そして特異なモチーフの意味内容を、骨抜きにした—解体した上—で、それらを再統合したポップスとして独自のスタイルに仕上げているこの冷めた方法論は、言ってみれば、ポップ・アートの方法論を用いたものだ。これは、既に変容の次元を飛び越し、新たなポップス、ロックの有り方と、その可能性を'80年代に先取りして示しているものだとは言えないだろうか。

そして、プログレッシヴ性の発露を、'70年代ブリティッシュ・ロックの流れの上でみていくと、中半頃を境に、個性表現の変容から概念の呈示に傾いていったように見える。カウンター・カルチュアのもたらせた影響は、その最たる音楽上の所産だった所謂プログレッシヴ・ロックが、スタイルの反復の中に、音楽性が埋没していったこの時期をもって消えていった。というよりも、むしろ、既存のものとしてブリティッシュ・ロックの下地になり見えなくなったということだろう。例えば、デヴィッド・ボウイの音楽が、こうした時代の流れを敏感に感じとって常に変化してきたのも、そもそもロックが、既成音楽どころか、あらゆる社会性から概念までを吸収しながら変遷する雑種であることを、よく表している。ロック自体が、音楽のプログレッシヴ性そのものなのである。

この章の最後に、'70年代ロック史の最後に台頭した最も注目されたプログレッシヴ性に少しだけ触れておこう。具体的には、イーノの活動、アンビエント・ミュージックや環境音楽という言葉でよく知られるところの音楽性についてである。これは、エリック・サティや無調音楽などの復権に密接にかかわっていることだ。イーノがもたらせたものとは、彼らにその原型、着想をもとめられる、音の呈示という概念である。'70年代初期、個性表出による感情・意志表現が、カウンター・カルチュアを契機に最も高められたことに対するプログレッシヴ性の発露が、この方法論、感情表現をとらない、音の呈示、そして意味を伝えようとする音楽に対するイメージを引き起こす音、なのである。これは方法論として、ニュー・ウェイヴ・ムーヴメントのノイズ・ミュージックをも予言したものだ。それどころかこれは、非常に大きな意味を含んでいる。なぜなら、西洋音楽の通用観念である調性音楽に対するアヴァンギャルドと同質でもあるからだ。しかしそれ以上に、何より、言葉に等価なイメージの通用性を示そうとする結果になっている点である。そして、これは音楽上、直接的には、ニュー・ウェイヴ・ムーヴメントがもたらせた'80年代感覚に合致し、応用されていくばかりか、ビデオ・アートなどへも、イメージの有効性が示されることになる。

なお、リコメンディッド・レーベルのプログレッシヴ性については、第5章「カンタベリー・ミュージック」の項を参照してほしい。

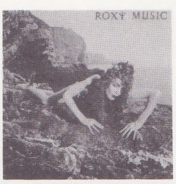


LED ZEPPELIN

Houses Of The Holy

'73

これほどポピュラーな存在にもかかわらず、今もって、実はその音楽性自体が把握されず、市民権を得ていない例も珍しい。1作目B面前半のサイケデリック色、3作目に顕著なトラディショナル色、本作A②を筆頭にする詩情性など猿まねでないサウンドを暗黙の了解で消していて、統合体である彼らの音楽性を把握など出来るわけがない。更にはプラントの根底にあるフラワー・チルドレンに通じるユートピア気質、俗に言われるペイジの黒魔術師アレイスター・クロウリーへの傾倒など個人の精神的資質、関心は、大低別問題だ。世紀の"ハード・ロック"グループというのは嘘だ。（松本）



ROXY MUSIC

Siren

'75

初期ROXYはロック史上最も魅惑的な謎だ。同性愛、フェティシズム、没落貴族、日没…様々なイメージを喚起する彼等の世界にはニューヨークの猥雑、ポップ・アートの冷酷と底では結託しながら、妙な軽さがあった。イーノの有無を言わせぬキッチュな存在感も凄かった。この5作目は、次第に薄まってゆく毒気とひきかえに、スタイリッシュなブリティッシュ・ポップの輪郭を整えた中期の代表作。イーノとは全くタイプの違う仕事人E・ジョブスンの活躍もあって秀曲が揃う。一見キワ物の彼等だが、WHOやKINKSの固めた地盤なしには有り得ないグループだ。突然変異ではない。（古田）



DAVID BOWIE

Low

'77

自分がヨーロッパ人であるということを悟った彼が、目を向けたのはベルリンであった。それまでのアメリカ指向からうって変わっての暗く冷たいサウンドを目指した。イーノやイギー・ポップをゲストに迎えて制作された本作がその第一弾である。モダン・ポップのルーツ的サウンドを持つA面も華やかではあるが、どこか醒めているし、冷ややかなシンセと呪術がかったヴォーカルをフィーチャーした、ジャーマン・プログレを思わせる様なB面は特にそれまでの彼と違った、ポップとは無縁のサウンドを見せている。この後彼はイギーとともに2度目の来日を果たしている。（神山）

ジェスロ・タル●『受難劇』全訳

訳●小木曽代史子／Chihiro S.

「受難劇 I」

「ここですらまだ
僕のことがわかるかい？
（臍(へそ)の緒が地に延びている）
「それでは、僕はもはや死んでいるんだ」
若者は言った
……彼岸から（望んで行った訳ではない）
友人達は（集い）一列に並ぶが、
タクシーはなかなか来なかった。

フラム街道は混(ラシ)んでいた
受難劇は静(ハシ)かだった

あの後の身のほてりのような
強烈な絶頂感のようなというのは
全て想像で、混乱時の嘆かわしい犯罪や
場違いな奴が泣き叫ぶようなもので
受難劇からはこだまが返る

懐かしいコーラスを皆、違う調子(キイ)で満たし
メロディは甘い不協和音に　朽ち果てる
フラム街道からは渋滞だ
永却の受難劇まで

誰がここに来て　僕の為に祈ってくれる？
香わしい御使い(エンジエル)が舞い降りる
彼女は僕の不信仰を気にせず
絶えなき微笑を浴びせたけれども

砂漠をわたる遠吠えの中
紳士達のバンド[註1]に送られて行く
革で縛(バウンド)られて……
誰も(ノー・ワン)いない（しかし誰か(サムワン)見つかる(ファアウンド)はずだ）

凍てつく荒野　薄闇を笑い顔が埋めつくす
ロール・アップ　ロール・ダウン
僕が傷ついていないと思うか？
——試写室に入ってごらん

カメラは全て回っている
我々は君を撮ってしまった
——君は劇の中の存在だ

これが君のI. D.
（人を他者と識別する申し分無きもの）

君の人生は記憶銀行(メモリー・バンク)に入れるんだ
——我々が利子を受け取る　君には感謝を

アイスクリーム売りの女は
受難劇での君を見て下着を濡らす

束の間の喜びのために名声を得るんだ
クリケット・チームのキャプテン
どんな天気でも演説
女王陛下の騎士(ナイト)の称号

親友達の電話は
君の手の熱気で冷めることはない

新聞の第一面には一行
13頭の等外馬
急いで古い傘をさせ
ドームに嫌な雨か？
しかし時折しか降り込まないし
そのうち陽が照るさ

白黒映画の愛好者
——君の初日だ
受難劇は果てしなく続き
君の見識をかき乱す

教えておくれ　赤ん坊の作り方を
女の押したおし方を
何故老犬が悲しそうに吠えるのかを

ジョージという若い雄馬が
君の妹の部屋に忍び込み
幼い彼女の穢れなき純潔は
この種馬の骨太の背に乗って飛び去る
（医者が彼女を診察する）

卑しくも高貴な女役の俳優よ
君の意見を聴こうか
思い出せないのなら
袖に書き込んだセリフを盗み見よ

教えておくれ
赤ん坊の選び方を
何故女達は色褪せ
老犬が狂ったように吠えるのかを

これが多分雌猫(ネコ)のような売女の
皮を剝ぐ唯一の手段
今や君は1、2枚皮を剝がされている
君は我々の為に存在し
我々も又そうだ

楽屋はすぐ後だ
我々は君を撮ってしまった
——君は芝居の中の存在だ
情熱家(ザ・マン・オブ・パッション)[註2]は再び立ち上がる
我々は君を消却したりしない
——君も息子[註3]のように
愛しているのだから
——疑いもなく

教えておくれ
我々の声援に答えて
君はここにいるのか？
それともここにいるのは我々だけか
栄光(グローリー)の為　物語(ストーリー)の為
君が絶対的な恐怖であるのを告示する
残忍(ゴーリー)な満足感の為に

フラム街道は混(ラシ)んでいた
受難劇は静(ハシ)かだった



「眼鏡を失くしたウサギの話」[註4]

フクロウは人に見られていない時に、のんびりとするのが好きでした。ある日、彼は塀の上にとまっていました。すると突然カンガルーが駆け込んで来たので、少し驚きました。

もっとも、こういうことは珍しくはないのですが、カンガルーの誰に言うともないつぶやきを耳にした時は、本当にビックリしました。

「ウサギが眼鏡を失くしたよ」

やがて雲の陰から月が出ます。草の上に寝そべっているのはウサギです。草の波間には——イモリ。小枝にとまっているのは——ハチ。動かぬようには見えますが、ウサギは動揺で身震いしています。眼鏡が失くては、お手上げだからです。眼鏡は何処でしょう？　誰かが盗んだのでしょうか？　置き忘れたのかな？　どうしましょう。

ハチが、助けようとして、答えを考えてみました。

「きっとニンジンと間違えて食べてしまったんだよ。」

「いや。」賢いフクロウが遮りました。

「私は眼(アイサイト)も良ければ、洞察力(インサイト)もあり、深慮(フォーサイト)がある。あの知的なウサギがそんな愚かな誤りを犯すかね？」しかしフクロウには他に意見がある訳ではなく、塀に止まって、顔をしかめたまま！　カンガルーは、こんなくだらない話に腹を立てて、跳ね回っていました。カンガルーは自分が他の仲間よりもずっと賢いと思っていました。事実、指導者、道師(グル)といった立場でもありました。そこで、彼女は言いました。

「ウサギさん、眼鏡屋を探しに行かなければならないわ。」

けれど、言ってから気が付きました。ウサギは眼鏡なしでは、何も出来ないのです。そこでカンガルーは誇らし気に宣言しました。

「私はウサギさんに、何かを探しに行かせられないわ！」

「大丈夫(ユー・キャン)だ、道師(グル)！大丈夫(ユー・キャン)」イモリが大声で言います。

「フクロウと一緒に行かせれば良い。」

ところが、フクロウはすでに眠っていました。イモリはそんな些細なことにはひるみません。

「君のポケットに入れて行けば良いんだ。」

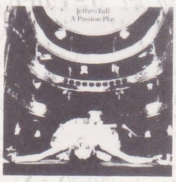
だけど、ああ！　ウサギは大きすぎてカンガルーのポケットには入りません。

そうこうする間に、ウサギには、はっきりとわかってきました。仲間は眼鏡のことを何も知らなかったのです。色々なアイデアもウサギにはどうでも良いことでした。

失くした眼鏡は彼の問題だし。

それにウサギにはもう1つ、スペアの眼鏡があったんだとさ。

JETHRO TULL / A Passion Play　'73



「Thick As A Brick」に続く両面1曲のコンセプト・アルバム。JETHRO TULLの頂点を極めた一作であるが、発表当時より賛否両論相半ばした。確かに歌詞の難解さや挿入曲の位置付等が作品の理解を阻害している点は否めない。サウンド、若しくはトータルな印象自体も比較的地味であり、一般的な受けを犠牲にしている。そういった短所を超越した点に本作の凄みがある。楽曲構成の複雑さとそれをささえる演奏技術の高さは並ではない。どれ一音とってもおろそかにせず、尚突出した所を作らない。ユーモアの仮面の下の硬質な音楽性、これが本作の真実に他ならない。（法水）

JETHRO TULL・A PASSION PLAY

「受難劇 II」

扉の向こうには
灯の絶えぬ穴がある
我々はその傍に眠り
食べ、人々に語りかける
（上品に）「どうか」と言いに来る
悪漢(スパイダー)共からのがれて
奴等は泣きついているのだ
さて、我等が階段の入口へ向かうか

老紳士は語る
若かりし日のことを
去っていった女達のことを
不肖の息子達のことを
（友人達との）
レースで着飾った伊達男の馬鹿騒ぎと
真理のような純粋さ
――両端はつながっているのだ
さて、我等が階段の入口へ向かうか

香わしい聖堂
地を示す尖塔
[註5]ケントの町の魂に
祈りを捧げる
優美な沈黙
――さまよえる神々
あてにならないとしても
我々の幸福を祈って

時代の神／時間の主
間違える権利
さあ、我等が階段の入口へ向かうか

ジャック・ラビットのだんな
――愛に飢えた新種の巡礼達を産み出す
（彼等は養うべき肉体を持たぬ）
善人を教えてくれたら
扉の場所を教えよう
最後の賛美歌が歌われ
悪魔は叫ぶ
[註6]「もっと」

さて、立ち去るのは賛成だし、
すでにそうしている
私は出発を受け入れるよう
すでに要求している
「地獄」という名の
見放された楽園で
そこでは誰もが何も持たず
何も持たぬのが美徳
意味ある愚か者よ
汝の寝床をひきあげよ
微笑み　憂鬱から起き上がれ
憎悪を私に与え
愛すべき異教徒達のようにせよ

私は何の色も持ちはしない
――明、暗、赤、白、青といった
冷たさが私の感触（凍りつくような）
名指しで召喚される
――私はお前の監視人

惨めな惑星を見張れという命令が
我等に下された
神々の恩寵を失い
求めるのは陽の光か雨の恵み
備えの穀物は
私の監視下で育った

遥かに高き所から来た御使い(エンジェル)は
我が魂と共に墜落し
体面を保つ為に
礼拝を捧げる
さあ、君はここで
慈悲深い調停から手をひかされた
生者の全てさえ誉めそやすかもしれぬ

幾つもの伝説が生れる
虚空の神秘な光に包まれて（閃光）
私はただ厄介事に偶然出会い
またたく間に逃れただけ

情熱の戯れ
――メイポールの回りで踊ろう
（太古の儀式）（間違って）
名指しで召喚される
――私はお前の監視人

消え失せせよ　冷酷な魔王(ルシファー)
ああ、酷い奴だ！
何という誤解！
私は奴の枕から
羽を取ったりしていない

ほら、永劫の非難だ
私が善でも悪でもないというのか
私があきらめているのは
昔持っていた帽子の代わりの角
角の代わりの光輪だ

私はただ息をしているだけだ
天井にとまる生命体
それは静かに眠る蝿

暗闇で私の右腕をひねりあげろ
役にたたなかったかつての布石の為に
腕の2、3本くれてやってもいいんだ

見当違いの木に吠える犬に
私は喜んでなろう
誰もが救われる
――我々は墓地にいるから
そこで午後のお茶の時間に会おう

目覚めの時だ
――給仕の女はお茶を入れ
新しいパンを焼く

私を[註7]0時30分に迎えに来てくれ
――一時も無駄にできない
来た時の電車だ
プラットフォームには私の古い靴

駅長がベルを鳴らす
気笛が鳴り　旗が振られる
君が心に描いた少し位は
君に幸せをもたらす（筈だ）

私を暖かく迎えてくれた
全ての人々に感謝しよう
ここに居たいのは山々だが
私の翼はもげ落ちてしまった

ようこそ！　神の子は
生きとし生ける者の為
永遠の死のサインである
十字を切る
砂漠の途中で待っているのは私だ
君は大地と海に甘い呪文をかけろ

[註8]Manus Perdē よ
鎖をはずせ
生きとし生ける者の為に
雨や嵐を静める祈祷を捧げよ
私はここだ（人生を旅する者）
堅いのはナイフの刃を踏みつける足の裏

輪を断ち切り　線を張り
悪魔を呼び出せ
神々を迎えよ
御自らの炎で
葛藤の騒ぎの中

渡し船の乗客達は
産まれ出るのを待つ
人生という長い詩に
誓いを新たにし
[註9]起床ラッパの音に甦る

岸辺の門の前に列をなす獣達は
永遠の扉を護る為
永劫の炎を吐く

人／人の子は
永遠の命の炎を手に入れる
（生命とは息をすること　息とは生きる苦悩）
生きとし生けるものよ！
私はここだ！
暗黒から永劫へ
石を転がせ

フラムの街道から
永劫の受難劇まで渋滞だ



註釈●Chihiro S.

註1）紳士達のバンド（a band of Gentlemen）：普通なら「紳士の一団」と訳すべきだが、アンダーソンの作品中で Gentleman と言うと自分を指していることがある。つまり、ここでは TULL の「パッション・プレイ」のメロディに送られて、という意味か。――例）怪しげな紳士達（中略）／地下道のなか、盲目の男が一人佇む／フルートを持つ手も凍えて（Shady gentlemen／In the underpass, the blind man stands／with cold flute hands）『Baker Street Muse』（「Minstrel In The Gallery」）

註2）情熱家（the man of passion）：本来はこの意味だが、ダブル・ミーニングとして受難（曲）の男＝キリスト、という意味が読み取れる。

註3）君を息子のように――：この辺の描写を見ると、「我々」（we）という存在に対して、「受難劇の創造者／監督者＝神々又はその御使い」という役を設定しているようである。

註4）眼鏡を失くしたウサギの話：中世の受難劇においては、中間の幕間に軽い内容の小劇が挿入されていたようである。ここでも、その形式を採用している訳だが、内容的にはルイス・キャロル等からの影響を感じさせる。

註5）ケント：英国にあった中世王国。

註6）「もっと」（"More"）：この辺の組み立て方は黙示録第6章を思わせる。

註7）0時30分（half past none）：half past one（1時30分）の様なノリで、存在しない時間帯を表現しようとしたと思われる。

註8）Manus Perdē：Manus は東方の三博士の一人、又は魔術師を意味するラテン語。Perdē は不明だが、文脈から形容詞か人名であると思われる。各国に似たスペルの単語で「隠れた、失われた」等の意味を持つものがある。

註9）起床ラッパ（reveille horn）：黙示録のラッパは trumpet であるが、ここでは何故か horn である。

CHAPTER VIII

'80年代のサンプルとして・ニュー・ウェイヴ

1 POST PUNK ERA

法水凜太郎

序

1976年１月のマーキーでのSEX PISTOLSのライヴ以降、幾多の公演中止にもかかわらず、その年の９月には、パンク・ロックは無視しえない一大勢力に成長していた。大都市の若年失業者層はパンク・ロッカーの既成の権威を攻撃する姿勢に熱狂し、しばしば自己のフラストレーションを爆発させ不幸な事件がつづいた。多くの大人達は顔をしかめ、ラジオ局もパンクを無視したが、彼らは着実にレコード・チャートをのぼりはじめた。EMI 等大手レコード会社も、おずおずとパンク・ロッカーと契約しはじめた。'78年にはパンクは絶頂に達したかに見えたが、すでにパンク・シーンは形骸化しはじめていた。確かに、パワーとラディカルさで彼らは耳目を集めたが、音楽的には所詮“ワン・コード・ワンダー”にすぎなかった。初期の熱狂がすぎれば、往年のパンクスはシーンから消えていった。それを誰よりも知っていたのは、ジョニー・ロットンその人であろう。1978年１月にピストルズは解散し、ニュー・ウェイヴの時代がはじまった。

ノイズの奔流

1976年ロンドン現代芸術院での“娼婦展”は、その内容の反社会性故、多くの賛否両論を巻き起こした。その出展者こそ、ジェネシス・P・オリッジとコージー・ファニ・トゥッティすなわち、この数カ月後 THROBBING GRISTLE としてデビュウする人々である。彼らは、単なるパンクとしてデビュウする気はさらさらなかった。元々'72年頃から現代アートのパフォーマーとして活動していた。彼らの目的は、視覚的パフォーマンスだけでなく、音像化をすすめることだった。確かに彼らの作品は反社会的ではあったが、当時、英国を席巻しつつあったパンクとは格段の差があった。TG には、パンク・ロッカーの扇動性は稀薄で、むしろ自らをただ呈示することに重きが置かれていた。パンクのように、声高にアナーキイな歌詩をフォー・ビートにのって聴衆に叩きつける様な真似はなく、作られた音自体が、聴衆をいらだたせ、耳をふさぎたくさせる、そういう意味での反社会性を保持していた。TG 自身、彼らのノイズ・ミュージックが大衆向きでないことは百も承知していた。と同時に、彼ら自身が或る種のパブリシティを保持する必要性も痛感していた。想起しなければならないのは、TG の当初の売りはストリッパーが結成したロック・バンドということである。この最初の戦術は成功し、この後に、彼らの真の狙いが実行に移される。

TG の登場は、ノイズの意味を百八十度転換させた。元来ノイズは予期されぬものであり、譜面にない不純物であった。その意味でノイズは受動的な存在でしかなかった。TG は、この受動的存在を、字義通りの能動性をもった存在に転換させた。TG が真に偉大だったのは、ノイズを単に耳ざわり音として呈示せず、新たな意味を付与した点にある。彼らは、自らの音を“工業音楽”と標榜し、大体的に展開した。“死の工場”から流れ出す音楽というこのコンセプトを考え出した所に彼らの最大の功績がある。今や、ノイズは、聴衆が聴くべき意味を与えられ、投げ出されたのだ。

このノイズと意味性の結合は、TG 以後輩出した多くのノイズ・バンドに、うけつがれることになる。というよりも、如何に上手に意味性を付与できるかが、彼ら多くのノイズ・バンドの死命を制することにさえなった。

本来的にノイズ自体が、いわば不純物であり、人目から覆われるべきものであったことを考えれば、ノイズが社会的恥部や、タブーと結びつくであろうことは想像に難くない。事態は、まさしくその様に展開していく。死や畸型は彼らの格好の題材となる。TG の主宰するインダストリアル・レコードからデビュウした SPK は、この方向を確立した大立物であった。串焼にしたペニスをジャケットにし、ステージで羊の脳を食べ、包茎手術や解剖シーンを羅列したその姿勢は、熱狂的な支持を得る。“死臭漂うノイズ”の開幕である。

1980〜83年頃のノイズのジャケットは、ありとあらゆる屍体の展覧会の様相を呈しはじめる。それもより凄惨さを追っていきはじめる。

一見活況を呈するノイズも、この時期には、



THROBBING GRISTLE

内容の空洞化が進みはじめる。TGを別にしても、初期のSPK、WHITE HOUSE、NWWらがメッセージに負けないだけの音響空間を成功させてきた。しかし、ジャケットの過激さと反比例するように、ノイズ・バンドのつくる音は、偶然性に頼ったジャンク・ノイズの相貌を顕にする。ノイズは、一大勢力となり地歩を築いた。何かを欠いたまま。

ニュー・ウェイヴの本流

パンクが初期の熱気を失いはじめた頃から明らかに一線を画する人々が、姿を現わしはじめる。ULTRAVOXを率いるジョン・フォックスや、TUBEWAY ARMYのコリン・ニューマンがそれである。彼らの共通点は、フォー・ビート一辺倒のパンクに飽き足らず、より高度かつ複雑な曲構成を持ち込んだ点であり、音楽的アイディアやセンスに富み、エレクトロニクスに明るい点であろう。実は、我々は同じ様な光景を、かつて一度目にしている。1969〜71年頃のハード・ロックとプログレシッヴ・ロックの有り様を思い出して欲しい。

では、ニュー・ウェイヴが登場してきた背景は何だったのだろうか。実の所、筆者も掴み切れないのだが、確かに影響があった事柄は一つ、二つ挙げるのは容易であろう。一つには、YMOに代表されるテクノ・ポップやDEVOのようなエレクトロニクス感覚が流行したことであろう。とりわけ重要な役割を果たしたのは、リズム・ボックスの多用ではないだろうか。この非人間的な硬直的なリズムが、その後のロックのリズムの主流にまでなっていったのは、いささか暗示的でもある。そこには、ジンジャー・ベイカーの名人芸もジョン・ボーナムの迫力も必要とされない。この一種の冷たいリズムこそがニュー・ウェイヴの典型であったのだ。この冷たさ、若しくは、白けた感覚、もしくは機械の持つ嘘くささが、実は重要な鍵ともなる。

パンクに弔鐘を鳴したのが、他ならぬSEX PISTOLSのジョニー・ロットンことジョン・ライドンであったことは先にも書いたが、彼がその後でっち上げたPILは、実に面白いことをやっている。彼が音楽的才能に富んでいたとは思えないが、少なくとも先を読むことに長けていたことは事実で、その気になってPILのレコードを聴いてみると、様々なバンドがやっていたことのエッセンスがつめこまれているのがよくわかる。ベースのリズムの刻み方や気だるいヴォーカルは、その後のオールターナティヴ系の原形でもあるし、レゲエ風のリズム導入等はのちのUB40等に先行している。

ここで、忘れてならないのは、ニュー・ウェイヴがいわば或る種のミュージック・シーンの総称であって、パンクのようなムーヴメントではないということである。

フォックスやゲイリー・ニューマン達の目標は、最終的には個性の発露に帰っていくわけであり、彼らの登場を促したものは、彼ら自身の望む音楽を自己の手でつくる場が与えられたに他ならない。

パンクの終焉は結果的には、聴く側の細分化を促進したわけで、行きつく先は、自らの望む音は自らで作るという原則が支配することになる。この文脈で考えたとき、かつてのようなジャンル横断的なスーパー・スターが生まれてこなかったのも不思議議はない。ニュー・ウェイヴのヒーローもあくまで、そのカテゴリーの中でのヒーローだったわけである。では、彼らなりの新しさとは何だったのだろうか。

JOY DIVISIONを聴いた時に感じるやり切れない暗さは、その好例だと思う。かつても、暗いといわれたバンドはあったが、JOY DIVISIONの暗さは、徹底した虚無性と厭世的態度にその特質がある。この一種独特の暗さは、BAUHAUSやMAGAZINE等多くの人達もひきずっていた。この暗さを、負のヒーローにまで持っていったのが他ならぬBAUHAUSで、PILの亜流におさまらず、自らの主張をおし通し得たといってもいい。SEX PISTOLSのグルーピーだったスージー・スーにしても彼女独特の声質とスティーヴ・セベリンのひきつった和声感覚に、うまく"暗さ"をマッチさせて、あの呪術的ともいえるサウンド作りに結実させたといえる。

こういった一連の人達とは別に、ジョン・フォックス脱退後のULTRAVOXやヴァージン系のXTC、MAGAZINE、ディンディスクから出たOMDといったニュー・ウェイヴのビッグ・ネームは、アイディアと明るさを武器にチャートを上昇しはじめる。先の暗さが持味の連中が、比較的シンプルな楽器編成に終始したのに比し、明るさをモットーとした彼らは音色の多彩さを重視した。例えば、OMDは、シンセサイザーは勿論、サックスはてはメロトロン迄持込んで、テクノ・ポップから大きく逸脱し優れた音響空間を作りだすのに成功した。

又、ニュー・ウェイヴ系の中でも屈指の演奏能力を誇るULTRAVOXも、その華麗なサウンドの中心は、キーボードにあるといって過言ではあるまい。実は、ここに名を挙げた人達こそ、'80年代以降のロック・サウンドに決定的な役割をはたしたのである。ニュー・ウェイヴという言葉から想起される音、とりわけサウンド・エフェクトやリズム感は、真に彼らの内にあるといっていい。'70年代の初期からのオールド・ウェイヴ・スター達ですら、好むと好まざるにかかわらず、そのサウンドを変えざるをえなかった。ニュー・ウェイヴは、最早、一ジャンルではなく、ロック全体を大きく被いはじめた。これは、とりもなおさずニュー・ウェイヴは、本来的な斬進さを失いはじめたことを意味していた。

混乱〜シーンの終焔

1981年TG分裂。1982年CABARET VOLTAIRE、レコード製作放棄。

この2つの事実は、ノイズ・アヴァンギャルド・オールターナティヴといったフィールドがその支柱を失ったことを意味している。

オールターナティヴ中で、もっとも広範囲な支持を集めたCABARET VOLTAIRE。テクノ・アヴァンギャルドにとどまらず、徹底した実験的な姿勢を打ち出し、カット・アップやフーゴー・バルの音声技法を導入した。彼らの過激性は"VOA"にて頂点に達したが、その後は急速にパワーを失っていく。

TG解散後、ジェネシスはPSYCHIC TVを結成し、多くのファンの期待を集めた。デビュウ・アルバムも大手レコード会社の凄まじい争奪戦になるという幸先の良さだったが、PTVもジェネシス・P・オリッジがカリスマ的になるに反比例して、音楽的先鋭さは失われていく。1984年には、TG時代からの朋友、ピーター・クリストファーソンが正式に脱退する。

TGの残党の片方の、クリス・カーターとコージーは、CTIとして、地道な活動を続けるが、最早、TGの衝撃力は望むべくもなかった。

オーヴァーグラウンドのニュー・ウェイヴ・シーンも状況は似たもので、ニュー・ロマンティックやニュー・アコースティックといった多少新奇な形態を生みだしえたが、直ちに、カテゴライズされ、その音楽的自由度を欠いていくことになる。



Genesis P. Orridge (PSYCHIC TV)

SKIDS、MONOCHROME SET、POP GROUP、BAUHAUS、MAGAZINE といった人達も活動を止めている。時代が終ったことを何よりも感じさせたのは、マーティン・ハネットの事実上の引退であった。

DURUTTI COLUMN を伝説的存在にまで仕立てた最大の功労者。抜群のアレンジ力と、天才的なひらめきをもったハネットが、その活動を停止したことは、とりもなおさず、彼がシーン全体に見切りをつけたことを意味している。

ニュー・ウェイヴ的アレンジが一般的になった今、確かにニュー・ウェイヴの中に先鋭性をもとめるのは、難しいかも知れない。

結び

“他の多くのグループは寝返っちまった。最初の内は興味深い内容でも、二枚目、三枚目はもういけない。”

上掲のセリフは、WHITE HOUSE のベネットであるが、確かに正鵠をついているように思える。しかし、それ以上に感じるのは、結局の所、ニュー・ウェイヴの登場は、ロックのパラダイムの変更をもたらしたということであろう。いったん変更されたパラダイムにのってしまえば、ベネットがいくら頑張っても、徒労でしかない。

考えてみれば、ノイズ・アヴァンギャルド系の人達によって、ありとあらゆる音楽技法がロックのフィールドで実践されてきた感がある。現在も、HAFLER TRIO 等によって、試行錯誤は続いているが、不幸なことに、その姿勢自体が、直ちにカテゴライズされていくのが、現状なのである。

“孤独な群衆”の個々人が、個々の好みを平然として、口にするようになった今の姿こそが、実は、ニュー・ウェイヴ以降のパラダイムの典型だということを多くの作り手が感じはじめている。ここでは、従来の聴き手と作り手の厳然とした区分けはなく、聴き手がいつでも作り手になりかわれる。さすれば、すぐにでも、新たな音楽性が生まれるように思えるかも知れないが、そうならない所に、現状の困難さがある。

むしろ、純粋な聴き手が、必要とするのは、BEATLES、KING CRIMSON、TG 達によって、その時々になされた、パラダイム自体のコペルニクス的転換ではないだろうか。

2 パンク,ニュー・ウェイヴとの共通概念

松本昌幸

音楽を含めて、即興表現から歴史的な重味を持つ作品に至るまで、芸術とは表現主義的傾向に無縁では有り得ない。表現主義とは、正しく語の本質を突く意味で内的発露であり、表現行為自体を内側から支えることになる、アーティストの内的希求に他ならない。言い替えれば、時代の認識や加速化に相関しながらも、歴然と有り続ける個性表出の要求である。これはまた、時代感覚や様式、美醜といった個人的な価値感を超える表現の基本となる概念でもある。

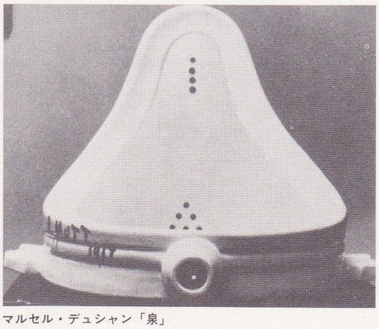
ところが、小野洋子の「額縁を持って行って、貴方の気に入った風景、対象物をそこに入れなさい。それが貴方個人にとっての最良の絵画になるでしょう」という主旨の発言は、所謂、額縁に飾られた芸術と日常との境界を霧散させようとする。彼女の指すところの自由自在の絵画には、所謂、額縁の中の絵画の持つ、蓄積された時間性や、その絵画がそれ自体であることの必然性、つまり絵画を自立させている個性は、まったく存在しない。つまり、自由自在の絵画は、作品として無意味であるか否かという問いをかわすように、その作品性を最初から問われていないのである。だからこそ、この発言は、現代アートの有り方を象徴しているのである。

この絵画の意図とは、第一義であるはずの作品性を選択自由な、必然性のない、更に言い替えれば、偶然性の中に置くことで、額縁の正体が何であるかを明かすことに始まる。付け加えれば、この正体とは、芸術概念として日常から差別化する象徴としての額縁であり、それは、本来、芸術とは個人の個性の中にあって千差万別の形状を示す、という彼女によるこの発言の中に含まれ、この発言を成り立たせている真実の主張に対置する権威に相当するものだ。そして、表現主義が本来この真実の主張を担っての個性表出であったはずなのに、ヒエラルキーにくくりつけられてしまう芸術の不条理を、いとも軽やかに、まるでポップ・アート流に暴露し、しかし痛烈に批判することに続く。この発言は、決して単なる思いつきの茶化しや、無責任な芸術性の霧散化に主題が置かれているのではなく、本来の芸術の有り方を復権させる意図が、皮肉ぶることの力を借りて、より痛切な形で表明されたものなのである。

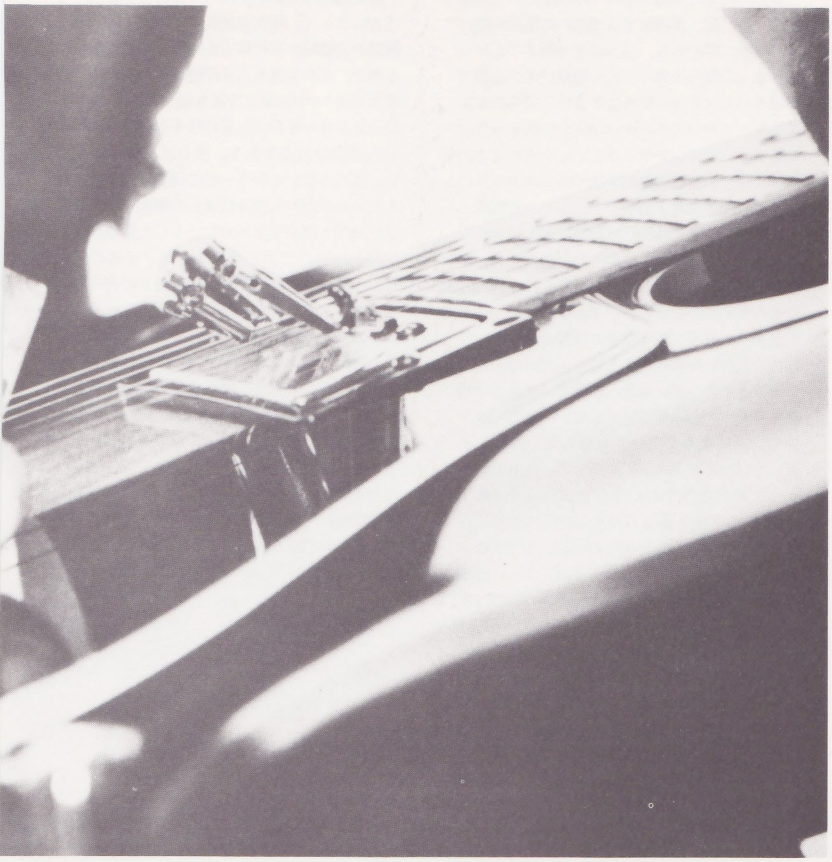
この場合、表現者である小野洋子は、既に概念を提示するのみである。こうした、アートの変遷を踏襲する上での発言が、それ自体、表現行為であると、既に認識の転換ははかられているのだが、その示標になったのは、話題性一衝撃性故に今や古典となった感のあるマルセル・デュシャンである。彼は便器を展示し、それはレディ・メイドと命名されていた。古く1920年代のことだ。この作品は、日常性を芸術という領域に持ち込むことで、何の変哲もない既成物が、新たな別の概念を与えられた一芸術の擬態化一記念すべき新たなる便器の誕生であると共に、既成芸術概念の変革をもたらし、後の多様化を導いたばかりか、芸術が芸術自らを破壊する運命に踏み出してしまった、が、しかしアートの歴史の必然的流れの一布石なのである。

こうした概念行為ですら、広義では表現主義には違いないが、主題を優先する所謂純表現主義とは、明らかに異質なものだ。短言すれば、表現主義の行く末は、方法論をも同化し、究極の姿として個人単位の、しかも日常の中に入り込むことで見えなくなった。ここに至る過程、介在する意識的な行為、コンセプトそれ自体の能動性を、いかに認識するかによって、芸術の流れの最前、蓄積の末端である現代アートは、それ自体の意味、無意味をつきつめる中で行き詰まり、拡散している。言い替えれば、芸術とは認識の問題であるという次元に行き着き、方法論は無の行為に至るまで出尽した。全てはアート史からすれば一瞬の今世紀100年間の内のことだ。そして、これに決定的な役割りを果たしたのが、1960年代のコンセプチュアル・アートであり、マス・メディアであり、純表現主義的な歴史の鎖にしばられない土壌としての空白地、都会性であり、アメリカだった。

小野洋子の発言を引き合いに出すまでもなく、一方で、この加速度的なアートの流れは、同時に純表現主義が示してきた、作者の内的表現がそのまま直結する結果としての作品、行為であるとする、個性の唯一性を正面からうたったものとは違って、方法論自体を純表現主義でいう主題にすることで、作品、行為は無名性を



マルセル・デュシャン「泉」



帯び、作者との直結性も希薄なものになっている。が、守られた芸術の枠を取り除き、一切の制約をゼロに戻したことによって、より本来の個の重要性をも説いている。つまり、「雨後のヨーロッパ」でさえ、ダダ時代以来つきつめてきた手法コラージュのもたらすイメージの現出と意味の昇華があり、そして第一次大戦の惨状を通して描かれるべき明確な主題があり、何より、これらを痛切に熟知する、逆を言えば、これらにとらわれている作者、エルンストが、この絵画の分身として背後に立つが、ピアノによる「4分33秒」という沈黙行為自体には、それに相当するジョン・ケイジが作者であることの必然性は、まったくない。内的表現である純表現主義と異質なのは、作者の意図が結果として現れることなく、行為、作品の裏の遙か遠くに隠れて存在するという部分だ。つきつめれば、現代アートにとって、純表現主義の主題に相当するものがあるとすれば、それは芸術概念それ自体に他ならない。コンセプチュアル・アートは、まだ、表現主義に対するアヴァンギャルドというべき命題を持ち、目に見える挑発性の余韻を感じとれるとしても、ポップ・アートに至っては、マス・メディアの性質である匿名性、大量生産に合致し、相乗効果をもたらせた結果、例えば、匿名性を極める、他アーティスト作品の複写を産み、例えば、本来、作者性を極めるはずの署名をマス・メディアを通して反復し続けることで、記号化すると同時にその意味を空洞化し、更にはマス・メディアの資本主義的本質にある欺瞞性をも暴露してしまった。

本来のプログレッシヴ性とは、歴史事実をひもとき、音楽に時間的に先行したアートの概念を引き合いに出せば証明可能である。芸術というものが社会性に浸透して、芸術の意味が空洞化していく過程こそが、現代アートの歩みだとすれば、パンク、ニューウェイヴとは、その音楽的解釈の’80年前後版である以上に、現代アートを体現したものとみなすには以上からも十分だ。音楽にせよ、これを包抱するアートにせよ、時代に密接な相関関係をもって現われることに、本来の意味のプログレッシヴ性は宿るということだろう。

例えばパンクは、直接的な社会批判そのものであり、結果とその過程に先立つ発露のみを主眼にした精神の有り方が、イギリスの当時の時代状況から、具体化された有効な方法論を持つ以前に、集合無意識的に表面化してきた音楽的衝動であった点で、ダダが音楽に姿を借りて現われた例とも言える。ここでは瞬発力こそが本質を担うのである。ダダは1920年代の既成概念の欺瞞性の打破に依った挑発行為として、アート史に印されているが、何よりそうした精神の有り方のことと解釈されるべきものだ。’60年代末に起ったニュー・ロックと呼ばれる動き（プログレッシヴ・ロック・ムーヴメントの伏線）も中半同質、同方向だが、あくまでも既成音楽に対するアヴァンギャルドとしての範囲のものであり、個性表出の力動が、既成枠を打ち破ろうとする点で、純表現主義的な動きだ。ただし’90年代の現在に至っても、この方法論は現代アートの一見包括的と思える方法論をも凌駕する余地を十分に持ち得ると個人的には思う。つまり、個人の個性を形づくる民族性や歴史概念といったより深層を個性に同化する、本来の必然性を表出する行為、作品は、普遍性、存在観念にかかわるからである。曖昧な言い方しかできないけれども、現代アートの方法論、認識の転換をも踏んだ上での、より深い表現主義と言えるかもしれない。

ニューウェイヴの匿名性、コラージュされる対象物の偶然性といった方法論も、既に現代アートに求められる。現代音楽とは違って、これらは肉体依存の形で示される点は、注目されるべきではあるが。プログレッシヴ・ロック・ムーヴメントによる異化作用の段階を踏んで、ニューウェイヴのもたらせた認識転換へ、プログレッシヴ性の流れをみる時、これらを貫くアートとの共通概念が浮き彫りにされる。

▶ノイズが提示するもの◀◀◀◀◀ 平野 剛

音の新たなる認識＝NOISE

ノイズは騒音が日常的に氾濫する機械文化の時代の中から生まれるべくして生まれた新たなる“音”への認識であり、騒音時代である現代にふさわしい音楽として、その重要性や役割は測り知れないものがある。それは、かつて存在した人間同士の互いのふれ合いによる豊かな情感溢れるコミュニミケーションから生じた音楽ではなく、むしろ鋼鉄に阻まれたビルやオフィスの中で機械と交わり、機械と会話することによる新たなコミュニケーションの形態から生じた音楽である。例えばそれらは工場の雑音、都市のざわめき、パトカーのサイレンからコンピューターのキイを叩く音、果てには内なる音（静寂)、電子のざわめきなんて言うミクロ・レベルのものまで様々である。サティの家具の音楽然り、ケージの4分33秒、イーノの環境音楽なんて言うアイデアに基づく音楽はどれも騒音の氾濫した現代における様々な日常的環境の一サンプルであり、それらを耳にすることによって、あたかも家具を置き換える様に簡単に異なった環境を耳で楽しむことが出来るのである。結局、騒音の時代に生まれてきた我々にとって“音楽”と“音楽ではない音”との境界線は意識的なレベルで音を捉えるか無意識的なレベルで音を捉えるかの違いだけであると言えよう。要は意識の問題である。

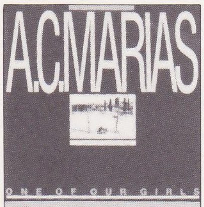
NOISE
＝ロックにおけるダダ

表面的に見た場合NEW WAVEという音楽シーンは氾濫、多様化する現在の音楽の先駆けである様に思われる。遙かにすそ野まで広がってしまった現在の薄っぺらい音楽状況の山頂で凝縮されたマグマが吹き出すように爆発的なエネルギーを持ってNEW WAVEは始まったのである。プログレやサイケといったそれまでのロックはそれぞれ音楽的手法や音楽スタイルによって共通項を有するバンドがシーンを形造っていたがNEW WAVEの形造られ方はそれら従来のロックとは全く異なったものだった。まずNEW WAVEは、シーン全体を見た場合にはそれぞれのバンドのスタイルが非常にバラバラであり、様々な音楽要素が渾然一体となってひしめき合い全体が熱気をはらんだ一つのムーヴメントと化している様な状態で、それまでの音楽そのものの本質を追求していったロック・シーンとは明らかに一線を画していたのである。ではNEW WAVEの持っていたものは何だったのだろうかということになるとNEW WAVEとは音を通してのその音楽の主張よりもむしろ音楽を通した何かの主張なのである。その最も極端な例としてはノイズ・ミュージックが挙げられよう。ノイズは表面的にはロックの概念を破壊し、手法的に最も自由度を保っていた現代音楽の要素をNEW WAVEのエネルギーに取り込んだ衝撃的な音楽ということになるが、そこで、何故ノイズなのか、何故NEW WAVEなのかである。ノイズの持つ耳を覆いたくなる不安や恐気、暴力、そしてそこから生ずる生理的嫌悪感…。つまり彼らは、最も世間一般の価値観で排除されるべき部分を強調することによって、現実を批判し，伝統に縛られた既成の価値観からの開放を叫んだのではないだろうか。それを最も人々が嫌悪する物の中で表現するという極端な方法を使うことにより、我々にショッキングな革命性をも付け加えることに成功したのである。彼らにとっては正しい、正しくないという一般の価値観は問題とならないわけだから我々に彼らの意図を伝えるには行きつく所までエスカレートした誇張表現が必要だったのであろう。そしてノイズの無名性、没個性、これに至っては明らかに音楽そのものとしての主張を否定しているとしか思えない。つまり彼らは音を提示して我々に音楽に対する認識の改革を呼びかけ、或いは問い正そうとしているのである。彼らは最も極端な行為で無残に一般の認識を突き崩すことによって全ての物を自由に平等な立場で見直そうと働きかけていたわけである。そのためのノイズである。反対制のノイズ、あらゆるワクを突き破り手法的思想的に自由の表現であるノイズ、そして騒音時代の象徴としてふさわしいノイズ…。NEW WAVEとはそういうものなのではなかったか。

CATALOG

NEW WAVE

A. C. MARIAS



One Of Our Girls

Mute STUMM 68

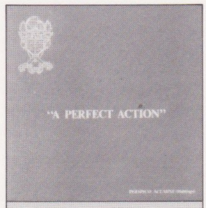
'89年

Angela Cornway
Paul Kendall
John Fryer
Bruce Gilbert
Gareth Jones

Produce:same as above

'80年意識の発露は、個人意識の探究であり、音楽を共感の媒体とする所から離れ、独創性を発見することだった。ある種の閉鎖性が伴うことは当然否めなく、この拡大解釈がインディペンデント・レーベルの乱立と自主製作の結果を導いている。内省志向にやがて移行したニュー・ウェイヴは、追求した先で霧散し、'80年代後半のロック・シーンの要素になっている。小供の頃から聖歌隊で歌っていたというアンジェラ・コーンウェイの内省感の強い澄んだ声質に、ミニマル系音響が同調し、時にポップな面を見せながら無難に収まっている。歌声が魅力だ。末裔の感が強い。(松本)

A PERFECT ACTION



A Perfect Action

el ACME 4

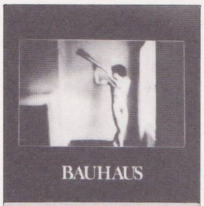
'86年

Michael McDonough-Jones:key,g,vo
Ronald Ronald Keefe:key,vo
David Wayne Revelle:b,stick,vo
Mark Rowlatt:ds
Catherine Mary O'Sullivan:vo
and many other musicians

Produce:Michael McDonough-Jones & Ronald Ronald Keefe

'80年代中期、ニュー・ウェイヴがもたらした新風から派生する形で様々な音楽が生まれた。チェリー・レッド傘下のエル・レーベルからリリースされたこの作品もそうしたものの一つ。クリケットの試合をテーマにしたというこの音楽は、女性コーラスや弦楽団を加えたユニットにより制作されている。かなり風変わりな音楽だが、テクニックも緊張感もあり、そのレベルは高い。ミニマル・ミュージックの要素も見えるが、ニュー・ウェイヴ風に洗練されたMAGMAを想像してもらえれば近いと思う。チェリー・レッド系では最も売れなかった一枚らしい。……やっぱり。(沢田)

BAUHAUS



In The Flat Field

4AD CAD 13,
'80 年
Col:28CY-2395

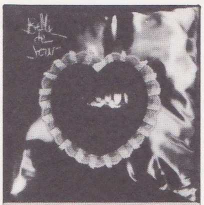
BAUHAUS

Peter Murphy:vo
Daniel Ash:g
David J:b
Kevin Haskins:ds

Produce:BAUHAUS

BAUHAUSを聴いて、つい連想してしまうのは、ドラキュラ的な闇のヒロイズムである。彼ら自身、その辺のことは良く自覚していると思え、舞台衣裳等は如何にもそれらしいものがある。音的には、いわばPILの直系なのだが、PIL、もしくはジョン・ライドンのまなざしがどこか冷めていたのに対し、かなりエネルギッシュな音作りをしている。ニュー・ウェイヴ程凝ってもいない。むしろ、彼らの最大の功績は、かつてなかった、アンチー・ヒーロー的なロック・スター像を造り出した事にある。（法水）

CHRYSTAL BELL SCRODD



Belle de Jour

United Dairies UD021
'8? 年

Christal Bell Scrodd:vo,all instruments
with
Steve Stapleton:electronics,loop

Produce:C.Scrodd & S.Stapleton

特異なセンスを持つ女性アーチスト・スクロッドがNWWのステープルトンの協力のもと、リリースした佳品。スクロッドの経歴等何のデータも持たないので、断定は避けるが、実験音楽に相当な素養を持つと想定される。というのも、本作に於いては、やっちらかしのジャンク・ノイズは微塵もなく、正統的なアヴァンギャルドに徹している。ステープルトンもサウンド・メイクの裏方にまわっており、彼特有のジョークは陰を潜めている。ヴィオラが沈痛な響きをたて、スクロッドのトーキング・ヴォイスが漂うA面は、硬質な肌合いを持ち、彼女の確らしさの好例。（法水）

CABARET VOLTAIRE



ThreeMantras

RoughTrade RT038
'80 年

Richard H.Kirk
Stephen Malliuder
Christopher R.Watson

Produce:CABARET VOLTAIRE

オールターナティヴの申し子キャブスの絶頂窮めた一作。体裁こそ12"EPだが内容的にみて前作「VOA」に匹敵する。聴感上はトニー・コンラッドに近いが、内実はかなり異なる。本作は、徹底した通奏低音の反復を基調として、トーン・クラスターや対位法的にプログラミングされたシーケンサーをズタズタに寸断した上に、再構成した形をとっている。重要なことは、偶然性に頼るのではなく、サブリミナルを考慮した巧妙なつくりになっている点である。ここに、キャブスのおそるべき前衛性があった。この高い視座を失った所から彼らの崩壊がはじまった。（法水）

CHRIS AND COSEY



Techn φ Primitiv

Rough Trade ROUGH84
'85 年

Chris Carter:electronics,tape
Cosey Funni Tutti:electronics,tape,vo

Produce:CHRIS & COSEY

TGの片割である本ユニットも、PTVの派手なプロパガンダにかくれがちで、批評家の受けもよくないが、純粋に音作りのみに関していえば、PTVより遙かに高度な実験をおこなっている。彼らの特徴は、ノイズへの意味の付加をやめ、むしろ音そのものの構造を組み替えることに集中している。本作も毛並の変ったテクノ・ポップと見られがちだが、不協和声や、エコージングの変化をサブリミナルとして意識的に使用している。曲的にも、ノイズのイメージは払拭され、きわめて魅力的な仕上りを見せており、情報量の多い、又見かけ以上に重要な一作といえる。（法水）

COCTEAU TWINS



Treasure

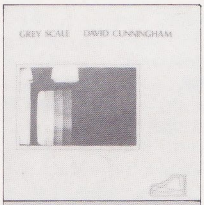
4AD CAD 412
'84 年
Col:30CY-1660

Elizabeth Fraser:vo
Robin Guthrie:g
Simon Raymonde:b

Produce:COCTEAU TWINS

ニュー・ウェイヴ感覚派としてメジャーに通用した数少ないアーティスト。リヴァーヴ、エコー処理され尽したこの音作りは、DRUTTI COLUMNやニュー・アコースティック・サウンドよりも鋭角的な切れを感じさせ、また'80年頃の時代のバイタリティーを内面に取り込んだような力強さも感じさせる。負の感覚を美的感覚にまで洗練した彼等の'80年代ならではのセンスが光る。エリザベス・フレイザーのヴォーカル、曲想こぞって神秘めいた劇的効果がよく出ている数曲は絶品。リスナーの深層に響くとすれば、時代を超える可能性があると思う。音の陶酔感を満喫できる。（松本）

DAVID CUNNINGHAM



Grey Scale

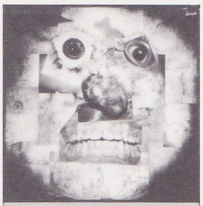
Piano 001
'77 年

David Cunningham:p,glocken,syn,vln,g,per,tape recorder
Stephen Reynolds:glocken,p,syn
Alan Hudson:b,per
Derek Roberts:p,glocken

Produce:David Cunningham

本来なら排除されるべき演奏者のミスが曲の構成を形造る、"エラーシステム"なる発想によって作られたカニンガムのソロ。その発想自体はユニークだがそうした実験音楽の持つ厳しさよりもむしろほのぼのとしたガラクタ的安っぽさがLP全体を覆っており、これこそがカニンガム本来の持ち味であると言える。その後彼はFLYING LIZARDSとして活動し同名の1stを発表。ソロで試みられた様々なアイデアがよりポップなアプローチにより見事に開花している。初期アンソニー・ムーアの様な感覚先行派が好きなファンには推薦出来る一枚。（平野）

DANIELLE DAX



Pop-Eyes

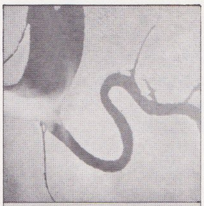
Initial IRC 009
'83 年
Vap 85009-32

Danielle Dax:g,ds,key,banjo,b,fl,t&s-sax,tp,tapes,drone,TR808,assorted-per,toys,vo

Produce:Danielle Dax

'70年代末、カール・ブレイクとLEMON KITTENSを結成。その容赦なく神経をさかなでするエレクトリック音の混沌とした動き、ぶつかり合いは、'80年代初頭のジャンク・アートの好サンプルだ。'80年頃の2度目の意識革新とは、作者の意識的な没個性に集約されるが、現代アートとの違いは、外に向う肉体的な発散力、躍動に基づいたことだ。彼女のソロ・デビューに当る本作は、前グループを彼女一人の手と感性によって自己解釈した趣きがある。全体を支える整合感が、K・ブッシュの「Dreaming」に近く、また女性らしい。ジャケットも作風をよく伝えている。（松本）

DEAD CAN DANCE



The Serpent's Egg

4AD CAD 808
'88 年
Col:28CY-3005

Lisa Gerrard:vo
Brendan Perry:vo,hurdy gurdy
David Navarro Sust:vo
Alison Harling:vln
Rebecca Jackson:vln
Sarah Buckley:vla
Andrew Beesley:vla
Tony Gamage:cel

Produce:DEAD CAN DANCE,John A.Rivers

ニュー・ウェイヴの表現形態は、'80年代中半には既に個人の内的深化域に入っているが為に、イギリス性という精神表層には必ずしもとらわれない。深層イメージの表出こそが音・音楽であり、我の確立とは対極にある普遍性への洞察が、'80年代本来の表現の有り方である。4ADは、この点で'80年代を本質的に担ったレーベルだ。クラシカルであろうと、それに意味内容を見い出すことはなく、イメージの為のモチーフに留まる。熟練に至った本作は、イスラム色やミサ曲色をモチーフにした内面表現に鋭く、イメージを静けさに転嫁し得た中にも、独自の柔和感がある。（松本）

DRUTTI COLUMN



Amigos Em Portugal

Fundacao Atlantica 1652071

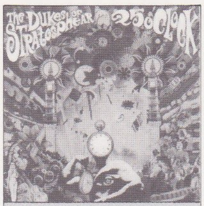
'83 年

Vini Reilly:g,key,b, rhythm box,vo

Produce:Vini Reilly

マーティン・ハネットによって、伝説的存在にまで成ったDRUTTI COLUMNことヴィニ・ライリーが、自らの手によって、ポルトガルで作った一作。ハネットという強力なプロデューサーがいない分、彼の本来的なセンスが最も良く出た作品でもある。ここでは過度のディレイは控えめで、ピアノを多様し、よりナチュラルでアコースティックな感覚を大切にしている。もともとテクニック的に優れている訳では決してないが、穏やかで宙を舞うサウンド・センスや、即興的なフレーズの見事さは、今だに輝きを失っていない。寂しげで、謎めいた微笑の彼方に彼はいる。（法水）

THE DUKES OF STRATOSPHEAR



25 O'Clock

Virgin WOW 1

'85 年

VJ:VJD-32020

Sir John Jones:vo,g
The Red Curtain:b
Lord Cornelius Plum: key
E.I.E.I.Owen:ds

Produce:John Leckie, Swami Anand Nagara & THE DUKES

'77年のデビュー以来、現在まで精力的な活動を続けるXTC。彼らにはいくつかの変名作品があるが、これはその中の代表的作品。サイケデリックなサウンドを指向した所謂ネオ・サイケ的な内容で、古くさい音づくりや過度のエフェクト、メロトロンの使用、ジャケット等、「いかにも」の連発。もともと鋭い音感覚を持ちあわせた彼らが、趣味まる出しで作っただけのことはあり、かなり楽しませてくれる。サイケに対するアプローチはこれにとどまらず、'87年にセカンド「Psonic Psunspot」を発表。本職のXTCにもBEATLES風のサイケ色が加味されてゆく。（沢田）

FELT



The Splendour Of Fear

CherryRed. M RED57

'84 年

Lawrence:g,vo
Maurice Deebank:g
Mick Lloyd:b
Gary Ainge:ds

Produce:John A.Rivers

WILL SERGEANT

Will Sergeant:music

Produce:?

エレクトリック・ピック・アップをつけたアコースティック・ギターを基調にしているせいか、ともすれば、ニュー・アコースティックの亜流とみられがちだが、曲の雰囲気は、むしろDRUTTI COLUMNのイメージに近い。DRUTTI COLUMNのようなディレイの使用は、余りなく、一音一音は、極めて輪郭のはっきりした感じだが、陰翳に富んだフレーズ等は、真しくオールターナティヴの衣鉢を継ぐものといっていい。ヴォーカルの声質が若干サウンド・イメージに合わない面が惜しい。バンド・イメージが地味なせいもあるが、もう少し聴かれてもいい佳品である。（法水）

SIMON FISHER TURNER



Caravaggio1610

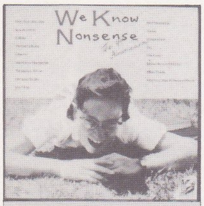
él ACME 6

'86 年

Simon Fisher Turner: ac-g,whips
Richard Preston:electronics,desk
and many other musicians

サイモン・フィッシャー・ターナーは幾つかのネオ・アコースティック系ポップ・バンドで活動するかたわら、ソロ作品をもリリースしているアーティスト。本作は彼を中心として制作されたデレク・ジャーマンの映画「カラバッジョ」のサントラ盤。ギター、リュート、ハープシコード、自然音等のアコースティックな響きを前面に出しながら、コラージュ的な手法を用いてつくられている。新ロマン主義風の弦楽合奏からソフト・ノイズ系の抽象音楽まで多種の素材を用いているが、全体の色調は見事に統一されており、独立した音楽作品としても質が高い。（沢田）

THE 49 AMERICANS



WeKnowNonsense

Quartz CHUG 4

'81 年

Giblet:vo,b,per,penny whistle
David Toop:g,b,fl,per,glocken
Steve Beresford:flh, euphonium,b,p,org, melodica
Max Eastley:per,g,penny whistle
Lol Coxhill:sax,per
Else Watt:ds,per
Vivian Goldman:vo

Produce:Giblet,David Toop,Steve Beresford

イーノはPORTSMOUTH SYMPHONIAで得た人脈を中心に、オブスキュアとして作品を発表。アンビエントと続くコンセプトは一つのロック異化形態からロック・フィールドでの環境、インテリア音楽の提起であった。その人脈から即興演奏家や現代音楽家が集まったグループ。様々なロックのスタイルを借りたチープなトイ・ミュージックを収録。テクニック、テクノロジーの執着を拾て彼等の素養から来るピュアーな音のアプローチを試みている。又このニュー・ウェイヴ的解釈がFLYING LIZARDS。当時のシーンの1つの流れを象徴した作品。（吉野）

JOHN FOXX



Garden

Virgin V 2194

'81 年

John Foxx:vo,g,syn
Robin Simon:g
Jo Dworniak:b
Philip Roberts:ds
Duncan Bridgeman:syn,p

Produce:John Foxx

「Systems Of Romance」を最後にULTRAVOXを脱退した彼のセカンド・ソロ・アルバム。ファースト・ソロでは、「Metal Beat」と言うタイトル通りのエレ・ポップだったが、本作ではダンシング・ビートとアコースティック・サウンドが融合した美しくロマンティックな内容となっている。一方のULTRAVOXが「Quartet」を頂点とし、モダンなサウンドを展開しているのに対し、本作はある意味で古典的な香りがする。詩情あふれるタイトル曲『The Garden』が素晴らしく、ブリティッシュ然とした深淵の美意識が流れている。（Luna）

DIAMANDA GALAS



Saint Of The Pit

Mute Stumm 33

'86 年

Diamanda Galas:vo,key
with
F.M.Emhein:chain,ds

Produce:Diamanda Galas & Gales Jones

ヴォーカリゼーションが生んだ近年最大の成果。ロンドンをベースに活動する女性パフォーマー、ガラスの名は、その狂的なヴォイス・パフォーマンスで有名だが、パフォーマンスの性格上録音による再現は困難と見られていた。しかし近年より高度な音楽表現のためレコーディングに注力している。本作は葬送をモチーフとしているためか、あの凄絶なヴォイスこそ控えめだが、エレクトロニクスによる不協和音や通奏低音的なピアノは最良の効果を与えており戦慄を覚えざるをえない。彼女のつくる音響空間の緊張感は尋常ではなく、異常な審美性をもたらしている。（法水）

MARK GLYNNE,BART ZWIER



Home Comfort

Divorced DIV 1

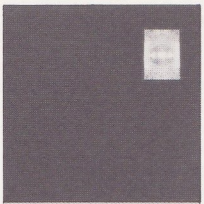
'80 年

Mark Glynne:b,key,effect,vo
Bart Zwier:key,vo
with
Jos Meyer:ds
Anthony Glynne:g,vo
Rob Brautigam:vo,key
Ad Struyk:ds
Marlene Dumas:vo
Paulo Galloni:ziter, effects
Gary Rademaker:vln
Pen Hemming:fl
Rick Aylwin:cel

Produce:Glynne & Zwier

あまりに、その登場が早過ぎたオールターナティヴの名作。どこか沈んだ、悟った様な、諦めきった様な、それでいて、暖かみを感じさせる、まさしくヒューマンなトーキング・ヴォーカルが、実に見事に、メイン・テーマを語り唱う。ディストーションの効いたギターが波間を漂よう様に現われては消えていく。12音階やミニマル・ミュージックを良く消化したキーボードやチェロが低域を支え、奥行きの深さを醸し出している。あたかも、雨に煙る都会の路地を彷徨い歩くような風情は、絶品で、その表現力は、演奏者が真にプログレッシヴであることを証明している。（法水）

HAFLER TRIO



Intout Of

KK 008

'88 年

personnel unknown

Produce:?

HAFLER TRIO は、元 CABARET VOLTAIRE のメンバー2人と音響工学者により結成された音響実験グループである。この作品では彼らの音響は人間の意識下のトンネルであり、その中では混沌として形を成さぬままの様々な意識、感情、心理、記憶や言葉の断片等、色々な要素が渦巻いており、聴者はその中を通り抜けることによって自らの意識下を体験するのである。音的には、共に内的宇宙を目指した点で初期のTANGERINE DREAM や POPOL VUH に通ずる部分もあるが、彼らの方がより明確なテーマを持って人間と音との関係を追求している分、厳格なサウンドを有している。　(平野)

JAPAN



Tin Drum

Virgin V 2209

'81 年

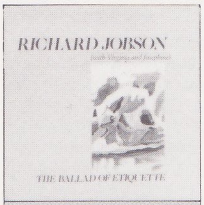
VJ:VJD-28018

David Sylvian:key,g,vo
Steve Jansen:ds,per
Richard Barbieri:key
Mick Karn:b
with
Yuka Fujii:vo
Simon House:vln

Produce:Steve Nye,JAPAN

'77年のデビュー以来、常に時代の先を読み問題作を出し続けてきた JAPAN の最高作である「錻力の太鼓」は、今聴いても古さを感じさせず聴くたびに斬新なアイディアと不思議な開放感に満ちた傑作だ。東洋的なリズム・パターンを取り入れユニークなうねりを作り出しているミック・カーンとスティーヴ・ジャンセン、アトモスフィア的な音空間を演出するリチャード・バルビエリ、R・フリップのようなギターとアンニュイなヴォーカルを聴かせるデヴィッド・シルヴィアン、4人の感性が、極限にまで高められた芸術作品である。なおゲストにサイモン・ハウスが参加している。　(金井)

RICHARD JOBSON



The Ballad Of Etiquette

Cocteau JC 1

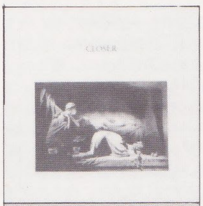
'81 年

Virginia Astley:fl,p
Josephine:sax,cla
John McGeoch:g
Richard Jobson:vo

Produce:?

元 SKIDS のR・ジョブソンによるマルグリト・デュラスへのオマージュ。デュラスはヌーヴェル・ヴァーグに同調した女流作家で、映像作家アラン・レネと親交があった。自ら製作した映画「インディア・ソング」は有名、そのオマージュがA①。V・アストレイの田園憧憬志向、クレプスキュールへと通底するジョブソンの志向は、見事ヌーヴェル・ヴァーグという言葉の醸し出すイメージへと結び着き、サティの示した音楽の有り方を踏襲する。ニュー・ウェイヴ感覚が再構成した印象派である。語り、ピアノなどの響きに無国籍な美意識が漂い出る。架空のサントラと言うべきか。　(松本)

JOY DIVISION



Closer

Factory FACT 25

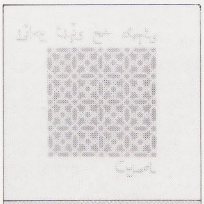
'80 年

Ian Curtis:vo
Bernard Albrecht (Dicken):g
Stephen Morris:ds
Peter Hook:b

Produce:Martin Hannett

当初、ARSAW と名乗って原初的パンクを演っていた四人の若者はもっとストレートで自己表白的サウンドを志向する様になり、JOY DIVISION と改名、そのサウンドは CAN や AMON DÜÜL 等の初期ジャーマン・ロックの影響を受けた著しく簡素なものへと変化した。「Unknown Pleasures」(Fact 10) に続いて発表された本作は、その直前のイアン・カーティスの自殺もあって大ベストセラーを記録し、また、絶望と陰うつさに満ちたこの作品は、原始的パンクからの成長を示す第一歩として後のオルタナティヴ・シーンに大きな影響を与えることになったのである。　(森下)

GRAHAM LEWIS&BRUCE GILBERT



Cupol

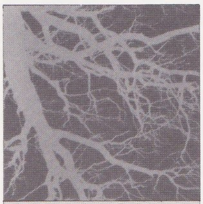
4AD BAD 9

'80 年

Graham Lewis
Bruce Gilbert

元 WIRE の二人が結成したデュオ。事実上のリーダーのコリン・ニューマンがニュー・ロマンティックに傾倒したのとは逆に、ノイズ系ミニマルに活路を見出した。時あたかも TG をはじめとしたオルターナティヴの嵐が吹き荒れており、時宜を得た音作りとなっている。決して行き当たりばったりのノイズの羅列にはなっておらず、深い思慮がうかがえる出来上り。ディストーションによるノイズよりも、和声のズレやピッチの不調和を主軸にしている。又、低音域（低周波音）の使用を比較的軽めにして、聴衆を意識した中庸さが、他のノイズ・バンドと一味違う好盤。　(法水)

METAMORPHOSIS



Great Babel Gives Birth

Flowmotion FM003

? 年

personnel unknown

'77年 THROBBING GRISTLE は、ロック・メディアよりノイズを提唱。それが'80年代に入ると、1つのジャンルとなる。ゴシック的静感覚、メタル・ビートの動感覚等ポスト・インダストリアルが表出した。更にポップにも1つの指標さえ与えた。本作は静的感覚の様式を打ち出した作品。テープ操作による無定型な呪術音、女性ヴォイス・ドローン、パーカッションのみの静謐な曲等収録。又オーボエ、ヴィオラを用い、THIRD EAR BAND を想わせる部分もある。チベット、イスラムの異教的雰囲気の強い、最後までテンションを保った作品。　(吉野)

THE NOCTURNAL EMISSIONS



Tissue Of Lies L.P.

EMISS 001

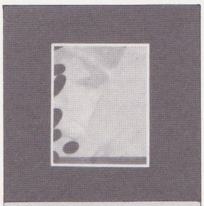
'80 年

Nigel Ayers:vo,g,vln,tape
Caroline K.:vo,b,key,rhythm box
Daniel Ayers:computer programme,key

Produce:Caroline K & Nigel Ayers

余りに無機的な音像のため、ノイズ・ファンに人気のない〝ノクターンズ〟のデビュー作。オーディオ・エフェクトをふんだんに使ったその作品は、確かに迫力に欠けるきらいがある。衝撃を与えるという点で、何か足りなく妙に清潔感（？）があったりする。聴いていて、ふと、シュトックハウゼンの電子音楽を連想させる。本作登場当時、ノイズの大勢がジャンク色の強いことを考えれば、いささか、不幸なデビューといえなくはない。構成が当時としては、極めて緻密なことを考慮すれば、違う形での社会を凝視し、実験科学を冷静に見つめたその姿勢は再評価されてもいい。　(法水)

NURSE WITH WOUND



Drunk With The Old Man Of The Mountain

United Diaries UD 025

'87 年

Steven Stapleton

Produce:?

現在まで活動を続ける彼らの'83～'87年頃の未発表作品集（らしい）。全体的に統一感がなく、彼らの作品としては異質である。しかしB面に見られる様に、無音に近い静寂や衝撃的な音響を繰り返しコラージュする手法等、ノイズのモチーフを細分化して再構成しようとする試みは、プログレッシヴ・ロック的な方法論を有するものだ。むしろコンクレートの意識に近いと思う。また、本来脱構築を目指したノイズ・ミュージックが、その過程でこの様な作品を残したという事実は、逆に興味深い。コラージュに用いられた女性ヴォイスは、ブリジット・フォンテーヌのものらしい。　(沢田)

ORCHESTRAL MANOEUVRES IN THE DARK



Architecture & Morality
Dindisc DID-12
'81 年

Paul Humphreys:key,vo
Andrew McCluskey:key,g,b,etc...
Malcolm Holmes:ds,per,b,syn
Martin Cooper:sax
Michael Douglas:key

Produce:Richard Manwaring & O.M.D

'79年にデビューしたOMDはアンディ・マックラスキーとポール・ハンフリーズの２人のユニットで、そのルーツはテクノ・ポップ的な所にあった様だ。本作は大ヒットした『Organization（エノラ・ゲイの悲劇）』の次作にあたり、通算３枚目のアルバムである。全体的にテンションをぬいた淡々としたサウンドが特徴だが、ロックの様々な要素を凝縮し、独自の世界を創り出した完成度の高いポップ作品である。そのセンスの良さは、当時出現した同系統のバンドの中でも一段上にあり、事実いち早く成功をおさめた。（沢田）

POP GROUP



She Is Beyond Good And Evil
Radarscope ADA 29(T)
'79 年

Mark Stewart:vo
Gareth Sager:g
Simon Underwood:b
Bruce Smith:ds
John Waddington:g

Produce:POP GROUP

'78年ブリストルにて結成。過激だ、ノイズィーだ、パンクとニュー・ウェイヴの橋掛けだ、と随分と表っ面をなぞられてきた彼らだが、10年を過ぎた今こそ振り返ると、まさしく'80年代における本来の意味でのロックだったと断言できる。M・スチュワートは、そうした表っ面を構えることは必然だと悟っていたのかもしれない。抽象論だと言うなら、閉口。ことにこのデビュー・シングルのB面は、最も分かり易い形でそれが集約されたものだ。この曲が今も貴重かつ通用するだけ、ロック・ミュージックはしがらみにしばられ表現を狭めている、それすら気がつかないということだ。（松本）

PSYCHIC TV



Dreams Less Sweet
Epic
'83 年

Genesis P-Orridge:vo,b,vln,ds,etc...
Paula P-Orridge:ds,per
Peter Christopherson:emulator,church org,etc...
Alex Fergusson:g,per,etc...
&many more guest musicians

Produce:PSYCHIC TV & Ken Thomas

当時の英アンダーグラウンド界を仕切っていたと言われる、ジェネシス・P・オリッジを中心とするPSYCHIC TVの２作目。THROBBING GRISTLEの後身にあたる。種々のノイズをコラージュしたアヴァンギャルドな曲の合間に、フォーク・タッチあるいは聖歌風の曲がサンドイッチされるという構成。全体的に一定の聴き易さが保たれているのも、彼らの思想を反映してのものであろう。又、ホロフォニック録音を意識した展開にもなっていて、広義の意味でのパフォーマンス的色彩が強い。思想そのものや歌詩については、他の文章を参照にしていただきたい。（沢田）

PUBLIC IMAGE LTD.



The Flowers Of Romance
Virgin V2189
'81 年
Col:CY-3114

John Lydon:vo
Keith Levine:g
Jim Walker:ds
Jon Wabble:b
Steve Atkinson:key

Produce:P.I.L

ニュー・ウェイヴというよりも、真にオルターナティヴと呼んだ方がぴったりくる。本作をもっとも特徴づけるのは、その異様なリズムであろう。どうみてもロック・ビートとはいえない未分化なリズムを多用している。ライドンのヴォーカルも、ピストルズ時代の熱っぽさはどこかへ消え去り、なんとも冷めたフレーズが繰り出される。音的には、サブウェイ・セクトのアトキンスの影響力が大で、ノイズ的なエフェクトがかなりの割合いを占めており、実に不思議な音に仕上っている。ずば抜けた衝撃力に満ちたものではないが、仲々に面白いことは確かだ。（法水）

RIP RIG&PANIC



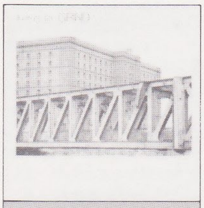
God
'81年
Virgin V2213

Gareth Sager:g,sax
Sean Oliver:b
Mark Springer:key
Bruce Smith:ds
with
neneh Cherry:vo
ari Up:vo
Flash(Dave Wright):sax

Produce:RIP RIG & PANIC

POP GROUPが分裂期にあった'81年、ガレス・セイガーとブルース・スミスが中心になり分派。アヴァンギャルド・ファンクとは的を得た表現だが、彼等のフリーキーな音作りに入り込んでいるワイルドさ、野卑な感覚が、予定調和なく露骨に突出する際のバランスの崩れと、本腰のフリー・ジャズの唐突なコラージュは、そのまま全体の躍動感、屈折度、感覚の切れ自体に直結していて、独自の強烈な個性と成り得ている。作を追うごとに増した整合感は、後に正式クレジットされたネネ・チェリーの占める割合に比例した。ひときわ感性の自由奔放さがある１作目が、これ。（松本）

WILL SERGEANT



Themes For 'GRIND'
ZOO-W.B.HAPLP 001
'82 年

Will Sergeant

Pro:?

ネオ・サイケの立役者と呼ばれたECHO & THE BUNNIMENのギタリストのソロ作品。記録映画か何かのサントラらしいが詳細は不明。ソフトな映像的イメージのノイズによるコラージュ作品。インストゥルメンタルの小品で構成されており、おそらくは多重録音による制作であろう。所々に現れるもの哀しいメロディーが全体を引締めている。当時この手の作風は、一つのブームにまでなったが、この作品はアルバムを貫く独自のカタルシス感覚を高く評価したい。なお、ウソかホントか知らないが、少数限定プレスとの説がある。（沢田）

SIOUXSIE&THE BANSHEES



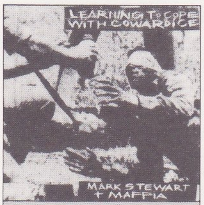
A Kiss In The Dreamhouse
PolydorPOLD5064
'82 年

Siouxie Sioux:vo
Steven Severin:b
Budgie:ds
John McCgeord:g

Produce:SIOUXIE & THE BANSHEES

BANSHEESの通算６作目。デビュー直前迄SEX・PISTOLSのグルーピーでしかなかったが、本作の頃は、UK・ロックの女王として君臨していたとは（?!）元々、スージーの持つ妖しさと声質に支えられてきたことは否めないが、本作あたりから、曲作りやアルバムの構成を重視しはじめている。曲調やアレンジが、スージーの持ち味を生かしたドラマチックな作りとなっており好感が持てる。いささか調子のズレた和声構造も本作に関していえば、良い方向に作用している。比較的プログレ気分の強い一作であり、スージーのあくの強さを気にしないで済む。（法水）

MARK STEWART＋MAFFIA



Learning To Cope With Cowardice
ON-U L.P. 24
'83 年

Mark Stewart:vo
Charles Eskimo Fox:ds
Evar:b
Fatfingers:key

Produce:Adrian Sherwood & Mark Stewart

PILとPOP GROUPは'80年代ロックの夜明けを告げた二大象徴である。身にまとわりついた様式に"切れ""動き"とも鈍くなったロックに訣別して、ロック本来の初源性をゼロの地平線上に取り戻したグループである。その初源性とは肉体依存の力動であり、例えば'60年代末ならCREAMの即興であり、各々の時代形式の終り（始まり）にあって常にアナキズムとして映るそれのことだ。MAFFIAはA・シャーウッドの手腕を得たPOP GROUPの深化である。この重いファンク・リズムとノイズの混然さが未だラジカルであるのは、反コラージュ（デコラージュ）自体の非一般性に負う。（松本）

DAVID SYLVIAN



Secrets Of The Beehive

Virgin V2471

'87 年

VJ:VJL-28005

David Sylvian:ac-g,p,org,syn,tapes
Ryuichi Sakamoto:p,org,syn
Mark Isham:tp,flh
David Torn:ac&el-g
Phil Palmer:ac-g
Danny Thompson:double-b
Steve Jansen:ds,per
Danny Cummings:per

Produce:David Sylvian,Steve Nye

'82年のワールド・ツアーの後、突然、発展的解散を遂げたJAPAN。ミック・カーンはBAUHAUSのピーター・マーフィーとDALI'S CARへ、ジャンセンとバルビエリはDOLPHIN BROTHERSとして後期JAPANのサウンドを受継いだのに対し、シルヴィアンはジャズ的アプローチにより全く別の新境地を開拓した。今まで坂本龍一からJ・ハッセル、H・チューカイ、R・フリップまで様々なアーティストとの交流を試みているが、この3作目でも坂本龍一やマーク・アイシャムらと組んでアコースティックで詩的な美しさにあふれた素晴しいアルバムに仕上げている。 (金井)

THIS MORTAL COIL



Filigree&Shadow

4AD DAD 609

? 年

Col:33CY-1572

Dominic Appleton:vo
Simon Raymonde:p,key,g,b
Richard Thomas:sax
David Curtis:g
John Turner:org,key
Didier & Louise Rutkowski,Alison Limerick,Jane,Richenel,Caroline Seaman:vo
Peter Ulrích:per
Keith Mitchell,Nigel K Hine,Chris Pye,David Curtis,Alan Curtis:g
Mark Cox:ds
Martin McCarrick:cel
Gini Ball:vln,vla
etc...

Produce:Ivo & John Fryer

既に一時代を築いた4 ADレーベル。現在の内向性の強いサウンド傾向は、COCTEAU TWINSの分派として始まったこのユニットで具体化し、更にはC・TWINSの「Victoria Land」へも還元される形で更に開花した。'80年代式の美的感覚抽出のつきつめた音楽表現がこれらだと言えると思う。ノイズや弦、ピアノの印象派、後期ロマン派を思わせる響きを結びつけたのも、研ぎ澄まされた感覚志向に紛れもない。ニュー・ウェイヴの内的発露がサウンドとして行き着いたものだ。知的なモノクロの感覚を伴う音の流れにもまろ味が出てきている。先鋭さの棘を包み込んだ音。 (松本)

THROBBING GRISTLE



D. O. A.

Industrial IR 0004

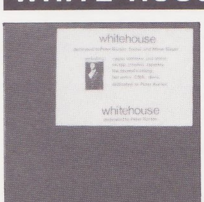
'78 年

Chris Carter:key,rhythm machine,tapes
Peter Christopherson:tapes,machines
Genesis P-Orridge:b,vln,vo
Cosey Fanni Tutti:g,effects,tapes

Produce:THROBBING GRISTLE

アンダーグラウンド・ミュージック・シーンを一変させた問題作。従来よりノイズを曲中の味付けとしたバンドは数え切れないが、不純なノイズを前面に押し出した最初の人達。先駆者というか、早い者勝ち的要素があったことは確かだが、TGの偉大さは、自らの音を「工場音楽」と規定し戦略的に展開した点にある。TG以後多くのエピゴーネン達が輩出したが、結局TGを超えられなかったのも、方法論的にTGを踏襲し、かつ、TG自体がありとあらゆる形態のノイズを展開したため、音的にもマンネリ化したためである。その意味で、彼らは唯一無比たりえたのだ。 (法水)

WHITE HOUSE



DedicatedToPeterKurtenSadist&MassSlayer

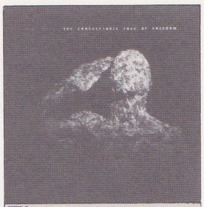
無番号

'81年

personnel unknown

'70年代終わりには早くも形骸化し始めたニュー・ウェイヴを引き金として、現代音楽的手法を用いることによりロックそのものの拘束性を打破、解体し、音そのものが持つパワーを直接的に表現しようとするバンドが現れ始めた。そのノイズと呼ばれる音楽の中でもTGと共に衝撃的な革命性で登場したのがWHITE HOUSEであった。彼らは常に暴力、セックス、殺人等のテーマを取り上げ、憎悪に満ちた冷酷な音の塊りを繰り返し吐き出し続けることによって日頃抑圧されている我々の精神を戦略してゆく。この手の音ではもはや追随する者を許さぬ程に厳しさを増した4枚目。 (平野)

TEST DEPARTMENT



The Unacceptable Face Of Freedom

Some Bizzare MOP 2

'86 年

Max:org
Phir Erb:programming
Alistair Adams:bagpipes
Ben Young:electronics

Produce:?

第二世代に属するTEST DEPARTMENTの力作。メタル・パーカッション中心の、そのサウンドは、ゼヴやノイバウテンとは又違った構成美を持っている。自ら、〝肉体労働者〟とも〝原始人〟とも称する彼らの音響空間は、まさしく原初的な躍動感に満ち、凡百のジャンク・ノイズ・バンドとは一線を画している。ロックとはリズムとノイズであると豪語する一方でドラムカン等のメタル・ジャンクを連打しつづける彼らの姿勢に嘘はない。本作では、シンセサイザーやシーケンサーも多用し、奥行きに満ちた作品に仕上げており、彼らのセンスの良さにある種感激を覚える。(法水)

TRACY THORN



A Distant Shore

Cherry Red M Red 35

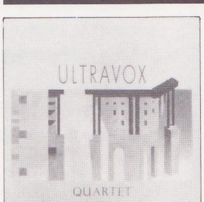
'82 年

Tracy Thorn:ac-g,vo

Produce:?

急激な変化に反動はつきものだ。ことパンクからニュー・ウェイブに至る思想性と音楽方法論は、'70年代の既成基盤を塗り変えるものだっただけに、一方で当レーベルに代表されるシンプルなアコースティック・サウンドが一時期話題になった。本作を頂点にするこのブームは、言い替れば加速化する急進派と受け手との意識のギャップを反映したものだ。ただし、共感を求めた'70年代フォークとは違って、個人意識に留まる冷めた感覚に支えられている。これが'80年前後の意識改革を示す一例だ。彼女には他を差別化する程の個性はない。ニュー・ウェイヴは基盤を大きく造り直した。 (松本)

ULTRAVOX



Quartet

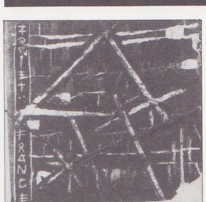
'83 年

Chris Cross:b
Warren Cann:ds
Billy Currie:vln,key
Midge Ure:vo,g

Pro:Midge Ure

J・フォックスが脱退し、ミッジ・ユーロが主導権を握る様になってからの3作目である本作は、バンドとして最も充実した時期に録音されたものであり、またミッジ・ユーロが一貫して求めてきたエレクトロニック・ロマンティズムの世界が最も開花したアルバム。メカニカルなビートとは対照的にドラマティックに奏でるピアノやスリリングに、シンフォニックに、そして重厚に滑り出すシンセ群の躍動感は圧巻！ ミッジのダンディズムとロマンティシズムとデカタンスはいつの時代になっても脈々とブリティッシュ・シーンに息づく永遠の生命を持っているのだ。 (UENO)

ZOVIET＝FRANCE



Mohnomishe

RedRhinoREDLP 40

'83 年

personnel unknown

Produce:?

多くのノイズ・バンドが多かれ少なかれ、横の連帯があることを考えると、このZOVIET＝FRANCEの隔絶さは異様といえる。自らを"エスニック"と称する音は、生理的な不快感の少ない穏やかな相貌を持っており、過度のメッセージ性を極力排している。換言すればノイズの本源的な意味合いを再構築しているともいえる。その一方で、一見単調にも思える音を聴き手に飽きさせない所に、彼らの非凡さがある。又、彼らのレコードは、全て異常な材質（本作は硬質繊維板）でつつまれ、曲名もインフォメーションもない。この匿名性こそがノイズに必要なのかも。(法水)

CHAPTER IX

スタイルとしてのプログレッシヴ・ロック

ブリティッシュ・ポンプ・ロック考
——ネオ・プログレッシヴ世代，その美学と残骸

大関善行　協力：石山伸子

'81〜'82年の前後を境に、ブリティッシュ・ロック・ムーヴメントは、NWOBHMが停滞し、ニュー・ウェイヴも過渡期（様変りといったところか）を迎え、俗に言うエレクトリック・ポップスの台頭で、音楽の持つ精神的・観念的なレヴェル云々よりも、ダンサンブルなビートを重視した商業路線一辺倒へ変遷を遂げたかの様に見えたが、そんな安易っぽさに当然反動するかの如く各方面で歯止めが掛かると共に、再び精神的レヴェルの向上も見直され始めたのも、やはりこの時期を境にしている。ダーク&ネオ・サイケ勢から、ポジティヴ・パンク、オルタナティヴ、4AD…等の連中からも、少しずつではあるが、よりアーティスティックな感性で心理的昂揚を追求する者が現れ、ある意味において音楽家本来の持つ知性、創造性が再び呼び戻される傾向が強まりつつあった風潮の表われは、当然、ごく少数派の残されたプログレッシヴ＝叙情派シンフォニックを愛する根強いファン、あるいはプログレ志向のアマチュア連中にとって絶好のチャンス到来となった。実現不可能と思われていた"プログレッシヴ再興"の気運が高まると共に、またたく間に広がりつつあったのは最早言うまでもあるまい…。更に、ニュー・ウェイヴ＝エレクトリック・ポップスに飽きた、血の通った温もりのある音、感動＝ロマンティシズムを希求していた者達の反動があった事も重要な点として考慮すべきであろう。初期のGENESIS、YES…等といった大御所から影響された、新たなるネオ・プログレッシヴ・エイジの胎動は、ブリティッシュ・ロックの再考期という背景を温床に、こうして増々増長の一途を辿っていった次第である。とにもかくにも、'70年代末期にプログレッシヴの大御所が沈滞してから、実に久々の新風が到来した'80年代初期。ネオ・ブリティッシュ・プログレッシヴは、いつの頃からか、誰が命名したのかは定かではないが"POMP ROCK（ポンプ・ロック）"と名を変え、自主製作さながらな範疇ではあったものの、TWELFTH NIGHT、MARILLION、PALLASといった黎明期の新進達を輩出し、少数派へ追いやられたシンフォニック系のファンの欲求を満たすと共に、シーン再興へ一石投じるまでに至った訳である。ブリティッシュ・ポンプ・ロックはその後も更に充実多様化していき、より以上に洗練されたいくつかの逸材を送り出した。THE ENIDから派生したCRAFT、GENESISチルドレンの頂点IQ、EL&Pの再来DAGABAND、PENDRAGON、ABEL GANZ、CASTANARC、QUASAR、そして高いオリジナリティを有しポンプの頂点を極めたSOLSTICE…等は、ブリティッシュ・ロック史に新たな足跡を残せる傑出した存在として評価され、'83〜'85年にかけて、ポンプ・ロックの最盛期へ大いに貢献していったのである。

MARILLIONの世界的成功、イギリス国内で吹き荒れたポンプ・ムーヴメントの嵐は、ヨーロッパ諸国の根強い少数派シンフォニック系ファンを刺激し"ユーロ・ポンプ"と称するユーロ・プログレッシヴ再興の動きへと実を結んで、ブリティッシュ勢と同様に新世代誕生への拍車をも掛けたのである。

顕著な例が、本誌でもお馴染みフランスはフランシス・グロス氏のHARMONIE誌を始めとするMUSEAレーベルの発足であろう。そんなフレンチ勢のムーヴメント勃発から端を発したのか、あるいは…既にイギリスやフランスと同時進行で着手していたのか、他のヨーロッパ諸国でも"ポンプ"・ムーヴメントに追随するかの様に、浪漫の追求を呼び戻す気運が高まった。

当然の事ながら、実に多彩な新進の顔ぶれが登場した。但し…フランス勢やオランダのCO-



●MARILLION

DAといった類を除けば、大体のほとんどがイギリスのMARILLIONやIQに似て"ジェネシスもどき"の競争みたいに見受けられるのも否めないが…。DEYSS、GALADRIEL、E-ZRA WINSTON、LEVIATHAN、EDITH、ARCANSIEL（特にイタリアに限った話だが、"GENESISっぽさ…"を意識し過ぎて、無国籍風サウンドに歩み寄ったきらいがある。その一方で自国のアイデンティティーに根付いた、BARROCK、NUOVA ERA、SITHONIAといった存在も忘れてはなるまいが…）が、現在のユーロ・ポンプの立役者といったところだろうか？

さて、ヨーロッパ諸国のネオ・プログレッシヴ・ムーヴメントの火つけ役となった、ブリティッシュ・ポンプではあるが、鳴り物入りであれだけ華々しく誕生し、各方面からも注目されていたにも拘らず、'86年以降からは全くと言っていい位に情報が聞かれなくなって実に久しい限りである。しかし、私自身早かれ遅かれいずれはこうなるであろうと予感していたのも事実である。それ相当の努力や熱意は以前と変らず理解出来るものの、やはり、オリジナリティの欠如、演奏水準、模倣云々といった問題以前に、力量不足が余りにも鼻について、安上がりなインスタント・プログレで終止してしまった感がある。MARILLIONは確かに世界的な成功を収めた。が、ユーロ・ポンプの箇所でも触れたように、正直言ってポンプ・ロックの大半が、"＝GENESISの亜流達"で占められていたのが事実で、踏まえて考えてみれば…ポンプ・ロックをネオ・プログレッシヴの代名詞と言うのであれば、それはきっとYESとかGENESISで聴かれたメロトロンという幻想叙情音楽箱で描かれた部分の継承でしかなかったのではないだろうか？

決して、ひいき目な観点という訳では無いが、同じGENESISの亜流でもIQを例に取ってみると、MARILLIONがGENESISのシアトリカル的な面しか取らえられなかったのに相対し、IQはシアトリカルさを含めて、本家の持つ音の組み立て、流れ、曲進行…等といった醍醐味、本質を徹底的に追究し、自分達なりに消化した解答というものを呈示してみせた。これが、昔のGENESISの音と面影に思いを馳せている往年のファン達に受け入れられた要因ではないのか…。（テクニックといった次元を抜きにしても）

ハード・ロックやプログレッシヴにしろ、再興（リヴァイヴァル）を目指すのであれば、必ずしも新しい若いリスナーだけを増やし得るだけでは、絶対に永らくは維持出来ない。特にプログレッシヴは、往年で過去の思い入れが深いファンが多い分だけ、期待の当たり外れ次第で、ムーヴメントの将来が大いに左右されるものだ。MARILLIONやPALLASといった、ポンプ黎明期に登場した連中による、未完成に近い見切り発進にも似たメジャー・デビュウは、少なからずも遜色のあるスタートの感が強く、シーンとして出端をくじかれた事は何よりも大きな誤算だったのではないだろうか。逆に言い変えてみれば、良くも悪くも'70年代の大



●PENDRAGON　*Pic. Rinus Van Doveren*

御所達の偉業、人気がいかに根強く、ポンプにとって大きな壁、プレッシャーであったかが納得出来るというもの。

それでも、5年間という長くも短くも感じさせるサイクルながら維持出来たのは、当初、各方面でも触れられていたように、イギリス国内のメタル・フリークを始めとする新しいファンの支持があったからこそだが、実際のところは、地道に才能を蓄積していたIQ、PENDRAGON、SOLSTICE…等の健闘していた一番の最盛期、即ち往年のファン達からも支持を得、見直された頃の方が、より更にシーンを持ち直したと見て良いだろう。後にも先にもブリティッシュ・ポンプの本質たるものが本格的に開花し充実していたのも、まさにこの時期がそうであった（同時に、GENESISの亜流以外が多様化していたのも…）。

栄枯盛衰の言葉通り、ブリティッシュ・ポンプは5年近い栄光を経て沈静化していき、シーンを担っていた者達もそれぞれに独自の方向へ歩み始めた。唯一世界的成功を収め、4作目「Misplaced Childhood」でようやく自身のカラーを見い出したMARILLIONも看板のフィッシュ脱退後は、これといってパッとしない状態が続き、中堅的存在に残ったIQ、PENDRAGON、QUASAR等はより以上の上昇志向を抱くことなく自国に根を下ろし、今後の期待が有望視されていたSOLSTICEが消息を絶ち、ABELGANZ…etcも音質粗悪なオムニバス編集盤を最後に9割が消滅という有様。

最早、ここで結論を言わせてもらおう。やはり何度も言うように、ポンプ・ロックは世界的に小規模なプログレッシヴ…所謂シンフォニックのファン達、プログレ指向のアマチュア連中等に希望と夢、活路を与えただけにしか過ぎなかった！乱暴な言い方かもしれないが…、「仏作って魂入れず」の諺の如く、ポンプロックの存在自体も「こんなにも満ち足りた、お手軽な御時世でもプログレは演れる」といった調子で掲げられた飾り文句みたいなものだったのだろう。ブリティッシュ・ポンプに限った話だが…。ヨーロッパ諸国及び日本のネオ・プログレッシヴ勃発の起爆剤的役割を果たしたのは大いに評価出来るが、幾多の可能性を秘めていたであろう者達をも食い潰していった功罪は余りにも大きかったのではないだろうか。因みに、ポンプ＝POMPの意は「華麗、壮観」また一方で「見せびらかし、虚飾」の二通りで、どちらとも的を得た形容である。

話は前後するが、ポンプ・ロック誕生の契機以前、ニュー・ウェイヴ勢達が、アーティスティックな動きに目覚めた。むしろかえってその頃のニュー・ウェイヴ勢達の方が、余程プログレッシヴなアプローチが強かった様に見えてならない。それらが、シンフォニック云々といったプログレッシヴの次元を遙かに超越した、精神・観念的な前衛（プログレス）に心血を注いだのは言うまでもあるまい。

ポンプ・ロック、ニュー・ウェイヴ系が落ち着くところまで落ち着き、昨今のプログレッシヴとは一体何ぞや…？と問われたところで、私自身残念ながらはっきりとした解答は出せないが、場合によっては、VIRGINIA ASTLEYやENYA、ALL ABOUT EVEの様なフィメール・ヴォイス主体の耽美なもの…か、あるいはテレビやラジオといったメディアでオン・エアされるPINK FLOYDないし、ABW&H、IT BITESみたいなポピュラー寄りのものを言うのさ、と答えるしかないだろう。

ただ…ポンプ・ロックという一種気紛れなシーンに再び触れてみて分かったことは、いつの時代においても人は皆感動を追い求めているということだけは、私自身もはっきり認識出来た事実として、最後に付け加えておきたい。

冷やかな現実において、「夢」を見続け、追い求めるということは、やはり罪に値するくらい困難な事なのかもしれない。

CASTANARC



Journey To The East

Peninsula Pencil10

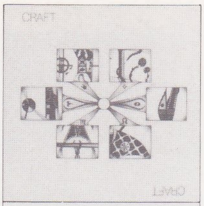
'84 年

Paul Ineson:g
Mark Holiday:vo
David Powell:p,syn
Neil Duty:b
David Kirkland:ds,p-er

Produce:John Spence

ポンプ・シーンが下火となった時期に本作はリリースされた。各曲のコンセプトが明確化され、キーボードを中心としたドラマティックな展開。そしてテクニック的にも完成度の高いプログレッシヴ・サウンドを有している。又NWOBHMの流れからのポップな面を受け継いでおり、'80年代のイディオムを吸収しているグループでもある。プライヴェート・プレスでありながら録音クオリティも高くポンプ集成作といえる作品。しかし結局このシーンが何も産み出さなかったように、このバンドもオリジナリティはない。後にジャケットを改ざんし再発された。 (吉野)

CRAFT



Craft

Shanghai HAI 106

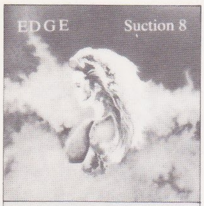
'84 年

William Gilmore:key
Grant McKay Gilmore:ds,per
Martin Russell:b,key

Produce:Martin Russell

ENIDに参加していたキーボディスト、ウィリアム・ギルモアが結成したソロ・プロジェクト。兄弟らしきグラント・マッケイ・ギルモアがドラムを担当、ベース・プレイヤーのマーティン・ラッセルが種々のエフェクトによりギター風の音も出す、というトリオ編成。曲調は中期ENIDに酷似しているが、ゴドフリー程のアレンジの冴えはみえず、ギターレスという弱点も加えて、単調さは免れていない。結果的にスッキリと整理されたサウンドは、よりロック的なものとなり、ENIDとはまた別の魅力をもっている。星座をテーマとしたトータル・アルバム。 (沢田)

EDGE



Suction 8

Fr;UgumUGU 00190

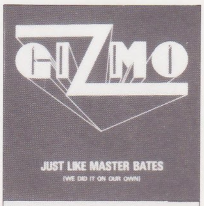
'90 年

Fran Hallard:vo
Mark Hampton:b
Stephen Page:ds
Oliver Page:fl
Neil Allies:g
Jez Ford:key

Produce:EDGE and Mark Bruce

ポンプ・ロックと言われて久しい。'80年代以後、イギリスから現れるシンフォニック・ロックは総じてポンプと言われるが、果たして同イディオムなのだろうか。'86年4月、バーミンガムで録音された本作は、強力な女性ヴォーカリストを据え、めくるめくフルートやキーボードがシンフォニックな演奏を奏でるものだ。スージー・スー張りの声質にミス・マッチするヨーロッパ型とも言うべきリリカルな演奏は実に新鮮で、相互に引き立つ。ポップ路線とは一線を画くインストゥルメンツに期待を抱かせるが、その後、彼らの動行を知る術はない。癖のある面白味ある音楽性だ。 (坂本)

GIZMO



Just Like Master Bates

Ace Records ACE001

'79 年

Steve Wise:ds,per
Maurice Memmott:org,el-p,vln
Dave Radford:vo,el-g,12str-ac-g
Brian Gould:syn,org,clavinet

Produce:GIZMO

本作が発表された'79年というと、メジャー・シーンではプログレッシヴ・バンドはほとんど皆無に近く、本作のように自主製作レベルでしか活動していなかった。このバンドも多くのポンプ・シーンのバンドと同様GENESISからの影響が強い。ヴァイオリンがインストゥルメンタル部分の要になっており、A③ではスロー・ワルツ・テンポで印象的なソロを取っている。全体的にもWOLF時代のD・ウェイに近い印象がある。全曲一定の水準を保ち、変拍子を多用したプログレッシヴな方向を持った好作品である。なおセカンド・アルバムもリリースされている。レコードはホワイト・ヴィニール。 (吉野)

HAZE



C'est La Vie

Gabadon GABL001

'84 年

Paul Chisnell:per,vo
Chris McMahon:b,key
Paul McMahon:vo,g

Produce:HAZE

本作はI・MAIDENやD・LEPPARDなどNWOBHMからの影響を感じさせるギター・プレイやドラマティックな曲展開、そしてOMDやTFFに代表されるニュー・ウェイヴ系エレクトロニック・ポップの感覚を合わせ持った作品といえる。' 70年代前期のプログレッシヴ・イディオムは用いていないが、アナログ・シンセサイザーによるソロなど往年のサウンドを思わせる部分もあり、発表年度からポンプ・ムーヴメントに属する作品として位置付けられている。自主製作ながらビニール製ジャケットから比較的知られている。他に2〜3作を発表。ポップ色が強まっている。 (吉野)

HELDEN



Holding On

Zica

'83 年

Hans Zimmer
Warren Cann
Steve Rance
Linda Jardim
Zaine Griff
Hugh Vereker

ULTRAVOXのドラマーであるワレン・カーンが中心となって制作された謎の12インチ・シングル「ヘルデン」(エルドンと間違えないようにネ!!)は、プログレ以外の何ものでもないサウンド。A面のタイトル曲はULTRAVOXの流れを汲むエレクトロニクス・ポップスだがB面にはぶっ飛んでしまう。躍動感に溢れるストリングス・シンセによるオーケストレーションとヴァイオリン・ソロをメインとしたドラマティックなシンフォニック・ロック。イタリアのサンジュリアーノを彷彿させるサウンドとそのスケールの大きさは圧巻です。 (UENO)

IQ



Tales From The Lush Attic

The Classic One-Shoe MAJ 1001

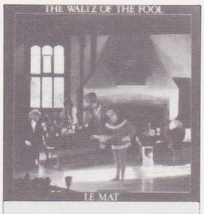
'83 年

Paul Cook:ds
Tim Esau:b
Mike Holmes:g
Peter Nicholls:vo
Martin Orford:key

Produce:IQ

MARILLIONとともに、ポンプ・ロック・シーンを支え、ムーヴメント衰退後も活躍した彼らの記念すべきデビュー・アルバム。割と薄っぺらな音作りの多かった他のバンドとは違い、いきなりのメロトロンで幕を開ける。"ジェネシス・チルドレン"と呼ばれるフォロワーが星の数程存在したこの時期に、MARILLIONとともにシーンをリードした理由として、やはり音の厚み、そしてデビューにしてこの完成度の高さというのが挙げられる。10分を超す大作も無理ない構成を持ち、その実力をうかがわせる。バンドはこの後ポップ色を強めて行くが、セールスの不振の為解散した。 (神山)

LE MAT



The Waltz Of The Fool

WHAAM BIG 6

? 年

Peter Helmer:g
Gary Simpson:vo
Paul Helmer:b
Sao:ds
Mark Bonnicci:vln,key

Produce:?

このバンドも、ジャケットから伺えるように、ゲイブリエル在籍時のGENESISスタイルを取っている。しかし当時をコピーするのではなく、やはり時代を反映した音になっている。B⑥のメロディアスな曲や、U2のケルティックな要素を想わせる部分があるが、叙情的な音作りはされていない。又唱法もニュー・ウェイヴよりであり、ビート感のはっきりした曲が多い。自主制作盤でありながら、全体的に完成度は高い。ヴァイオリンがイントロ部分での導入ほどにしか起用されておらず、効果的に使っていれば本作の印象も随分と変ったであろう。デビュー作のみで解散。 (吉野)

MARILLION



Fish:vo
Steve Rothery:g
Mark Kelly:key
Pete Trewavas:b,vo
Ian Mosley:ds,per

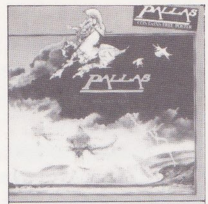
Produce:MARILLION & Privet Hedge

The Thieving Magpie (La Gazza Ladra)

EMI MARL 1
'88年
To-EMI CP25-5767～8

ポンプ・ロックからの脱却を図り、シーン衰退後も、イギリスを代表するバンドとして名高い彼らの集大成とも言える2枚組ライヴ・アルバム。前3作のスタジオ盤からまんべんなく選曲されているが、最高作と言えるコンセプト・アルバム「Misplaced Childhood」は全て収録（LPは前半のみ）その完璧な再現、彼らの実力がうかがえる聴き所と言える。この後バンドの看板と言えるヴォーカルのフィッシュが脱退するという危機に見舞われるが、新ヴォーカリストを迎え新作を発表、安定した活動をしている。また脱退したフィッシュもソロとして活動を開始している。（神山）

PALLAS



Euan Lowson:vo
Ranrie Brown:key
Derek Forman:ds
Graeme Murray:b
Naill Mathwson:g

Produce:Eddy Offord

The Sentinel

Harvest SHSP 2400121
'84年

ポンプ・ロックのバンド達は、当時イギリスで全盛であったヘヴィー・メタルのファンからも強い支持を受けていた。実際ヘヴィー・メタルのチャートにも、いくつかのバンドがチャート・インされていた。ヘヴィー・メタルと共通する様式美や、それまでのプログレ・バンドにはなかったハードでソリッドなギター等が共感を呼んだのであろう。このPALLASもその中の一つと言える。そして本作は彼らの1作目（ライヴ）である。ドラマティックな展開を持つシンフォニックなサウンドをベースとしながらも、ハード・ロック的要素の強い独特の音を持っている。（神山）

PENDRAGON



Nick Barrett:vo,g
Peter Gee:b,g
Rik Carter:key
Nigel Harris:ds

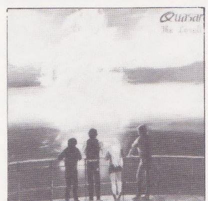
Produce:Peter Hinton

Fly High, Fall Far

Elusive ARRMP 001
'84年

'84年にリリースされたPENDRAGONのデビュー・ミニLP。展開の多い曲がA、B面に2曲ずつ収録されている。テクニック、構成力共に仲々の出来でGENESIS、CAMELといった抒情味溢れるタイプのものからYES、RUSHのようなパワーのある曲まで難なくこなしている。甘い声質と判りやすいヴォーカル・ライン、上記のバンドのフレーズがたまにちらつくものの、若々しくエネルギッシュなスタイルには、好感が持てる。彼らは他に3曲入りのデモテープ、『The Jewel』、ライヴLPに新作と着実に活動している。MARILLIONと共にこれからが期待される。（金井）

QUASAR



Keith Turner:b,syn-b,12str-g
Dave Wagstaffe:ds,vib,triangle
Toshi Tsuchiya:g,Midi-g
Tracy Hitchings:vo

Produce:Keith Turner

The Loreli

Q Records QUA-2
'89年

本作は2作目。リーダーのキース以外はメンバー・チェンジ。ステージ映えするであろう女性ヴォーカルに加え、日本人ギタリストも加入する。各曲、彼女の語りかけるような、シアトリカルな、そして迫力のある変化自在のヴォーカル・スタイルを聴くことができる。前作に比べ曲調が統一され、大作志向だが、演奏水準は低くなっている。そしてMIDIの音には異和感が残り、専任キーボードが欲しい。イギリスでは、プログレッシヴの影響が強いALL ABOUT EVEやIT BITESが人気を得ているが、唯一のシンフォニック・バンドとして気を吐いた作品。（吉野）

RED



Dennis Fitzgibbons:g
Jerry Soffe:b
Francis Hockney:ds
David Holmes:per
Mark Ambler:key

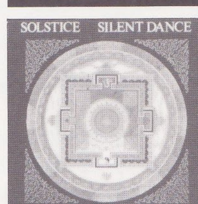
Produce:Dave Williams

Red

Jigsaw SAW2
'83年

15／8拍子のクリムゾン的リフから始まり、グループ名から期待を持たせるバンド。実体は、BRAND Xの流れを汲む、硬派のフュージョン・バンドである。全曲メンバーではない、ゲーリーとピートの共作に依る。各曲飽きのこない曲展開をし、効果的なフレーズによる曲作りがされている。そしてソロ・パートは少く、緻密なアンサンブルが聴ける。当時ニュー・ウェイヴの影響から、ノン・テクニック、感性勝負のバンドが多かった時期であり、テクニック志向のバンドは皆無状態であった。私見では、オランダのグループ、FINCHの'80年代版といった印象。（吉野）

SOLSTICE



Andy Glass:g,vo
Marc Elton:vo,key
Mark Hawkins:b
Martin Wright:ds,per
Sandy Leigh:vo

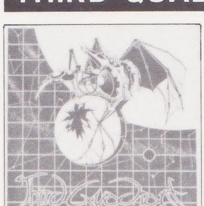
Produce:Mazlyn Jones

Silent Dance

Equinox EQRLP 001
'84年

数あるブリティッシュ・ポンプ作品群の中でも非常に高い完成度を誇るSOLSTICEのアルバム。クリアーで良く伸びる女性ヴォーカルと張りのあるヴァイオリンの音色が驚く程のみずみずしさを現出する。ギター、キーボードの奏で出すサウンドも又、爽やか且つ繊細。『素晴らしい新世界』と題されたB②は約8分に及ぶ大曲でジェネシス風のフレーズが印象的、A②ではアコースティック・ギターの澄んだ音色を効果的に活用ししっとりと聴かせる。B③はややフュージョン色の感じられるナンバーながら、持ち前のセンスで非常に美しくまとめ上げている。（江田）

THIRD QUADRAND



Chris Dunn:key,vo
Psi-Pi:guitronics,eleetronics,histronics
Cris Le Batteur:ds,bass-machine

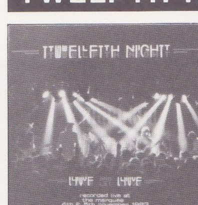
Produce:Simeon Manners

Seeing Yourself As You Really Are

TTS 8049
'82年

結局ポンプ・シーンが盛り上がらなかったのは、MARILLIONに継ぐバンドが出なかった事もあるが、他のメジャー・ポンプ・バンドはNWOBHMよりの曲が多く、ブームのおこぼれ的部分にすぎなかった為であろう。そのため最盛期とは逆にマイナー・シーンにプログレッシヴな作品が多かった。7日間のホーム・レコーディングで完成させたこの作品、リズムは単調であるが、B②の組曲等全体的にGENESIS的、叙情ナンバーで占められている。本作以前に「N」というタイトルのカセット作品がリリースされている。なお本作は本国（英国）でレアー盤として扱われている。（吉野）

TWELFTH NIGHT



Andy Revell:el-g,syn,vo
Clive Mitten:b,ac&el-g,key,vo
Geoff Mann:lead-vo,per
Rick Battersby:key
Brian Devoil:ds,per

Produce:Mark Chamberlain,TWELFTH NIGHT
GRAHAM LEWIS&B.GILBERT

Graham Lewis
Bruce Gilbert

Produce:?

Live And Let Live

Music For Nations MFN18
'83年

MARILLION、IQ、PALLAS等とともに英国ポンプ・ロックの古株バンドであった彼らのこれは3作目に当たるライヴ・アルバム。ニュー・ウェイヴ、パンクをも通過してきたと思われる、過激なスタイルを持つヴォーカルをフィーチャーし、MARILLIONともIQとも異なった、ハードなシンフォニック・サウンドを持っていた。が、前述のバンド達と比べいまいちメジャーになれなかったのはその音楽性の為か？ヘヴィー・メタル専門のインディーズ・レーベルからのリリースの為か？しかし、当時の熱気とオーディエンスとの一体感が充分伝わる、ライヴ・アルバムの傑作と言える。（神山）

CHAPTER X

ムーヴメントの彼岸

松本昌幸

'80年代中葉頃から目に見えて加速している再発ブームの中身を見ると、どれもこれもが、ロックの最盛期だった'60年代後期から'70年代初期の遺物である。'90年の現在、このブームは各国自国の資源再活用とも言うべき域に達しているばかりか、欧米を中心に期を同じくして浸透してきている、ロック全般へのネオ・サイケデリック指向とも本質的に同じものである。

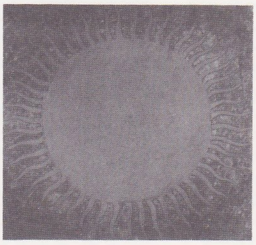
では、この本質とは何かと言えば、それは'70年前後への憧れ、回顧であり、美化意識によって造り出されつつある土壌である。美化意識は、音楽が起因した社会性、現実性を曖昧にすることで、音楽を個別のものへと引き離し抽象化するものだ。ここで、遺物から本質が抽出され、音楽はイディオムへと変換される。言ってみれば、時代の流れは、'90年代の今に架空の'70年前後を築こうとしているのである。では更に、この'70年前後の正体とは何かと言えば、明らかにそれは、'80年代が冷却化してしまった自己主張の、何振りかまわない熱気、活力に他ならない。このブームの深層には、これらをイディオムとして取り戻そうとする精神が働いているように思える。こうした土壌が造られつつあるのだとしたら、それは'90年代に新たに台頭しようとする時代意識である。最も表面化しているのは、ハード・ロック系におけるスラッシュ・メタルだろう。ただし、'90年代意識は、'70年、'80年ムーヴメントが示したような明確なスタイルを持たず、それは空気伝染のように目に見えない希薄さでいたるスタイルに現れている。それがスラッシュ・メタルをも含むネオ・サイケデリック指向であり、イディオム化された熱気、活力である。まるで'90年代は、'80年代の抑圧された空気の反動として、'70年代の初期、サイケデリック・ムーヴメント以来のそうした証言—サンプルを求めているかのようだ。

一言で言えば、過去のある一定期の、しかもそれがロック最盛期という特別な時期の遺物が、集合的に引き合いに出されているからには、何らかの必然性、時代希求があり、これを時代の急速な流れとして一定方向につかさどられているように感じるところの、いわば、時代の集合無意識のような律動が、その背後に（内面下）で働いていると考えなければ、個人の意志では動かしようもない“ムーヴメント”なる時代の胎動など、これまでにも起こり得なかったことだろう、ということだ。

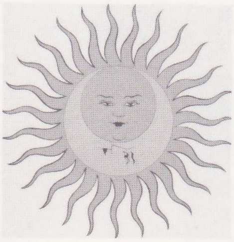
一つ注目しておいて良いと思うことは、この胎動期には、フォークロア、エスニックの指向・復興が現れるという点だ。'70年のエレクトリック・トラッド・ブームや東洋・イスラム指向の混入、'80年のエスニック・ビートやリズムへの応用、これらはその現象である。これらはムーヴメントの主流を担ったわけではなかったものの、様々な音楽スタイルに吸収されることで、ロックを変質させた伝染菌のような因子だった。

なぜ、こうした土着の要素が胎動期に台頭するかは、よくは分からない。しかし、統合と分化の柔軟性によって成長していくロックの性質を考えると、その文化的集積の道のりとは無名化（都会性）への道のりであって、因縁から遠ざかることである。これとは逆に、トラディショナル・ミュージックは、地域・民族の音楽的な合言葉として、もしくは共通意識として、そこに血縁することで生き続ける。両者の性質は対極関係にあるものだ。そして、ムーヴメントが、時代性を形造っている表層と深層の急速な均衡の崩れに生じた時代の裂け目であり、破壊と創造が混然一体となって、あたかも情念が吹き出すが如くの様相を見せる、いわば力動エネルギー渦巻く磁場のようなものであることを思うと、ここでの後者の台頭とは、ロック・サイドが接点を持ち得る為の後者のイディオム化をはかったものととれる。それは、地域・民族の中に出生し、その中で伝承（歴史的時間拘束）されることによって、地域性・民族性が音楽性はおろか音楽形態にまで及んで投影、蓄積されるに共ない帯びてくる普遍性、その強靭さの抽出なのだと思う。異質であればあるほど、この対極性質の接触点には力動エキルギーが生じる。ピーター・ゲイブリエルのソロ・サウンドを持ち出すまでもないことだ。トラディショナルなものの台頭は、ムーヴメントのバロメーターだと言えないだろうか。

ムーヴメント期ほど、個人の音楽観が先走る（表面化する）結果として、様々な音楽スタイルが乱立する時期はない。まるで押さえ込まれていた音楽的欲求不満が、一拠に表に吹き出すかのような様だ。このようにムーヴメントとは、時代の深層流が表層に向かって上昇する動きであり、外見上は、時代精神が次なる時代性を先取る行為である。'80年における自主製作やインディペンデント・レーベルの乱立振りは、これをよく反映していて、個人意識の自然発生に足る土壌が、表層（既成意識）に先行して形造られていたことを実証するものだ。'80



「太陽と戦慄」のモチーフとも言えるインドの秘教タントラの図。「根源の光」と云われる18世紀のもので，無意識域の神性を意識に同化し，神との霊的一体を果たすことで，絶対的な全体性を個体が経験する，その象徴図とされているもの。



古典中の古典「太陽と戦慄」。そのもの。“プログレ”を通じて現代に生きる錬金術の本質の象徴図。その真は，月：無意識と太陽：意識の統合つまり過去の魔術・宗教などあらゆる精神世界が説き，何より芸術というものが最終的に目指すところの，“統合”“個体実現”の概念をずばり図式化したもの。

ベルギー象徴派絵画の最大の遺産，フェルナン・クノップフと双璧を成すジャン・デルヴィル。彼の代表作の一つ「婦人の横顔」(1894年)。ワグナー音楽，世紀末，デカダンス，ペラダンの"聖堂と聖杯のカトリック薔薇十字会"などの観念と通底する精神絵画。

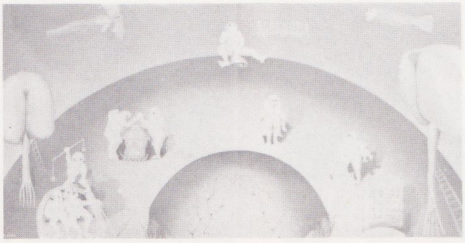


年既成音楽産業は深層発露故の多様性をとられ切れず後手に回ったのであり、'70年では、そのために傘下レーベルを設立したと言えるだろう。ただし、個人単位で見れば、時代に対して感性が先走ることなど、いつの時期にも起こり得ることだ。俗に珍しいからこそ異端児と形容されるアーティストが、それだ。しかし、こうした個人単位の先走りが、外（社会的行動様式）にも内（内面的動機）にも影響を及ぼし合い、集合化し、そして時代を急変質させる時期というのは、なぜか限られている。

社会状況は、これを規定する外的要因であって起因ではない。時代精神や社会性は集合意識・心情の外的投影であり、仮象であり、歴史的な時間幅の集積の断面に過ぎない。起因はあくまでも無数の個人意識である。そして、間違いなく原点は個人だ。しかし、ムーヴメントは、結果として力動性によって次なる時代性を現出させる集合形態なのだから、単なる個人意識の雑多な集合では成り立たない。となれば、ここに煩雑さそのものである主観＝自我を超える個人意識を想定せざるを得ないのである。これが、自我を補償し、その動きを規定していく意識の源泉と言われる無意識の存在であり、ムーヴメントとは本質的にこれの集合形態だと言える。換言すれば、それは無意識の律動が最も強まる時期であり、社会危機に際して弱体化した

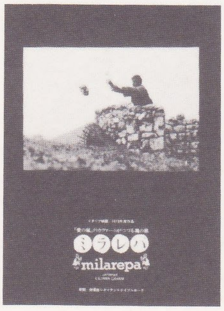


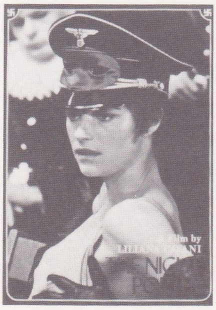
19世紀フランスのオカルティスト，エリファス・レヴィこと本名アルフォンス＝ルイ・コンスタンが，著書「高等魔術の教理と儀式」の中で「ソロモンの大象徴」と呼んだ挿絵。この図は，精神と物質，光と影，善と悪といった彼の二元論的概念を図解したものとされている。SPRIGUNSの「Magic Lady」表ジャケットより。

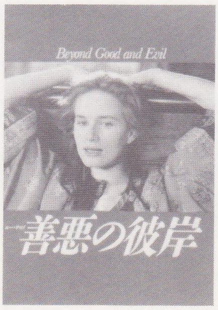


SPRIGUNS「Revel Weird And Wild」のインサート。図右下の文字版に，今世紀のオカルティストが最も注目していると云う書物「聖なる魔術」に出てくる「アブラメリンの護符」がある。これは奇蹟を行なうことのできる文字の組み合わせだとされている。こうした魔術に代表される精神史の影の領域，無意識のモチーフは，MOODY BLUESやCAMEL「Moonmadness」，PINK FLOYDの「狂気」など表現を変えて実は数限りなくある。

時代精神を内から補償するものである。
　無意識は、自我にはとらわれず律動するという点で客観性を帯びているものだから、自我がこれを意識するには、理性ではなくイメージにたよらざるを得ない。'70年、'80年のムーヴメントはおろか、過去の大きな社会危機と言った変動を振り返る時、そこには、これを補償するように対峙する精神的な集合があり、しかもそうした発露は、理性でも感情でもとらえきれないイメージの氾濫、つまり感覚、直観にたよっているとおりである。内的必然だからこそ、意識変革にまで及ぶのである。
　ムーヴメントは創造性とその不純物の宝庫である。それは無意識の所産であり、感覚と直観は創造性を具現化に導く為の最良の能力だ。美の抽出、情念めいた暗味や重味、うねりのような力動性など、創造性とその不純物は音・音楽に宿るイメージとなって散在するが証拠に、ムーヴメント期の音楽形態は混沌としていて、新しいスタイルが産み出されるのも、この葛藤状態の所産である。仮に真の創造性が美であるとしても、これを抽出する過程にうごめく抑圧され情念化した意識・感情（不純物）がついてまわり易いことは、自己・内面深化の第一歩であるコンプレックスに対峙する時、自我が暗く重い感情にとらわれ易いことを考えても分ることだ。内的深化とは葛藤を伴うものであり、当然これをめざした音楽は、結果としてそうした性質を帯びているものだ。ピーター・ハミルの音楽を見るまでもないことである。
　例えば、クリムゾンの音楽は、情念のうごめきの音像化の中にも美的抽出が果たされており、情念のダイナミズムを殺さずコントロールしきる「Island」や後期クリムゾンの3作などに、無意識からのイメージの氾濫を統制する理性の強靭さをも読み取れるが、この無意識の圧倒力を受け止める自我の態度をして、これを拒否したり、これに感情埋没しない自我の確立と覚醒をも持ち合わせて、これこそが自我＝意識と無意識の中に眠る創造性との統合に接近するものとされている。彼らの音楽背景として錬金術の意味行程が言及されるのも、彼らの音楽性を視覚昇華した「太陽と戦慄」のジャケットその意味内容や、強いては、東西の世を問わず神話や民間伝承に多く見られる、無意識（魔界、辺境地などに例えられたもの）に潜む創造性、本来自己（宝物、とらわれのお姫様などに例えられるもの）を獲得する精神世界の比喩とされるもの、そして身近なところで「幻惑のブロードウェイ」や恐らくはGONGの「ラジオ・ノーム・インヴィジブル」物語を共通して貫く本質こそが、個体精神の一体化、自己深化の末にある自己開示といわれるものに他ならないからである。つまり、内的宇宙（固体内の無意識の領域）と外界（意識界＝現実）を、自我を通過点にして通流させる、という態度は、固体精神の無意識に眠る創造性を獲得することによって果たされる、意識と無意識の同化を意味し、これを意識実現することによって、現実的に本来の心的有り方を完成する、と言われるところである。
　近代精神史は、日常的に極言すれば、この誰もが経験するはずの“夢を見ること”で示される無意識の存在や、日常、自我＝意識では押さえ切れなく襲ってくる内的律動（情念化した衝動）を、この事実を、否定（黙殺）した所、つまり自我＝意識を絶対化した所から出発していて、それは現在、科学への絶対的信望という主義（理性の神格化）に姿を変えている。こうして自我に押さえ込まれることで歪み生じる無意識の反動、その危険性を指摘し、自我の絶対化を批判した人物が、ニーチェだと言われる。そして彼の指摘したヨーロッパ精神の危機は、彼の死後、ヒトラーのドイツという形で現実のものとなる。この史実は、ヨーロッパ、ドイツのみに限らず、個体レベルの拡大だと、深層心理学は解き明かすのである。そもそもは、本来の心的世界を、自我＝意識のみが心である、とした所から起った歪みである。宗教の本質は、本来、無意識を統制しながら深く潜在する神性を意識上に体現化する道筋を解き示すものだが、その形式は時代にはそぐわなく、替って深層心理学などが、その事実を解き明かすのが今日である。そしてこの抑圧された事実の歪み・反動が音楽上に現れた一例が、クリムゾンや「幻惑のブロードウェイ」などである。何よりこの深層流の上昇が、人間は物ではなく意識と無意識からなる心的存在だ、とされる事実の否定された結果への反動でもあり、この事実を回復する音楽的波及こそが、本来のプログレッシヴ・ロックの抱える本質である。そして、また、こうした個人単位の内的復権の、内的深化希求の集合が、ムーヴメントの本質を担うものと言えるだろう。
　誰もが覚えのあるように、自我＝意識に抑圧される無意識の律動が表面化する時、それは衝動という表れ方をするように、この個体単位の現実は、その集合形態であるムーヴメントにおいても同じ形で現れることで、以下を裏付けもする。それが、シュールレアリスムに先駆けるダダであり、'70年ムーヴメントに先駆けるサイケデリック、ニュー・ロックであり、'80年のそれに先駆けるパンクである。この衝動を自我＝意識は、理性や感情をもって分化・解読するからこそ、ムーヴメントが結果として形造られ、そこで洞察も果たされるのだと言えるだろう。
　そして、こうした発露の原点は、主義（○×思想、××風潮）や宗教にあるのではなく、個体精神に、人間普遍的にあるのだから、俗に言う、現在有るジャンルとしてのプログレッシヴ・ロックという名目を借りた特権意識に音楽的自己精神の基点を置くことは、主義や宗教に基点を置くことと何ら変わりがない。こうした意識こそが、その縮図であって群集意識に他ならず、自己深化には程遠い盲目的態度であると認めざるを得ない。まず個体内で果たされようとするべきこと故に、真にプログレッシヴなミュージシャンや様々な表現ジャンルのアーティストには、結果として孤独がつきまとうのである。これが本来の創造的自己を取り戻す方向を向いた時に、結果として伴う一面であって、しかも、これはミュージシャンなどのペルソナとは何ら関係なく普遍的に人の身上に有ることであるように、その投影である音楽スタイルや表現ジャンルにも関係なく有る。真のプログレッシヴ・ロックとは、こうした個体実現を啓発するものとして、この方向を向かせる（気づかせる）、音・音楽に託された因子のようなもので、変則拍子、シンフォニックに限らず、あるいは関係なく、リスナーの内的要素（既にイメージでしか意識できない）を触発する、言葉・理性などの自我の産物ではまかないきれない無意識の中のイメージが託された音楽のことのはずである。自我＝意識によって有る外的世界を過信するあまり内的反動として誕生し、遂には内奥に潜在する創造性を抽出して意識レベルでこれを開花させる（音楽的な個体実現の為の）音楽上での影響こそが、真のプログレッシヴ・ロックの特性のはずである。だから、これに相対することは、少なくとも心情面でその方向性を知る（予感する）一歩であるには違いない。
　繰り返すけれども、心は自我＝意識のみから成るという抑圧に、恐らく心の無意識が爆発（衝動）を起こし、外的投影されたものがムーヴメントである。ただ、なぜ、こうしたメカニ







所謂巨匠の映画は，そこに目には見えぬ精神の重味が描かれるからこそ人を感動させずにはおかないのである。イタリアの女流監督リリアナ・カヴァーニの描く精神世界は，決してフェリーニやヴィスコンティにも引けをとらない。左より「ミラレパ」('73。11世紀のチベットの宗教家—密教を体得しラマ教のカーギュプタ派創立者—ミラレパの精神世界を描いた作品)。「愛の嵐」('74。ナチズム下での魂の彷徨を描いたセンセイショナルと評された有名作。有無を言わせないシャーロット・ランプリングの視線，退廃感漂よう演技は圧巻)。「善悪の彼岸」('77。無意識からの叫びを代弁し遂にはそれに呑まれ発狂したニーチェとルー・サロメ，パウル・レーを描いた作品。全てはカヴァーニの言う“精神の両性有具”という言葉に帰る。サロメを演じたドミニク・サンダの個性もよく出ている)。

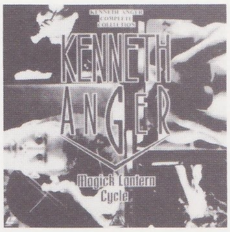
ズムが集合的に発動するのかは謎だ。なぜなら無意識の律動というものは、自我の意思に従わないものだからである。が、しかし間違いなく起因は個体内なのである。とすれば、更にここに自我ではとらえられない、無意識の領域に律動を起こさせる超越的な力を想定せざる得ないのである。なぜなら、現実の結果としてムーヴメントが起こることは事実なのだから。そして、自身の意思でも、両親が意図した人格（心）で生まれて来るのでもないにもかかわらず、自分という心的存在は、結果としてここに有って、そして、また、自身の意思でもないにかかわらず、睡眠中、夢を見て、しかも夢は必ずしも意思どおりに展開しない。全ては、この普遍的な事実から出発していったに違いなく、理知的な作り事でも何でもない。プログレッシヴ・ロックを技術巧みにコピーをする以上に、手元の事実の謎に思いをめぐらす方が、時としてプログレッシヴだ、ということなのかもしれない。そうした際の誠実さが現在のプログレッシヴ・ロックに欠けているものだとも言えると思う。



ジョン・ウィリアム・ウォーターハウス「セイント・セシリア」(1895年)。妖精とは，もちろん未確認の生物ではなく深層の心情が投影され擬人化されたものだとされている。芸術とは，まさしく精神の具象であり，各々の魔術，宗教，身近な創作，表現に至るまで，精神世界の部分部分を各々に言い当てていて，向う所は存在観念を解き明かすことになるだろう方向に作用していることに気づく。科学にしたところで，その方向性であることには変わりない。全ては探究なのであって，本来，そこに進歩的か保守的かを問うこと自体，観点がずれている。それは，「分らないから」「関心がないから」という理由で存在観念の存在を否定することに似ている。そうしたことを口にするその人は存在して自ら実証しているにもかかわらず。



●アレイスター・クロウリー著
「法の書」



●ケネス・アンガー作品集
「Magick Lantern Cycle」
（レーザー・ディスク）



●GRAHAM BOND with HOLY MAGICK
「We Put Our Magick On You」('71)

19世紀後半～今世紀前半のイギリスのオカルティスト，アレイスター・クロウリーの影響は，カウンター・カルチュアの深層部に入り込んでいる。視覚上の極致（半端ではない）はアメリカのケネス・アンガーの映像世界に，英ロック史ではクロウリーが自らの魔術を区別する為に名づけたKのMagickをグループ名に引用したグラハム・ボンド。英ロックの元祖であり，黒魔術の実践者だった人物。彼がこのK名義で発表した「Holy Magick」のミサ内容，「We Put Our Magick On You」の表ジャケットの図，そして'74年5月，ロンドンの地下鉄ファインズバリー・パーク駅で投身自殺したことは余りにも有名。

’60年代の後半に誕生したイギリスのプログレッシヴ・ロック・シーン。形態的にはブルーズが基本だったロック・ミュージックに、クラシック、ジャズ、現代音楽を始め、あらゆる芸術との融合を繰りかえし、新しい音楽のスタイルが形成されていった。又、思想的にも、それまでの肉体や直接的に感情に支配されてきたロックに、形而上的なものが抽入され、観念的な傾向を増していった。

こうしてあらゆるジャンルの芸術と結びついたプログレッシヴ・ロックは多様化し、一言でいい表すことなど不可能な程に様々な変容体を生みだすことになった。

以来、プログレッシヴ・ロックとは何かを多くの人々が論じてきた。

ブリティッシュ・シーンをピック・アップした本書でさえ、この情報量であるから、ましてや世界中に波及したプログレッシヴ・ロック・シーンの正体を掴むことは容易なことではない。

僕達はこの10年間、プログレッシヴ・ロックとは何かを知る為にMARQUEE誌を刊行させてきた。今やプログレッシヴ・ロックは、例えそう呼ばれていなくとも、あらゆるポップ・ミュージック界の中で増殖し、融合／分離を繰りかえし、ありとあらゆるものに侵食を始めてしまった。変拍子などというものは、ニュースの音楽でさえ聴くことができるし、歌謡曲のアレンジの中にさえ、プログレッシヴ・ロックのイディオムは生きている。残念ながら、それらは単に音楽のメカニズム上のことでしかないが。プログレッシヴ・ロックの心を持った音楽は、実は今でもアンダーグラウンドでしかない。何故だろう？

プログレッシヴ・ロックの意味を知ることは、それを愛する者にとって、自己を知ることでもある。自分がこれまで聴いてきた、あるいはこれから聴くであろう膨大な時間の理由を知ることである。

いわずと知れたことだが、ブリティッシュ・プログレッシヴ・ロック・シーンの盛期は’70年代だ。当時はロックを聴くということはプログレッシヴ・ロックを聴くという程シーンは高揚していた。当時，YES、PINK FLOYD、EL&P、KING CRIMSON 等を聴いていた若者も、今は子供の１人や２人はいる中年のおじさんになっているかもしれない。又、あの頃から、僕達のようにプログレッシヴ・ロックを聴き続けている人もいるだろう。

僕はこの本を、できるだけ多くの人達に読んでもらいたい。何故なら、自分達が聴いていた／あるいは聴き続けているプログレッシヴ・ロックとは何か？という答えをあなたなりに見つけてほしいから。そして、それはプログレッシヴ・ロックを知る者にとって、自分を知るということと同義だから。

もちろん、答を見つけることは非常にむずかしい。けれど、少なくとも知ろうとすることがプログレッシヴ・ロックの旅だ。

幸い、CD時代に移行したのを契機に、かなりの量の作品が再発され続けている。あなたさえその気になれば、この本に載っているアーティストの作品の多くは、それ程の困難もなく入手することができるはずだ。

少しでも多くの人々がこの本を読んでくれることを祈りながら、僕達はこれを自信と誇りを持って創った。どうか手にとって見てほしい。　　　　MAY／1990　山崎　尚洋



AARDVARK	SAME	DERAM NOVA SDN 17	'69
ABSOLUTELY ELSWHERE	IN SEARCH OF ANCIENT GODS	WB K56192	'76
ACADEMY	POP LORE ACCORDING TO ACADEMY	MORGAN BLEU TOWN BT 5001	'69
ACCOLADE	SAME	COLUMBIA SCX 6405	'70
	2	R.ZONOPHONE SLRZ1024	'71
AFFINITY	SAME	VERTIGO 6360 004	'70
AFTER THE FIRE	SIGNS OF CHANGE	RAPID RR 001	'78
	LASER LOVE	CBS83795	'79
	80F	EPIC 84545	'80
	BATTERIES NOT INCLUDED	CBS 85566	'82
BURT ALCANTARA	ZYGOAT	POLYDOR2383 270	'74
	FURTHER THOUGHTS ON THE CLASSICS	POLYDOR2483 335	'77
	IN A COVENT GARDEN	POLYDOR2383 210	
ALCO	THREADS OF LIFE	ALCO ALC 530	'72
ALL ABOUT EVE	SAME	MERCURY MERH119	'88
	SCARLET AND OTHER STORIES	MERCURY 838 965-1	"89
JOHNNY ALMOND MUSIC MACHINE	PATENT PENDING	DERAM SML 1043	'69
	HOLLYWOOD BLUES	DERAM SML 1057	'70
AMALGAM	PRAYER FOR PEACE	TRANSATLANTIC TRA196	'69
	PLAY BLACKWELL & HIGGINS	A RECORD A002	'73
	INNOVATION	TANGENT TGS121	'74
	MAD	SYNTOHN VR 200 20	'76
	ANOTHER TIME	VINYL VS100	'76
	SAMANNA	VINYL VS100	'77
	DEEP	VINYL VS108	'77
	CLOSER TO YOU	OGUN OG528	'78
	OVER THE RAINBOW	ARC RECORD ARC01	'79
	WIPE OUT	IMPITUS IMP47901	'79
AMAZING BLONDEL	SAME	BELL SBLL 131	'70
	EVENSONG	ISLAND ILPS 9136	'70
	FANTASIA LINDUM	ISLAND ILPS9156	'71
	ENGLAND	ISLAND ILPS 9205	'72
	BLONDEL	ISLAND ILPS9257	'73
	MULGRAVE STREET	DJM DJLPS 443	'74
	INSPIRATION	DJM DJLPS 446	'75
	BAD DREAMS	DJM DJLPS 472	'76
	LIVE IN TOKYO	DJM 48089	'77
AMM	AMM MUSIC	ELEKTRA EUK 256	'66
	LIVE ELCTRONIC MUSIC	MAINSTREAM MS5002	'68
	AMM AT THE ROUNDHOUSE	INCUS EP1	'72
	TO HEAR AND BACK AGAIN	MATCHLESS R.MR3	'74
	IT HAD BEEN AN ORDINARY ENOUGH DAY IN PUEBLO,COLORADA	ECM/JAPO 60031	'79
	THE CRYPT-12TH JUNE 1968	MATCHLESS R.MR5	'81
	GENERATIVE THEMES	MATCHLESS R.MR6	'83
JON ANDERSON	OLIAS OF SUNHILLOW	ATLANTIC K50261	'76
	SONGS OF SEVEN	ATLANTIC K50756	'80
	ANIMATION	ATLANTIC	'82
	10		
	BLUE SKIES AGAIN		
	SHIPS	ELEKTRA960469-1(US)	'85
	THREE SHIPS	ELEKTRA9-60469-1	'87
CATHERINE ANDREWS	FRUITS	CAT TRACKS PURR LP2	'82
ANDWELLA	WORLD'S END	REFLECTION REF.L6	'70
	PEOPLE'S PEOPLE	REFLECTION REF.L10	'71
ANDWELLAS DREAM	LOVE & POETRY	CBS S-63673	'69
AQUILA	SAME	RCA SF 8126	'70
ARC	...AT THIS	DECCA SKL-R5077	'71
ARCADIUM	BREATHE AWHILE	MIDDLE EARTH MDLS302	'69
NEIL ARDLEY	GREEK VARIATIONS	COLOMBIA SCX 6414	'70
	A SYMPHONY OF AMARANTHS	R.ZONOPHORE SLRZ1028	'72
	KALEIDOSCOPE OF RAINBOWS	GULL GULP 1018	'76
	HARMONY OF SPHERES	DECCA TXSR 133	'79
ARGENT	SAME	CBS 63781	'70
	RINGS OF HANDS	EPIC EPC64190	'71
	ALL TOGATHER NOW	CBS 64962	'72
	IN DEEP	EPIC EPC 65475	'73
	NEXUS	EPIC 65924	'74
	ENCORE	EPIC EPC 88063	'74
	CIRCUS	EPIC EPC 80691	'75
	COUNTERPOINT	RCA RS 1020	'75
ARMAGEDDON	SAME	A&M AMLH 64513	'75
ART BEARS	HOPES & FEARS	RECOMMENDED RE 2188	'78
	WINTER SONGS	RECOMMENDED RE 0618	'79
	THE WORLD AS IT IS TODAY	RECOMMENDED RE 6622	'81
ARZACHEL	SAME	EVOLUTION Z1003	'69
ASGARD	IN THE REALM OF ASGARD	THRESHOLD THS 6	'72
ALUN ASHWORTH-JONES	AL JONES	PARLOPHONE PMC7081	'69
ASIA	SAME	GEFFEN GEF85577	'82
	ALFA	GEFFEN GEF25508	'83
	ASTRA	GEFFEN GEF26413	'85
VIRGINIA ASTLEY	A BOA A QU (10")	WHY-FI	'82
	LOVE'S A LONELY PLACE TO BE (12")	WHY-FI WFIT 001	'83
	FROM GARDENS WHERE WE FEEL SECURE	HAPPY VALLEY ROUGH 58	'83
	PROMISE NOTHING	(Bel)CREPUSCULE WHY-FI TWI 194	'83
	MELT THE SNOW (12")	RRT 158	'85
	TENDER (12")		'85
	DARKNESS HAS REACHED ITS END (12")	WEA	'85
	HOPE IN A DARKEND HEART	WEA YZ 107	'86
ATLANTIC BRIDGE	SAME	DAWN DNLS 3014	'71
ATOMIC ROOSTER	SAME	B&C CAS 1010	'70
	DEATH WALKS BEHIND YOU	B&C CAS 1026	'70
	IN HEARING OF	PEGASUS PEG 1	'71
	MADE IN ENGLAND	DAWN DNLS 3038	'72
	NICE'N'GREASY	DAWN DNLS 3049	'73
	SAME	EMI EMC 3341	'80
	HEADLINE NEWS	TOW LP 4	'83
	LITTLE ROOSTER	HABLABEL HBL20105	'89
AUDIENCE	SAME	POLYDOR 583 065	'69
	FRIEND'S FRIEND'S FRIEND	CHARISMA CAS 1012	'70
	HOUSE ON THE HILL	CAS 1032	'71
	LUNCH	CAS 1054	'72

BRIAN AUGER TRINITY	OPEN	MARMALADE607 002	'67
	DEFINITELY WHAT	MARMALADE607 003	'68
	STREETNOISE	MARMALADE608 005/6	'68
	BEFOUR	RCA SF8101	'70
AUSTIN,BABBINGTON, GALLIVAN	HOME FROM HOME	OGUN OG522	'79
AUTOMATIC FINE TUNING	A.F.T	CHARISMA CAS 1122	'76
KAVIN AYERS	JOY OF A TOY	HARVEST SHVL 763	'70
	SHOOTING AT THE MOON	SHSP4005	'71
	WHATEVERSHEBRINGSWESING	SHVL 800	'72
	BANANAMOUR	SHVL 807	'73
	THE CONFESSIONS OF Dr DREAM AND OTHER STORIES	ISLAND ILPS 9263	'74
	SWEET DECEIVER	ILPS 9322	'75
	ODD DITTIES	HARVEST SHSM 2055	'76
	YES WE HAVE NO MANANAS	HARVEST SHSP4057	'76
	RAINBOW TAKEAWAY	HARVEST SHSP4085	'78
	THAT'S WHAT YOU GET BABE	HARVEST SHSP 4016	'80
	THE KEVIN AYERS COLLECTION	CHARLY CM117	'83
	DIAMOND JACK & THE QUEEN OF PAIN	CHARLY CR 30224	'83
	DEJA...VU *spanish edition	BLAU BLAU A 014	'84
	AS CLOSE AS YOU THINK	ILLUMINATIVE AMA25	'86
	FALLING UP	VIRGIN V2510	'88
	THE BEST OF KEVIN AYERS	HARVEST EM 2032	'89
BABE RUTH	FIRST BASE	HARVEST SHSP 4022	'72
	AMAR CABALLERO	HARVEST SHVL 812	'74
	SAME	HARVEST SHSP4038	'75
	STEALIN HOME	CAPITOL 11451	'75
	KIDS STUFF	CAPITOL 23739	'76
BACK DOOR	SAME	BLAKEY BLP5989	'72
	EIGHTH STREET NITES	WB K 46265	'73
	ANOTHER FINE MESS	WB K 56098	'75
	ACTIVATE	WB K 56243	'76
MIRIAM BACKHOUSE	GYPSY WITHOUT A ROAD	MOTHER EARTH MUM1203	'77
BADGER	ONE LIVE BADGER	ATLANTIC K 40473	'73
	WHITE LADY	EPIC 80009	'74
BAKERLOO	SAME	HARVEST SHVL 762	'69
PETER BANKS	SAME	SOVEREIGN SVNA7256	'73
TONY BANKS	A CURIOUS FEELING	CAHRISMA CAS1148	'79
	THE WICKED LADY		
	THE FUGITIVE		
BARCLAY JAMES HARVEST	SAME	HARVEST SHVL 770	'70
	ONCE AGAIN	HARVEST SHVL 788	'71
	OTHER SHORT STORIES	HARVEST SHVL 794	'71
	EARLY MORNING ONWARDS	STARLINE SRS 5126	'72
	BABY JAMES HARVEST	HARVEST SHSP 4023	'72
	EVERYONE IS EVRYBODY ELSE	POLYDOR 2383 286	'74
	EVERYONE IS EVERYBODY ELSE	POLYDOR 2383 386	'74
	LIVE	POLYDOR 2683 052	'74
	TIME HONOURED GHOSTS	POLYDOR 2383 361	'75
	OCTOBERON	POLYDOR 2442 144	'76
	GONE TO EARTH	POLYDOR 2442 148	'77
	LIVE TAPES	POLYDOR PODV 2001	'78
	XII	POLYDOR POLD 5006	'78
	EYES OF THE UNIVERS	POLYDOR POLD 5029	'79
	TURN OF THE TIDE	POLYDOR POLD 5040	'81
	A CONCERT FOR THE PEOPLE	POLYDOR POLD 5052	'82
	RING OF CHANGES	POLYDOR POLH 3	'83
	VICTIMS OF CIRCUMSTANCE	POLYDOR POLD 5135	'84
	FACE TO FACE	POLYDOR POLD 5209	'87
	GLASNOST	POLYDOR POLD 5219	'88
PETER BARDENS	THE ANSWER	TRANSATLANTIC TRA222	'70
	SAME	TRANSATLANTIC TRA243	'71
	HEART TO HEART	ARISTA SPART 1108	'79
	SEEN ONE EARTH		
SYD BARRET	THE MADCAP LAUGHS	HARVEST SHVL765	'70
	BARRETT	HARVEST SHSP4007	'70
	OPEL	HARVEST SHSP4126	'88
MIKE BATT	SCHIZOPHONIA	EPIC EPC82001	'77
	TAROT SUITE	EPIC 86099	'79
	WAVES	EPIC 84617	'80
	6 DAYS IN BERLIN	EPIC 85149	'81
	ZERO ZERO	EPIC 32750	'82
	THE HUNTING OF THE SNARK	ADVANTURE SNARK 1	'86
BE BOP DELUXE	AXE VICTIM	HARVEST SHVL 813	'74
	FUTURAMA	SHSP 4045	'75
	SUNBURST FINISH	SHSP 4053	'76
	MODERN MUSIC	SHSP 4058	'76
	LIVE IN THE AIR AGE	SHVL 816	'77
	DRASTIC PLASTIC	SHSP 4091	'78
THE BEATLES	PLEASE PLEASE ME	PARLOPHONE PMC1202	'63
	WITH THE BEATLES	PARLOPHONE PMC1206	'63
	A HARD DAYS NIGHT	PARLOPHONE PMC1230	'64
	BEATLES FOR SALE	PARLOPHONE PMC1240	'64
	HELP	PARLOPHONE PMC1255	'65
	RUBBER SOUL	PARLOPHONE PMC1267	'66
	REVOLVER	PARLOPHONE PCS7009	'66
	SGT.PEPPER'S LONELY HEARTS...	PARLOPHONE PCS7027	'67
	MIGICAL MYSTERY TOUR(EPs)	PARLOPHONE SMMT 1	'67
	SAME	PARLOPHONE PCS7067/8	'68
	YELLOW SUBMARINE	APPLE PCS7070	'69
	ABBEY ROAD	APPLE PCS 7088	'69
	LET IT BE	APPLE PCS 7096	'70
BEAU	SAME	DANDELION 63751	'69
	CREATION	DENDELION DAN8006	'71
BECKETT	SAME	RAFT RA48502	'74
DAVID BEDFORD	NURSES SONG WITH ELEPHANTS	DANDELION2310 165	'72
	STARS END	VIRGIN V2020	'74
	ORCHESTRAL TUBULAR BELLS	VIRGIN V 2026	'75
	RIME OF THE ANCIENT MARINER	VIRGIN V2038	'75
	THE ODYSSEY	VIRGIN V2070	'76
	INSTRUCTIONS FOR ANGELS	• VIRGIN V2090	'77
	STAR CLUSTERS,NEBLAE AND PLACES IN DEVON/THE SONG OF THE WHITE HORSE	OLDFIELD RECORDS OM1	'83
	RIGAL 9	CHARISMA RIGAL 9	'85
BEGGARS OPERA	ACT ONE	VERTIGO 6360 018	'70
	WATERS OF CHANGE	VERTIGO 6360 054	'71
	PATHFINDER	VERTIGO 6360 073	'72
	GET YOUR DOG OFF ME	VERTIGO 6360 090	'73
	SAGITTARY	(Ger)JUPITER 88907	
	BEGGARS CAN'T BE CHOOSERS	(Ger)JUPITER 27702	
	LIFELINE	(Ger)VERTIGO 6360 060	

BEN	SAME	VERTIGO 6360 052	'71
BIG SLEEP	BLUEBELL WOOD	PEGASUS PEG4	'71
BLACK WIDOW	SACRIFICE	CBS 63948	'70
	SAME	CBS 64133	'70
	III	CBS 64562	'71
PETER BLEGVAD	THE NAKED SHAKESPERE	VIRGIN V 2284	'83
	KNIGHTS LIKE THIS	VERGIN V 2352	'85
	DOWNTIME	RECOMMENDED ReR34	'88
BLODWIN PIG	AHEAD RINGS OUT	ISLAND ILPS 9101	'69
(BLODWYN PIG)	GETTING TO THIS	CHRYSALIS ILPS 9122	'70
BLOSSOM TOES	WE ARE EVER SO CLEAN	MARMALADE 607001	'67
	IF ONLY FOR A MOMENT	MARMALADE 608010	'69
BLUE JAYS	THE BLUE JAYS	THRESHOLD THS 1	'75
BLUE PHANTOM	DISTORTIONS	KALEIDOSCOPE KAL101	'72
BOBAK JONS MALONE	MOTHERLIGHT	MORGAN BLUE TOWN BT 5003	'69
BODY	THE BODY ALBUM	RECESSION RR O1	'81
MARC BOLAN & T.REX ----TYRANNOSAURUS REX			
GRAHAM BOND	THE SOUND OF 65	COLOMBIA 33SX 1711	'65
	THERE'S A BOND A BETWEEN US	COLUMBIA 33SX 1750	'66
	LOVE IS THE LAW	(US)PULSAR AR 10604	'68
	MIGHTY GRAHAM BOND	(US)PULSAR AR 10606	'68
	SOLID BOND	WB K 3001	'70
	HOLY MAGICK	VERTIGO 6360 021	'71
	WE PUT OUR MAGIC ON YOU	VERTIGO 6360 042	'71
	TWO HEADS ARE BETTER THAN ONE	CHAPTER ONE CHSR813	'72
BONZO DOG DOO DAH BAND	GORILLA	LIBERTY LBS83056	'67
	THE DOUGHNUT IN GRANNY'S GREENHOUSE	LIBERTY LBS 83158	'68
	TADPOLES	LIBERTY LBS 83257	'69
	KEYNSHAM	LIBERTY LBS 83290	'69
	THE BEST OF THE BONZOS	LIBERTY LBS 83332	'70
	LETS MAKE UP & BE FRIENDLY	UA UAS 29288	'72
	THE HISTORY OF THE BONZOS	UA UAD 60071/2	'74
DAVID BOWIE	SAME(LOVE YOU TILL TUES)	DERAM SML 1007	'67
	SAME	PHILIPS SBL 912	'69
	MAN WHO SOLD THE WORLD	MERCURY6338 041	'71
	HUNKY DORY	RCA SF 8244	'71
	RISE & FALL OF ZIGGY STARDUST	RCA SF 8287	'73
	ALADDIN SANE	RCA RS 1001	'73
	PIN UPS	RCA RS 1003	'73
	IMAGES 66 67	LONDON DPA3017/8	'73
	DIAMOND DOGS	RCA APLP 0576	'74
	LIVE	RCA APLI 0771	'74
	YOUNG AMERICANS	RCA RS 1006	'75
	STATION TO STATION	RCA APLI1327	'76
	CHANGESONEBOWIE	RCA RS 1055	'76
	LOW	RCA PL 12030	'77
	HEROES	RCA PB 1121	'77
	PETER & THE WOLF		'78
	STAGE	RCA PL 02913	'78
	LODGER	RCA BOW LP1	'79
	SCARY MONSTERS	RCA BOW LP2	'80
	CHANGES TO BOWIE	RCA BOW LP3	'81
	BOWIE RARE	RCA PL 45406	'82
	LET'S DANCE	EMI AML 3029(US)	'83
	SOUND + VISION	RYKO RCD90120/21/22	'89
GARY BOYLE	THE DANCER	GULL GULP 1020	'77
	ELECTRIC GLIDE	GULL GULP 1028	'78
	STEP OUT	INTERCORD 145623(Ger)	80
DON BRADSHAM-LEATHER	DISTANCE BETWEEN US	DISTANCE DIST 100 DIST 76,77	'72
BRAINCHILD	HEALING OF THE LUNITIC OWL	A&M AMLS 979	'70
BRAM STOKER	HEAVY ROCK SPECTACULAR	WINDMILL WMD117	'72
BRAND X	UNORTHODOX BEHAVIOUR	CHARISMA CAS1117	'76
	MOROCCAN ROLL	CHARISMA CAS1126	'77
	LIVE STOCK	CHARISMA CLASS 5	'77
	MASQUES	CHARISMA CAS 1138	'78
	PRODUCT	CHARISMA CAS 1147	'79
	DO THEY HURT	CHARISMA CAS 1151	'80
	IS THERE ANYTHING ABOUT	CBS 85967	'82
BREAD,LOVE AND DREAMS	SAME	DECCA SKL 5008	'69
	THE STRANGE TALE OF CAPTAIN SHANNON AND THE HUNCHBACK FROM GIGHA	DECCA SKL 5048	'70
	AMARYLLIS	DECCA SKL 5081	'71
PAUL BRETT	SAME	BRADLEY BRADL1001	'73
	CLOCKS	BRADLEY BRADL1004	'74
	PHOENIX FUTURE	PHOENIX FUTURE	'75
	EARTHBIRTH	RCA PL 25080	'77
	INTERLIFE	RCA PL 25149	'78
	ECLIPSE	RCA PL 25219	'79
	GUITAR TREX	RCA PL 25283	'80
MARC BRIERLEY	WELCOME TO CITADEL	CBS 63478	'68
	HELLO	CBS	'71
ANNE BRIGGS	SAME	TOPIC 12TS 207	'71
	THE TIME HAS COME	CBS 64612	'72
THE CRAZY WORLD OF ARTHUR BROWN	SAME	TRACK 613 005	'68
	STRANGELAND		
PETE BROWN AND HIS BATTERED ORNAMENTS	A MEAL YOU CAN SHAKE HANDS WITH IN THE DARK	HARVEST SHVL 752	'69
	MANTLE PIECE	HARVEST SHVL 758	'69
PETE BROWN & PIBLOKTO!	ART SCHOOL DANCE GOES ON FOREVER	HARVEST SHVL 768	'70
	THOUNSANDS ON A RAFT	HARVEST SHVL 782	'70
DUNCAN BROWNE	GIVE ME TAKE YOU	IMMEDIATE IMSP018	'68
	SAME	RAK SRKA 6754	'73
	WILD PLACES	LOGO 1007	'78
	STREETS OF FIRE	LOGO 1016	'79
	TRAVELLING MAN	TOWERBELL TOWLP 12	'85
JACK BRUCE	SONGS FOR A TAYLOR	POLYDOR583 058	'69
	THINGS WE LIKE	POLYDOR 2343 033	'70
	HARMONY ROW	POLYDOR 2310 077	'71
	OUT OF THE STORM	POLYDOR 2394 143	'74
	HOWS TRICKS	RSO 2394 180	'77
	I'VE ALWAYS WANTED TO DO THIS	EPIC 84672	'80
	BRUCE LORDAN TROWER BLT	CHRYSALIS 1324	'81
	TRUCE	CHRYSALIS 1352	'82
BRUFORD	ONE OF A KIND	POLYDOR 2302 091	'79
	BRUFORD TAPES	BRUBOOT 28	'80
	GRADUALLY GOING TORNADO	EGLP 104	'80
BILL BRUFORD	FEELS GOOD TO ME	POLYDOR 2310 579	'78
GAVIN BRYARS	THE SINKING OF TITANIC	OBSCURE OBS 1	
	ENSEMBLE PIECES	OBS 2	
	MACHINE MUSIC	OBS 8	
	IRMA	OBS 9	
	HOMMAGE	(Bel)CREPUSCULE TWI 027	'81
	THREE VIENNESE DANCERS	(Ger)ECM 1323	'86
HAROLD BUDD	SAME		'70
	THE PAVILION OF DREAMS	OBSCURE OBS 10	'78
	THE PLATEAUX OF MIRROR	POLYDOR EG AMB 002	'80
	THE SERPENT(IN QUICKSILVER)	CANTIL 181(12")	'81
	ABANDONED CITIES	MADRIGAL MAD 3015	'84
	THE PEAL	POLYDOR EGED 37	'84
	LOVELY THUNDER	EG	'86
	THE WHITE ARCADES	OPAL 925766-1	'88
VASHTI BUNYAN	JUST ANOTHER DIAMOND DAY	PHILIPS 6308 019	'70
KATE BUSH	THE KICK INSIDE	EMI EMC 3223	'78
	LIONHEART	EMI EMA 787	'78
	NEVER FOR EVER	EMI EMA 794	'80
	THE DREAMING	EMI EMC 3419	'82
	HOUNDS OF LOVE	EMI KAB 1	'85
	THE WHOLE STORY	EMI KBTV 1	'86
	SENSUAL WORLD	EMI EMD 1010	'89
BYZANTIUM	LIVE & STUDIO	PRIVATE PRESS	'72
	SAME	A&M AMLS 68104	'72
	SEASONS CHANGING	A&M AMLH 68163	'73
JOHN CALE	VINTAGE VIOLENCE	CBS 64256	'70
	CHURCH OF ANTHRAX	CBS 64259	'71
	ACADEMY OF PERIL	REPRISE K 44212	'72
	PARIS 1919	REPRISE K 44239	'73
	FEAR	ISLAND ILPS 9301	'74
	SLOW DAZZLE	ISLAND ILPS 9317	'75
	HELEN OF TROY	ISLAND ILPS 9350	'75
	GUTS	ISLAND ILPS 9459	'77
	SABOTAGE LIVE	SPY 004(US)	'79
	HORI SOIT	A&M 64849	'81
	WORDS FOR THE DYING	OPAL 9.26024-2	'89
CAMBERWELL NOW	MERIDIAN	DUPLICATE 0011	'82
	THE GHOST TRADE	REC REC MUSIC 10	'86
CAMEL	SAME	MCA MAPS 6477	'73
	MIRAGE	DERAM SML 1107	'74
	SNOW GOOSE	DERAM SKL-R 5207	'75
	MOONMADNESS	DERAM TXS-R 115	'76
	RAINDANCE	GAMA TXS-R 124	'77
	A LIVE RECORD	DECCA DBC-R 7/8	'78
	BREATHLESS	DECCA TXS-R 132	'78
	I CAN SEE YOUR HOUSE FROM HERE	DECCA TXS-R 137	'79
	NUDE	DECCA SKL 5323	'81
	THE SINGLE FACTOR	DECCA SKL 5328	'83
	STATIONALY TRAVELLER	DECCA SKL 5334	'84
CAPABILITY BROWN	FROM SCRETCH	CHARISMA CAS 1056	'72
	VOICE	CHARISMA CAS 1068	'73
CARAVAN	SAME	VERVE VLP 6011	'68
	IF I COULD DO IT ALL OVER AGAIN, I'D DO IT ALL OVER YOU	DECCA SKL-R 5052	'70
	IN THE LAND OF THE GREY AND PINK	DERAM SDL-R 1	'71
	WATERLOO LILY	DERAM SDL-R 8	'72
	FOR GIRLS WHO GROW PLUMP IN NIGHT	DERAM SKL-R 12	'73
	CARAVAN & THE NEW SYMPHONIA	DECCA SKL-R 1110	'74
	CUNNING STUNTS	DECCA SKL-R 5210	'75
	CANTERBURY TALES	DECCA DKL-R81/82	'76
	BLIND DOG AT ST.DUNSTANS	BTM 1007	'76
	BETTER BY FAR	ARISTA SPARTY 1008	'77
	THE ALBUM	KINGDOM KVL 9003	'80
	THE BEST OF CARAVAN LIVE	KINGDOM 426002(Fr)	'80
	BACK TO FRONT	KINGDOM 5011	'82
CARMEN	FANDANGOS IN SPACE	REGAL ZONOPHONE SRZA 8518	'73
	DANCING ON A COLD WIND	REGAL ZONOPHONE SLRZ 1040	'75
	THE GYPSIES	(US)CAPITOL	'76
CASTANARC	JOURNEY TO THE EAST	PENINSULA RECORDS PENCIL 10	'84
CATAPILLA	SAME	VERTIGO 6360 029	'71
	CHANGES	VERTIGO 6360 074	'72
CENTIPEDE	SEPTOBER ENERGY	NEON NE 9	'71
THE CHITINOUS ENSEMBLE	CHITINOUS	DERAM SML 1093	'73
KEITH CHRISTMAS	STIMULUS	RCA SF 8059	'69
	FABLE OF THE WINGS	B&C CAS 1015	'70
	PIGMY	B&C CAS 1041	'71
	BRIGHTER DAY	MANTICORE K53503	'74
	STORIES FROM A HUMAN ZOO	ATLANTIC K 13515	'76
	SAME	POLYDOR 244 511	
CIRCUS	SAME	TRANSATLANTIC TRA 207	'69
CIRKUS	ONE	RCB 1	'71
CLANNAD	SAME	(Ir)PHILIPS 6392 013	'73
	2	(Ir)GEAL LINN 041	'74
	DULAMAN	(Ir)GEAL LINN 058	'76
	CLANNAD IN CONCERT	(Ir)OGHAM 5001	'78
	CRANN ULL	(Ir)TARA 3007	'80
	FUAIM	(Ir)TARA 3008	'82
	MAGICAL RING	(Ir)RCA PL 25462	'84
	LEGEND	(Ir)RCA NL 71703	'84
	MACALLA	(Ir)RCA PL 70894	'85
	SIRIUS	(Ir)TARA 3021	'87
	ATLANTIC REALM	REB 727	
	RING OF GOLD		
	PASTPRESENT	BMG PL 74074	'89
CLASSICAL HEADS	SAME	CHARISMA CAS 1008	'70
CLEAR BLUE SKY	PLAY IT LOUD	VERTIGO 6360 013	'70
C.O.B.(CLIVES OWN BAND)	THE SPIRIT OF LOVE	CBS 69010	'71
	MOYSHE McSTIFF AND THE TARTAN LANCERS OF THE SACRED HEART	POLYDOR 2383 161	'72
CLOUDS	SCRAPBOOK	ISLAND ILPS 9100	'69
	WATERCOLOUR DAYS	CHRYSALIS ILPS 9151	'71
JEFF CLYNE,IAN CARR, TREVOR WATTS,J.STEVENS	SPRINGBOARD	POLYDOR 545 007	'69

CMU	OPEN SPACES	TRANSATLANTIC TRA237	'71
	SPACE CABARET	TRANSATLANTIC TRA259	'72
Cockney Rebel---Steve Harley & Cockney Rebel			
TONY COE	SWINGIN' TILL THE GIRLS COME HOME	PHILIPS B10784L	'62
	TONY'S BASEMENT	COLUMBIA SCX6170	'67
	POP MAKES PROGRESS	CHAPTER ONE CMS804	
	WITH THE BRAIN LEMON TRIO	DOBELLS 77SEU12/41	'71
	ZEITGEISTE	EMI EMC 3207	'77
	COE-EXISTENCE	LEELAMBERT LAM 100	'78
	TIME	INCUS 34	'79
	TOURNEE DU CHAT	NATO 19	'82
	NUTTY ON WILLISAU (Coe,Laurence,Oxley)	HAT ART 2004	'83
	LE CHAT SE RETOURNE	NATO 257	'84
GRAHAM COLLIER MUSIC	DEEP DARK BLUE CENTRE	DERAM DML1005	'64
	DOWN ANOTHER ROAD	FONTANA SFJL 922	'69
	SONGS FOR MY FATHER	FONTANA 6309 006	'70
	MOSAICS	PHILIPS 6308 051	'71
	PORTRAITS	SAYDISC SDL 244	'73
	MIDNIGHT BLUE	MOSAIC GCM 751	'75
	DARIUS	MOSAIC GCM 741	
GRAHAM COLLIER MUSIC	JAZZ ILLUSTRATIONS	CAMBRIDGE UNIVERSITY 521 20564-6	'75
	JAZZ LECTURE CONCERT	CAMBRIDGE UNIVERSITY 051 20563-8	'75
	JAZZ RYTHM SECTION	CAMBRIDGE UNIVERSITY 0521 20560-3	
	NEW CONDITIONS	MOSAIC GCM 761	'76
	SYMPHONY OF SCORPIONS	MOSAIC GCM 773	'77
	DAY OF THE DEAD	MOSAIC GCMD 783.784	'78
SHIRLEY COLLINS	FALSE TRUE LOVERS	(US)FOLKWAYS FG 3564	'59
	FOLK ROOTS	DECCA 4652	'64
	THE SWEET PRIMEROSES	TOPIC 12TS 170	'67
	POWER OF THE TRUE LOVE KNOT	POLYDOR 583 025	'68
	ANTHEMS IN EDEN (w.Dolly Collins)	HARVEST SHVL 754	'69
	LOVE,DEATH & THE LADY (w.Dolly Collins)	HARVEST SHVL 771	'70
	NO ROSES (w.ALBION COUNTRY BAND)	PEGASUS PEG 7	'71
	ADIEU TO OLD ENGLAND	TOPIC 12TS 238	'74
	A FAVOURITE GARDEN	DECCA SML 1117	'75
	FOR AS MANY AS WILL (w.Dolly Collins)	TOPIC 12TS 380	'78
COLOSSEUM	THOSE WHO ARE ABOUT TO DIE	FONTANA STLS 5510	'69
	VALENTYNE SUITE	VERTIGO VO 1	'69
	DAUGHTER OF TIME	VERTIGO 6360 017	'70
	LIVE	BRONZE ICD 1	'71
	COLLECTORS COLOSSEUM	BRONZE ILPS 9173	'71
COLOSSEUM II	STRANGE NEW FLESH	BRONZE ILPS 9356	'76
	ELECTRIC SAVAGE	MCA MCF 2800	'77
	WARDANCE	MCA MCF 2817	'77
COMPANY	1	INCUS 21	'76
	2	INCUS 23	'76
	3	INCUS 25	'76
	4	INCUS 26	'77
	5	INCUS 28	'77
	6	INCUS 29	'77
	7	INCUS 30	'77
	FABLES	INCUS 36	'77
	FICTIONS	INCUS 38	'77
	COMPANY 82 EPIPHANY	INCUS 47/48	'82
COMUS	FIRST UTTERANCE	DAWN DNLS 3019	'71
	TO KEEP FROM CRYING	VIRGIN V 2018	'74
CONTINUUM	SAME	RCA SF 8157	'71
	AUTUMN GRASS	RCA SF 8196	'71
LINDSAY COOPER	RAGS	ARC 1	'80
	THE GOLD DIGGERS	SYNC PULSE 0617	'83
	LIVE AT THE BASTILLE	SYNC PULSE 1789	'84
	MUSIC FOR OTHER OCCASIONS	NML 8603	'86
MIKE COOPER	INVERTED WORLD	MATCH BOX SDM 59	'68
	OH REALY	PYE NSPL 18281	'69
	DO I KNOW YOU	DAWN DNLS 3005	'70
	TROUT STEEL	DAWN DNLS 3011	'70
	PLACES I KNOW	DAWN DNLS 3026	
	THE MACHIN GUN Co. WITH MIKE COOPER	DAWN DNLS 3031	'72
	LIFE AND DEATH IS PARADISE	FRESH AIR 6370 500	'74
	'AVE THEY STARTED YET	MATCHELESS MR 4	'80
COSMIC EYE	DREAM SEQUENCE	REGAL ZONOPHONE SLRZ 1030	'72
DAVE COUSINS	TWO WEEKS LAST SUMMER	A&M AMLS 68118	'72
	OLD SCHOOL SONGS	OLD SCHOOL SLURP 1	'79
LOL COXHILL	EAR OF THE BEHOLDER	DANDELION 69001	'71
	TOVERBAL SWEET	MUSHROOM 150MR 23	'72
	COXHILL MILLER	CAROLINE C 1503	'73
	STORY SO FAR...OH REALLY	CAROLINE C 1507	'74
	WELFARE STATE	CAROLINE C 1514	'75
	FLEAS IN THE CUSTARD	CAROLINE C 1515	'75
	DIVERSE	OGUN OG 510	'76
	THE JOY OF PARANOIA	OGUN OG 525	'78
	MOOT	ICTUS 0008	'78
	LID	ICTUS 0011	'78
	DIGSWELL DUETS	RANDOM RADAR RRR005	'79
	JOHNNY RONDO DUO+MIKE COOPER	FMP SIJ 29	'80
	SLOW MUSIC(&MORGAN FISHER)	PIPE 1	'80
	CHANTENAY 80	NATO 10	'80
	DUNOIS SOLOS	NATO 95	'81
	FRENCH GIGS	AAA A02	'82
	INSTANT REPLY	NATO 25/32	'82
	LOL COXILL&TOTSUZENDANBOR (J)	FLOOR FL 2	'83
	COUSCOUS	NATO 157	'83
	FROGDANCE	IMPETUS 28407	'84
	CAFE DE LA PLACE	NOATO 1085	'88
CRAFT	SAME	SHANGHAI HAI106	'84
CREAM	FRESH CREAM	REACTION 594 001	'66
	FULL CREAM	REACTION 2447 010	'66
	DISRAELI GEARS	REACTION 594 003	'67
	WHEELS OF FIRE	POLYDOR 583 031/2	'68
	GOODBYE	POLYDOR 583 053	'69
	LIVE VOL.II	POLYDOR 2383 119	'72
CRESSIDA	SAME	VERTIGO VO 7	'70
	ASYLUM	VERTIGO 6360 025	'71
ANDREW CRONSHOW	A IS FOR ANDREW	TRANSATLANTIC XTRA 1139	'74
	EARTHED IS CLOUD VALLEY	TRAILER LER 2104	'77
	WADE IN THE FLOOD	T.ATLANTIC L TRA508	'78
	TILL THE BEASTS RETURNING	TOPIC 12TS 447	
	THE GREAT DARK WATER	WATERFRONT WF009	
DAVID CROSS	LOW FLYING AIRCRAFT (Maurer,Juhn,cross,tippett)	RED HOT R101	'87
	MEMOS FROM PURGATORY	RED HOT R103	'89
KEITH CROSS & PETER ROSS	BORED CIVILIANS	DECCA SKL 5129	'72
CURVED AIR	AIR CONDITIONING	WB WSX 3012	'70
	SECOND ALBUM	WB K 46092	'71
	PHANTASMAGORIA	WB K 46158	'72
	AIR CUT	WB K 46224	'73
	LIVE	DECCA SML 119	'75
	MIDNIGHT WIRE	BTM 1005	'75
	AIRBONE	BTM 1008	'76
CHRIS CUTLER & FRED FRITH	LIVE IN PRAGUE AND WASHINGTON	RECOMMENDED RE 1729	'83
CZAR	SAME	FONTANA 6309 009	'70
DANDO SHAFT	AN EVENING WITH...	YOUNGBLOOD SSYB 6	'70
	SAME	NEON NE 5	'71
	LANTALOON	RCA SF 8256	'72
	KINGDOM	RUBBER RUB 034	'77
DEAF SCHOOL	2ND HONEYMOON	WB K 56280	'76
	DON'T STOP THE WORLD	WB K 56364	'77
	ENGLISH BOYS	WB K 56450	'78
	2ND COMING	DEMON FIEND 135	'88
ELTON DEAN	SAME	CBS 64539	'71
	OH! FOR THE EDGE (ELTON DEAN NINESENSE)	OGUN OG 900	'76
	CRUEL BUT FAIR (Hopper,Dean,Tippett, Gallivan)	(Nor)COMPENDIUM FIDARDO 4	'76
	THEY ALL BE ON THIS OLD ROAD (ELTON DEAN QUARTET)	OGUN OG 410	'77
	THE CHEQUE IS IN THE POST (Dean,Gallivan,Wheeler)	OGUN OG 610	'77
	HAPPY DAZE (ELTON DEAN NINESENSE)	OGUN OG 910	'77
	EL SKID (EL SKID)	(Ger)VINYL VS 103	'78
	ROGUE ELEMENTS (Hopper,Dean,Gowen,Sheen)	OGUN OG 527	'78
	BOUNDARIES (ELTON DEAN QUINTET)	JAPO 60033	'80
	BOLOGNA TAPES (ELTON DEAN QUINTET)	OGUN OG 530	'85
	MERCY DASH (Hopper,Dean,Tippett, Gallivan)	CULTURE PRESS CP2001	'85
	WELCOMET(LIVE IN BRAZIL 1986) (ELTON DEAN QUINTET)	IMPETUS IMP 18612	'87
DEAR MR.TIME	GRANDFATHER	A SQUARE SQA101	'70
DEEP FEELING	SAME	DJM DJLPS 419	'71
DEEP PURPLE	SHADES OF DEEP PURPLE	(US)TETRAGRAMMATON 102	'68
	BOOK OF TALIESYN	(US)TETRAGRAMMATON 107	'69
	SAME	(US)TETRAGRAMMATON 119	'69
	CONCERTO FOR GROUP & ORCHESTRA	HARVEST SHVL 767	'70
	IN ROCK	HARVEST SHVL 777	'70
	FIREBALL	HARVEST SHVL 793	'71
	MACHINE HEAD	PURPLE TPSA 7504	'72
	MADE IN JAPAN	PURPLE TPSP 351	'72
	WHO DO WE THINK WE ARE	PURPLE TPSA 7508	'73
	BURN	PURPLE TPS 3505	'74
	STORMBRINGER	PURPLE TPS 3508	'74
	COME TASTE THE BAND	PURPLE TPSA 7515	'75
	MADE IN EUROPE	PURPLE TPSA 7517	'76
	POWER HOUSE	PURPLE TPS 3510	'77
	LAST CONERT IN JAPAN		'77
	IN CONCERT	HARVEST SHDW 412	'80
	PERFECT STRANGERS	POLYDOR POLH 16	'84
	HOUSE OF BLUE LIGHT		'87
	NOBODY'S PERFECT	POLYDOR POVD 10	'88
	SACNDINAVIAN NIGHTS	POLYDOR DPVSOP LP125	'88
DEMON FUZZ	AFREAKA!	DAWN DNLS 3013	'71
SANDY DENNY	SADY & JOHNNY	SAGA EROS 8041	'70
	NORTH STAR GRASSMAN & THE RAVENS	ISLAND ILPS 9165	'71
	SANDY	ISLAND ILPS 9207	'72
	LIKE AN OLD FASHIONED WALTS	ISLAND ILPS 9258	'73
	RENDEZVOUS	ISLAND ILPS 9433	'77
DEVIANTS	PTOOFF!	UNDERGROUND IMPRESARIOS IMPS 1	'67
	DISPOSABLE	STABLE SLP 7001	'68
	SAME	TRANSATLANTIC TRA204	'69
	HUMAN GARBAGE	PSYCHO 25	'84
DR.STRANGELY STRANGE	KIP OF THE SERENES	ISLAND ILPS9106	'69
	HEAVY PETTING	VERTIGO 6360 009	'70
DR.Z	THREE PARTS TO MY SOUL	VERTIGO 6360 048	'71
BOB DOWNES(OPEN MUSIC)	DREAM JOURNEY	PHILIPS SBL 7922	'69
	ELECTRIC CITY	VERTIGO 6360 005	'70
	DEEP DOWN HEAVY	MFP 1412	'70
	DIVERSIONS	OPENIUM BDOM 001	'74
	EPISODE AT 4 P.M.	OPENIUM BDOM 002	'74
	HELLS ANGELS	OPENIUM BDOM 003	'75
	SOLO	OPENIUM BDOM 004	
JULIA DOWNES	LET SLEEPING DOGS LIE	NAIVE NAVI 2	'83
NICK DRAKE	FIVE LEAVES LEFT	ISLAND ILPS 9105	'69
	BRYTER LAYTER	ISLAND ILPS 9134	'70
	PINK MOON	ISLAND ILPS 9184	'72
DRUID	TOWARD THE SUN	EMI EMC 3081	'75
	FLUID DRUID	EMI EMC 3128	'76
DULCIMER	AND I TURNED AS I HAD TURNED AS A BOY...	NEPENTHA 6437 003	'71
LESLEY DUNCAN	SING CHILDREN SING	CBS 64202	'71
	EARTH MOTHER	CBS 64807	'72
	EVERYTHING CHANGES	GM GML 1007	'74
	MOONBATHING	GM GML 1017	'75

	MAYBE IT'S LOST	GM GML 1019	'77
SIMON DUPREE & THE BIG SOUND	WITHOUT RESERVATIONS	PARLOPHONE PCS 7029	'67
EAST OF EDEN	MERCATOR PROJECTED	DERAM SML 1038	'69
	SNAFU	DERAM SML 1050	'70
	SAMA	HARVEST SHVL 792	'71
	NEW LEAF	HARVEST SHVL 796	'71
	ANOTHER EDEN	EMI 97101(Ger)	'75
	HERE WE GO AGAIN (Ger)	EMI 062 98065	'76
	IT'S THE CLIMATE (Ger)	EMI 61810	'76
	SILVER PARK (Ger)	EMI 62639	'78
	SOUND OF EDEN-EDEN LIVE	HABLA HBL20102(I)	'89
EGG	SAME	DERAM NOVA SDN 14	'70
	POLITE FORCE	DERAM DML 1074	'70
	THE CIVIL SURFACE	CAROLINE C 1510	'74
801	801 LIVE	ISLAND ILPS 9444	'74
THE ELASTIC BAND	EXPANSIONS ON LIFE	DECCA NOVA SNDR-6	'70
THE ELECTRIC LIGHT ORCHESTRA	SAME	HARVEST SHVL 797	'71
	2	HARVEST SHVL 806	'73
	ON THE THIRD DAY	JET LP 202	
	THE NIGHT THE LIGHTS WHEN ON	WB K 56058	'74
	FACE THE MUSIC	JET LP 11	'75
	ELDORADO	WB K 56090	'75
	OLE' ELO	JET LP 19	'76
	NEW WORLD RECORD	JET 30034	'76
	OUT OF THE BLUE	JET LX500	'79
	XANADU	JET 526	'80
	TIME	JET 236	'81
	SECRET MESSAGES	CBS LX 527	'83
	BALANCE OF POWER	EPIC EPC	'86
KEITH EMERSON	INFERNO	WB K 50753	'80
	NIGHTHAWKS	MCA MCF3107	'81
	HONKY		
	THE CHRISTMAS ALBUM	KEITH LP 1	'88
EMERSON,LAKE & PALMER	SAME	ISLAND ILPS 9132	'70
	TARKUS	ISLAND ILPS 9155	'71
	PICTURES AT AN EXHIBITION	ISLAND HELP 1	'71
	TRILOGY	ISLAND ILPS 9186	'72
	BRAIN SALAD SURGERY	MANTICORE K 53501	'73
	WELCOME MY FRIENDS, TO THE SHOW THAT NEVER ENDS- LADIES AND GENTLEMEN	MANTICORE K 63500	'74
	WORKS	MANTICORE K 80009	'77
	WORKS VOL.II	ATLANTIC K 50422	'77
	LOVE BEACH	ATLANTIC K 50552	'78
	IN CONCERT	ATLANTIC K 50757	'79
	3		
EMERSON,LAKE & PAWELL	SAME	POLYDOR POLD 5191	'86
END	INTROSPECTION	DECCA SKL 5015	'69
ENGLAND	GARDEN SHED	ARISTA ARTY 153	'77
THE ENID	IN THE REGION OF THE SMMER STARS	BUK BULP 2014	'76
	AERIE FAERIE NONSENSE	EMI INS 3012	'77
	TOUCH ME	PYE NSPH 18593	'79
	SIX PIECES	PYE N 116	'79
	LIVE AT HAMMERSMITH ODEON VOL. 1	ENID 1	'83
	LIVE AT HAMMERSMITH ODEON VOL. 2	ENID 2	'83
	SOMETHING WICKED THIS WAY COME	ENID	
	THE STAND	ENID	
	THE SPELL	ENID 8	'84
	FAND	ENID 9	'85
	1985-1986	STAND 2	'85
	SALOME	ENID 10	'86
	LOVERS & FOOLS	DOJOLP 24	'86
	ITCHYCOO PARK (12")	ENID EDID L 3314	
	INNER VISIONS (cas)		
	INNER PIECES (cas)		
BRIAN ENO	HERE COME THE WARM JETS	ISLAND ILPS 9268	'73
	TAKING TIGER MOUNTAIN	ISLAND ILPS 9309	'74
	ANOTHER GREEN WORLD	ISLAND ILPS 9351	'75
	DISCREET MUSIC	OBSCURE OBS4	'75
	BEFORE & AFTER SCIENCE	POLYDOR 2302 071	'77
	MUSIC FOR FILMS	POLYDOR 2310 623	'78
	MUSIC FOR AIRPORTS	AMBIENT 001	'79
	IN A LAND OF CLEAR COLORES(w.Pete Sinfield)		'79
	POSSIBLE MUSIC(w-J.HASSELL)	EDITIONS EGED 7	'80
	THE PLATEAUX OF MIRRORS	EDITIONS EGAMB 002	'80
	FOUTH WORLD	EG EGED 7	'80
	MY LIFE IN THE BUSH OF GHOSTS	EG EGED 48	'81
	EMPTY LANDSCAPES	EG	'81
	AMBIENT 4 ON LAND	EG EGED 20	'82
	APOLLO	EG EGLP 53	'83
	THURSDAY AFTERNOON	EG EGLP 64	'83
	HYBIRD(w-MICHAEL BROOK)	EG EGED 41	'85
	VOICE(w-ROGER ENO)	EG EGED 42	'84
	MORE BLANK THAN FRANK	EG EGED 45	'86
	MUSIC FOR FILMS VOL.II		'87
	MUSIC FOR FILMS VOL.III	OPAL 925769-1	'88
ENYA	SAME	BBC REB 605	'86
	WATERMARK	WB WX 199	'88
ESPERANTO	ROCK ORCHESTRA	A&M AMLS 68175	'73
	DANSE MACABRE	A&M AMLS 63624	'74
	LAST TANGO	A&M AMLS 68294	'75
EYES OF BLUE	CROSSROADS OF TIME	MERCURY 20134SMCL	'68
	IN FIELDS OF ARDATH	MERCURY 20164SMCL	'69
G.F.FITZGERALD	MOUSEPROOF	UNI UNLS 115	'70
FAIRFIELD PARLOUR	FROM HOME TO HOME	VERTIGO 6360 001	'70
FAIRPORT CONVENTION	SAME	POLYDOR 583 035	'68
	WHAT WE DID ON OUR HOLIDAYS	ISLAND ILPS 9092	'69
	UNHALFBRICKING	ISLAND ILPS 9102	'69
	LIEGE AND LIEF	ISLAND ILPS 9115	'69
	FULL HOUSE	ISLAND ILPS 9130	'70
	ABGEL DELIGHT	ISLAND ILPS 9162	'71
	BABBACOMBE LEE	ISLAND ILPS 9176	'71
	ROSIE	ISLAND ILPS 9208	'73
	FAIRPORT NINE	ISLAND ILPS 9246	'73
	FAIRPORT LIVE A MOVEABLE FEAST	ISLAND ILPS 9285	'74
	RISING FOR THE MOON	ISLAND ILPS 9313	'75
	GOTTLE O'GEER	ISLAND ILPS 9389	'76
	LIVE AT L.A.TROUBADOUR	ISLAND HELP 28	'76
	BONNY BUNCH OF ROSES	VERTIGO 9102 015	'77
	TIPPLERS TALES	VERTIGO 9102 022	'78
	FAREWELL FAREWELL	SIMONS GAMA 1	'79
	MOAT ON THE LEDGE	WOODWORM WR 001	'82
	GLADY'S LEAP	WOODWORM WR 007	
	EXPLETIVE DELIGHTED	WOODWORM WR 009	
FAMILY	MUSIC IN A DOLL'S HOUSE	REPRISE RSLP 6312	'68
	FAMILY ENTERTAINMENT	REPRISE RSLP 6340	'69
	A SONG FOR ME	REPRISE RSLP 9001	'70
	ANYWAY	REPRISE RSX 9005	'70
	OLD SONGS NEW SONGS	REPRISE RMP 9007	'71
	FEALESS	REPRISE K 54003	'71
	BANDSTAND	REPRISE K 54006	'72
	ITS ONLY A MOVIE	RAFT RA 58501	'73
FANTASY	PAINT A PICTURE	POLYDOR 2383 246	'73
FARAWAY FOLK	SEASONAL MAN	RA RECORDS RALP6029	
FIELDS	SAME	CBS 69009	'71
SIMON FINN	PASS THE DISTANCE	MUSHROOM 100MR 2	'70
FIRST+AID	NOSTRADAMS	DECCA TXS 117	'77
MORGAN FISHER	NOVA SOLIS	RCA SF8321(I)	'72
	BROWN OUT	IMPORT IMP1006(US)	'76
	THE SLEEPER WAKES	CHERRY RED A RED 5	'79
	A COLLECTION OF CLASSIC MUTANTS (HYBRID KIDS)	CHERRT RED A RED 5	'79
	SLOW MUSIC(w.Lol Coxhill)	PIPE 1	'80
	CLAWS(HYBRID KIDS)	CHERRY RED BRED 11	'80
	MINIATURES	PIPE 2	'80
	SEASONS		'83
	IVORIES		'84
	LOOK AT LIFE	SIRIUS SC2004(J)	'84
	A SLICE OF LIFE	LLE1009(J)	'84
	WATER MUSIC	LLE(J)	'85
	INSIDE SATIE	STRAWBERY SBL1001	'85
	LIFE UNDER THE FLOOR(CD)	KITY H33U20005(J)	'87
	PIECE IN THE HEART OF THE CITY (CD)	(J)KITTY H33U20010	'88
THE FIVE DAY WEEK STRAW PEOPLE	SAME	SAGA FID 2123	'68
FLAMING YOUTH	ARK 2	FONTANA STL 5533	'69
FLASH	SAME	SOVEREIGN SVNA7251	'72
	IN THE CAN	SOVEREIGN SVNA7255	'72
	OUT OF OUR HANDS	SOVEREIGN SVNA7260	'73
FOGGY	SIMPLE GIFTS	YORK FYK 411	'72
	IT'S FOGGY ALBUM	LOOK LK/LP6385	'79
FOREST	SAME	HARVEST SHVL 760	'69
	THE FULL CIRCLE	HARVEST SHVL 784	'70
	LIVE	HABLABEL(I)	'89
FOTHERINGAY	SAME	ISLAND ILPS 9125	'70
RITCHIE FRANCIS	SONG BIRD	PEGASUS PEG 11	'72
FRESH MAGGOTS	SAME	RCA SF 8205	'71
ROBERT FRIPP	EXPOSURE	EG EGLP 101	'79
	GOD SAVE THE QUEEN	EG EGLP 105	'80
	THE LEAGUE OF GENTLEMEN	EG EGED 9	'81
	LET THE POWER FALL	EG EGED 10	'81
	I ADVANCE MASKED (A.Summers)	A&M AMLH 64913	'82
	BEWITCHED (w.A.Summers)	A&M AMLX 68569	'84
	& LEAGUE OF THE CRAFTY GUITARISTS LIVE	EG EGED 43	'86
	THE LADY OF THE TIGER (w.Toyah)	EG EGED 44	'86
FRIPP & ENO	NO PUSSYFOOTING	ISLAND HELP 16	'73
	EVENING STAR	ISLAND HELP 22	'75
FRED FRITH	GUITAR SOLOS	CAROLINE C1508	'74
	GUITAR SOLOS 2	CAROLINE C1518	'76
	GUITAR SOLOS 3	RIFT 1	'79
	WITH FRIENDS LIKE THESE (w.Henry Kaiser)	(US)METALANGUAGE 107	'79
	GRAVITY	(US)RALPH 8057	'80
	SPEECHLESS	(US)RALPH 8106	'81
	GETTING A HEAD	RIFT 2	'80
	THE GUITARS ON THE TABLE APPROACH VOL.1	R.R.J.003	'82
	THE GUITARS ON THE TABLE APPROACH VOL.2	R.R.J.004	'82
	VOICE OF AMERICA (w.Phil Minton)	RIFT 4	'82
	FRENCH GIGS (Lol Coxhill)	A.A.A A02	'83
	CHEAP AT HALF THE PRICE	NEW RALPH FF8356	'83
	WHO NEEDS ENEMIES? (w.Henry Kaiser)	(US)METALANGUAGE ML 123	'83
	FRENCH,FRITH,KAISER,THOMPSON		'88
	LIVE AT VICTORIAVILL FESTIVAL (w.Rene Russier)		
	THE TECHNOLOGY OF TEARS	REC REC 20	'88
	THE TOP OF HIS HEAD	(Bel)CREPUSCULF	'89
FRUUPP	FUTURE LEGENDS	DAWN DNLS 3053	'73
	SEVEN SECTRETS	DAWN DNLS 3058	'74
	THE PRINCE OF HEAVEN'S EYES	DAWN DNLH 2	'74
	MODERN MASQUERADES	DAWN DNLS 3070	'75
FUSION ORCHESTRA	SKELETON IN ARMOUR	EMI EMA 758	'73
FUTURE SHOCK	SAME	SHOCK RECORDS 1	'77
JOHN G.PERRY	SUNSET WADING	DECCA SKL 5233	'76
PETER GABRIEL	SAME	CHARISMA CDS4006	'77
	SAME	CHARISMA CAS 4013	'78
	SAME	CHARISMA CAS 4019	'80
	SAME	CHARISMA PG 4	'82
	PLAYS LIVE	CHARISMA PGDL 1	'83
	BIRDY	CHARISMA CAS 1167	'85
	SO	VIRGIN PG 5	'86
	PASSION	VIRGIN RWLP 1	'89
GALLIARD	STRANGE PLEASURE BY GALLIARD	DERAM NOVA SDN 4	'69
	NEW DAWN	DERAM SML 1075	'70
MICHAL GARRICK	A CASE OF JAZZ	AIRBONE	'63
	POETRY & JAZZ IN CONERT	ARGO ZDA 2627	'63
	MOONSCAPE	AIRBONE	'64
	OCTOBER WOMAN	ARGO ZDA 33	'64
	PROMISES	ARGO ZDA 36	'65
	BEFORE NIGHT & DAY	ARGO EAF 115	'66
	BLACK MARIGOLDS	ARGO ZDA 88	'66
	JAZZ PRAISES AT ST PAULS	AIRBONE NBP0021	'68

	POETRY & JAZZ IN CONCERT250	ARGO ZPR264/265	'69
	THE HEART IS LOTUS	ARGO ZDA 135	'70
	Mr SMITH'S APOCALYPSE	ARGO ZAGF 1	'71
	COLD MOUNTAIN	ARGO ZDA 153	'72
	FROM STRECH BLUES	ARGO ZDA 154	'72
	TROPPO	ARGO ZDA 163	'73
	YOU'VE CHANGED	HEP 2011	'78
	KRONOS	HEP 2013	'83
GAY & TERRY WOODS	BACKWOODS	POLYDOR 2383 322	'75
	THE TIME IS RIGHT	POLYDOR 2383 375	'76
	RENOWNED	POLYDOR 2383 406	'76
	TENDER HOOKS	ROCKBURGH ROC 104	'78
GENESIS	FROM GENESIS TO REVELATION	DECCA 4990	'69
	TRESPASS	CHARISMA CAS 1020	'70
	NURSERY CRYME	CHARISMA CAS 1052	'71
	FOXTROT	CHARISMA CAS 1058	'72
	LIVE	CHARISMA CLASS 1	'73
	SELLING ENGLAND BY THE POUND	CHARISMA CAS 1074	'73
	THE LAMB LIES DOWN ON...	CHARISMA CGS 101	'74
	TRICK OF THE TAIL	CHARISMA CDS 4001	'76
	WIND & WUTHERING	CHARISMA CDS 4005	'77
	SECOND OUT	CHARISMA GE2001	'77
	AND THEN THERE WERE THREE	CHARISMA CDS4010	'78
	DUKE	CHARISMA BRA 101	'80
	ABACAB	CHARISMA CBR 102	'81
	THREE SIDE LIVE	CHARISMA GE 2002	'82
	SAME	VIRGIN GENLP 1	'83
	INVISIBLE TOUCH	VIRGIN GENLP 2	'86
GENTLE GIANT	SAME	VERTIGO 6360 020	'70
	ACQUIRING THE TASTE	VERTIGO 6360 041	'71
	THREE FRIENDS	VERTIGO 6360 070	'72
	OCTOPUS	VERTIGO 6360 080	'73
	IN A GLASS HOUSE	WWA 002	'73
	THE POWER & THE GLORY	WWA 010	'74
	FREE HAND	CHRYSALIS 1093	'75
	INTERVIEW	CHRYSALIS 1115	'76
	PLAYING THE FOOL	CHYSALIS 1133	'76
	THE MISSING PIECE	CHRYSALIS 1152	'77
	GIANT FOR A DAY	CHRYSALIS 1186	'78
	CIVILIAN	CHRYSALIS 1285	'80
THE GHOULIES	DOGGED BY DOGMA	LOUNGING R.LA 01	'82
MICHAEL GIBBS	SAME	DERAM SML 1063	'69
	TANGLEWOOD '63	DERAM SML 1087	'71
	JUST AHEAD	POLYDOR 2683 011	'72
	IN PUBLIC INTERST	POLYDOR 2383 252	
	THE ONLY CHROME-WATERFALL ORCHESTRA	BRONZE ILPS 9353	'75
	GARY BURTON PLAYS M.GIBS		
	BIG MUSIC	VIRGIN VE 27	'88
GILES GILES & FRIPP	CHEERFUL INSANITY	DERAM SML 1022	'68
GILGAMESH	SAME	CAROLINE CA 2007	'75
	ANOTHER FINE TUNE YOU'VE GOT ME INTO	CHARLY CRL 5009	'78
DAVID GILMOUR	SAME	HARVEST SHVL 817	'78
	ABOUT FACE	HAEVEST SHSP2400791	'34
GORDON GILTRAP	EARLY DAYS	ALLEGRO 4052	'68
	TESTAMENT OF TIME	MCA MKLS 2020	'71
	GILTRAP	PHILIPS 6308 175	'73
	VISIONARY	ELECTRIC TRIX 2	'76
	PERILOUS JOURNEY	ELECTRIC TRIX 4	'77
	FEAR OF THE DARK	ELECTRIC TRIX 7	'78
	THE PEACOCK PARTY	PVK GIL 1	'80
GIZMO	JUST LIKE MASTER BATES	ACE 001	'79
	VICTIMS	CLEEP'N'EAT MAC LP1	'81
ROGER GLOVER	BUTTERFLY BALL	PURPLE TPSA 7514	'74
	ELEMENTS	POLYDOR 2391 306	'78
GNIDROLOG	IN SPITE OF HARRY'S TOENAIL	RCA SF 8261	'71
	LADY LAKE	RCA SF 8322	'72
GODLEY & CREME	CONSEQUENCES	MERCURY CONS 017	'77
	L	MERCURY 910 9611	'78
	FREZZ FRAME	POLYDOR POLD 5027	'79
	ISMISM	POLYDOR POLD 5043	'81
	BIRDS OF PLAY	POLYDOR POLD 5070	'83
	HISTORY MIX VOL.1	POLYDOR POLH 22	'85
	GOODBYE BLUE SKY		'88
THE GODS	GENESIS	COLUMBIA SCX 6286	'68
	TO SAMUEL A SON	COLOMBIA SCX 6372	'69
GONG	MAGICK BROTHER	(Fr)BYG 529 305	'70
	CAMEMBERT ELECTRIQUE	BYG 529 353(Fr)	'71
	CONTIENENTAL CIRCUS	PHILIPS 6362 330(Fr)	'71
	FLYING TEAPOT	BYG 529 027(Fr)	'73
	ANGELS EGG	VIRGIN V 2007	'73
	YOU	VIRGIN V 2019	'74
	SHAMAL	VIRGIN V 2046	'76
	GAZEUSE	VIRGIN V 2074	'77
	LIVE ETC	VIRGIN VGD3501	'77
	GONG EST MORT	TAPIOCA10002/3(Fr)	'77
	EXPRESSO II	VIRGIN V 2099	'78
	LIVE IN PARIS-BATACLAN '73	(Fr)MANTRA 025	'89
	LIVE AT SHEFFIELD 1974	(Fr)MANTRA 042	'90
(Pierre Moerlen's Gong)	DOWNWIND	ARISTA SPART 1080	'79
	LIVE	ARISTA 202 205(Ger)	'79
	TIME IS THE KEY	ARISTA SPART 1130	'79
	LEAVE IT OPEN	ARISTA 202 955	'81
	SECOND WIND(CD)	LINE LICD9.00698 O	'88
(PLANET GONG)	LIVE FLOATING ANARCHY	LTM 1002(Fr)	'78
(NEW YORK GONG)	ABOUT TIME	CHARLY CRL 5021	'80
(GONGMAISON)	SAME	DEMI MONDE DNLP 1022	'90
(DEAVID ALLEN)	BANANA MOON	BYG 529 345(Fr)	'71
	GOOD MORNING	VIRGIN V 2054	'76
	NOW IS THE HAPPIEST TIME OF YOUR LIFE	AFFINITY AFF 3	'77
	N'EXISTE PAS!	CHARLY CRL 5015	'79
	DIVIDED ALIEN PLAYBAX 80	CHARLY CR 30218	'82
	THE DEATH OF ROCK AND OTHER ENTRANCES	SHANGHAI HAI 201	'83
	ALIEN IN NEW YORK	CHARLY CYZ 101	'83
	N'EXISTE PAS!	CHARLY CYZ 101	'83
	EX STOP/DON'T	SHANGHAI HAI 202	
	THE OWL AND THE TREE(CD)	DEMI MONDE CDTL012	'83
(GILLI SMITH)	MOTHER	CHARLY CRL 5007	'78
MOTHER GONG	FAIRY SALES	CHARLY CRL 5018	'80
	ROBOT WOMAN	BUTT 003	'82

	ROBOT WOMAN 2	SHANGHAI HAI 100	'82
	ROBOT WOMAN 3	SHANGHAI HAI 109	'89
SAM GOPAL	ESCALATOR	STABLE SLE 8001	'69
GOTHIC HORIZON	THE JASON LODGE POETRY BOOK	ARGO ZFB 26	'71
	TOMORROW IS ANOTHER DAY	ARGO ZDA 150	'72
GOWEN,MILLER,SINCLAIR TOMKINS	BEFORE A WORD IS SAID	EUROPA JP2007(US)	
GRACIOUS	GRACIOUS!	VERTIGO 6360 002	'70
	THIS IS	PHILIPS 6382 004	'71
GRAVY TRAIN	SAME	VERTIGO 6360 023	'70
	(A BALLAD OF)A PEACEFUL MAN	VERTIGO 6360 051	'71
	SECOND BIRTH	DAWN DNLS 3046	'73
	STAIRCASE TO THE DAY	DAWN DNLH 1	'74
THE GREATEST SHOW ON EARTH	HORIZONS	HARVEST SHVL 769	'70
	THE GOING'S EASY	HARVEST SHVL 783	'70
JOHN GREAVES	KEW.RHONE(w-Peter Blegvad)	VIRGIN V 2082	'77
	ACCIDENT	EUROPA JP 2010(Fr)	'82
	PARROT FASHIONS	EUROPA JP 2016(Fr)	'84
PETER GREEN	THE END OF THE GAME	REPRISE RSLP9006	'70
	IN THE SKIES	PVK 101	'79
	LITTLE DREAMER	PVK 102	'80
	WTHATCHA DONNA DO?	PVK PET 1	'81
	BLUE GUITAR	CROELE CRX 5	'81
	KOLORS	HEADLINE HED 2	'82
	A CASE FOR THE BLUES	PLATINUM24001	'85
GREENSLADE	SAME	WB K 46207	'73
	BEDSIDE MANNERS ARE EXTRA	WB K 46259	'73
	SPYGLASS GUEST	WB K 56055	'74
	TIME & TIDE	WB K 56126	'75
DAVE GREENSLADE	CACTUS CHOIR	WB K5630	'76
	PENTATEUCH	EMI EMC 3321/2	'79
NICHOLAS GREENWOOD	COLD CUTS	KINGDOM KVLP9002	'72
CAROL GRIMES & DELIVERY	FOOL'S MEETING	B&C CAS 1023	'70
GROUNDHONGS	SCRATCHING THE SURFACE	LIBERTY LBS 83199	'68
	BLUE OVITUARY	LIBERTY LBS 83253	'69
	THANK CHRIST FOR THE BOMB	LIBERTY LBS 83295	'70
	SPLIT	LIBERTY LBS 83401	'71
	LIVE AT LEES (LTD Edition? or Boot?)		'71
	WHO WILL SAVE THE WORLD	UA UAG 29237	'72
	HOGWASH	UA UAG 29419	'72
	SOLID	WWA 004	'74
	CROSSCUT SAW	UA 29917	'76
	BLACK DIAMOND	UA 29994	'76
	HOGGIN'THE STAGE	PSYCHO 24	'84
	RAZORS EDGE	LANDSLIDE 102	'85
GRYPHON	SAME	TRANSATLANTIC TRA262	'73
	MIDNIGHT MUSHROOM	TRANSATLANTIC TRA282	'74
	RED QUEEN TO GRYPHON THREE	TRANSATLANTIC TRA287	'74
	RAINDANCE	TRANSATLANTIC TRA302	'75
	TREASON	HARVEST SHSP4063	'77
GULLIVER'S TRAVELS	SAME	INSTANT INLP003	'68
GUN	SAME	CBS 63552	'68
	GUNSIGHT	CBS 62683	'69
THE HABIBIYYA	IF MAN BUT KNEW	ISLAND HELP 7	'72
STEVE HACKETT	VOYAGE OF THE ACOLYTE	CHARISMA CAS 1111	'75
	PLEASE DON'T TOUCH	CHARISMA CAS 4012	'78
	SPECTRAL MORNINGS	CHARISMA CDS 4017	'79
	CLOCKS	CHARISMA CB34112	'79
	DEFECTORS	CHARSIMA CDS 4018	'80
	CURED	CHARISMA CDS 4021	'81
	HIGHLY STRUNG	CHARISMA HACK 1	'82
	BAY OF KINGS	LAMBORGHINI LMGLP 3000	'83
	TILL WE HAVE FACES	LAMBORGHINI LMGLP 4000	'84
	MOMENTUM	START STL 15	'88
CLAIRE HAMILL	ONE HOUSE LEFT STANDING	ISLAND ILPS 9182	'71
	OCTOBER	ISLAND ILPS 9225	'73
	STAGE DOOR JOHNNIES	KONK 101	'74
	ABRACADABRA	KONK 104	'75
	VOICE	CODA	
	LOVE IN THE AFTERSOON(CD)	CODA 834135.2	'89
PETER HAMMILL	FOOL'S MATE	CHARISMA CAS 1037	'71
	CHAMELEON IN THE SHODOW OF THE NIGHT	CHARSIAM CAS1067	'73
	THE SILENT CORNER AND THE EMPTY STAGE	CHARISMA CAS 1083	'74
	IN CAMERA	CHARISMA CAS 1089	'74
	NADIR'SBIG CHANCE	CHARISMA CAS 1099	'75
	OVER	CHARISMA CAS 1125	'76
	THE FUTURE NOW	CHARISMA CAS 1137	'78
	PH 7	CHARISMA CAS 1146	'79
	A BLACK BOX	S-TYPE PHS 1	'80
	SITTING TARGETS	VIRGIN V 2205	'81
	ENTER K	NAIVE NAVL 1	'82
	PATIENCE	NAIVE NAVL 3	'83
	LOOP AND REELS	SOFA SOUND SS4(Cas)	'83
	THE LOVE SONGS	CHARISMA CAS 1166	'84
	THE MARGIN	FOUNDRY FONDL 1	'85
	SKIN	FOUNDRY FONDL 3	'86
	AND CLOSE AS THIS	VIRGIN V2409	'86
	IN A FOREIGN TOWN	ENIGMA	'88
	SPUR OF THE MOMENT(CD)	LINE DACD9005640(Ger)	88
	OUT OF WATER	ENIGMA ENVLP 1003	'89
HANNIBAL	SAME	B & C CAS 1022	'70
HAPSHASH & THE COLOURED COAT	FEATURING THE HUMAN HOST & THE HEAVY METAL KIDS	LIBERTY MINIT MLL 40001E	'69
	THE WESTERN FLIER	LIBERTY LBL 83212	'69
STEVE HARLEY & COCKNEY REBEL	THE HUMAN MENAGERIE	EMI EMA 759	'73
	PSYCHOMODO	EMC 3033	'74
	TIMELESS FLIGHT	EMA 775	'76
	LOVE IS A PRIMA DONNA	EMC 3156	'76
	FACE TO FACE	EMSP 320	'77
	HOBO WITH A GRIN	EMC 3254	'78
	CANDIDATE	EMC 3311	'79
ROY HARPER	THE SOPHISTICATED BEGGAR	STRIKE SYB 7	'66
	COME OUT FIGHTING, GHENGIS SMITH	CBS BPG 63184	'68
	FOLKJOKEOPUS	LIBERTY LBS 83231	'69

	FLAT BAROQUE & BERSERK	HARVEST SHVL 776	'70
	RETURN OF THE SOPHISTICATED BEGGAR (REISSUE)	YOUNGBLOOD SYB 7	'70
	STORMCOCK	HARVEST SHVL 789	'71
	LIFE MASK	SHVL 808	'73
	VALENTINE	SHSP 4027	'74
	FLASHES FROM THE ARCHIVES OF OBLIVION	SHDW 405	'74
	HQ	SHSP 4046	'75
	BULLINAMINGVASE	SHSP 4060	'77
	COMMERCIAL BREAK (TEST PRESSING ONLY)	SHSP 4077	'77
	ROY HARPER 1970-75	SHSM 2025	'78
	THE UNKNOWN SOLDIER	SHVL 820	'80
	WORK OF HEART	PUBLIC PUBLP 5001	'82
	BORN IN CAPTIVITY	HARDUP PUB 5002	'84
	WHATEVER HAPPENED TO JUGULA	BEGGARS BANQUET BEGA 60	'85
	IN BETWEEN EVERY LINE	HARVEST EN 5004	'86
TIM HART & MADDY PRIOR	FOLK SONGS OF OLDE ENGLAND VOL. 1	TEPEE TPRM 102	'68
	FOLK SONGS OF OLDE ENGLAND VOL. 2	TPRM 105	'68
	SUMMER SOLSTICE	B & C CAS 1035	'71
KEEF HARTLEY	HALFBREED	DERAM SML 1037	'69
	BATTLE OF N W 6	SML 1054	'70
	THE TIME IS NEAR	SML 1071	'70
	OVERDOG	SDL 2	'71
	LITTLE BIG BAND	SDL 4	'71
	SEVENTY SECOND BRAVE	SDL 9	'72
	LANDCASHIRE HUSTLER	SDL 13	'73
RICHARD HARVEY	DIVISIONS ON A GROUND	T. ATLANTIC TRA 292	'75
	A NEW WAY OF SEEING		
	ITALIAN RECORDER CONCERTOS	ASV ALH 914	'82
CHRIS HARWOOD	NICE TO MEET MISS CHRISTINE	BIRTH RAB 1	'71
GORDON HASKELL	SAIL IN MY BOAT	CBS 63741	'69
	IT IS AND IT ISN'T	ATLANTIC K 40311	'71
ANNIE HASLAM	ANNIE IN WONDERLAND	WARNER K 56453	'78
	STILL LIFE	SPARTAN LCTV 1	'85
	SAME	(US) EPIC FK 45223	'89
HATFIELD AND THE NORTH	SAME	VIRGIN V 2008	'73
	THE ROTTERS CLUB	V 2030	'75
	AFTERS	VR 5	'79
HAWKWIND	SAME	LIBERTY LBS 83348	'70
	IN SEARCH OF SPACE	UA UAG 29202	'71
	DOREMI-FARSOL-LATIDO	UAG 29364	'72
	SPACE RITUAL	UAD 60037	'73
	HALL OF THE MOUNTAIN GRILL	UAG 29672	'74
	WARRIOR ON THE EDGE OF TIME	UAG 29766	'75
	ROADHAWKS	UAK 29919	'76
	ASTOUNDING SOUNDS, AMAZING MUSIC	CHARISMA CDS 4004	'76
	MASTERS OF UNIVERSE	UA UAG 30025	'77
	QUARK STRANGENESS & CHARM	CHARISMA CDS 4008	'77
	25 YEARS ON (HAWKLORDS)	CDS 4014	'78
	PXR 5	CDS 4016	'79
	LIVE 1979	BRONZE BRON 527	'80
	REPEAT PERFORMANCE	CHARISMA BG 2	'80
	LEVITATION	BRONZE BRON 530	'80
	SONIC ATTACK	RCA RCALP 6004	'81
	FRIENDS AND RELATIONS	FLICKNIFE SHARP 1001	'82
	CHURCH OF HAWKWIND	RCA RCALP 9004	'82
	CHOOSE YOUR MASQUES	RCALP 6055	'82
	FRIENDS AND RELATIONS 2	FLICKNIFE	'83
	TEXT OF FESTIVAL	JAMES JAMS 29	'83
	ZONES	FLICKNIFE SHARP 014	'83
	INDEPENDENTS DAYS	XSHARP 019	'84
	SPACE RITUAL 2	APK 8	'84
	THIS IS HAWKWIND, DO NOT PANIC	FLICKNIFE SHARP 022	'84
	HAWKWIND 1973	DEMI MONDE DM 002	'85
	FRIENDS AND RELATION 3	FLICKNIFE	'85
	BRING ME THE HEAD OF YURI GAGARIN	DEMI MONDE	'85
	RIDICULE (CD)	OBSESSION OBSESS 1	'85
	THE CHRONICLE OF THE BLACK SWORD	FRICKNIFE SHARP 033	'86
	ANTHOLOGY VOL. 1	SAMURAI SAMR 038	
	ANTHOLOGY VOL. 2	SAMR 039	'86
	ANTHOLOGY VOL. 3	SAMURAI	
	THE XENON CODEX (CD)	GWR 7.75407-2	
	THE TRAVELLAR'S AID TRUST (V.A.)	FLICKNIFE SHARP 2045	'88
	THE NIGHT OF HAWKS		'89
	STASIS THE U.A. YEARS 1971-1975 (CD)	EMI CDP 7466942	'90
LOU HAYLES	DON'T HIDE AWAY	MYRRH MYR 1055	'77
HAZE	C'EST LA VIE	GABADON GABL 001	'84
HEAVEN	BRASS ROCK 1	CBS 66293	'71
DICK HECKSTALL-SMITH	A STORY ENDED	BRONZE ILPS 9196	'72
HEDGEHOG PIE	SAME	RUBBER RUB 009	'75
	THE GREEN LADY	RUB 014	'75
HELDON	HOLDING ON		
JIMI HENDRIX	ARE YOU EXPERIENCED	TRACK 2407 004	'67
	AXIS BOLD AS LOVE	2407 011	'67
	ELECTRIC LADYLAND	2657 001	'68
	BAND OF GYPSYS	2406 002	'70
	CRY OF LOVE	POLYDOR 2302 023	'71
HENRY COW	LEGEND	VIRGIN V 2005	'73
	UNREST	V 2011	'74
	DESPERATE STRAIGHTS	V 2024	'75
	IN PRAISE OF LEARNING	V 2027	'75
	CONCERTS	CAROLINE CAD 3002	'76
	WESTERN CULTURE	BROADCAST BC 1	'78
HERON	SAME	DAWN DNLS 3010	'70
	TWICE AS NICE	DNLS 3025	'72
HIGH TIDE	SEA SHANTIES	LIBERTY LBS 83264	'69
	SAME	LBS 83294	'70
	INTERESTING TIME	(I) COBRA CR/LS 003	'87
	PRECIOUS CARGO	(I) COBRA CR 019	'89
STEVE HILLAGE	FISH RISING	VIRGIN V 2031	'75
	L	V 2066	'76
	MOTOVATION RADIO	V 2777	'77

	GREEN	V 2098	'78
	LIVE HERALD	VGD 3502	'78
	RAINBOW DOME MUSICK	VR 1	'79
	OPEN	V 2135	'79
	FOR TO NEXT	2244	'83
	AND NOD OR	OVED 8	'83
ROPERT HINE	PICK UP A BONE	PURPLE TPSA 7503	'71
	UNFINISHED PICTURE	TPSA 7509	'73
	IMMUNITY	A&M AMLH 68519	'81
	WAVING NOT DROWNING		
ALAN HOLDSWORTH	IGGINBOTTOM'S WRENCH (IGGINBOTTOM)	DREAM SML 1051	'69
	BELLADONNA (NECLEUS)	VERTIGO 6360 076	'72
	TEMPEST (TEMPEST)	BRONZE ILPS 9220	'73
	BUNDLES (SOFT MACHINE)	HARVEST SHSP 4044	'75
	BELIEVE IT (THE NEW TONNY WILLIAM'S LIFETIME)	(US) COLUMBIA PC 33836	'75
	MILLION DOULLAR LEGS (THE NEW TONNY'S WILLIAM'S LIFETIME)	PC 34262	'76
	VELVET DARKNESS	(US) CTI 6068	'76
	GAZEUSE (GONG)	VIRGIN V 2074	'77
	ENIGMATIC OCEAN (J. L. PONTY)	(US) ATLANTIC SD 19110	'77
	TOUCHING ON (JOHN STEVENS)	(GER) VINYL VS 105	'77
	EXPRESSO II (GONG)	VIRGIN V 2099	'78
	FEELS GOOD TO ME (B. BRUFFORD)	POLYDOR 2310 579	'78
	UK (UK)	2302 080	'78
	ONE OF A KIND	2302 091	'79
	SUNBIRD (GORDON BECK)	(F) JMS 07	'79
	THE THINGS YOU SEE (G. BECK)	09	'80
	CONVERSATION PIECE PART 1 & 2 (JOHN STEVENS)	(GER) VIVYL VS 0100	'80
	I.O.U.	(US) AH 100	'82
	INDIVIDUAL CHOICE (J. L. PONTY)	(US) ATLANTIC 7.80098-1	'83
	RE TOUCH (J. STEVENS)	(GER) VINYL VS 0025	'83
	ROAD GAMES	WARNER 9239591	'83
	METAL FATIGUE		
	THE SAND		
	SECRETS (CD)	INTIMA 7 73328-2	'89
HUGH HOPPER	1984	CBS 65466	'73
	CRUEL BUT FAIR	COMPENDIUM FIDARDO 4	'76
	HOPPER TUNITY BOX	COMPENDIUM FIDARDO 7	'77
	ROUGE ELEMENT (HOPPER, DEAN, GOWEN, SHEEN)	OGUN OG 527	'78
	MONSTER BAND	ATMOSPHERE IRI 5003	'79
	SOFT HEAP (SOFT HEAP)	CHARLY CRL 5014	'79
	TO RAINBOW DIALY (H. HOPPER & A. GOWEN)	RED RECORDS ROUGE 1	'80
	MERCY DASH	CULTURE PRESS CP 2001	'85
HORSLIPS	HAPPY TO MEET	OATS MOO 3	'73
	THE TAIN	MOO 5	'73
	DANCEHALL SWEETHEARTS	MOO 7	'74
	UNFORTUNATE CUP OF TEA	MOO 8	'75
	DRIVE THE COLD WINTER AWAY	MOO 9	'76
	SAME	MOO 10	'76
	CELTIC SYMPHONY /BOOK OF INVASIONS	DJM DJF 20498	'77
	ALIENS	DJF 20519	'77
	TRACKS FROM THE VAULTS	OATS MOO 13	'78
	MAN WHO BUILT AMERICA	DJM DJF 20546	'79
	SHORT STORIES - TALL TALES	MERCURY 9100 070	'80
	THE BELFAST GIGS	OATS MOO 20	'80
CATHERINE HOWE	WHAT A BEAUTIFUL PLACE	REFLECTION REF 11	'71
	HARRY	RCA SF 8407	'75
	SILENT MOTHER NATURE	RS 1041	'76
	DRAGONFLY DAYS	ARIOLA ARL 5013	'77
STEVE HOWE	BEGINNINGS	ATLANTIC K 50151	'77
	STEVE HOWE ALBUM	K 50621	'79
LINDA HOYLE	PIECES OF ME	VERTIGO 6360 060	'71
ALAN HULL	PIPEDREAM	CHARISMA CAS 1069	'73
	SQUIRE	WARNER K 56121	'75
	PHANTOMS	ROCKET TRAIN 6	'79
	ON THE OTHER SIDE	BLACK CROW CRO 206	
THE HUMAN BEAST	VOLUME ONE	DECCA SKL 5053	'70
HUNGRY WOLF	SAME	PHILIPS 6308 009	'70
HUNTER MUSKETT	EVERYTIME YOU MOVE	DECCA NOVA SND 20	'70
	SAME	BRADLEYS BRADL 1003	'73
ICE	SAGA OF THE ICE KING	STORM RECORDS SR 3307	'79
THE IDLE RACE	THE BIRTHDAY PARTY	LIBERTY LBL 83132E	'68
	SAME	LBS 83221	'69
	TIME IS	R. ZONOPHONE SLRZ 1017	'71
IF	SAME	ISLAND ILPS 9129	'70
	2	ILPS 9137	'70
	3	UA UAG 29158	'71
	4	UAG 29315	'72
	NOT JUST A BUNCH OF PRETTY	GULL GULP 1004	'74
	TEA BREAK IS OVER	GULP 1007	'75
IGGINBOTTOM	IGGINBOTTOM'S WRENCH	DERAM SML 1051	'69
ILLUSION	OUT OF THE MIST	ISLAND ILPS 9489	'77
	SAME	ILPS 9519	'78
	ENCHANTED CARESS (CD)	BRISK SRT 9 CD 2174	'89
THE INCREDIBLE STRING BAND	SAME	ELEKTRA EKS &322	'66
	THE 5000 SPIRITS	EKS 74010	'67
	HANGMANS BEAUTIFUL DAUGHTER	EKS 74021	'68
	WEE TAM	EKS 74036	'68
	THE BIG HUGE	EKS 74037	'68
	CHANGING HORSES	EKS 74057	'69
	I LOOKED UP	EKS 74061	'70
	'U'	EKS 7E 2003	'70
	RELICS OF I S B	K 62008	'70

	BE GLAD FOR THE SONG	ISLAND ILPS 9140	'70
	LIQUID ACROBAT AS REGARDS THE AIR	ILPS 9172	'71
	EARTH SPAN	ILPS 9211	'72
	NO RUINOUS FEUD	ILPS 9229	'73
	HARD ROPE & SILKEN TWINE	ILPS 9229	'74
	SEASONS THEY CHNAGE	ISLD 9	'76
INDIAN SUMMER	SAME	NEON NE 3	'70
IONA	CUCKOO	SILVERSCALES KOO 13913	'78
IQ	TALES FROM THE LUSH ATTIC	THE CLASSIC ONE-SHOE RECORDS MAJ 1001	'83
	THE WAKE	SAHARA SAH 136	'85
	NINE IN A POUND IS HERE	BOX ER 1	'86
	LIVING PROOF	SAMURAI SAMR 045	'86
	NOMZAMO	SQUAWK VERH 43	'87
	LIVE REVELATION	(FR) BANZAI 2930	'88
	ARE YOU SITTING COMFORTABLY?	SQUAWK 836 429-1	'89
ISOTOPE	SAME	GULL GULP 1002	'74
	ILLUSION	GULP 1006	'74
	DEEP END	GULP 1017	'76
IT BITES	THE BIG LAD IN THE WINDMILL	VIRGIN V 2378	'86
	ONCE AROUND THE WORLD (CD)	CDV 2456	'88
	EAT ME IN ST LOUIS	CDV 2591	'89
JOE JACKSON	LOOK SHARP	A&M AMLH 64743	'79
	I'M THE MAN	AMLH 64794	'79
	BEAT CRAZY	AMLH 64794	'80
	JUMPIN' JIVE	AMLH 68530	'81
	NIGHT & DAY	AMLH 64609	'82
	MIKE'S MURDER	AMLX 64931	'83
	BODY AND SOUL	AMLX 65000	'84
	BIG WORLD	JWA 3	'86
	WILL POWER	AMA 3908	'87
JACKSON HEIGHTS	KING PROGRESS	CHARISMA CAS 1018	'70
	5TH AVENUE BUS	VERTIGO 6360 067	'72
	RAGAMUFFINS FOOL	6360 077	'73
	BUMP'N'GRIND	6360 092	'73
JADE	FLY ON STRANGEWINGS	DKM DJLPS 407	'70
JADE WARRIOR	SAME	VERTIGO 6360 033	'71
	RELEASED	6360 062	'71
	AUTUMMN'S DREAM	6360 079	'72
	FLOATING WORLD	ISLAND ILPS 9290	'74
	WAVES	ILPS 9318	'75
	KITES	ILPS 9393	'76
	WAY OF THE SUN	ILPS 9552	'78
	REFLECTIONS	(US) VINYARD BUTT 001	
	HORIZEN	PULSE 005	'84
JAN DUKES DE GREY	SORCERERS	DERAM NOVA SDN 8	'70
	MICE & RATS IN THE LOFT	T. ATLANTIC TRA 234	'71
BERT JANSCH	SAME	T. ATALNTIC TRA 125	'65
	IT DON'T BOTHER ME	TRA 132	'65
	JACK ORION	TRA 143	'66
	BERT & JOHN RENBOURN	TRA 144	'66
	NICOLA	TRA 157	'67
	BIRTHDAY BLUES	TRA 179	'68
	ROSEMARY LANE	TRA 235	'71
	MOONSHINE	REPRISE K 44225	'73
	L. A. TURNAROUND	CHARISMA CAS 1090	'74
	SANTA BARBARA HONEYMOON	CAS 1107	'75
	A RARE CONUNDRUM	CAS 1127	'77
	AVOCET	CLASS 6	'79
	13 DOWN	KICKING MULE 162	'80
	HEARTBREAK	LOGO 1035	'82
	JANSCH AND CLEMENTS (w. ROD CLEMENTS)	BLACK CROW CRO 218	
NOEL JONUS	HEROES OF THE WORLD	DJM DJF 20509	'77
JULIAN JAY SAVARIN	WAITERS ON THE DANCE	BIRTH RAB 2	'71
JET	SAME	CBS 80699	'75
JETHRO TULL	THIS WAS	ISLAND ILPS 9085	'68
	STAND UP	ILPS 9103	'69
	BENEFIT	ILPS 9123	'70
	AQUALUNG	ILPS 9145	'71
	LIVING IN THE PAST	CHRYSALIS CJT 1	'72
	THICK AS A BRICK	CHR 1003	'72
	PASSION PLAY	CHR 1040	'73
	WAR CHILD	CHR 1067	'74
	THE BEST OF JETHRO TULL	CHR 1078	'75
	MINSTREL IN THE GALLERY	CHR 1082	'75
	TOO OLD TO ROCK'N'ROLL	CHR 1111	'76
	SONGS FROM THE WOOD	CHR 1132	'77
	REPEAT (BEST OF JETHRO TULL VOL.2)	CHR 1135	'77
	HEAVY HORSES	CHR 1175	'78
	LIVE BURSTING OUT	CJT 4	'78
	STORMWATCH	CDL 1238	'79
	"A"	CDL 1301	'80
	BROADSWORD & BEAST	CDL 1380	'82
	UNDER WARPS	CDL 1461	'85
	CREST OF A KNAVE	CDL 1590	'87
	ROCK ISLAND		
	20 YEARS OF JETHRO TULL	T BOX 1	'88
BIG JIM SULLIVAN	SITAR BEAT	MERCURY SML 30001	'68
	JIM SULLIVAN	(US) PLAYBOY 103	'72
	BIG JIM'S BACK	RETREAT RTA 4001	'74
	SULLIVAN PLAYS OSULLIVAN	MAM RAM 3003	'77
	TEST OF TIME	STREET TUNES STLP	'77
EDDIE JOBSON	ZINC	(US) CAPITAL ST 12275	
	THEME OF SECRETS (CD)	(US) PRIVATE MUSIC 2005-2-P	
JODY GRIND	ONE STEP ON	T. ATLANTIC TRA 210	'69
	FAR CANAL	TRA 221	'70
ELTON JOHN	EMPTY SKY	DJM DJLPS 403	'69
	SAME	DJF 20406	'70
	TUMBLEWEED CONNECTION	DJLPS 410	'70
	17. 11. 70	DJLPS 414	'71
	FRIENDS	(US) PARAMOUNT 6004	'71
	MADMAN ACROSS THE WATER	DJM DJH 20420	'71
	HONKY CHATEAU	DJLPH 423	'72
	DON'T SHOOT ME, I'M ONLY THE PIANIST	DJLPH 427	'73

	GOODBYE YELLOW BRICK ROAD	DJLPD 1001	'73
	CARIBOU	DJLPH 439	'74
	CAPTAIN FANTASTIC	DJLPX 1	'74
	ROCK OF THE WESTIES	DJLPH 464	'75
	HERE & THERE	DJH 20473	'76
	BLUE MOVES	ROCKET ROLL 12	'76
	SINGLE MAN	TRAIN 1	'78
	VICTIM OF LOVE	HISPD 125	'79
	21 AT 33	HISPD 126	'80
	LADY SAMANTHA	DJM DJH 22085	'80
	THE FOX	ROCKET TRAIN 16	'81
	JUMP UP	HISPD 127	'82
	TOO LOW FOR ZERO	HISPD 24	'83
	BREAKING HEARTS	HISPD 25	'84
	ICE ON FIRE	HISPD 26	'85
ROBERT JOHN GODFREY	FALL OF HYPERION	CHARISMA CAS 1084	'74
	THE MUSIC OF WILLIAM ARKLE (cas)		
	REVERBERATIONS(cas)		
JON & VANGELIS	SHORT STORIES	POLYDOR POLD 5030	'80
	FRIENDS OF MR. CAIRO	POLD 5039	'81
	PRIVATE COLLECTION	POLH 4	'83
JONESY	NO ALTERNATIVE	DAWN DNLS 3042	'72
	KEEPING UP	DNLS 3048	'73
	GROWING	DNLS 3055	'73
JUDAS JUMP	SCORCH	PARLOPHONE PAS 10001	'70
JULIAN'S TREATMENT	A TIME BEFORE THIS	YOUNGBLOOD SYB 2	'70
JULY	SAME	MAJOR MINOR SMLP 29	'68
LADY JUNE	LINGUISTIC LEPROSY	CAROLINE C 1509	'74
JUNIOR'S EYES	BATTERSEA POWER STATION	R. ZONOPHONE SLRZ 1008	'69
JUSTIN	SAME	UNI UNLS 111	'70
KALEIDOSCOPE	TANGERINE DREAM	FONTANA TL 5448	'67
	FAINTLY BLOWING	STL 5491	'69
KESTREL	SAME	CUBE HIFLY 19	'75
KHAN	SPACE SHANTY	DERAM SDL-R 11	'72
KING CRIMSON	IN THE COURT OF THE CRIMSON KING	ISLAND ILPS 9111	'69
	IN THE WAKE OF POSEIDON	ILPS 9127	'70
	LIZARDS	ILPS 9141	'70
	ISLANDS	ILPS 9175	'71
	EARTHBOUND	HELP 6	'72
	LARKS TONGUES IN ASPIC	ILPS 9230	'73
	STARLESS & BIBBLE BLACK	ILPS 9275	'74
	RED	ILPS 9308	'74
	U.S.A.	ILPS 9316	'75
	YOUNG PERSONS GUIDE TO KING CRIMSON	ISLD 7	'75
	DISCIPLINE	EG EGLP 49	'81
	BEAT	EG	
	THREE OF A PERFECT PAIR	EG	
KINGDOM COME	GALACTIC ZOO DOSSIER	POLYDOR 2310 130	'72
	SAME	2310 178	'73
	JOURNEY	2310 254	'73
	LOST YEARS	GULL GUD 2003-4	'76
BASIL KIRCHIN	WORLDS WITHIN WORLDS	COLUMBIA SCX 6463	'71
	WORLDS WITHIN WORLDS	ISLAND HELP 18	'74
SONJA KRISTINA	SAME	CHOPPER CHOPE 5	'80
GREG LAKE	SAME	CHRYSALIS CHR 1357	'81
JACK LANCASTER	MARSCAPE	RSO 2394 170	'75
	WILD CONNECTIONS	ACROBAT ACRO 2	'79
LE MAT	THE WALTZ OF THE FOOL	WHAAM RECORDS BIG 6	
LED ZEPPELIN	SAME	ATLANTIC 588 171	'68
	II	588 198	'69
	III	2401 002	'70
	IV	2401 012	'71
	HOUSES OF THE HOLY	K 50014	'73
	PHYSICAL GRAFFITI	SWAN SONG SSK 89400	'75
	PRESENCE	SSK 59402	'76
	THE SONG REMAINS THE SAME	SSK 89402	'76
	IN THROUGH THE OUT DOOR	SSK 59410	'79
	CODA	SSK 59410	'79
JOHN LEES	A MAJOR FANCY	HARVEST SHVL 811	'73
DAVE LEWIS	SONGS OF DAVID LEIS	AX 1	'70
	FROM TIME TO TIME	POLYDOR 2383 420	'76
	A COLLECTION OF SHORT DREAMS	2383 522	'78
LINDA LEWIS	SAY NO MORE ...	REPRISE K 44130	'71
	LARK	K 44208	'72
	FATHOMS DEEP	RAFT 48501	'73
	NOT A LITTLE GIRL ANYMORE	ARISTA ARTY 109	'75
	WOMAN OVERBOARD	SPARTY 1003	'77
	HARIENDA VIEW	ARIOLA ARL 5033	
LIMELIGHT	SAME	FUTURE EARTH FER 008	'80
LITTLE FREE ROCK	SAME	T. ATLANTIC TRA 208	'69
LIVERPOOL SCENE	INCREDIBLE NEW LIVERPOOL SCENE	CBS 63045	'67
	AMAZING ADVENTURES OF	RCA SF 7995	'68
	BREAD ON THE NIGHT	SF 8057	'69
	ST. ADRIAN & CO BROADWAY AND 3RD	SF 8100	'70
	HEIRLOOM	SF 8134	'70
ANDREW LLOYD WEBBER	VARIATIONS	MCA MCF 2824	'78
LOCOMOTIVE	WE ARE EVERYTHING YOU SEE	PARLOPHONE PCS 7093	'70
LONG HELLO	SAME	private	'76
	VOL. 2	BUTT NOTT 004	'81
	VOL. 3	NOTT 005	'82
	VOL. 4	SHANGHAI HA 101	'83
JON LORD	GEMINI SUITE	PURPLE TPSA 7501	'71
	WINDOWS	TPSA 7513	'74
	SARABANDE	TPSA 7516	'76
	BEFORE I FORGET		'82
	FIRST OF THE BIG BAND		'84
LOVE AFFAIR	EVERLASTING LOVE	CBS S-63416	'69
	NEW DAY	S-64109	'70
HENRY LOWTHER	CHILD SONG	DERAM SML 1070	'70
LUV MACHINE	SAME	POLYDOR 2460 102	'71
JACKIE McAULEY	SAME	DAWN DNLS 3023	'71
McDONALD & GILES	SAME	ISLAND ILPS 9126	'70
SHELAGH McDONALD	ALBUM	B & C CAS 1019	'70
	STARGAZER	CAS 1043	'71
JOHN McLAUGHLIN	EXTRAPOLATION	POLYDOR 2310 018	'69
	DEVOTION	DOUGLAS 65075	'70
	MY GOALS BEYOND	69014	'71

	WHERE FORTUNE SMILES (w. J. SURMAN, S. MARTIN)	DAWN DNLS 3018	'71
	LOVE DEVOTION & SURRENDER (w. SANTANA)	CBS 59037	'73
	SHAKTI WITH JOHN McLAUGHLIN		'76
	IN RETROSPECT	POLYDOR 2675 091	'76
	NATURAL ELEMENTS		'78
	ELECTRIC GUITARIST	CBS 82702	'78
	ELECTRIC DREAMS (ONE TRUTH BAND)	(US) CBS 35785	'79
	LIVE		'81
	BELO HORIZONTE	(US) WARNER BSK 3619	'81
	MUSIC SPOKEN HERE	WARNER	'82
	PASSION, GRACE & FIRE		'83
	MAHAVISHNU (MAHAVISHNU)	WARNER	'84
	ADVENTURE IN RADIOLAND (MAHAVISHNU)	(I)	'86
	THE MEDITERRANEAN		'90
	LIVE AT THE ROYAL FESTIVAL HALL (JOHN McLAUGHLIN TRIO) (CD)	JMT 834 436-2	'90
HAROLD McNAIR	SAME	RCA SF 7969	'68
	FLUTE & NUT	INTS 1096	'70
	THE FENCE	B & C CAS 1016	'70
	SAME	CAS 1045	'72
	AFFECTION FINK	ISLAND	
TONY McPHEE	ME & THE DEVIL	LIBERTY LBS 83190	'68
	I ASKED FOR WATER	LBS 83252	'69
	SAME THING ON THEIR MINDS	SUNSET SLS 50209	'71
	THE TWO SIDES OF	WWA 001	'73
GILLIAN McPHERSON	POETS AND PAINTERS AND PERFORMERS	RCA SF 8220	'71
DUNCAN MACKAY	SCORE	EMI EMC 3168	'77
	VISA	EDGE HOG 2	'80
THE MAHAVISHNU ORCHESTRA	INNER MOUNTING FLAME	(US) CBS 31067	'71
	BIRDS OF FIRE	31996	'73
	BETWEEN NOTHINGNESS & ETERNITY	32766	'74
	APOCALYPSE	32957	'74
	VISIONS OF THE EMERALD BEYOND	33411	'75
	INNER WORLDS	33908	'76
MAGIC CARPET	SAME	MUSHROOM 220mr 20	'72
MAGNA CARTA	SAME	MERCURY SMCL 20166	'69
	SEASONS	VERTIGO 6360 003	'70
	SONGS FROM WASTIES ORCHARD	6360 040	'71
	IN CONCERT	6360 068	'72
	LORD OF THE AGES	6360 093	'73
	MARTINS CAFE	(NL) VERTIGO 6360 146	
	PUTTING IT BACK TOGETHER	POLYDOR 2321 012	'76
	SPOTLIGHT ON	PHILIPS 6625 031	'77
	PRISONERS ON THE LINE	9109 229	'78
	LIVE IN BREMEN 8/10/78	(NL) FONTANA 6438 080	'78
	NO TRUTH IN THE RUMOUR	(NL) ARIOLA 201 176	'79
MAGNUM	KINGDOM OF MADNESS	JET JETLP 210	'78
	MAGNUM II	JETLP 222	'79
	MARAUDER	JETLP 230	'80
	CHASE THE DRAGON	JETLP 235	'82
	THE ELEVENTH HOUR	JETLP 240	'83
	ON A STORYTELLER'S NIGHT	FM WKFM LP 34	'85
	ANTHOLOGY	RAW POWER RAWLP 007	'85
	VIGILANTE	POLYDOR POLD 5198	'86
	VINTAGE MAGNUM	JET JETLP 244	'86
	MIRADOR	FM/REVOLVER WKFMLP 106	'87
	WINGS OF HEAVEN	POLYDOR POLD 5221	'88
MAINHORSE	SAME	POLYDOR 2383 049	'71
WIL MALONE	SAME	FONTANA STL 5541	'70
MANDALABAMD	SAME	CHRYSALIS CHR 1095	'75
	THE EYE OF WENDER	CHR 1181	'78
MANFRED MANN CHAPTER 3	SAME	VERTIGO VO 3	'69
	VOLUME TWO	6360 012	'70
MANFRED MANN'S EARTH BAND	EARTH BAND	PHILIPS 6308 086	'72
	GLORIFIED MAGNIFIED	6308 125	'72
	MESSIN'	VERTIGO 6360 087	'73
	SOLAR FIRE	BRONZE ILPS 9265	'73
	THE GOOD EARTH	ILPS 9306	'74
	NIGHTINGALES	ILPS 9337	'75
	THE ROARING SILENCE	ILPS 9357	'76
	WATCH	BRON 507	'78
	ANGEL STATION	BRON 516	'79
	CHANCE	BRON 529	'80
	SOMEWHERE IN AFRIKA	BRON 543	'83
	BUDAPEST LIVE	BRON 550	'84
	CRIMINAL TANGO	10 DIX*35	'86
	MASQUE	69	'87
MICHAEL MANTLER	JAZZ COMPOSER'S ORCHESTRA	VIRGIN JD 3001	'74
	NO ANSWER	WATT 2	'74
	13 3/4	3	'75
	THE HAPLESS CHILD	4	'76
	SILENCE	5	'76
	MOVIES	7	'78
	MORE MOVIES	10	'81
	SOMETHING THERE	13	'83
	ALIEN	15	'85
	LIVE	18	'87
	MANY HAVE NO SPEECH	19	'88
PHIL MANZANERA	DIAMOND HEAD	ISLAND ILPS 9315	'75
	LISTEN NOW	POLYDOR 2302 074	'77
	K SCOPE	2302 083	'78
	PRIMITIVE GUITARS	EDITIONS EGED 14	'81
	SOUTHERN CROSS		
MARILLION	MARKET SQUARE HEROES	EMI EMIP 5351	'82
	SCRIPT FOR A JESTER'S TEAR	EMC 3429	'83
	FUGAZI	EMC 2400851	'84
	REAL TO REEL	EG 2603036	'84
	MISPLACED CGILDHOOD	EJ 2403401	'85
	CLUTCHING AT STRAWS	EMD 1002	'87
	THE THIEVING MAGPIE	MARL 1	'88

	SEASONS END	EMD 1011	'89
MARK ALMOND	SAME	HARVEST SHSP 4011	'71
	2		'72
	RISING	SHVL 809	'72
	73	(US) CBS 32486	'73
	TO THE HEART	(US) ABC ABCD 945	'76
	OTHER PEOPLE ROOMS	(US) A&M AM730	'78
	TUESDAY IN NEW YORK	(GER) LINE LLP 5040	'80
MARSUPILAMI	SAME	T. ATLANTIC TRA 213	'70
	AREANA	TRA 230	'71
THE MARVEL WORLD OF IKARUS	SAME	PYE NSPL 28161	'71
NICK MASON	FICTITIOUS SPORTS	HARVEST SHSP 4116	'81
	PROFILES (w. RICK FENN)	MAF 1	
MATCHING MOLE	SAME	CBS 64850	'72
	LITTLE RED RECORD	65260	'73
MATFIELD AND THE POND	NOT QUITE IT	DISTORTION DIST 3	'89
MELLOW CANDLE	SWADDLING SONGS	DREAM SDL 7	'72
MIGHTY BABY	SAME	HEAD HDLS 6002	'69
	A JUG OG LOVE	B. HORIZON 2931 001	'71
PHIL MILLER	CUTTING BOTH WAYS	(US) CUNE. RUNE 11	
	SPLIT SECONDS	RECKLESS RECK 8	'88
HARRY MILLER	CHILDREN AT PLAY	OGUN OG 200	'74
	FAMILY AFFAIR	OG 310	'77
	BLACKNELL BREAKDOWN	OG 320	'78
	IN CONFERENCE	OG 523	'78
	THE NEARER THE BONE, THE SWEETER THE MEAT	(GER)FMP SAJ 690	'79
	ZWECKNAGEL	SAJ 34	'80
	OPENED BUT HARDLY TOUCHED	SAJ 840/50	'80
	BERLIN BONES	SAJ 930	'81
	DOWN SOUTH	VERA JAZZ 4213	'84
MR. FOX	SAME	T. ATLANTIC TRA 226	'70
	THE GYPSY	TRA 236	'71
MOGUL THRASH	SAME	RCA SF 8156	'71
MONUMENT	THE FIRST MONUMENT	BEACON BEAS 15	'71
MOODY BLUES	MAGNIFICENT MOODIES	DECCA LK 4711	'66
	DAYS OF FUTURE PAST	SML 707	'67
	IN SEARCH OF THE LOST CHORD	SML 717	'68
	ON THE THRESHOLD OD A DREAM	SML 1035	'69
	TO OUR CHILDREN'S CHILDREN'S CHILDREN	THRESHOLD THS 1	'69
	QUESTION OF BALANCE	THS 3	'70
	EVERY GOOD BOY DESRVES FAVOUR	THS 5	'71
	SEVENTH SOJOURN	THS 7	'72
	CAUGHT LIVE PLUS FIVE	DECCA MB 3/4	'77
	OCTAVE	TXS 129	'78
	LAST DISTANCE VOYAGER	THRESHOLD TXS 139	'81
	THE PRESENT	TXS 140	'83
MOONKYTE	COUNT ME OUT	MOTHER SMOT 1	'71
MICHAEL MOORCOCK & THE DEEP FIX	THE NEW WORLDS FAIR	UA UAG 29732	'75
PATRICK MORAZ	I	CHARISMA CDS 4002	'76
	OUT OF THE SUN	CDS 4007	'77
	SAME	CDS 4015	'78
	FUTURE MEMORIES	(FR) CARRERE 67435	'79
	CD EXISTENCE	CAL 117	'80
	TIME CODE	LAMBORGHINI LMGLP 6000	'84
	MUSIC FOR PIANO AND DRUMS (MORAZ-BRUFORD)	EG EGED 33	'84
	HUMAN INTERFACE	CAPITAL ST 12558	'87
SPILIT OF JOHN MORGAN	SAME	CARNABY CNLS 6002	'69
	AGE MACHINE	CNLS 6007	'70
THE MOVE	SAME	R. ZONOPHONE SLRZ 1002	'66
	SHAZAM	SLRZ 1012	'70
	LOOKING ON	FLY 1	'71
	MESSAGE FROM THE COUNTRY	HARVEST SHSP 4013	'71
	CALIFORNIA MAN	SHSP 4035	'74
MOVING HEARTS	DOUBLE SINGLE	(IR)WEA 18826	'81
	SAME	K 58387	
	DARK END OF THE STREET	58718	
	LIVE HEARTS	IR 0230	
	THE STORM	TARA 3014	
MUSHROOM	EARLY ONE MORNING	(IR)HALPIX	'73
NATIONAL HEALTH	SAME	AFFINITY AFF 6	'78
	OF QUEUES & CURES	CHARLY CRL 5010	'78
	D. S. AL CODA	(US) EUROPA JP 2008	'82
NEIL	NEIL'S HEAVY CONCEPY ALBUM	(GER)WEA 240524-1	'84
NEUTRONS	BLACK HOLE STAR	UA UAS 29652	'74
	TALES FROM THE BLUE COCOON	UAG 29726	'75
THE NEW JAZZ ORCHESTRA	WESTERN REUNION	DECCA LK 4690	'65
	LE DEJEUNER SUR L'HERBE WITH	VERVE SVLP 9236	'69
TOM NEWMAN	FINE OLD TOM	VERGIN V 2022	'75
	FAERIE SYMPHONY	DECCA TXS 123	'77
	BAYOU MOON	CODA NAGE 2	'85
NEWS FROM THE BABEL	WORK RESUMED ON THE TOWER	RECOM. RE 6116	'84
	LETTERS HOME	RE I.I4	'86
NICE	THOUGHTS OF EMERLIST DAVJACK	IMMEDIATE IMSP 016	'67
	ARS LONGA VITA BREVIS	IMSP 020	'68
	SAME	IMSP 026	'69
	FIVE BRIDGES SUITE	CHARISMA CAS 1014	'70
	ELEGY	CAS 1030	'71
NICO	CHELSEA GIRL	(US) VERVE V 5032	'68
	THE MARBLE INDEX	(US) ELECTRA EKS 74029	'68
	DESERTSHORE	REPRISE K 44102	'71
	THE END	ISLAND ILPS 9311	'74
	DRAMA OF EXILE	AURA AUZ 714	'81
	CAMERA OBSCURA	B. BANQUETT BEGA 63	'85
	LIVE IN JAPAN		
	THE PEEL SESSIONS		
9 : 30 FLY	SAME	EMBER NR 5062	'72
NIRVANA	THE STORY OF SIMON SIMOPATH	ISLAND ILPS 9059	'67
	ALL OF US	ILPS 9087	'68
	DEDICATED TO MARKOS III	PYE NSPL 28132	'69
	LOCAL ANAESTHETIC	VERTIGO 6360 031	'70
	SONGS OF LOVE & PRAISE	PHILIPS 6308 089	'72
	BLACK FLOWER	BAM CARUSO KIRI 061	'87
NORTHWIND	SISTER BROTHER LOVER	R. ZONOPHONE SLRZ 1020	'71

NUCLEUS (IAN CARR)	ELASTIC ROCK	VERTIGO 6360 008	'70
	WE'LL TALK ABOUT IT LATER	6360 027	'71
	SOLAR PLEXUS	6360 039	'71
	BELLADONNA	6360 076	'72
	LABYRINTH	6360 091	'73
	ROOTS	6360 100	'73
	UNDER THE SUN	6360 110	'74
	SNAKE HIPS ETCETERA	6360 119	'75
	ALLEY CAT	6360 124	'75
	IN FLAGRANTE DELICTO	CAPITAL 11771	'77
	OUT OF THE LONG DARK	CAPITAL 11916	'79
	JAZZ BUHNE BERLIN (OMNIBUS LIVE)	AMIGA 855 749	'79
	AWAKENING	MOOD 24000	'80
	OLD HEARTLAND (IAN CARR)	EMI MMC 1016	'88
MICHAEL NYMAN	DECAY MUSIC	OBSCURE 6	'76
	MORZART WEVERN	PIANO TWI 009	'80
	SAME	(J) VICTOR VIP 6798	'81
	THE DRAUGHTSMAN'S CONTRACT	CHARISMA CAS 1158	'82
	THE KISS AND OTHER MOVEMENTS		'85
	A ZED AND TWE NOUGHTS	BFI	'85
	AND DO THEY DO/ZOO CAPRICES		'86
	DROWNING BY NUMBERS	VIRGIN	'88
	THE MAN WHO MISTOOK HIS WIFE FOR A HAT		'88
	LA TRAVERSEE DE PARIS (CD)		'89
	OUT OF THE RUINS (CD)		'89
	THE COOK, THE THIEF, HIS WIFE AND HER LOVER	VIRGIN VEN	'89
	GREENAWAY SOUNDTRACKS (CD)	VIRGIN DVEBN 55	'90
JOE O'DONNEL	GAODHAL'S VISION	(GER) POLYDOR 2460 274	'77
MIKE OLDFIELD	TUBULAR BELLS	VIRGIN V 2001	'73
	HERGEST RIDGE	V 2013	'74
	OMMADAWN	V 2043	'75
	BOXED	VBOX 1	'76
	INCANTATIONS	VDT 101	'78
	EXPOSED	VD 2511	'79
	PLATINUM	V 2141	'79
	QE2	V 2181	'80
	FIVE MILES OUT	V 2222	'82
	CRISIS	V 2262	'83
	DISCOVERY	V 2308	'84
	THE KILLING FIELDS	V 2328	'84
	ISLANDS	V 2466	'87
	EARTHMOVING	V 2610	'89
	AMAROK (CD)	CDV 2640	'90
SALLY OLDFIELD	WATER BEARER	BRONZE BRON 511	'78
	EASY	BRON 522	'79
	CELEBRATION	BRON 528	'80
	PLAYING THE FLAME	BRON 536	'81
	MIRRORS		
	INSTINCTS	CBS	
	FEMME	CBS	
ORANGE BICYCLE	SAME	PARLOPHONE PCS 7108	'70
MIKE OSBORNE	OUTBACK	TURTLE TUR 300	'70
	OSBORNE, TRACY	ORIGINAL CADILLAC SGC 1002	'72
	BOADERCLOSING	OGUN OG 300	'74
	SOS (SKIDMORE, OSBORNE, SURMAN)	OG 400	
	ALL NIGHT LONG	OG 700	'75
	TANDEM (w. STAN TRACY)	OG 210	'76
	MARCEL'S MUSE	OG 810	'77
TONY OXLEY	THE BAPTISED TRAVELLER	CBS 52664	'69
	FOUR COMPOSITIONS FOR SEXTET	64071	'70
	ICHONOS	RCA SF 8215	'71
	SAME	INCUS 8	
	FEBRUARY PAPERS	18	'77
	S.O.H. (SKIDMORE, OXLEY, HAURAND)	EGO 4011	'79
	S.O.H. RONNIE'S LAMENT	(GER) VIEW VS 0018	'81
	ACH WAS!?	(GER) FMP 0871	'81
	THE QUARTET - DELICATIONS	KONNEX ST 5002	'83
PALADIN	SAME	BRONZE ILPS 9150	'71
	CHARGE!	ILPS 9190	'71
PALLAS	ARRIVE ALIVE	COOL KING CKLP 002	'83
	PARIS IS BURNING	PINNACLE 12 CK 010	'83
	THE SENTINEL	HARVEST SHSP 2400121	'84
	THE KNIGHTMOVES	EMI 12PLS 3	'85
	THE WEDGE	HARVEST SHVL 850	'86
THE PARLOUR BAND	IS A FRIEND ?	DERAM SDL 10	'72
THE ALAN PARSON'S PROJECT	TALES OF MYSTERY & IMAGINATION	CHARISMA CDS 4003	'76
	I ROBOT	ARISTA SPARTY 1012	'77
	PYRAMID	SPARTY 1054	'78
	EVE	SPARTY 1100	'79
	TURN OF A FRIENDLY CARD	DLART 1	'80
	EYE OF THE SKY	3484	'82
	ANMONIA AVENUE	206 100	'84
	VULTURE CULTURE	206 577	'84
	STEREOTOMY	207 463	'85
	GAUDI		'87
PATTO	SAME	VERTIGO 6360 016	'70
	HOLD YOUR FIRE	6360 032	'71
	ROLL'EM SMOKE'EM	ISLAND ILPS 9210	'72
PAZ	KANDEEN LOVE SONG	SPOTLITE SPJ 507	'78
	LIVE AT CHICHESTER	MAGNUS 2	'78
	PAZ ARE BACK	SPOTLITE SPJ 518	'80
	LOOK INSIDE	PARADIN PALP 001	'83
PENDRAGON	FLY HIGH, FALL FAR	ELUSIVE ARRMP 001	'84
	FIRE IN HARMONY	ARRLP 100	'85
	THE JEWEL	ARRLP 101	'85
	9 : 15 LIVE	AWARENESS AWL 4042	'86
	KOWTOW	TOFF PEND 1	'88
PENGUIN CAFE ORCHESTRA	MUSIC FROM THE PENGUIN CAFE	OBSCURE OBS 7	'76
	SAME	EG	'81
	BROADCASTING FROM HOME	EG EGED 38	'84
	MUSIC FOR A FOUNDS HARMONIUM	EG 022	
	SINGS OF LIFE	EG EGED 50	'87
	WHEN IN ROMA (CD)		'88
PENTANGLE	SAME	T. ATLANTIC TRA 162	'68
	SWEET CHILD	TRA 178	'68
	BASKET OF LIGHT	TRA 205	'69
	CRUEL SISTER	TRA 228	'70
	REFLECTIONS	TRA 240	'71
	SOLOMONS SEAL	REPRISE K 44197	'72
	OPEN THE DOOR		
	IN THE ROUND		
	SO EARLY IN THE SPRING	(GER) PLANE 88649	
FRANK PERRY	DEEP REACE	QUARTZ 007	'81
	NEW ATLANTIS	(GER) C. HARMONY CEL 011	'84
MORRIS PERT	THE MUSIC OF MORRIS PERT	CHANTRY ABM 21	'75
GLENN PHILLIPS	LOST AT SEA	CAROLINE C 1519	'75
	SWIM IN THE WIND	VIRGIN V 2087	'77
	ELEVATOR	(US)	
ANTHONY PHILLIPS	THE GEESE & THE GHOST	HIT & RUN 001	'77
	WISE AFTER THE EVENT	ARISTA SPARTY 1063	'78
	PRIVATE PARTS AND PIECES	AFLP 1	'78
	SIDE	SPARTY 1085	'78
	PRIVATE PARTS AND PIECES 2		'80
	1984	RCA 5036	'81
	ANTIQUES (P. P. & P. III)	(US) PASSPORT PVC 8908	'82
	A CATCH AT THE TABLES (P. P. & P. IV)	PVC 8919	'84
	INVISIBLE MAN		
	TWELVE (P. P. & P. V)	(US) PASSPORT PVC 8926	'84
	HARVEST OF THE HEART	CHERRY RED BRED 66	'85
	IVORY MOON (P. P. & P. VI)	(US) PASSPORT PVC 8946	'86
	SLOW WAVES (P. P. & P. VII)	AUDION SYN 308	'87
	TARKA (w. HARRY WILLIAMSON)	PRT PYL 18	'88
PILOT	FROM THE ALBUM OF THE SAME NAME	EMI EMC 3045	'74
	SECOND FLIGHT	EMC 3075	'75
	MORIN HEIGHTS	EMA 779	'76
	TWO A CROWD	ARISTA SPRTY 1014	'77
PINK FLOYD	THE PIPER AT THE GATES OF DAWN	COLUMBIA SX 6157	'67
	A SAUCERFUL OF SECRETS	SX 6258	'68
	MORE	SCX 6346	'69
	UMMAGUMMA	HARVEST SHDW 1/2	'69
	ATOM HEART MOTHER	SHVL 781	'70
	RELICS	STARLINE SRS 5071	'71
	MEDDLE	HARVEST SHVL 795	'71
	OBSCURED BY CLOUDS	SHSP 4020	'72
	THE DARK SIDE OF THE MOON	SHVL 804	'73
	WISH YOU WERE HERE	SHVL 814	'75
	ANIMALS	SHVL 815	'77
	THE WALL	SHDW 411	'79
	A COLLECTION OF GREAT DANCE	SHVL 822	'81
	THE FINAL CUT	SHPF 1983	'83
	A MOMENTARY LASPE OF REASON	EMI EMD 1003	'87
	DELICATED SOUND OF THUNDER	EQ 5009	'88
PLASTIC PENNY	TWO SIDES OF PENNY	PAGE ONE POLS 005	'68
	CURRENCY	POLS 014	'69
	HEADS I WIN - TAILS YOU LOSE	POS 611	'70
PRETTY THINGS	SAME	FONTANA TL 5239	'65
	GET THE PICTURE	TL 5280	'65
	EMOTIONS	TL 5425	'67
	S. F. SORROW	COLUMBIA SCX 6306	'68
	PARACHUTE	HARVEST SHVL 774	'70
	FREEWAY MADNESS	WARNER K 46190	'72
	SILK TORPEDO	SWAN SONG SSK 59400	'74
	SAVAGE EYE	SSK 59401	'75
	THE SINGLES A'S & B'S	HARVEST SHSM 2022	'77
	CROSS TALK	WARNER K 56842	'80
	LET ME HEAR THE CHOIR SING	EDSEL ED 139	'84
	LIVE AT HEARTBREAK HOTEL	BIG BEAT WLK 24	'84
PRINCIPAL EDWARD'S MAGIC THEATRE	SOUNDTRACK	DANDELION S 63752	'69
	THE ASMOTO RUNNING BAND	DAN 8002	'71
	ROUND ONE	DERAM SML 1108	'74
PROCOL HARUM	SAME	R. ZONOPHONE LRZ 1001	'67
	SHINE ON BRIGHTLY	SLRZ 1004	'68
	A SALTY DOG	SLRZ 1009	'69
	HOME	SLRZ 1014	'70
	BROKEN BARRICADES	CHRYSALIS ILPS 9158	'71
	LIVE IN CONCERT	CHR 1004	'72
	GRAND HOTEL	CHR 1037	'73
	EXOTIC BIRDS & FRUIT	CHR 1058	'74
	PROCOL NINTH	CHR 1080	'75
	SOMETHING MAGIC	CHR 1130	'77
PROVIDENCE	EVER SENSE THE DAWN	THRESHOLD THS 9	'72
PUBLIC FOOT THE ROMAN	SAME	SOVEREIGN SVNA 7259	'73
PIP PYLE QUARTET	PIP PYLE'S EQUIPE OUT	(FR) 52e RUE EST RE 004	'87
QUASAR	FIRE IN THE SKY	Q RECORDS QUA 1	'83
	THE LORELI	QUA 2	'89
QUATERMASS	SAME	HARVEST SHVL 775	'70
QUEEN	SAME	EMI EMC 3006	'73
	II	EMC 767	'74
	SHEER HEART ATTACK	EMC 3061	'74
	A NIGHT AT THE OPERA	EMTC 103	'75
	A DAY AT THE RACES	EMTC 104	'76
	NEWS OF THE WORLD	EMA 784	'77
	JAZZ	EMA 788	'78
	LIVE KILLERS	EMSP 330	'79
	THE GAME	EMA 795	'80
	FLASH GORDON (soundtrack)	EMC 3351	'80
	HOT SPACE	EMC 797	'82
	THE WORKS	EMC 2400 141	'84
	A KIND OF MAGIC	EZ 3509	'86
	LIVE MAGIC	EMC 3519	'86
QUICKSAND	HOME IS WHERE I BELONG	DAWN DNLS 3056	'74
QUIET SUN	MAINSTREAM	ISLAND HELP 19	'75
QUIET WORLD	THE ROAD	DAWN DNLS 3007	'70
RAMASES	SPACE HYMNS	VERTIGO 6360 046	'71
	GLASS TOP COFFIN	6360 115	'75
RANDOM HOLD	SAME	RHX 1	'79
	THE VIEW FROM HERE	POLYDOR POLS 1015	'80

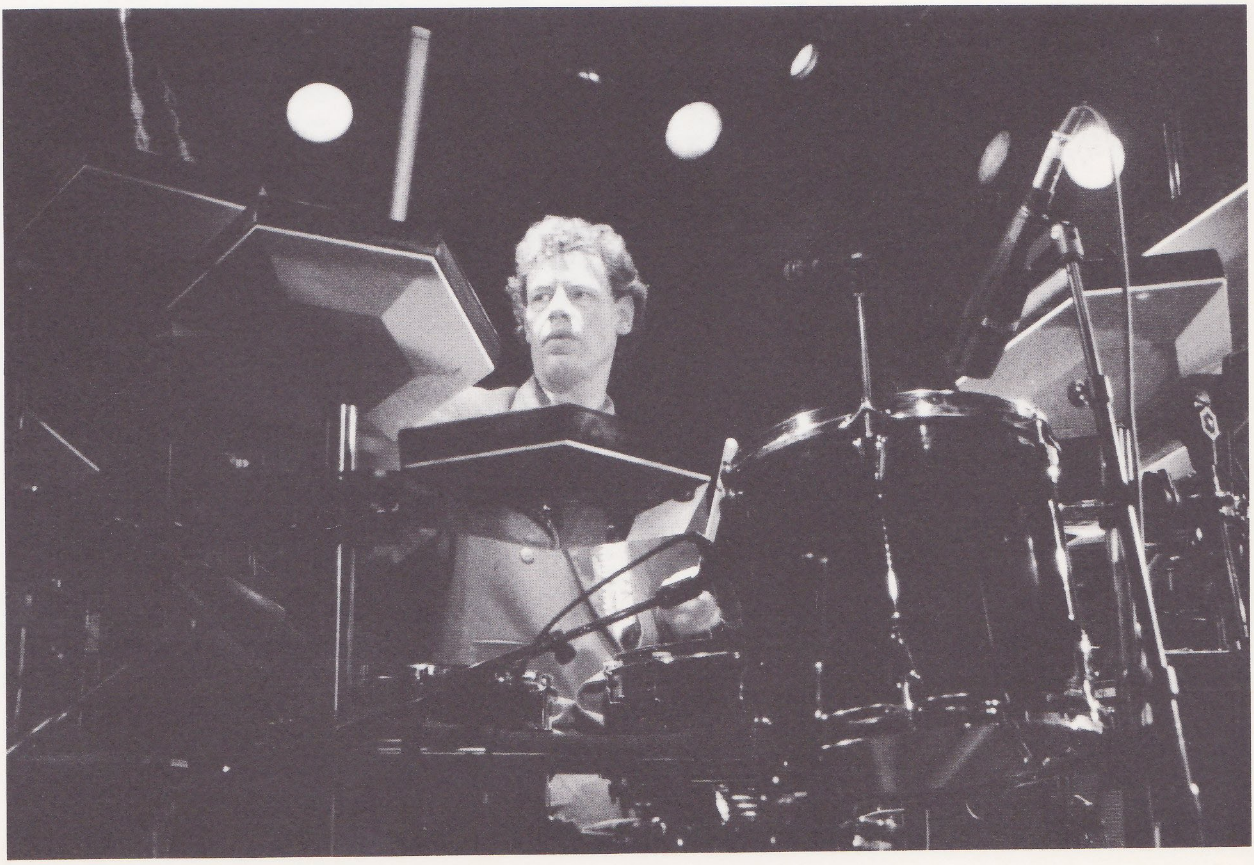
	AVALANCHE	UPPER CLASS DOUBLE CHIN 1	'81
	BURN THE BUILDINGS	RCA LP 3062	'82
RARE BIRD	SAME	CHARISMA CAS 1005	'69
	AS YOUR MIND FLIES BY	CAS 1011	'70
	EPIC FOREST	POLYDOR 2442 101	'72
	SOMEBODYS WATCHING	2383 211	'73
	BORN AGAIN	2383 274	'74
RAW MATERIAL	SAME	EVOLUTION 21006	'70
	TIME IS	NEON NE 8	'71
RED	SAME	JIGSAW SAW 2	'83
REFUGEE	SAME	CHARISMA CAS 1087	'74
REGULAR MUSIC	SAME	ROUGH TRADE ROUGH 73	'85
RENAISSANCE	SAME	ISLAND ILPS 9114	'69
	ILLUSION	HELP 27	'70
	PROLOGUE	SOVEREIGN 7253	'72
	ASHES ARE BURNING	7261	'73
	TURN OF THE CARDS	BTM 1000	'75
	SCHEHERAZADE & OTHER STORIES	1006	'75
	LIVE AT CARNEGIE HALL	2001	'76
	NOVELLA	WARNER K 56422	'77
	A SONG FOR ALL SEASONS	K 56460	'78
	AZURE D'OR	K 56633	'79
	CAMERA CAMERA	I.R.S. SP 70019	'81
	TIME-LINE	SP 70033	'82
JOHN RENBOURN	SAME	T. ATLANTIC TRA 135	'65
	BERT & JOHN	TRA 144	'66
	ANOTHER MONDAY	TRA 149	'67
	SIR JOHN ALOT OF MERRIE ENGLANDES MUSYK THYNG & YE GRENE KNYGHTE	TRA 167	'68
	THE LADY & THE UNICORN	TRA 224	'70
	FARO ANNIE	TRA 247	'71
	SO CLEAR	T. ATLANTIC TRASAM 28	'73
	HEADS & TAILS	TRASAM 18	'74
	THE HERMIT	T. ATLANTIC TRA 336	'76
	J. RENBOURN & S. GROSSMAN	KICKING MULE SNKF 139	'78
	THE BLACK BALLOON	T. ATLANTIC TRA 355	'79
	UNDER THE VOLCANO	(SWE) SONET SNTF 161	'80
	THE NINE MAIDENS	SPINDRIFT SPIN 102	
	LIVE .... IN CONCERT (w. STEFAN GROSSMAN)	SPIN 401	
	A MEDIAEVEL ALMANACK		
JOHN RENBOURN GROUP	A MADE IN BEDLAM	T. ATLANTIC TRA 348	'77
	THE ENCHANTED GARDEN	TRA 356	'80
	LIVE IN AMERICA	(US) FLYING FISH FF 103	'82
DON RENDLE & IAN CARR	SHADES OF BLUE	COLUMBIA 33SX 1733	'65
	DUSK FIRE	SX 6064	'66
	PHASE III	SCX 6214	'68
	LIVE	SCX 6316	'69
	CHANGE IS	SCX 6368	'69
FRANK RICOTTI	OUR POINT OF VIEW	CBS 52668	'69
RIFF RAFF	SAME	RCA 8351	'73
	ORIGINAL MAN	LPL-1 5023	'74
HOWARD RILEY	DISCUSSIONS	OPPORTUNITY 2500	'67
	ANGEL	CBS 52669	'69
	THE DAY WILL COME	64077	'70
	FLIGHT	TURTLE 301	'70
	SINGLENESS	CANON	
	SYNOPSIS	INCUS 13	'73
	INTERTWINE	MOSAIC GCM 771	'75
	SHAPED	GCM 781	'76
	THE TRONT CONCERT	VINYL VS 112	'77
	THE OTHER SIDE	SPOT LIGHTE SPJ 511	'79
	DUALITY	VIEW VS 020	'81
	SACETS	IMPETUS 38002	'81
	FOR FOUR ON TWO TWO	AFFINITY AFF 110	'83
ANDY ROBERTS	HOME GROWN	RCA SF 8086	'70
	NINA & THE DREAM TREE	PEGASUS PEG 5	'71
	EVERYONE	B & C CAS 1028	'71
	URBAN COWBOY	ELEKTRA K 42139	'73
	& THE GREAT STANPEDE	K 42151	'73
	LOOSE CONNECTION	VIRGIN V 2306	'84
ROCK WORKSHOP	SAME	CBS 64075	'70
	THE VERY LAST TIME	64394	'71
THE ROLLING STONES	SAME	DECCA LK 4605	'64
	12 X 5		'65
	OUT OF OUR HEADS	DECCA SKL 4733	'65
	AFTERMATH	SKL 4786	'66
	HIGH TIDE & THE GREEN GRASS	TXA 101	'66
	GOT LIVE IF YOU WANT IT	SKL 4838	'67
	BETWEEN THE BUTTONS	SKL 4852	'67
	FLOWERS	SKL 16487	'67
	THEIR SATANIC MAJESTIES REQUEST	TKS 103	'67
	BEGGARS BANQUET	SKL 4955	'68
	THROUGH THE PAST DARKLY	SKL 4955	'69
	LET IT BLEED	SKL 5025	'69
	GET YER YA YAS OUT	SKL 5065	'70
	STICKY FINGERS	ROLLING STONES COC 59100	'71
	EXILE ON MAIN STREET		'72
	GOATS HEAD SOUP		'73
	IT'S ONLY ROCK'N'ROLL		'74
	METAMORPHOSIS	DECCA SKL 5212	'75
	MADE IN THE SHADE	ROLLING STONES	'75
	BLACK & WHITE		'76
	LOVE YOU LIVE		'77
	SOME GIRLS	ROLLING STONES CUN 39108	'78
	EMOTIONAL RESCUE	CUN 39111	'79
	TATTOO YOU	39114	'81
	STILL LIFE	39115	'82
ROOM	PRE-FLIGHT	DERAM SML 1073	'70
ROXY MUSIC	SAME	ISLAND ILPS 9200	'72
	FOR YOUR PLEASURE	ILPS 9232	'72
	STRANDED	ILPS 9252	'73
	COUNTRY LIFE	ILPS 9303	'74
	SIREN	ILPS 9344	'75
	VIVA	ILPS 9400	'76

	MANIFESTO	POLYDOR POLH 001	'79
	FLESH & BLOOD	2302 099	'80
	AVARON	EGHP 50	'82
	HIGH ROAD	(Ger) EGMLP 1	'83
THE RUNNING MAN	SAME	NEON NE 11	'72
RAY RUSSELL	TURN CIRCLE	CBS 52586	'68
	DRAGON HILL	52663	'69
	RITES & RITUALS	64271	'71
	JUNE 11TH 1971	RCA SF 8214	'71
	SECRET ASYLUM	BLACK LION SELECT 2460 207	'73
	READY OR NOT	DJM DJH 20506	'77
MIKE RUTHERFORD	SMALLCREEPS	CHARISMA CAS 1149	'80
	ACTING VERY STRANGE	WEA K 99249	'82
SAILOR	SAME	EPIC EPC 80337	'74
	TROUBLE	EPC 69192	'75
	THIRD STOP	EPC 81637	'76
	CHECK POINT	EPC 82256	'77
	DRESSED FOR DROWNING	CARIBOU CRB 84534	'80
BRIDGET ST. JOHN	ASK ME NO QUESTIONS	DANDELION 62750	'69
	SONGS FOR THE GENTLE MAN	DAN 8007	'71
	THANK YOU FOR	2310 193	'72
	JUMBLE QUEEN	CHRYSALIS CHR 1062	'74
SALAMANDER	THE TEN COMANDMENTS	YOUNGBLOOD SSYB 14	'71
SAMURAI	SAME	GREENWICH GSLO 1003	'71
RIC SANDERS	WHENEVER	WATERFRONT MUSIC WF 021	'84
2ND VISION	FIRST STEPS	CHRYSALIS CHR 1289	'80
SECOND HAND	REALITY	POLYDOR	'69
	DEATH MAY BE YOUR SANTA CLAUS	MUSHROOM 200 MR6	'71
THE SEVEN AGES OF MAN	SAME	REDIFFUSION ZS 115	'72
SEVENTH WAVE	THINGS TO COME	GULL GULP 1001	'74
	PSI FI	GULP 1010	'75
SHAFTSBURY	THE LULL BEFORE THE STORM	O. K. RECORDS OKA 001	'79
	WE ARE THE BOYS	OKA 002	'81
SHELLEYAN ORPHAN	HELLEBORINE	ROUGH TRADE	'87
PETE SINFIELD	STILL	MANTICORE ANTI 2001	'73
	IN A LAND OF CLEAR COLORS (w. ENO)		'79
SKID ROW	SKID	CBS 63965	'70
	32 HOURS	64411	'71
ALAN SKIDMORE	ONCE UPON A TIME	DREAM NOVA SDN 11	
	TCB	PHILIPS 6308 041	'70
	SOS (SKIDMORE, OSBORNE, SURMAN)	OGUN OG 400	'75
	MORNING RISE	EGO 4006	'77
	S.O.H.	4011	'79
	S.O.H. BONNIE'S LAMENT	(GER) VIEW VS 0018	'81
SKIN ALLEY	SAME	CBS S 63847	'69
	TO PAGHAM & BEYOND	64140	'70
	TWO QUID DEAL	T. ATLANTIC TRA 260	'72
	SKINTIGHT	TRA 273	'73
SKY	SAME	ARIOLA ARLH 5022	'79
	2	AD SKY 2	'80
	3	A SKY 3	'81
	FORTHCOMING	A SKY 4	'82
SLAPP HAPPY	SORT OFF	(GER) POLYDOR 2310 204	'72
	SAME	VIRGIN V 2014	'74
	ACNALBASAC NOOM	RECOMMENDED RR 5	'80
SOFT MACHINE	SAME	(US) PROBE 4500	'68
	VOLUME 2	4505	'69
	THIRD	(US) CBS 30339	'70
	FOURTH	CBS 64280	'71
	FIFTH	64806	'72
	SIX	68214	'73
	SEVEN	65799	'73
	BUNDLES	HARVEST SHSP 4044	'75
	SOFTS	SHSP 4056	'76
	ALIVE & WELL	SHSP 4083	'78
	LAND OF COCKAYNE	EMI EMC 3348	'81
	TRIPLE ECHO	HARVEST SHTW 800	'77
	FACE & PLACES VOL. 7	(FR) BYG 529907	'71
	LIVE AT THE PROMS 1970	RECKLESS RECK 5	'88
SOLID GOLD CADILLAC	SAME	RCA SF 8311	'72
	DRAIN DAMAGE	SF 8365	'73
SOLSTICE	SILENT DANCE	EQUINOX EQRLP 001	'84
SPARKS	SAME	BEARSVILLE K 45511	'71
	WOOFER IN TWEETERS CLOTHING	K 45510	'72
	KIMONO MY HOUSE	ISLAND ILPS 9272	'74
	PROPAGANDA	ILPS 9312	'74
	INDISCREET	ILPS 9345	'75
	BIG BEAT	ILPS 9445	'76
	INTRODUCING SPARKS	EPIC 82284	'77
	NO 1 IN HEAVEN	VIRGIN V 2115	'79
	TERMINAL JIVE	V 2137	'80
	WHOMP THAT SUCKER		
CHRIS SPEDDING	BACKWOODS PROGRESSION	HARVEST SHSP 4004	'70
	SONGS WITHOUT WORDS	SHVL 776	'70
	THE ONLY LICK I KNOW	SHSP 4017	'72
	SAME	RAK SRAK 519	'76
	HURT	SRAK 529	'77
	GUITAR GRAFFITI	SRAK 534	'79
	I'M NOT LIKE EVERYBODY ELSE	SRAK 542	'80
SPIROGYRA	ST. RADIGUNDS	B & C CAS 1042	'71
	OLD BOOT WINE	PEGASUS PEG 13	'72
	BELLS, BOOTS AND SHAMBLES	POLYDOR 2310 246	'73
SPONTANEOUS MUSIC ENSEMBLE (SME)	CHARANGE	EYE MARK EMPL 1002	'66
	CALYOBIN	ISLAND	
	OLIV	MARMALADE 608 008	'69
	THE SOURCE	TANGENT TNGS 107	'70
	FOR C FOR PEACE & FOR YOU TO SHARE	A RECORDS A 001	'70
	BIRDS OF WEATHER	(FR) BYG 529 023	'71
	SO WHAT DO YOU THINK ?	TANGENT TGS 118	'71
	S.M.E. + BOBBY BRUFORD	FREEDOM FLP 40111	'71
	BOBBY BRUFORD, JOHN SURMAN + S.M.E.	NESSA 17	'71
	LIVE BIG BAND AND QUARTET	VINYL VS 0015	'71
	FACE TO FACE	EMANEN 303	'73

	S.M.E./L.S.P./JAN SPEELE/ ONE MUSIC ENSEMBLE, HOW YA DOIN' ?	NONDO 003	'73
	SPONTANEOUS IN CONCERT	EMANEN 311/312	'74
	S.M.E. += S.M.O.	A RECORDS	'75
	BIOSYSTEM	INCUS 24	'77
	S.M.E./S.M.O. IN CONCERT	SWEET FOLK & COUNTRY SFA 112	'81
	1. 2. ALBERT AYLER	AFFINITY AFF 81	'82
	EIGHTY-FIVE MINUTES PART 1	(AUSTRALIA) EMANEN	'88
SPOOKY TOOTH	IT'S ALL ABOUT SPOOKY TOOTH	ISLAND ILPS 9080	'68
	SPOOKY TWO	ILPS 9098	'69
	CEREMONY	ILPS 9107	'70
	THE LAST PUFF	ILPS 9117	'70
	YOU BROKE MY HEART	ILPS 9227	'73
	WITNESS	ILPS 9255	'73
	THE MIRROR	GOOD EAR EARL 2001	'74
SPRIGUNS	REVEL, WEIRD & WILD	DECCA SKL 5262	'76
	TIME WILL PASS	SKL 5286	'77
	MAGIC LADY	BANSHEE BAN 1101	'79
SPRING	SAME	NEON NE 6	'71
CHRIS SQUIRE	FISH OUT OF WATER	ATLANTIC K 50203	'75
STACKRIDGE	SAME	MCA MDKS 8002	'71
	FRIENDLINESS	MKPS 2025	'72
	MAN IN A BOWLER HAT	MCG 3501	'73
	EXTRAVAGANZA	ROCKET ROLLA 1	'74
	MR. MICK	ROLLA 3	'76
STEAMHAMMER	SAME	CBS 63611	'68
	MARK 2	63694	'70
	MOUNTAINS	B & C CAS 1024	'71
	SPEECH	(GER) BRAIN 1009	'72
STEEL MILL	GREEN EYED GOD	PENNY FARTHING PELS 549	'75
STEELEYE SPAN	HARK! THE VILLAGE WAIT	RCA SF 8113	'70
	PLEASE TO SEE THE KING	B & C CAS 1029	'71
	TEN MAN MOP OR MR. RESERVOIR BUTLER RIDES AGAIN	PEGASUS PEG 9	'71
	BELOW THE SALT	CHRYSALIS CHR 1008	'72
	PARCEL OF ROGUES	CHR 1046	'73
	NOW WE ARE SIX	CHR 1053	'74
	COMMONERS CROWN	CHR 1071	'75
	ALL AROUND MY HAT	CHR 1091	'75
	ROCKET COTTAGE	CHR 1123	'76
	STORM FORCE TEN	CHR 1151	'77
	LIVE AT LAST	CHR 1199	'78
	SAILS OF SILVER	CHR 1304	'80
	TEMPTED AND TRIED (CD)	260 285	
DAVE STEWART & BARBARA GASKIN	UP FROM THE DARK (CD)	(US)	'86
	BROKEN RECORDS - THE SINGLES	(J) MIDI MIL 1026	'87
	DIFFERENT WORLD + LEIPZIG	MIDI 1505	'87
	AS FAR AS DREAMS CAN GO	MIL 1035	'88
	THE BIG IDEA (CD)	28MD 1065	'90
AL STEWART	BEDSITTER IMAGE	CBS 63087	'67
	LOVE CHRONICLES	63460	'69
	ZERO SHE FLIES	63848	'70
	ORANGE	64730	'72
	PAST, PRESENT & FUTURE	65726	'74
	MODERN TIMES	80477	'75
	YEAR OF THE CAT	RCA RS 1082	'76
	THE EARLY YEARS	PL 25131	'78
	TIME PASSAGES	PL 25173	'78
	24 CARROTS	PL 25306	'80
	INDIAN SUMMER	LP 9001	'81
STILL LIFE	SAME	VERTIGO 6360 026	'71
STONE THE CROWS	SAME	POLYDOR 2425 017	'70
	ODE TO JOHN LAW	2425 042	'70
	TEENAGE LICKS	2425 071	'71
	ONTINUOUS PERFORMANCE	2391 043	'72
STRANGE DAYS	9 PARTS TO THE WIND	RETREAT RTL 6005	'75
STRAWBS	ALL OUR OWN WORK (1968 RECORDINGS)	HALLMARK SHM 813	'73
	SAME	A&M AMLS 936	'69
	DRAGONFLY	AMLS 970	'70
	JUST A COLLECTION OF ANTIQUES	AMLS 994	'70
	FROM THE WITCHWOOD	AMLS 64304	'71
	GRAVE NEW WORLD	AMLS 68078	'72
	BURSTING AT THE SEAMS	AMLS 68144	'73
	HERO & HEROINE	AMLH 63607	'74
	GHOSTS	AMLH 68277	'75
	MOMADNESS	AMLH 68331	'76
	DEEP CUTS	Oyster 2391 234	'76
	BURNING FOR YOU	2391 287	'77
	DEAD LINES	ARISTA SPART 1036	'78
	DON'T SAY GOODBYE	CHORD STROWBS 1	'87
STRAY DOG	SAME	MANTICORE K 43506	'73
	WHILE YOU'RE DOWN THERE	K 53504	'74
STRING DRIVEN THING	SAME	CONCORD CON 1001	'68
	SAME	CHARISMA CAS 1062	'72
	MACHINE THAT CRIED	CAS 1070	'73
	PLEASE MIND YOUR HEAD	CAS 1097	'74
	KEEP YER'AND ON IT	CAS 112	'75
STUD	SAME	DERAM SML 1084	'71
	SEPTEMBER	(GER) BASF 20 29054-9	'72
	GOODBYE-LIVE AT COMMAND	20 29117	'73
SUN ALSO RISES	SAME	THE VILLAGE THING VTS 2	'70
SUNFOREST	SOUND OF SUNFOREST	DERAM NOVA SDN 7	'69
SUN TREADER	ZIN ZIN	ISLAND HELP 13	'73
	MUSIC OF MORRIS PERT (1 SIDE)	CHANTRY ABM 21	'76
SUPERTRAMP	SAME	A&M AMLS 981	'70
	INDELIBLY STAMPED	AMLS 64306	'71
	CRIME OF THE CENTURY	AMLS 68258	'74
	CRISIS ? WHAT CRISIS ?	AMLH 68347	'75
	EVEN IN THE QUIETEST MOMENTS	AMLK 64634	'77
	BREAKFAST IN AMERICA	AMLK 63708	'79
	PARIS	AMLM 66702	'80
	FAMOUS LAST WORDS	AMLK 63732	'82
	BROTHER WHERE YOU BOUND		'85
	FREE AS A BIRD		'87
JOHN SURMAN	SAME	DREAM SML 1030	'69
	HOW MANY CLOUDS CAN YOU SEE	SML R-1045	'69
	TALES OF THE ALGONQUIN	SML 1094	'71
	WHEN FORTUNE SMILE	DAWN DNLS 3018	'71
	WESTERING HOME	ISLAND HELP 10	'72
	MORNING GLORY	ILPS 9237	'73
	LIVE AT WOODSTOCK TOWN HALL	DAWN DNLS 3072	'75
	LIVE AT MOERS FESTIVAL	RING 1006	'75
	SURMAN, OSBOURN, SKIDMORE	OGUN OG 400	'75
	SONATINAS	STREAM SJ 106	'78
	UPON REFLECTION	ECM 1148	'79
	THE AMAZING ADVENTURES OF SIMON SIMON	1193	'81
	SUCH WINTER'S OF MEMORY	1254	'82
	WITH HOLDING PATTERN	1295	'85
	RRIVATE CITY	ECM	'88
SWEET SLAG	TRACKING WITH CLOSE-UPS	PRESIDENT PTLS 1042	'71
SYNANTHESIA	SAME	RCA SF 8058	'69
T2	IT'LL ALL WORK OUT IN BOOMLAND	DECCA SKL 5050	'70
JUNE TABOR	SILLY SISTERS (w. MADDY PRIOR)	CHRYSALIS CHR 1101	'76
	AIRS & GRACES	TOPIC 12TS 298	'76
	ASHES & DIAMONDS	12TS 360	'77
	BEES ON HORSEBACK	FREE REED FRR 016	'77
	A CUT ABOVE (w. MARTIN SIMPSON)	TOPIC 12TS 410	'80
	ABYSSINIANS	12TS 432	'83
TEA & SYMPHONY	AN ASYLUM FOR THE MUSICALLY INSANCE	HARVEST SHVL 761	'69
	JO SAGO	SHVL 785	'70
TEMPEST	SAME	BRONZE ILPS 9220	'73
	LIVING IN FEAR	ILPS 9267	'74
10 CC	SAME	UK UKAL 1005	'73
	SHEET MUSIC	UKAL 1007	'74
	ORIGINAL SOUNDTRACK	MERCURY 9102 500	'75
	HOW DARE YOU	9102 501	'76
	DECEPTIVE	9102 502	'77
	LIVE & LET LIVE	6441 698	'77
	BLOODY TOURISTS	9102 503	'78
	THINGS WE DO FOR LOVE	POLYDOR	'79
	LOOK HEAR	MERCURY 9102 505	'80
	10 OUT OF 10	6359 048	'81
TEN TEARS AFTER	SAME	DREAM SML 1015	'67
	UNDEAD	SML 1023	'68
	STONEDHENGE	SML 1029	'69
	SSSSH	SML 1052	'69
	CRICKLEWOOD	SML 1065	'70
	WATT	SML 1078	'70
	A SPACE IN TIME	CHRYSALIS CHR 1001	'72
	ROCK'N'ROLL TO THE WORLD	CHR 1009	'72
	RECORDED LIVE	CHR 1049	'73
	POSITIVE VIBRATIONS	CHR 1060	'74
THERAPY	ALMANAC	CBS 69017	
	ONE NIGHT STAND	INDIGO SOUND STUDIOS IRS 5124	'73
	BRINGING THE HOUSE DOWN	A MUGNUM PRODUCTION MAG 0009	'75
	ALMANAC	DJM DJF 20492	'76
THIRD EAR BAND	ALCHEMY	HARVEST SHVL 756	'69
	SAME	SHVL 773	'70
	MCBETH	SHSP 4019	'72
	LIVE GHOST	(I) MATERIALI SONOLI MASO 33047	'89
	MAGIC MUSIC	MASO 90016	'90
THIRD QUADRANT	SEEING YOURSELF AS YOU REALLY ARE	TTS 8049	'82
THIS HEAT	SAME	PIANO THIS 1	'79
	HEARTH AND EFFICIENCY (12")	THIS 1201	'80
	DECEIT	ROUGH TRADE ROUGH 26	'81
BARBARA THOMPSON	PARAPHERNALIA	MCA MCF 2852	'78
	JUBIABA	MCF 2867	'78
	WILD TALES	MCF 3047	'79
	LIVE IN CONCERT	MCSP 309	'80
	MOTHER EARTH (B. THOMPSON'S PARAPHERNALIA)	(GER) VERA BRA NO.5	'82
TIME	SAME	BUK BULP 2005	'75
KEITH TIPPETT	YOU ARE HERE, I AM THERE (THE KEITH TIPPETT GROUP)	POLYDOR 2383 004	'70
	DEDICATED TO YOU, BUT YOU WEREN'T LISTENING (THE KEITH TIPPETT GROUP)	VERTIGO 6360 024	'71
	BLUE PRINT (OVARY LODGE)	RCA SF 8290	'72
	OVARY LODGE (OVARY LODGE)	SF 8372	'73
	OVARY LODGE (OVARY LODGE)	OGUN OG 600	'76
	T. N. T. (T. N. T.)	(US) EMANEM 3307	'76
	CRUEL BUT FAIR (HOPPER, DEAN, TIPPETT, GULLIVAN)	(NOR) COMPENDIUM FIDARDO 4	'76
	WARM SPIRITS COOL SPRITS (J. STEVENS, T, WATTS, K. & J. TIPPETTS)	(GER) VINYL VS 101	'77
	PIPE DREAM (w. M. CHARIG)	OGUN OG 710	'77
	FRAMES (KEITH TIPPETT'S ARK)	CGD 003-4	'78
	UNLONELY RAINDANCER	(HO) UNIVERSE PRODUCTIONS 2LS 48	'79
	NO GOSSIP (w. L. MOHOLO)	(GER) FMP SAJ 28	'80
	MUSIJAN	SAJ 37	
	TERN (V.A.)	SAJ 43-44	'82
	ON FOCUS (w. H. RILEY)	AFFINITY AFF 137	'85
	MERCY DASH (HOPPER, DEAN, TIPPETT, GULLIVAN)	CULTURE PRESS CP 2001	'85
	MUSIJAN II	(GER) FMP SAJ 55	'86
	LOW FLYING AIRCRAFT (D. MAURER, J. JUHN, D. CROSS, K. TIPPETT)	RED HAT R 101	'87
	COUPLE IN SPIRIT (CD) (w. JULIE TIPPETTS)	EG EEGCD 52	'88
JULIE TIPPETTS (DRISCOL)	1969 (J. DRISCOL)	POLYDOR 2480 074	'71
	SUNSET GLOW	UTOPIA UTS 601	'75
	VOICE (w. M. NICHOLLS)	OGUN OG 110	'77
	ENCORE (w. B. AUGER)	WARNER K 56458	'78
	SWEET AND S'OURS (w. M. NICHOLLS)	(GER) FMP SAJ 38	'82

	COUPLE IN SPIRIT (CD) (w. KFITH TIPPETT)	EG EEGCD 52	'88
TIR NA NOG	SAME	CHRYSALIS ILPS 9153	'71
	A TEAR & A SMILE	CHR 1006	'72
	STRONG IN THE SUN	CHR 1047	'73
TITUS GROAN	SAME	DAWN DNLS 3012	'70
TOMORROW	SAME	PARLOPHONE PMC 7042	'68
TONTON MACOUTE	SAME	NEON NE 4	'71
COLIN TOWNS	FULL CIRCLE	VIRGIN V 2093	'78
TRADER HORN	MORNING WAY	DAWN DNLS 3004	'70
TRAFFIC	DEAR MR. FANTASY	ISLAND ILPS 9061	'67
	SAME	ILPS 9081	
	LAST EXIT	ILPS 9097	
	JOHN BARLEYCORN MUST DIE	ILPS 9116	
	WELCOME TO THE CANTEEN	ILPS 9166	
	LOW SPARK OF HIGHHEELED BOY	ILPS 9180	
	SHOOT OUT AT THE FANTASY FACTORY	ILPS 9224	'73
	ON THE ROAD	ISLD 2	'73
	WHEN THE EAGLE FLIES	ILPS 9273	'74
TRAPEZ	SAME	THRESHOLD THS 2	'70
	MEDUSA	THS 4	'70
	YOU ARE THE MUSIC	THS 8	'72
	HOT WIRE	WARNER K 56064	'74
	SAME	K 56165	'75
	HOLD ON/RUNNING	AURA AUL 708	'78
	LIVE IN TEXAS	AUL 717	'80
TRANQUILITY	SAME	EPIC EPC 64729	'72
	SILVER	EPC 65418	'72
TREES	THE GARDEN OF JANE DELAWNEY	CBS 63837	'70
	ON THE SHORE	64168	'70
	LIVE!	(I) HABLA HBL 20404	'89
TRIFLE	FIRST MEETING	DAWN DNLS 3017	'71
THE TRIO	SAME	DAWN DNLS 3006	'70
	LIVE IN ALTENA	(GER) JG RECORDS JC 018	'70
	CONFLAGRATION	DAWN DNLS 3022	'71
TUDAR LODGE	SAME	VERTIGO 6360 043	'71
NIK TURNER'S SPHYNX	XITINTODAY	CHARISMA CDS 4011	'78
TURNING POINT	CREATURES OF THE NIGHT	GULL GULP 1022	'77
	SILENT PROMISE	GULP 1027	'78
TWELFTH NIGHT	LIVE AT THE TARGET	TN 002	'81
	FACT AND FICTION	TN 006	'82
	LIVE AND LET LIVE	MUSIC FOR NATIONS MFN 18	'84
	ART & ILLUSION	MFN 36	'84
TWINK	TWINK PINK	POLYDOR 2343 032	'70
	YOU NEED A FAIRY GODMOTHER (w. PLASTICLAND)	MIDNIGHT RECORDS MIRLP 144	'89
	MR. RAINBOW		
TYRANNOSAURUS REX (T. REX)	MY PEOPLE WERE FAIR AND HAD SKY IN THEIR HAIR BUT NOW THEY'RE CONTENT TO WEAR STARS ON THEIR BROWS	R. ZONOPHONE (S) LRZ 1003	'68
	PROPHETS, SEERS AND SAGES, THE ANGELS OF THE AGES	(S) LRZ 1005	'68
	UNICORN	(S) LRZ 1007	'69
	A BEARD OF STARS	(S) LRZ 1013	'70
	T. REX	FLY HIFLY 2	'70
	ELECTRIC WARRIOR	HIFLY 6	'71
	BOLAN BOOGIE	HIFLY 8	'72
	THE SLIDER	T. REX WAX CO. BLN 5001	'72
	TRAX	BLN 5002	'73
	GREAT HITS	BLN 5003	'73
	ZINC ALLOY AND THE HIDDEN RIDERS OF TOMORROW OR A CREAMED CAGE IN AUGUST	BLNA 7751	'74
	BOLAN'S ZIP GUN	BLNA 7752	'75
	FUTURISTIC DRAGON	BLNA 5004	'76
	DANDY IN THE UNDERWORLD	BLNA 5005	'77
JUDIE TZUKE	WELCOME TO THE CRUISE	ROCKET TRAIN 7	'79
	SPORTSCAR	TRAIN 9	'80
	I AM PHOENIX	TRAIN 15	
	STAY WITH ME TILL DAWN	ROCKET	'81
	ROAD NOISE	CHRYSALIS CTY 1405	'82
	SHOOT THE MOON	CDL 1382	'82
	RITMO	CDL 1442	'83
	TURNING		
	A MESSAGE FROM RADIO CITY		
UK	SAME	POLYDOR 2302 080	'78
	DANGER MONEY	2302 089	'79
	NIGHT AFTER NIGHT	2302 096	'79
URIAH HEEP	VERY'UMBLE VERY'EAVY	VERTIGO 6360 006	'70
	SALISBURY	6360 028	'71
	LOOK AT YOUSELF	BRONZE ILPS 9169	'71
	DEMONS & WIZARDS	ILPS 9193	'72
	MAGICIAN'S BIRTHDAY	ILPS 9213	'72
	LIVE	ISLD 1	'73
	SWEET FREEDOM	ILPS 9245	'73
	WONDERWORLD	ILPS 9280	'74
	RETURN TO FANTASY	ILPS 9335	'75
	HIGH & MIGHTY	ILPS 9384	'76
	FIREFLY	ILPS 9483	'77
	INNOCENT VICTIM	BRON 504	'77
	FALLEN ANGEL	BRNA 512	'78
	CONQUEST	BRNA 524	'80
	ABOMINOG	BRON 538	'82
	HEAD FIRST	BRON 545	'83
	EQUATOR	PORTRAIT PRT 26414	'85
	LIVE IN EUROPE 1979	ROW POWER RAWLP 030	'87
	LIVE IN MOSCOW	LEGACY LLP 118	'88
	LIVE AT SHEPPERTON '74	CASTLE COMMS HEEP 1	'88
	THE RAGING SILENCE	LEGACY LLP 120	'89
VAN DER GRAAF GENERATOR	AEROSOL GREY MACHINE	(US) MERCURY SR 61238	'68
	THE LEAST WE CAN DO IS WAVE TO EACH OTHER	CHARISMA CAS 1007	'70
	H TO HE WHO AM THE ONLY ONE	CAS 1027	'70
	PAWN HEARTS	CAS 1051	'71
	68 - 71	CS 2	'72
	GODBLUFF	CAS 1109	'75
	STILL LIFE	CAS 1116	'76
	WORLD RECORD	CAS 1120	'76
	THE QUIET ZONE/THE PLEASURE DOME	CAS 1132	'77
	VITAL	CVLD 101	'78
	REPEAT PERFORMANCE	BG 3	'80
	TIME VAULTS	DEMI-MONDE DN 003	'85
VARIOUS ARTISTS	BEYOND THE EMPTY DREAM	CHARISMA CAS 1101	'75
	THE ELECTRIC SCORE	REVOLUTION REV 1/3	'73
	GREASY TRUCKERS	G. TRUCKERS GT 4997	'73
	JUNE, 1st, 1974	ISLAND ILPS 9291	'74
	ONE MORE CHANCE	CHARISMA CLASS 3	
	PETER & THE WOLF	RCA RL 12743	'78
	READING FESTIVAL '73	GM GML 1008	'73
	V	VIRGIN VD 2502	'75
VISITOR 2035	SAME	ARIOLA HANSA AHAL 8003	'78
ADRIAN WAGNER	DISTANCES BETWEEN US	ATALNTIC K 50082	'74
	INSTINCTS	CHARISMA CAS 1124	'77
	THE LAST INCA	CAS 1135	'78
RICK WAKEMAN	PIANO VIBRATIONS	POLYDOR 2460 135	'71
	SIX WIVES OF HENRY VIII	A&M AMLH 64361	'73
	JOURNEY TO THE CENTRE OF THE EARTH	AMLH 63621	'74
	KING ARTHUR	AMLH 64515	'75
	LISZTOMANIA	AMLK 64546	'75
	NO EARTHLY CONNECTION	AMLK 64583	'76
	WHITE ROCK	AMLH 64614	'76
	CRIMINAL RECORD	AMLK 64660	'77
	BEST KNOWN WORKS	AMLH 68447	'78
	RHAPSODIES	AMLX 68508	'79
	1984	CHARISMA CDS 4022	'81
	THE BURNING		
	ROCK'N ROLL PROPHET	MOON LUNA LP 1	'82
	G'OLE	CHARISMA CAS 1162	'83
	SILENT NIGHT	T.B.G. PRESIDENT RW 1	'85
	LIVE AT HAMMERSMITH	RW 2	'86
	COUNTRY AIRS	CODA NEGA 10	'87
	ZODIAC		
	TIME MACHINE		
WALLY	SAME	ATLANTIC K 50051	'74
	VALLY GARDENS	K 50180	'75
WALRUS	SAME	DERAM SML 1072	'70
WARM DUST	AND IT CAME TO PASS	TREND TNLS 700	'70
	PEACE FOR POR TIME	TNLS 6001	'70
	SAME	(GER) BASF 20 29055-7	
WATER INTO WINE BAND	HILL CLIMBING FOR BEGINNERS	MYRRH MYR 1004	'74
ROGER WATERS	THE BODY (w. RON GEESIN)	HARVEST SHSP 4008	'70
	THE PROS AND CONS OF HITCH HIKING	SHVL 2401051	
	RADIO KAOS	KAOS 1	'87
DARRYL WAY	CONCERTO FOR ELECTRIC VIOLIN	ISLAND ILPS 9550	'78
	THE HUMAN CONDITION (w. OPUS 20)	VIRGIN VENTURE VE 8	'87
THE WAY WE LIVE	A CANDLE FOR JUDITH	DANDELION DAN 8004	'71
THE WEB	FULLY INTERLOCKING	DERAM SML 1025	'68
	THERAPHOSIA BLONDI	SML 1058	'70
	I SPIDER	POLYDOR 2383 024	'70
MIKE WESTBROOK	CELEBRATION	DERAM SML 1013	'67
	RELEASE	SML 1031	'68
	MARCHING SONG VOL. 1, VOL,2	SML 1047-48	'69
	LOVE SONGS	SML 1069	'70
	METROPOLIS	NEON NE 10	'71
	TYGER, A CELEBRATION OF WILLIAM BLAKE	RCA RED SEAL SER 5612	'71
	SOLID GOLD CADILLAC (SOLID GOLD CADILLAC)	RCA SF 8311	'72
	LIVE	CADILLAC SGC 1001	'72
	BRAIN DAMAGE (SOLID GOLD CADILLAC)	RCA SF 8365	'73
	CITADEL/ROOM 315	SF 8433	'74
	PLAYS "FOR THE RECORD" (BRASS BAND)	T.ATALNTIC TRA 312	'75
	LOVE, DREAM AND VARIATIONS	TRA 323	'75
	GOOSE SAUCE	ORIGINAL ORA 001	'78
	PIANO	ORA 002	
	MAMA CHICAGO	RCA PL 25252	'79
	THE WESTBROOK BLAKE	ORIGINAL ORA 003	'80
	THE PARIS ALBUM (BRASS BAND)	(FR) POLYDOR 2655 008	'81
	THE CORTEGE	ORIGINAL ORA 309	'82
	A LITTLE WESTBROOK MUSIC	WESTBROOK LWM 1	'83
	ON DUKE'S BIRTHDAY	(SWI) HAT ART 2012	'84
	WESTBROOK - ROSSINI	2040	'87
	LOVE FOR SALE		
	PIERIDES (THE DANCE BAND)	CORE COLP 4.00377 J	'87
	LONDON BRIDGE IS BROKEN DOWN	VIRGIN	'88
WESTWIND	LOVE IS	PENNY FARTHING PELS 505	'70
JOHN WETTON	JACK KNIFE		
WHISTLER	HO HUM	DERAM SML 1083	'71
ALAN WHITE	RAMSHACKLED	ATLANTIC K 50217	'76
WHITE NOISE	AN ELECTRIC STORM	ISLAND ILPS 9099	'69
	SAME	VIRGIN V 2032	'75
	RE ENTRY		'80
	WHITE NOISE 3		
THW WHO	MY GENERATION	BRUNSWICK LAT 8616	'65
	A QUICK ONE	REACTION 593002	'66
	WHO SELL OUT	TRACK 613 002	'67
	TOMMY	613 013-014	'69
	LIVE AT LEEDS	2406001	'70
	WHO'S NEXT	2408 102	'71
	QUADROPHENIA	2657 013	'73
	ODDS & SODS	2406 116	'74
	WHO BY NUMBERS	POLYDOR 2490 129	'75
	WHO ARE YOU	WHOD 5004	'78
	KIDS ARE ALRIGHT	2675 179	'79
	FACE DANCES	WHOD 5037	'81
	IT'S HARD	WHODC 5066	'82
ROBIN WILLIAMSON	MYRRH	ISLAND HELP 2	'72

	JOURNEY'S EDGE	(US) FLYING FISH FF 033	'77
	AMERICAN STONEHENGE	FF 062	'78
	GLINT AT THE KINDLING	FF 096	'79
	SONGS OF LOVE & PARTING	FF	
	LEGACY OF THE SCOTTISH HARPERS	FF 358	
	LEGACY OF THE SCOTTISH HARPERS VOL. 2	FF 390	
	WINTER TURNING	PALANT LIFE PLR 075	'86
	SONGS FOR CHILDREN	(CA) CLADDAGH CCF 19	
	TEN OF SONGS	PLANT LIFE PLR 081	'88
GARY WIND	DOGFACE	(FR) EUROPA JC 2111	'82
	DEEP WATER		
NORMA WINSTON	EDGE OF TIME	ARGO ZDA 148	'72
	SOMEWHERE CALLED HOME (CD)	ECM 831 107-2	
WISHBONE ASH	SAME	MCA MKPS 2014	'70
	PILGRIMAGE	MDKS 8004	'71
	ARGUS	MDKS 8006	'72
	WISHBONE FOUR	MDKS 8011	'73
	LIVE DATES	MCSP 254	
	THERES THE RUB	MCF 2575	'74
	LOCKED IN	MCF 2750	'76
	NEW ENGLAND	MCG 3528	'76
	FRONT PAGE NEWS	MCG 3524	'77
	NO SMAKE WITHOUT FIRE	MCG 3528	'78
	JUST TESTING	MCF 3052	'79
	NUMBER THE BRAVE	MCF 3103	'81
	TWIN BARRELS BURNING	AVM ASH 1	'82
	RAW TO THE BONE	NEAT	'85
WIZZARD	WIZZARD BREW	HARVEST SHSP 4025	'73
	EDDY AND THE FALCONS	WARNER k 56029	'74
	SEE MY BABY JIVE	HARVEST SHSP 4034	'74
WOLF	CANIS LUPUS	DERAM SDL 14	'73
	SATURATION POINT	SML 1104	'73
	NIGHT MUSIC	SML 1116	'74
	ANTHLOGY	(J) KING GP 1008	'76
WOOLY WOLSTENHOLME	MAESTOSO	POLYDOR 2374 165	'80
ROY WOOD	BOULDERS	HARVEST SHVL 803	'75
	MUSTARD	JET SUPER JET LP 12	'75
	THE RPY WOOD STORY	HARVEST SHDW 408	'76
	ON THE ROAD AGAIN	(US) WARNER BSK 3247	'79
	STARTING UP	LEGACY LLP 106	'86
WOODEN HORSE	SAME	YORK FYK 403	'72
	II	FYK 413	'73
THE WOODEN O	A HANDFUL OF PLEASANT DELITES	MIDDLE EARTH MDLS 301	'69
WOODS BAND	SAME	GREENWITC GSLP 1004	'71
THE WORK	SLOW CRIMES	RRJ 002	'82
	LIVE IN JAPAN	005	'82
THE WORLD	LUCKY PLANET	LIBERTY LBG 83419	'70
RICHARD WRIGHT	WET GREAM	HARVEST SHVL 818	'78
	IDENTITY (ZEE)	SHSP 2401011	
WRITING ON THE WALL	THE POWER OF THE PICTS	MIDDLE EARTH MDLS 303	'69
ROBERT WYATT	THE END OF AN EAR	CBS 64189	'70
	ROCK BOTTOM	VIRGIN V 2017	'74
	RUTH IS STRANGER THAN RICHARD	V 2034	'75
	NOTHING CAN STOP US	ROUGH TRADE	'81
	THE ANIMALS FILM	ROUGH TRADE ROUGH 40	'82
	OLD ROTTEN HAT	ROUGH 69	'85
YARDBIRDS	WITH SONNY BOY WILLIAMSON	FONTANA TL 5277	'64
	FIVE LIVE YARDBIRDS	COLUMBIA 33SX 1677	'64
	FOR YOUR LOVE	(US) EPIC 26167	'65
	HAVING A RAVE UP	26177	'65
	SAME	COLUMBIA SCX 6063	'66
	OVER UNDER SIDEWAYS DOWN	(US) EPIC 26210	'66
	GREAT HITS	(US) 26246	'67
	LITTLE GAMES	26313	'67
	LIVE YARDEIRDS	30615	'71
YES	SAME	ATLANTIC 588 190	'69
	TIME & A WORD	2400 006	'70
	THE YES ALBUM	2400 101	'71
	FRAGILE	2401 019	'71
	CLOSE TO THE EDGE	K 50012	'72
	YESSONGS	K 60045	'73
	TOPOGRAPHIC OCEANS	K 80001	'73
	RELAYER	K 50096	'74
	YESTERDAYS	K 50048	'75
	GOING FOR THE ONE	K 50379	'77
	TORMATO	K 50518	'78
	YESSHOWS	K 60142	'80
	DRAMA	K 50736	'80
	CLASSIC YES		'81
	90125		
	9012 LIVE		
	BIG GENERATOR		
	ANDERSON, BRUFORD, WAKEMAN, HOWE (ABWH)	ARISTA 209 970	'89
ZAKARRIAS	SAME	DERAM SML 1091	'71
ZOMBIES	BIGINS HERE	DECCA LK 4679	'65
	ODESSEY AND ORACLE	CBS S-63280	'68



Marquee belle musique d'aujourd'hui vol.054

税込定価1,200円/5月25日発売

[特集]

PINK FLOYD

3月30日マイアミから始まるワールド・ツアーはN.Y.、パリ、バーゼル他各地のスタジアムでのチケットも即日完売、いよいよ10年1作となり、3月22日の新作リリースに合わせて、宣伝なし、インタビューなし、機材重量に見合う会場なし、と日本公演も危いピンク・フロイド。今やローリング・ストーンズと唯一並らんで、金持ち日本を抜きにしても回っていくロック・ミュージックの巨竜、ピンク・フロイド・サーカスを特集。

- ■CD Edition I：CD化に伴う追加収録、再編集等を総チェック、連載。
- ■Ralph Lundsten, Terry Oldfield, アンビエント・サウンド・セレクション
- ■ユーロ・ロックの巨人達
- ■Canterbury Files
- ■Live Progression
- ■MAGMAとその周辺：Stella Vander
- ■アコースティック見聞録
- ■ラルフ・ヒューベルト：MEKONG DELTA/SHWARZARBEIT新作インタビュー
- ■Euro Masterpiece On CD 他

BACKNUMBER

- ●掲載以外の号は売切れです。
- ●送料は一冊のみの場合310円、2・3冊は380円、4冊は450円、5・6冊は520円、7冊は590円、8冊は660円です。
- ●お近くの書店・レコード店でお求めになれない場合は、定期購読をお勧めします。一年分(6冊)の購読料9,060円(送料込)を現金書留、郵便為替、郵便振替(東京7-27224：マーキームーン社)にて御送金ください。
- ●送金後2週間以内に本が届かない場合は御連絡ください。(Tel.03-3954-2055)

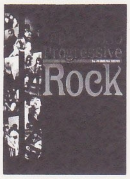
マーキーの別冊 発売中！



「ブリティッシュ・ロック集成」
＊遂に増刷出来！
税込定価￥3600
送料￥380



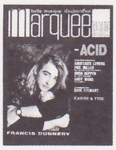
ユーロ・ロック集成①
「イタリアン・ロック集成」
税込定価￥4000
送料￥380



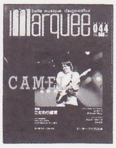
「HISTORY OF JAP'S PROGRESSIVE ROCK 1970-1990」
ヌメロ・ウエノ著
税込定価￥3600 送料￥380



037 ￥1,200
特集：'91アーティスト・カタログ/オール・アバウト・イヴ/デイヴ・スチュワート/キャラヴァン/ソーニャ・クリスティナ/アニー・ハズラム/バーバラ・ガスキン/アーバン・サックス/アフター・ディナー/ジョン・ゾーン



038 ￥1,200
特集：アシッド[ヨーロピアン&アメリカン・アシッド・カタログ、サイバー・パンク他]/フランシス・ダナリー/アンビシャス・ラヴァーズ/フィル・ミラー/ヒュー・ホッパー/アンディ・ワード/アース&ファイアー



044 ￥980
特集：こだわり感覚[国内盤シングル、私とメロトロン、ユーロ紀行、ミニコミ総覧]デヴィッド・アレン/キャメル/ジュリー・クルーズ/MAレコーディング/ピーター・ゲイブリエル/ビリティッシュ/フォーク



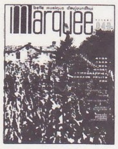
046 ￥1,200
特集：シンフォニック・ロック最前線[前編：ヨーロッパ諸国/各国主要アルバム、アーティスト・カタログ他]/クリス・カトラー/ロバート・フリップ/マイク・オールドフィールド/アラン・ホールズワース/ファウスト



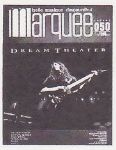
047 ￥1,200
特集：シンフォニック・ロック最前線[後編：日本、アメリカ大陸/センス・オヴ・ワンダー/ページェント他]/アングラガルド/イシルドゥルス・バーネ/アモン・デュール/パスカル・コムラード/ペンタングル



048 ￥1,200
特集：マグマ[インタビュー、レビュー多数]/インタビュー[イアン・アンダーソン、ファウスト、マーク・ナウシーフ、ラルフ・ヒューベルト]/マジカル・パワー・マコ/カンタベリー・ファイルズ/クリス・カトラー/ザバダック他



049 ￥1,200
PROGRESSION：音楽の行動[金子飛鳥、大友良英、GHOST、TIPOGRAPHICA、BONDAGE FRUITS]/ユーロピアン・ロック・コレクション・アンコール/ヴォイスプリント・レーベル/フォーカス/ベルナール・パガノッティ



050 ￥1,200
ライヴ・リポート[マドレデウス/ドリーム・シアター/ヴィエナ]/インタビュー[ドリーム・シアター]/チャールズ・ヘイワード/マフィンズ/美狂乱/サムラ・ママス・マンナ/カルメン/シルヴィアン&フリップ



051 ￥1,200
特集：STEP ACROSS THE BORDER[Cuneiformレーベルの概要と主要アーティスト]/ロバート・フリップ・インタビュー/ライヴ・リート[ザバダック、ジェスロ・タル、フレアーク、リシャール・ピナス]/バンコ/エニッド/エニワンズ・ドーター



052 ￥1,200
特集：70'sイタリアン・ロック[イタリアン・ロック集成補追/インタビュー：A・ソレンティ、A・ラディウス]/ラッシュ/ペンドラゴン/カトリーヌ・リベロ/CMP/BACK-GROUNDレーベル/古舘徹夫/山塚アイ

MARQUEE 主要販売店リスト

※はバック・ナンバー常備店
一般書店でのバックナンバー注文はお受けしていません。
あらかじめ御了承下さい。

{北海道}
旭川 サンハウス ※
札幌 レコーズ・レコーズ ※
グル・グル ※
タワー・レコード
ページ・ワン
玉光堂ススキノ

{東北}
青森 バックビート ※
弘前 サヴォイ弘前店
盛岡 ディスク・ノート盛岡店 ※
仙台 えび蔵
オールド・レーン ※
ディスク・ノート ※
レコード・ギャラリー ※
秋田 ゼンオン秋田営業所 ※
OZ DISCS
山形 ミュージック昭和

{東京}
新宿 サウンドファイル
アイコアイコ
ウッドストック ※
ガーデン・シェッド ※
えとせとらレコード ※
新宿レコード
ゼファー
ディスク・エイジ ※
ディスク・ユニオン
タワー・レコード
紀伊國屋書店(2F) ※
未来堂書店
ソーブン堂書店
文鳥堂支店
博文堂
西武新宿ブックセンター (PePe 8F)
模索舎
渋谷 リブロ渋谷
パルコBC
タワー・レコード
ぽるとぱろうる (西武ロフト館 5F)
カンカンポア (西武ロフト館 5F)
ディスク・ユニオン
シスコ
マザーズ・レコード ※
ハイ・タイムズ
紀伊國屋書店 (東急プラザ)
三省堂
大盛堂書店(6F) ※
原宿 ブックストア談 原宿店
代々木上原 幸福書房代々木上原店
六本木 青山ブックセンター
ストアデイズ (WAVE 4F)
池袋 芳林堂
タワー・レコード
リブロ池袋
アール・ヴィヴァン (西武 B1)
ぽえむぱろうる(西武 B1)
ヤマハ(4F 楽譜売場)
目白 ワールド・ディスク ※
高田馬場 芳林堂
オパス・ワン ※
カーザ・ビアンカ
ロック・ワークショップ
銀座 近藤書店
教文館
山野楽器
ヤマハ(B1 楽譜売場)
お茶の水 古賀書店 ※
三省堂書店
書泉グランデ(B1) ※
イシバシ・ブックサイド ※
ディスク・ユニオン
ライナー・ノーツ
水道橋 旭屋書店
上野 明生堂丸井店
浅草 リブロ浅草
第一書林
錦糸町 リブロ錦糸町
蒲田 ACT BOOKS サンカマタ店
中野 明屋書店
ピース・アイ・レコード ※
フラワー・レコード ※
高円寺 信愛書店
西荻窪 信愛書店
吉祥寺 パルコ
ディスク・イン No.2
トニイ・レコード ※
マザーズ・レコード吉祥寺店
ワルシャワ ※
ポルカ
江古田 おと虫 ※
練馬 雄峰堂
明大前 モダーン・ミュージック ※
三軒茶屋 リブロams三軒茶屋
自由ヶ丘 三省堂(東急プラザ)
三鷹 東西書房
サハラ
小金井 キリン堂書店
東西書房
国立 東西書店
ディスク・ユニオン
町田 有隣堂(東急 7F)
パム ※
武蔵野 弘栄堂
調布 パルコBC
府中 啓文堂
多摩 たまプラザ有隣堂
八王子 タワー・レコード

{関東}
水戸 ヴァイニル・マシーン ※
ロックボトム ※
足利 ヴィンテージ・レコーズ ※
前橋 リブロ前橋
浦和 スリム・チャンス ※
上尾 サウンド・トラヴェル ※
大宮 押田謙文堂 ※
熊谷 レコードランド333 ※
所沢 芳林堂
市川 ホット・リップス ※
柏 ディスク・ユニオン
習志野 蜂文堂イトーヨーカドー店
船橋 リブロ船橋
松戸 新松戸ブックセンター
横浜 有隣堂イセザキ店
有隣堂東口店
山村書店
バナナ・レコード横浜店
タワー・レコード
厚木 有隣堂
鎌倉 たらば書房
川崎 有隣堂川崎BE店
リブロ川崎
WAVE
タワー・レコード
藤沢 有隣堂
甲府 ヴァーニア ※

{信越}
新潟 ディスク・ガレージ
タワー・レコード

{北陸}
金沢 レコード・ジャングル ※

{東海}
岐阜 バナナ・レコード岐阜店
静岡 すみや楽器店 ※
洋盤屋 ※
ハマラジ
沼津 シーザー ※
浜松 ディスク36 ※
名古屋 エイト ※
ディスク・ヘヴン ※
バナナ・レコード(栄本店、栄店、四ツ谷店、ポップ・クラブ、名駅店) ※
ピーカン・ファッジ ※
プアー・ハウス ※
マスタング・レコード ※
タワー・レコード
豊田 輸入レコード豊田 ※
豊橋 精文館

{近畿}
大津 リッツ楽器 ※
京都 十字屋三条本店 ※
ホシルス・レコーズ ※
タワー・レコード
ジョーズ・ガレージ
コンフォート
大阪 紀伊國屋書店梅田店
リブロ八尾
リブロ梅田店
タワー・レコード
ディスク・インなんば店 ※
ザ・ディスク ※
ディスクJJ ※
ミュージック・イン ※
神戸 星電社ハーバーランド店
ハックルベリー ※
ミスター・ジャケッツ ※
尼崎 塚新西武ブックセンター

{中国}
岡山 LPコーナー岡山店 ※
倉敷 グリーンハウス ※
広島 グルービン
バックステージ・レコード ※
タワー・レコード

{四国}
高知 サウンドボックス・カワムラ ※

{九州}
福岡 ジューク・レコード ※
ティーンエイジ・ドリーム
ガレージランド
大分 開書堂
フラット ※
熊本 ウッドペッカー

マーキー別冊

ブリティッシュ・ロック集成

発行：マーキームーン社
1990年9月20日第一刷
1991年12月20日第二刷
1994年3月25日第三刷
印刷：株式会社 カシヨ
161 東京都新宿区下落合3-15-18 SYビル404
TEL. 03(3954)2055
FAX. 03(3954)9563

ENCYCLOPEDIA OF BRITISH ROCK

PART 1:PROGRESSIVE ROCK & ITS PERIPHERY

税込定価**3600**YEN（本体3495YEN）

COVER DESIGN : Naohiro YAMAZAKI

LOGO PAINT : Suguru FURUTA



ENCYCLOPEDIA OF BRITISH ROCK

税込定価**3600**YEN（本体3495YEN）